

住居覆土

1・3・9・9'：暗褐色土主体。 2・4：暗褐色土主体。茶褐色土や多く混在。 5：褐色土主体。 6・6'：褐色土主体。ローム・

黒褐色土や多く含む。 7：明茶褐色土主体。 8：黄褐色ローム。 10：暗黄褐色土主体。ロームや多く含む。

掘り方覆土 [364頁第337図参照]

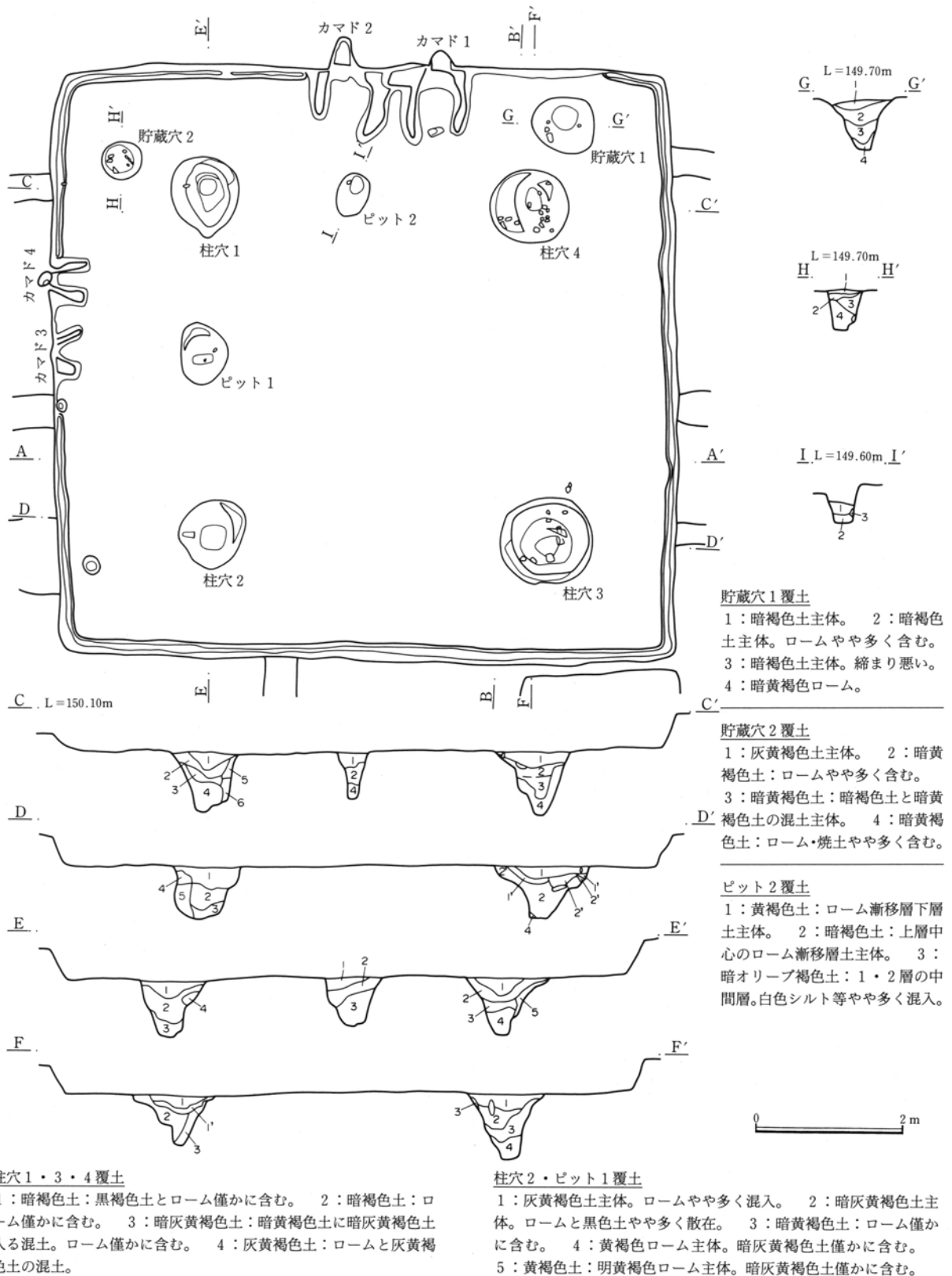
第332図 H-134号住居

H-134号住居（古墳時代後期、第332図～第340図、図版127～128・145～149・164）

概要 本住居はD区西部に位置する、D区に於ける大型の竪穴住居跡のうちの1軒である。

本住居の上位には現代の耕作溝が入り若干の影響を受けている。またカマド4の先端はピットによっ

第3章 発見された遺構と遺物

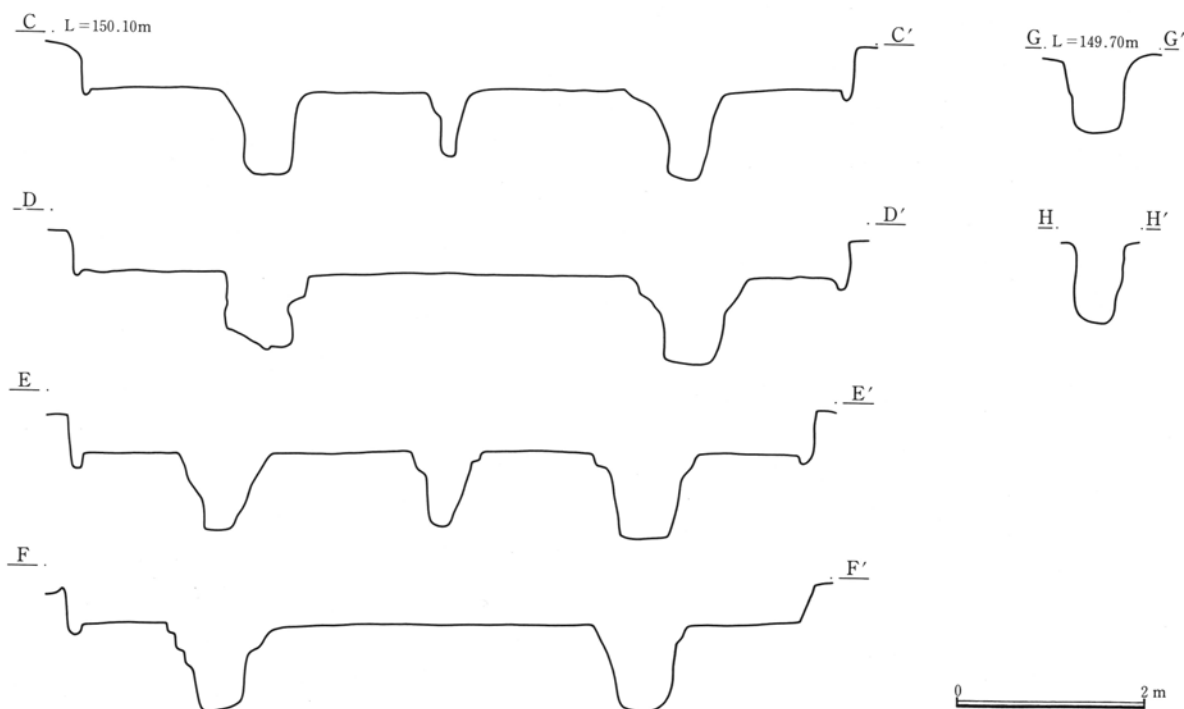


第333図 H-134号住居遺構

て壊されている。

本住居に特徴的なのは東壁と北壁に2基ずつの4

基のカマドを有していることである。これらのカマドは何れも袖を残していて同時に使用可能であった



第334図 H-134号住居エレベーション

ことを示している。複数のカマドを持つ住居は本住居跡では何軒も見られたが、4基を持つのは本住居だけである。また、東壁と北壁のカマドを比べると前者に対し後者の2基の方が規模が小さく、補助的使用に供されたのではないかと思慮される。

さて、本住居の出土遺物はかなり多く、この中で本住居に伴うと判断されたものには6世紀を前後する時期のものの特徴を示す土師器の坏(3-1,2,5-6,7)・高坏(8)・小型甕(11)や手捏ね土器(9,10)の他、紡錘車(13)或いはこも編み石(14~20)も見られた。また、掘り方からは同時期の手捏ね土器(21)や土師器の甕(22)・小型甕(23)、そしてこも編み石(24)が出土した。

一方、覆土中からは土師器の坏片や甕片を中心に多量の遺物が出土したが、多くは6世紀後半期から7世紀前半期の頃のものであり、6世紀前半期のもも含む土師器坏(27~59,61~64,80)、そして土師器の椀(60)・高坏(65~70)・甕(71~73)・胴張甕(74)・甑(75)、手捏ね土器(76)、須恵器の蓋(77,79)・坏(78)・高坏(81~84)の他、土錘(85~94)、土製小玉(95,96)、女瓦

(97)、スラグ(98)、こも編み石(99~105,108)、台石(106)、砥石(107)、また打製石斧(25)や石製品(26)など縄文時代の遺物も出土してきている。

以上の遺物の所見から、本住居は6世紀後半期の所産と判断される。また、覆土中の遺物から本住居は廃絶後早い段階に多量の遺物の投棄が行われており、少なくとも奈良・平安期頃まではその痕跡を留めていたことが窺われるのである。

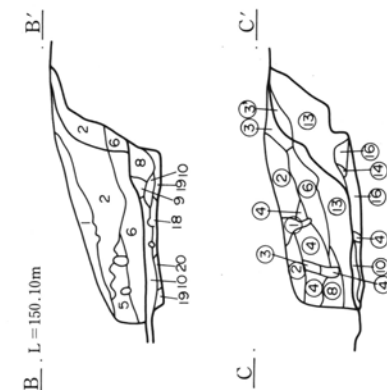
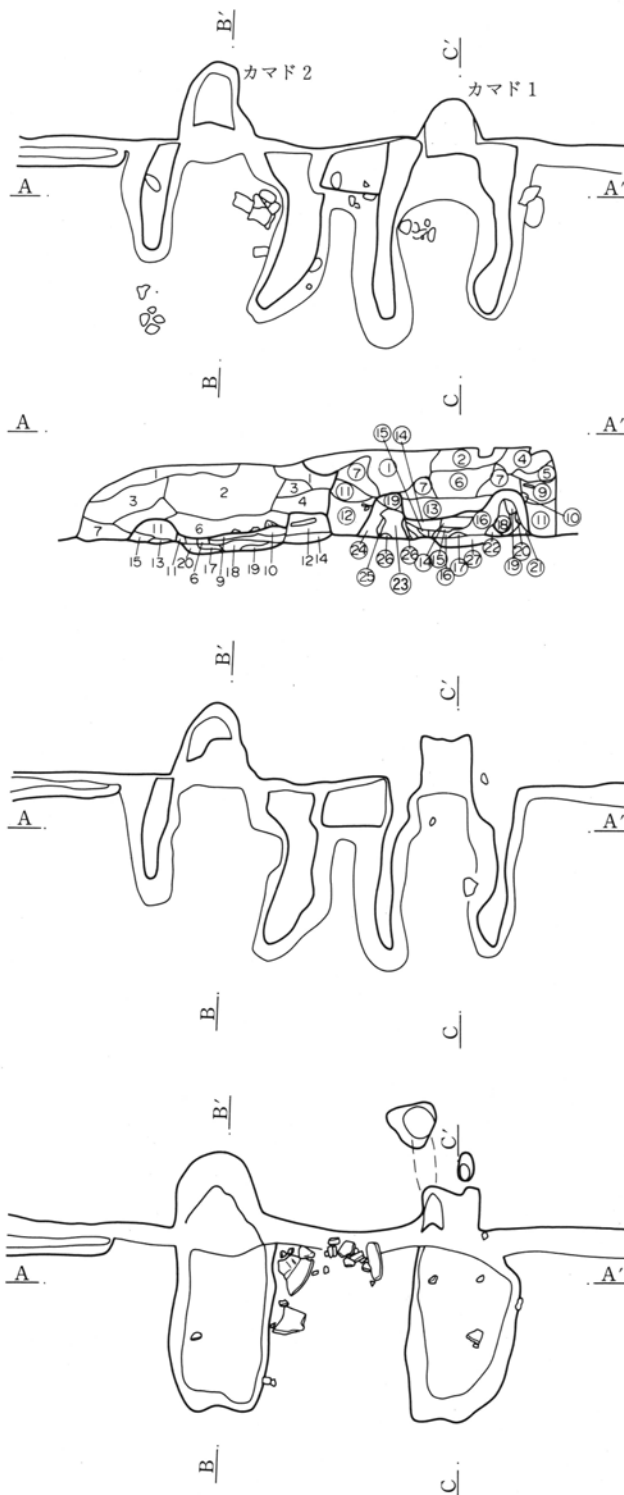
規模 長軸：850cm 短軸：800cm 深さ：50cm

カマド1 幅：89cm 奥行き：121cm 左袖 幅：34cm 長さ：102cm 高さ：46cm 右袖 幅：30cm 長さ：90cm 高さ：44cm 燃烧部 径：37×89cm 煙道 幅：25cm 長さ：29cm カマド掘り方 径：58×92cm 深さ：14cm

カマド2 幅：115cm 奥行き：126cm 左袖 幅：33cm 長さ：37cm 高さ：30cm 右袖 幅：35cm 長さ：92cm 高さ：27cm 燃烧部 径：59×72cm 煙道 幅：29cm 長さ：35cm カマド掘り方 径：55×89cm 深さ：9cm

カマド3 幅：76cm 奥行き：42cm 左袖 幅：

第3章 発見された遺構と遺物



カマド1覆土
 ①：褐色土主体。灰褐色土・暗黄褐色土混入。 ②：褐色土主体。③・③'・④：明茶褐色土主体。 ⑤・⑥・⑦・⑨・⑪：暗黄褐色土主体。 ⑧：褐色土主体。 ⑩・⑫：明茶褐色土主体。 ⑬：暗黄褐色土：焼土やや多く混入。

カマド1袖構築材
 ⑬：暗赤褐色土／⑭：褐色土：焼土化見るローム漸移層土（以下「漸移層」）。焼土混入。 ⑮：黄褐色土／⑯：明赤褐色土：ローム主体。 ⑰：黒褐色土：黒色土に焼土やや多く混入。 ⑱：暗褐色土：オリーブ褐色ローム主体。 ⑲：にぶい赤褐色土：焼土化進んだロームまたは漸移層土主体。 ⑳：にぶい黄色土：焼土化進んだローム主体。 ㉑：褐色土：⑬層土と⑮層土の混土。 ㉒：オリーブ褐色土：弱く焼土化するローム主体。

カマド1掘り方覆土
 ⑬・⑭：オリーブ褐色土：焼土化進む漸移層土主体。 ⑮：橙色焼土。 ⑯：暗灰色土：弱い焼土化見る上層中心の漸移層土主体。

カマド2覆土
 1・2・3：褐色土主体。 4・6：暗黄褐色土主体。 5：暗黄褐色土主体。ロームやや多く含む。 8：暗褐色土：上層中心の漸移層土主体。 9：黒褐色土：弱い焼土化見る漸移層土主体。 10：黄褐色土：焼土化見る下層中心の漸移層土主体。

住居覆土
 7：暗褐色土主体。

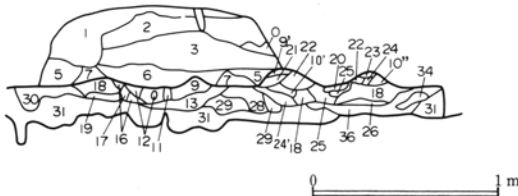
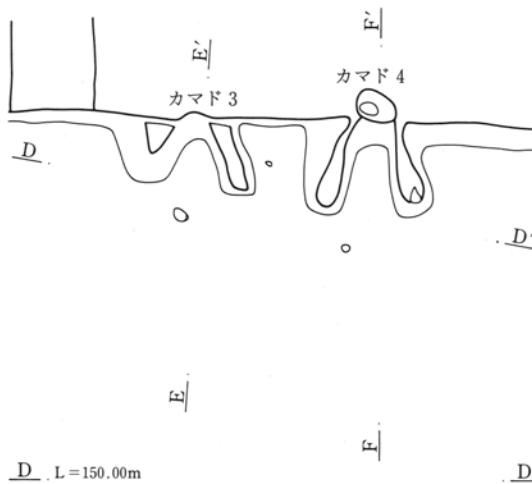
カマド2袖構築材
 11・13：オリーブ褐色土：漸移層土主体。 12：灰褐色土：焼土化進んだ漸移層土主体。 14：にぶい黄色土：ローム・黒色土・焼土の混土主体。 15：褐色土：焼土化進む漸移層土主体。焼土化したロームやや多く混入。

カマド2掘り方覆土
 17：暗褐色土：ローム主体。 18：黄褐色土：焼土化見るローム主体。 19：暗オリーブ褐色土：焼土化見る上層中心の漸移層土主体。 20：黄褐色土：焼土化見る下層中心の漸移層土主体。焼土と黒色土やや多く混入。

第335図 H-134号住居カマド

37cm 長さ：32cm 高さ：17cm 右袖 幅：19cm
 長さ：39cm 高さ：6cm 燃烧部 径：31×25cm
 カマド4 幅：70cm 奥行き：53cm以上 左袖
 幅：27cm 長さ：51cm 高さ：16cm 右袖 幅：

21cm 長さ：50cm 高さ：19cm 燃烧部 径：32
 ×37cm
 柱穴1 径：108×92cm 深さ：90cm 柱穴2
 径：90×85cm 深さ：79cm 柱穴3 径：126×



カマド3・4掘り方・袖構築材覆土

9・9'・14：暗オリーブ褐色土/33：にぶい黄褐色土：上層中心のローム漸移層土（以下「漸移層土」）主体。弱く焼土化。 10・10'・10"：褐色土：上層中心の漸移層土とローム。弱く焼土化。 11：黄色土/13：暗黄褐色土/13'：暗灰黄色土：弱い焼土化見るローム主体。 12・18：にぶい黄色土/15：黄色土/20・29：黄褐色土/27・30：明黄褐色土/31・36：黄褐色土：ローム主体。 16：淡黄褐色土：焼土化やや進む漸移層下層土主体。 17：黒褐色土：やや焼土化見る黒色土主体。 19：にぶい黄色土/24：暗オリーブ褐色土/

第336図 H-134号住居カマド

116cm 深さ：91cm 柱穴4 径：107×99cm 深さ：92cm

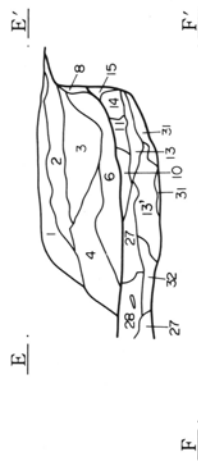
貯蔵穴1 径：87×76cm 深さ：79cm 貯蔵穴2 径：52×51cm 深さ：85cm

ピット1 径：82×64cm 深さ：79cm ピット2 径：60×42cm 深さ：71cm

床下土坑1 径：156×150cm 深さ：21cm 床下土坑2 径：160×127cm 深さ：7cm 床下土坑3 径：200×163cm 深さ：16cm

構造 本住居は方形のプランを呈する。

北壁と西壁南半部の壁際に幅6～32cmを測るテラスを伴う幅143～190cm、深さ12cm以下の周溝状の掘り込みが一周する掘り方を有する。この掘り込みにより住居中央付近には方形の掘り残しが生じ、その中東部と北東部、北西部に浅い掘り込みの大きな床下土坑が設けられている。このうち床下土坑1・



カマド3覆土

0：暗灰褐色土砂質土主体。
1：暗黄褐色土主体。ローム僅かに含む。 2：暗黄褐色土：ロームやや多く、焼土等極く僅か。
3：暗黄褐色土主体。混入物大変少なく、1～7層中最も暗い。
4：暗黄褐色土：ローム多く、焼土等僅かに含む。2層同様明るい。
5：暗黄褐色土：焼土等僅かに含む。 6：暗黄褐色土主体。ローム・焼土等僅かに含み、若干赤味を帯びる。 7：暗黄褐色土主体：ローム多く、焼土僅か。袖の一部か。 8：黄褐色ローム：As-YP層上のくすんだローム主体。

ピット覆土

◎：灰黄褐色土主体。ローム僅かに含む。

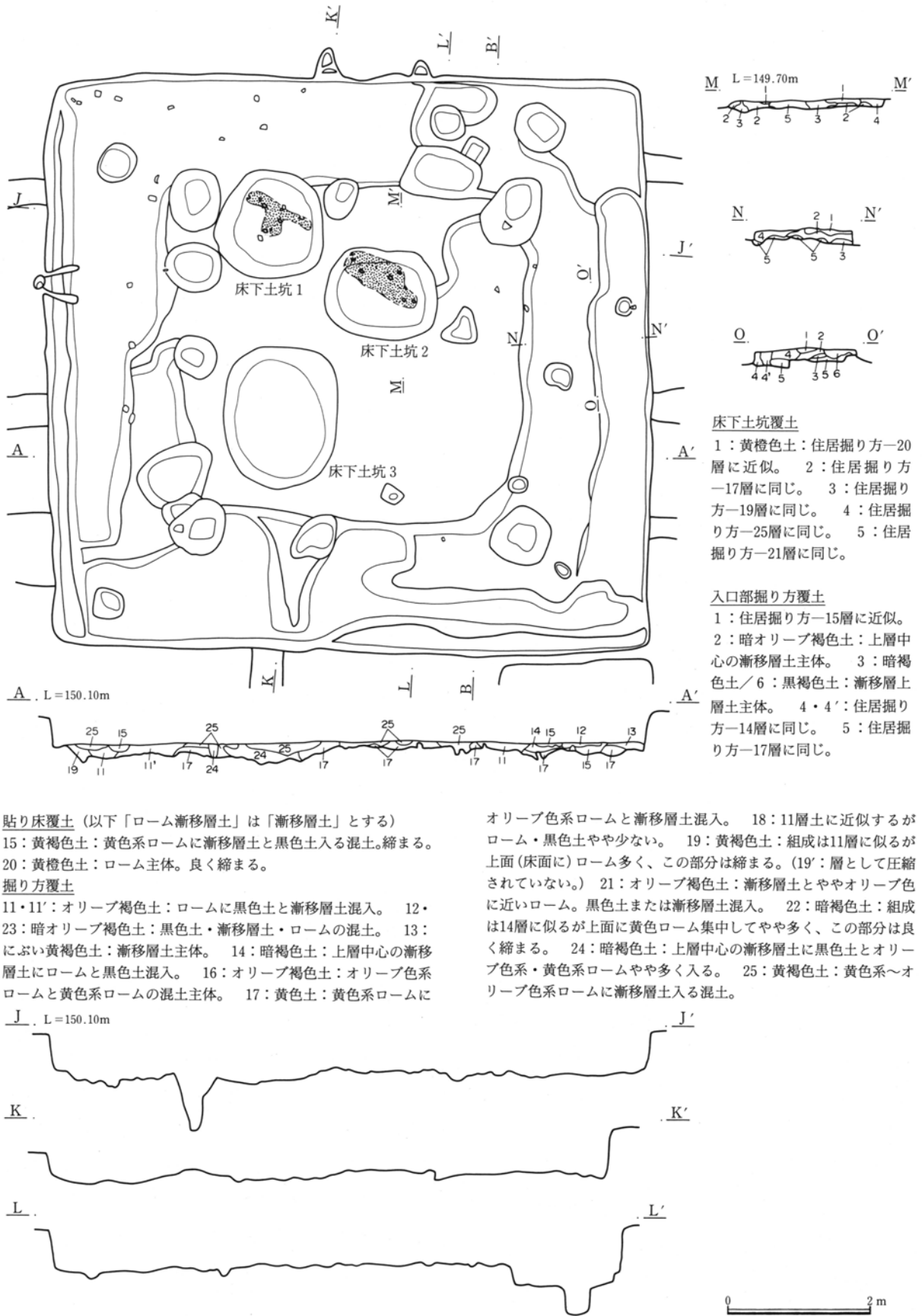
カマド4覆土

①：暗黄褐色土：明るい色調。ロームやや多く、焼土僅かに混入。
②：暗黄褐色土：①層に比し若干暗い。焼土やや多く、ローム僅か、黒褐色土極く僅かに含む。

26：黄橙色土：焼土化やや進んだ漸移層土主体。（24'：ロームと焼土やや多く混入。） 21：黒褐色土：やや締まる。9層土と黒褐色土の混土。 22・22'：オリーブ褐色土/25：にぶい黄褐色土：焼土化やや進む下層中心の漸移層土主体。 23：橙黄色土：締まる。焼土と焼土化進んだロームと漸移層土の混土。 28・29：黄褐色土：ロームと漸移層下層土の混土主体。 32：黄橙色土：弱い焼土化見る漸移層下層土とロームの混土主体。 34：暗褐色土：黒色土に近い漸移層土主体。 35：オリーブ褐色土：焼土化見る漸移層土とロームの混土主体。

2とした前2者は床下粘土坑と思われる。この他にも幾つかのピットが見られたが概ね後述の柱穴等に比べ浅く、その性格は特定できなかった。床はこうした掘り方を黒色土・ローム漸移層土・ローム層土等で埋め戻して造り、部分的にロームを中心とした土壌を締め固めた貼り床を施しているのが見られた。

上述のように本住居は4基のカマドを持ち、東カマドであるカマド1・カマド2と北カマドであるカマド3・カマド4とがあって、それぞれ隣接して造られている。このうちカマド1と2は東壁中央付近に設けられているが、カマド1と2は中心線では126cm程、カマド1の左袖外縁とカマド2の右袖外縁は奥壁側では一体となっているが、13cm程離されて造られている。カマド1と2はそれぞれ浅い掘り方を有し、これを焼土を含むローム漸移層土を主体とする土壌で埋め戻して燃焼面を造っている。燃焼部は



M L=149.70m

N

O

床下土坑覆土

1：黄橙色土：住居掘り方—20層に近似。 2：住居掘り方—17層に同じ。 3：住居掘り方—19層に同じ。 4：住居掘り方—25層に同じ。 5：住居掘り方—21層に同じ。

入口部掘り方覆土

1：住居掘り方—15層に近似。
2：暗オリーブ褐色土：上層中心の漸移層土主体。 3：暗褐色土／6：黒褐色土：漸移層上層土主体。 4・4'：住居掘り方—14層に同じ。 5：住居掘り方—17層に同じ。

A L=150.10m

貼り床覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)
15：黄褐色土：黄色系ロームに漸移層土と黒色土入る混土。締まる。
20：黄橙色土：ローム主体。良く締まる。

掘り方覆土

11・11'：オリーブ褐色土：ロームに黒色土と漸移層土混入。 12・23：暗オリーブ褐色土：黒色土・漸移層土・ロームの混土。 13：にぶい黄褐色土：漸移層土主体。 14：暗褐色土：上層中心の漸移層土にロームと黒色土混入。 16：オリーブ褐色土：オリーブ色系ロームと黄色系ロームの混土主体。 17：黄色土：黄色系ロームに

オリーブ色系ロームと漸移層土混入。 18：11層土に近似するがローム・黒色土やや少ない。 19：黄褐色土：組成は11層に似るが上面(床面に)ローム多く、この部分は締まる。(19'：層として圧縮されていない。) 21：オリーブ褐色土：漸移層土とややオリーブ色に近いローム。黒色土または漸移層土混入。 22：暗褐色土：組成は14層に似るが上面に黄色ローム集中してやや多く、この部分は良く締まる。 24：暗褐色土：上層中心の漸移層土に黒色土とオリーブ色系・黄色系ロームやや多く入る。 25：黄褐色土：黄色系～オリーブ色系ロームに漸移層土入る混土。

J L=150.10m

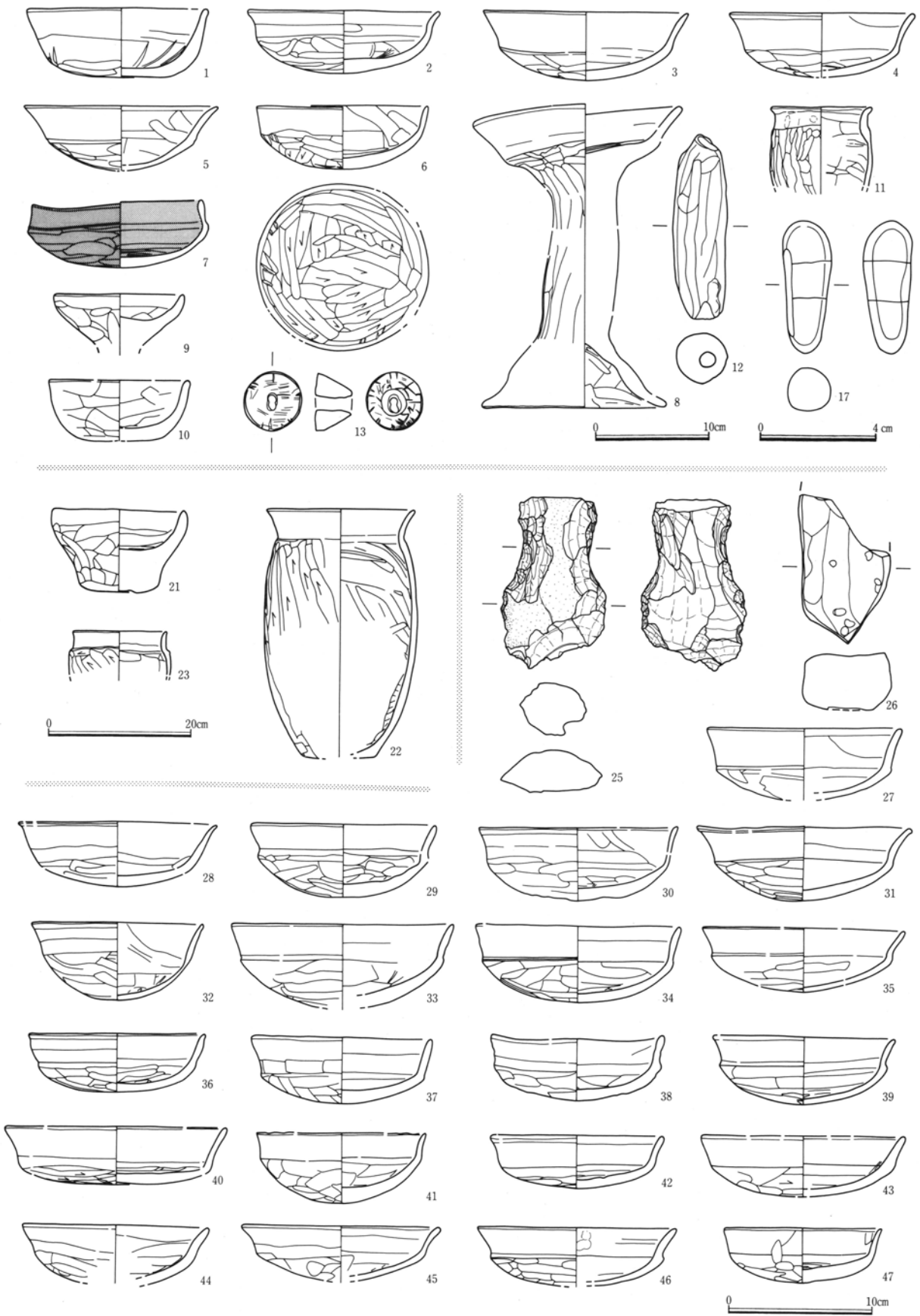
K

L

0 2m

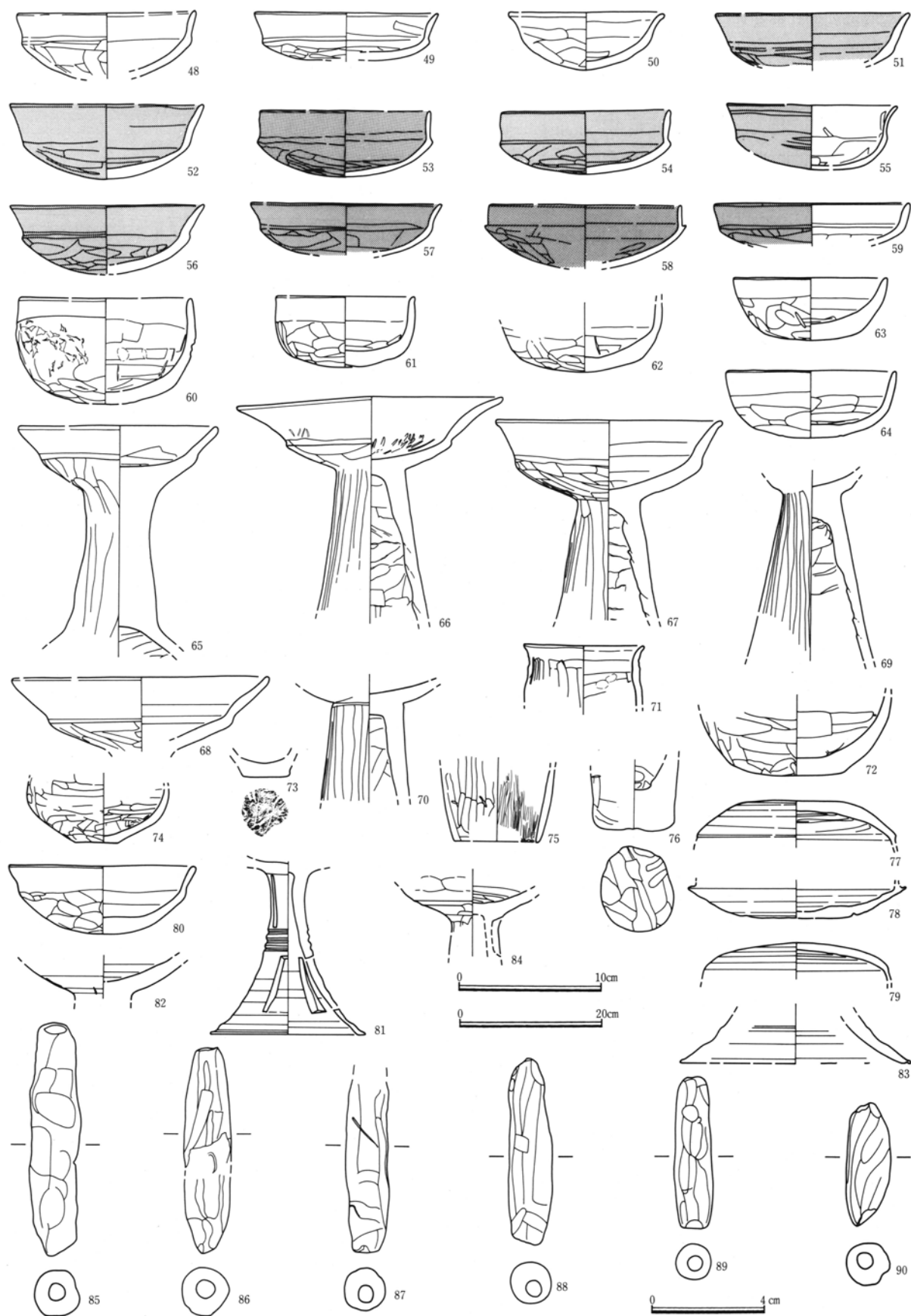
第337図 H-134号住居掘り方

第6節 D区の遺構と遺物

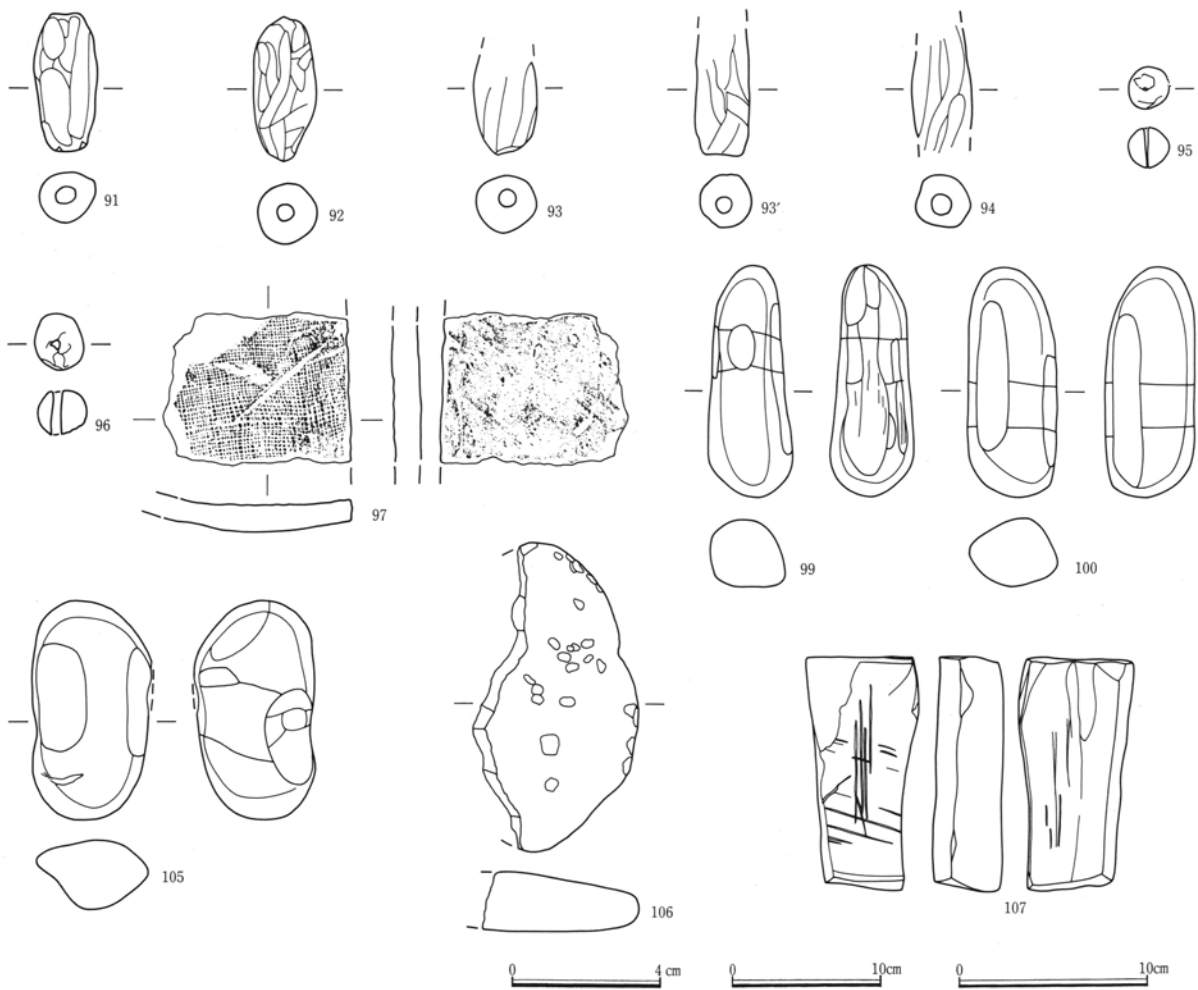


第338図 H-134号住居出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物



第339図 H-134号住居出土遺物(2)

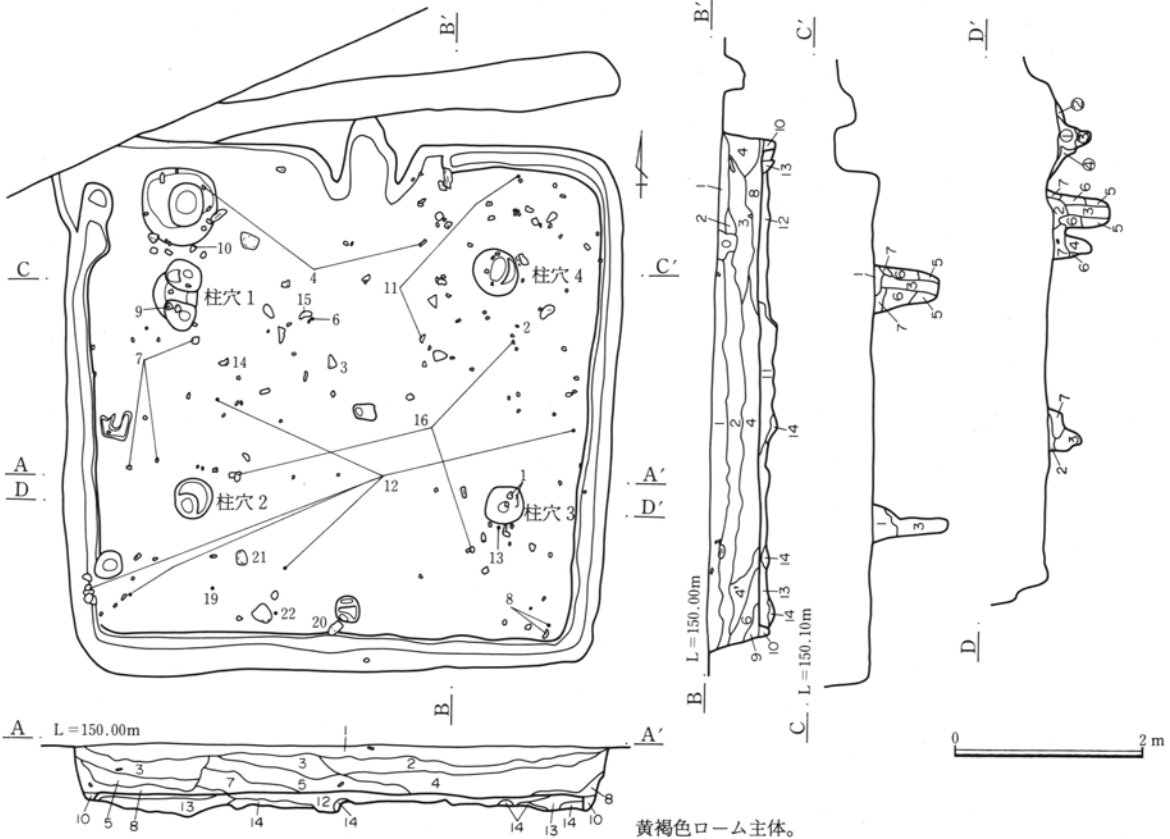
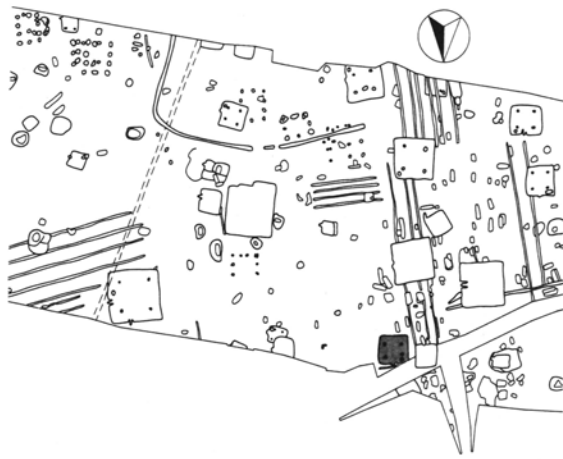


第340図 H-134号住居出土遺物（3）

壁面より手前側に設定され、その両側に焼土を含むローム漸移層土を主体とする土壌で袖を造っている。袖は袖材を持たないようで、やや内湾気味のプランで設置されている。煙道は燃烧面より30～30数cm高い位置から東壁を40内至60数cm程掘り込んで造るが、カマド1の左奥側は径20cm程のトンネルを以てピットにつながっており煙道の可能性を持つ。

一方、カマド3と4は北壁の中程に設けられ、中心線で96cm、カマド3の右袖外縁とカマド4の左袖外縁とで26cm程隔たる位置に在る。カマド3と4は何れも浅い掘り方を有し、これをロームやローム漸移層土等で埋め戻して燃烧面を造っている。燃烧部は北壁より内側に設定され、その両側にローム漸移層土を中心とする土壌で袖を設けるが、袖材を用いていないようでそのプランはハの字に開いている。

床面に於いては主柱穴4基とピット2基、貯蔵穴2基が確認されている。このうち主柱穴は何れも大きく深い掘り込みを有しているが、断面観察からは径30～40cm以上という太い柱材の設置されていた可能性が考えられる。また主柱穴を結ぶライン上、東側・北側それぞれのカマド前に当たる位置に深い掘り込みを持つ柱穴様の掘り方を示すピットが1基づつ掘削されていた。掘削位置からカマドに関連するものと思われるが、掘削目的は特定できなかった。貯蔵穴は東側・北側それぞれのカマドの右側に当たる住居南西隅（貯蔵穴1）と住居北東隅（貯蔵穴2）に掘削されている。何れも柱穴様の形態で掘り込みも深いが、柱穴に比べその規模は小さい。尚、貯蔵穴1はカマド1・2に、貯蔵穴2はカマド3・4に伴うものと判断される。



住居覆土

0：暗褐色土主体。後世のピット覆土か。 1・3・8・10：褐色土主体。 2：褐色土主体。乳白色軽石多く混入。 4・4'：暗褐色土主体。 5：褐色土主体。1～3層に比し色調暗い。 6：褐色土主体。5層に比し色調暗い。 7：明茶褐色土主体。 9：黒褐色土主体。

住居掘り方覆土

11：灰黄褐色土主体。ロームを多量に、As-YPをやや多く含む。 12：灰黄褐色土主体。11層に比し色調暗く、ローム・暗褐色土やや多く含む。 13：灰黄褐色土主体。11・12層土より褐色味増す。 14：

黄褐色ローム主体。

柱穴覆土

1：暗褐色土・黒褐色土入る混土主体。 2：灰黄褐色土主体。 3：明茶褐色土主体。 4：暗黄褐色土主体。明茶褐色土・ロームやや多く混在。 5：暗黄褐色ローム主体。明茶褐色土やや多く混在。 6：暗黄褐色ローム主体。明茶褐色土・明黄褐色土やや多く混在。 7：黄褐色土ローム主体。

貯蔵穴覆土

①：灰黄褐色土主体。 ②：暗黄褐色土・ロームと灰黄褐色土主体。 ③：暗黄褐色土ローム主体。 ④：黄褐色土ローム主体。

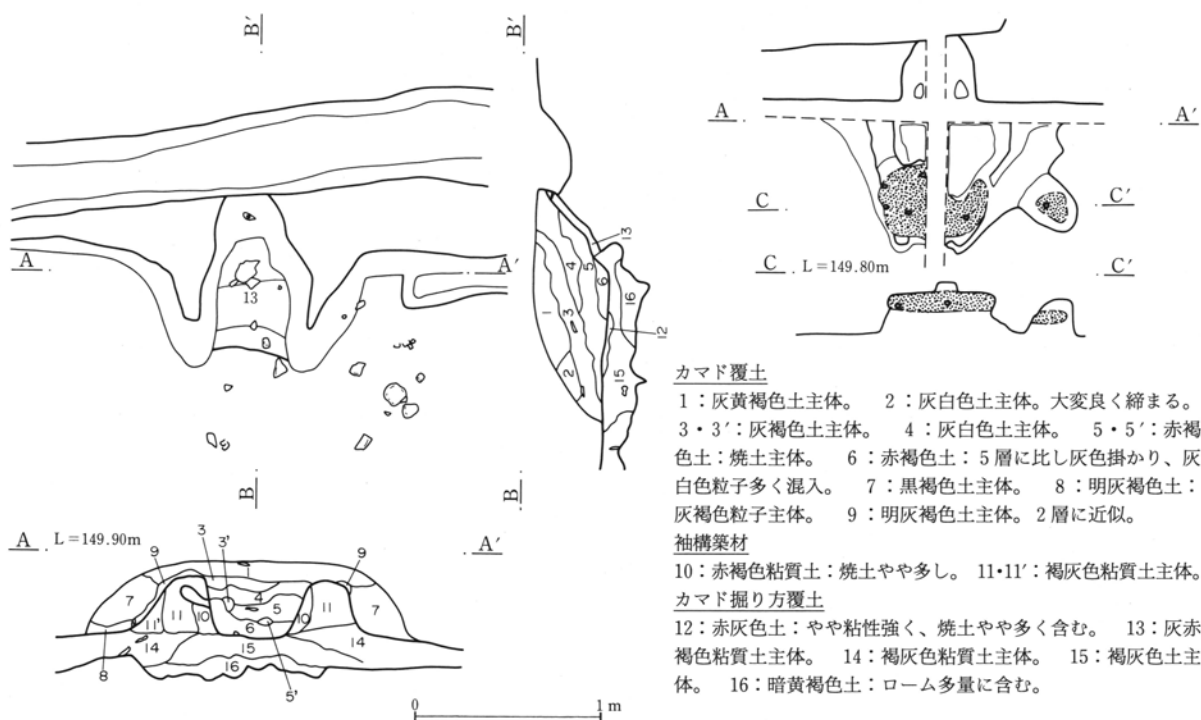
第341図 H-135号住居

H-135号住居（古墳時代後期。第341図～第344図。図版128・149・150・164）

概要 本住居はD区西北部に所在する、B・C区に於いては大型のものになるが、D区に於ては中規模

のものに属する竪穴住居跡である。

本住居の西北部は本遺跡付近に於ける主要な農道



第342図 H-135号住居カマド

の下に潜っており、調査することができなかった。また、住居北側には耕作溝が入ってカマドの先端を壊している。

本住居の出土遺物は比較的多く見られたが、このうち本住居に伴うと判断されるものには7世紀後半期のものの特徴を示す土師器高坏(1)があり、他に2個の白玉(2)やこも編み石(3)が見られた。

一方、覆土中からは土師器甕片や土師器坏片を中心に少なからぬ遺物の出土が見られたが、この中には6世紀後半期の特徴を持つ土師器の小型甕(12)・碗(13)や須恵器の高坏(14,16)があり、7世紀代の所産と考えられる土師器の坏(4,5,6,9,7,8)・高坏(10)・小型甕(12)須恵器坏(15)の他、白玉(18)やこも編み石(19,20)、或いは石皿(21)や垂飾(22)、そして刀子(23)や用途不明の鉄板(24)などが見られた。

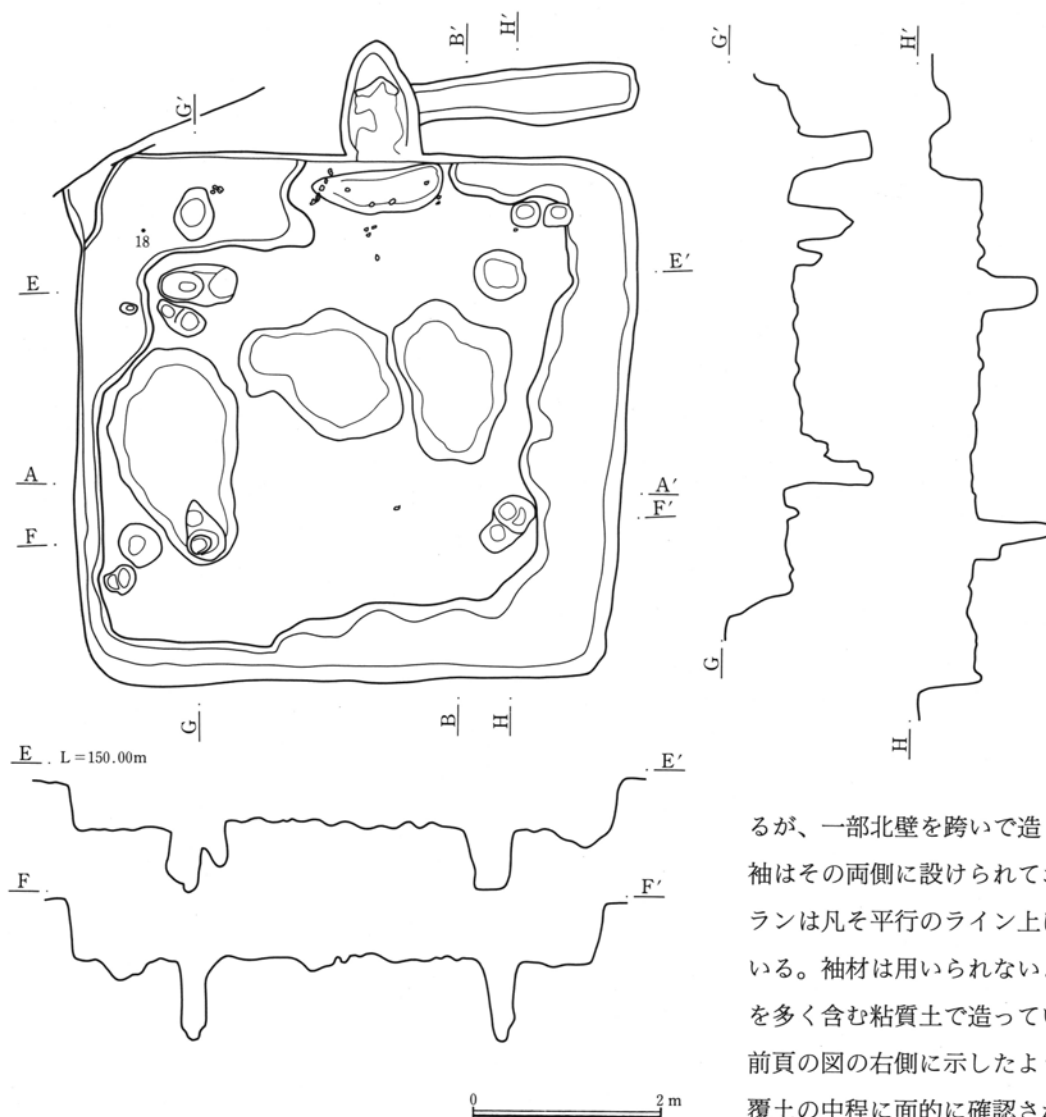
このように、本住居に伴うと判断できる遺物が少なかったので本住居の時期の断定はできなかったが、覆土中の遺物との関連も併せて本住居には7世紀前半という時期を与えたいと思う。また、覆土中の遺物の状況から本住居は住居廃絶後早い段階から

継続的に土器の投棄が行われていたことが窺われ、少なくとも平安時代頃までは窪地等としてその痕跡を留めていたものと思慮される。

規模 長軸：580cm 短軸：571cm 深さ：36cm
 カマド 幅：126cm 奥行き：94cm以上 左袖 幅：34cm 長さ：60cm 高さ：32cm 右袖 幅：82cm 長さ：63cm 高さ：25cm 燃焼部 径：39×66cm 深さ：4cm
 柱穴1 径：38×32cm 深さ：71cm 柱穴2 径：43×40cm 深さ：43cm 柱穴3 径：44×40cm 深さ：94cm 柱穴4 径：50×48cm 深さ：72cm
 貯蔵穴 径：81×81cm 深さ：98cm
 周溝 幅：8～20cm 深さ：10cm

構造 上述のように本住居は一部調査できなかったのであるが、方形に近い隅丸方形のプランを呈する。

本住居は掘り方を有する。掘り方にはカマド両袖付近の一部を除く北壁東半から東壁・南壁・西壁中程にかけて、幅52～100cm、深さ14cm以下を測る周溝掘り込みが廻り、西壁北部から北壁西半にかけては後述する周溝がこの部分を補うように廻っている。またこの周溝及び周溝状の掘り込みに囲まれた掘り



第343図 H-135号住居掘り方

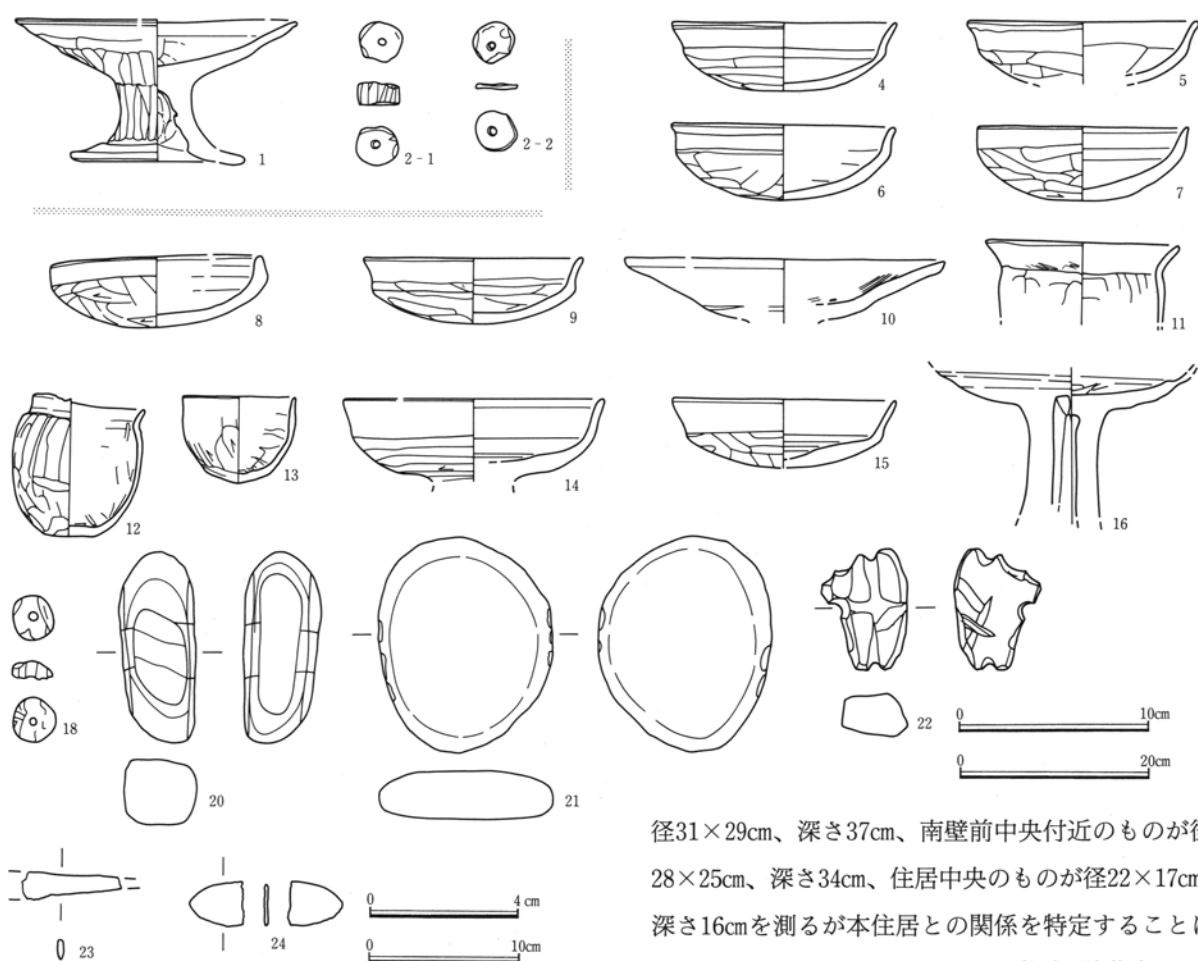
残し部には、径130~236cm、深さ18cm以下を測る土坑様の掘り込みが見られた。床面はこのような掘り方をロームや灰黄褐色土等で埋め戻して床面を造っている。この埋め土は近似した土壤構成を有し、良く締められて貼り床様の床面を成している。

カマドは北カマドで概ね北壁の中央付近に造られている。カマドは浅い掘り方を有すると判断され、これには上述の掘り方の周溝状の掘り込みの一部を成しカマド部分に見られた径141cm、深さ46cmを測る横長の掘り込みに充てて考えている。燃烧面はこの掘り方を焼土を多く含む粘質土等で埋め戻して造っているが、燃烧部の主体は北壁の手前側に設定され

るが、一部北壁を跨いで造られている。袖はその両側に設けられており、そのプランは凡そ平行のライン上に設定されている。袖材は用いられないようで、焼土を多く含む粘質土で造っている。また、前頁の図の右側に示したように粘質土が覆土の中程に面的に確認されているが、これについては袖の構築材との類似から天井部を構成する材ではなかったかと想

定している。煙道は燃烧部奥壁より斜めに掘られていたものと思慮される。

床面に於いては幾つかのピットが確認されている。このうち柱穴1~4としたものが主柱穴と判断されたものである。主柱穴は何れもしっかりした掘り込みを成し、断面観察の所見から柱材の径は15~16cm程度あったものと想定される。一方、貯蔵穴はカマド左側、住居の北西コーナー付近に掘削されているが、2段構造を呈しており、床面から16~21cmの深さで掘削される大きめの掘り込みの中に、径47×37cmを測る柱穴様の掘り込みが更に80cm余り掘り込まれている。上位の掘り込みについては蓋等の存在が



第344図 H-135号住居出土遺物

想定される。この他のピットについては柱穴1の南側のものが径35×30cm、深さ42cm、南東隅のものが

径31×29cm、深さ37cm、南壁前中央付近のものが径28×25cm、深さ34cm、住居中央のものが径22×17cm、深さ16cmを測るが本住居との関係を特定することはできなかった。ところでこれらの柱穴・貯蔵穴・ピットとは別に、床面に於いては周溝が認められている。周溝は北壁西半部を除く壁際には廻っているが、掘り込みは比較的しっかりしている。

H-136・137・138号住居（平安時代か、第345図～第346図、図版128～129・150・164）

概要 H-136・137・138号住居はD区中部に所在する、切り合い関係にある小型の竪穴住居跡である。

この3軒の住居付近は削平が進行して遺存状況は悪く、ほぼ掘り方部分を確認できたに過ぎず、更に3基程の長方形の土坑が絡んで遺構を壊していた。

出土遺物は各住居とも少なかったが、何れの住居も奈良・平安時代の遺物を含んでおり、これらの住居がほとんど掘り方部分しか残していないことを勘案すれば3軒の住居は平安時代の所産ではないかと思慮されるのである。

H-136・137・138号住居は重なるように位置し、さらに掘り方底面も近似したレベルに在るため新旧

関係の特定が難しいが、断面観察から凡そH-138号住居→H-137号住居→H-136号住居の順に新しくなるようである。

規模〔H-136号住居〕長軸：329cm 短軸：244cm

〔H-137号住居〕長軸：233cm 短軸：262cm

カマド 掘り方 径：84×78cm 深さ：14cm

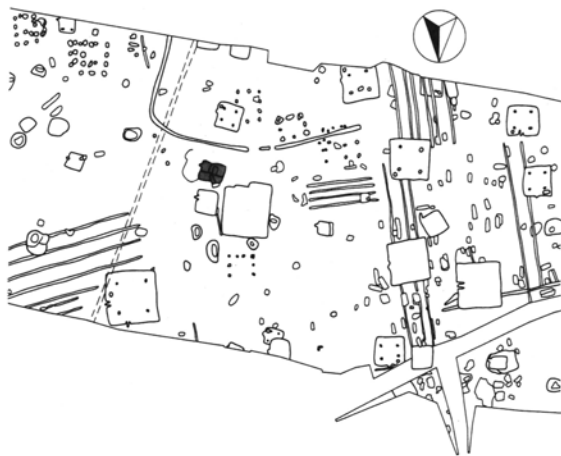
床下土坑1 径：73×54cm 深さ：48cm

床下土坑2 径：44×43cm 深さ：27cm

〔H-138号住居〕長軸：468cm 短軸：372cm

床下土坑3 径：124×84cm以上 深さ：12cm

構造〔H-136号住居〕本住居は遺存状況が悪く、

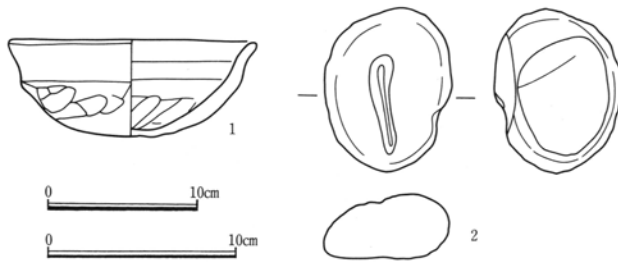
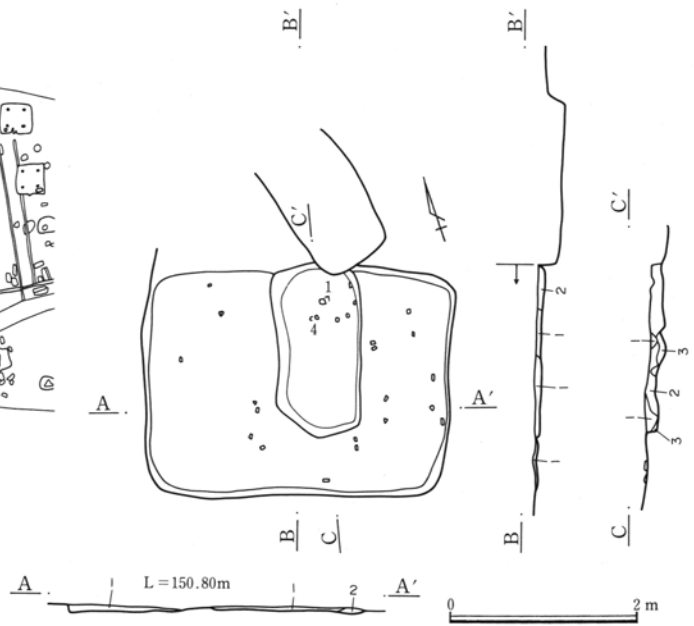


H-136号住居（掘り方）覆土

1：暗褐色土：ローム等僅かに含む。良く締まる。 2：暗褐色土：1層に比し若干色調淡い。ローム等僅かに含む。

土坑覆土

1：暗黄褐色土：ローム僅かに含む。 2：灰黄褐色土：ローム・As-YPやや多く散在。 3：黄褐色ローム：灰黄褐色土混在し、As-YP僅かに含む。



第345図 H-136・137・138号住居及び出土遺物

以下に示す若干の所見を得たに過ぎなかった。

本住居は隅丸方形のプランを呈し、掘り方を有する。掘り方面には長径185cm、短径97cm、深さ21cmを測る隅丸方形プランの土坑が見られたが、これは芋穴等の別遺構であると判断される。この他、掘り方面に於いては特段の凹凸は確認されなかった。

床は掘り方を暗褐色土等の土壌で埋め戻して造るものと思われる。尚、カマドや貯蔵穴などの構造物を確認することはできなかった。

〔H-137号住居〕 H-137号住居も遺存状況は悪かったが、以下のような所見を得た。

本住居のプランも隅丸方形を呈するようである。掘り方を有し、掘り方には柱穴状の形態を呈する2基の土坑（床下土坑1・2）を確認した他は、特段の構造を確認することはできなかった。床面はこうした構造を持つ掘り方をローム等種々の土壌で埋め

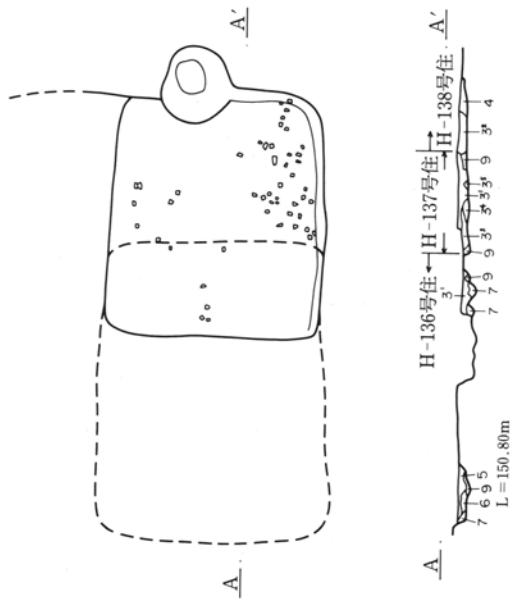
戻して造られるようである。

カマドは東カマドで、東壁のやや北寄りに造られている。楕円形プランの掘り方を持ち、これを焼土等を含む褐色系の土壌で埋め戻して燃焼面を造っている。燃焼部は東壁を跨ぐ位置に設定されている。カマドの袖等を認めることはできなかった。

また柱穴等も確認されなかったが、貯蔵穴は位置的に床下土坑1に求められるものと思われる。〔H-138号住居〕 本住居は隅丸方形のプランを呈する。

床面から上の構造を明らかにすることはできなかったが、掘り方を有し、幅30～61cmのものを中心とし、深さ13cm以下を測る周溝状の掘り込みが南壁西半から西・北壁、東壁北部にかけて廻っている。南壁東半部と北壁前には幅10～54cmを測るテラスを伴って、その内側に上述のものと同様の溝状の掘り込みが掘削されている。これらの周溝状の掘り込みの状況から本住居は拡張の行われた可能性が想定される。また、中程のテラス様の掘残しの中には3基ほどの浅い掘り込みの床下土坑が掘削されている。

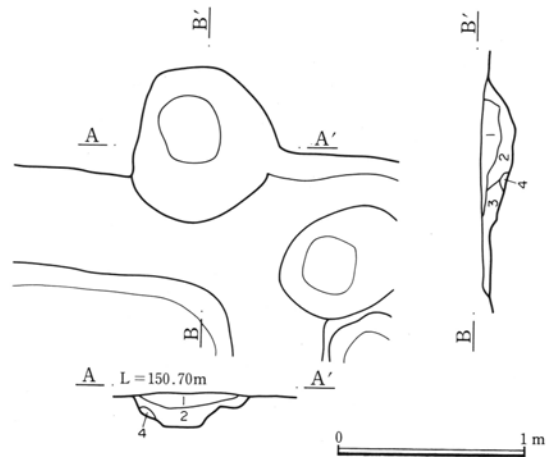
床面はこうした構造を持つ掘り方を暗褐色土等で埋め戻して造り出すようであるが、カマドや柱穴、貯蔵穴等の構造を確認することはできなかった。



[A-A'・D-D'セクション]

H-137号住居覆土

3：暗褐色土主体（3'：焼土・ローム僅かに含む。 3²：暗赤褐色土やや多く混在。ローム等僅かに含む。 3³：白色粒子・As-YP混入し、ロームやや多く、焼土僅かに含む。 3⁴：暗赤褐色土：焼土やや多く含む。 3⁵：黄褐色土ローム主体。暗褐色土僅かに含む。）4：暗黄褐色土：暗褐色土・暗赤褐色土等僅かに混入。

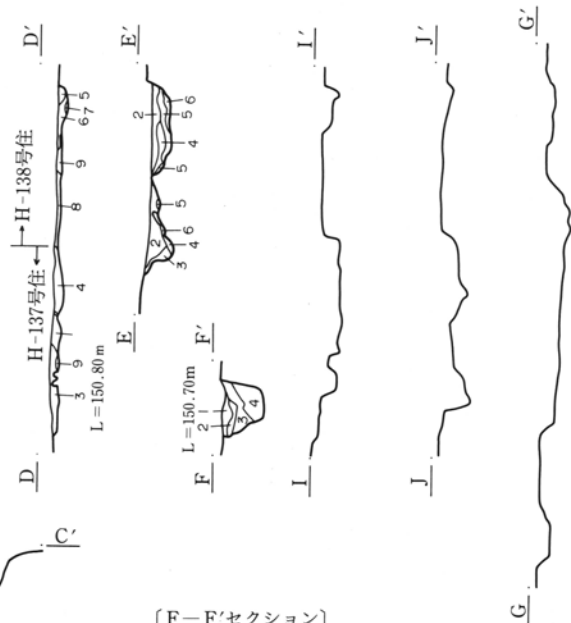
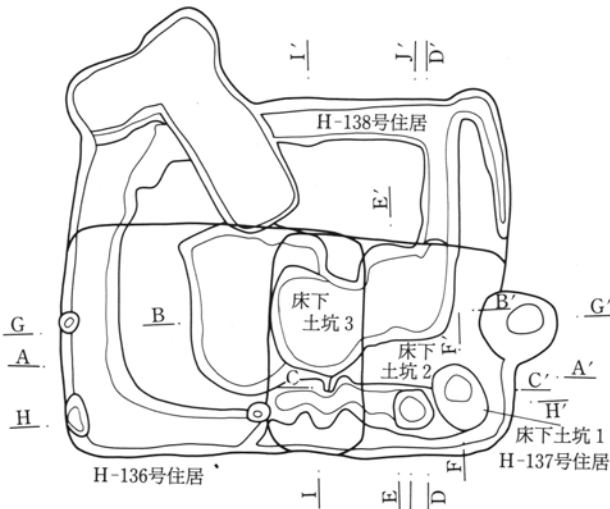


H-137号住居カマド掘り方覆土

1：赤褐色土：焼土僅かに散在する。 2：暗褐色土：暗赤褐色土・黒褐色土・焼土僅かに含む。 3：暗茶褐色土：焼土僅かに含む。 1・2層より若干固い。 4：暗黄褐色土主体。固い。

H-138号住居（掘り方）覆土

5：暗褐色土：暗黄褐色土極く僅かに含む。 6：褐色土：暗黄褐色土やや多く、白色粒子僅か、焼土・炭化物極く僅かに含む。 7：暗黄褐色土：暗褐色土・ローム僅かに、白色粒子極く僅かに含む。 8：暗褐色土：ローム・As-YP・白色粒子僅かに含む。 9：暗黄褐色土：白色粒子・As-YP僅かに含む。



[F-F'セクション]

床下1号土坑覆土

1：赤褐色土：焼土多く含む。 2：緑灰色粘質土：焼土・ローム極く僅かに含む。 3：黄褐色土：As-YP・ローム・ローム漸移層土やや多く散在。 4：暗茶褐色土主体。赤褐色粒子・焼土やや多く混入。ローム漸移層土極く僅かに含む。

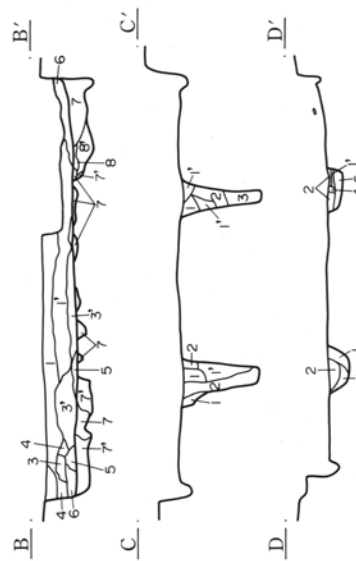
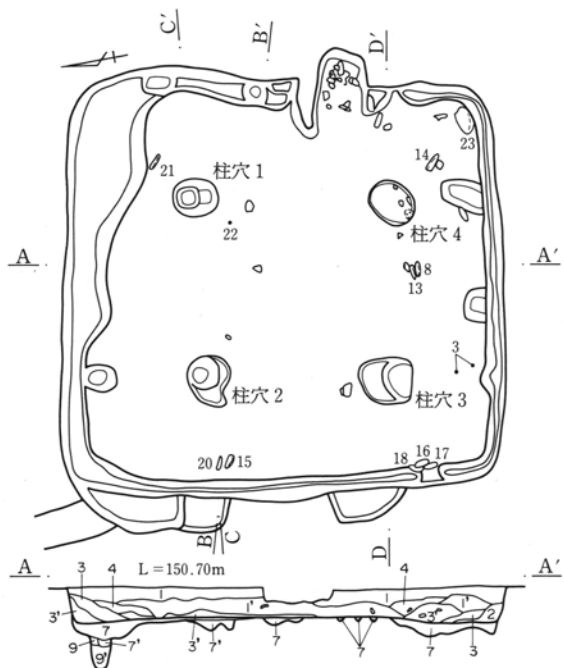
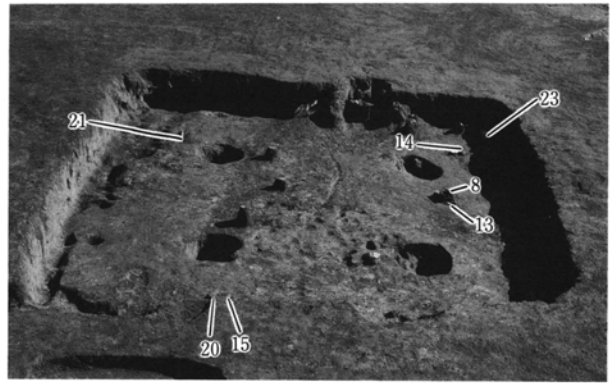
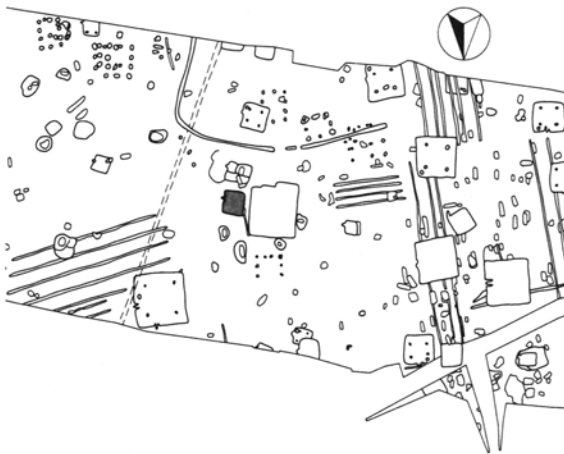
褐色土・ローム漸移層土を僅かに斑状に混入。 5：淡黄褐色土：ローム漸移層土主体。As-YP等僅かに混入。 6：黄褐色土：ローム主体。

[B-B'・C-C'・E-E'セクション]

H-137号住居掘り方覆土

1：暗黄褐色土：暗褐色土・ロームやや多く、As-YP僅かに含む。 2：暗褐色土：焼土・ローム・ローム漸移層土等僅かに含む。 3：乳灰色粘質土：混入物殆ど無し。 4：黄褐色土：ローム主体。暗

第346図 H-136・137・138号住居遺構



柱穴覆土

1：暗茶褐色土：黒色土と暗茶褐色土の混土。締まりに欠ける。(1'：暗茶褐色土の混入増加) 2：暗黒褐色土：くすんだ褐色土少量混入。締まりに欠ける。3：暗茶褐色土：粘性強く、黒色土微量混入する。4：黒色土：夾雑物見られず。5：灰褐色土：黒色土と灰白色粘質土を少量含んで比較的良く締まる。

0 2 m

住居覆土

1：暗黒褐色土：淡褐色土・黄褐色土を多量に含む。部分的に黒斑状の部分も確認される。(1'：淡褐色土・黄褐色土の混入減少) 2：黒色土：褐色土微量含む。粘性持つ。3：黒色土：2層土に褐色土少量混入。(3'：褐色土の混入増加。) 4：暗褐色土：比較的粘性強い。褐色土微量混入。5：暗黄褐色土：黒色土と褐色土

の混土。6：暗黒褐色土：褐色土を比較的多量に含む。

住居掘り方覆土

7：暗黒褐色土：黒色主体土にくすんだ褐色土若干量混入。(7'：更に多量の褐色土含む。) 8：灰暗黒褐色土：灰と焼土微量に混入。(8'：焼土と灰多量に含む。) 9：褐色土：締まりに欠ける。(9'：若干の黒色土の混入が見られる。)

第347図 H-139号住居

H-139号住居 (奈良時代, 第347図~第348図, 図版129・150~151・164)

概要 本住居はD区中部に所在する竪穴住居である。

出土遺物の中で本住居に伴うと判断されたものには8世紀前・中葉期の特徴を示す土師器の皿(1)・坏(2,3)須恵器の坏(4)の他、カマドの左側等にまとまって見られたこも編み石(5~22)がある一方、覆土中からは当該期の土師器甕片を中心に須恵器甕(23)や不定形石器(24)などが見られた。

以上から本住居は8世紀前半期の所産と判断した。

規模 長軸：468cm 短軸：459cm 深さ：39cm

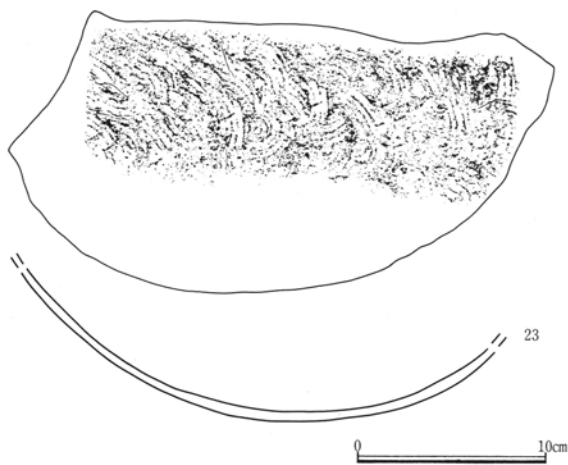
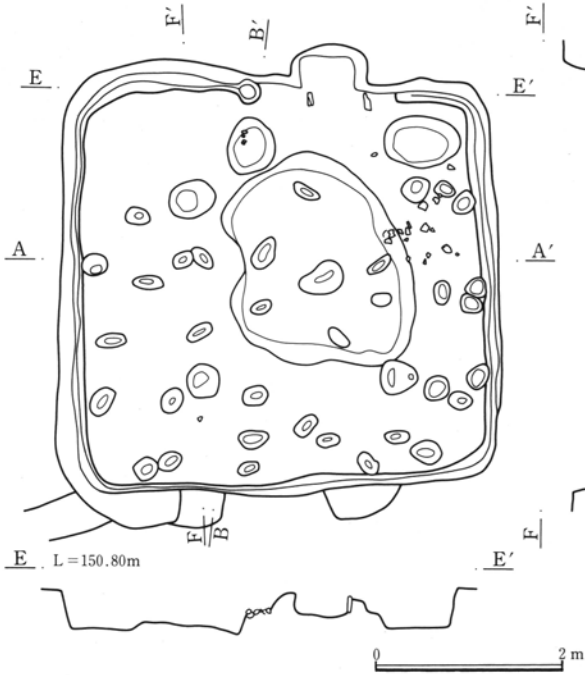
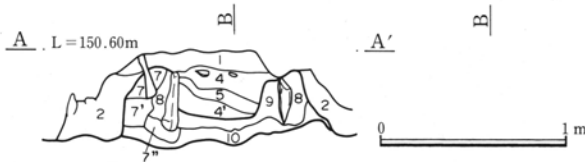
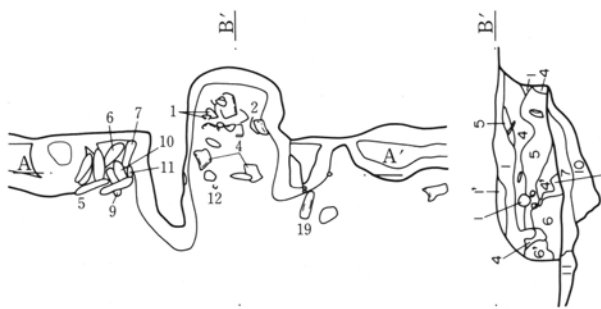
カマド 幅：106cm 奥行き：89cm 左袖 幅：

29cm 長さ：63cm 高さ：20cm 右袖 幅：28cm

長さ：36cm 高さ：20cm 燃烧部 径：48×75cm

柱穴1 径：49×39cm 深さ：85cm 柱穴2 径：

53×45cm 深さ：86cm 柱穴3 径：56×50cm



カマド覆土

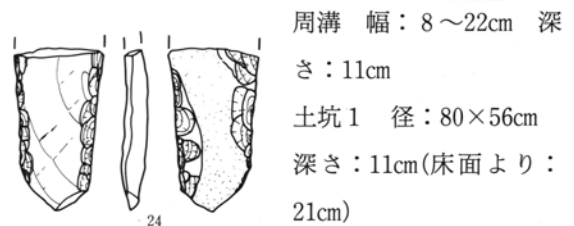
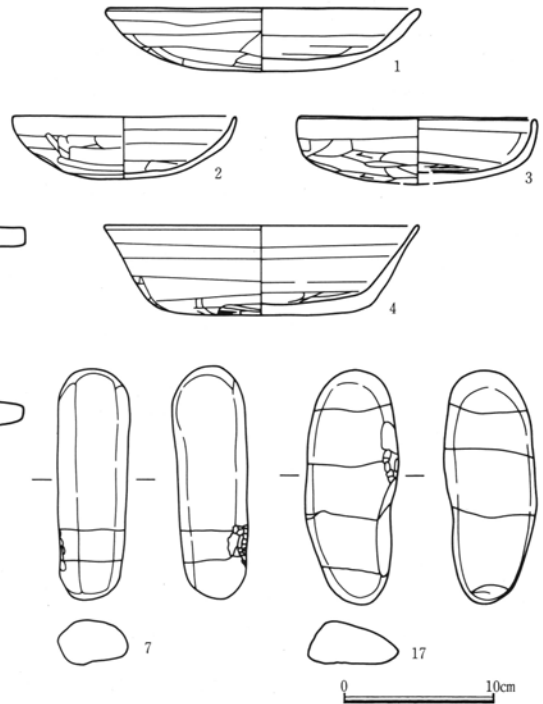
1：暗茶褐色土：黄褐色土若干と焼土微量に含み比較的良く締まる。(1'：褐色土微量に含む。) 2：暗茶褐色土：くすんだ焼土少量含む。 4：暗褐色土：焼土相当量含む。(4'：焼土少ない。) 5：暗褐色土：暗黄褐色土と黒色土少量混入。 6：暗黒褐色土：淡褐色土と焼土少量含み比較的良く締まる。(6'：6層に比し顕著に焼土見る。)

袖構築材

7：褐色土：締まり持ち乾いた感の褐色土。(7'：7層より締まりに欠ける。 7''：明褐色土と炭化物微量混入。) 8：褐色土：締まり持ち乾いた感を呈する。部分的に灰白色粘土を貼り付けている。

カマド掘り方覆土

9：暗赤黒褐色土：焼土に黒色土と褐色土微量混入。 10：黒色土：締まり弱くローム微量。 11：暗褐色土：褐色土と黒色土の混土。



周溝 幅：8～22cm 深さ：11cm
土坑1 径：80×56cm
深さ：11cm(床面より：21cm)

構造 本住居は隅丸方形のプランを呈する。

壁際に幅100～183cm、深さ22cm以下を測る周溝状の大きな掘り込みが廻り、中央に径226×196cmを測る不整形な掘り残しを持つ掘り方を有する。掘り方には他にも幾つかのピットが見られた。床は掘り残し部を地床とし、掘り込み部分を黒色土等の土壌で埋め戻して造っている。

カマドは東カマドで東壁中央付近に造られる。掘

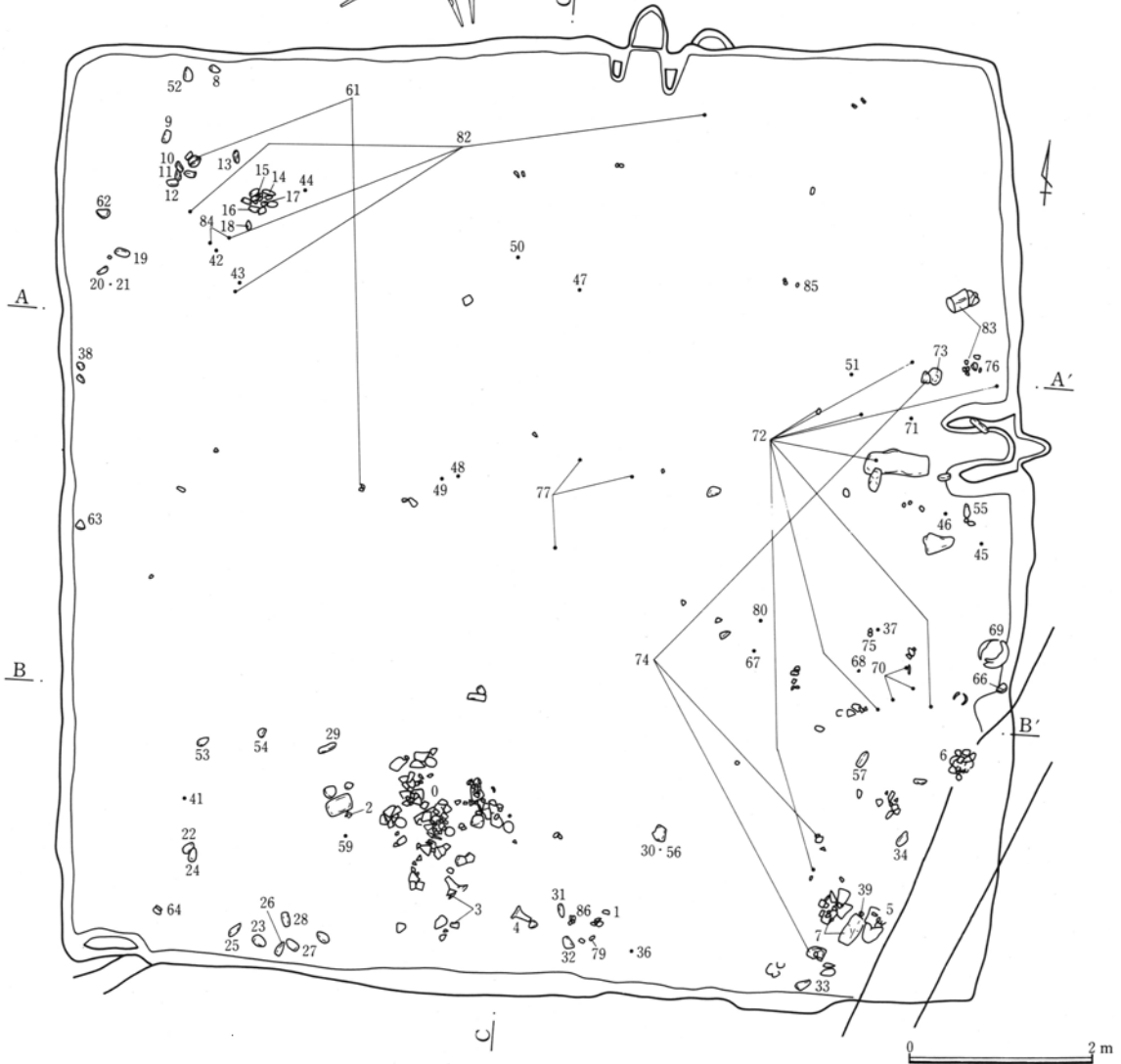
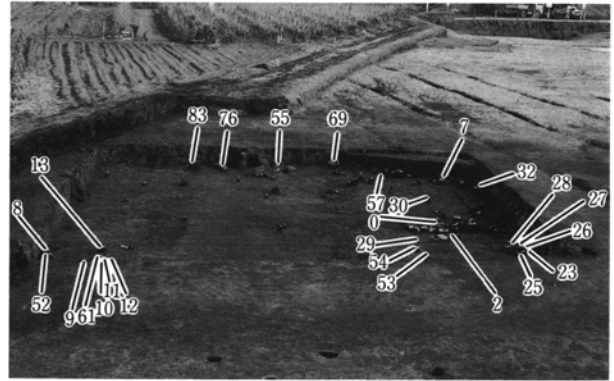
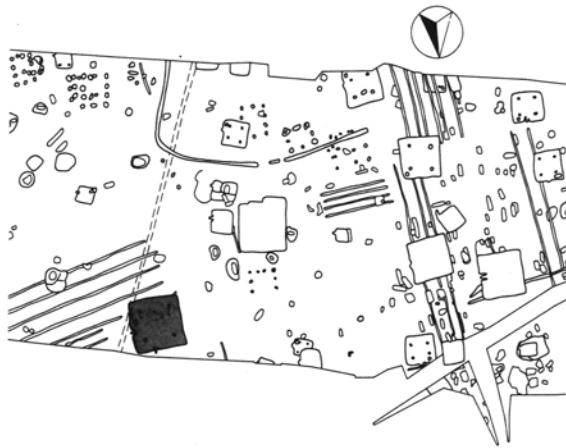
第348図 H-139号住居遺構及び出土遺物

深さ：26cm 柱穴4 径：52×42cm 深さ：14cm

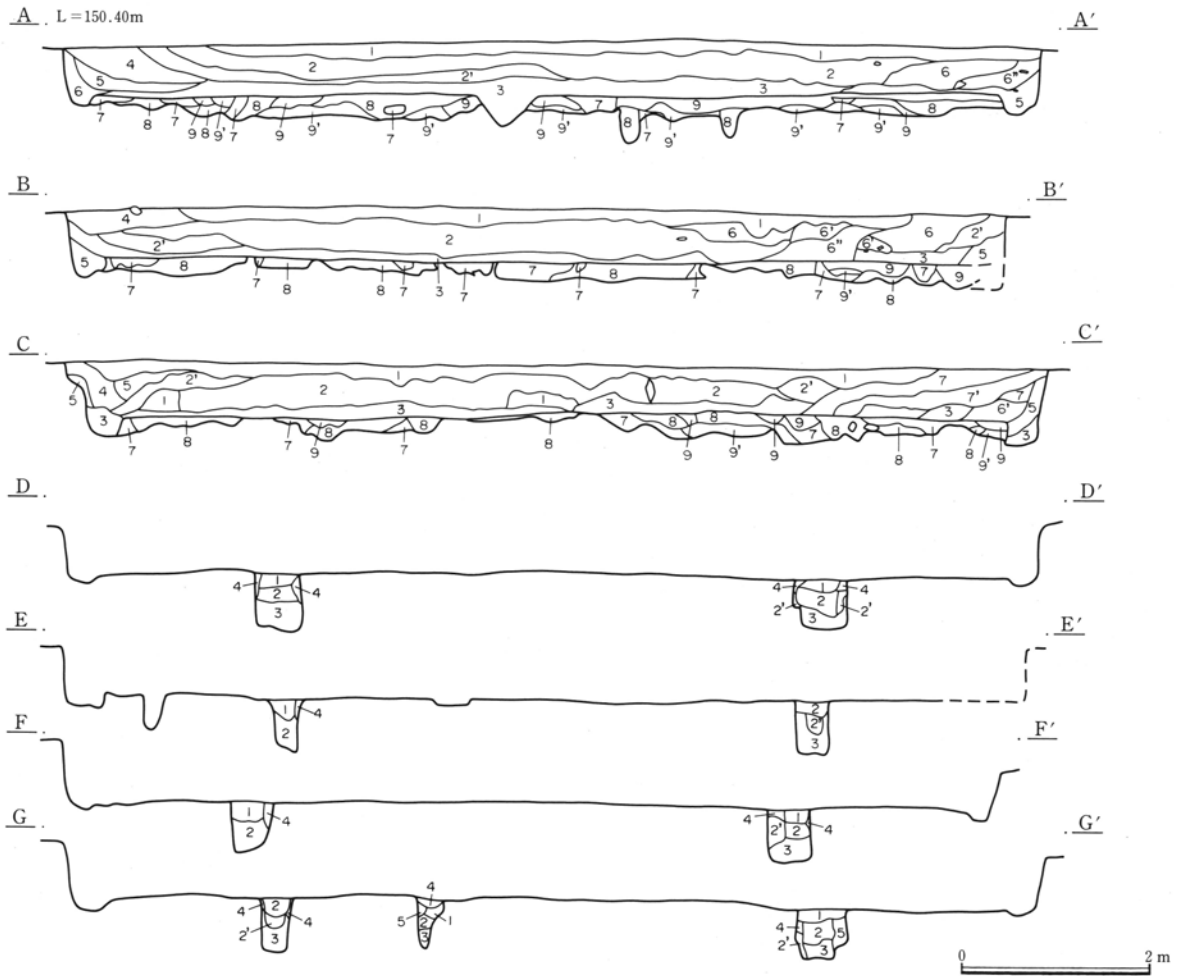
第3章 発見された遺構と遺物

り方を有し、これを黒色土等で埋め戻して燃焼面を造っている。燃焼部は東壁を跨ぐ位置に設定され、その両側に褐色土や灰白色粘土で袖を造っている。床面に於いては主柱穴4基と周溝を確認したが、

主柱穴は北側の柱穴1・2は掘り込みが深く、南側の柱穴3・4は掘り込みが浅い。周溝はやや崩れ気味であった。尚、貯蔵穴は確認されなかったが、掘り方に見られた土坑1が該当する可能性を有する。



第349図 H-140号住居



住居覆土

1：暗灰黒褐色土：白色土粒微量に含み締まり弱い。 2：暗灰黒褐色土：1層に比し白色土粒大粒化し暗黄褐色土ブロック処々に見られる。(2'：暗黄褐色土ははっきり多量に見る。) 3：暗黄褐色土：黒色土少量混入。 4：暗灰黒褐色土：白色土粒・黄褐色土粒を微量含む。 5：暗黄褐色土：暗黄褐色土と黒色土の混土。褐色土粒多量に含まれる。 6：暗黒褐色土：淡褐色土粒・焼土粒を少量含む。(6'：淡褐色土粒の混入減少。 6''：6層と6'層の中間層) 7：暗茶褐色土：褐色土粒少量含む。(7'：若干黒味強い。)

住居掘り方覆土

7：暗黒褐色土：明褐色土ブロック少量混入。 8：暗褐色土：暗褐色土と黒色土の混土。 9：暗褐色土：明褐色土と暗褐色土の混土。(9'：明褐色土の要素が強くなる。)

柱穴覆土

1：暗黒褐色土：ローム微量に含む。 2：暗黒褐色土：赤味強いロームが帯状に少量混入。(2'：2層よりロームの混入増加。) 3：暗黒褐色土：ローム粒・ブロックを少量含む。 4：暗黄褐色土：黄褐色ロームと暗褐色土の混土。 5：暗褐色土：ロームブロックと黒色土の混土。締まりに欠ける。

第350図 H-140号住居セクション

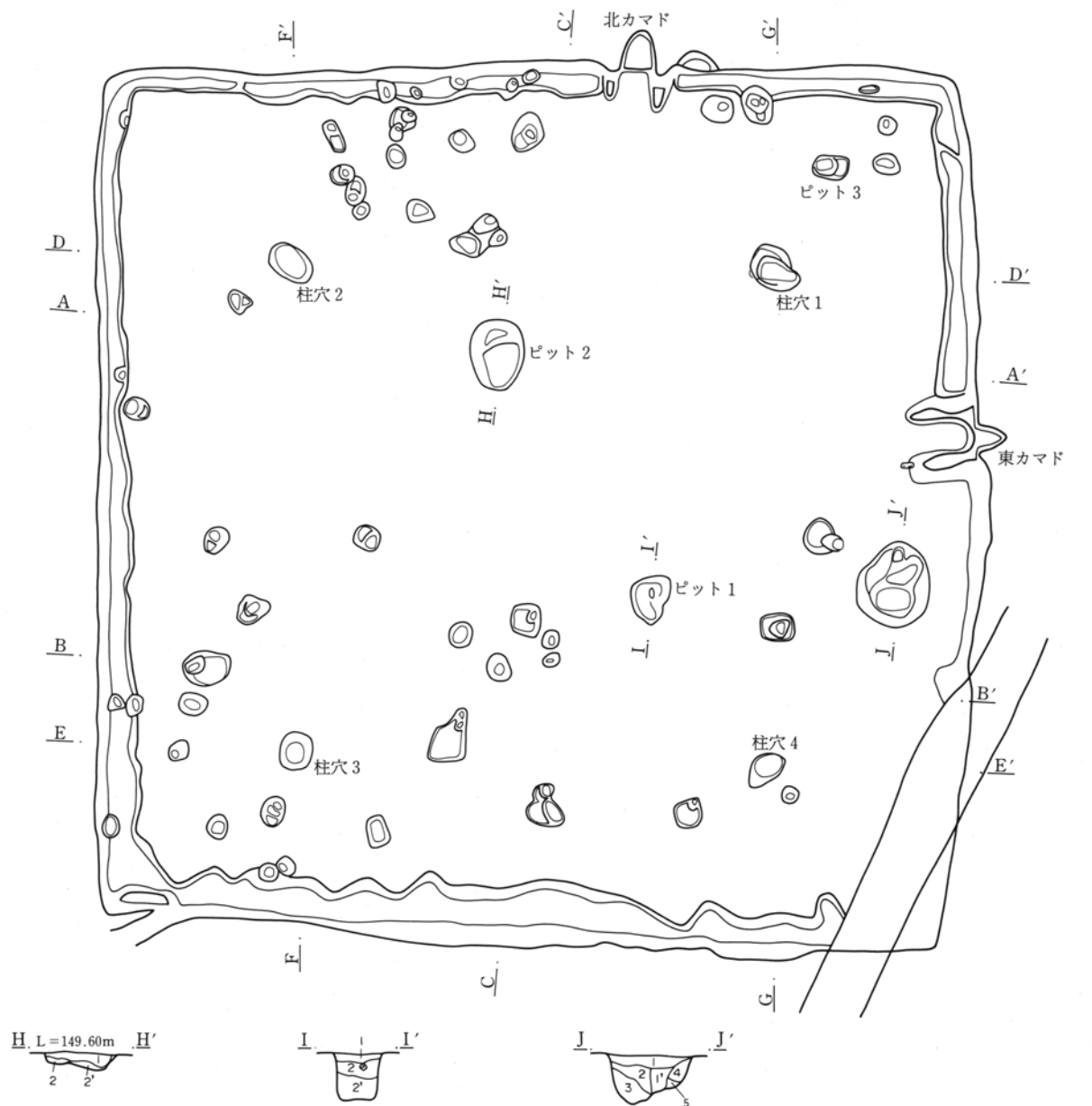
H-140号住居 (古墳時代後期, 第349図～第355図, 図版129～130・151～153・164)

概要 本住居はD区北東部に位置する、D区に於ける大型の竪穴住居跡の1軒である。

本住居は本遺跡の中で最も大きいものであり、双方共袖を残している2基のカマドを北壁と東壁に有することも特徴の一つである。また、出土遺物の中にも大きいものが目立った。尚、カマドは東側のものの方が大きく且つ遺存状況が良かったので、主に使用されていたのではないかと想定される。

さて、本住居はその南東部を甘楽用水が通っていて遺構を壊している。また、小型のピットが多く掘削されていたため、床面に多くの掘り込みが至って影響が与えられている。

本住居からは多くの遺物の出土が見られたが、この中で本住居に伴うと判断された遺物には6世紀後半期から7世紀前半期にかけての特徴を示す土師器の坏(1,2)・高坏(3,4)・甕(5,6)・甑(7)・胴張



ピット1覆土
 1：暗茶褐色土：黒色土微量に混入する。 2：暗茶褐色土：夾雑物見られず。 2'：暗茶褐色土：暗茶褐色土と暗黒褐色土の混土。

ピット2覆土
 1：暗黒褐色土：暗黒褐色土と褐色土の混土。炭化物少量混入。
 2：暗茶褐色土：漆黒土ブロック少量混入。(2'：漆黒土減少。)

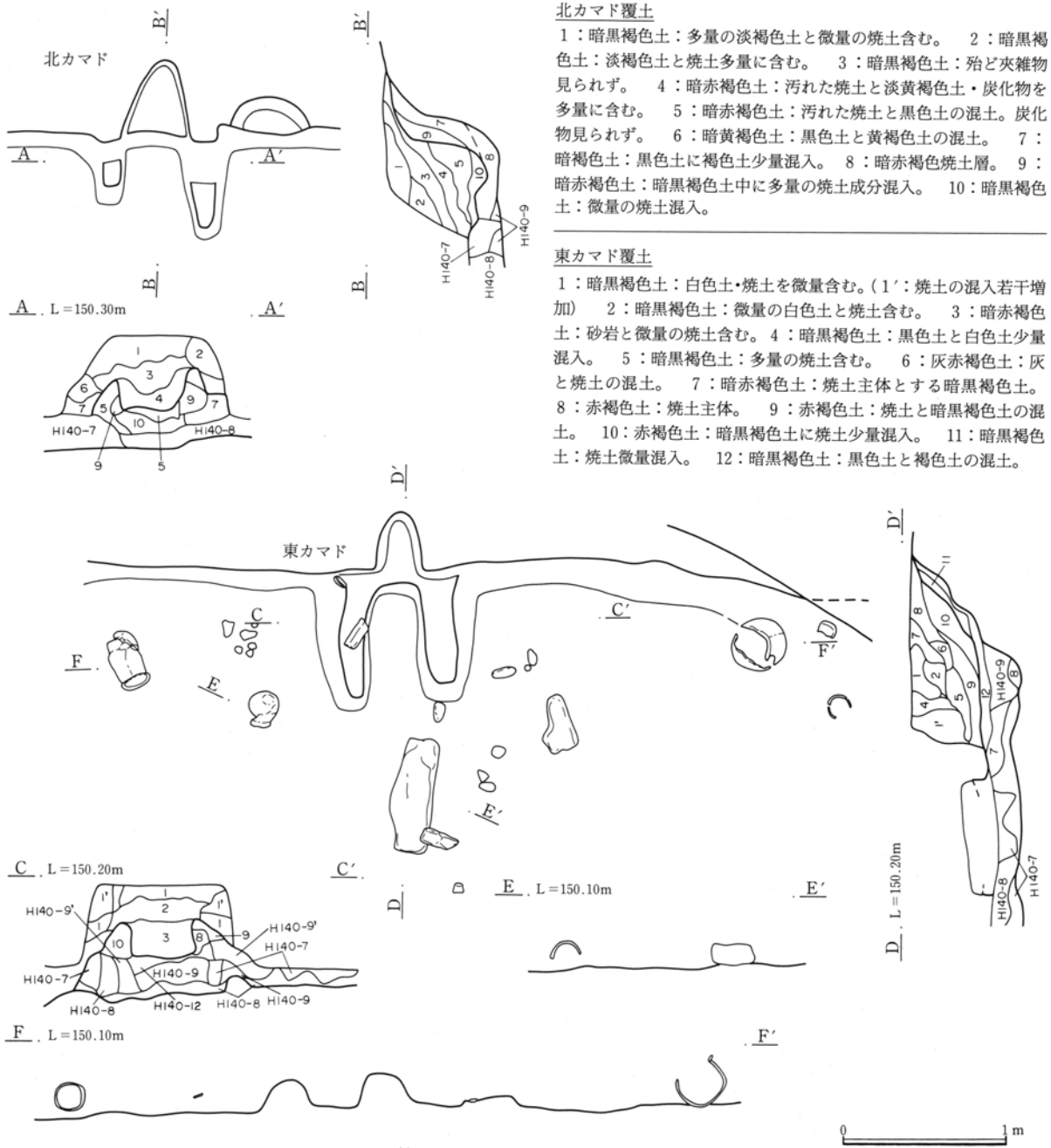
貯蔵穴覆土
 1：黒褐色土：ローム粒微量に含む。 1'：黒色土：1層と2層の中間層。 2：暗黒褐色土：ローム粒多量に含む。 3：暗黒褐色土：ロームブロック少量混入。 4：黄色土：黒色土微量に混入。
 5：暗褐色土：黒色土と褐色土の混土。

第351図 H-140号住居遺構

甕(0)の他、北西部に集中して出土するものもあった。こも編み石(8~34)や鎌と思われる鉄製品(35)などの出土が見られた。

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕片を中心に各種の遺物があり、この中には縄文土器片

(60)や磨石(36~39)といった縄文時代の遺物や、本住居に伴なうと判断したものと同時期のものと思われる土師器の坏(62~66)・高坏(67)・甕(68,83)・胴張甕(69~71)・甑(72)・小型甕(73,74)・椀(76)や須恵器蓋(79)の他、6世紀前半期のものと思わ



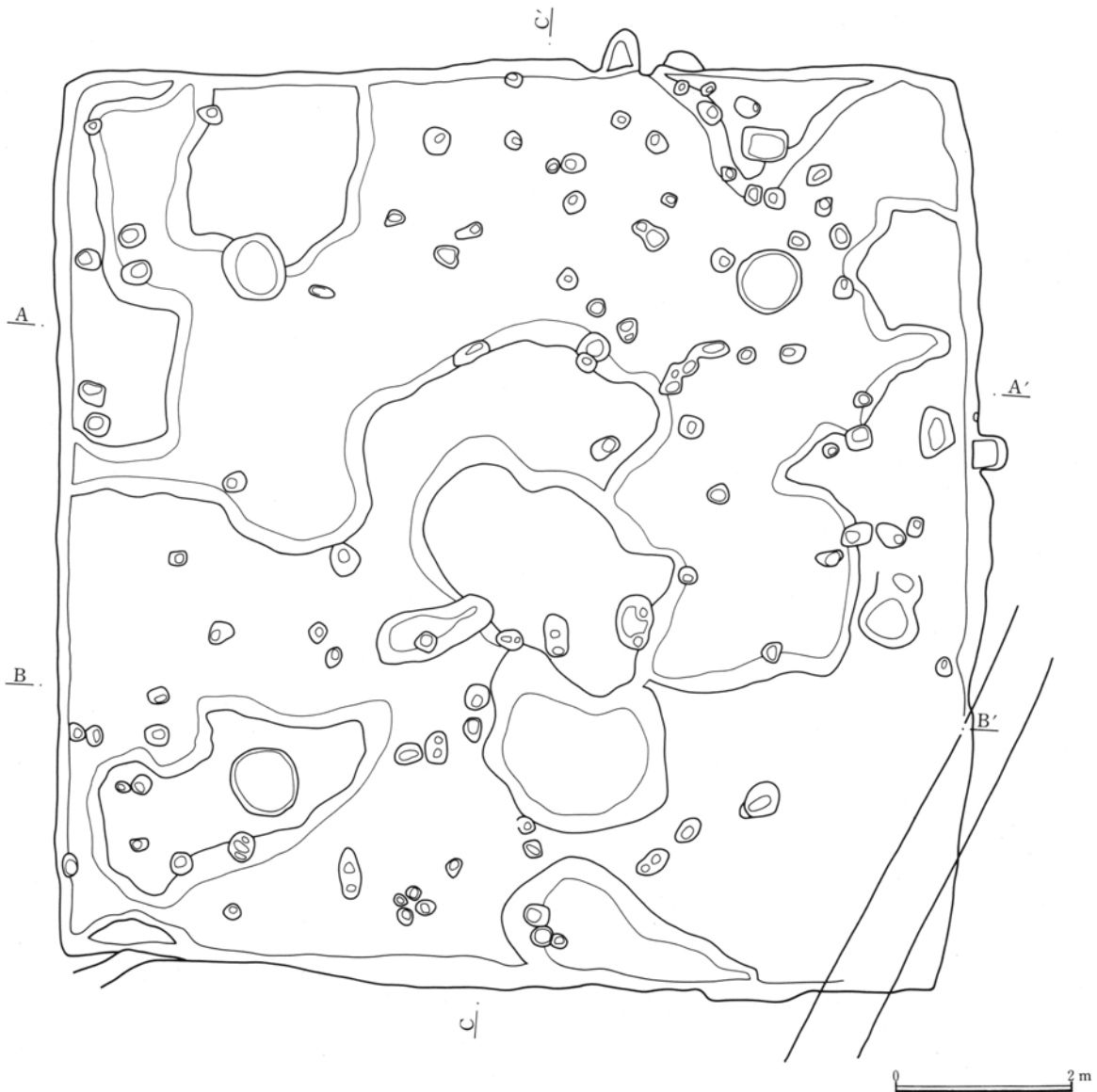
第352図 H-140号住居カマド

れる土師器坏 (61) や 7 世紀後半期のものと思われる須恵器坏(78)、9 世紀前半期と考えられる土師器甕 (77) も見られ、この他にも須恵器の長頸壺 (80) や甕 (81,82,84)、そして土師器小型壺 (75)、こも編み石(40~56)、古墳時代後期のものと思われる鎌 (58) やスラグ (59) が見られ、中世の鉄鏃 (57) の混入も見られた。

こうした出土遺物の所見から、本住居は凡そ西暦 600 年を前後する時期の所産と判断されたのである

が、覆土中の遺物の状況から本住居は住居廃棄後早い段階から継続的に遺物の投棄が行われ、少なくとも平安時代頃までは窪地等として、その痕跡を留めていたことが窺われる。

規模 長軸:1064cm 短軸:1047cm 深さ:59cm
 [北カマド] 幅:100cm 奥行き:98cm 左袖幅:19cm 長さ:38cm 高さ:12cm 右袖幅:29cm 長さ:58cm 高さ:7cm 燃烧部 径:40×44cm 煙道 幅:42cm 長さ:44cm



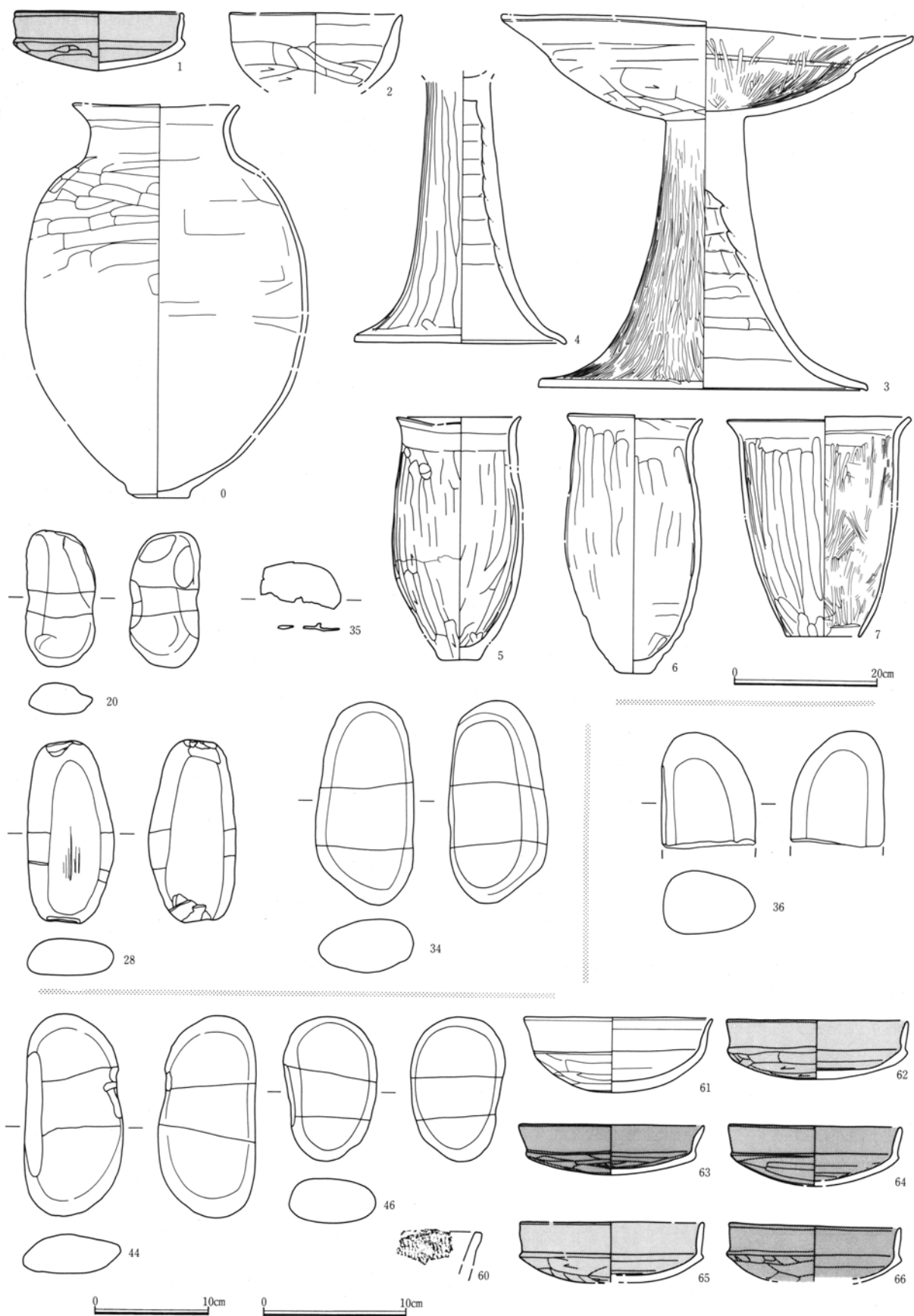
第353図 H-140号住居掘り方

〔東カマド〕 幅：109cm 奥行き：117cm 左袖
 幅：31cm 長さ：79cm 高さ：27cm 右袖 幅：
 40cm 長さ：79cm 高さ：24cm 燃烧部 径：32
 ×67cm 煙道 幅：31cm 長さ：41cm
 柱穴1 径：63×48cm 深さ：56cm 柱穴2 径
 ：58×37cm 深さ：59cm 柱穴3 径：45×42cm
 深さ：64cm 柱穴4 径：51×35cm 深さ：61cm
 ピット1 径：58×47cm 深さ：51cm ピット2
 径：85×64cm 深さ：32cm ピット3 径：42×
 26cm 深さ：43cm
 貯蔵穴 径：100×87cm 深さ：60cm
 周溝 幅：12~57cm 深さ：6~19cm

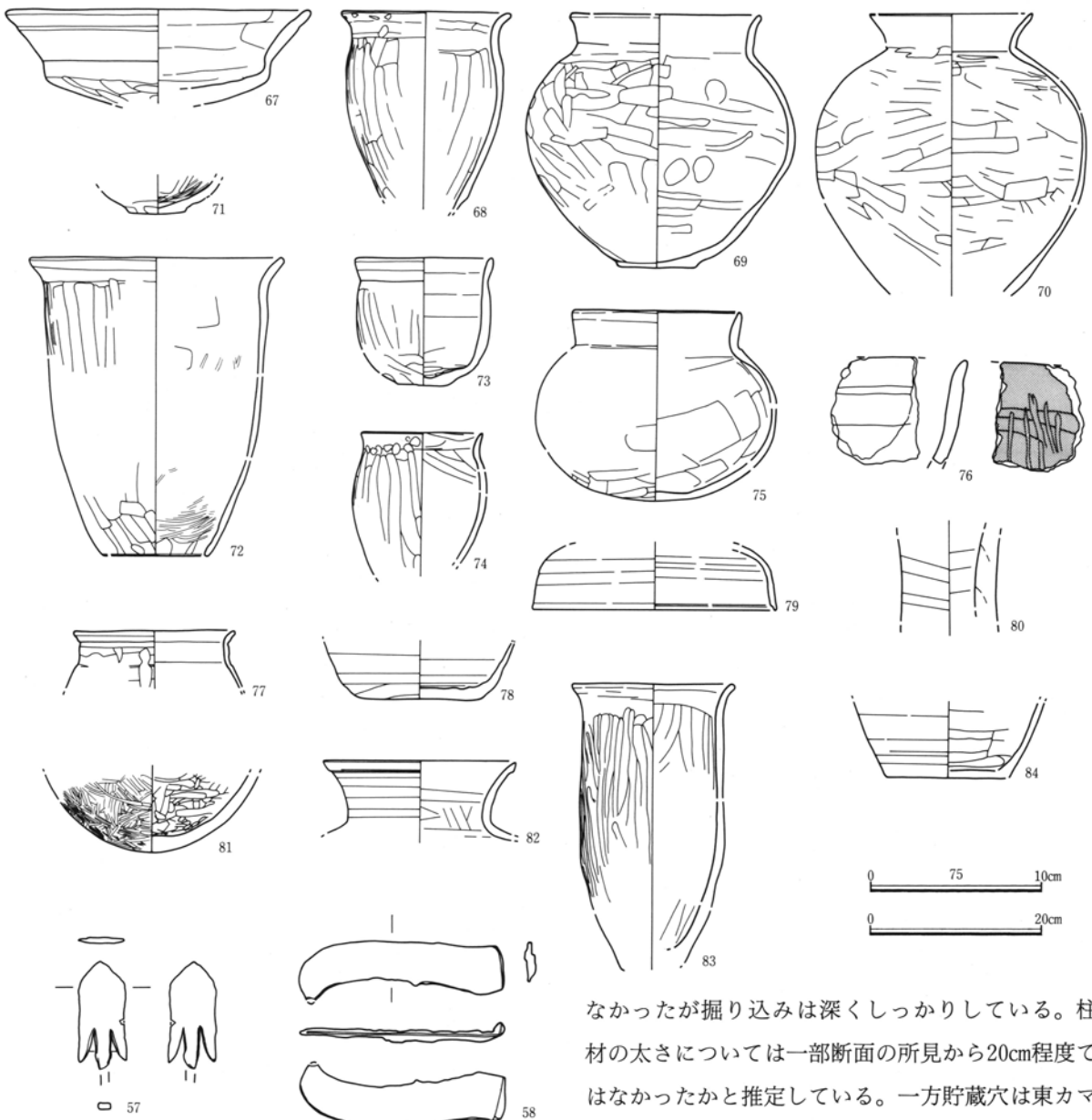
構造 本住居は方形のプランを呈している。

掘り方を有し、掘り方底面には10cm以内の凹凸が見られたのであるが、特段の規則性は見出せなかった。床面はこのような掘り方を明褐色土・暗褐色土そして黒色土等で埋め戻して造っているが、一部に地床の部分も見られる。

カマドは上述のように北と東の二カ所に在るが、その構造は近似したものであった。このうち北側のものは北壁中央やや東寄りに、東側のものは東壁の中程やや北寄りに造られている。何れも浅い掘り方を有し、これを焼土を含む黒色系の土壌で埋め戻して燃烧面を造っている。燃烧部は北壁若しくは東壁



第354図 H-140号住居出土遺物(1)

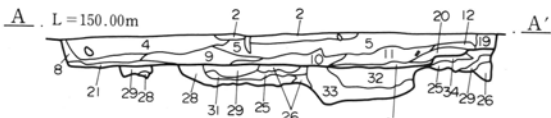
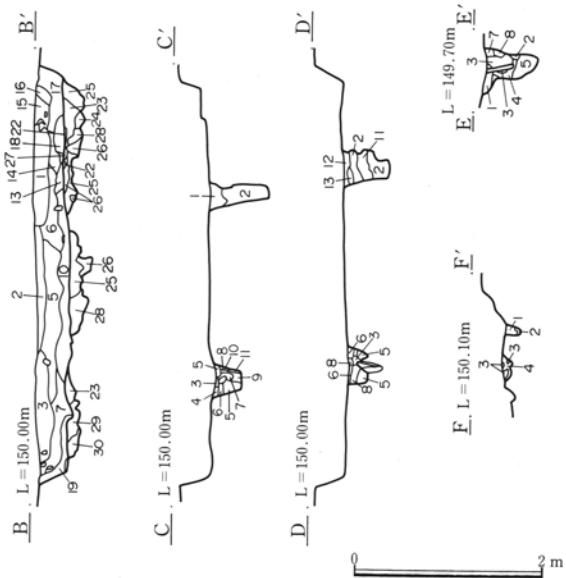
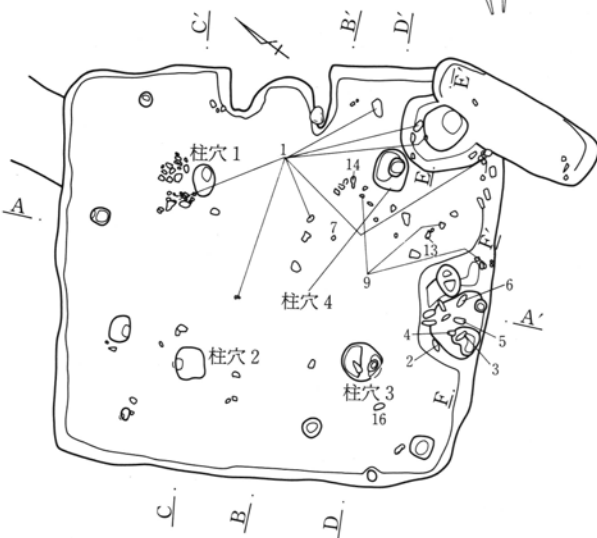
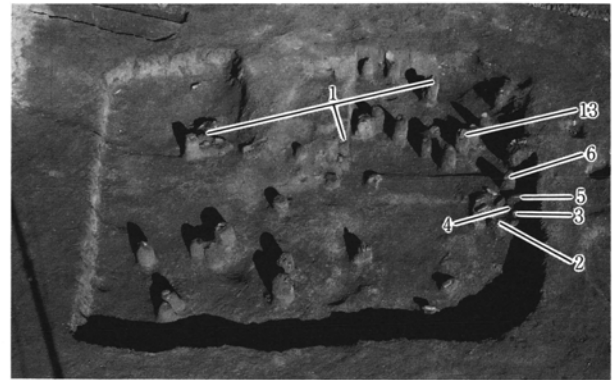
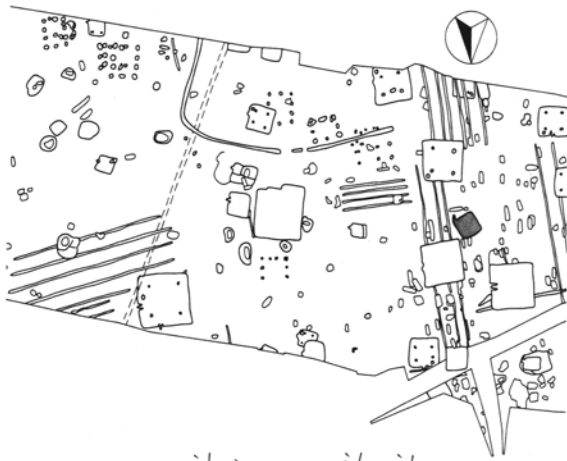


第355図 H-140号住居出土遺物(2)

の手前側に設定され、その両側にハの字にやや近いプランで焼土と黒色系の土壌を用いて袖を造る。煙道は燃焼面より40cm程高い位置に水平に近い緩やかな傾斜を以て壁を40内至80cm以上削り込んで造り出している。尚、北カマドの左袖は破壊が進んでいるように思われ、東カマドの手前に出土した板状の礫から天井石が渡されていたことが想定される。

上述のように床面に於いては多数のピットが見られたが、この中で支柱穴4基と貯蔵穴1基を特定した。支柱穴は柱穴1~4としたもので、径は大きく

なかったが掘り込みは深くしっかりしている。柱材の太さについては一部断面の所見から20cm程度ではなかったかと推定している。一方貯蔵穴は東カマドの右側に掘削され、主体部は南に寄った位置に設定されているようである。尚、北カマドに対応する貯蔵穴は特定できなかったが位置と規模からピット3がその可能性を有するものと思われる。この他のピットは多くが20~40cmの深さのものであったが、この中で径が大きく深く掘削されるものがピット1・2である。この2基のピットは左右の違いはあるが、前者が東カマドに対し後者が北カマドに対し近似した角度・距離で掘削されているのでカマドに関連したものではないかと考えている。また、カマド部分と東壁南半部を除いて周溝が見られたが、南壁沿いではやや崩れている。



近世土坑覆土

1：暗褐色土：ローム漸移層土（以下「漸移層土」）主体。As-A含。
住居覆土及び住居掘り方覆土（22層以下は掘り方覆土）
 2・10・23：暗茶褐色土／7・8：黒褐色土／12・19：暗褐色土／
 24・29・30：明茶褐色土／27：茶褐色土：上層中心の漸移層土主体。
 3・4・32：茶褐色土／9・11：暗茶褐色土／13・16・25：明褐色
 土：漸移層土主体。 5・20：明茶褐色土／6：明褐色土：下層
 中心の漸移層土主体。 14：黄褐色土：ロームと下層中心の漸移層
 土主体。 15：黄褐色土／21：暗黄褐色土：ロームと漸移層下層主
 体。 17：淡赤茶褐色土：焼土化認める漸移層土主体。 18：淡赤
 褐色土：焼土化認める漸移層下層土主体。 22：明茶褐色土：漸移
 層土主体。弱く焼土化。 26：明黄褐色土／28：黄褐色土／31：淡
 茶褐色土：ローム主体。 33：暗褐色土：上層中心の漸移層土主体。
 灰白色シルト含。 34：明茶褐色土ローム。

柱穴覆土

1・9：暗褐色土：上層中心の漸移層土主体。 2：明褐色土／4：
 黄褐色土：下層中心の漸移層土主体。 4層は住居貼り床。 3：茶
 褐色土／6：暗褐色土／7：黒褐色土／12：明茶褐色土：漸移層土
 主体。 5・8：黄褐色土：ロームと漸移層土主体。 10：黄褐色
 土：ロームと漸移層下層土。 11：黒褐色土：黒色土と漸移層土主体。
 13：淡茶褐色土：焼土化見る漸移層土主体。

貯蔵穴覆土

1：淡茶褐色土／4：茶褐色土／7：黄褐色土：ロームに近い漸移
 層土主体。 2：明茶褐色土／5：暗茶褐色土：漸移層土主体。
 3：茶褐色土：上層中心の漸移層土主体。 8：暗黄褐色土：7層
 土に漸移層上層土多し。

入り口部分小ビット覆土

1：暗褐色土：漸移層土主体。 2：暗褐色土：1層土とローム。
 3：暗黄褐色土：漸移層土に黒土等多し。 4：黄褐色ローム主体。

第356図 H-141号住居

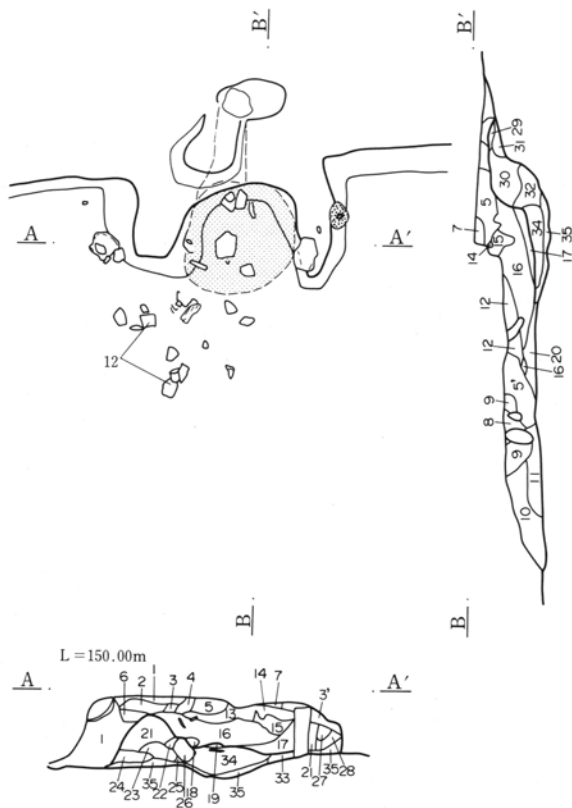
H-141号住居（古墳時代後期、第356図～第358図、図版130・153・164）

概要 本住居はD区西部に位置するD区に於いては小型のものに属する竪穴住居跡である。

本住居の南東隅には長方形プランの攪乱が入って

貯蔵穴が壊されるなど、遺構の一部が壊されている。

本住居に伴うと判断された出土遺物には6世紀後半期の特徴を示す土師器胴張甕(1)や、後述の入り



カマド覆土

1・2：茶褐色土／10：暗茶褐色土：上層中心のローム漸移層土（以下「漸移層土」）主体。 3・3'：黄褐色土：ローム・漸移層下層土・As-YP・灰褐色シルトの混土。 4：明褐色土／5：暗黄褐色土：漸移層下層土主体。（5'：ローム多く含む。） 7・11・13：淡茶褐色土／15：暗黄褐色土：下層中心の漸移層土主体。 6・8・12：明茶褐色土／14：暗褐色土／16：茶褐色土／20：淡茶褐色土：漸移層土主体。 9：明褐色土：下層土やや多い漸移層土主体。 17：暗橙褐色土：焼土化やや進んだ下層中心の漸移層土主体。 18：明

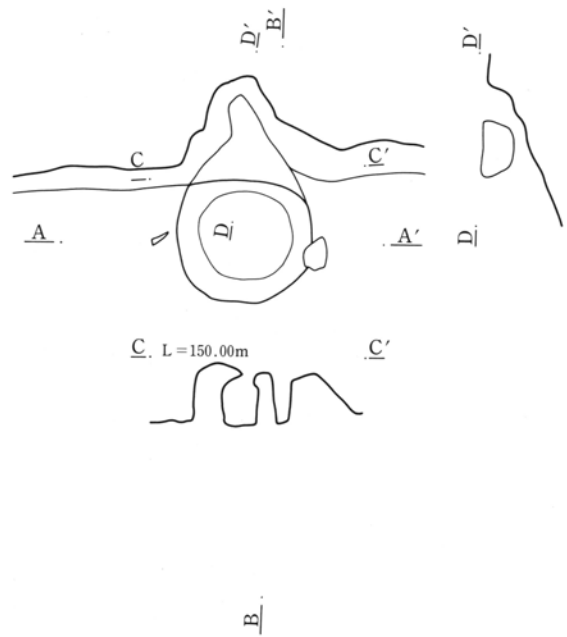
口遺構に多く出土したこも編み石（2～6）がある。

覆土中からは奈良時代以降の土師器甕片を中心に、磨石（7）や7世紀代中心の土師器の坏（8～11）や甕（12）、そしてこも編み石（13～16）などを見た。

従って本住居は6世紀後半頃の所産と想定され、住居廃棄後の7世紀代にはその痕跡を留めて継続的な遺物の投棄が想定される。また、床下粘土坑と考えられる床下土坑1・2は後者が前者を切ることからカマドの造り替えのあったことが窺われる。

規模 長軸：467cm 短軸：443cm 深さ：34cm

カマド 幅：130cm 奥行：114cm 左袖 幅：56cm 長さ：40cm 高さ：24cm 右袖 幅：41cm 長さ：66cm 高さ：28cm 燃烧部 径：49×50cm 煙道 幅：17cm 長さ：55cm カマド掘り方



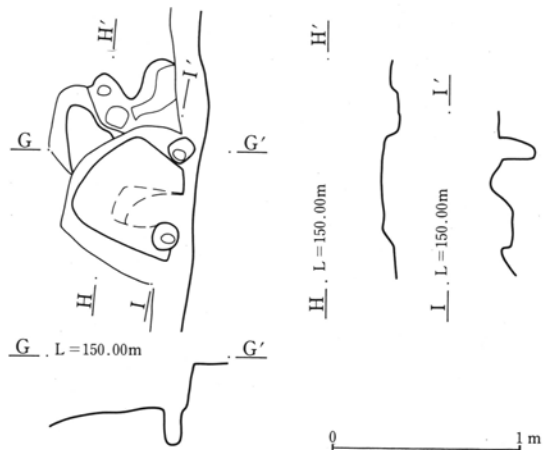
橙褐色土：焼土主体。 19：灰褐色シルト主体。

袖構築材

21：淡灰褐色土：部分的に弱く焼土化する淡灰色シルト主体。 22：淡赤灰色土：21層土の焼土化したもの。 23：にぶい黄褐色土：ローム主体。 24：淡茶褐色土：黒色土と21層土の混土等。 25：黒褐色土：黒色土主体。 26：淡褐色土：焼土化進んだ漸移層土主体。 27：茶褐色土：弱い焼土化見る上層中心の漸移層土主体。 28：暗茶褐色土：焼土化見る上層中心の漸移層土主体。

カマド掘り方覆土

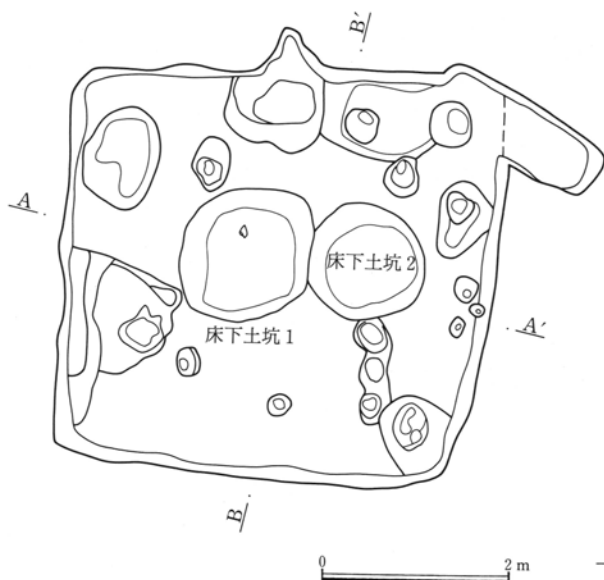
29：淡黄褐色土：ローム主体。 30：明褐色土：焼土化見る漸移層土主体。 31：暗橙灰色土：焼土化進んだローム主体。 32：黄褐色土：弱い焼土化見るローム主体。 33：淡茶褐色土：21層土と35層土の混土。 34：橙色土：焼土主体。 35：黒褐色土：黒色土主体。



第357図 H-141号住居カマド

径：72×65cm 深さ：9cm

柱穴1 径：33×24cm 深さ：65cm 柱穴2 径：36×31cm 深さ：59cm 柱穴3 径：42×43cm



深さ：44cm 柱穴4 径：43×35cm 深さ：53cm
 貯蔵穴 径：82cm×90cm以上 深さ：69cm
 床下土坑1 径：141×139cm 深さ：24cm
 床下土坑2 径：126×126cm 深さ：32cm

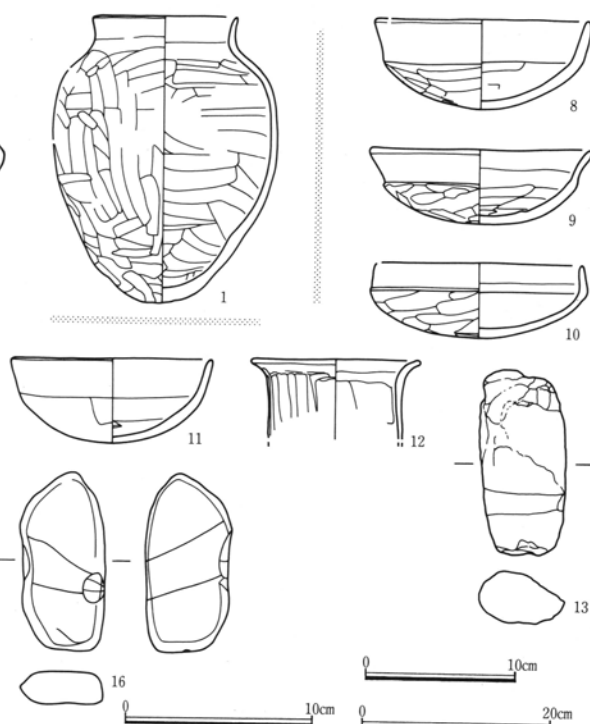
構造 本住居は方形に近い隅丸方形のプランを呈して掘り方を有し、住居の中程には床面を掘り込んで2基の床下土坑が掘削される。床は掘り方をロームやローム漸移層土等で埋め戻して造られるが、部分的に貼り床が施された可能性もある。

カマドは東カマドで東壁の中程に造られる。円形プランの掘り方を持ち、これを焼土とローム等で埋め戻して燃焼面を造る。燃焼部は東壁の手前に設定され、奥側に向かって徐々に高くなり、東壁を幅17cm、高さ7cm程を測るトンネル状に40～50cm掘り抜いて、径37×22cm、底径16×13cmを測る竪坑にぶつける煙道に続いている。燃焼部の両側には焼土を含むシルト・ローム・ローム漸移層土等で短い袖が造られるが、左側のものは確認できなかった。右袖手前には礫を用いた袖石を立てている。

H-142号住居（古墳時代後期、第359図～第363図、図版130～131・153～155・165）

概要 本住居はD区西部に位置するD区に於ける大型の竪穴住居跡のうちの1軒で、本遺跡では3番目に大きな規模のものである。

本住居付近には現代の耕作溝や芋穴等の掘り込み



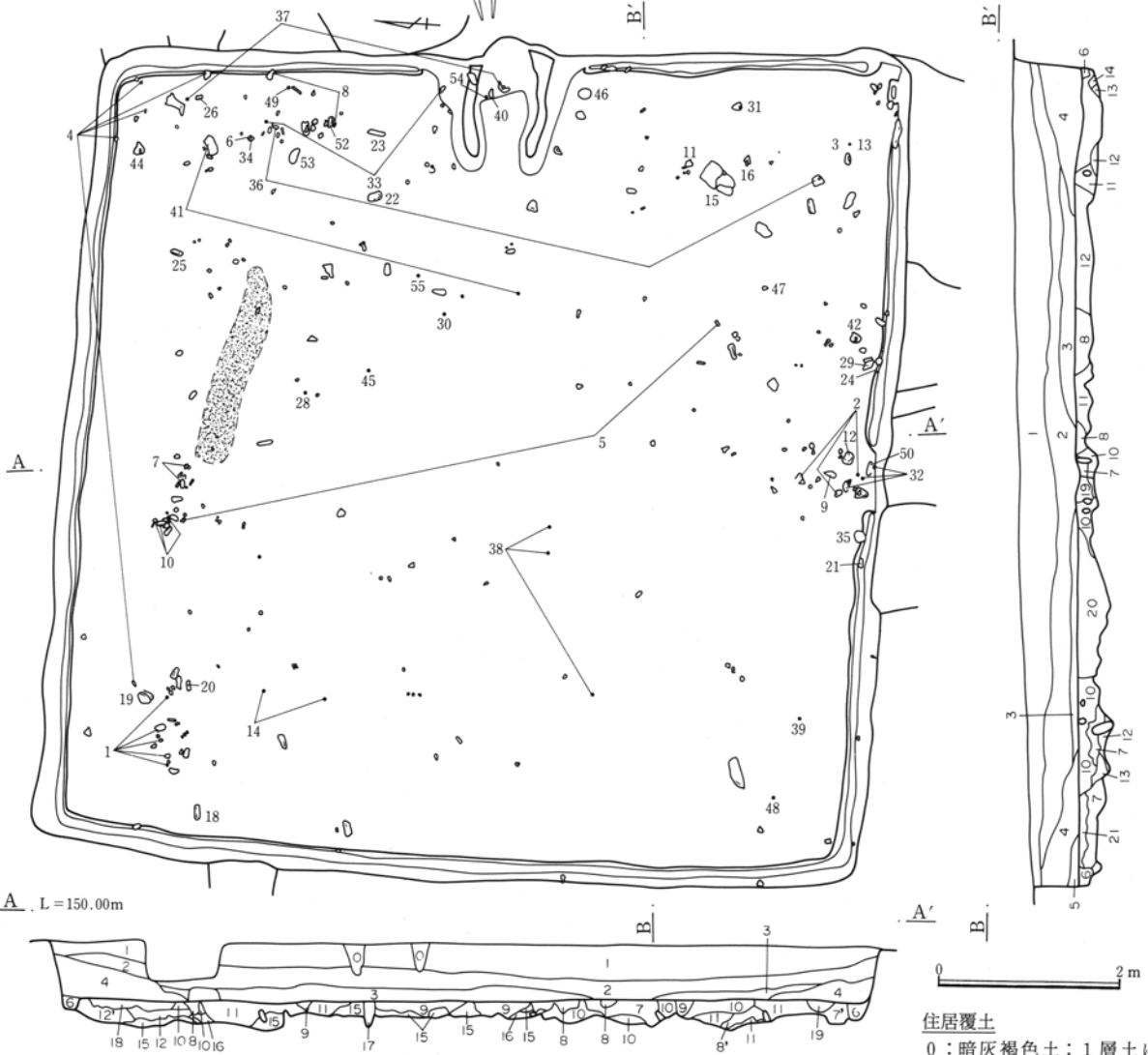
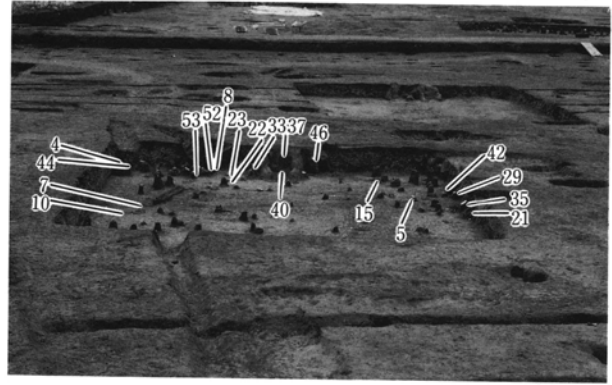
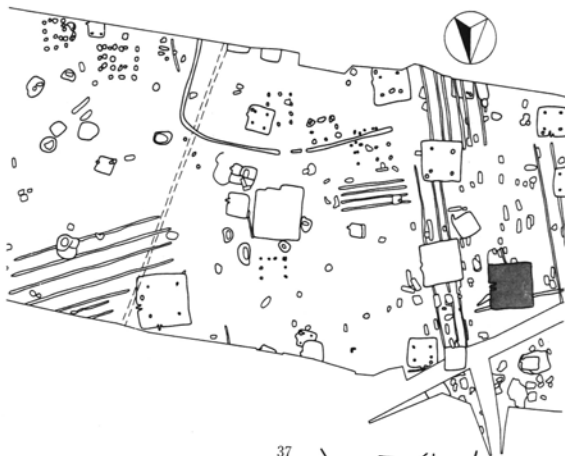
第358図 H-141号住居掘り方及び出土遺物

床面には15基程のピットがあるが、主柱穴は柱穴1～4としたもので、何れも径は大きくないものもしっかり掘り込まれる。しかし調査当初の掘削が不十分で、特に柱穴1・4は断面図作成段階では柱痕部分を掘削していたに過ぎなかった。従って柱材の径は20cm程と想定される。貯蔵穴は攪乱で一部壊されるが、カマド右側の南東コーナーに掘削され、蓋等の存在を窺わせるように隅丸方形のプランで床面より8cm程掘削し、その中央を径48×45cm、深さ59cmの柱穴様に掘削する2段構造を有する。また本住居の南壁際中央部には、径13～35cm、深さ6～20cmを測る小ピット3基を伴う幅128cm、奥行き67cm、高さ5cmを測る台形状の盛土部分が見られたが、これは入り口構造に伴うものと考えられ、左右の小ピットは梯子等の構造物の設置された痕跡と想定される。

等が入っていたが、上位部分を除き本住居は余り影響を受けずに済んでいる。

本住居の出土遺物は比較的多かったが、このうち本住居に伴うと判断されたものは6世紀後半期から

第3章 発見された遺構と遺物



7世紀前半期にかけての特徴を示すもので、土師器の坏(1~13)・高坏(14)・甕(15)と須恵器の蓋(16)、他に土製小玉(17)やこも編み石(18~26)が見られた。

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕片を

3：暗褐色土主体。 4・5・6：暗黄褐色土主体。
 住居掘り方覆土（以下ローム漸移層土は「漸移層土」とする）
 7・7'・20：黄褐色土：ロームと漸移層土主体。 8・8'・14：暗
 オリーブ褐色土／9：オリーブ褐色土／18：黒褐色土：漸移層土主
 体。 10：明黄褐色土／11・19：黄色土／15：にぶい黄褐色土／17・
 21：オリーブ褐色土／12・12'・13・16：黄橙色土／：ローム主体。

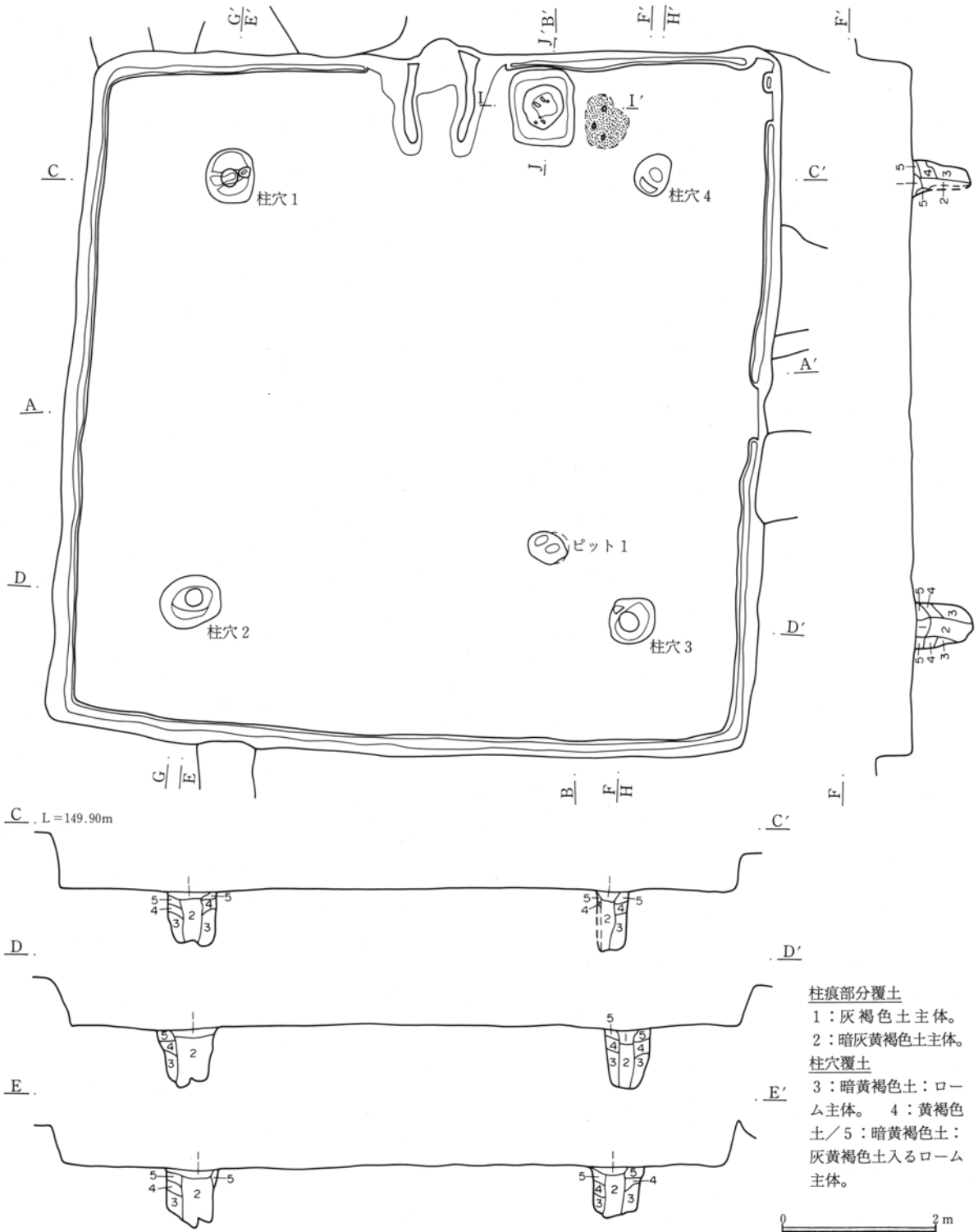
第359図 H-142号住居

第6節 D区の遺構と遺物

中心に磨石 (27~29)、凹石 (30)、本住居に伴うの
と同時期の土師器の坏 (31~36)・高坏 (37)・碗 (39,
40)・甕 (43,45)・胴張甕 (41)、須恵器の蓋 (46)
や高坏(47)、10世紀前半期のもと思われる須恵器

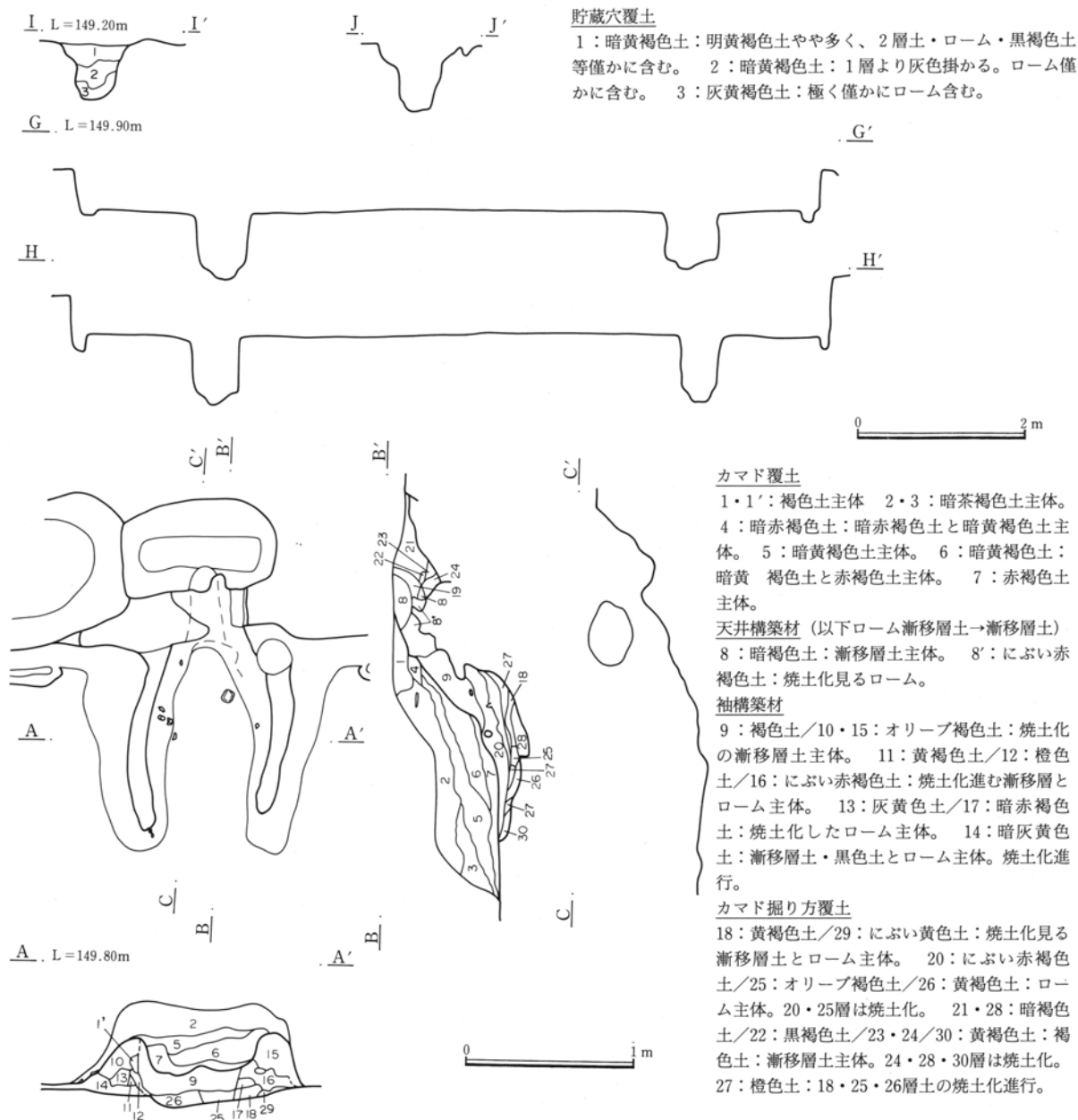
皿 (38) の他、土錘 (48) やこも編み石 (42,48~53)
や台石 (54,55) が見られた。

これらの出土遺物の所見から、本住居は概ね西暦
600年を前後する時期の所産と考えられ、覆土中の遺



第360図 H-142号住居遺構

第3章 発見された遺構と遺物



第361図 H-142号住居遺構

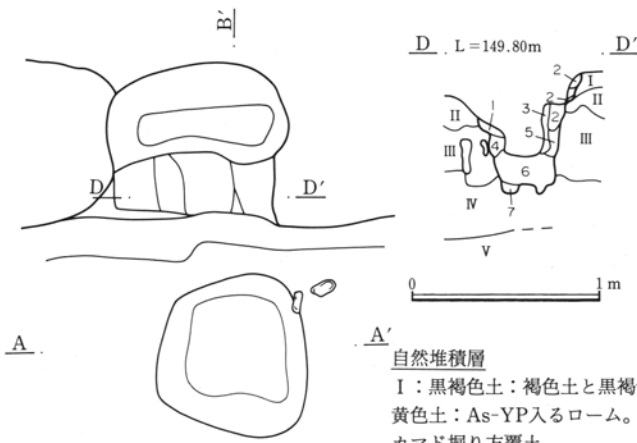
物から住居廃絶後早い段階に遺物の投棄が行われ、少なくとも平安期頃まではその痕跡を留めていたことが窺われるのである。

規模 長軸：913cm 短軸：913cm 深さ：64cm
カマド 幅：153cm 奥行き：171cm 左袖 幅：53cm 長さ：123cm 高さ：52cm 右袖 幅：56cm 長さ：128cm 高さ：55cm 燃焼部 径：52×121cm 煙道 幅：28cm 長さ：48cm 掘り方 径：80×87cm 深さ：9cm

柱穴1 径：71×62cm 深さ：71cm 柱穴2 径：80×62cm 深さ：77cm 柱穴3 径：62×59cm 深さ：79cm 柱穴4 径：55×42cm 深さ：78cm
 貯蔵穴 外側径：98×80cm 内側径：54×51cm 深さ：82cm ピット1 径：51×39cm 深さ：34cm
 周溝 幅：8～16cm 深さ：7～14cm
 床下土坑1 径：137×118cm 深さ：10cm
 床下土坑2 径：92×68cm 深さ：19cm
構造 本住居は方形のプランを呈する。
 掘り方を有し、掘り方には凹凸はあるが東半部と南壁西部の壁際に幅100～161cm、深さ10cm以下の、

第6節 D区の遺構と遺物

また西半部には壁から64~210cmの位置に幅50~186cm、深さ15cm以下の周溝状の掘り込みが掘削されている。その他、深さ10cm程を測る幾つかの掘り込みも見られたが不整形なものが多く、形態的に整っているものは、北東部に見られた床下土坑1・2程度であった。床面はロームやローム漸移層土等で埋め戻して造られている。

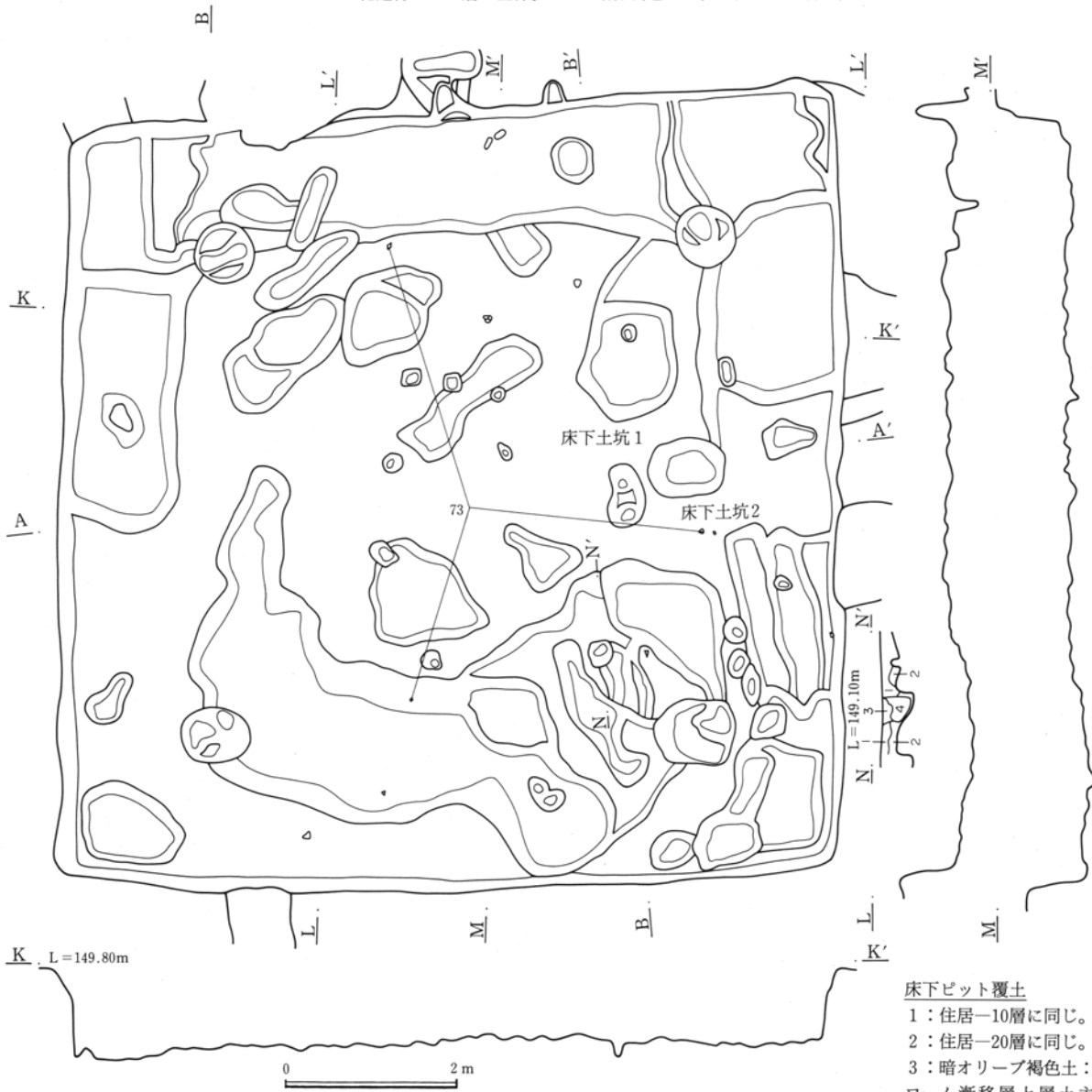


自然堆積層

I：黒褐色土：褐色土と黒褐色土の混土。 II：黄褐色土：As-YPにIII層土入る。 III：にぶい黄色土：As-YP入るローム。 IV：黄色土：As-BP巻き込むローム。 V：オリーブ褐色ローム。

カマド掘り方覆土

1：にぶい赤褐色土：焼土化進むII・III層土。 2：にぶい黄褐色土：II層土にI層土入る。 3：赤褐色土：焼土主体。 4：明赤褐色土：III層土の焼土主体。 5：にぶい赤褐色土：焼土化進行したIII層土主体。 6：暗赤褐色土：焼土化したV層土。 7：オリーブ褐色土：V層土。

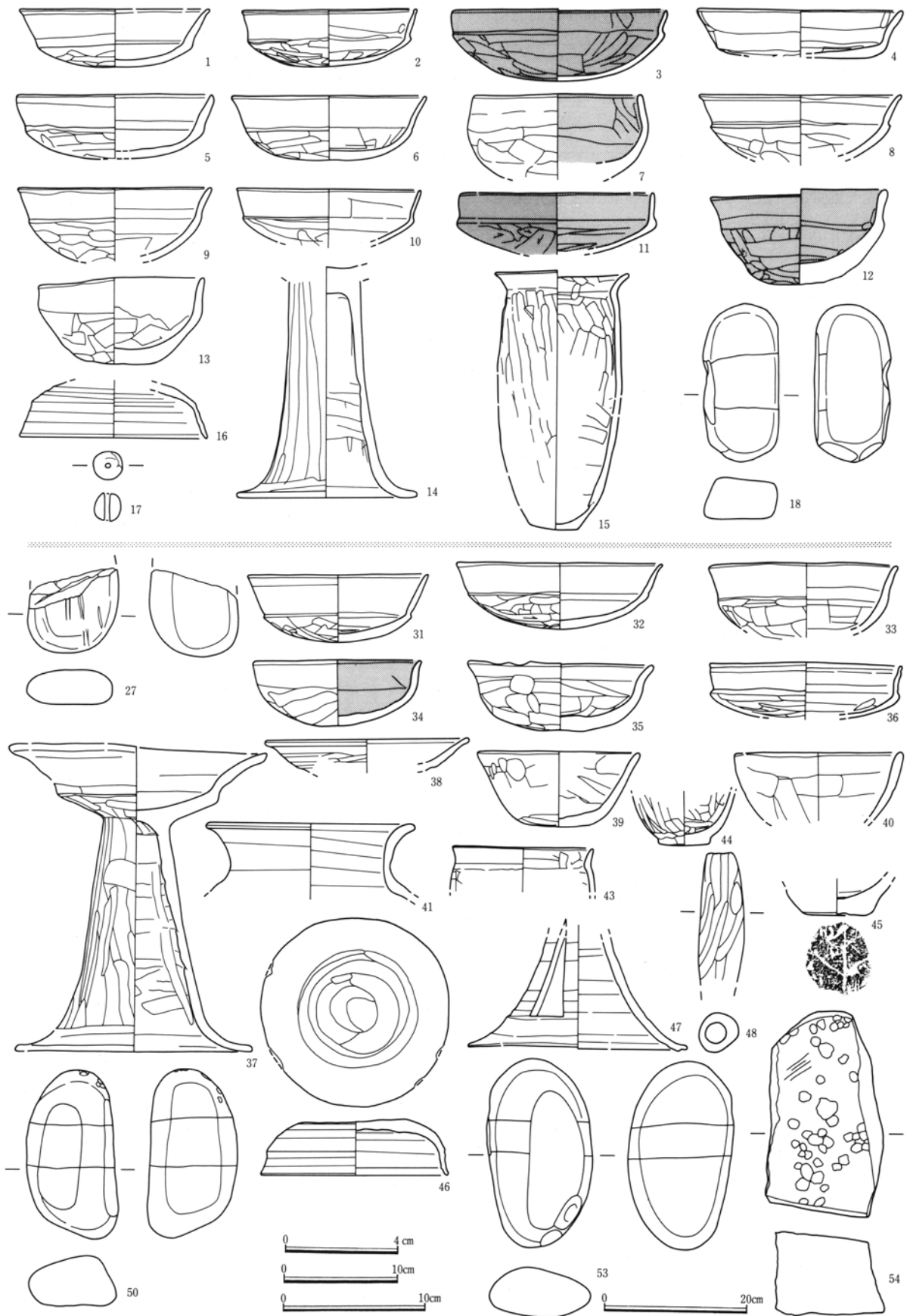


床下ピット覆土

1：住居-10層に同じ。
2：住居-20層に同じ。
3：暗オリーブ褐色土：ローム漸移層上層土主体。
4：黒色土主体。

第362図 H-142号住居掘り方

第3章 発見された遺構と遺物

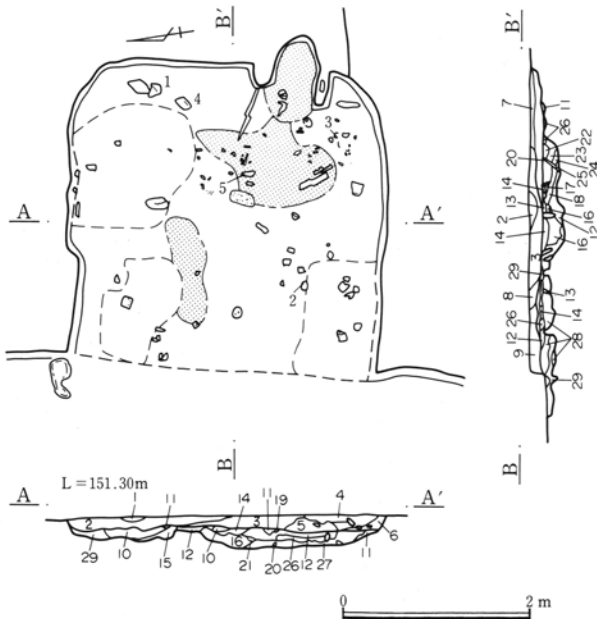
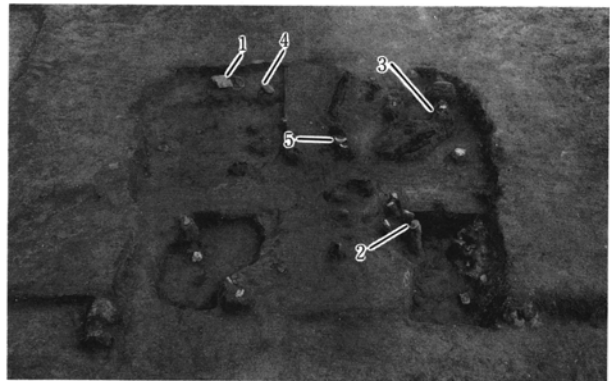
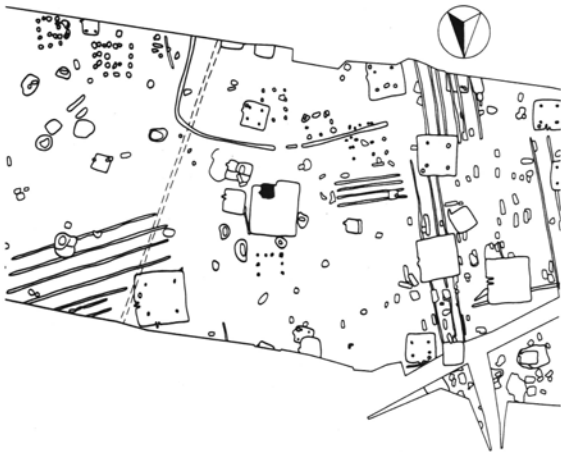


第363図 H-142号住居出土遺物

カマドは東カマドで東壁中央に造られる大きなものである。カマドは壁面から離れた位置に隅丸方形様のプランを呈した浅い掘り方を有し、これをロームやローム漸移層土で埋め戻して燃焼面を造っている。燃焼部は東壁の手前側に設定され、その両側に僅かに内湾する平行な位置で袖が造られる。袖は袖材は用いずに焼土を含むロームやローム漸移層土で造り上げている。また、同様の土壌で天井部分も造られていたようである。煙道は燃焼面より40cm程高い位置に44cm水平に近い傾斜で掘削されており、直角に上げられるものと思慮される。

床面に於いては支柱穴4基と貯蔵穴1基、及びピット1基を確認している。このうち支柱穴は何れも径

は大きくしっかりした掘り込みを示している。柱材の径は断面と底面の所見から20cm以上、恐らくは30~40cmを測る太いものであったのではないかと想定される。一方、貯蔵穴はカマドの直ぐ右側に設けられているが上下二段からなる構造を呈している。このうち上段の部分は隅丸方形のプランに床面より15cm程掘削される土坑様の形態を示し、下段のものはそこから更に70cm程掘り下げていた柱穴様の形態を示しているが、上段構造については蓋等の存在のあったことを想定している。また、柱穴3の北東に近接してピット1が見られたが、性格等は確認されなかった。尚、カマド部分と南東端と中程の一部を除く壁際に幅狭の周溝が廻っている。



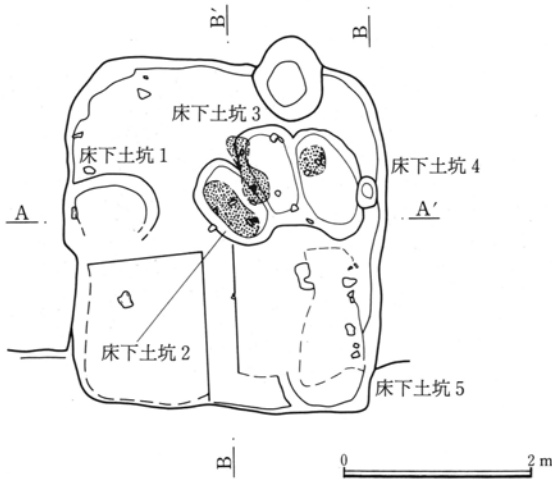
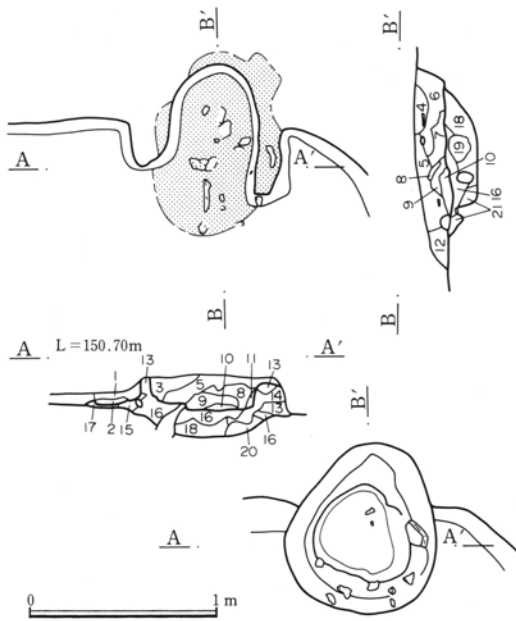
住居(カマド)覆土

1：明茶褐色土：ローム漸移層土（以下「漸移層土」）。焼土南半に多し。 2：茶褐色土：漸移層土に焼土・炭化物等含む。 3・4：暗茶褐色土：上層中心のロームに焼土・炭化物等含む。 5：明褐色土：弱い焼土化見る下層中心の漸移層土主体。焼土等やや多し。 6：暗褐色土：黒色土に近い漸移層上層土主体。 7：明茶褐色土／8：茶褐色土：弱い焼土化見る下層中心の漸移層土主体。7層はカマド覆土。 9：明茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。

掘り方覆土

10：暗茶褐色土：上層中心の漸移層土主体。 11：明黄褐色土：ローム主体。床面部分良く締まる。 12・17：明褐色土／14・18：明茶褐色土／22：灰褐色土：焼土化見る下層中心の漸移層土主体。 13：明褐色土：やや焼土化見るロームに近い下層中心の漸移層土に焼土・ロームやや多く混入。 15：茶褐色土：漸移層土主体。 16：明茶褐色土：焼土化見る上層中心の漸移層土主体。 19：褐色土／26：明褐色土／27：茶褐色土：焼土化見る漸移層土主体。 20・21：乳白色シルト主体。焼土等含む。 23：暗褐色土：上層土主体。24：明橙褐色土：焼土化進んだロームまたはローム近似の土壌主体。 25：乳白色シルト主体。焼土化進行し。 28：明茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。ロームとAs-YPやや多く含む。 29：暗褐色土：黒色土に近いもの中心の漸移層土主体。

第364図 H-143号住居



第365図 H-143号住居遺構及び出土遺物

住居覆土

1：暗茶褐色土：ローム漸移層土（以下「漸移層土」）主体。

住居貼り床

2：明褐色土：漸移層下層土に漸移層上層土入る混土主体。

カマド覆土

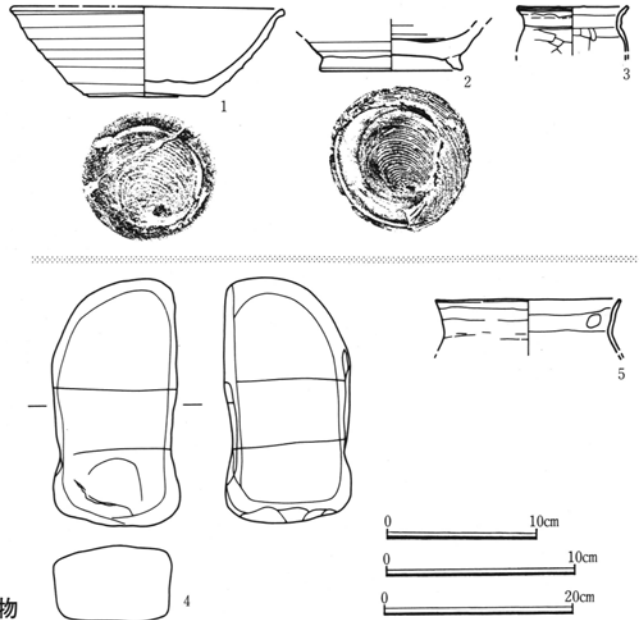
3：茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。部分的に焼土化。 4：橙褐色土：焼土化進んだ下層中心の漸移層土主体。焼土やや多く混入。 5：暗茶褐色土：焼土化見せる上層中心の漸移層土主体。 6：暗橙褐色土：焼土化進んだ上層中心の漸移層土主体。焼土やや多く混入。 7：暗褐色土：弱い焼土化見せる漸移層上層土主体。 8・11：暗褐色土：焼土化見せる漸移層土主体。 9：明褐色土：焼土化見せる漸移層下層土主体。 10：暗橙褐色土：焼土化進んだ下層中心の漸移層土主体。 12：淡茶褐色土：漸移層土主体。下層土中心に焼土化。

袖構築材

13：明茶褐色土：弱い焼土化見せる漸移層土主体。 14：明茶褐色土：やや下層の割合の多い漸移層土主体。焼土化は18層より進行。 15：明褐色土：部分的に弱い焼土化見せる下層中心の漸移層土主体。 16：明褐色土：焼土化見せるロームに近いローム漸移層土主体。

カマド掘り方覆土

17：茶褐色土：焼土化見せる漸移層土主体。 18：茶褐色土：焼土化見せる漸移層土主体。 19：暗赤褐色土：18層土の焼土化進行したもの。 20：暗茶褐色土：上層中心の漸移層土主体。 21：暗茶褐色土：20層土に焼土多く混入。



H-143号住居（平安時代、第364図～第365図、図版131・155・165）

概要 本住居はD区中央部に所在する小型の竪穴住居跡である。

本住居はH-147号住居の南東に切り合い関係にあるが、本住居の方が新しい。本住居の西部はH-147号住居との関係で床面までは掘削してしまっていた。また、床面の検出が難しかったため、1/3程を掘り過ぎてしまっている。

本住居の出土遺物のうち本住居に伴う遺物には9世紀後半期の特徴を示す須恵器高台付碗(1,2)と土師器台付甕(3)がある。

一方、覆土中からは本住居に伴うものと同時期の土師器甕片(5他)を中心にこも編み石(4,6)や磨石(7)が見られた。

これらの遺物の状況から本住居は9世紀後半期の所産と判断され、住居廃棄後の早い段階から遺物の投棄の行われたことが窺われる。

本住居は所謂焼失家屋であり、幾つかの炭化材が見られ、床面に広く焼土化が見られた。炭化材については判定できるものは垂木材と判断され、クリ材を主体とするという鑑定所見を得ている。

また、床下粘土坑と思われる土坑が3基確認されたことから、2回以上に亘ってカマドの造り替えのあったことが想定される。

規模 長軸：370cm 短軸：340cm 深さ：18cm
カマド 幅：90cm 奥行：73cm 左袖 幅：30cm 長さ：残存27cm 高さ：12cm 右袖 幅：22cm 長さ：43cm 高さ：11cm 燃烧部 径：44×67cm カマド掘り方 径：80×92cm 深さ：14cm
 床下土坑1 径：98×残存76cm 深さ：5cm
 床下土坑2 径：101×61cm以上 深さ：19cm
 床下土坑3 径：108×65cm以上 深さ：10cm
 床下土坑4 径：125×64cm以上 深さ：10cm
 床下土坑5 径：94×115cm以上 深さ：10cm

構造 本住居は隅丸方形のプランを呈している。

本住居は掘り方を有する。掘り方は全体としては特段の構造等は認められなかったのであるが、掘り方面には5基の土坑が見られた。このうち床下土坑2・3・4は床下粘土坑と判断され、乳白色シルトや焼土を含む土壌の堆積が、床下土坑2・4では豎面への粘土の分布が見られた。床はこのような構造を持つ掘り方を黒色土や褐色系の土壌で埋め戻して

H-144号住居（平安時代、第366図、図版131・155）

概要 本住居はD区中部の北端近くに所在する小型の竪穴住居跡である。

本住居は北西部分でH-145号住居と接してこれを切るが、恐らくは住居の掘り込みも浅く、且つ削平が多かったため遺存状況は極めて悪く、僅かに掘り方の底面近くを調査できたに過ぎなかった。

本住居の出土遺物のほとんどは掘り方からの出土ということになるが、平安時代頃の土師器・須恵器片を中心とした遺物の出土を見ている。この中には9世紀後半期の特徴を示す須恵器の碗(1)や高台付碗(4,5)、コの字状口縁の土師器甕(3)、そして須恵器高台付碗(2)などを見ることができた。

このように9世紀後半期と思われる土器群を掘り方に持つことから、本住居はそれ以降の所産として把握し得るのである。

て造っている。

カマドは東カマドで、東壁の南寄りに造られている。浅い水滴様のプランの掘り方を有し、焼土を含む暗黒褐色土等で埋め戻して燃烧面を造っている。燃烧部は東壁を跨ぐような位置に設定され、手前側両側に焼土を含む暗黒褐色土で袖を造り上げている。尚、天井或いは煙道については明らかにすることはできなかった。

床面は上述のように掘りすぎてしまったので全体の2/3程を確認できたに過ぎなかったが、柱穴・貯蔵穴等を認めることはできなかった。掘り方面に於いても確認することはできなかった。

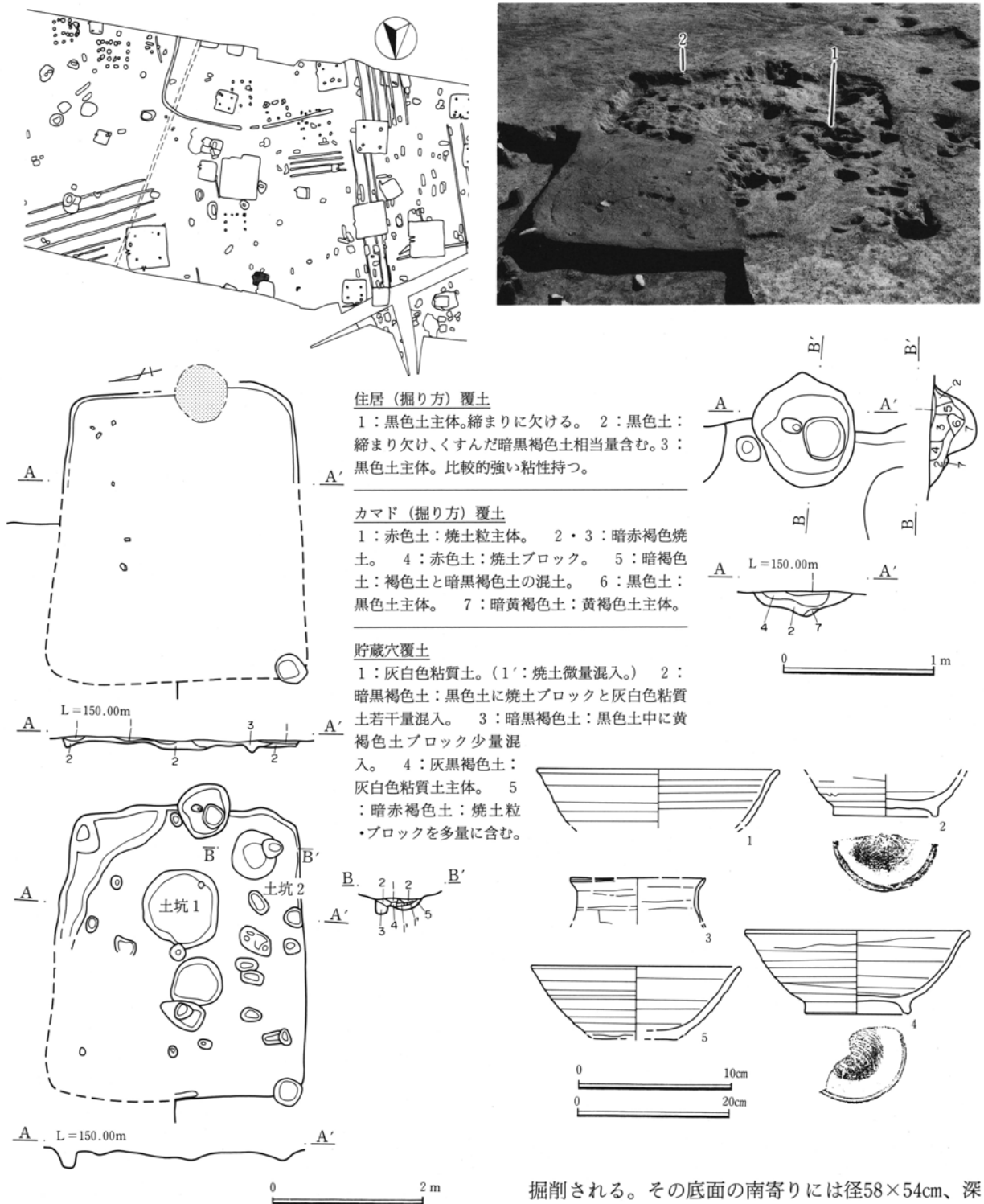
炭化材の出土状況から本住居は土葺き屋根を施していたものと思われる。その範囲については特定できなかったが、梁・桁材の落下想定位置の床面に焼土化が見られ、梁・桁材が燃烧仕切っていると判断されることから、概ね梁・桁材位置までは土葺きが施されていたものと判断される。また、柱穴を持たず柱材に想定される炭化材が見られなかったことから、本住居は柱材を持たない構造の竪穴住居であったものと認識される。

規模 長軸：388cm 短軸：推定239cm

カマド 掘り方 径：66×75cm 深さ：29cm
 土坑1 長径：104cm 短径：103cm 深さ：11cm
 土坑2 長径：64cm 短径：64cm 深さ：13cm

構造 上述のように本住居の遺存状況は極めて悪く、その構造に関する所見は僅かであったが、本住居のプランはやや方形に近い隅丸の台形を呈する。

本住居は掘り方を持ち、掘り方の北東隅から北壁付近にかけては幅19～43cm、深さ7cm以下を測る周溝状の掘り込みが認められる。また、住居中央やや東寄りにはやや崩れた円形プランを呈する浅い掘り込みの床下土坑(土坑1)が掘削されている。これ以外にも幾つかの土坑・ピットが見られたが、後述する土坑2を除き特段の用途等は想定されなかった。床はこうした構造を持つ掘り方を黒色土等で埋め戻



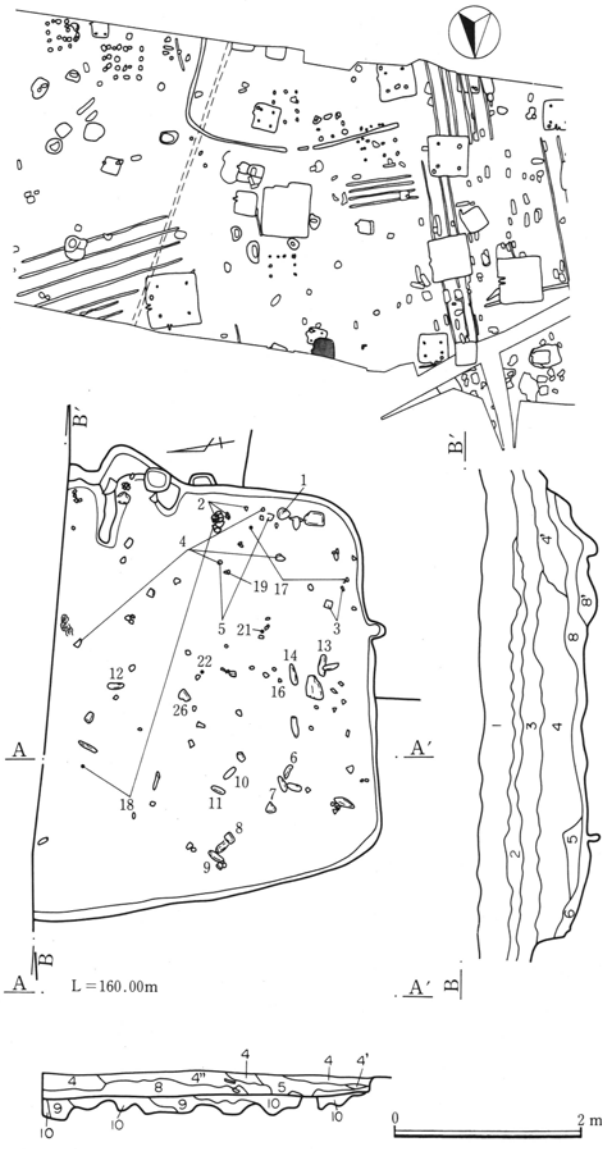
第366図 H-144号住居及び出土遺物

した上に造られるようである。

カマドは東カマドで東壁の中央やや南寄りに設けられている。燃焼部は東壁を跨いで設定されるようで、この位置に円形プランを呈するカマド掘り方が

掘削される。その底面の南寄りには径58×54cm、深さ23cmを測る隅丸方形プランの掘り込みが掘削される。尚、燃焼面はこのカマド掘り方を焼土等で埋め戻して造られている。

尚、本住居に於いては柱穴を確認することはできなかったが、南東コーナーに貯蔵穴と思われる掘り込みを確認している。

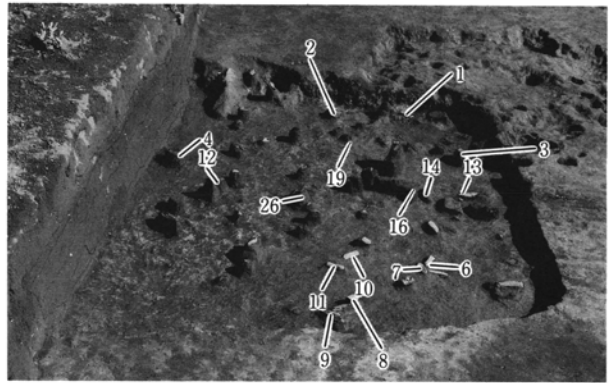


H-145号住居（古墳時代後期、第367図～第369図、
図版132・155～156・165）

概要 本住居はD区中部の北端に所在する、D区に於いては小型のものに属する竪穴住居跡である。

本住居の北部は路線外に出ているため調査することはできなかった。また、本住居の南東部の覆土を前述のH-144号住居が切っているが、本住居は余り影響を受けていない。

本住居の出土遺物のうち本住居に伴うと判断された遺物には6世紀後半から7世紀前期の所産と考えられる土師器の坏（1, 2, 3）や甕（5, 4）があり、この他、住居南西部に拡散気味に見られたこも編み



耕作土

1：灰褐色土：As-A多量に含みサラサラしている。 2：黒色土：最も黒味強い。As-Aの混入少なく、1層に比し強い粘性を持つ。

住居覆土

3：暗黒褐色土：白色粒子を少量含んで締まりを持つ。 4：暗黒褐色土：3層より多量の白色粒子を含む。微量の炭化物も確認される。（4'：カマドに関連すると思われる焼土粒少量見られる。4''：全体的色調が4層よりも明るい感を持つ。） 5：黒褐色土：微小の白色粒子とやや大きめの褐色土を相当量含む。 6：暗黒褐色土：成分は5層と同じ乍ら、全体色調は褐色を呈す。

住居掘り方覆土

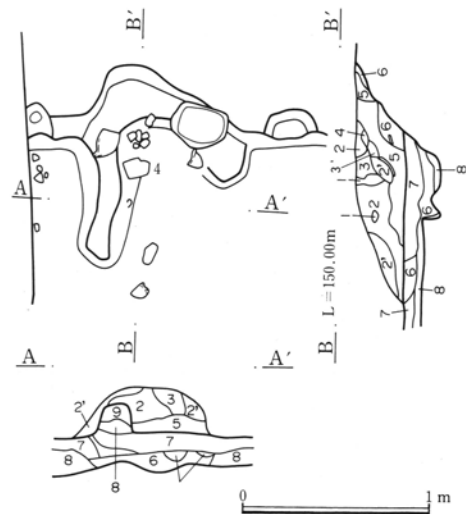
8：黒色土：5・6層で確認された白色・褐色粒子見ない。炭化物の混入顕著。（8'：炭化物と焼土が少量混入。） 9：暗黒褐色土：黒色土主体土に褐色土少量混入する。 10：暗黒褐色土：暗褐色土主体土に黒色土が少量混入する。

カマド覆土

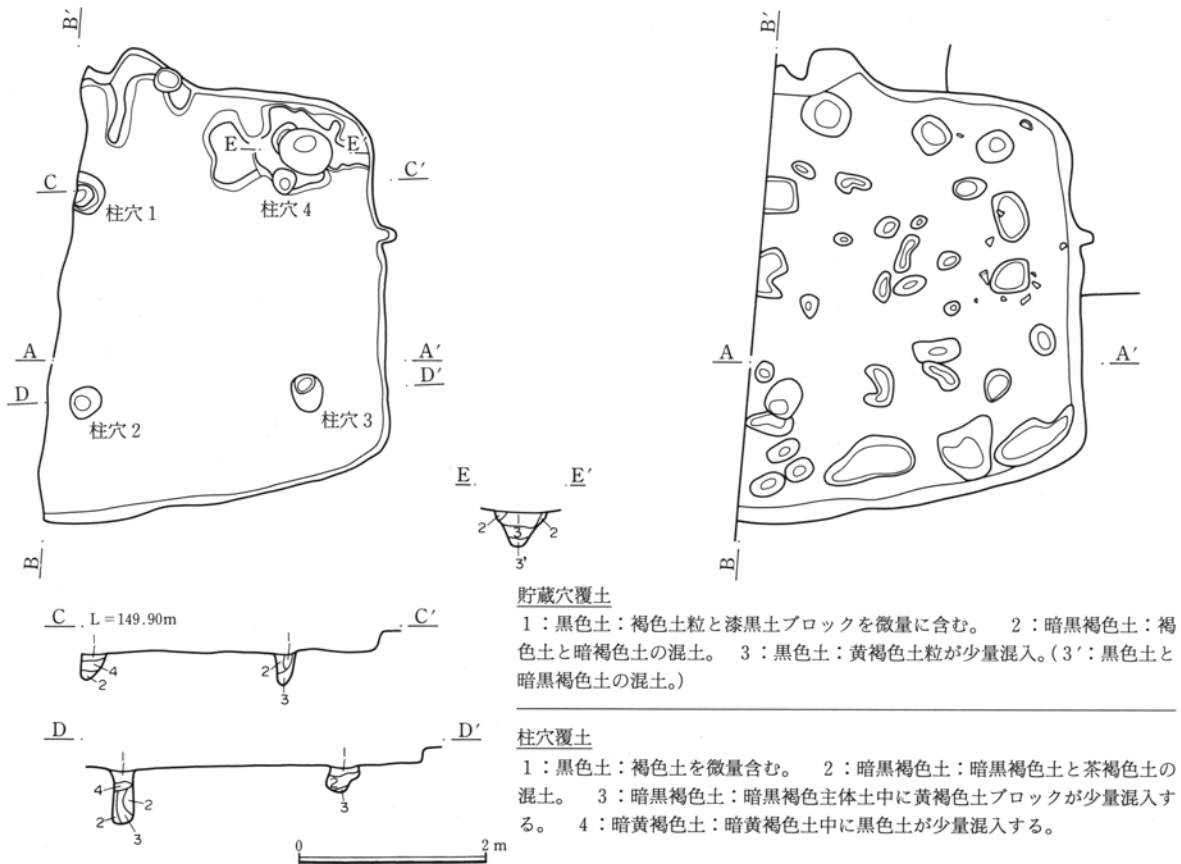
1：黒色土：漆黒土。 2：暗褐色土：くすんだ褐色土ブロック少量混入。（2'：焼土微量混入。） 3：暗黄褐色土：くすんだ黄褐色土中に明黄褐色土がブロックで微量混入。（3'：明褐色土は粒子で相当量混入。） 4：黄褐色土ブロック。 5：暗赤黒褐色土：焼土ブロックと炭化物多量に含む。 6：暗赤黒褐色土：全体の色調は5層よりも黒く、焼土ブロックは確認され炭化物見られない。

袖構築材・カマド掘り方・住居掘り方覆土

7：暗赤黒褐色土：締まり弱く、焼土ブロックと焼土粒を微量含む。 8：暗黄褐色土：褐色土と黒色土の混土。 9：暗褐色土：暗褐色土と褐色土と灰褐色粘質土の混土。焼土を少量含む。



第367図 H-145号住居及びカマド



第368図 H-145号住居遺構

石(6~14)が見られた。

一方、覆土中からは土師器甕片を中心に7世紀代の土師器の坏(18、17、15、16)や壺(20)、古墳時代後期の須恵器の坏若しくは蓋(19)、9世紀後半期の特徴を示す須恵器高台付碗(21)やこも編み石(22)などが見られた。

以上の点から本住居は概ね西暦600年を前後する時期の所産と判断され、少なくとも平安時代頃までは窪地としてその痕跡を留めていたことが窺われる。

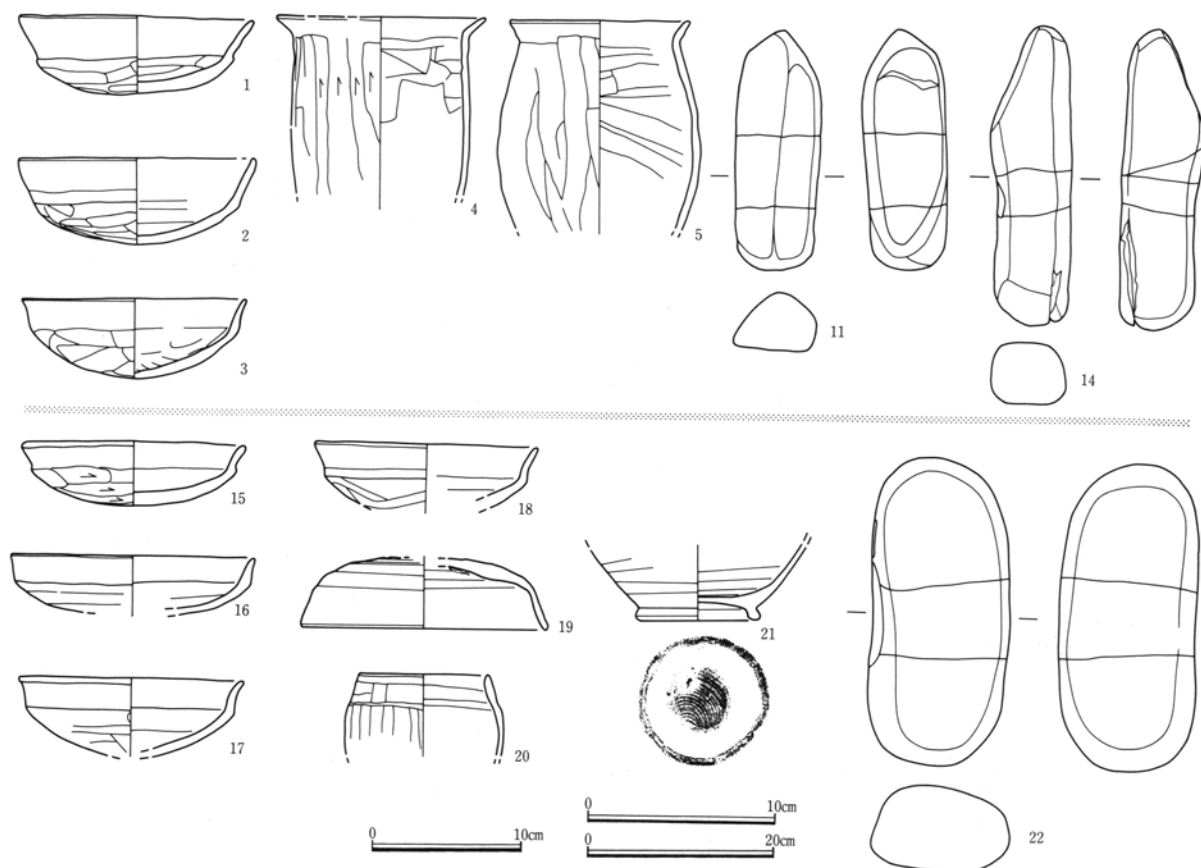
規模 長軸：283cm以上 短軸：279cm 深さ：20cm
 カマド 幅：103cm 奥行き：95cm 左袖 幅：33cm 長さ：81cm 高さ：17cm 右袖 幅：30cm 長さ：30cm 高さ：10cm 燃烧部 径：50×52cm 以上 深さ：1cm 煙道 幅：38cm 長さ：30cm
 柱穴1 径：42×34cm以上 深さ：36cm 柱穴2 径：35×32cm 深さ：46cm 柱穴3 径：38×34cm 深さ：57cm 柱穴4 径：25×24cm 深さ：36cm 貯蔵穴 径：57×48cm 深さ：64cm

構造 本住居のプランは隅丸方形を呈する。

掘り方を有し掘り方面には凹凸が見られたが、特段の構造や規則性は見出せなかった。床面はこのような掘り方を黒色土等で埋め戻して造っている。

カマドは東カマドで、東壁の恐らくやや北寄りに設置される。浅い掘り方を有し、黒色系の土壤等で埋め戻して燃烧面を造っている。燃烧部は東壁の手前側に設定され、両側に灰褐色粘質土等でハの字状プランに袖を造る。煙道は燃烧面より20cm程の高さで東壁を20数cm程掘削してから、垂直に上げるようである。尚、右袖は短過ぎ、壊されたようである。

床面に於いては支柱穴4基と貯蔵穴1基を確認した。このうち柱穴は何れもさほど大きなものではなかったが、断面等から柱材の径は10数cm程であったろうと推定される。貯蔵穴は摺鉢状の形態でカマド右側の南東コーナー付近に掘削されるが、周囲は不定形プランに床面より7m以下の深さで掘り窪められ、上下2段の構造であった可能性が考えられる。



第369図 H-145号住居出土遺物

H-146号住居（平安時代頃か、第370図、図版132・156）

概要 本住居はD区中部の北端に所在する、小型の
 竪穴住居跡である。

可能な限り拡張に勤めたが、本住居はその過半が
 路線外に出てしまっており、調査することができな
 かった。また、削平が著しく床面をかるうじて確認
 できたに過ぎなかった。

本住居の出土遺物は奈良・平安期の土師器甕片を
 中心に掘り方からは9世紀後半期のもと思われる
 土師器甕(1)や須恵器高台付碗(2)、10世紀前半期
 のものと思われる須恵器碗(3)などの出土が見られ
 たが、これらの中に本住居に伴うと判断された遺物
 は特定できなかった。

従って、本住居の時期を出土遺物から特定するこ
 とはできなかったのであるが、覆土中に9世紀後半
 期の所産と考えられる遺物が含まれることから、本
 住居はそれ以降の所産と判断される。

また床面に於いては焼土面を確認しており、本住

居が焼失家屋であった可能性が考慮される。

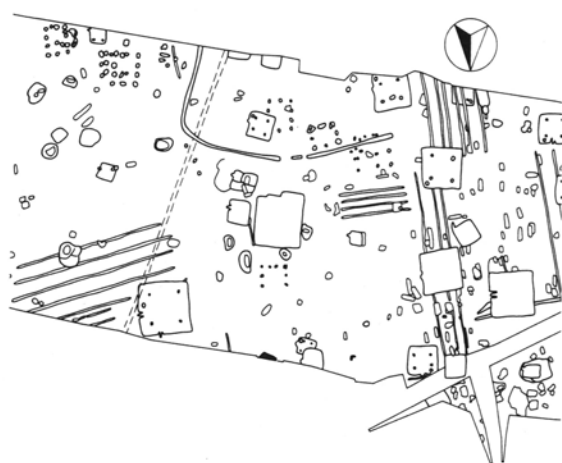
規模 長軸：289cm 短軸：157cm以上 深さ：0 cm

構造 上述のように本住居はその過半の部分を調査
 することができなかったために、その全体的構造を
 把握することはできなかったが、以下のような若干
 の所見を得ることができた。

本住居のプランは方形若しくは隅丸方形を呈して
 いたものと想定される。

本住居は掘り方を有し、掘り方面には幾つかの凹
 凸が認識されているが特段の構造や規則性としてこ
 れらを把握することはできなかった。床はこうした
 掘り方を暗黒褐色土やローム等の土壌で埋め戻して
 造り出している。

カマドは東カマドであるが、明確な遺構は確認で
 きず、規模や構造は明らかにできなかった。また、
 柱穴や貯蔵穴などの構造物は床面に於いても掘り方
 面に於いても認識することはできなかった。



住居覆土

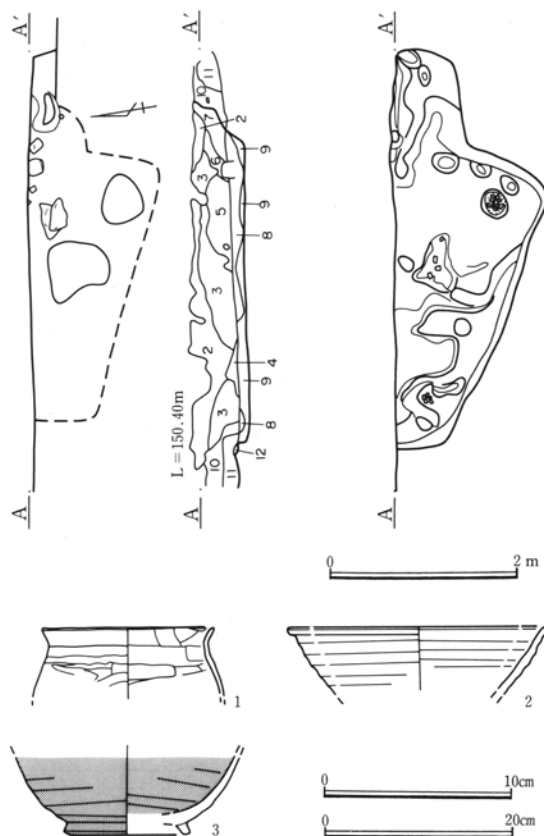
2：暗黒褐色土：淡褐色土粒と炭化物少量含む。 3：黒色土：白色微粒子と焼土微量。締まりに欠ける。 4：暗褐色土：暗褐色土とくすんだ褐色土の混土。白色土粒と焼土微量。 5：暗褐色土：淡褐色土ブロックと焼土を若干含む。 6：暗黒褐色土：焼土が比較的多量に含まれる。

掘り方覆土

7：暗褐色土：焼土ブロックと淡褐色土ブロックを主として含む。 8：暗褐色土：暗黒褐色土中にロームブロックを多量に含む。 9：暗褐色土：暗黒褐色土中に含まれるロームブロック更に大きくなる。

地山層

10：黒色土：白色微粒子を少量含む。3層に比し締まり更に弱くなる。 11：暗黒褐色土：暗黒褐色土と固く締まる黒褐色土ブロックの混土。 12：暗褐色土：ローム漸移層土。



第370図 H-146号住居及び出土遺物

H-147号住居（古墳時代後期、第371図～第376図、図版132～133・156～158・165）

概要 本住居はD区中央に位置するD区の大型の竪穴住居跡のうちの1軒である。南東部でH-143号住居と重複して、これに切られている。

本住居の出土遺物のうち本住居に伴うと判断されたものは6世紀中葉～7世紀前半期のものの特徴を示す、土師器の坏(1,2～5,6)や高坏(7,8)や小型甕(9～12)の他にも編み石(13～16)が見られた。

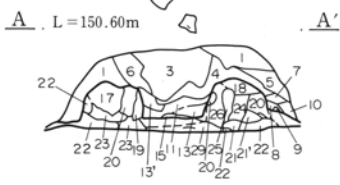
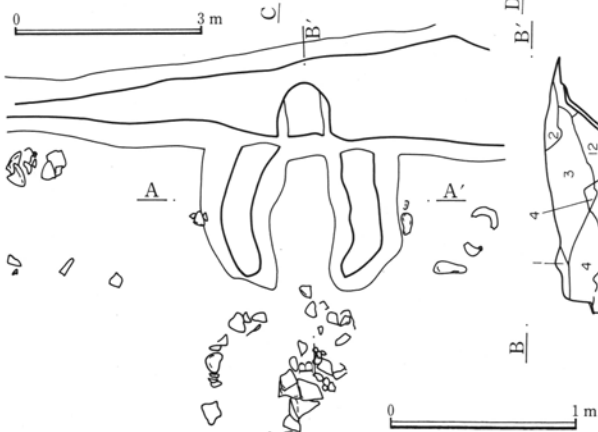
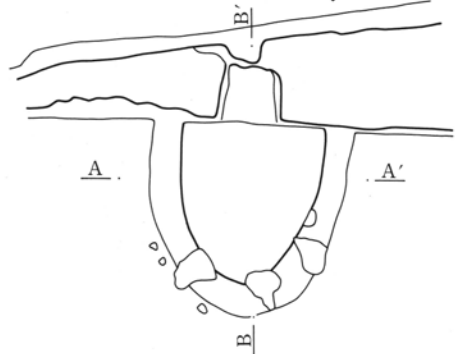
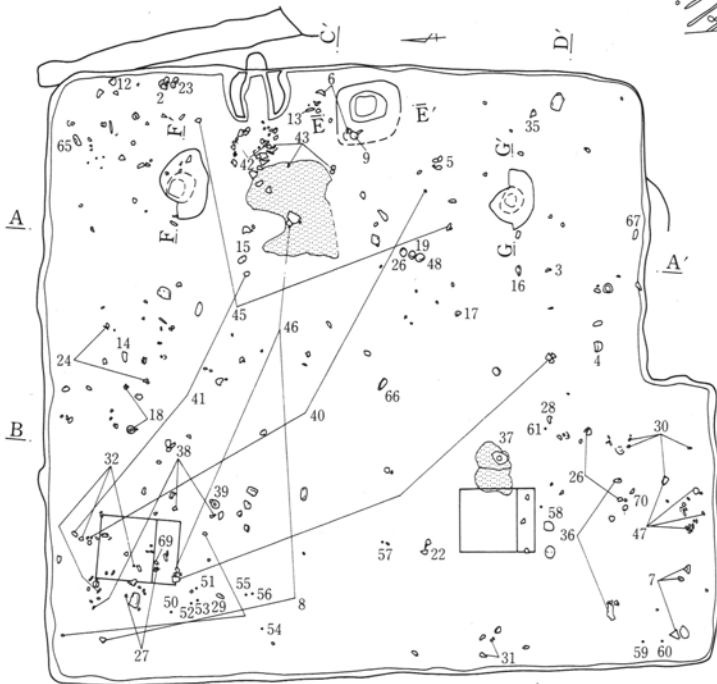
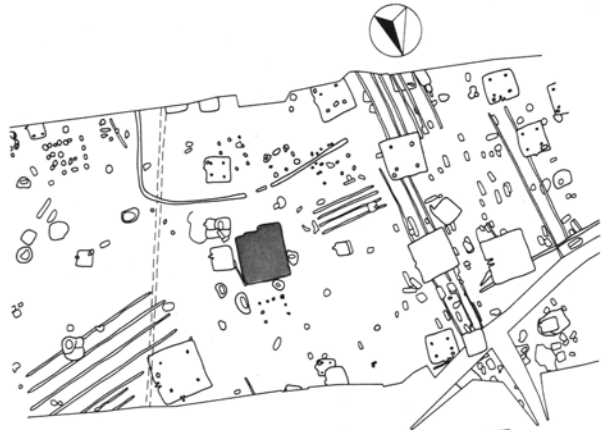
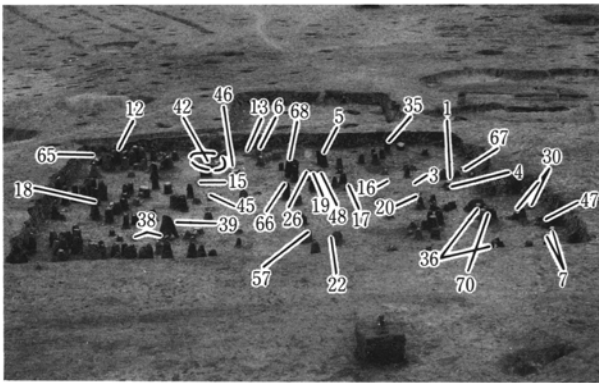
一方、覆土中からは6～7世紀代にかけての土師器の坏(17～33)・小型碗(34)・高坏(35～39)・甕(41～43)・甌(44)・胴張甕(45)・鉢(46)・長頸壺(47)や須恵器坏(48,49)が見られ、北陸系と思われる4世紀前半代の土師器器台(40)や一群の土錘(50～61)、こも編み石(62～67)、また、多孔石(68)や打製石斧(69,71)、磨石(70)など縄文時代の遺物も見られた。

これらの遺物の状況から、本住居は概ね西暦600年を前後する時期の所産と判断され、住居廃棄後早い

段階から遺物の投棄が始まり、H-143号住居の造られる9世紀後半段階までにはある程度埋没してしまっていたものと想定される。

さて、柱穴2・3については10cm毎にスライスして断面観察を行った結果、柱穴2では1回以上、柱穴3では2回程の柱穴の掘り直しのあることが確認された。これとピット2～5などの掘り方面のピットや南西の拡張といった状況を併せて、本住居には複数回の建て替えのあったことが想定される。また、北部中程の掘り方の覆土は、焼土を含むことからカマドの掘り方の可能性も考えられる。

規模 長軸：1012cm 短軸：956cm 深さ：47cm
 カマド 幅：110cm 奥行き：107cm 左袖 幅：42cm 長さ：74cm 高さ：17cm 右袖 幅：35cm 長さ：77cm 高さ：25cm 燃烧部 径：37×89cm
 カマド掘り方 径：106×102cm 深さ：5cm
 柱穴1 径：88×78cm 深さ：62cm 柱穴2



カマド覆土

- 1：明茶褐色土：ローム漸移層（以下「漸移層」）土主体。
- 2：淡赤褐色土／8：暗赤褐色土：焼土化進む漸移層土主体。
- 3：明茶褐色土／11：淡褐色土／13'：赤褐色土：弱い焼土化の漸移層土主体。
- 4：淡茶褐色土／15：暗茶褐色土／12：暗灰褐色土：焼土化見る灰色シルトと漸移層土主体。
- 5：黒褐色土：As-YP多い黒色土と4層土。
- 6：茶褐色土：焼土化見る漸移層土主体。
- 7：明褐色土：黒色土とAs-YP・ローム主体。
- 9：黒色土主体。
- 10：明黄褐色ローム主体。
- 13：赤褐色土：焼土と11層土。
- 16：淡橙褐色土：焼土化進む4層土主体。

袖構築材

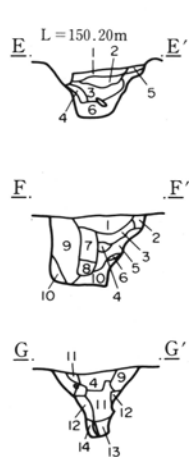
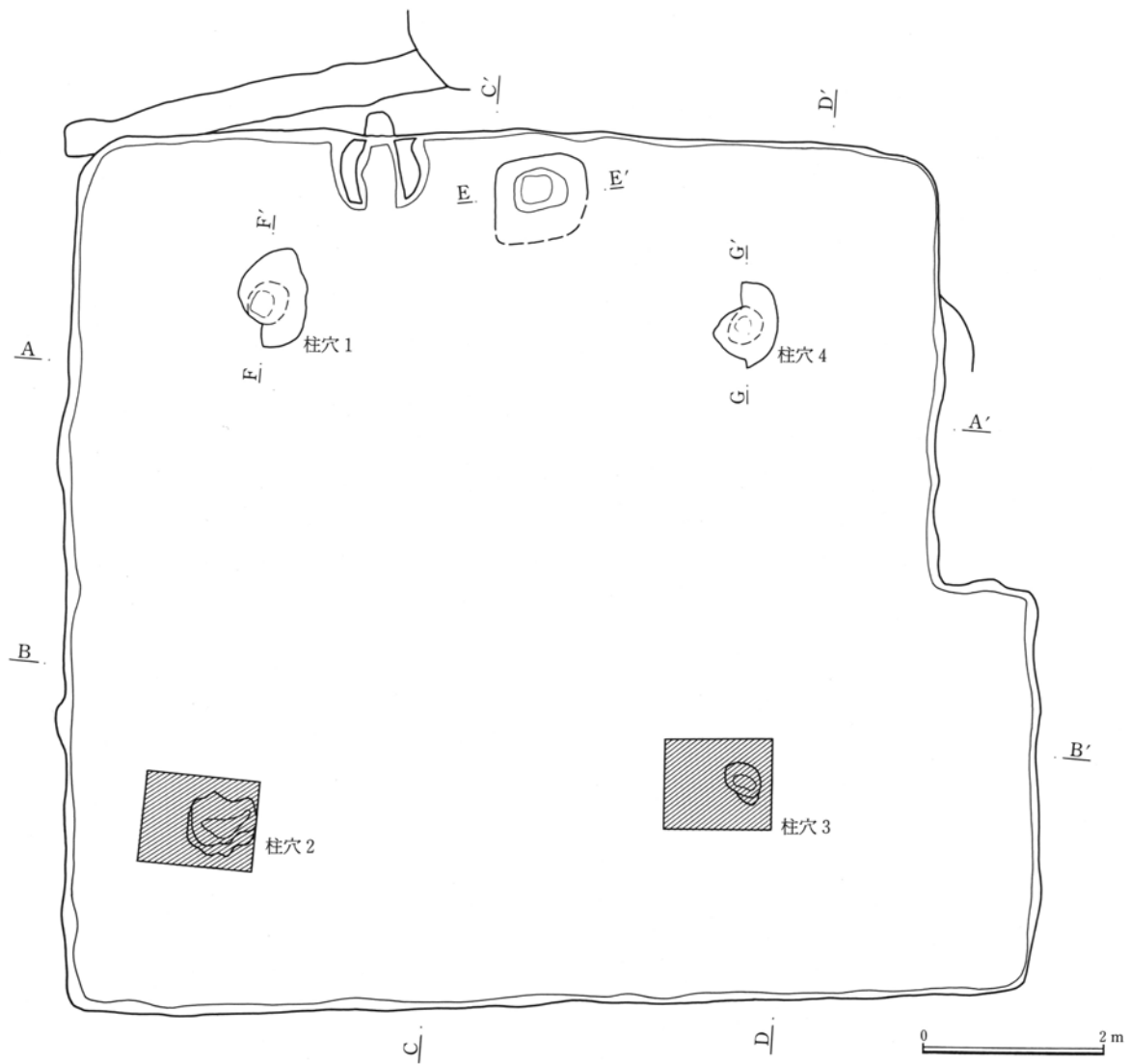
- 17：にぶい黄褐色土：弱い焼土化の漸移層土主体。
- 18・24：暗灰黄色土／26・26'：オリーブ褐色土：焼土化進むオリーブ色系ローム主体。焼土化は18・26・26'層進み24層弱い。
- 19：にぶい赤褐色焼土。
- 20：暗褐色土／22：黒褐色土：黒色土・ロームと弱い焼土化の漸移層土。
- 21・21'：褐色土：焼土化進むオリーブ色系ロームと漸移層土主体。
- 23：黄褐色土：21・22層土。
- 25：明赤褐色焼土。

カマド掘り方覆土

- 27：褐色土：焼土化見る漸移層土主体。
- 30：橙褐色土：焼土化は弱い。
- 29：黒褐色土：24層土主体。
- 31：赤褐色土：23層土にローム多く混入。

径：71×60cm以上 深さ：60cm 柱穴3 径：42×40cm以上 深さ：56cm 柱穴4 径：64×58cm 深さ：62cm 貯蔵穴 径：103×92cm 深さ：82cm
 ピット1 径：58×57cm 深さ：70cm ピット2 径：61×53cm 深さ：65cm ピット3 径：57×

第371図 H-147号住居及びカマド



貯蔵穴覆土

1：褐色土上層中心の漸移層土(「漸移層土」)主体。 2：暗褐色土／3：黒褐色土：黒色土に近いもの中心の漸移層土主体。 4：にぶい黄褐色土：漸移層下層土主体。 5：にぶい黄褐色土：漸移層下層土に黒色土・ローム等多く混入。 6：明黄褐色土：ロームと漸移層土・黒色土。

柱穴覆土

1：暗褐色土／2：黒褐色土：上層中心の漸移層土主体。 3：黄褐色土／5・12：褐色土：下層中心の漸移層土主体。 4：黒褐色土：漸移層上層土と黒色土主体。 6：にぶい黄褐色土：オリーブ褐色系ローム主体。 7：褐色土／8・11：にぶい黄褐色土：漸移層土主体。 9：明黄褐色土／13：黄褐色土：漸移層土とロームの混土。 10：黄褐色土：黄色系ローム主体。住居掘り方か当初の柱穴の覆土。 14：黄褐色土：にぶい色調のローム主体。

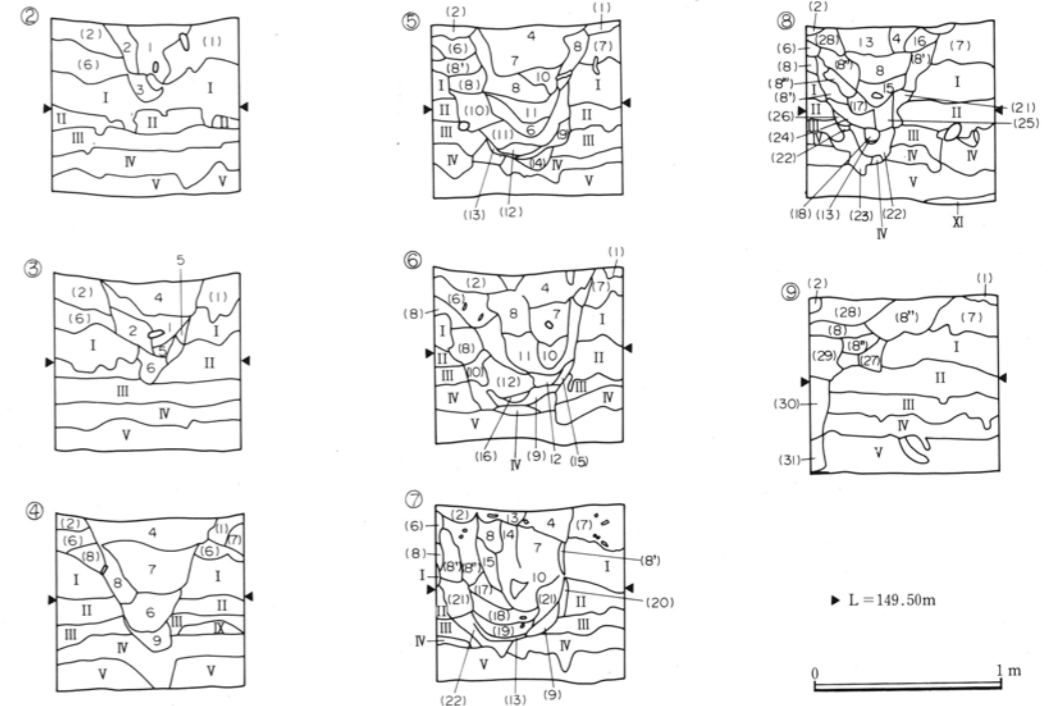
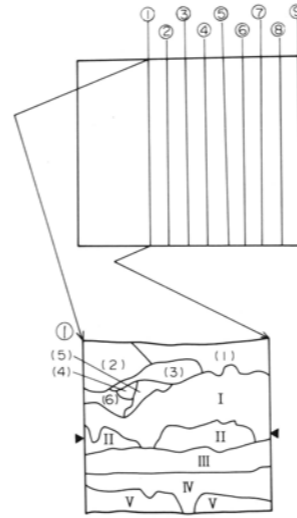
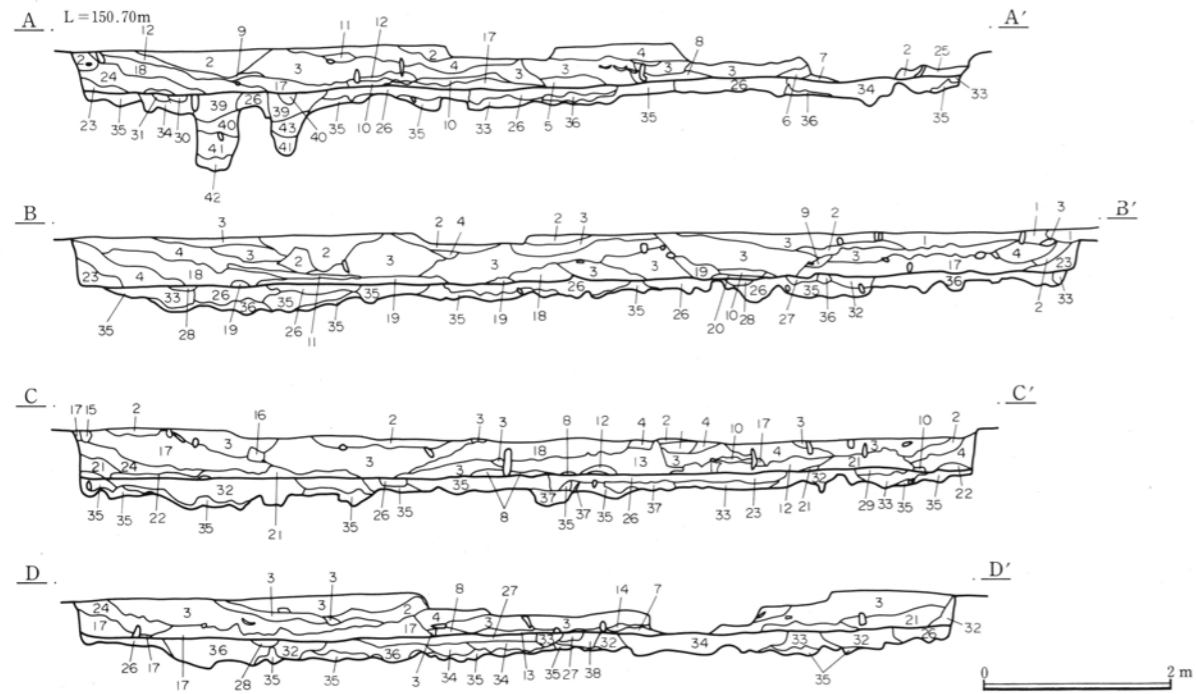
第372図 H-147号住居遺構

56cm 深さ：59cm ピット4 径：82×57cm 深さ：77cm ピット5 径：85×61cm 深さ：64cm

構造 本住居は方形プランを呈し、南壁西半が南に110cm程張り出す。

本住居は拡張部を除く部分で幅42～90cmのテラスを伴う、幅72～175cm、深さ3～36cmの周溝状の掘り込みが一周し、拡張部では幅28～57cm、深さ13cm以下を測る円弧状の溝が壁面に内接するように掘削される掘り方を有する。掘り方面にはこの他深さ10cm以下のものを中心とする土坑様の掘り込みを幾つか見ることができた。床面はこうした構造を持つ掘り

り方をロームやローム漸移層土等の土壌で埋め戻し、同様の土壌で貼り床を施している。



耕作土

1：暗茶褐色土：ローム漸移層土（以下「漸移層土」）にAs-A混入。

住居覆土1

2：茶褐色土：漸移層土主体。 3：明褐色土：下層漸移層土主体。 4：暗茶褐色土：上層中心の漸移層土主体。 5：暗茶褐色土：漸移層土と黒色土の混土主体。 6：黄褐色土：ロームに近いもの中心の漸移層土主体。 7：茶褐色土：焼土化見る下層中心の漸移層土主体。 8：茶褐色土：やや下層土多い漸移層土主体。

土屋根材

9：明茶褐色土/14：茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。14層焼土化見る。 10：明黄褐色ローム主体。 11：暗褐色土：黒色土に近いもの中心の漸移層土主体。 12：明茶褐色土：漸移層下層土主体。焼土化の可能性。 13：明茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。

住居覆土2

15：黒色土主体。 16：暗褐色土：黒色土に近い漸移層土主体。 17：明褐色土：下層中心の漸移層土主体。 18：明茶褐色土：漸移層土主体。 19：明茶褐色土：上層中心の漸移層土主体。 20：明茶褐色土：漸移層下層土に黒色土入る混土主体。

住居覆土3（三角堆積）

21：茶褐色土：漸移層土主体。 22：黄褐色土：ロームと漸移層土の混土主体。 23：暗茶褐色土：上層中心の漸移層土主体。 24：淡灰褐色土～明茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。 25：黒褐色土：黒色土と上層中心の漸移層土主体。

貼床

26：黄褐色土～オリブ褐色土：ロームと下層中心の漸移層土主体。 27：暗褐色土：上層中心の漸移層土にローム混入。 28：黄褐色土：漸移層下層土にローム混入。 29：オリブ褐色土：漸移層土にローム混入。 30：黄褐色土：ローム・漸移層土・黒色土の混土。 31：オリブ褐色土：漸移層土主体。

住居掘り方覆土

32：褐色～黄褐色土：漸移層土主体。 33：暗オリブ褐色土：漸移層上層土主体。 34：褐色土～黄褐色土：黒色土・漸移層土・ロームの混土主体。 35：黄色土：ローム主体。 36：黄褐色土：ロームと下層中心の漸移層土主体。 37：黄褐色土：漸移層下層土主体。 38：黄褐色土：漸移層土主体。弱く焼土化。

柱穴覆土

39：褐色土：漸移層土主体。 40：暗褐色土～黄褐色土：漸移層上層土主体。 41：黄褐色土：ロームと漸移層土の混土主体。 42：オリブ褐色土：シルト質土主体。 43：黄褐色土：漸移層下層土主体。

〔柱穴2〕

柱穴2覆土

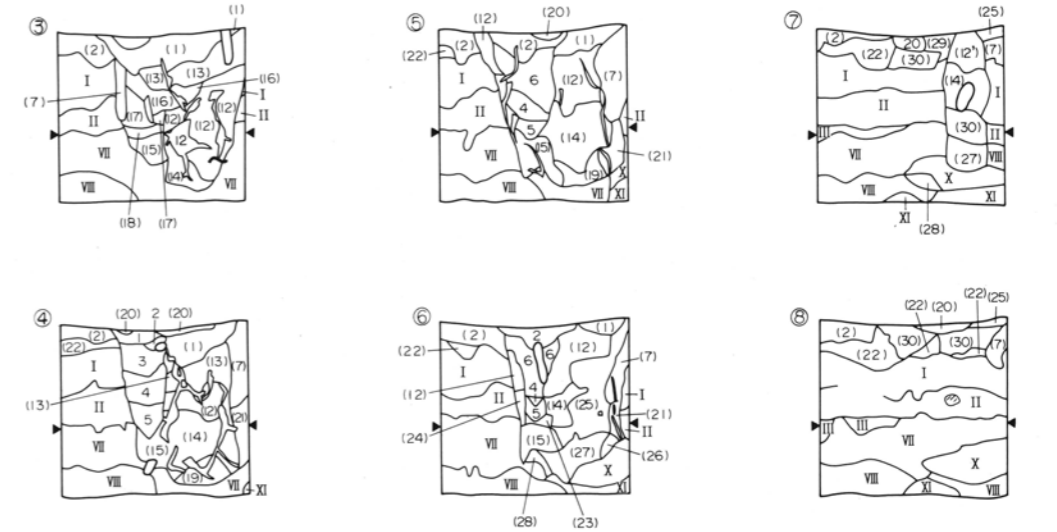
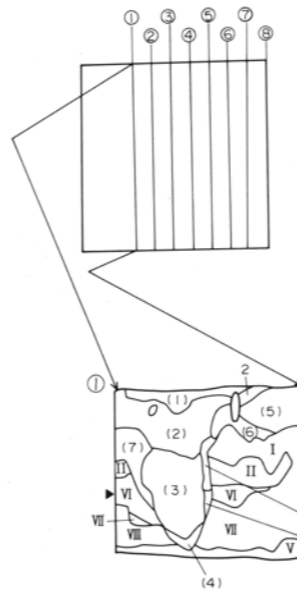
1・7・13：暗褐色土/3・4：褐色土/10・11・14：黒褐色土/16：黄褐色土：上層中心の漸移層土主体。 2：黄褐色土/12：褐色土：漸移層土主体。 5・6：黄褐色土：下層中心の漸移層土とロームの混土主体。 8：灰黄褐色土：漸移層下層土主体。 9：明黄褐色土：II層土主体。 15：黄褐色土：8層土と10層土の混土。

住居掘り方及び旧柱穴覆土

(1)：暗褐色土/(10)・(29)：オリブ褐色土/(11)・(21)：灰黄褐色土：漸移層土主体。 (2)：褐色土：ロームと漸移層土。 (3)・(7)：灰黄褐色土/(24)・(25)：オリブ褐色土：上層中心の漸移層土主体。 (4)：黄褐色土：III層らしきロームとAs-YPの混土。 (5)：黄褐色土：III層らしきローム主体。 (6)：明黄褐色ローム主体。 (8)・(8')・(8'')・(8''')：黄褐色土/(28)：黄褐色土：下層中心の漸移層土主体。 (9)：9層と同じ。 (12)：黄褐色土：IV層土主体。 (13)：橙色土：V層土主体。(14)・(17)：黄褐色土/(20)：黄褐色土/(22)：褐色土/(23)・(31)：オリブ褐色土：III層土主体。 (15)：黄褐色土：III層またはIV層土主体。(16)：IV層土。(18)：黄褐色土/(19)：灰黄褐色土：III・IV層土の混土。(26)：灰オリブ色シルト。(27)：黄褐色土：I層土主体。(30)：黄褐色土：漸移層下層土主体。

地山ローム層

I：黄褐色ローム：As-Br混入。 II：明黄褐色ローム：As-Br多く含む。 III：黄褐色ローム。 IV：オリブ褐色ローム。 V：橙色ローム：やや砂質。 VI：暗灰黄色ローム。 VII：黄褐色ローム：AT混入か。 VIII：明褐色ローム：AT混入か。 IX：黄褐色ローム層。 X：黄褐色砂質ローム：III・IV・V層土混入。



柱穴3覆土

1：黄褐色土：ローム漸移層土（以下「漸移層土」）主体。 2：黒色土：漸移層上層土主体。 3：暗褐色土/6：黄褐色土：(1)層に近い。 4：黒褐色土：漸移層土主体。 5：黄褐色土：(14)層に近い。

住居掘り方及び旧柱穴覆土

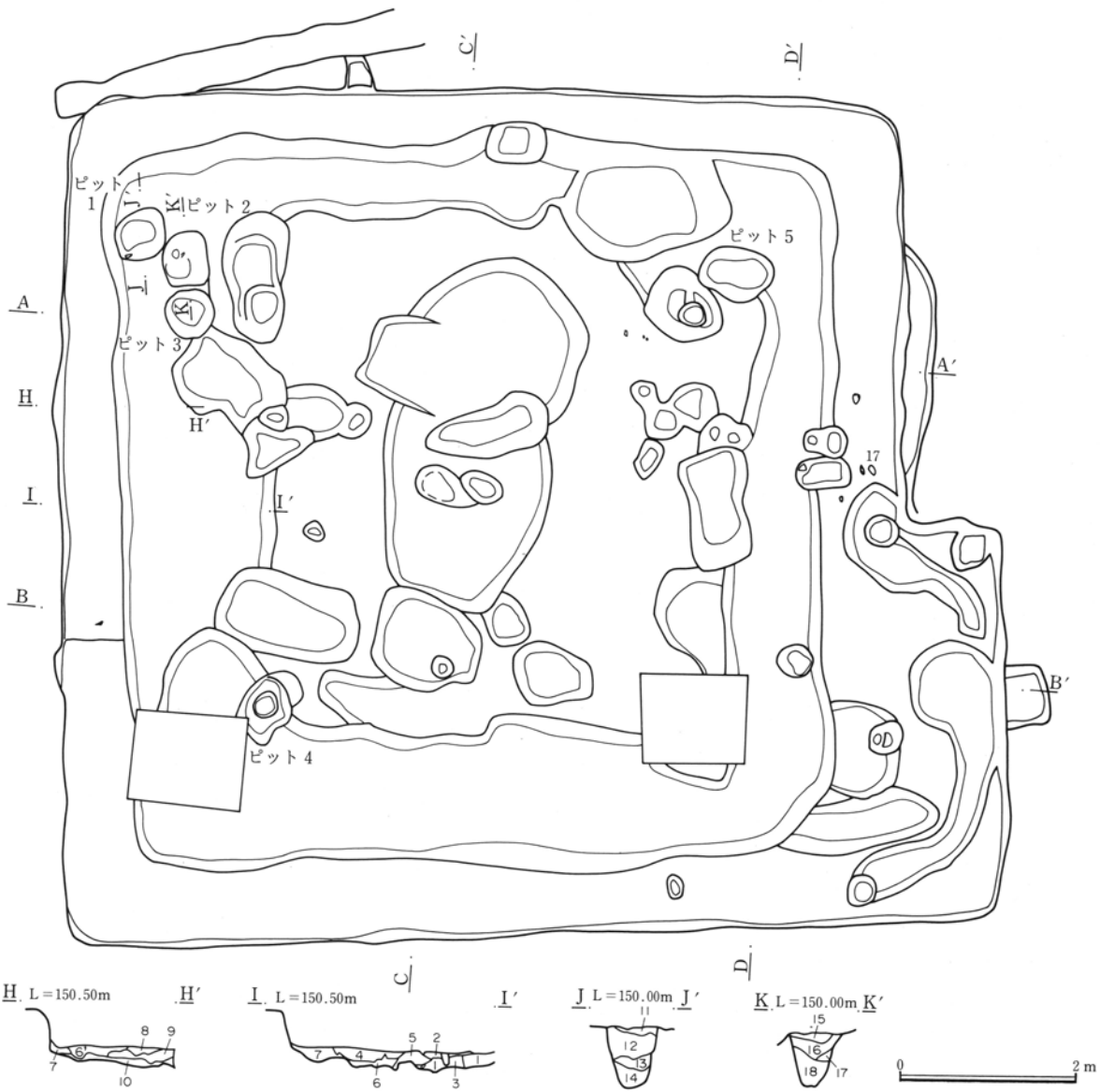
(1)：黒褐色土：漸移層上層土主体。(2)・(5)：黄褐色土：下層中心の漸移層土主体。(3)：黄褐色土：ロームと下層中心の漸移層土主体。(4)・(10)・(17)・(21)：黄褐色土/(11)・(12)・(12')・(23)：灰黄褐色土/(14)・(19)・(24)：黒褐色土/(20)オリブ褐色土：漸移層土主体。(6)・(8)：黄褐色土：II層土主体。(7)・(13)・

(18)：黄褐色土/(25)：黄褐色土/(30)：黄褐色土：ローム主体。(9)：明黄褐色土：I・II層土主体。(15)：黄褐色土/(27)：黄褐色土/(28)：淡黄褐色土：VII層土主体。(16)：灰黄褐色土/(29)：暗褐色土：上層中心の漸移層土主体。(22)：黄褐色土：I層土主体。(26)：灰黄褐色土：(21)層土とX層土の混土。(30)：灰黄褐色土：黒色土・漸移層土とI・II・VII層土の混土主体。

地山ローム層

I：柱穴2-I層と同じ。 II：柱穴2-II層と同じ。 V：柱穴2-V層と同じ。 VI：柱穴2-VI層と同じ。 VII：柱穴2-VII層と同じ。 VIII：柱穴2-VIII層と同じ。 X：橙色～灰白色軽石層：軽石とVII層土の混土。 XI：灰白色ローム：VIIIらしきもの含む。

第373図 H-147号住居セクション



北部掘り方 (旧カマドか) 覆土

1：黄褐色土：住居-36層土に似る。(第373図参照) 2：黄褐色土／3：暗褐色土：ローム主体。 4：明褐色土：弱い焼土化見るローム漸移層土主体。 5：にぶい赤褐色焼土主体。 6・6'：暗褐色土：焼土化見る上層中心のローム漸移層土主体。 7：暗褐色土：上層中心のローム漸移層土主体。 8：明赤褐色土：部分的に強く焼土化するローム漸移層土主体。 9：黄褐色土：住居-26層土に似る。 10：黄色土：住居-35層に似る。

掘り方ピット覆土

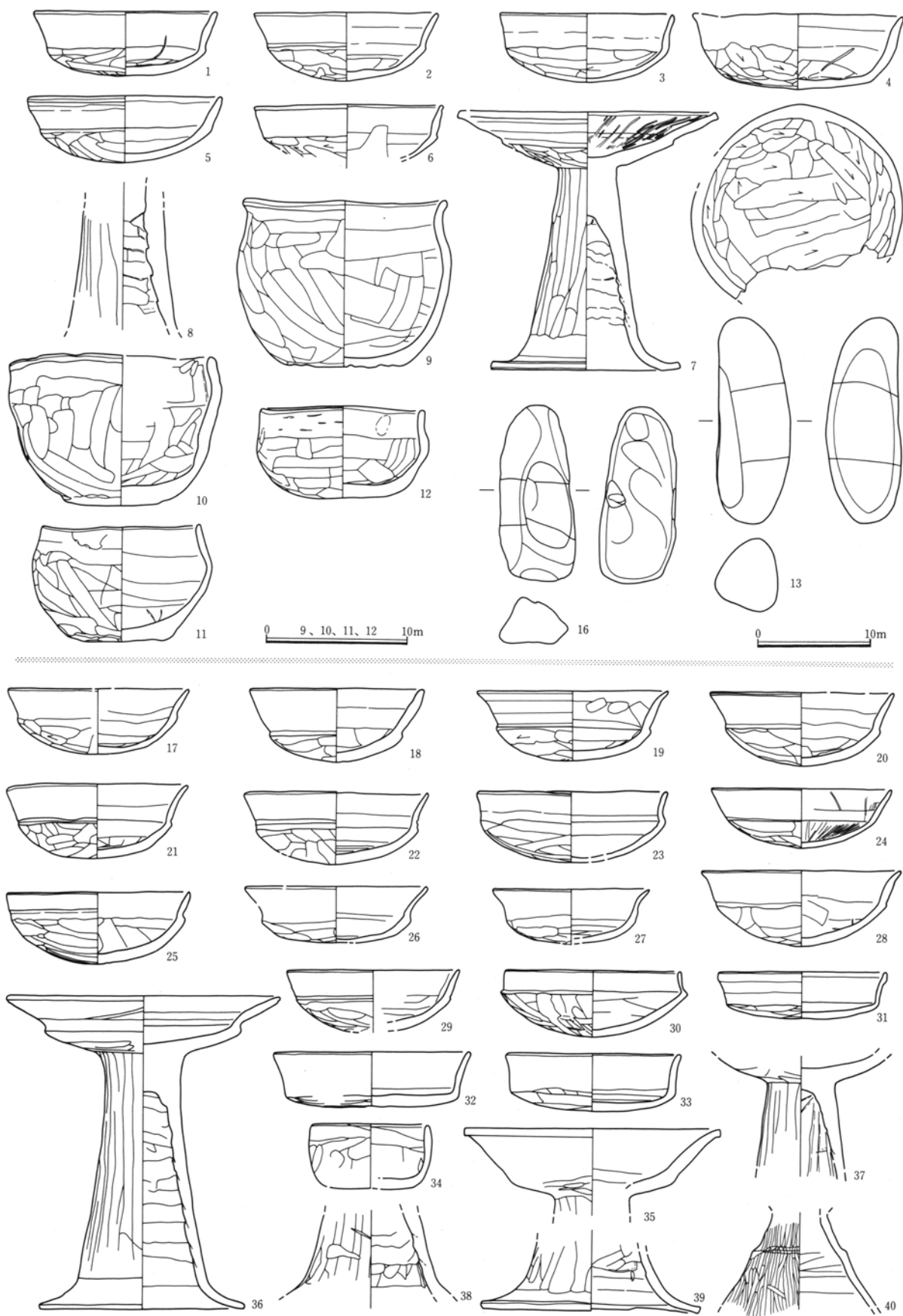
11：にぶい黄褐色土：12層土と住居-34層土の混土。 12：にぶい赤褐色土：焼土化見られるローム (オリブ褐色系ロームか) 主体。焼土や黒色土等やや多く混入。 13：にぶい黄褐色土：上層中心のローム漸移層土主体。弱く焼土化。 14：黄褐色土：黄色系とオリブ褐色系ロームの混土。 15：オリブ褐色土：上層中心のローム漸移層土主体。 16：黄色土：黄色ローム主体。 18：黄褐色土：14層土主体。 17：明黄褐色土：16層土と18層土の混土。

第374図 H-147号住居掘り方

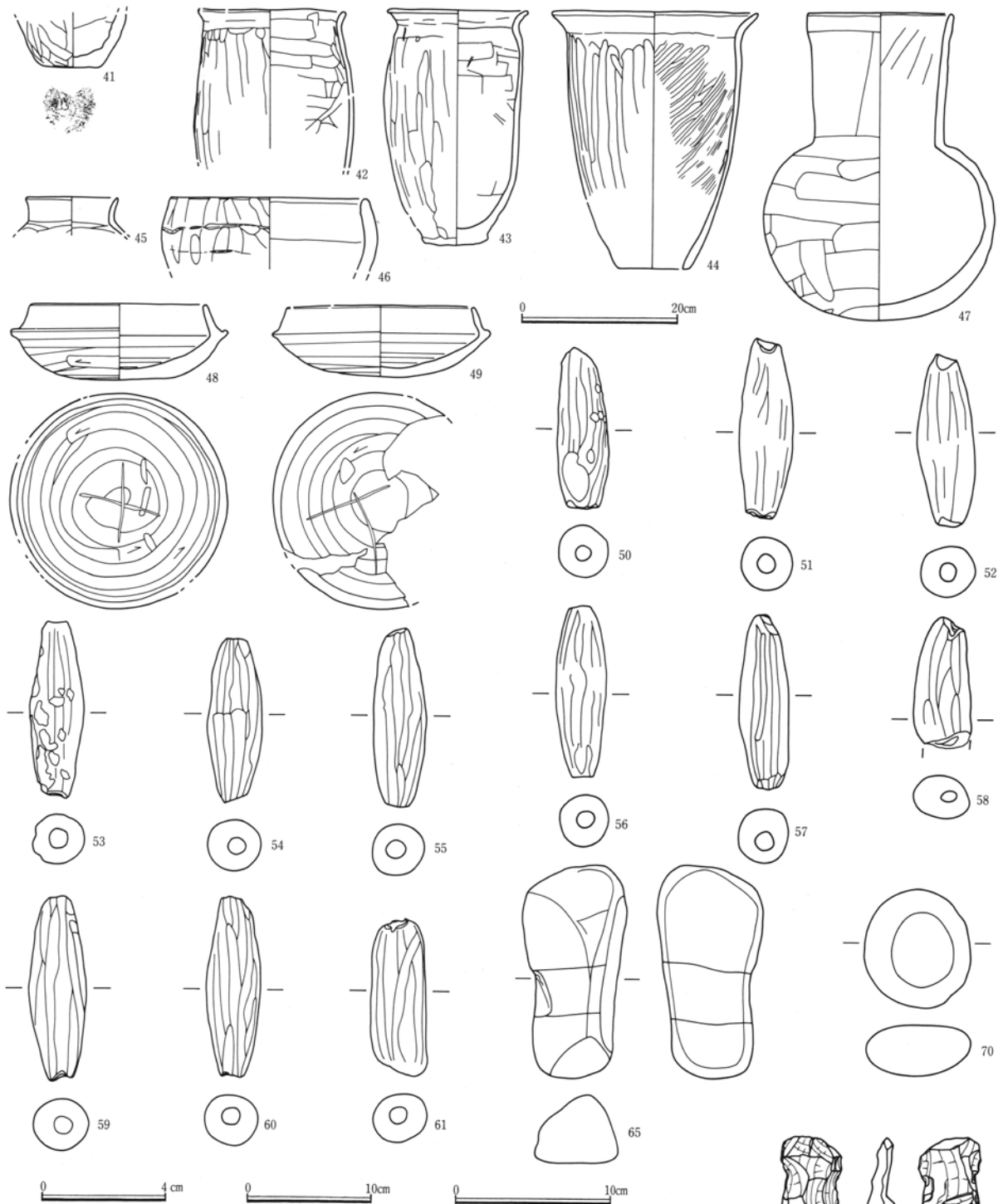
カマドは東壁のやや北寄りに造られている。長円を半裁したようなプランの掘り方を有し、これをロームやローム漸移層土等で埋め戻して焼土面を造る。焼土部は東壁より内側に設定され、その両側に焼土等を含むロームやローム漸移層土で袖を造っている。また、上述のように北側に古い段階のカマドが造られた可能性もあるが、構造等は把握されなかった。

床面に於いては支柱穴4基と貯蔵穴1基を確認している。このうち支柱穴4基は何れもしっかりした掘り方を示すが、柱穴1・4は重複があるようで掘削しづらかった。また、掘り方面に見られたピット2～5も或る段階の柱穴と判断される。尚、柱材の太さは20数cm～30cm程と推定される。一方、貯蔵穴はカマド右側に在って、隅丸方形のプランを呈する

第3章 発見された遺構と遺物



第375図 H-147号住居出土遺物(1)

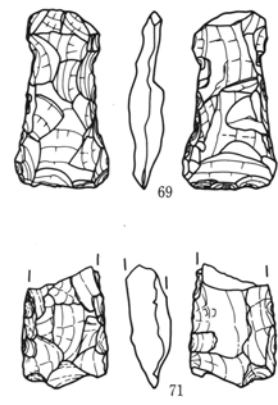


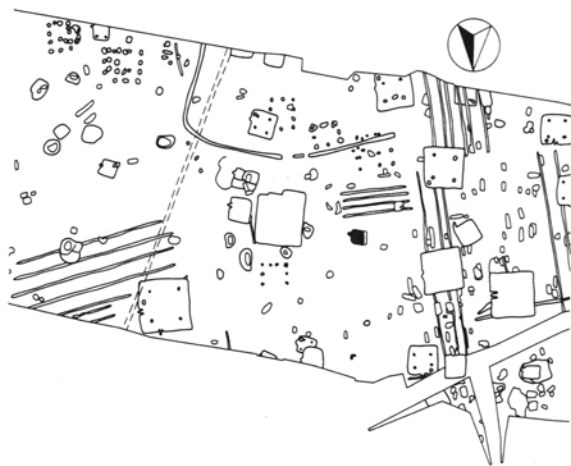
第376図 H-147号住居出土遺物(2)

規模の大きなもので、縦断面形はロウトの形態である。また、掘り方面に見られたピット1は古い段階のカマドに伴う貯蔵穴であった可能性を持つ。

覆土中に於いてはロームが面的広がりをも有するものを確認した。これは屋根の土葺き材と判断され、

土層断面でもロームや下層土中心のローム漸移層を用いたものが認められた。



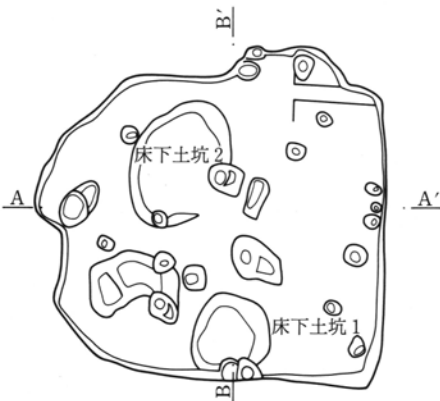
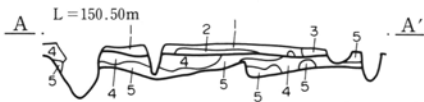
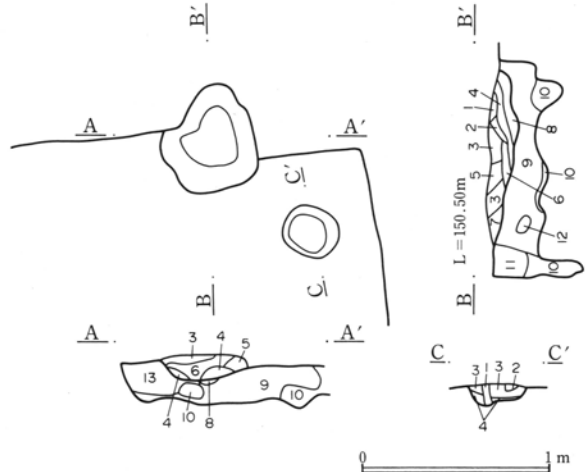
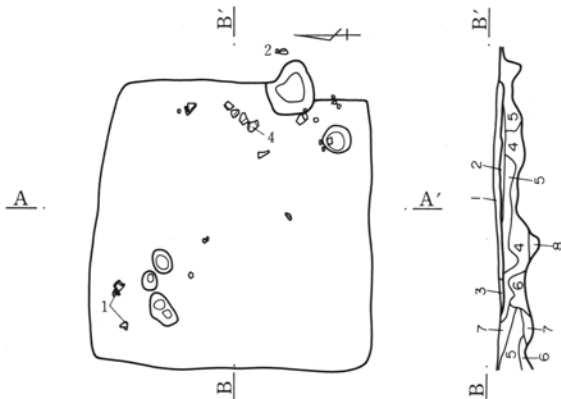


住居覆土

1：暗黒褐色土：炭化物等少量含む。 2：暗褐色土主体。

住居掘り方覆土

3：褐色土。 4：暗褐色土：褐色土と暗褐色土にAs-YP多量に混入。 5：暗褐色土：暗黒褐色土主体。As-YP含む。 6：褐色土：暗褐色土と褐色土ブロック主体。 7：暗褐色土：暗褐色土と褐色土の混土。 8：黒褐色土：暗褐色土と褐色土の混土。縮まり欠。



カマド覆土

1：黒色土：赤褐色焼土ブロックと焼土粒含む暗黒褐色土混入。 2：暗赤褐色土：暗黒茶褐色土主体。 3：暗黒茶褐色土主体。 4：暗茶黒褐色土：黒色土と焼土を含む暗赤褐色土の混土。 5：暗茶褐色土主体。 6：暗茶褐色土主体。 7：黒色土主体。

カマド掘り方等覆土

8：暗黒褐色土：焼土主体。黒色土混入。 9：暗黒褐色土：固く縮まる暗黒褐色土中にAs-YP多量に混入。 10：暗黒褐色土主体。 11：黒色土主体。 12：暗茶褐色粘質土主体。 13：暗黒褐色土：白色土粒・As-YPを極めて多量に含んで固く縮まる。

貯蔵穴覆土

1：黒色土主体。縮まりに欠ける。 2：暗赤黒褐色土：黒色土と暗赤褐色土の混土。 3：暗赤褐色土：焼土粒含み、焼土ブロックを多量に含む。 4：暗黒褐色土主体。

第377図 H-148号住居

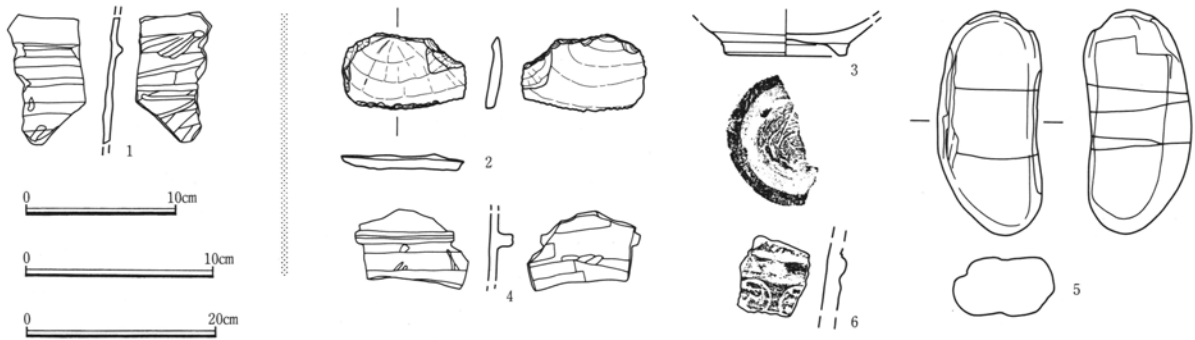
H-148号住居（平安時代。第377図～第378図。図版133・158～159）

概要 本住居はD区中央やや西寄りに位置する小型の竪穴住居跡である。

本住居は元々の掘り込みが浅いこともあって削平が進行しており、床より上の部分の殆どは滅失して

しまっており、遺存状況は良好とは言い難かった。

本住居からの出土遺物はさして多くなかったが、本住居に伴うと判断された遺物には10世紀後半期の特徴を示す羽釜（1）1点のみであった。尚、僅か



第378図 H-148号住居出土遺物

1点ではあったがこの遺物から導かれる10世紀後半という時期が本住居の所産となる時期を示すものと思慮される。

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器坏や当該期から奈良・平安時代にかけての土師器甕、或いは平安期の須恵器坏・碗を中心に、フレーク (2) や10世紀代の須恵器の高台付碗 (3) や羽釜 (4) の他、こも編み石 (5) 等の出土が見られ、13~14世紀頃のものと思われる角型火鉢片 (6) の混入も見られた。

規模 長軸：303cm 短軸：299cm 深さ：6cm

カマド 掘り方 径：56×52cm 深さ：6cm 貯蔵穴 径：29×27cm 深さ：14cm 床下土坑1 径：84×81cm 深さ：11cm 床下土坑2 径：144×103cm以上 深さ：10cm

構造 本住居は方形のプランを呈する。

掘り方を有し、掘り方には床面から掘削される西

壁際の床下土坑1、住居中央の床下土坑2を始め幾つかのピットを確認したが、これらの性格等を特定することはできなかった。尚、床面はこうした掘り込みを持つ掘り方を褐色土等の土壌で埋め戻して造っているが、特に貼り床等は施されていない。

カマドは東カマドで東壁のやや南寄りに造られている。カマドは楕円形プランを基本とすると思われる掘り方を有し、これを暗黒褐色土等で埋め戻して燃焼面を造るものと思われる。燃焼部は東壁を跨ぐ位置に設定されているが、カマドの破壊が著しいため袖など他の構造を確認することはできなかった。

床面に於いてはカマド右側、南東コーナー付近に貯蔵穴を確認した。この貯蔵穴は隅丸方形のプランを呈しピット様の形態を成すが、その掘り込みは浅い。尚、床面に於いても掘り方面に於いても、柱穴等他の構造物を確認することはできなかった。

H-149号住居 (古墳時代後期、第379図~第380図、図版133・159・165)

概要 本住居はD区北西端部の、現道と路線巾に挟まれた狭い区域に所在する竪穴住居跡である。

本住居は北側の過半が路線外に出ていて調査できず、南壁付近は現道が近付いて調査しづらい状況にあったため、あまり多くの所見は得られなかった。

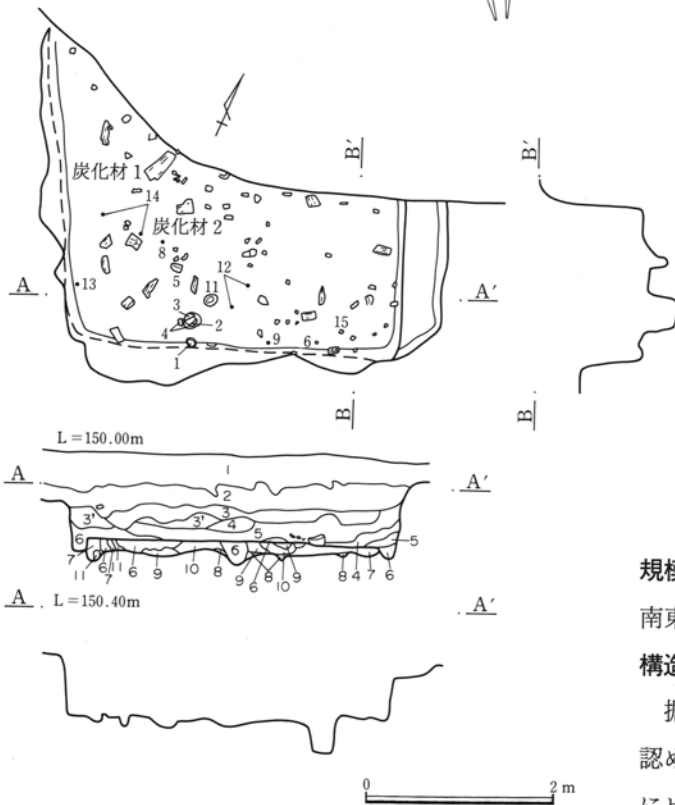
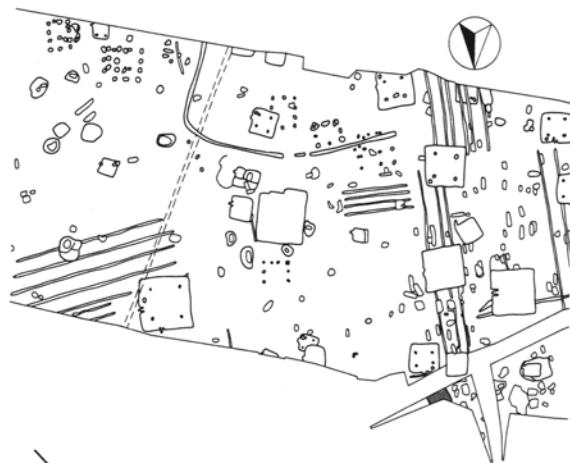
また、本住居は記録化に失敗したため床面や掘り方面を図示することなどができなかった。

本住居に伴う出土遺物は調査範囲に比して比較的多く見られたが、これらの中で本住居に伴うと判断されたものには、6世紀前半期の所産と思われる土師器坏 (1) や同後半期の特徴を示す土師器の坏 (2)

や鉢 (4) の他、こも編み石 (5,6) が見られた。

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕片を中心にスクレイパー (7) やこも編み石 (8,9)、6世紀から7世紀にかけてのものと思われる土師器の坏 (10,11、13、12、3) や鉢 (14)・甕 (15) などが見られた。

こうした遺物の所見から、本住居は概ね6世紀中葉頃の所産として想定されるが、覆土中の遺物から奈良・平安時代頃までは窪地としてその痕跡を留め、特に住居廃棄後の6世紀後半期から7世紀後半期にかけては継続的に遺物の投棄が行われたことが窺わ



第379図 H-149号住居

れるのである。

また、本住居の覆土中からは20点以上炭化物の出土が見られたが、これらは建築材と判断され、従って本住居は所謂焼失家屋であると判断された。これらの炭化材は、後述の鑑定所見によればクリ材を中心とするということであるが、建築材と見た場合の部位については炭化材1が北東部分の柱材、炭化材2が南側の梁・桁材の可能性を持つ以外は垂木材であろうと判断される。

耕作土

1：暗黒褐色土：As-Aを多量に含む。

住居覆土

2：暗黒褐色土：白色粒子を微量含む緻密な層。締まり強し。 3：暗黒褐色土：2層と同様粒子均質な暗黒褐色土中にロームブロックと白色粒子を多量に混入する。(3'：ロームブロックの混入減少) 4：暗黒褐色土：褐色粒子少量含む。締まり強し。 5：黒色土：焼土粒と炭化物を少量含む。

住居掘り方覆土

6：暗褐色土：褐色粒子を多量に含む暗黒褐色土と褐色ロームの混土。 7：暗黒褐色土：くすんだ暗黒褐色土と黒褐色土の混土に褐色土粒が微量混入。 8：暗黒褐色土：褐色土と暗黒褐色土の混土。 9：暗褐色土：褐色粘質土ブロックとAs-YPが少量混入する。 10：暗褐色土：褐色粘質土ブロックが大量に大粒化して含まれる。 11：褐色土：夾雑物無く粘性強し。

規模 長軸：380cm以上 短軸：386cm 深さ：64cm

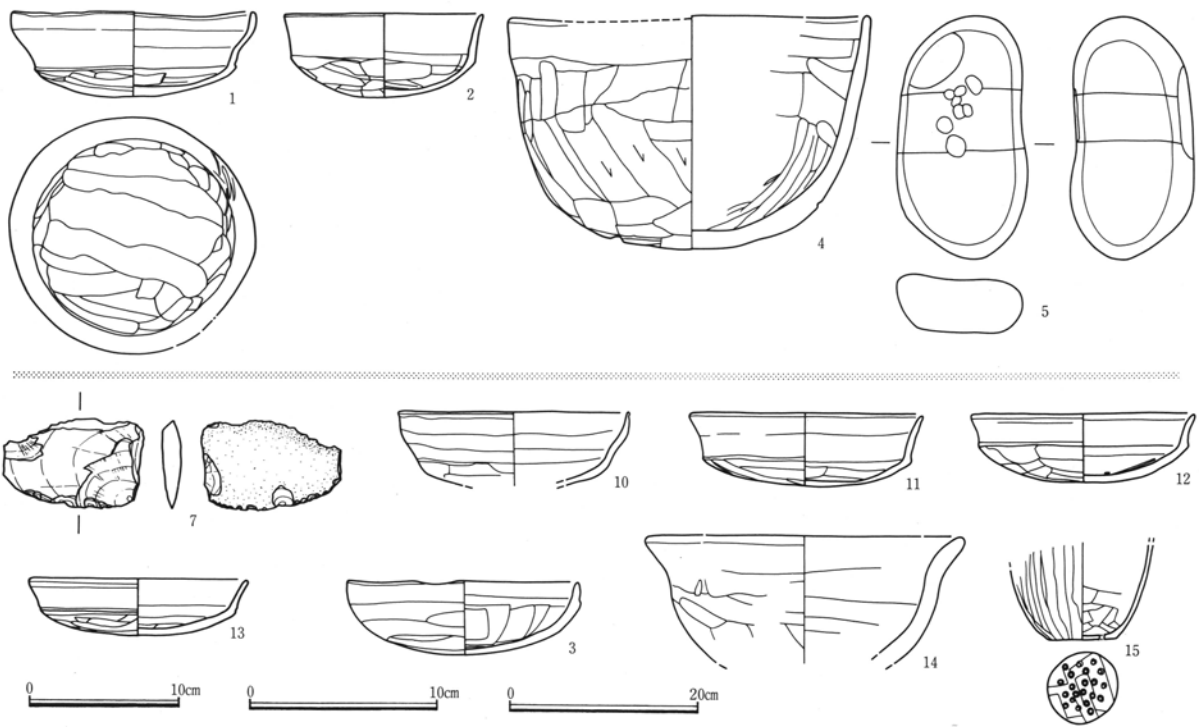
南東ピット 径：38×26cm 深さ：41cm以上

構造 本住居は隅丸方形のプランを呈する。

掘り方を有するが、掘り方面には特段の規則性を認めることはできず、南東コーナー付近と南西部分にピットが見られた。床面はこのような掘り方を暗褐色土や暗黒褐色土等で埋め戻して造っている。

カマドは調査範囲では確認することはできなかった。

また、床面に於いては柱穴・貯蔵穴といった施設を確認することはできなかったが、掘り方面に於いて確認された2基のピットのうち、南東側のものは位置的に貯蔵穴と考えられる。一方、柱穴については南西側のものがそれに比定される可能性を持つが、先にも触れたように炭化材1が出土位置から柱材である可能性を持つことから、柱穴は掘削されていたものと思慮される。



第380図 H-149号住居出土遺物

H-162・163号住居（古墳時代後期、第381図～第382図、図版133・159・165）

概要 H-162・163号住居はD区の北西部に位置する、D区で小型のものに属する竪穴住居跡である。

この2軒の住居は重複関係にあり、H-162号住居の方がH-163号住居を切っていて新しい。

出土遺物の中でH-162号住居に伴うと判断されたものには7世紀後半期の特徴を示す土師器坏(1, 2)があり、H-163号住居では7世紀中葉の特徴を示す土師器坏(3)や、こも編み石(4, 5)があった。

一方、両者の覆土中からは土師器坏片を中心に、7世紀代の土師器の坏(7)や甕(8)、8世紀のものかと思われる土師器甕(9)の他、磨石(6)やこも編み石(10～12)などが見られた。

このように住居に伴う出土遺物はそれぞれ少なかったが、住居の所産の時期についてはそれぞれの遺物から、H-162号住居は7世紀後半、H-163号住居については7世紀中葉という年代を充てたい。

規模〔H-162号住居〕長軸：373cm以上 短軸：284cm 深さ：50cm

カマド 幅：97cm 奥行：94cm 左袖 幅：24cm 長さ：28cm 高さ：24cm 右袖 幅：26cm

長さ：36cm 高さ：26cm 燃烧部 径：36×83cm
〔H-163号住居〕長軸：424cm 短軸：406cm
深さ：51cm

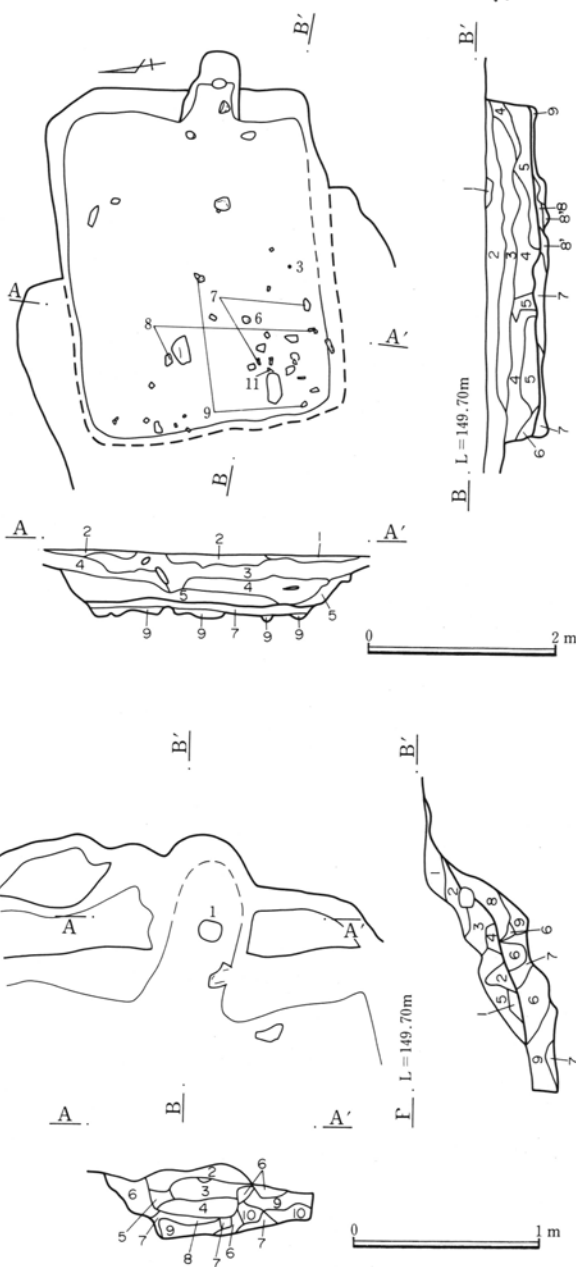
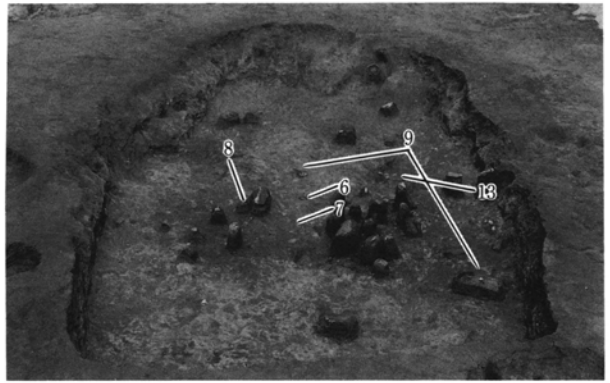
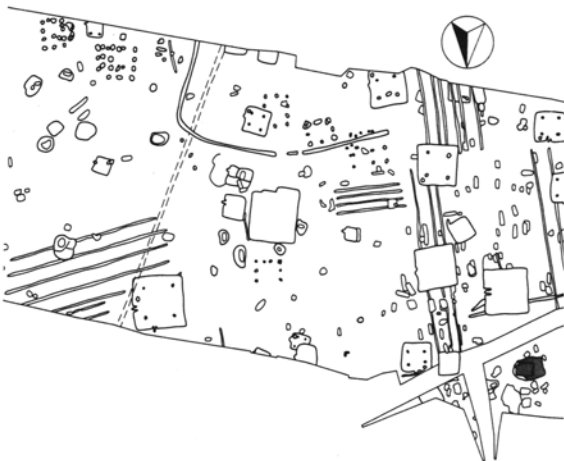
ピット1 径：26×18cm 深さ：28cm ピット2
径：27×25cm 深さ：42cm ピット3 径：36×
30cm 深さ：42cm ピット4 径：28×23cm 深
さ：35cm ピット5 径：38×36cm 深さ：62cm

構造〔H-162号住居〕H-162号住居は縦長の隅丸長方形のプランを呈する。

掘り方を有する。掘り方面には凹凸は見られるものの全体としての掘削に規則性は認められず、幾つかのピットも掘削されていたがその性格は特定できなかった。床面はこうした掘り方をローム等の土壌で埋め戻して造っている。

カマドは東カマドで東壁の若干南寄りに造られる。浅い掘り方を有し、これを暗黒褐色土や褐色粘質土などの土壌で埋め戻して燃烧面を造っている。燃烧部は東壁を僅かに跨ぐ位置に造られている。

また、柱穴・貯蔵穴等については床面に於いても掘り方面に於いても確認することはできなかった。



第381図 H-162・163号住居

耕作土

1：暗黒褐色土：As-A・炭化物多量に含む。

H-162号住居覆土

2：暗褐色土主体。褐色土粒・炭化物相当量含む。 3：暗褐色土主体。褐色土ブロック多量に混入。 4：暗褐色土：褐色土・白色土含みの暗黒褐色土と黒褐色土の混土。 5：暗褐色土：暗褐色土と黒褐色土の混土。 6：暗褐色土：明褐色土ブロック混入。

H-162号住居掘り方覆土

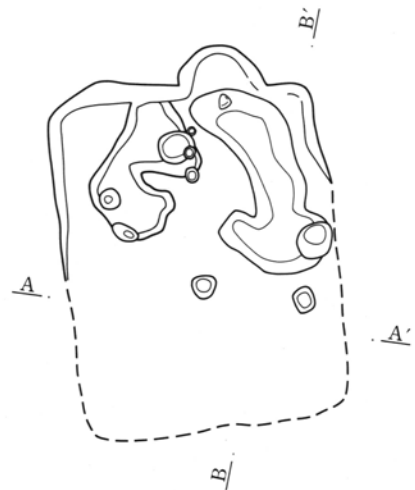
7：褐色土主体。 8：暗茶褐色土：ロームブロック主体。(8'：黒褐色土相当量混入。) 9：暗茶褐色土主体。

H-162号住居カマド覆土

1：暗茶褐色土主体。2：暗茶褐色土：焼土相当量混入。 3：暗褐色土主体。 4：暗赤褐色土：暗褐色土と多量の焼土ブロックの混土。粘性持つ。 5：暗褐色土主体。

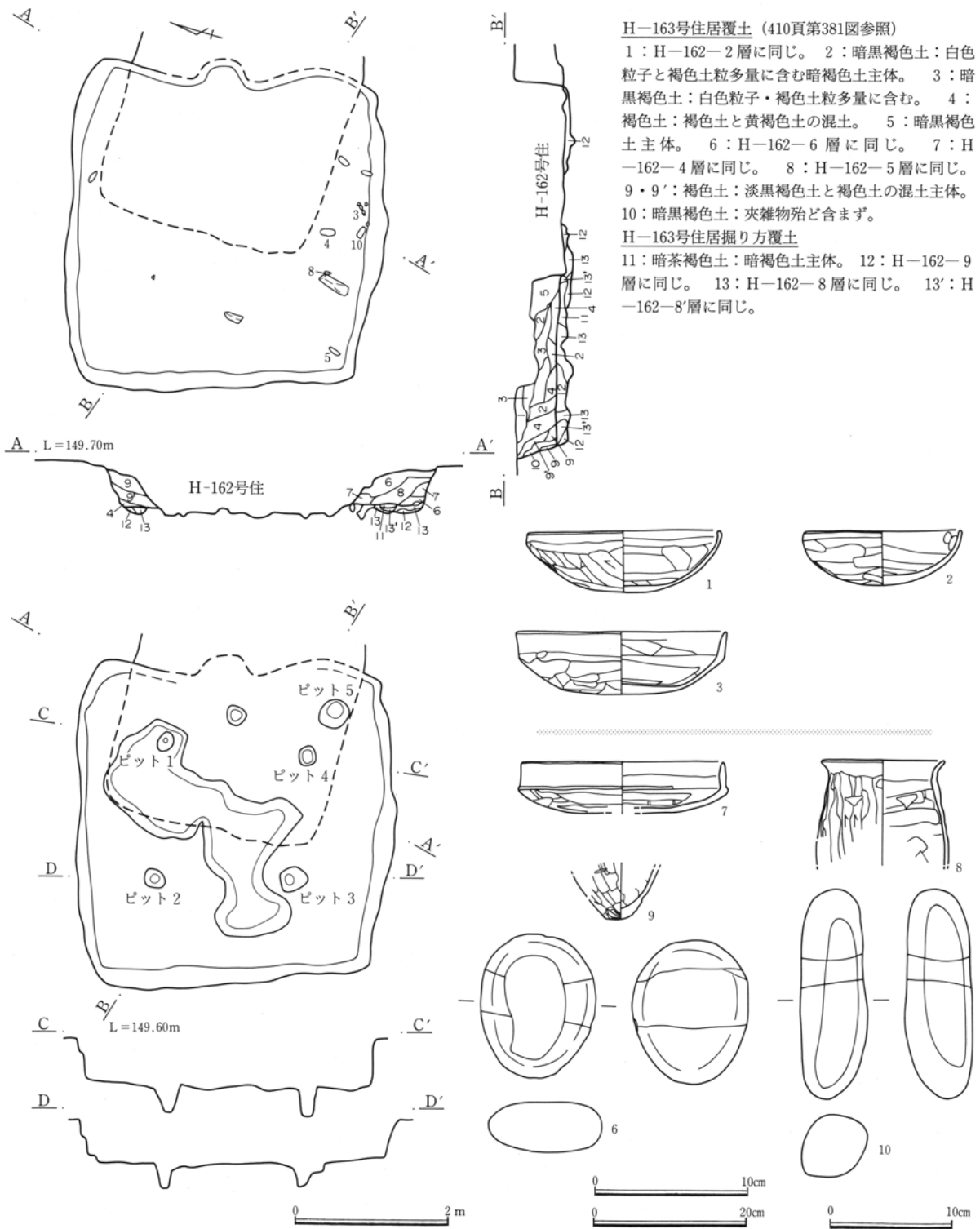
H-162号住居カマド掘り方覆土

6：暗褐色土主体。 7：暗褐色土：褐色粘質土主体。 8：暗黒褐色土：焼土と白色土粒多量に含む。 9・10：暗黒褐色土主体。



〔H-163号住居〕 H-163号住居は隅丸方形を基調とするプランを呈する。

凹凸や幾つかのピットの見える掘り方を有するが、特段の規則性を認識することはできなかった。床面はこのような掘り方を暗褐色土等で埋め戻して

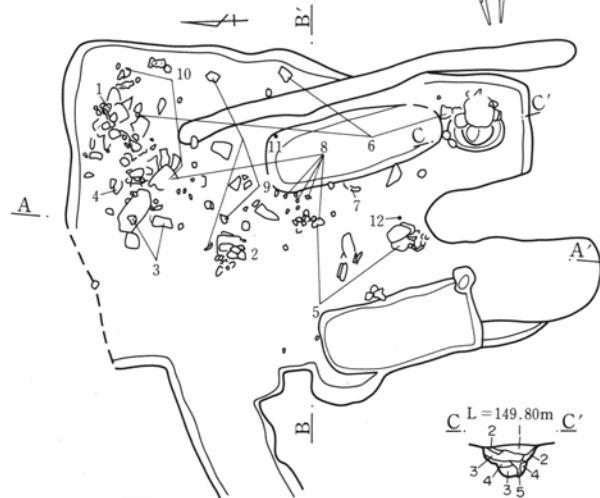
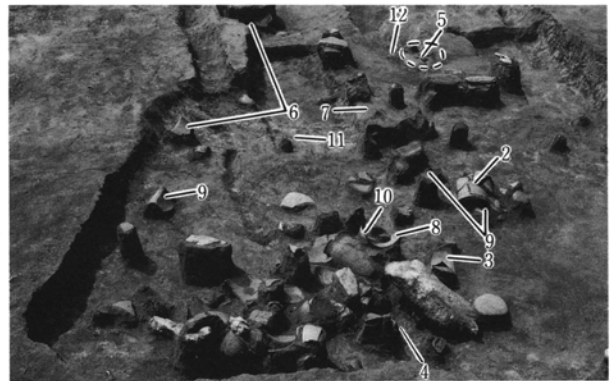
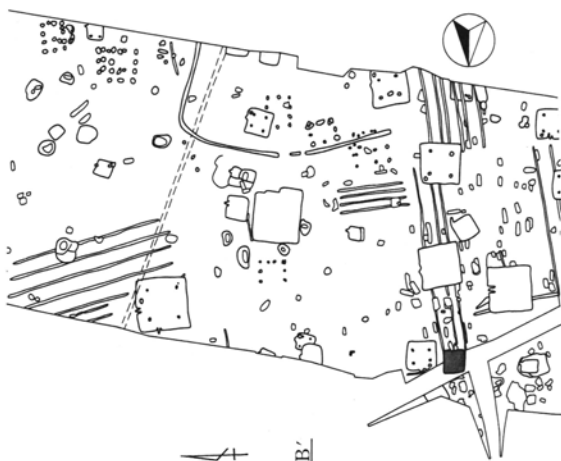


第382図 H-162・163号住居遺構及び出土遺物

造りだしている。

カマドは東カマドと推定され、調査途中段階では東壁の中程に認識されていたが、遺構としてカマドを確認することはできなかった。

一方、柱穴・貯蔵穴を床面に於いて確認することはできなかったが、位置的に掘り方面に見られたピットのうちピット1～4は支柱穴、ピット5は貯蔵穴に比定される。



H-168号住居覆土

1：暗黒褐色土：白色土を比較的多量に含む。 2：暗黒褐色土主体。1層より白色土減少。 3：暗黒褐色土主体。 4：くすんだ褐色土：夾雑物見られず。

H-168号住居掘り方覆土

5：暗黒褐色土：暗黒褐色土とくすんだ褐色土ブロックの混土。 6：暗黒褐色土主体。 7：褐色土：明褐色土中に暗褐色土相当量混入する。

47号風倒木覆土

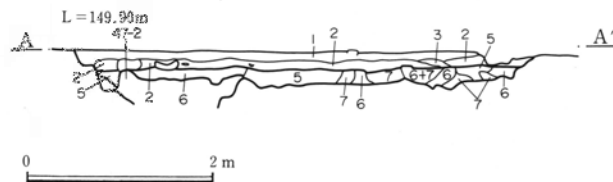
47-1：黒色土：褐色土散在。 47-2：暗褐色土主体。 47-3：暗黒褐色土主体。 47-4：褐色土。 47-5：暗黒褐色土主体。粘性強。 47-6：暗黒茶褐色土：粘性強。 47-7：黒色土：粘性強。 47-8：黒色土主体。

H-168号住居貯蔵穴覆土

1：暗黒褐色土主体。 2：褐色土主体。 3：暗褐色土：暗褐色土と暗黒褐色土の混土主体。 4：暗褐色土主体。 5：暗褐色土：褐色土と暗褐色土の混土。

H-168号住居カマド覆土

1：暗褐色土：淡褐色土粒少量含む。 2：暗黒褐色土主体。サラサラする。 3：暗赤褐色土：くすんだ赤褐色土。焼土ブロックを少量含み、サラサラしている。 4：暗褐色土：淡褐色土主体土中に黒褐色土が少量混入。 5：暗黒褐色粘質土主体。

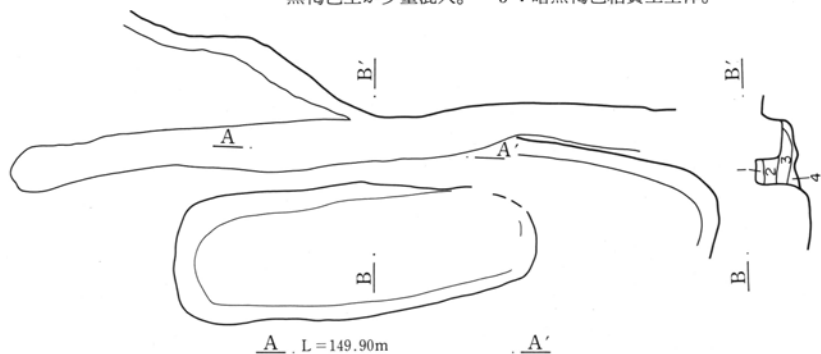


0 2m

H-168号住居(古墳時代後期, 第383図~第384図, 図版133~134・159~160)
 概要 本住居はD区北西の現道下に遺存していた小型の竪穴住居跡である。

本住居は削平が進み、土坑やピット・耕作溝による攪乱を受け、更に掘り方面に47号風倒木が絡むなど、遺構の遺存状態は良好とはい難かった。

こうした中で出土遺物は比較的多く見られたが、この中で本住居に伴うと判断されたものには6世紀後半期の特徴を示す土師器の高坏(1)・甑(2,3)そして甕(6)や7世紀前半期の特徴を持つ土師器甕(5)の他こも編み石(4)もあった。

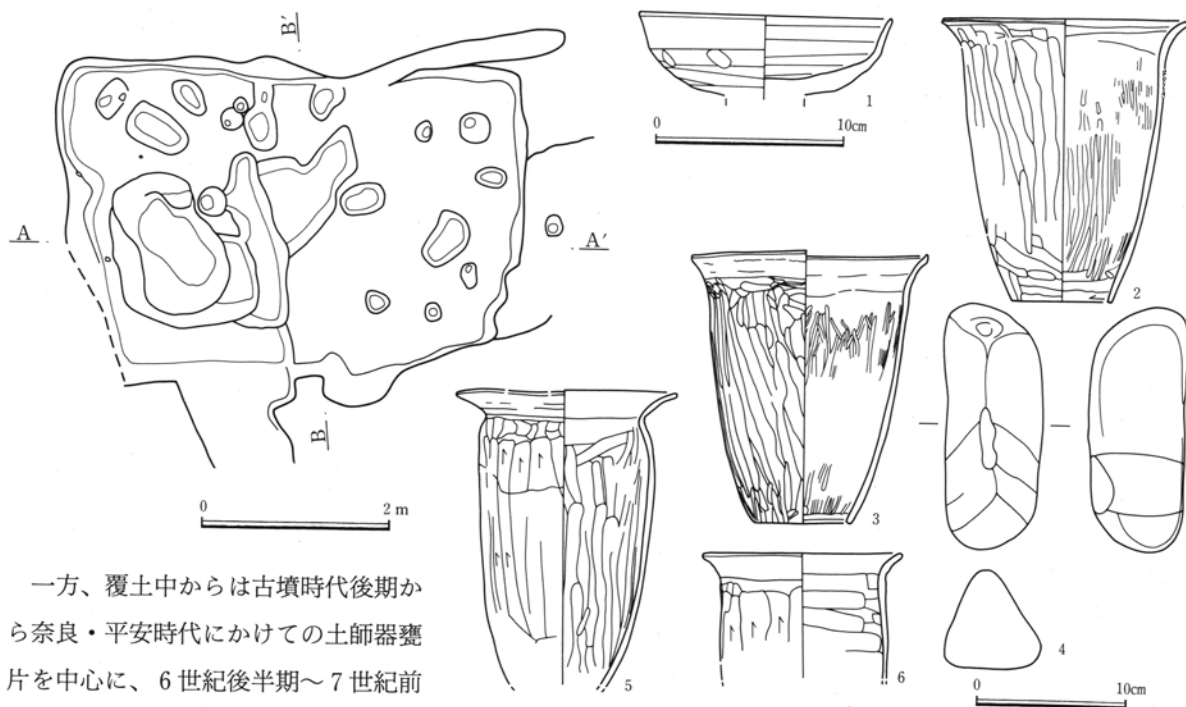


A L=149.90m A'



0 2m

第383図 H-168号住居



一方、覆土中からは古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての土師器甕片を中心に、6世紀後半期～7世紀前半期の土師器甕(7～10)の他、白玉(11, 12)や丸玉(13)も見られた。

本住居の時期については、新しい要素のものも含むが6世紀後半という年代を与えたい。また覆土中の遺物の状況から少なくとも奈良・平安時代頃までは住居の痕跡が残され、住居廃棄後早い段階から継続的に遺物の投棄の行われたことが窺われる。

また、本住居は炭化材を出土することから焼失家屋であった可能性を持つが、出土炭化材の建築材に於ける種別は特定できなかった。この他、本住居がやや屈曲したようなプランを呈することから2軒への分離も考慮されたが、土層断面等の検討から分割される要件は見出せなかった。

規模 長軸：506cm 短軸：339cm 深さ：21cm

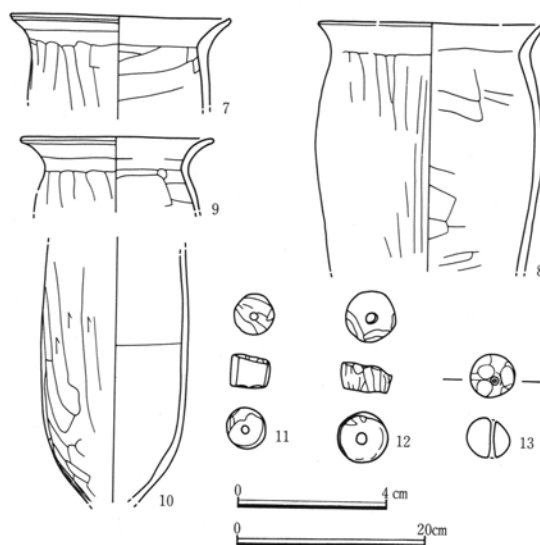
カマド 残存幅：124cm

貯蔵穴 径：59×45cm 深さ：44cm

構造 本住居は横長であり、やや隅丸の長方形プランを呈している。

掘り方を有し、掘り方面には深さ35cm以下の多くのピットが見られたが、特段の規則的な掘削等は確認されなかった。床面はこうした掘り方を暗黒褐色土等で埋め戻して造っている。

カマドは東カマドで、東壁中央付近に造られるよ



第384図 H-168号住居掘り方及び出土遺物

うであるが、破壊が著しいこともあって遺構形態を記録することはできなかった。浅い掘り方を有し、これを淡茶褐色土等で埋め戻して燃焼面を造り出しているが、燃焼部は壁面の手前側に設定されている。

床面に於いては貯蔵穴1基を確認している。貯蔵穴はカマド右側の南東コーナー付近に掘削され、下半部は柱穴様の形態で、上半部は開き気味である。尚、柱穴を確認することはできなかった。

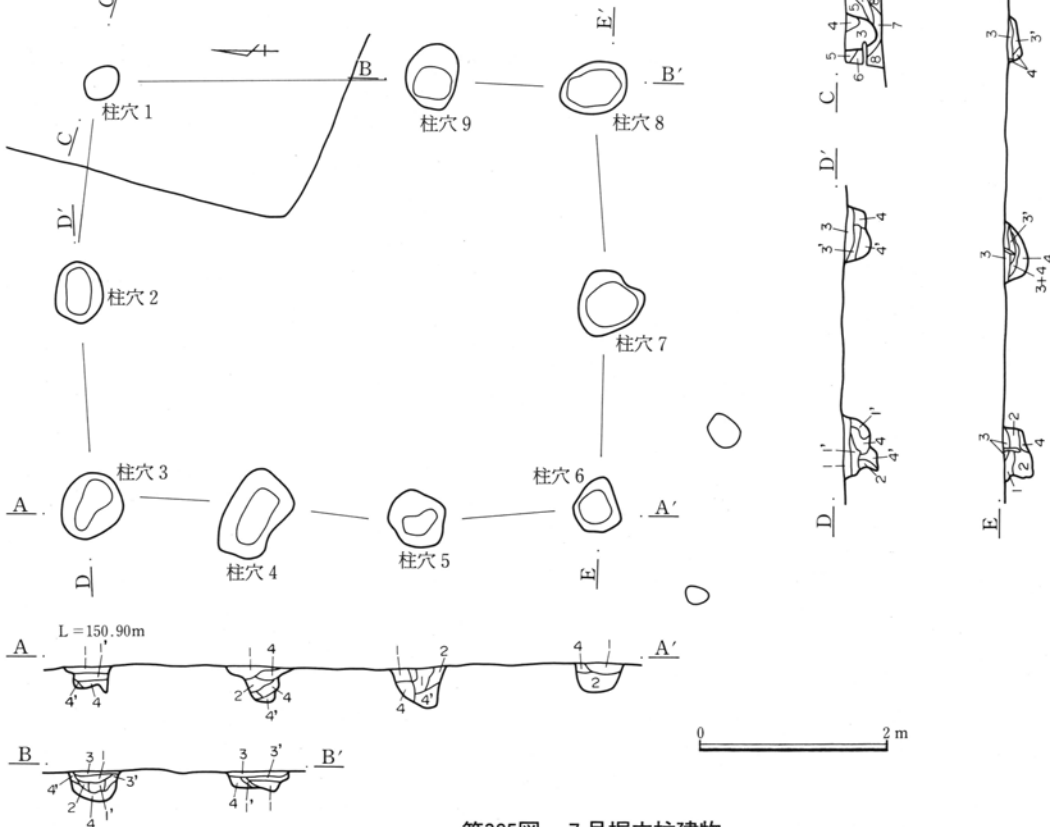


7号掘立柱建物柱穴覆土

1：暗黒褐色土：褐色土粒多量に含む。(1'：褐色土粒激減)
 2：黒色土：殆ど夾雑物見られず。 3：暗灰褐色砂質土：白色土粒を若干含む。(3'：3層に比し白色土粒少ない。) 4：暗褐色土：暗黒褐色土と褐色土の混土。(4'：暗黒褐色土主体。)

H-120号住居覆土

5：暗褐色土：褐色土粒若干量含む。 6：暗褐色土：固く締まり、白色土粒微量に含まれる。 7：暗茶褐色土：褐色土を主体に黒色土混入。 8：暗黒褐色土：暗黒褐色土中に褐色土少量混入する。



第385図 7号掘立柱建物

7号掘立柱建物（奈良時代以降、第385図、図版134）

概要 本建物はD区中南部の、後述する11号溝に囲まれた一面に所在し、H-120号住居の覆土に柱穴の二つを掘り込んで造られる掘立柱建物である。

出土遺物は見られなかったが、奈良時代以降に埋没を完了したと推定されるH-120号住居の覆土を掘り込むことから、それ以降の所産と判断される。

規模 柱穴2 径：64×52cm 深さ：24cm 柱穴3 径：72×63cm 深さ：36cm 柱穴4 径：99×62cm 深さ：35cm 柱穴5 径：67×59cm 深

さ：44cm 柱穴6 径：59×54cm 深さ：32cm 柱穴7 径：69×68cm 深さ：31cm 柱穴8 径：75×54cm 深さ：25cm 柱穴9 径：81×57cm 深さ：31cm

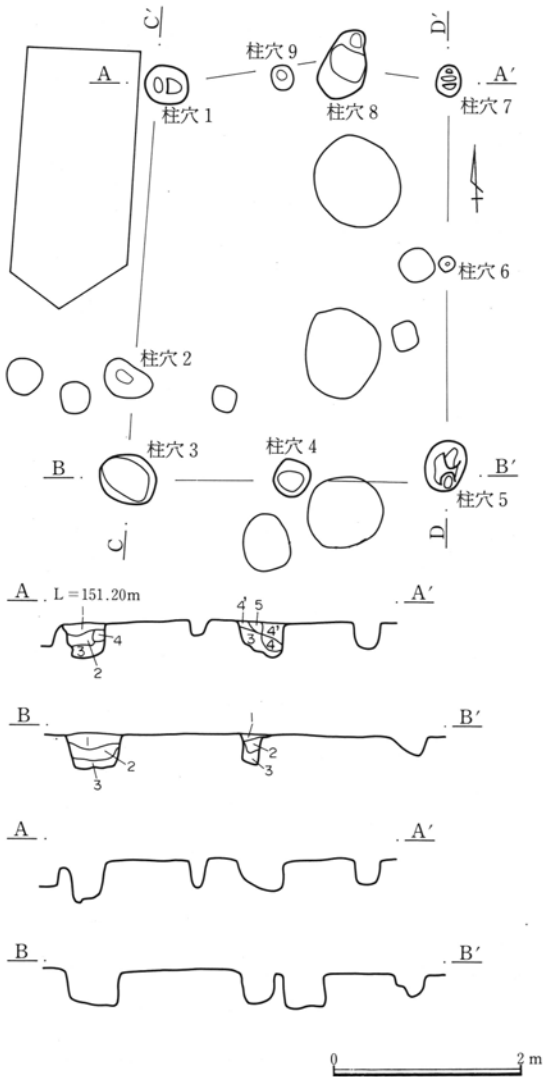
構造 本建物は南北に長い2×3間の規格の建物で、スパンは平均で東西225cm、南北179cm程を測る。

個々の柱穴の掘り込みは深くないが、統一的な規格性は認められない。尚、柱材の径については20～30cm程と推定される。



本建物は柱穴1・3・5・7を結ぶライン上に見出されるのであるが、中間の柱については想定される位置に見出せないものもあった。また、柱穴8についてはその形態等から恐らく本建物には伴わないものと思われる。尚、本建物は後述の10号掘立柱建物と重複関係にあるが、新旧は特定されなかった。

出土遺物は無かったが、覆土にAs-A・As-Bを含まないことと付近の小ピットでAs-B混入の有無が識別されることから古代以前の所産と想定される。



第386図 9号掘立柱建物

9号掘立柱建物（古代以前か、第386図、図版134）

概要 本建物はD区東南部、C区南西部からD区東南部にかけて見られる掘立柱建物の多く分布する区域の一画に所在している。

- 規模**
- 柱穴1 径：48×40cm 深さ：43cm
 - 柱穴2 径：54×38cm 深さ：43cm
 - 柱穴3 径：62×56cm 深さ：34cm
 - 柱穴4 径：40×39cm 深さ：32cm
 - 柱穴5 径：56×41cm 深さ：42cm
 - 柱穴6 径：17×17cm 深さ：36cm
 - 柱穴7 径：31×27cm 深さ：29cm
 - 柱穴8 径：76×52cm 深さ：39cm
 - 柱穴9 径：26×25cm 深さ：28cm

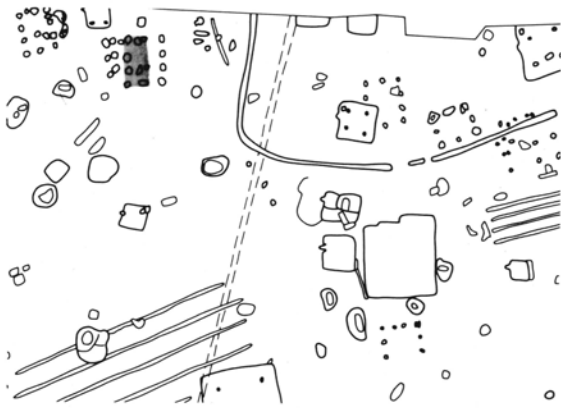
9号掘立柱建物柱穴覆土

1：暗黒褐色土：淡黄褐色土粒を多量に含み、締まり欠ける。 2：暗褐色土：As-YPを相当含んで固く締まる。 3：くすんだ茶褐色土：2層に比しAs-YP更に多量に含み、更に固く締まる。 4：黒色砂質土：比較的良く締まり褐色土粒少量混入。（4'：若干褐色掛かり、若干締まりも弱い。） 5：黒色土：夾雑物殆ど見られず。

構造 本建物は主軸を南北に向けるものである。その規格は東西2間であり、南北は西側列は3間、東側列は2間であったものと想定される。

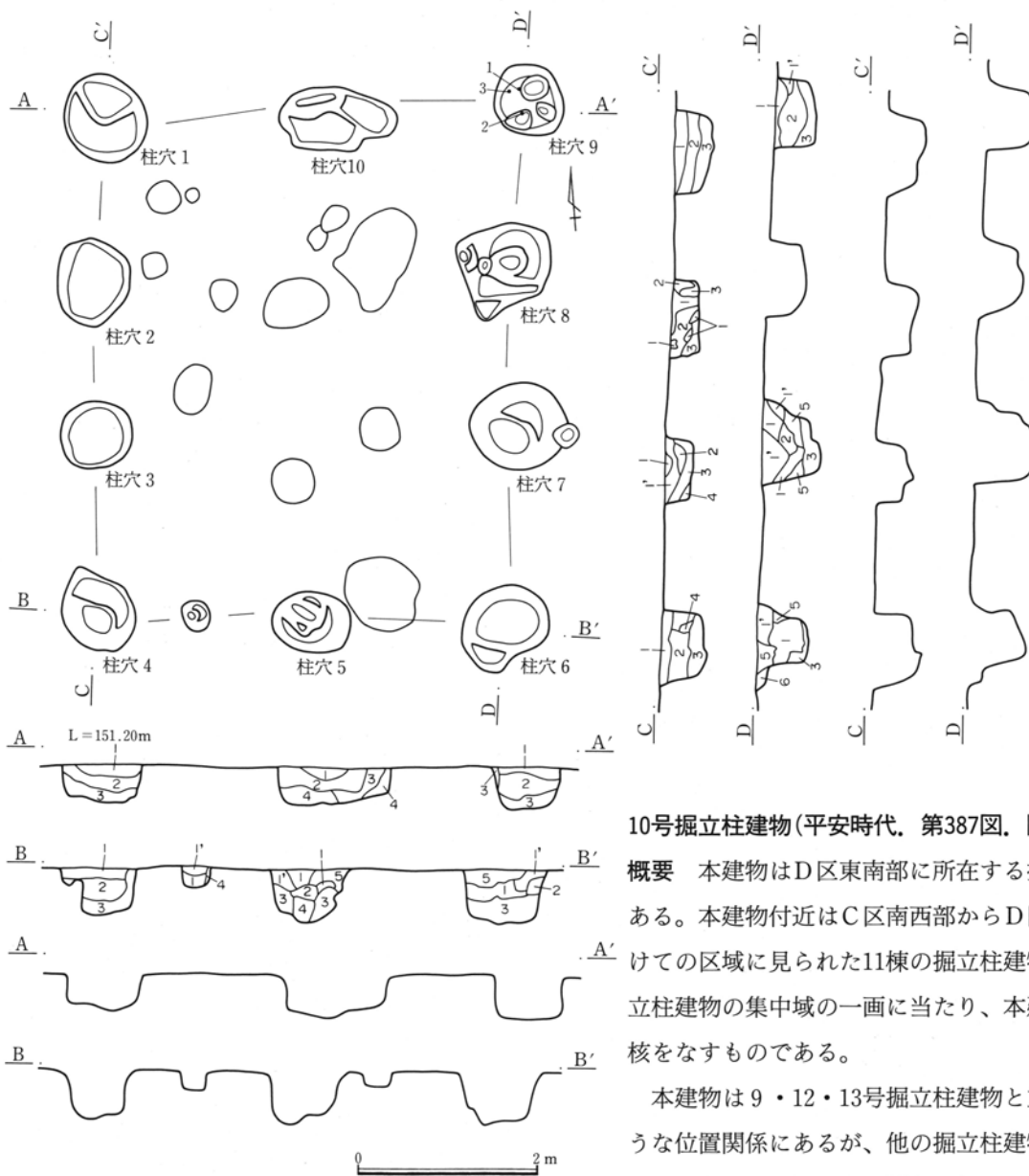
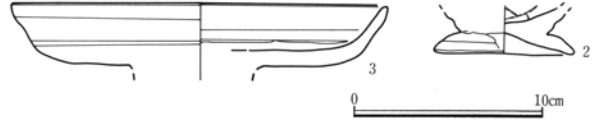
スパンは東西では130~178cm、平均162cm程を測り、南北のものうち東側列は198~207cm程で、平均202.5cm、西側列は確認された柱穴2と柱穴3で110cm程を測る。

各柱穴の掘り込みは深いものではなかったが、その形状には様々なものがあり規格に統一性は認められなかった。しかし、概ね四隅の柱穴は大きく中間の柱穴は小さい傾向にあることが認められる。



10号掘立柱建物柱穴覆土

1：暗黒褐色土：微小白色土粒を相当量含む。(1'：暗褐色土：成分1層と同様であるが色調が明るく褐色味が強くなる。) 2：黒色土：微小白色土粒の混入は減少するが、代わってロームブロック(径2~3cm)が少量含まれる。 3：黒色土：2層よりも更に多量のロームブロック(径1~2cm)が含まれる。 4：黒色土：混入するロームブロックは更に大型化(径5~6cm)する。 5：暗褐色土：暗褐色土とロームブロック(径1cm内外)の混土。 6：暗黒褐色土：白色粒子を少量含む。



10号掘立柱建物(平安時代. 第387図. 図版134・160)

概要 本建物はD区東南部に所在する掘立柱建物である。本建物付近はC区南西部からD区東南部にかけての区域に見られた11棟の掘立柱建物の集まる掘立柱建物の集中域の一画に当たり、本建物はその中核をなすものである。

本建物は9・12・13号掘立柱建物と重なり合うような位置関係にあるが、他の掘立柱建物の柱穴との間には直接的な切り合い関係は無く、従ってこれらの掘立柱建物との間に新旧関係を特定することはで

第387図 10号掘立柱建物

きなかった。

本建物の柱穴からは、奈良・平安時代のものを中心とする土師器坏・甕など幾つかの遺物の出土が見られたが、この中には7世紀後半期の特徴を示すものと思われる須恵器脚付盤(3)や、9世紀代のものかと思われる土師器台付甕(2)などが見られた。また、厚手の椀のような形状を呈する被熱の痕跡のある土壌塊(1)が取り上げられていたが、これは椀型鉄滓を産出する炉の底部を形成していたものではないかと考えられるものである。

さて、これらの遺物は何れも本建物に直接伴うものではなく、また本建物の時期を示し得るものでもなかった。しかし乍ら、これらは柱穴覆土に巻き込まれていたものであり、この中に9世紀代のものと思われる資料が含まれていることから9世紀以降の所産と判断され、一方、9号掘立柱建物と同様に覆土にAs-A・As-Bを含まないことからAs-Aの降下した12世紀初頭以前の段階のものとして把握できるものと思われる。

規模 柱穴1 径：98×90cm 深さ：42cm 柱穴

11号掘立柱建物(時期不詳、第388図)

概要 本建物はD区の東南部、C区南西部からD区東南部にかけての掘立柱建物の集まる区域の西端部に位置している。

本建物は後述するように平行な直線ラインの上やや不規則に配列する小型のピットの集合体であり、10号掘立柱建物のように明瞭な規格性を持つ掘立柱建物ではなかった。こうした遺構の状況もあって、本建物は柱穴掘削後に掘立柱建物として認識され処理されたものである。

本建物からの出土遺物はなく、また覆土に関する記録も残されなかったため、本建物の時期は不明である。但し、本建物はC区南西部からD区東南部にかけての奈良・平安時代のものを中心とすると思われる掘立柱建物群の一画を成しているため、その時期に含まれる可能性を持つ。

規模 柱穴1 径：26×17cm 深さ：16cm 柱穴

2 径：87×79cm 深さ：36cm 柱穴3 径：80×75cm 深さ：32cm 柱穴4 径：86×81cm 深さ：57cm 柱穴5 径：88×68cm 深さ：68cm 柱穴6 径：100×82cm 深さ：63cm 柱穴7 径：102×97cm 深さ：66cm 柱穴8 径：103×99cm 深さ：52cm 柱穴9 径：83×76cm 深さ：55cm 柱穴10 径：129×74cm 深さ：53cm

構造 本建物は主軸を南北に取り、その規格は2×3間を呈するものである。

建物の全体規模は概ね580×570cmを測るが、個々のスパンは短軸側(東西方向)では凡そ220~345cm程で平均は概ね281cm程を測り、長軸側(南北方向)では凡そ175~205cm程で平均は概ね194cm程を測る。

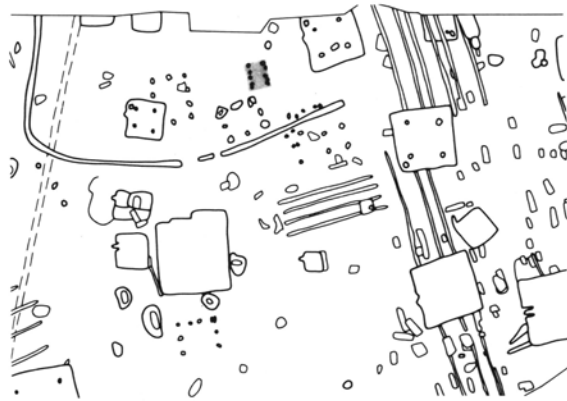
個々の柱穴のプランには異同があり、特に柱穴10は複数の柱穴が重なっている可能性を有するものであるが、全体的には本建物の柱穴の規模は大きく、平底気味であるという共通点を有している。

尚、断面観察や柱穴の底面の形態等の記録から、本建物に使用された柱材の径は概ね30~40cm程を測るものであったものと思われる。

2 径：21×19cm 深さ：15cm 柱穴3 径：30×27cm 深さ：13cm 柱穴4 径：28×23cm 深さ：20cm 柱穴5 径：32×31cm 深さ：21cm 柱穴6 径：40×40cm 深さ：38cm 柱穴7 径：28×24cm 深さ：43cm 柱穴8 径：32×31cm 深さ：30cm 柱穴9 径：28×25cm 深さ：17cm 柱穴10 径：22×19cm 深さ：14cm

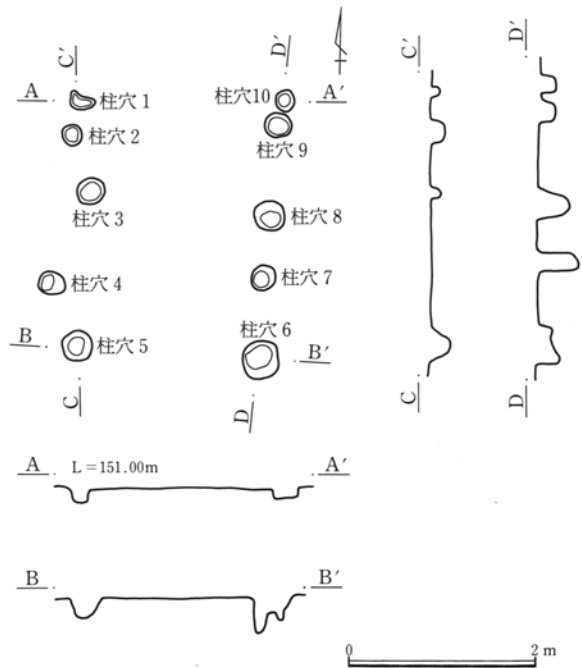
構造 本建物は長方形様のプランを呈し、主軸はやや東に傾く北方を向いている。

本建物は東西で195~224cm程で隔たる南北方向のライン上に概ね配列する、東西5基づつの小型の柱穴で構成され、建物全体の規模は2.2×2.7m前後を測る。本建物のスパンは柱穴1と柱穴10を除くと65~104cm、平均で80.3cmを測るが、柱穴ラインは東列ではほぼ直線的配列を示すものの、西側列では最大22cm程東西に振れるものがあって凹凸がある。ま



柱穴1と2のスペンは35cm程、柱穴9と10のスペンは28cm程と位置的に近すぎるので、柱穴1と10は庇のような構造に伴うもので支柱穴とはならないものと思われる。従って、本建物は1×3間の規格に基づいて建てられていたものと思慮されるのである。

個々の柱穴は円形・隅丸方形または楕円形のプランを呈するものが多かったが、柱穴1は不定形であった。また規模に於いては若干の差異があったが、他の掘立柱建物に比べると小型のものが殆どであ



第388図 11号掘立柱建物

り、概して掘り込みは浅いものが多かった。

12号掘立柱建物(平安時代、第389図、図版134・160)

概要 本建物はD区東南部に所在し、C区南西部からD区東南部にかけて見られる掘立柱建物の集まる区域の一面を占めている。

本建物は10・13号掘立柱建物と重なり合うような位置関係にあるが、両掘立柱建物との間に直接的な切り合い関係は見られず、従ってそれらの掘立柱建物との新旧関係は特定できなかった。

本建物の柱穴からは8世紀後半期のものの特徴を示す須恵器蓋(1)など、僅かではあるが奈良・平安時代の土師器など若干の遺物の出土があった。

これらの出土遺物は直接本建物に伴うものではなかったが、柱穴の覆土に巻き込まれていることから本建物は、平安時代以降の所産であり、一方、9・10号掘立柱建物と同様に、覆土中にAs-A・As-Bが認められなかったことから12世紀初頭以前の所産と考えられるのである。従って、本建物は平安時代の範疇に収まる遺構であると判断されるのである。

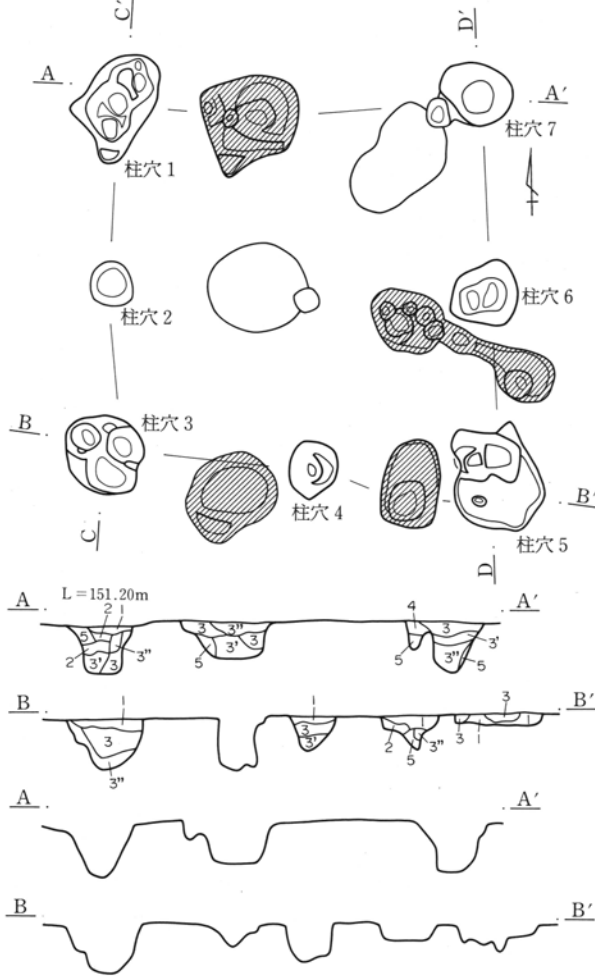
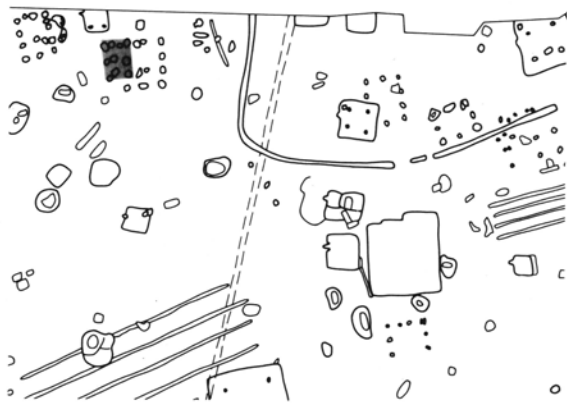
また、本建物の柱穴のうち柱穴1・3・5・6・

7の断面或いは平面の形態観察からは掘り直しの痕跡が窺われた。従って、本建物は建て直しが行われたものと想定することができる。尚、柱穴2・4については掘り直しの痕跡は確認されなかった。

規模 柱穴1 径：120×73cm 深さ：59cm 柱穴2 径：50×45cm 深さ：49cm 柱穴3 径：86×84cm 深さ：57cm 柱穴4 径：64×53cm 深さ：44cm 柱穴5 径：124×92cm 深さ：69cm 柱穴6 径：72×71cm 深さ：62cm 柱穴7 径：80×62cm 深さ：53cm

構造 本建物は概ね方形のプランを呈する、2×2間の構造を呈する建物跡であると判断されるのであるが、北側列の中央に想定される柱穴は確認できなかった。

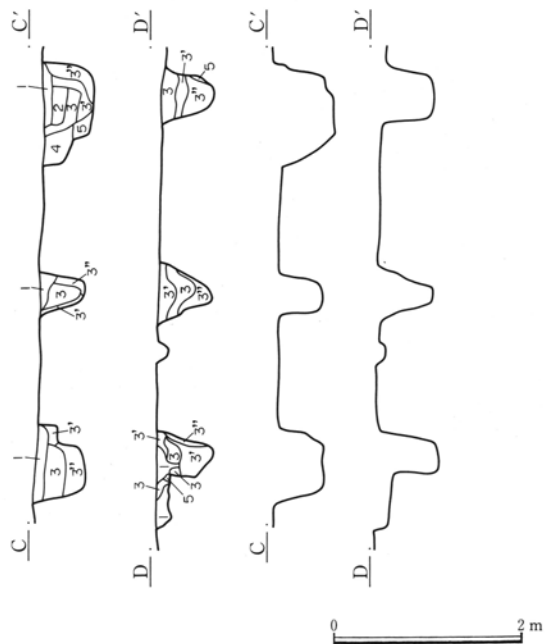
本建物の全体の規模は凡そ400×380cmを測るものである。上述のように本建物には掘り直しの行われた柱穴が多いため、測定ポイントの選択を含めて隣接する柱穴のスペンの想定は難しいが、最終段階の



第389図 12号掘立柱建物及び出土遺物

12号掘立柱建物柱穴覆土

1：黒色土：褐色土粒を多量に含む、粘性に欠ける。 2：くすんだ褐色土：褐色土粒を若干量含む。 3：黒色土：褐色土粒を若干量含む、弱い粘性を持つ。(3'：3層よりも大きめの褐色土粒(径2～3cm)を少量含む。 3''：3層に酷似するものの褐色土は更に大型化する。) 4：暗褐色土：As-YPを相当量含む。 5：暗褐色土：黒色土と褐色土の混土。



ものでは凡そ172～224cmの範囲で捉えられ、平均すると約2m程となる。尚、東西方向と南北方向のスパンに差異は認められなかった。

また柱穴の大きさには差があるが、一回に掘削される柱穴の規模は柱穴4程度の規模になるものと思われる。また掘り込みは、各柱穴とも比較的深くしっかりしていた。

13号掘立柱建物(平安時代, 第390図, 図版134・160)

概要 本建物はD区東南部、C区南西部からD区東南部にかけての掘立柱建物の集中区に所在する。

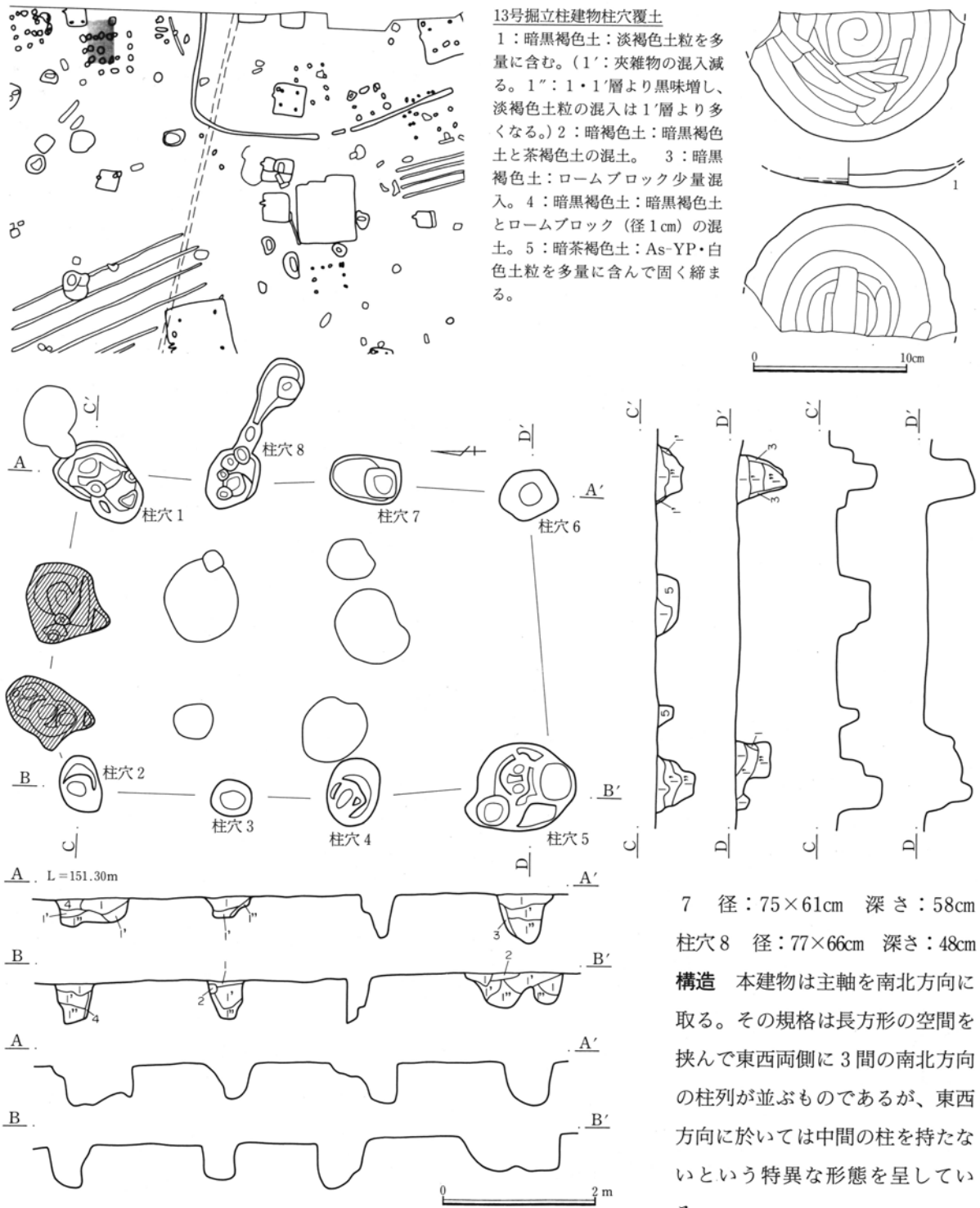
10・12号掘立柱建物と重複関係にあるが、切り合い関係は無く、新旧関係は特定できなかった。

出土遺物には6世紀後半期の須恵器坏(1)など、

古墳時代後期から平安時代のものが見られた。

これらの遺物と覆土中のテフラの状況から本建物は10世紀以降、12世紀初頭以前の所産と判断される。

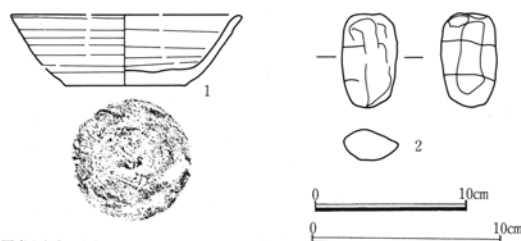
尚、柱穴1・5には掘り直しの痕跡が窺えることから、建て直しのあった可能性が考えられる。



第390図 13号掘立柱建物及び出土遺物

規模 柱穴1 径: 122×83cm 深さ: 55cm 柱穴2 径: 77×53cm 深さ: 61cm 柱穴3 径: 53×48cm 深さ: 48cm 柱穴4 径: 88×68cm 深さ: 68cm 柱穴5 径: 149×113cm 深さ: 55cm 柱穴6 径: 74×62cm 深さ: 64cm 柱穴

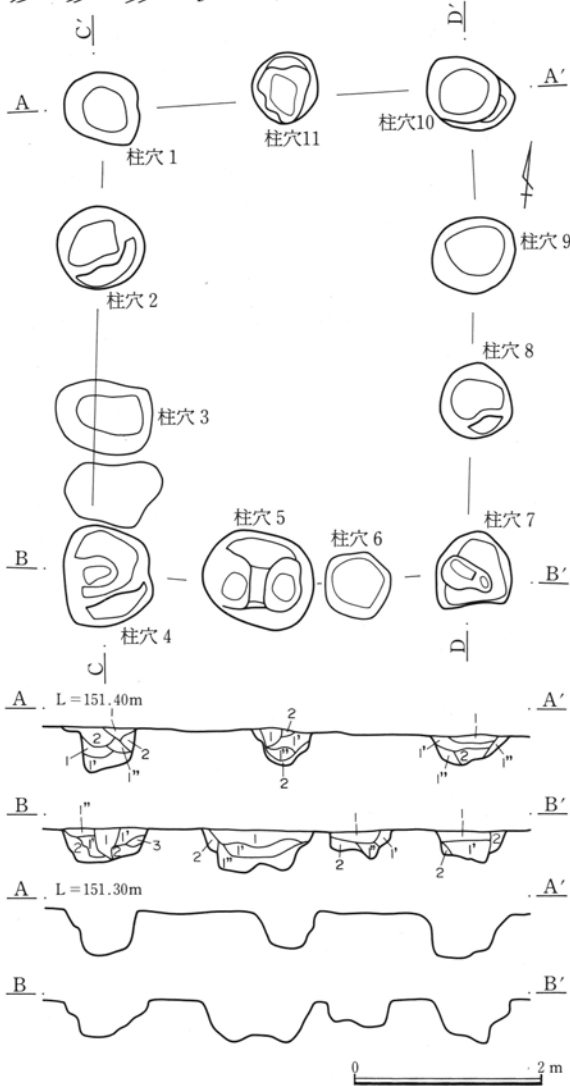
7 径: 75×61cm 深さ: 58cm 柱穴8 径: 77×66cm 深さ: 48cm
構造 本建物は主軸を南北方向に取る。その規格は長方形の空間を挟んで東西両側に3間の南北方向の柱列が並ぶものであるが、東西方向に於いては中間の柱を持たないという特異な形態を呈している。
 建物全体の大きさは580×415cm程を測るものであるが、東西方向のスパンは388～415cm、平均で404.5cmを測り、南北方向では145～297cmと数値に幅があって、平均では242.3cmを測る。
 個々の柱穴の大きさには大小があり形態も一様ではないが、その掘り込みは深くしっかりしている。



14号掘立柱建物柱穴覆土
 1・1'・1''：暗黒褐色土主体。
 2：暗茶褐色土：黒色土と褐色土
 の混土。 3：淡褐色土。

重複する18

号掘立柱建物との新旧関係は特定できなかったが、8世紀後半期と思われる須恵器坏(1)など奈良・平安時代を中心とする遺物やこも編み石(2, 3)などが見られた。これらの出土遺物と柱穴覆土の所見から本建物は



第391図 14号掘立柱建物及び出土遺物

14号掘立柱建物(平安時代, 第391図, 図版134・160・165)

概要 本建物はD区東南のC区南西部からD区東南部にかけての掘立柱建物の集中域に所在する。

は平安時代の所産と判断される。

尚、後述のように南側列のものは特異な状況を示すので、入り口遺構であった可能性を有する。

規模 柱穴1 径：89×78cm 深さ：48cm 柱穴2 径：92×88cm 深さ：46cm 柱穴3 径：102×76cm 深さ：50cm 柱穴4 径：106×94cm 深さ：49cm 柱穴5 径：122×98cm 深さ：47cm 柱穴6 径：71×71cm 深さ：22cm 柱穴7 径：80×78cm 深さ：44cm 柱穴8 径：78×75cm 深さ：49cm 柱穴9 径：83×81cm 深さ：43cm 柱穴10 径：87×73cm 深さ：40cm 柱穴11 径：76×71cm 深さ：42cm

構造 本住居は長方形のプランを呈し、その主軸は概ね北北西を向いている。南北方向を示す柱穴列は

第3章 発見された遺構と遺物

共に3間の規格を示すが、東西方向のものうち北列のものは2間、南列のものは3間の規格である。

建物全体の大きさは凡そ520×410cm程を測るが、そのスパンは、南北列のものは142～195cm程で平均170.33cmを測り、東西列のものうち北側のものは193±3cm程を測るが、南側のものは柱穴5の底面は後述のように2カ所あるので、その何れを取るかで

変わってくるが、西側のものを使用した場合は134～147cm程、平均で138.33cm程を測る。

個々の柱穴は概ね大きくしっかりした掘り込みであるが、南列内側の柱穴5は2本の柱を同時に設置したものか、切り合いの無いほぼ同レベルの底面2カ所を有し、一方東側の柱穴6は他の柱穴に比べその掘り込みの深さが半分程度と浅いものであった。

15号掘立柱建物(奈良時代～平安時代、第392図、図版134・160)

概要 本建物はD区東南の、C区南西部からD区東南部にかけての掘立柱建物の集中域に所在する。

本建物の柱穴1は15号風倒木を切っている。

本建物からは西暦70年を前後する時期の特徴を示す須恵器蓋(1)の他5片の土師器片の出土を見た。

この遺物の状況と、12号掘立柱建物と同様に覆土中にはAs-Aを含まないことから、本建物は西暦700年頃以降で、12世紀初頭以前の所産と判断される。

規模 柱穴1 径：45×33cm 深さ：36cm 柱穴2 径：30×26cm 深さ：21cm 柱穴3 径：60×50cm 深さ：52cm 柱穴4 径：47×46cm 深さ：62cm 柱穴5 径：50×42cm 深さ：48cm 柱穴6 径：39×31cm 深さ：29cm 柱穴7 径

：60×54cm 深さ：42cm 柱穴8 径：41×37cm 深さ：33cm

構造 本住居の主軸は北北東を向き、その規格は2×2間を呈するが、北側及び南側の柱列の中間の柱位置は北側列では西に、南側列では東に寄っている。

住居規模は概ね408×354cmで、そのスパンは南北方向のものは192～212cmで、平均201.5cmを測りほぼ一定しているが、東西方向の柱列は中間の柱位置にズレが見られるため、スパンも124～184cm程(平均は167cm程)と開きがある。

個々の柱穴の大きさや掘削の深さは一定していないが、概して4隅に当たる柱穴の規模に対して中間のもの規模は小さいという傾向が見られた。

16号掘立柱建物・115号土坑・116号土坑・117号土坑(奈良時代～平安時代、第392図、図版135・160)

概要 16号掘立柱建物と115・116・117号土坑はD区中南部、11号溝の内側に接するように在る。

115～117号土坑は形態等から別遺構として処理してきたが、16号掘立柱建物の西側列中間の柱穴位置にはピット3基があるが不明瞭なこと、115～117号土坑の掘削位置が16号掘立柱建物の柱列の延長部に当たっていることなどから、同一遺構の可能性が高いものと判断される。

尚、これらの柱穴・土坑には小型のピットの絡むものもあり、遺存状況は良好ではない。

115～117号土坑からの出土遺物はなかったが、16号掘立柱建物からは8世紀後半期の特徴を示す土師器坏(1)等が出土しており、覆土の状況と併せて8世紀後半以降、12世紀初頭以前の所産とできる。

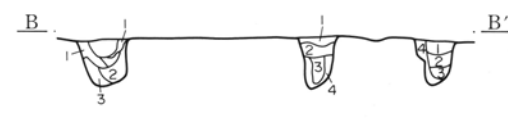
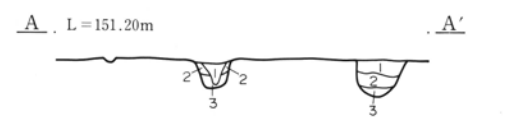
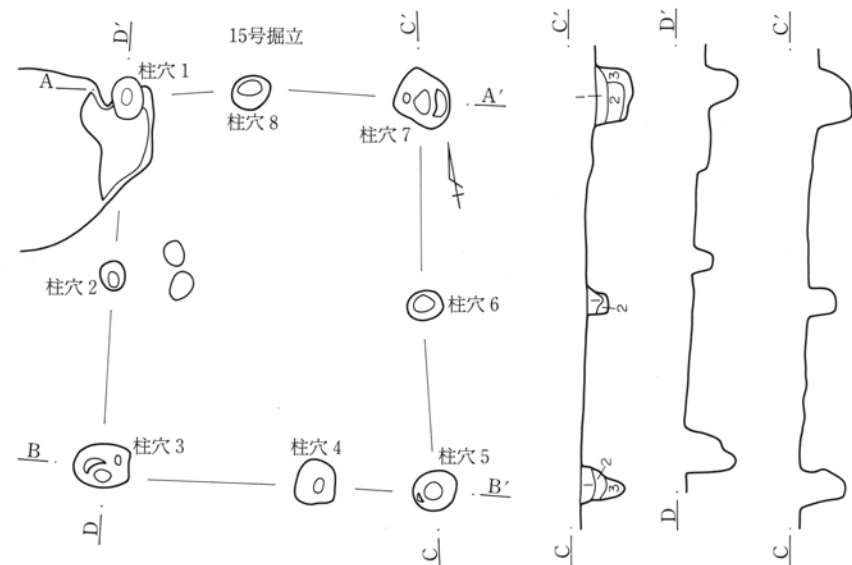
規模 柱穴1 径：52×51cm 深さ：43cm 柱穴2 径：163×108cm 深さ：31cm 柱穴3 径：170×130cm 深さ：79cm 柱穴4 径：57×44cm 深さ：39cm 柱穴5 径：92×82cm 深さ：33cm

115号土坑 径：118×116cm 深さ：45cm 116号土坑 径：92×68cm 深さ：23cm 117号土坑 径：122×93cm 深さ：29cm

構造 115・116・117号土坑を取り込んだ場合、16号掘立柱建物は2×2間の規格を有する。

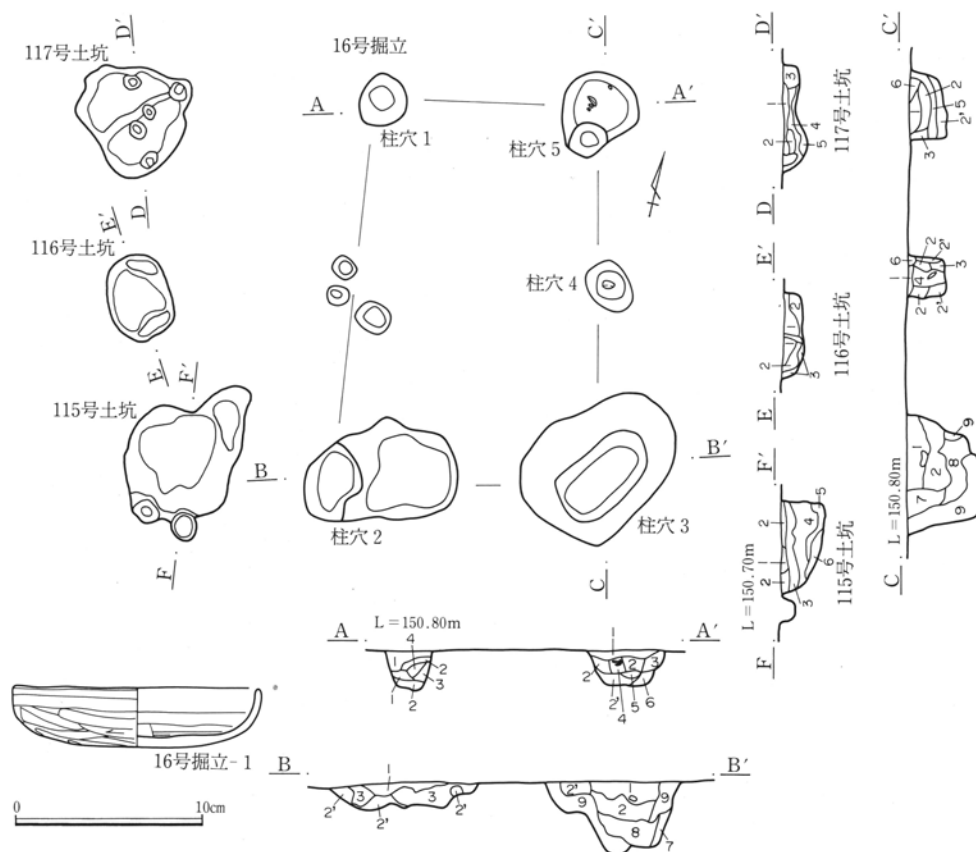
この場合の建物全体の大きさは凡そ495×400cm程を測るが、スパンは東西で平均236.25cm、南北列では平均183.75cm程を測る。

個々の柱穴の規模・形態は多様で、統一性は見られない。また柱材の径も特定されなかった。



15号掘立柱建物柱穴覆土

1：暗褐色土：ローム小ブロック少量含まれる。2：黒色土：褐色微粒子を多量に含む。3：黒色土：2層よりも大粒の褐色土粒を少量含む。4：暗褐色土：ロームの小ブロックと褐色土粒を多量に含む。黒色土は1cm程度の斑状となって主体的に混入する。



16号掘立柱建物柱穴覆土

1：暗黒褐色土：くすんだ褐色土の小ブロックを少量含む。2：暗黒褐色土：くすんだ褐色土小ブロックとローム小ブロックを微量含む。(2'：褐色土とロームブロックの混入量多くなるものの主体土が黒色土に近く全体の色調は2層程明るくない。)3：暗褐色土：ロームの小ブロックを相当量含む。4：暗黒褐色土：ローム中ブロックを若干量含む。5：黒色土：夾雑物殆ど見られず。6：暗褐色土：固く締まったくすんだ褐色土大ブロックを主体に、黒色土・褐色土が相当量含まれる。7：暗灰褐色土：全体的に固く締まり白色土粒・褐色土粒を極めて多量に含む。8：暗褐色土：暗黒褐色土中に7層中に見られた褐色土粒が若干量混入する。9：暗茶褐色土：黒色土少量混入する。

115号土坑覆土

1：暗黄褐色土：白・黄色粒を含みロームを少量含む。攪乱か。2：暗褐色土：ロームをまばらに少量含み白・黄色粒を僅かに含む。3：褐色土：ロームを全体に含む。4：黒褐色土：ロームブロックを含む。5：黒褐色土：まばらにロームを含む。6：黒褐色土：ロームを全体に多く含む。

116号土坑覆土

1：暗褐色土：ロームブロック・As-YPを少量含む。2：暗黄褐色土：ローム・As-YPをまばらに多く含む。

地山層

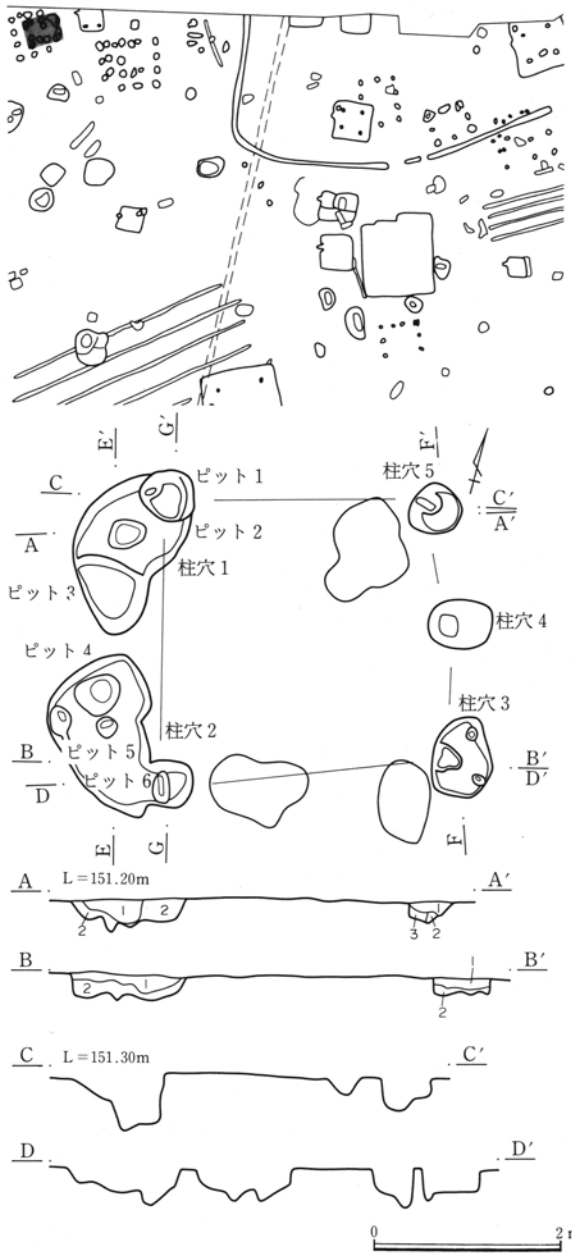
3：黄褐色土：ローム主体にAs-YP少量含む。

117号土坑覆土

1：暗褐色土：ロームを全体に含む。2：黄褐色土：ロームを主体とし、白・黄色粒を少し含む。3：暗褐色土：ロームを全体に少し含む。4：褐色土：As-YPを含みロームをまばらに多く含む。

地山層

5：明黄褐色土：ロームを主体とし、As-YPを多く含む。



第393図 18号掘立柱建物及び出土遺物

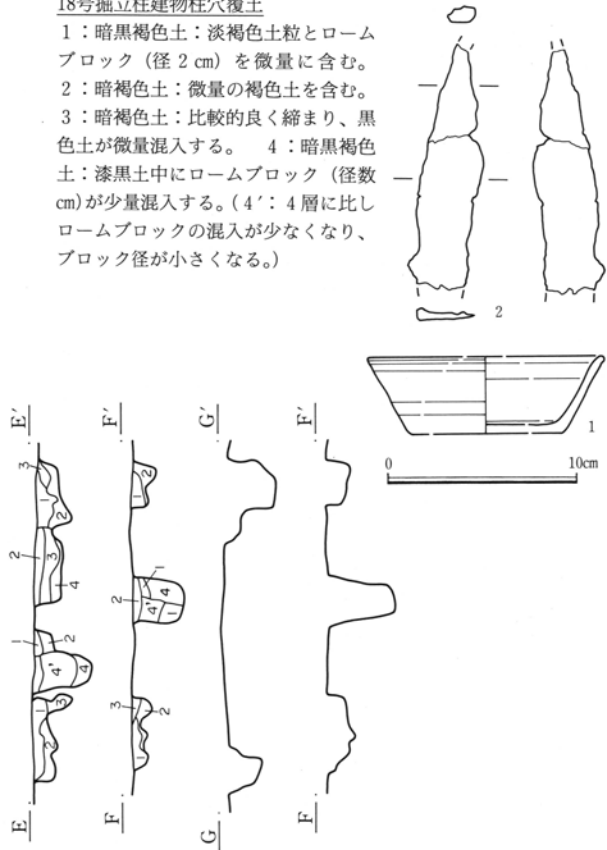
18号掘立柱建物(奈良時代～平安時代, 第393図, 図版135・161)

概要 本建物は掘立柱建物の多いD区東南部に位置し、14号掘立柱建物と重複するが、遺構の切り合いはなく、新旧関係は特定できなかった。

本建物からは須恵器坏(1)など奈良時代以降のものを中心に、刀子状の鉄製品(2)の出土も見た。こうした出土遺物とテフラから8世紀後半以降、12世紀初頭以前の所産として本建物は把握される。

18号掘立柱建物柱穴覆土

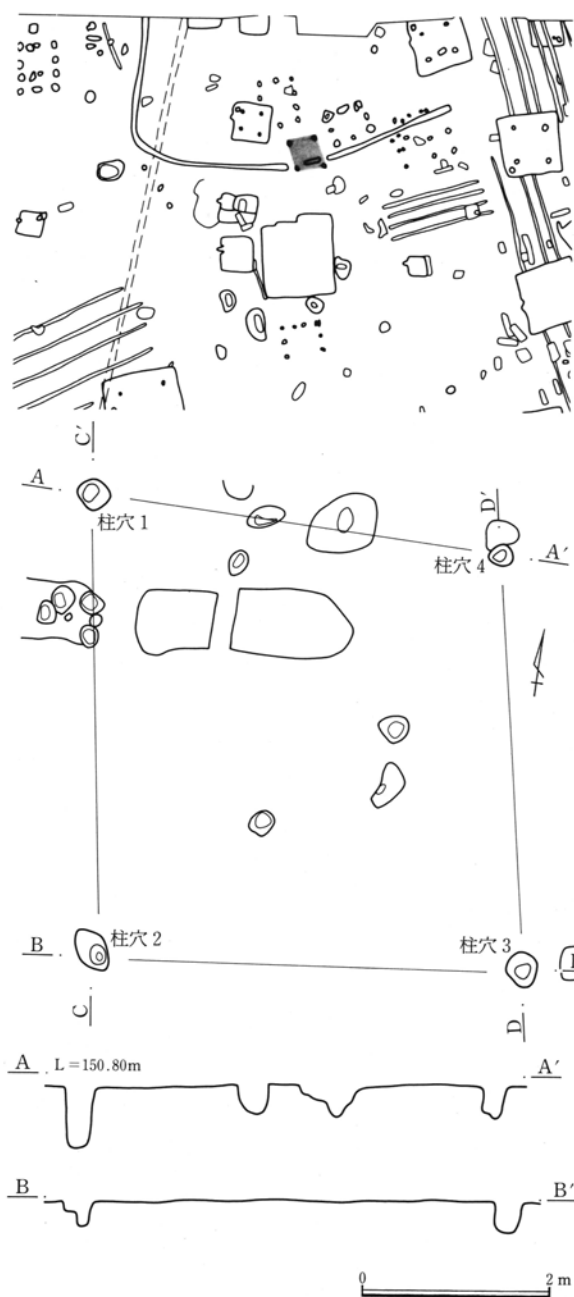
- 1: 暗黒褐色土: 淡褐色土粒とロームブロック(径2cm)を微量に含む。
- 2: 暗褐色土: 微量の褐色土を含む。
- 3: 暗褐色土: 比較的良く締まり、黒色土が微量混入する。
- 4: 暗黒褐色土: 漆黒土中にロームブロック(径数cm)が少量混入する。(4': 4層に比しロームブロックの混入が少なくなり、ブロック径が小さくなる。)



規模 柱穴1 径: 181×120cm 深さ: 25cm
 (ピット1 径: 58×55cm 深さ: 27cm ピット2 径: 22×32cm 深さ: 33cm ピット3 径: 92×70cm 深さ: 5cm)
 柱穴2 径: 180×114cm 深さ: 24cm (ピット4 径: 50×42cm 深さ: 45cm ピット5 径: 13×12cm 深さ: 18cm ピット6 径: 32×16cm 深さ: 19cm)
 柱穴4 径: 84×64cm 深さ: 30cm 柱穴5 径: 72×55cm 深さ: 73cm 柱穴5 径: 54×54cm 深さ: 35cm

構造 本建物の主軸は東北東を向き、294～325cmの間隔を持って南北方向に柱穴列が掘削される、方形のプランを基本に、西縁に円弧状の張り出しを持つ異形の形状を呈している。

柱列のうち東列のものは130～136cmの跨度で柱穴3・4・5が掘削される。一方、西側では北西隅から南西、南西隅から北西に向けて三日月状プランの土坑様の掘り込み柱穴1・2が掘削され、それぞれの底面の両端と中間に小型のピットが更に掘削されるという構造を持っている。



第394図 19号掘立柱建物

19号掘立柱建物（奈良・平安時代か、第394図、図版135）

概要 本建物はD区中南部に位置し、11号溝を跨ぐように所在している。

本建物からの出土遺物はなく、覆土の記録化もできなかったので時期は特定されなかった。しかし本建物は11号溝の途切れる付近に位置し、その中心は11号溝よりも1m程南に在るものの軸が直行するため、本建物は11号溝の出入口に伴う施設であるもの

と思慮される。従って、その時期は奈良・平安時代である可能性が想定されるのである。

規模 柱穴1 径：32×29cm 深さ：59cm 柱穴2 径：50×33cm 深さ：25cm 柱穴3 径：38×33cm 深さ：30cm 柱穴4 径：26×21cm 深さ：33cm

構造 本建物は方形に近い菱形のプランを呈し、主軸は北北西を向いている。

スパンは平均で454.5cmを測るが、やや長過ぎるきらいがあり、また中間のピットも特定されなかった。こうした長いスパンと柱穴の規模が小さいことを併せて、本建物は

簡略な構造の建物であったことが想定される。

尚、柱材の規模等は特定されなかった。

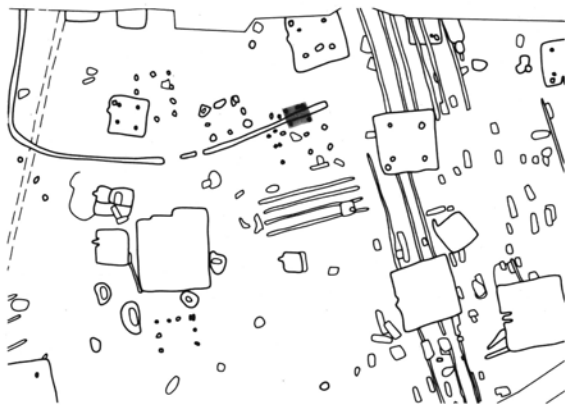
20号掘立柱建物（古墳時代後期以降、第395図、図版135・161）

概要 本建物はD区中南部の11号溝を挟む柱穴・ピットの多く集まる一画に所在している。

本建物は11号溝を跨ぐ位置に在り、21・22号掘立柱建物と重複関係にあるが、柱穴同士の切り合いが見られないので新旧関係は特定されなかった。また、11号溝が本建物を縦断しているがこれに対しても新旧関係を特定することはできなかった。

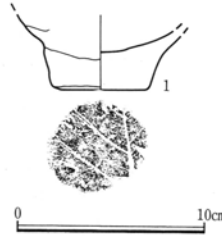
本建物からは6世紀後半期の特徴を持つ土師器甕(1)が出土しており、柱穴覆土にAs-Bを含まないことと併せて本建物は6世紀後半以降、12世紀初頭以前の所産と判断されるが、付近の多くの掘立柱建物と同様に奈良・平安時代の所産と推定される。

規模 柱穴1 径：20×20cm 深さ：26cm 柱穴2 径：34×28cm 深さ：7cm 柱穴3 径：44



20号掘立柱建物柱穴覆土

1：暗黒褐色土：白色土粒を極く微量含む。 2：暗茶褐色土：暗茶褐色土中に黒色土が若干混入する。(2'：2層よりも黒色土の混入減少) 3：暗黒褐色土：くすんだ褐色土ブロック(2~3cm)を少量含む。



×26cm 深さ：35cm

柱穴4 径：53×49cm

深さ：27cm 柱穴5

径：75×70cm 深さ：32

cm 柱穴6 径：32×

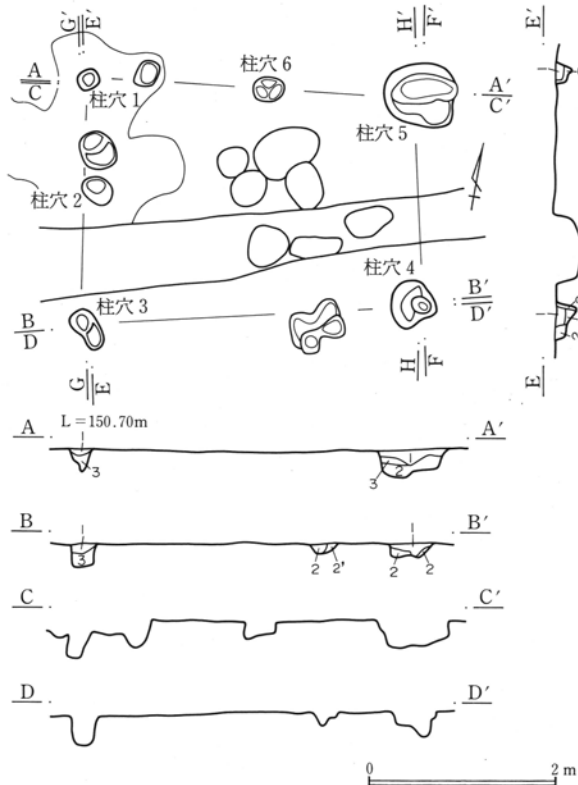
25cm 深さ：25cm

構造 本建物は長方形のプランを呈し、主軸は概ね東北東を向く。建物中央を11号溝が通ることもあって中間の柱穴は不明瞭であるが、本建物は2×2間の規格を基本としているものと思われる。

建物全体の規模は概ね

255×362cm程を測るが、スパンは、中間の柱を特定した北・西列について見ると、東西方向では171±13cm、南北方向では128±15cmを測る。尚、東列の長さは225cm、北列の長さは344cmを測る。

個々の柱穴の大きさにはばらつきがあるが、全体的に見るとその径は小さく、掘り込みも浅い。



第395図 20号掘立柱建物及び出土遺物

21号掘立柱建物(奈良・平安時代. 第396図. 図版135)

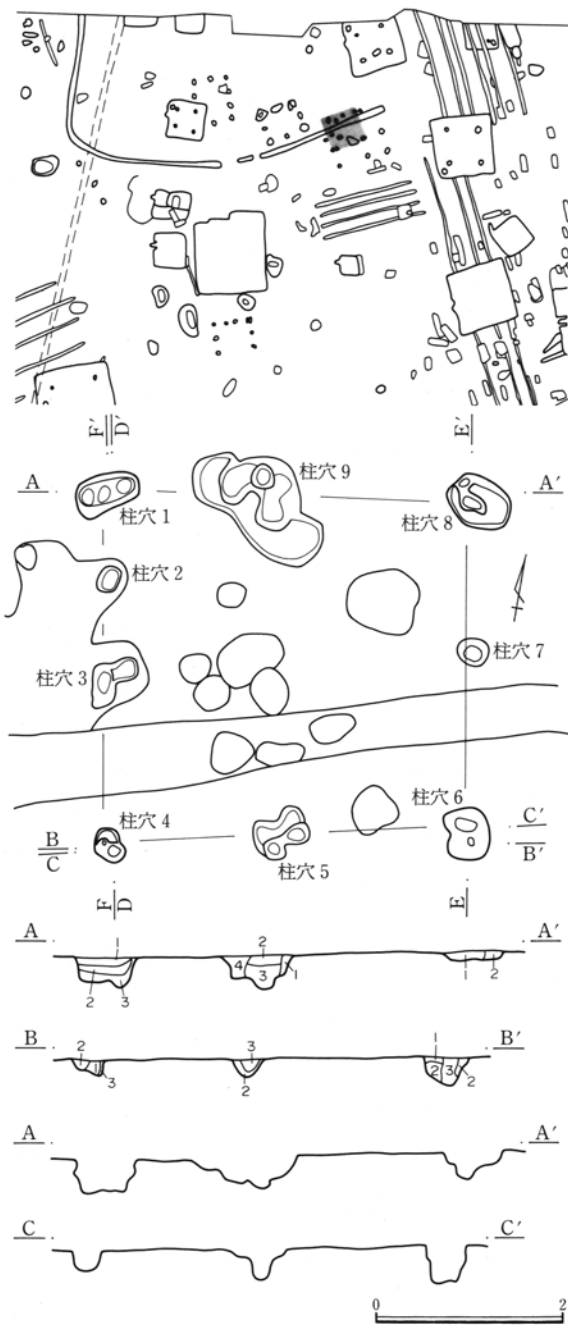
概要 本建物はD区中南部の、11号溝を挟む柱穴・ピットの多い一画に位置している。

本建物は11号溝を跨ぐ位置に建てられ、20・22号掘立柱建物とも重複関係にあるが、これらの遺構との間に新旧関係を特定することはできなかった。

本建物からは奈良・平安時代の土師器甕片が1片出土しただけであり、一方覆土中にAs-Bの確認ができなかったので、断定はできないが本建物は奈良・平安時代の所産ではないかと思慮される。

また、柱穴1・4が複数の底面を持つことから建て直しの可能性も考慮される。

規模 柱穴1 径：50×41cm 深さ：42cm 柱穴2 径：28×23cm 深さ：29cm 柱穴3 径：49×24cm 深さ：50cm 柱穴4 径：40×29cm 深さ：20cm 柱穴5 径：24×23cm 深さ：32cm 柱穴6 径：58×48cm 深さ：43cm 柱穴7 径：32×29cm 深さ：38cm 柱穴8 径：72×53cm 深さ：28cm 柱穴9 径：28×24cm 深さ：38cm



第396図 21号掘立柱建物

構造 本建物は長方形のプランを呈し、主軸は概ね東北東を向く。規格については東西方向の柱列では2間規格であるが、南北方向については東列では2間、西列では3間の規格を示し、非対称である。

建物全体の規模は概ね390×370cmを測る。スパンについては東西方向の柱列である南・北列では170~210cmで平均192.5cm程を測るが、このうち東側のスパンは南北何れの柱列についても205±5cm、西側のスパンについては南北何れの柱列についても170cm程という規格性を有している。一方、南北方向の柱列のスパンについては、東側の柱列では171±13cmを測り、西側の柱列については平均で125.3cmを測るが90~178cmと幅があってあまり規格性は認められない。

個々の柱穴の規模は一定ではない。また、柱穴1・4については複数の底面を有し、柱穴8は土坑様の掘り方を呈しているが全体として見ると、小規模の掘り方のものが主体である。

21号掘立柱建物柱穴覆土

1：暗黒褐色土：褐色土粒を少量含み、締まりに欠ける。 2：暗茶褐色土：くすんだ黒色土が微量混入。 3：黒色土：締まりの強い黒色土中に褐色土が5cm大のブロックで少量混入。 4：黒色土：白色土粒が極く微量混入する。

22号掘立柱建物(古墳時代後期以降, 第397図, 図版135)

概要 本建物はD区中南部に在り、20・21号掘立柱建物と重複するが新旧関係は不明である。

本建物は土師器片等が出土したため古墳時代後期以降の所産と判断されるが、20・21号掘立柱建物同様、奈良・平安時代の可能性も思慮される。

また、近接して掘削される柱穴等の状況から、本建物は建て直しのあったものと判断される。

規模 柱穴1 径：82×64cm 深さ：35cm 柱穴2 径：46×40cm 深さ：31cm 柱穴3 径：53×44cm 深さ：27cm 柱穴4 径：32×24cm 深さ：55cm 柱穴5 径：44×36cm 深さ：40cm 柱穴6 径：73×43cm 深さ：19cm 柱穴7 径：42×31cm 深さ：55cm 柱穴8 径：58×33cm 深さ：48cm 柱穴9 径：56×47cm 深さ：34cm

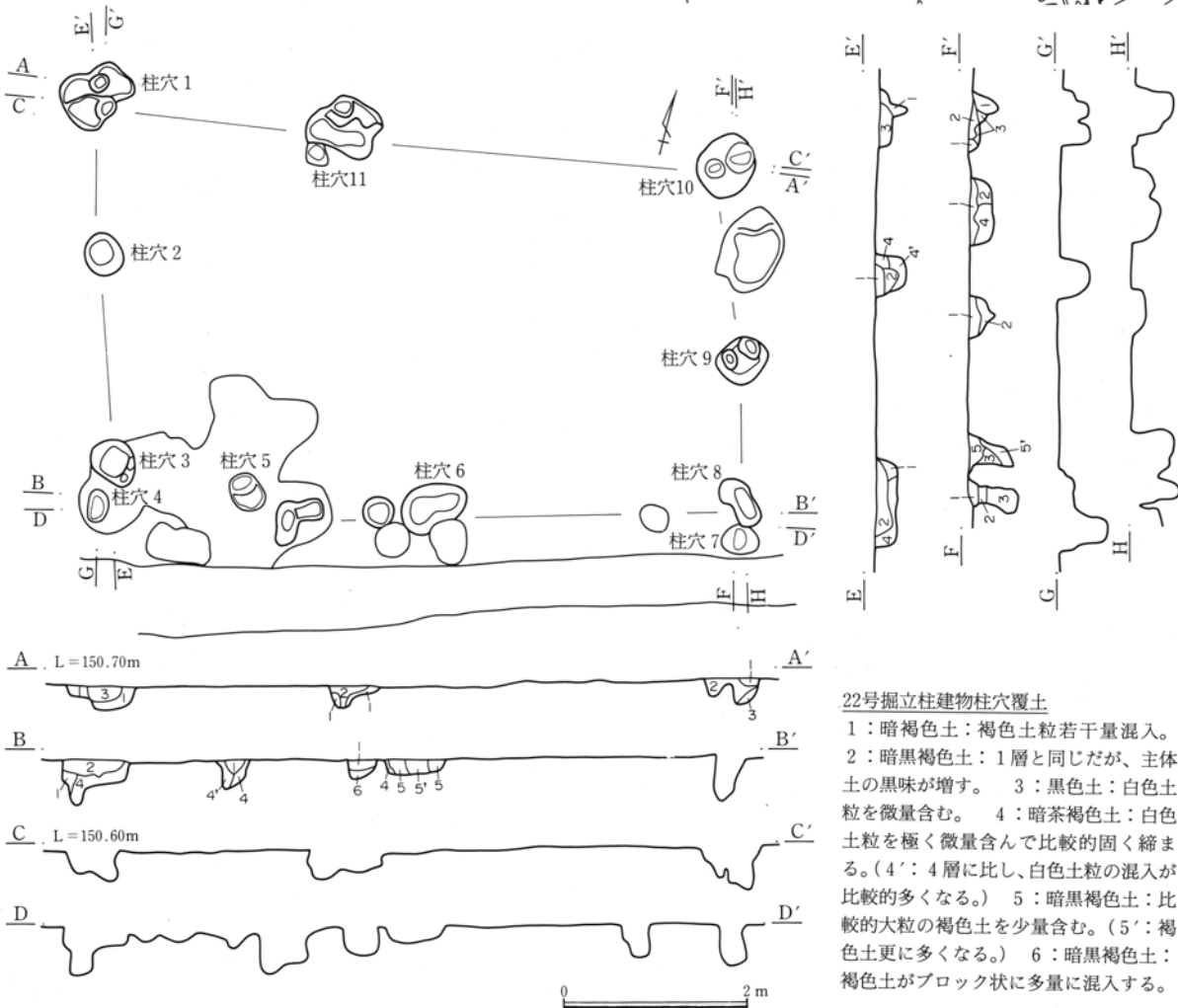
柱穴10 径：67×62cm 深さ：46cm 柱穴11 径：75×59cm 深さ：30cm

構造 本建物の主軸は概ね東北東を向く。

南北方向の柱列は2間の規格を示すが、東西方向の柱列は2～4間の何れかになる可能性があり、特定できなかった。

建物全体の規模は概ね450×700cm程を測り、南北方向のスパンには幅があるが平均で207cm程を測る。

尚、各柱穴の規模は様々で、規格性は見られない。



第397図 22号掘立柱建物

23号掘立柱建物(奈良・平安時代, 第398図, 図版135・161)

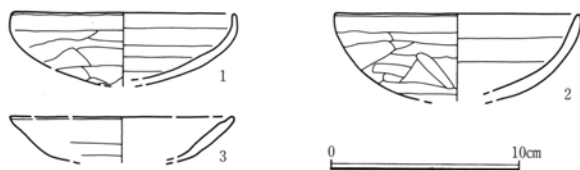
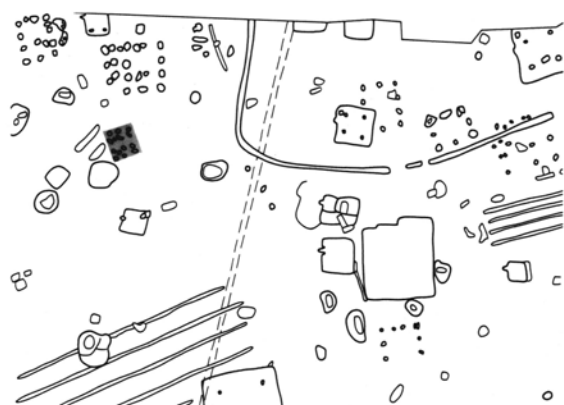
概要 本建物はD区東南部に所在する。

本建物は北東-南西或いは東西に25cm程ずらして掘り直しの痕跡がある柱穴1～6(以下「建物1(a・b)」)と、建物1から66～110cm程南に建てられる柱穴7～11(以下「建物2」)からなる重複する

2棟の掘立柱建物からなる。

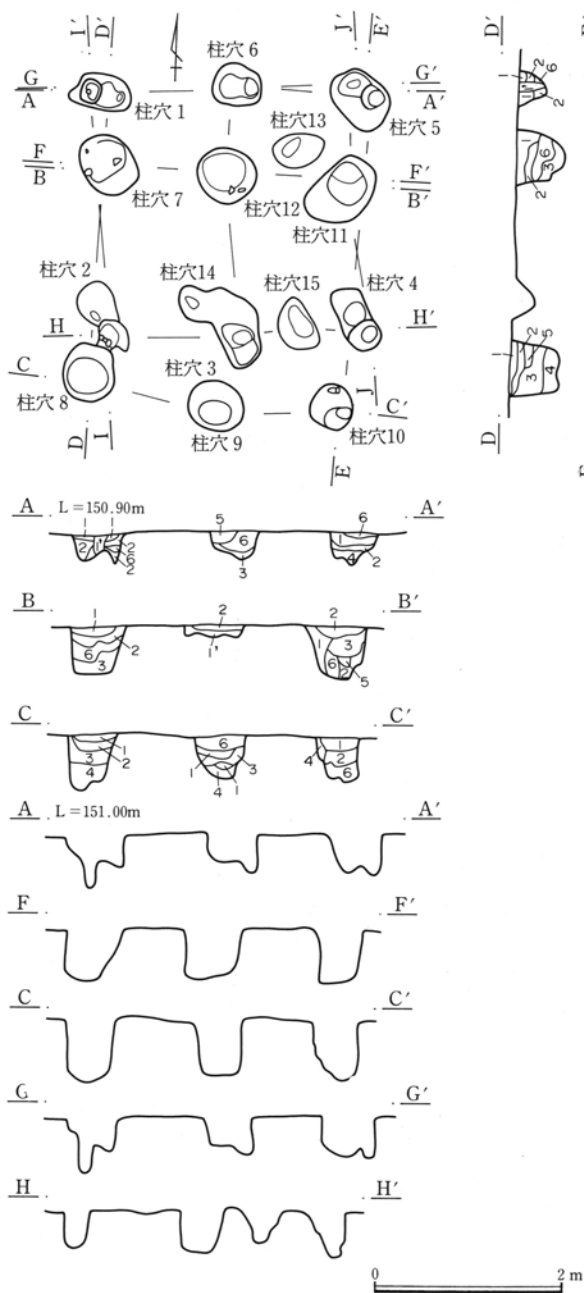
出土遺物には7世紀後半～8世紀後半期(1,2,3)の土師器坏等があるが、覆土と併せて本建物は8世紀後半以降、12世紀初頭以前の所産と想定される。

規模 柱穴1 径：64×38cm 深さ：53cm 柱穴



23号掘立柱建物柱穴覆土

1：黒色土：白色微粒子・褐色粒子多量に含んで堅く締まる。(1'：褐色土ブロック化) 2：黒色土：白色微粒子少量含む。 3：黒色土：褐色土粒・ブロック若干量含む。 4：暗褐色土：黒色土少量混入。 5：暗褐色土：夾雑物無し。 6：暗褐色土：暗黒褐色土にローム主体の褐色土が極めて多量に混入する。



2 径：80×38cm 深さ：33cm 柱穴3 径：92×46cm以上 深さ：51cm 柱穴4 径：73×40cm 深さ：48cm 柱穴5 径：69×52cm 深さ41cm 柱穴6 径：56×44cm 深さ：40cm 柱穴7 径：68×56cm 深さ：51cm 柱穴8 径：59×54cm 深さ：76cm 柱穴9 径：61×54cm 深さ：60cm 柱穴10 径：46×45cm 深さ：67cm 柱穴11 径：83×57cm 深さ：48cm 柱穴12 径：64×57cm 深さ：56cm 柱穴13 径：56×38cm 深さ：42cm 柱穴14 径：43×30cm以上 深さ：29cm 柱穴15 径：57×38cm 深さ：36cm

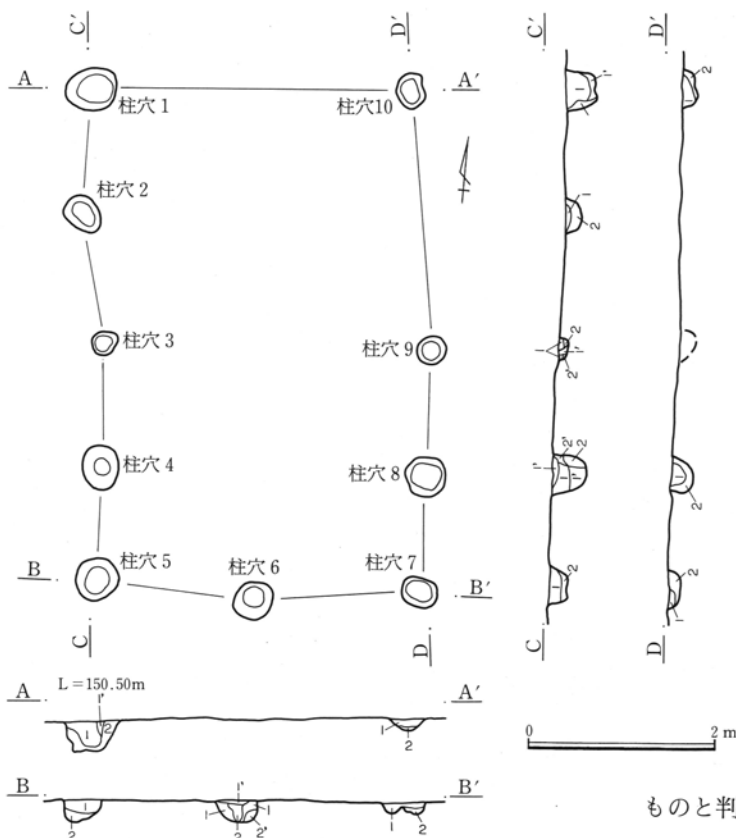
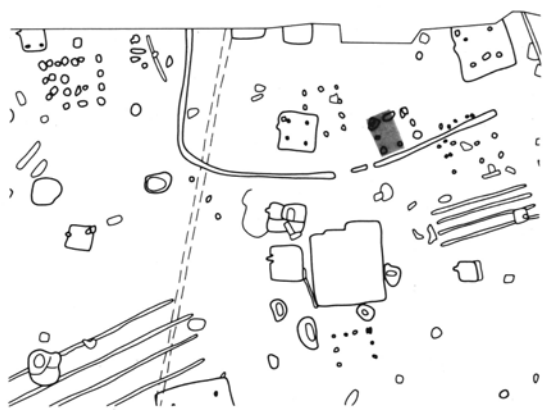
構造 建物1・2は共に主軸を東に向け1×2間の規格を呈している。

建物の規模は建物1aで241×300cm、建物1bでは250×283cm、建物2は255×275cmを測る。またスパンは建物1aの南北方向で平均238.5cm、東西方向で平均145.25cmを測り、建物1bは同じく248.5cmと

第398図 23号掘立柱建物及び出土遺物

133.75cm、建物2は243.5cmと135.5cmを測り余り大きな差は見られなかった。

尚、柱穴の径は建物1は小さい、建物2は大きい傾向があるが、深さに差は見られなかった。



25号掘立柱建物柱穴覆土

- 1：黒色土：黒色土中に褐色土が少量混入する。締まりに欠ける。(1'：全体の色調が褐色掛かる。)
- 2：黒色土：黒色土と褐色土の混土。(2'：暗黒褐色土：2層よりも更に多量の褐色土を含む。)

第399図 25号掘立柱建物

25号掘立柱建物（古代以前か、第399図）

概要 本建物はD区中北部に位置している。

本建物付近には多数の小型ピットが掘削されている。また、平安時代の竪穴住居の状況から本建物付近は削平が進んでいることが想定されていたが、本建物の遺存状況はあまり良好ではなかった。このため、本建物の規格が後述のように2×4間を呈するものと想定されたものの、北側列の中間と東側列の中間の北側の柱穴を確認することができなかった。

出土遺物は見られなかったが、覆土中にAs-Bを確認できなかったことから古代以前の所産であろうと想定することができる。

尚、記録化に一部失敗したため、平面形態や個々の柱穴の測定値等を明確に示すことができなかった。

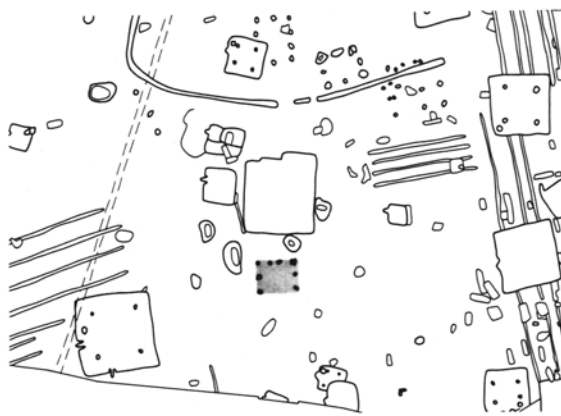
- 規模 柱穴1 径：約52×44cm 深さ：36cm以上 柱穴2 径：約43×33cm 深さ：18cm以上 柱穴3 径：約28×25cm 深さ：9cm以上 柱穴4 径：約47×38cm 深さ：37cm以上 柱穴5 径：約46×44cm 深さ：22cm以上 柱穴6 径：約41×39cm 深さ：24cm以上 柱穴7 径：約38×30cm 深さ：14cm以上 柱穴8 径：約43×42cm 深さ：24cm以上 柱穴9 径：約31×29cm 深さ：18cm以上 柱穴10 径：約37×32cm 深さ：16cm以上

構造 本建物は主軸を概ね北北西に向けており、柱穴9と柱穴10の間にピットは確認されていないが、その規格は基本的には2×4間を呈する

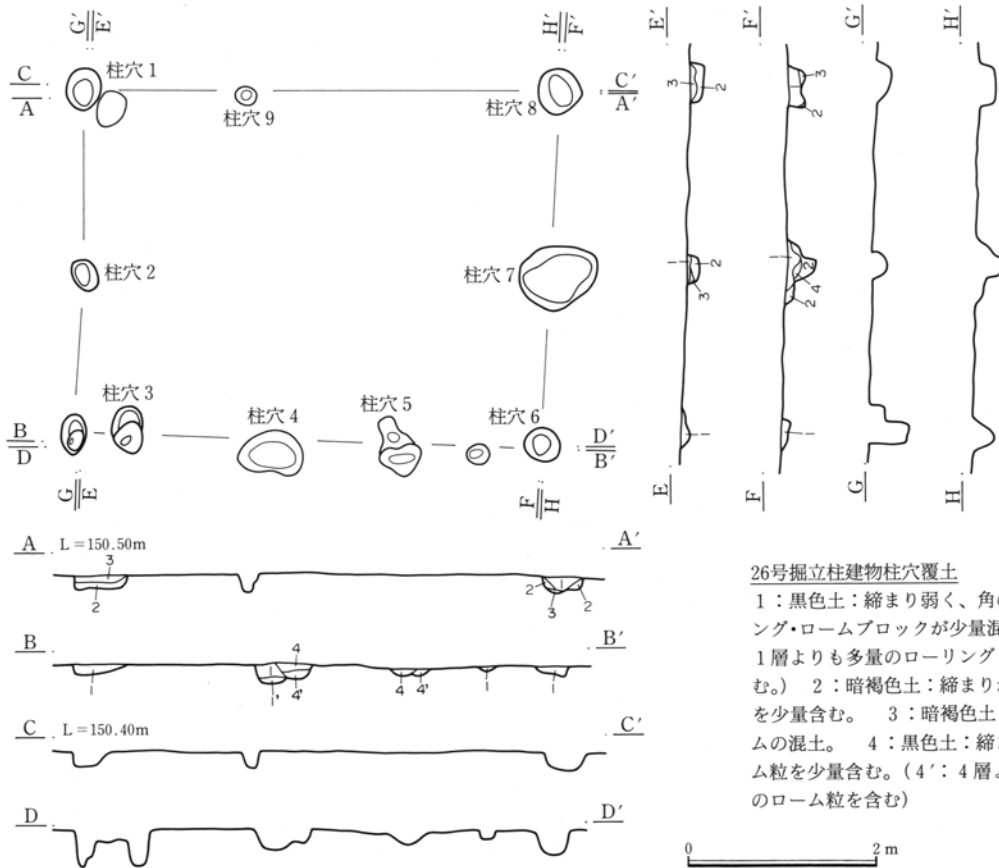
ものと判断される。

本建物の東西方向のスパンは中間の柱穴の遺存する南列を見ると凡そ172±4cmを測り、南北方向のスパンは120～138cm、平均で129cm程を測る。

個々の柱穴の形態は他の掘立柱建物のものに比べて比較的一定している。また、断面観察から柱材の径は20～20数cm程であったものと推定される。



規模 柱穴1 径：44×36cm 深さ：16cm 柱穴2 径：34×26cm 深さ：14cm 柱穴3 径：41×28cm 深さ：42cm 柱穴4 径：68×46cm 深さ：25cm 柱穴5 径：65×43cm 深さ：31cm 柱穴6 径：38×34cm 深さ：26cm 柱穴7 径：85×68cm 深さ：34cm 柱穴8 径：47×45cm 深さ：19cm 柱穴9 径：23×19cm 深さ：19cm



26号掘立柱建物柱穴覆土

1：黒色土：縮まり弱く、角のとれたローリング・ロームブロックが少量混入する。(1'：1層よりも多量のローリング・ブロックを含む。) 2：暗褐色土：縮まりが弱く、ロームを少量含む。 3：暗褐色土：黒色土とロームの混土。 4：黒色土：縮まり弱く、ローム粒を少量含む。(4'：4層よりも更に多量のローム粒を含む)

0 2m

第400図 26号掘立柱建物

26号掘立柱建物（古代以前か、第400図、図版135）

概要 本建物はD区中部に位置している。

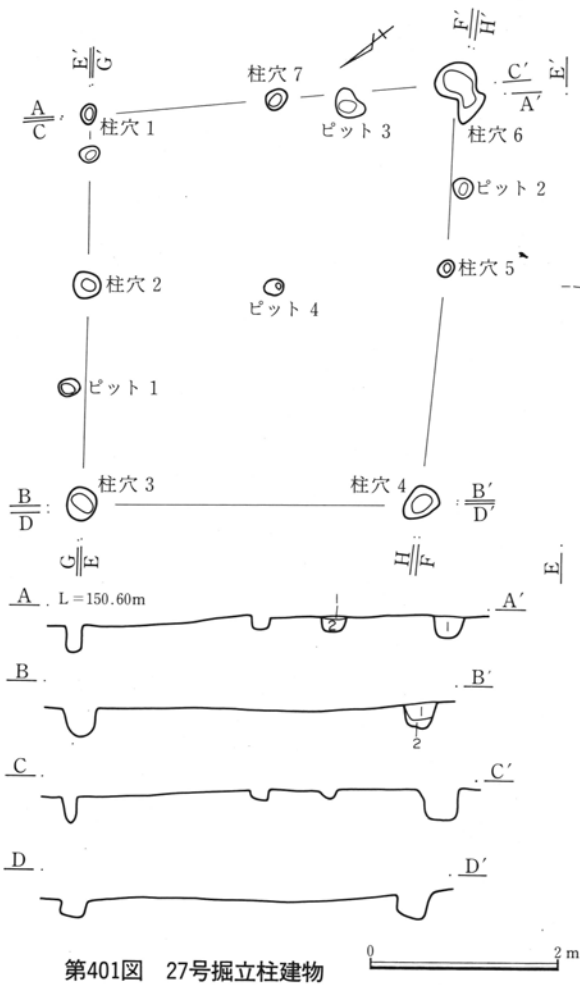
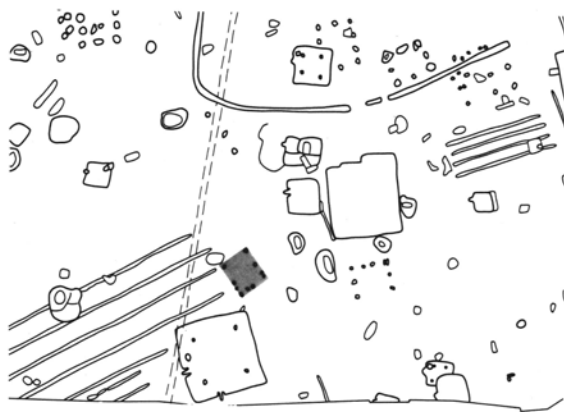
本建物付近には多数の小型ピットが掘削され、また、本建物の遺存状況はあまり良好ではなかった。

出土遺物は見られなかったが、覆土にAs-Bを含まないことから本建物は古代以前の所産と判断される。尚、周辺の平安期の竪穴住居同様削平が進むので、同時期頃の所産の可能性も想定される。

構造 本建物は主軸を凡そ東西に向け、北側列中間の東側の柱穴が確認されなかったが、その規格は2×3間を呈するものと思われる。

そのスパンは東西方向のものは140～230cm程と幅があり、平均で174cm程を測る。一方、南北方向のものでは178～198cmを測り、平均で186cm程を測る。

尚、柱穴の大きさ、プランにはばらつきがあるが、概して小さいものが多かった。



第401図 27号掘立柱建物

27号掘立柱建物 (古代以前か、第401図、図版135)

概要 本建物はD区中部の東北寄りに位置する。

本建物付近には多数の小型ピット在り、本建物の識別もやや難しいものであった。

本建物からの遺物の出土はなかったが、覆土にAs-Aを含まないことからD区他の掘立柱建物と

同様古代以前の所産ではないかと思慮される。

- 規模** 柱穴1 径：21×16cm 深さ：25cm 柱穴2 径：29×27cm 深さ：22cm 柱穴3 径：34×31cm 深さ：28cm 柱穴4 径：41×31cm 深さ：28cm 柱穴5 径：19×16cm 深さ：22cm 柱穴6 径：59×44cm 深さ：32cm 柱穴7 径：23×21cm 深さ：11cm
- ピット1 径：24×19cm 深さ：17cm ピット2 径：21×20cm 深さ：22cm ピット3 径：33×26cm 深さ：15cm ピット4 径：20×17cm 深さ：39cm

構造 本建物は正方形に近い長方形のプランを呈し、主軸は概ね北東を向く。建物の規模については北側の北東-南西方向の柱列の中位のものを見出せなかったが、柱穴1～7を用いた2×2間の規格が基本となるものと思われる。また、南東-北西方向の東側の柱列北半の柱穴2と3の中間のピット1と西側列南半の柱穴5と6の中間のピット2及び北東-

27号掘立柱建物柱穴覆土

- 1：黒色土：ロームブロック(径5mm)・ローム粒を少量含む。締まりに欠ける。
- 2：黒色土：全体の色調は褐色味が強くなるものの、明確な夾雑物の混入ない。
- 3：暗黒褐色土：ロームブロック(1～3mm)と黒色土の混土。

南西方向の南側の柱列の柱穴6と7の間に位置するピット3を用いれば4×4間の規格を呈する建物として想定され、また建物中央のピット4を用いれば総柱の建物ということになる。

スパンは2×2間の規格で想定すると柱穴1～7についてみると、北東-南西方向では169～202cm、平均189cm、南東-北西方向では196±6cmを測る。

尚、柱穴の形状は一樣ではないが比較的小さなものの主体となっている。

11号溝 (奈良時代以降, 第402図, 図版136)

概要 本溝はD区中南部に位置する、大きくはないがC区の9号溝同様に特徴的な溝遺構である。

本溝の南側は路線外に出ていて調査できず、西側も途絶えてしまい、緩傾斜面に掛かることもあって有無の確認が充分に行えなかったが、その形態から方形に土地を区画していたものと推定される。尚、北側中程に遺構の途切れる部分があり、これと西側の溝の途切れる部分に出入口の可能性が考慮される。

本溝は19～22号掘立柱建物と重複するが、新旧関係は特定されなかった。

出土遺物は奈良・平安期のものを含む3点の土師

器片だけであったが、覆土にAs-Bを含まないことや遺構の向きから関連が考慮される7号掘立柱建物の想定時期等から、本建物は奈良時代以降の所産として捉えたい。

規模 長さ：57.48m以上 上幅：64～137cm 基底幅：48～104cm 深さ：6～32cm

構造 本溝は隅丸の「J」状のプランを呈する。

溝幅や掘り込みは大きくないが、底面は凹凸があつて縦断面は波状を成すが、その深さは30～35cmが中心で、北側東西走行部分の中程で底面が盛り上がり気味になり、溝が2m程途切れる部分もある。

76号土坑 (古代以前, 第403図, 図版136)

概要 本土坑はD区南東部に位置する。

本土坑からの出土遺物は見られなかったが、覆土には黒色土も含まずAs-Bも含まないので古代以前の古い段階のものである可能性を有する。

また、後述の遺構形態から風倒木である可能性も

持つが、この場合の倒木方向は西側と推定される。

規模 長径：156cm 短径：133cm 深さ：54cm

構造 本土坑は楕円形プランを呈する。

壁・底面は1/4球形を呈し、東側の底面が深く、壁面の傾斜もきつい。

77号土坑 (古代以前, 第403図, 図版136)

概要 本土坑はD区南東部に位置する。

出土遺物は無く76号土坑同様黒色土やAs-Bを含まないので古代以前の古い段階のものと思われる。

土坑中央にピットが切り込んでいるが、土坑の用

途等は特定されなかった。

規模 径：105×102cm 深さ：32cm

構造 本土坑は概ね円形のプランを呈する。

底面は平底で、遺構形態は桶状を呈する。

78号土坑 (縄文時代か, 第403図, 図版136・161)

概要 本土坑はD区南東部に位置する。

本土坑からは石鏃(1)が出土し、76・77号土坑同様に覆土に黒色土やAs-Bを含まないので古代以前で、縄文時代の可能性も有すると思われる。

本土坑の掘削目的等は特定されなかった。

規模 長径：115cm 短径：91cm 深さ：18cm

構造 本土坑は不定形のプランを呈する。

底面は凹凸があるが、中央に向かって深くなる。

79号土坑 (古代以前, 第403図, 図版136)

概要 本土坑はD区南東部に位置する。

本土坑からの出土遺物は見なかったが、76～78号土坑同様、覆土に黒色土やAs-Bを含まないので古代以前の古い段階のものであろうと思われる。

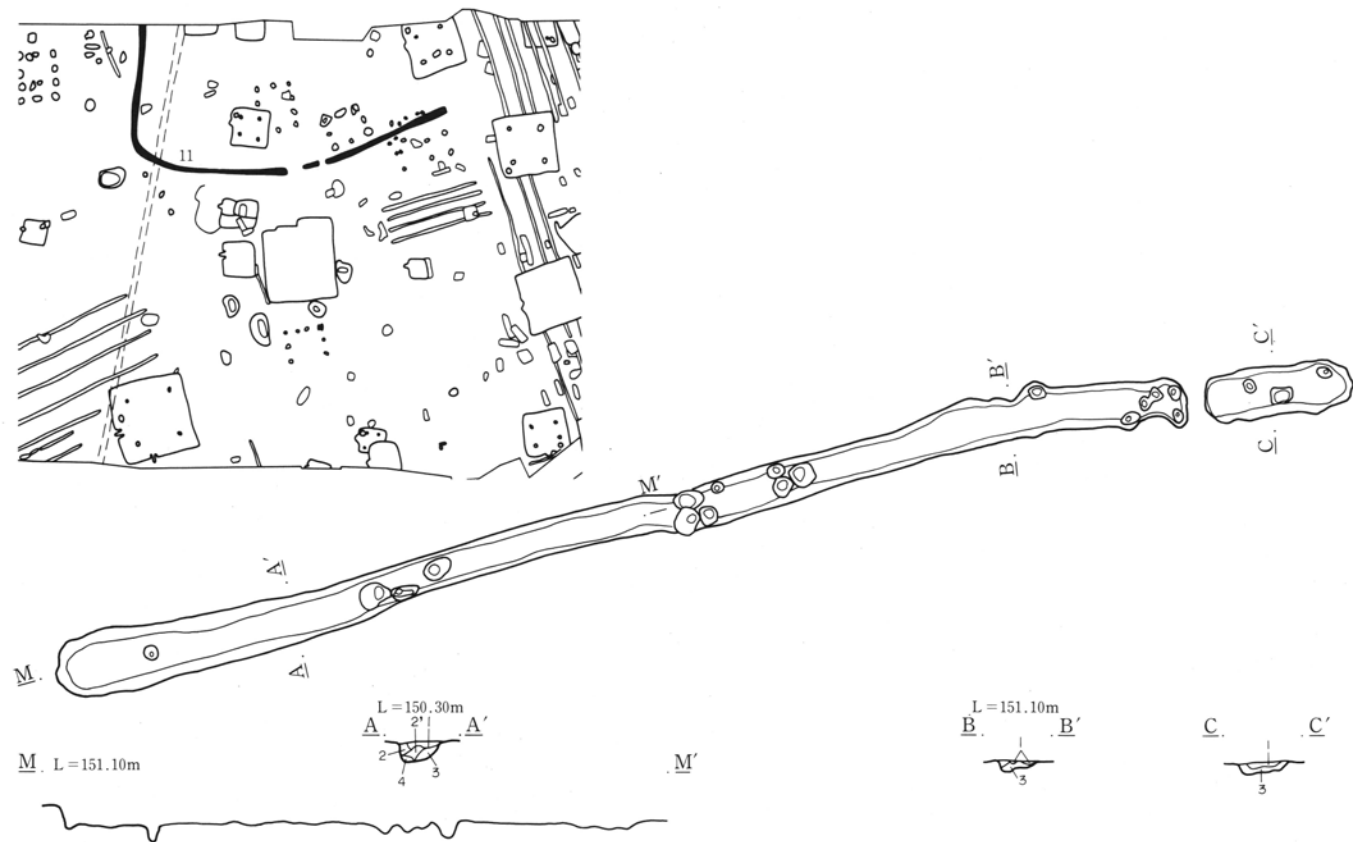
尚、本土坑の掘削目的等を特定することはできな

かった。

規模 長径：93cm 短径：83cm 深さ：26cm

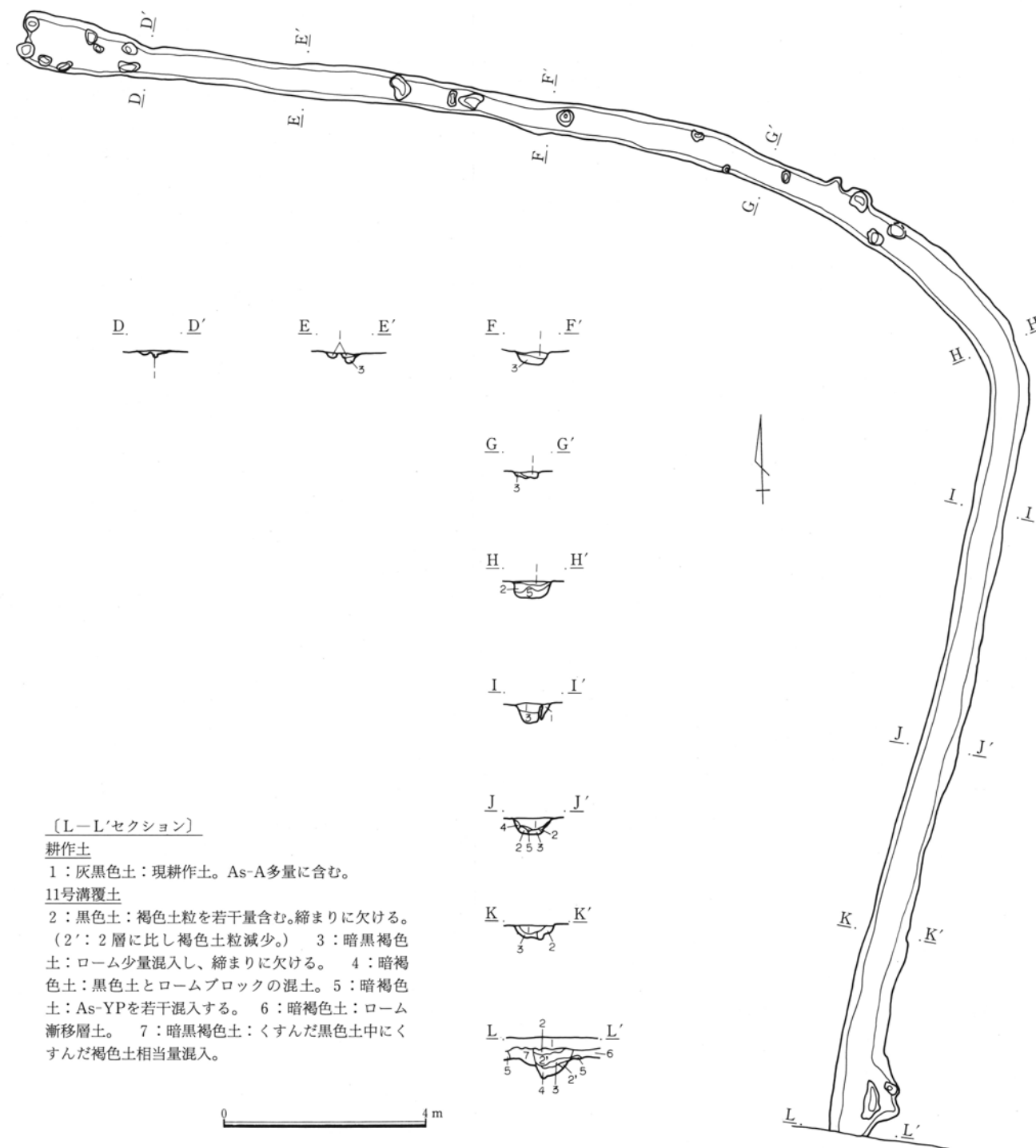
構造 本土坑は隅丸方形のプランを呈する。

底面は緩やかな摺鉢状を呈しているが、壁面は比較的しっかりと立ち上がっている。



11号溝覆土

1：暗黒褐色土：白色土粒・褐色土粒とロームブロックを相当量含み、良く締まる。 2・2'：暗黒褐色土：1層に似るが1層より更に多量の夾雑物を含み、締まりも更に増す。 3：暗茶褐色土：黒色土と褐色土ブロックの混土。 4：黒色土：褐色土粒を微量に含み、締まりに欠ける。 5：暗褐色土：2層土と3層土の中間的様相を示す。



[L-L'セクション]

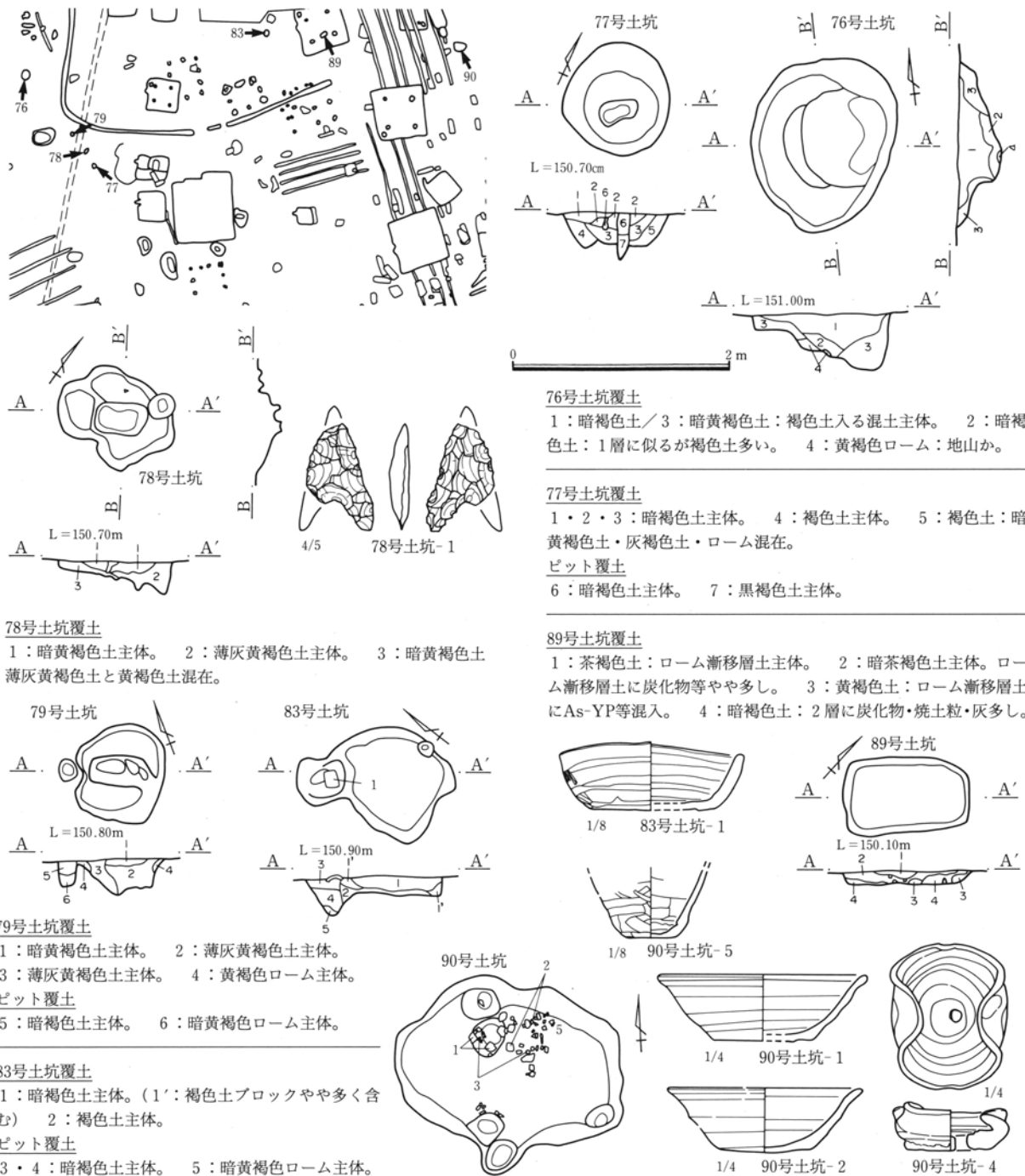
耕作土

1：灰黒色土：現耕作土。As-A多量に含む。

11号溝覆土

2：黒色土：褐色土粒を若干量含む。締まりに欠ける。
(2'：2層に比し褐色土粒減少。) 3：暗黒褐色土：ローム少量混入し、締まりに欠ける。 4：暗褐色土：黒色土とロームブロックの混土。 5：暗褐色土：As-YPを若干混入する。 6：暗褐色土：ローム漸移層土。 7：暗黒褐色土：くすんだ黒色土中にくすんだ褐色土相当量混入。

第402図 11号溝



第403図 76～79・83・89・90号土坑及び出土遺物

83号土坑 (平安時代以降, 第403図, 図版136・161)

概要 本土坑はD区中部の調査区南端付近、11号溝の内側の区画に掘削されている。

本土坑からは、西暦700年を前後する時期の特徴を持つ須恵器鉢(1)が出土しているが、平安時代の遺物も見られることから平安時代以降の所産として把

握される。

また、北西端部は小型のピットが掘削されて、本土坑は切られている。

尚、本土坑の用途等は特定されなかった。

規模 長径：112cm 短径：95cm 深さ：17cm

第3章 発見された遺構と遺物

構造 本土坑は隅丸方形様で北側でややすばまるようなプランを呈している。

89号土坑（古墳時代後期以降、第403図、図版136）

概要 本土坑はD区中央南端近くに所在する。H-121号住居の覆土を掘り込んで掘削され、底面はH-121号住居の床面まで達している。

本土坑からの出土遺物は特定されず、時期の特定もできなかったが、H-121号住居を切っているのので6世紀後半頃以降の所産としては把握される。

本土坑の覆土にはH-121号住居に見られなかった炭化物や灰や同じく少なかった焼土を多く含むこ

90号土坑（平安時代、第403図、図版136・161）

概要 本土坑はD区南西部に位置している。

遺構の遺存状況は不良であった。南肩の中程にはピットが絡んでいるが、後述の遺物の状況から本土坑を切るものである可能性を有する。

本土坑からは10世紀前半期の特徴を示す須恵器坏（1～3）や10世紀代の羽釜（5）等、平安時代頃の遺物が出土した。これらの遺物は明確に本土坑に伴うか否かは特定できないが、出土地点が底面に近い位置に集中することから、本土坑の掘削後早い段階に

91号土坑（奈良時代、第404図、図版137・161）

概要 本土坑はD区南西部に所在する。

現代の耕作溝に切られているが、北辺で94号土坑と接している。94号土坑との新旧関係は明確にできなかったが、本土坑調査中に確認されたものなので、本土坑の方が新しい可能性を有する。

出土遺物のうち本土坑に伴うと判断されたものには8世紀前半期の特徴を示す須恵器坏（1）があり、覆土中からは7世紀後半から8世紀前半期にかけてのものと思われる須恵器坏（2、3、4）など奈良・平

92号土坑（平安時代、第404図、図版137・161・165）

概要 本土坑はD区南西部に所在する。

本土坑は削平が進み、その遺存状況は悪く僅かに

本土坑の底面は平底を呈し、壁面は垂直気味に立ち上がっている。

とから、何らかの燃焼によって生じた廃棄物等を投棄する目的で掘削されたのではないと思われる。

規模 長径：108cm 短径：74cm 深さ：13cm以上

構造 本土坑は隅丸の長方形のプランを呈する。

底面は平底を呈し、壁面は確認範囲が狭かったので明瞭ではないが、残存部の状況と近接するH-121号住居の覆土等の堆積状況を勘案するとやや開き気味でなかったかと思われる。

投ぜられたものと思慮される。また、本土坑に絡むピットからは須恵器耳皿（4）が出土している。

従って本土坑は10世紀前半頃の所産とされよう。

尚、本土坑はこれらの遺物の廃棄に使用されているが、掘削意図を明瞭にすることはできなかった。

規模 長径：220cm 短径：180cm 深さ：5～35cm

構造 本土坑は楕円形のプランを呈する。

底面は平底を呈するが、壁面の状況は遺構の遺存状況が悪いため明らかにすることができなかった。

安期のものを中心に遺物の出土を見ている。

こうした遺物の状況から、本土坑は8世紀前半期の所産として把握される。

尚、本土坑の用途等は特定されなかったが、遺構形態からは土壙墓の可能性が考えられる。

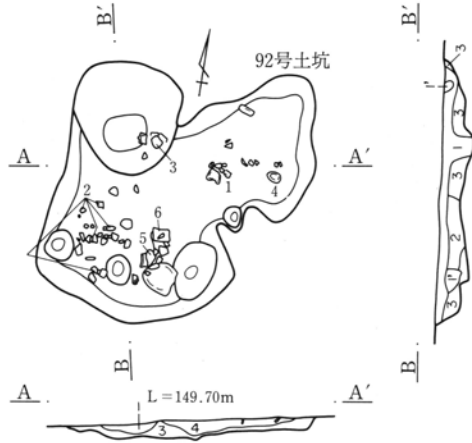
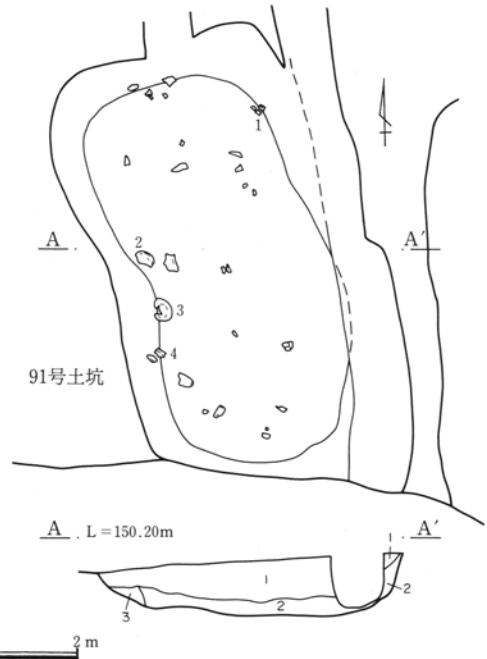
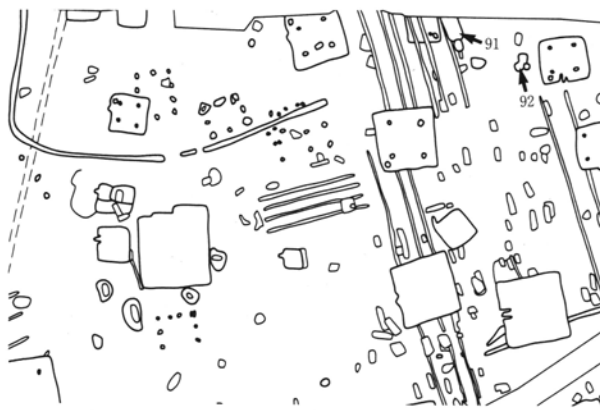
規模 長径：376cm以上 短径：232cm 深さ：43cm

構造 本土坑は隅丸方形のプランを呈する。

全体の形態は箱状を呈するしっかりした掘り込みで、底面は平底を呈している。

底面近くを残すに過ぎなかった。

本土坑からは10世紀前半期の特徴を持つ須恵器の

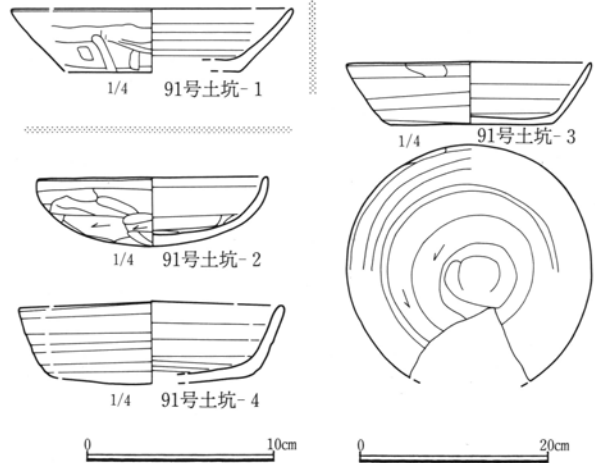
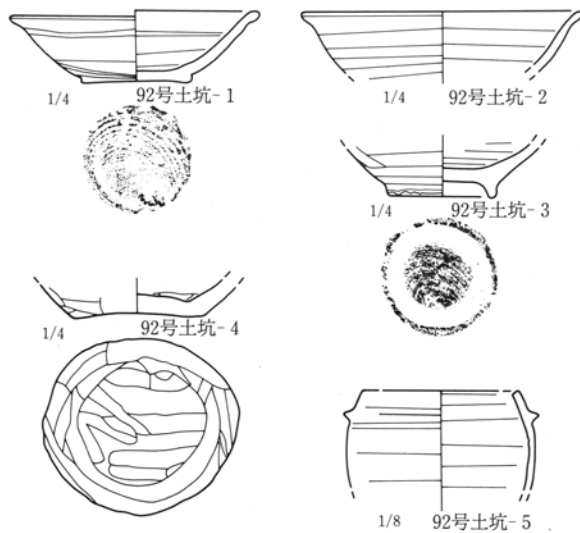


91号土坑覆土

1：黒色砂質土主体。 2：暗褐色土：ローム小ブロック・褐色土粒を多量に含む。 3：暗褐色土：ロームブロック主体的に含む。

92号土坑覆土

1・1'：暗褐色土主体。 2：暗褐色土主体。 3：暗黄褐色土。 4：暗黒褐色土：1層土に焼土がまんべんなく混入。



第404図 91・92号土坑及び出土遺物

碗 (1,2)・高台付碗 (3)・坏 (4)・羽釜 (5) 等平安期の頃の須恵器片を中心とする遺物の出土が見られたが、多孔石 (6) も見られた。

これらの遺物と本土坑との直接の関連は特定されなかったが、これらの遺物が底面近くに出土するこ

とから、本土坑の掘削後或いは使用中に投げられた可能性が高いため、本土坑は10世紀前半頃の所産として把握され得るものと思われる。

規模 長径：244cm 短径：195cm 深さ：13cm

構造 本土坑は不定形のプランを呈する。

遺存状況が悪く壁面の状況は明らかにできなかったが、底面はやや凹凸が見られるものの平底に近いものであった。

93号土坑 (古代以前か、第405図、図版137)

概要 本土坑はD区東南部に所在する。

本土坑の遺存状況はあまり良好ではない。また本土坑には4基の小型ピットが絡むが、中央のものが本土坑より古い以外は新旧関係は特定されない。

本土坑からの出土遺物はなかったが、As-Bを含まないので古代以前の所産である可能性を持つ。

尚、本土坑の覆土中には見られなかったが、南壁

の底部には長さ4cm程の炭化物と焼土が見られ、西壁の底部にも見られたので何らかの目的で木材の燃焼が行われたことが分かる。

規模 長径：142cm 短径：117cm 深さ：13cm

構造 本土坑は卵形のプランを呈する。

土坑底面は平底状を呈し、遺存状況が悪いため明確ではないが壁面は比較的垂直気味と想定される。

94号土坑 (奈良時代以前か、第405図)

概要 本土坑はD区南西部に位置する。

本土坑は91号土坑の調査経過の中で、91号土坑の北側に発見・掘削された遺構である。しかし記録化に失敗し覆土等の状況は把握されなかった。

本土坑からの出土遺物は認められなかったが、上述のように91号土坑の調査当初段階では認識されず、その調査途中で確認されていることから91号土

坑に先んずる遺構であると判断される。従って本土坑の時期は8世紀前半以前と把握されるのである。

尚、本土坑の掘削意図等は特定されなかった。

規模 長径：160cm 短径：131cm 深さ：82cm

構造 本土坑は隅丸方形のプランを呈する。

土坑の形態は桶状で深い掘削が成され、底面は平底を呈する。

97号土坑 (奈良・平安時代頃、第405図、図版137)

概要 本土坑はD区北西部に位置する小型の土坑である。

遺存状況は良好ではなく、用途等も特定されなかった。

本土坑からは本土坑に直接伴うものかどうかは特定できなかったが、奈良・平安時代の土師器・須恵器等若干の遺物の出土を見ている。

こうした遺物を覆土中に持つこと、及び覆土にAs-Bを伴わないことから、本土坑は奈良・平安時代頃の所産として把握されるものと思われる。

規模 長径：81cm 短径：72cm 深さ：15cm

構造 本土坑は隅丸方形のプランを呈する。

土坑形態は遺存状況が悪くつまびらかでないが、底面は丸底気味であり、壁面は若干開くようである。

104号土坑 (古代以前か、第405図、図版137)

概要 本土坑はD区南東部に位置する。

本土坑の遺存状況はあまり良くなかったが、東部と北部にピットが絡む。北部のピットは本土坑に切られるが、東部のピットとの新旧関係を特定することはできなかった。

土坑の時期については出土遺物もなく、僅かに覆

土にAs-Bを含まないことから古代以前の所産ではないかと推定されただけであった。

規模 長径：127cm 短径：110cm 深さ：12cm

構造 本土坑は楕円形様のプランを呈する。

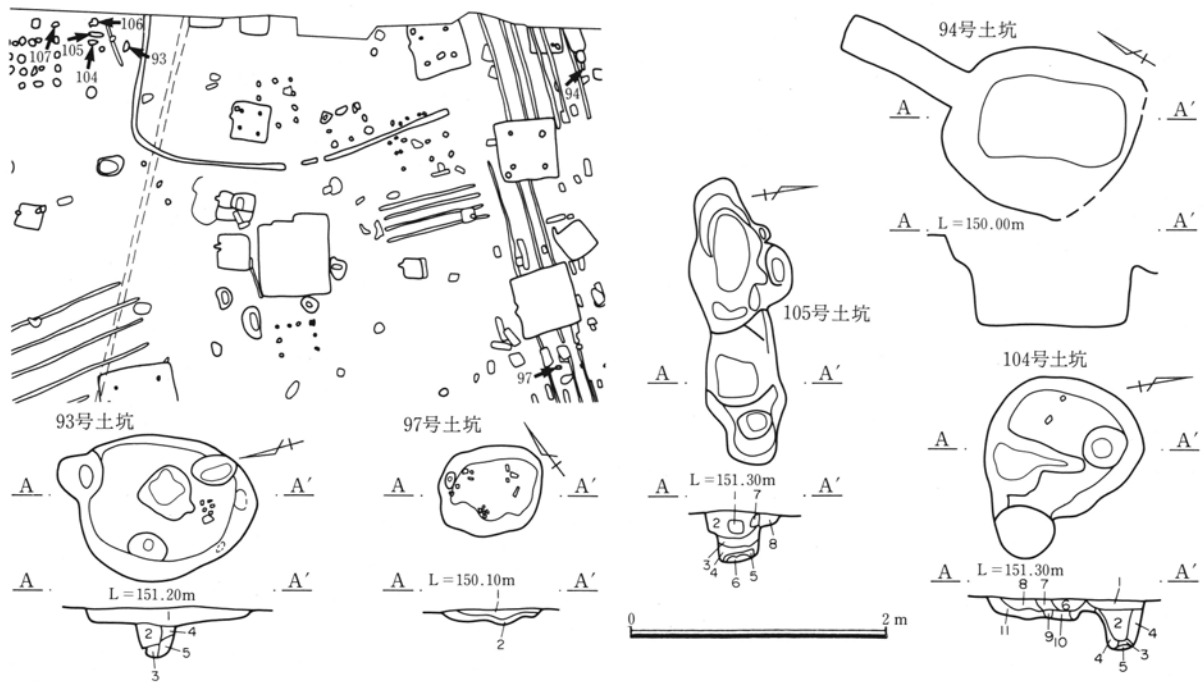
遺存状況が悪いため土坑の形態は明瞭ではないが、底面は平底で、壁面は若干開き気味である。

105号土坑 (時期不詳、第405図、図版137・161)

概要 本土坑はD区南東部に位置する。

本土坑は東西に並ぶ小型の土坑2基と、双方に切

り合う1基ずつのピットの集合体である。それぞれの新旧関係を特定することはできなかった。



93号土坑覆土

1：暗褐色土主体。南・西壁底部に炭化物と焼土粒含む。

ピット覆土

2：暗褐色土主体。 3：褐色土：褐色土とロームの混土。 4：暗黄褐色土主体。 5：黄褐色土：ローム主体。

97号土坑覆土

1：褐色土主体。 2：暗黄褐色土：くすんだローム粒主体。

106号土坑覆土

1・4：黄褐色土：白・黄色粒を多く含む。 2：黄褐色土主体。
3・11：暗黄褐色土：ローム多く含む。 5：褐色土主体。 6・8：黒褐色土主体。 7・9：暗褐色土主体。 10・12：地山のローム層。

104号土坑覆土

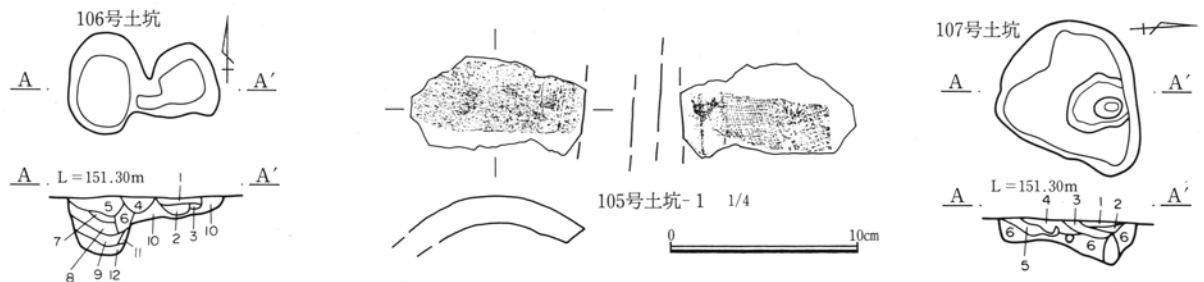
1：褐色土：白・黄色粒とローム粒多く含む。 2：黒褐色土主体。
3：黒褐色土。 4・6・7・8・10：暗褐色土主体。 5：褐色土主体 9：褐色土：白・黄色粒かなり多し。 11：地山ローム。

105号土坑覆土

1：黒褐色土主体。 2：黒褐色土：白・黄色粒とローム粒多く含む。
3・5：黒褐色土主体。 4：黒褐色土：ローム粒多く含む。 6・8：地山ローム。 7：黄褐色土：風化ロームと黄色粒主体。

107号土坑覆土

1：黒褐色土：白・黄色粒多く含む。 2：暗黄褐色土：黄色粒とローム多く含む。
3：黒褐色土主体。 4：暗褐色土：白・黄色粒多く含む。 5：黄褐色土主体。 6：地山ローム。黄色粒多い。



第405図 93・94・97・104～107号土坑及び出土遺物

布目瓦の男瓦(1)が出土していることから、何れかの土坑或いはピットは奈良時代以降の所産ということになる。また、東側の土坑は覆土にAs-Bを含まないことから古代以前の所産の可能性を持つが、他の土坑・ピットの時期は想定できなかった。

規模 全長：228cm 全幅：84cm [東側土坑]

長径：85cm以上 短径：60cm 深さ：43cm

[西側土坑] 長径：121cm 短径：70cm 深さ：37

cm [東側ピット] 長径：65cm以上 短径：41

cm 深さ：51cm [西側ピット] 長径：47cm

短径：29cm 深さ：26cm

構造 東側の土坑は隅丸方形、西側の土坑は楕円形様のプランを呈する。

ピットの形態は何れも柱穴様である。

106号土坑（古代以前か、第405図、図版137）

概要 本土坑はD区南東部に所在する。

本土坑は東側の土坑が西側の土坑を切る、東西に並ぶ2基の小土坑から成っている。遺存状況は西側のものは比較的良好で、東側のものは僅かに底面付近が残されるに過ぎなかった。

出土遺物はなく、東西何れの土坑もAs-Bを含まないので古代以前の所産である可能性を有する。

107号土坑（古代以前か、第405図、図版137）

概要 本土坑はD区南東部に所在する。

本土坑からの出土遺物は見られず、土坑の掘削意図等も想定されなかった。

また時期は覆土にAs-Bを含まないことから、僅かに古代以前の可能性が示されるだけである。

108号土坑（古代以前か、第406図、図版138）

概要 本土坑はD区南東部に所在し、南半部の遺存状況はあまり良好ではなかった。

出土遺物はなく、覆土にAs-Bを見ないことから本土坑は古代以前の所産の可能性が窺われる。

尚、形態及び土層堆積状況の観察から、本土坑は

118号土坑（古代以前か、第406図、図版138）

概要 本土坑はD区中部の北西寄りに所在する。

遺存状況はあまり良好ではなく、底面付近を調査できたに過ぎなかった。また3基の小型ピットが絡むが新旧関係は特定できなかった。

出土遺物はないが、覆土にAs-Bを含まないことから古代以前の所産である可能性を有する。

尚、本土坑の底面から壁面下位にかけて炭化物や

119号土坑（古代以前か、第406図、図版138）

概要 本土坑はD区中部の北西、幾つかのピットの集まる中に在り、本土坑も3基のピットから成る。

新旧関係は北西側ピット（以下「ピット1」）と中間のピット（以下「ピット2」）では不明、南東側のピット（以下「ピット3」）はピット2を切る。

規模 全長：122cm

〔東側土坑〕 長径：62cm 短径：50cm 深さ：14cm

〔西側土坑〕 長径：80cm 短径：62cm 深さ：51cm

構造 東側の土坑は隅丸方形のプランを呈する。底面は凹凸があり、壁面構造は不明である。

一方、西側の土坑は楕円形プランを呈し、形態は柱穴様で、底面は丸底気味である。

規模 長径：130cm 短径：112cm 深さ：27cm

構造 本土坑は隅丸の三角形様のプランを呈する。

底面は東・南・西壁に沿う部分では平底気味であるが、北側中央は北壁際に向かって摺鉢状に落ち込む。また、壁面は垂直気味に鋭く立ち上っている。

柱穴として使用された可能性が考慮される。

規模 長径：96cm 短径：81cm 深さ：38cm

構造 本土坑は隅丸長方形様のプランを呈する。

本土坑の形態は柱穴様で、南半部の底面は平底気味であるが、北部の底面は柱穴様に落ち込んでいる。

焼土を含む黒褐色土が2～3cmの厚さに堆積し、その上位層に炭化物等を見なかったことから、本土坑では何らかの焼却行為が行われたと想定される。

規模 長径：144cm 短径：124cm 深さ：10cm

構造 本土坑は楕円形様のプランを呈する。

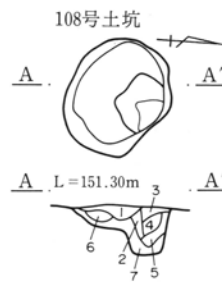
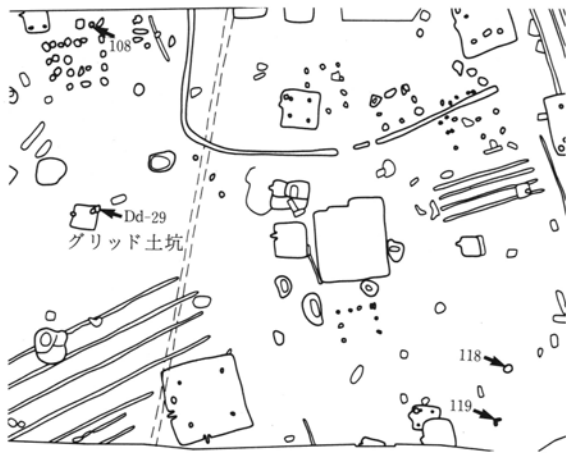
底面は平底気味であるが、壁面に向かって緩やかに傾斜を増している。

出土遺物はなかったが、覆土にAs-Bを含まないので古代以前の可能性を有する。

規模 〔ピット1〕 径：29×22cm 深さ：41cm

〔ピット2〕 径：44×58cm以上 深さ：31cm

〔ピット3〕 径：46×45cm 深さ：26cm

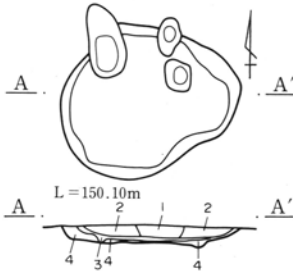


108号土坑覆土

- 1: 暗褐色土: 白・黄色粒を含む。
- 2: 黒褐色土主体。 3: 暗黄褐色土: 黄色粒・ロームを多く含む。
- 4: 黒褐色土: 黄色粒・ローム粒を含む。
- 5: 黒褐色土: 黄色粒・ローム粒を多く含む。
- 6: 暗黄褐色土: 黄色粒・ロームを多く含む。
- 7: 地山ローム: 黄色粒・As-YP含む。

構造 ピット1は楕円形、ピット2は不定形、ピット3は隅丸方形プランで、その形態は柱穴様である。

118号土坑



118号土坑覆土

- 1: 黒褐色土主体。
- 2: 暗褐色土主体。
- 3: 黒褐色土: ローム・炭化物・焼土を含む。
- 4: 暗黄褐色土: ローム主体。地山。

Dd-29グリッド所在土坑(古代以前か、第406図、図版127)

概要 本土坑はD区東部のH-133号住居の南西コーナー付近に所在し、H-133号住居を壊して掘削されている。

本土坑は所謂地下式坑であり、耕作物等の貯蔵用に掘削されたものと思われる。

本土坑からの出土遺物はなく、覆土の記録化も行わなかったのであるが、概ね近世以降の所産として把握している。

規模 長径: 252cm 短径: 157cm 深さ: 115cm
 入り口部 長径: 156cm 短径: 106cm 底面 長径: 168cm 短径: 158cm 天井高: 95cm

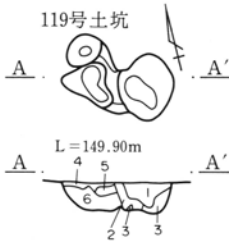
階段 下段 幅: 55cm 奥行き: 25cm 高さ: 23cm
 上段 幅: 43cm 奥行き: 22cm 高さ: 33cm (H-133号住居底面までの高さ: 36cm)

構造 本土坑は本体部分と入り口部分からなり、入り口部分は本体部分の中央やや東側寄りの位置から造り出される。

本体部分は円形プランを呈する。底面は外周に向かって盛り上がり気味となって壁面に至る。壁面は垂直に立ち、30数cmの高さで緩やかなドーム形の天井部に接続する。

入り口部はやや下膨れの隅丸方形のプランを呈し、確認された範囲で2段の階段が見られ、全体では3~4段で掘削されていたものと想定される。階段面は内部に向かってやや傾斜している。

119号土坑

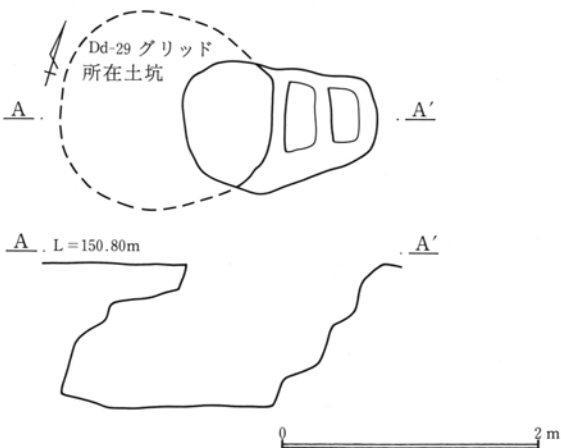


119号土坑

【441頁406図の左中】

119号土坑覆土

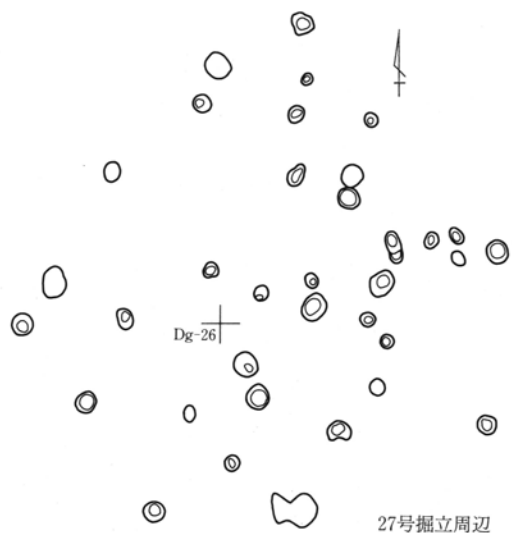
- 1: 黒褐色土主体。
- 2: 黒褐色土: 焼土粒とロームブロック含む。
- 3: 黄褐色ローム。
- 4: 黒褐色土主体。焼土粒を多く含む。
- 5: 黒褐色土: 焼土粒とロームブロックを多く含む。
- 6: 暗褐色土主体。ロームブロック多く含む。



第406図 108・118・119号土坑・その他の土坑



7号掘立周辺



27号掘立周辺



第407図 D区のピット群 (1)



26号掘立周辺

D区のピット群 (第407～408図、図版139)

概要 D区に於いては、区の広い範囲にC区西半部に見られたピット群からの引き続きである数多くのピットが見られた。

これらの多くは小型のものであったが、ここではこれらのうち7・26・27号掘立柱建物及びH-147号住居の周辺に見られたピット群を図示しているが、これに118・119号土坑周辺のピットを含めた166基のピットを主に取り上げて報告したい。

D区に於けるピット群の調査では覆土の記録化は行い得なかったのであるが、確認されたピットはC区で見られたピット群と同様に広い時期に亘るものを含むものであらうと思慮される。

尚、これらのピットは部分的に配列傾向を見せるものは認められたが、柵列等、構造物の配列としてこれらを見出すことはできなかった。

規模 長径：14～92cm (平均31.5cm) 短径：13～62cm (平均58.5cm) 深さ：5～55cm (平均23.3cm)

概要 D区所在のピット群に含まれる各ピットのプランは、円形または隅丸方形を呈するものを主体としている。

ピット群の大きさを概観すると、凡そ長径が30数cm程と20数cm程のものを境として大型・中型・小型の3つのグループに分かれるようである。このうち大型のグループのものは大きさにかなり幅はあるが平均の径は43.29×25.46cm程を測り、中型のグループのものは27.91×22.43cm程、小型のグループのもの

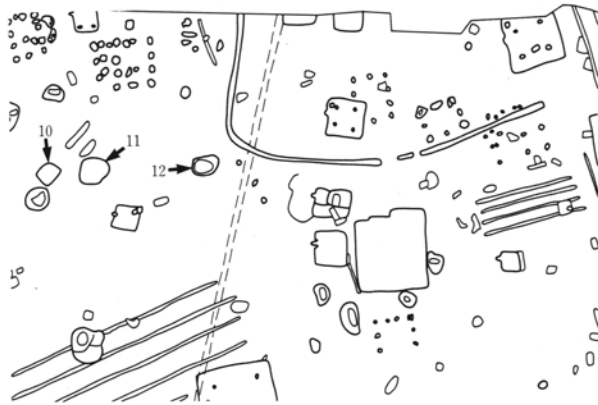


第408図 D区のピット群(2)

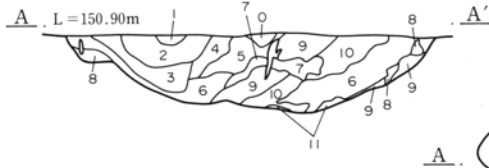
のは20.63×17.24cm程を測るものである。これらのグループのうち大型のグループのものは全体の34.8%、中型のグループのものは41.6%、小型のグルー

プのものは23.6%程を占めている。尚、ピットの深さはピットの所在する位置の削平状況によって左右される傾向にあるが、大型のグループのものは平均26.36cm、中型のグループのものは平均23.51cm、小型のグループのものは平均で18.45cm程を測り、径の増大に比例して掘削深さが増す傾向が若干窺える。

尚、前者のグループの中で径の小さいものは杭の打設に伴うものであると思慮される。



11号風倒木



ピット覆土・樹木痕等

0：褐色土：くすんだローム粒をやや多く、暗褐色土小ブロック僅かに含む。

11号風倒木覆土

1：暗黄褐色土：混入物少ない。 2：暗茶褐色土：暗褐色土ブロックと白色粒子とAs-YP含みのくすんだ暗黄褐色土ブロックの混土。
3：明茶褐色土：僅かな暗褐色土ブロックと多量の明黄褐色土の小ブロック混入。 4：暗褐色土：明茶褐色土僅かに含むブロック層。 5：よく締まった9層土の割合高く、暗褐色土ブロックやAs-YP等僅かに含む。 6：暗黒褐色土：黒褐色土主体に白色粒子・As-YP混じりのロームブロック僅かに含む。
7：暗黄褐色土：よく締まった9層土を主体とし、As-YPを両側にやや多く、暗褐色土ブロックを僅かに含む。 8：黄褐色土：As-YPをややまとまって混入する。 9：黄褐色土ローム：白色粒子を極く僅かに含む以外に混入物の少ないローム層。10：黄橙褐色土：9層に比し幾分明橙色掛かり、粘性の劣るローム層。 11：黄橙褐色土：砂粒状の明橙色のAs-BPを僅かに混入する。

ピット等覆土

0：黒褐色土：ローム粒・ブロックをやや多く含む。

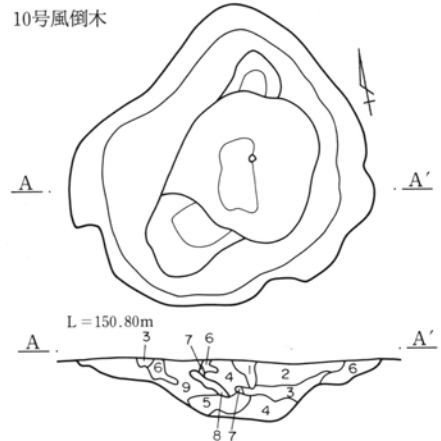
12号風倒木覆土

1：暗褐色土：暗褐色土主体。僅かに黒褐色土ブロックを含む。 2：暗褐色土：暗茶褐色土の小ブロックを僅かに混入する。 3：暗褐色土：こげ茶色掛かる。暗褐色土と暗茶褐色土の小ブロックの混土。炭化物を極く僅かに含む。 4：暗褐色土：黒味強い。暗褐色土小ブロック僅かに含む。 5：暗茶褐色土：乳白色小粒子を僅かに散在し、2層土のブロックを僅かに含む。 6：暗黄褐色土：乳白色小粒子を含む暗黄褐色土ブロック主体。ロームブロック・As-YPを僅かに含む。 7：黄褐色土：8層土に大量のAs-YP層を混じる。 8：黄褐色ローム：肌色をした粘性のあり。 9：黄褐色ローム：8層に比し黄橙色掛かる。(9'：9層に比し明橙色掛かる) 10：黄褐色土：明橙色粒子・砂粒(As-BP-1ユニット)を大量に含む。 11：黄褐色土：くすんだローム粒を主体とし、浅黄色軽石粒僅かに、炭化物粒・乳白色軽石を極く僅かに含む。(11'：11層に似るが軽石の含有量多い。) 12：淡黄色土：淡黄色粒子を主体とし、明橙色小粒子を極く僅かに含む。

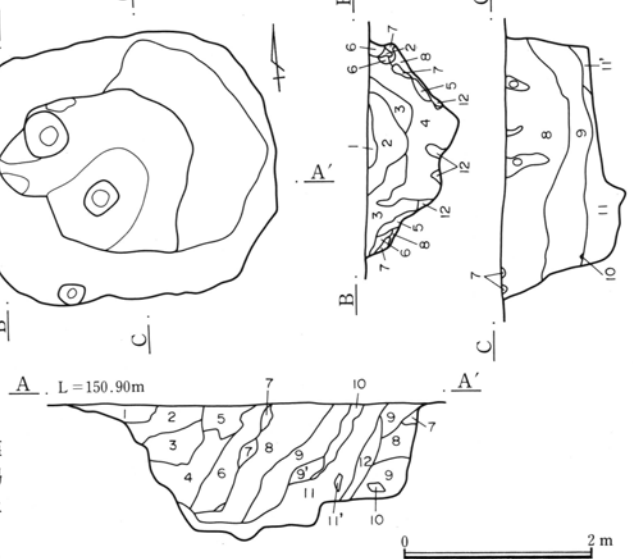
10号風倒木覆土

1：暗褐色土：暗褐色土と暗茶褐色土のソフトな混土主体。 2：明茶褐色土主体。暗灰褐色土やローム粒僅かに含む。 3：暗茶褐色土：明灰褐色土の小ブロックとローム粒を僅かに含む。 4：暗褐色土：暗茶褐色土ブロックやや多く混入し、As-YP僅かに含む。 5：暗褐色土：暗褐色土に9層土の入るブロック混土層主体。 6：黄褐色土：くすんだローム粒層。暗褐色土ブロック・As-YPやや多く、白色粒子多く混入。 7：黄褐色土：くすんだローム粒層。大量のAs-YP混入。 8：黄褐色土：9層土に暗褐色土の入るブロック混土層主体。 9：黄褐色土：As-YP下の明るいローム。

10号風倒木



12号風倒木



色土小ブロック僅かに含む。 5：暗茶褐色土：乳白色小粒子を僅かに散在し、2層土のブロックを僅かに含む。 6：暗黄褐色土：乳白色小粒子を含む暗黄褐色土ブロック主体。ロームブロック・As-YPを僅かに含む。 7：黄褐色土：8層土に大量のAs-YP層を混じる。 8：黄褐色ローム：肌色をした粘性のあり。 9：黄褐色ローム：8層に比し黄橙色掛かる。(9'：9層に比し明橙色掛かる) 10：黄褐色土：明橙色粒子・砂粒(As-BP-1ユニット)を大量に含む。 11：黄褐色土：くすんだローム粒を主体とし、浅黄色軽石粒僅かに、炭化物粒・乳白色軽石を極く僅かに含む。(11'：11層に似るが軽石の含有量多い。) 12：淡黄色土：淡黄色粒子を主体とし、明橙色小粒子を極く僅かに含む。
〔0～3層は軟質であり、4～12層は硬質である。〕

第409図 10～12号風倒木

10号風倒木（縄文時代か、第409図、図版138）

概要 本風倒木はD区東端部に所在している。

出土遺物はないが、覆土にローム漸移層土様の土壌を見る一方黒色系の土壌を含まないことから、この風倒木は完新生の古い段階の倒木痕と推定する。倒木の方向は西南西方向と推定される。

規模 長径：310cm 短径：300cm 深さ：84cm

構造 本風倒木のプランは隅丸の台形に近いもので、東北東－西南西方向にやや長くなっている。

底面は丸底気味で、壁面は東北東側が他の面に対しやや傾斜がきつい状況が見られた。

11号風倒木（縄文時代以降、第409図、図版138）

概要 本風倒木はD区東部に位置する。

本風倒木からの出土遺物は熱変成岩の剥片3片だけであり、時期の特定には至らなかった。

一方、覆土には黒色系の土壌が含まれることから、本風倒木は縄文時代以降の倒木痕として捉えられるものと思われる。

尚、倒木方向は断面観察からは南西方向の可能性

が想定されるが、壁面の傾斜状況の比較からは南東内至南方向になることが想定される。

規模 長径：411cm 短径：356cm 深さ：86cm

構造 本風倒木は隅丸方形に近いプランを呈し、北東－南西方向にやや長くなっている。

底面は丸底状であり、壁面は北西側が他の面に対しややきつい傾斜状況を示している。

12号風倒木（古代以降、第409図）

概要 本風倒木はD区東南部の掘立柱建物群の北西、11号溝の北東コーナー部分に隣接している。

本風倒木は出土遺物に奈良・平安時代の土師器甕片等を見たため、古代以降の倒木痕と想定される。また磁器も見たが、攪乱に伴う流入品と思われる。

尚、倒木方向について断面観察及び壁面の傾斜状

況の比較から西側に向かってであると判断される。

規模 長径：381cm 短径：282cm 深さ：146cm

構造 本風倒木は隅丸の五角形様のプランを呈し、東西にやや長くなっている。

底面は船底形であり、東側の壁面が垂直に近い状況を示している。

15号風倒木（縄文時代以降、第410図）

概要 本風倒木はD区東南部に所在している。

遺物の出土はなかったが、覆土に黒色系の土壌を多く見ることから、倒木は完新生の古くない時期に起こったものと推定される。

尚、倒木の方向については壁面傾斜等の検討から

北西側と判断されるのである。

規模 長径：259cm 短径：233cm 深さ：58cm

構造 本風倒木は半円様のプランを呈しており、北西－南東方向に引かれるように長い。

底面は船底形であり、東側の壁面が垂直に近い。

23号風倒木（縄文時代以降、第410図、図版139）

概要 本風倒木はD区中北部に所在している。

出土遺物は見られなかったが、覆土に漆黒の土壌を持つので完新生の新しい時期の倒木痕として把握される。

尚、倒木の方向については断面観察から西側であると判断されるが、壁面の傾斜の状況は本遺跡の他

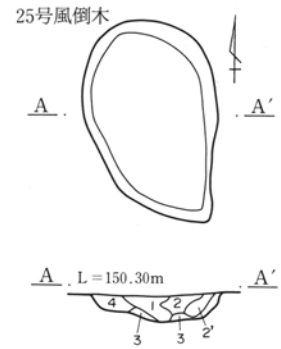
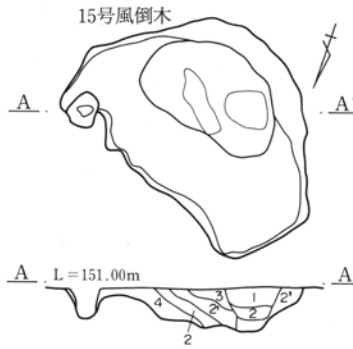
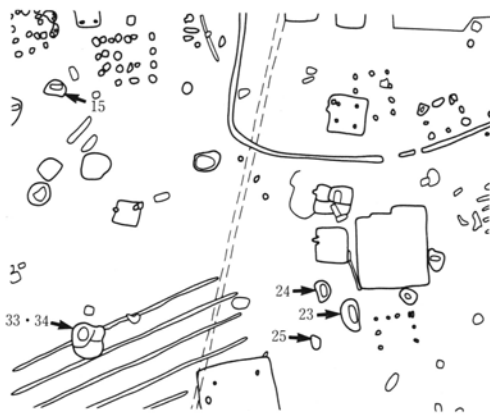
の風倒木とは異なり倒木方向の側の方が鋭い。

規模 長径：449cm 短径：233cm 深さ：98cm

構造 本風倒木のプランは柑橘類の房状の形態を呈し、長軸はやや西に傾くが概ね北を向いている。

底面はやや平底気味であり、西側の壁面は鋭く立って東側の壁面の傾斜は緩やかである。

第3章 発見された遺構と遺物



23号風倒木覆土

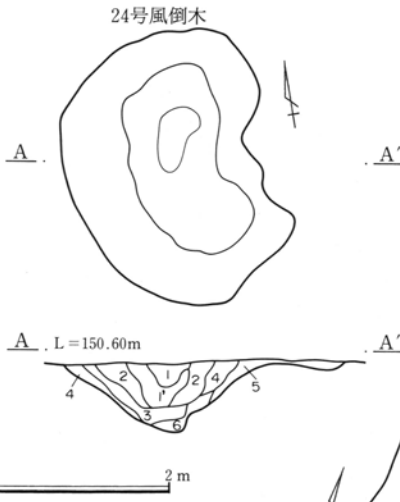
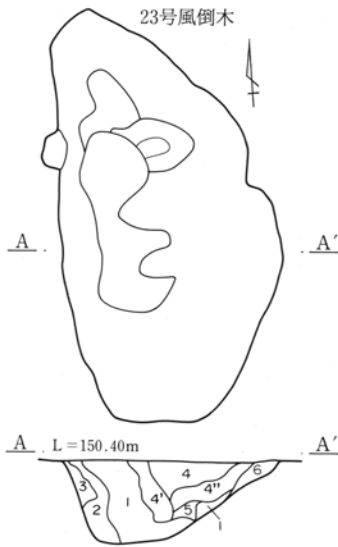
1：漆黒土：白色土粒・褐色土粒を多量に含む。 2：暗黒褐色土：白色土粒とAs-Bを多量に含んで堅く締まる。 3：褐色土：褐色土と暗黒褐色土の混土中にAs-YPが多量に混入し堅く締まる。 4：暗褐色土：白色土粒含みの暗褐色土中に黒色土がぼやけた斑状に混入する。(4'：4層よりも黒色土斑の混入が顕著になる。4''：4層と4'層の中間層。) 5：明褐色土：暗褐色土と黄褐色土の混土。 6：暗褐色土：As-YP含みの暗褐色土中に黄褐色土が少量混入する。

15号風倒木覆土

1：暗黒褐色土：As-YPが微量混入する。 2：暗黒褐色土：黒色土と褐色土の混土。As-YPが少量混入する。(2'：黒色土と褐色土の混土だがAs-YPは含まない。) 3：暗黒褐色土：白色土粒が多量に混入する。 4：黄褐色ローム：As-YP含む。

25号風倒木覆土

1：黒色土：淡褐色土粒を微量に含む。堅く締まる。 2：暗茶褐色土：黒色土と褐色土の混土。(2'：褐色土主体に黒色土混入。) 3：黄褐色土。 4：黄褐色土：As-YPを含む。



24号風倒木覆土

1：暗黒褐色土：白色土粒を多量に含む。(1'：1層よりも更に多量の白色土粒を含む。) 2：暗黒褐色土：白色土粒を多量に含む暗黒褐色土中に汚れた褐色土が斑状に少量混入する。 3：暗黒褐色土：黄褐色土と暗褐色土の混土。白色土粒を多量に含む。 4：黄褐色土：黒色土とAs-YPを微量含む。 5：黄褐色ローム：赤味を帯びたローム。As-YPを少量含む。 6：暗褐色土：暗褐色土と黒色土の混土中に大きめのAs-YPが微量混入する。

33号風倒木覆土

1：暗褐色土：微量の黒色土が混入する。 2：黒色土：くすんだ暗褐色土が若干量混入する。(2'：黒色土が減少し、代わって暗褐色土の量が増加する。2''：暗黒褐色土：2層よりも更に黒色土の量が減少する。) 3：暗黄褐色土。 4：暗黄褐色土：暗黄褐色主体土中に黒色土が若干量混入する。(4'：暗黄褐色主体土中に黒色土が微量混入する。) 5：黒色土：褐色気味の黒色土中にAs-YPが微量混入する。 6：暗褐色土：As-YPを少量含む。



34号風倒木覆土

1：暗褐色土：As-YPが極く微量見られる。 2：暗褐色土：暗褐色主体土に黒色土が微量混入する。 3：明褐色土。 4：黒色土：くすんだ暗褐色土少量とAs-YPが微量混入する。(4'：黒色土：黒色土とくすんだ褐色土の混土。) 5：暗黒褐色土：夾雑物を含まない。 6：暗褐色土：As-YPを多量に含む。



第410図 15・23～25・33・34号風倒木

24号風倒木（縄文時代以降、第410図、図版139）

概要 本風倒木はD区中北部に位置している。

本風倒木からの遺物の出土は見られなかったため倒木時期の特定には至らなかったが、覆土に黒色系の土壌が多く見られることから完新生の新しい段階の倒木痕であろうと判断される。

尚、倒木の方向は断面観察と壁面の状況の比較か

ら西方であろうと判断される。

規模 長径：295cm 短径：224cm 深さ：78cm

構造 本風倒木は空豆形のプランを呈し、長軸は北北東を向いている。

底面は丸底状で、壁面は西側のものに比べ東壁は乱れている。

25号風倒木（縄文時代以降、第410図、図版139）

概要 本風倒木はD区の中北部に位置する倒木痕であるが、上位部分の削平が進み、遺存状況はあまり良好ではなかった。

出土遺物を見ることはできなかったが、24号風倒木同様に覆土に黒色系の土壌が多く見られることから、完新生の中でも新しい段階の倒木痕であろうと判断される。

尚、倒木の方向は断面及び平面形態から西側であろうと判断される。

規模 長径：212cm 短径：142cm 深さ：37cm

構造 本風倒木は米粒状のプランを呈している。長軸は北北西を向いている。

底面は平底に近い状況で、壁面の傾斜には特に差異は認められなかった。

33号風倒木（縄文時代以降、第410図、図版139）

概要 本風倒木はD区北東部の現在の耕作溝の見られる一角に発見された。

東側に34号風倒木と接して切り合い関係にあるが、本風倒木が34号風倒木に切られている。また、34号風倒木との境付近に於いては壁面を掘り過ぎてしまったため、本風倒木の東壁面の多くを失い、全体の状況を想定することもできなかった。

本風倒木からの出土遺物は見られなかったが、覆土に黒色土を含むことから、完新生のもので、古い段階の倒木痕ではないものと判断される。

倒木方向については断面観察から西側であろうと判断される。

規模 長径：390cm程度 短径：214cm以上 深さ：67cm

構造 本風倒木のプランは隅丸方形様の形態を呈するものと想定され、長軸は凡そ北北東を向くものと想定される。

底面は南西隅部に向かって傾斜するようで、壁面の傾斜は断面を見る限りでは西壁に対し東壁の方がきついようである。

34号風倒木（縄文時代以降、第410図、図版139）

概要 本風倒木はD区北東部に所在する。

上述のように西側で33号風倒木と切り合い関係にあり、本風倒木がこれを切っている。また、33号風倒木との境付近は掘り過ぎてしまっているが、本風倒木に於いては凡その形態を把握することができた。

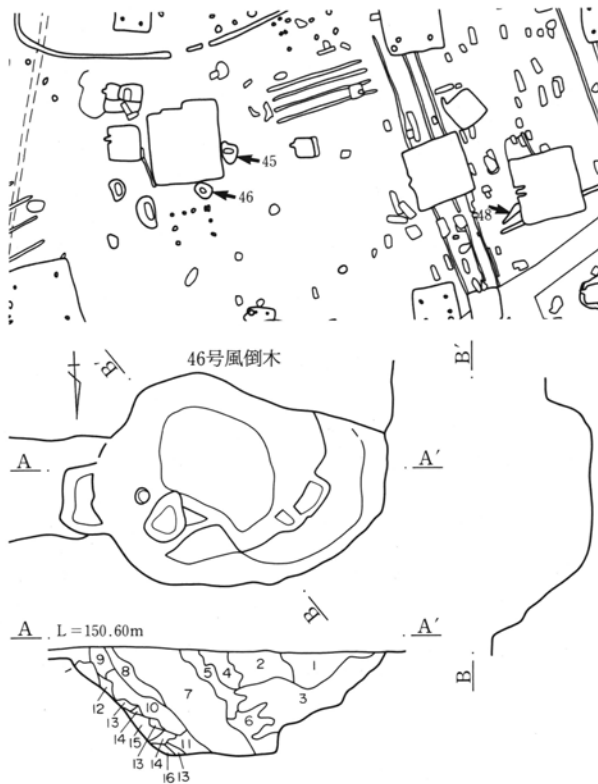
本風倒木からの出土遺物は無かったが、覆土に黒色土を含むことから完新生の新しい段階の倒木痕として把握されるものと思われる。

倒木方向については明瞭に把握できなかったが、断面の状況と形態の状況から東若しくは西方向であろうと判断される。

規模 長径：452cm 短径：264cm以上 深さ：74cm

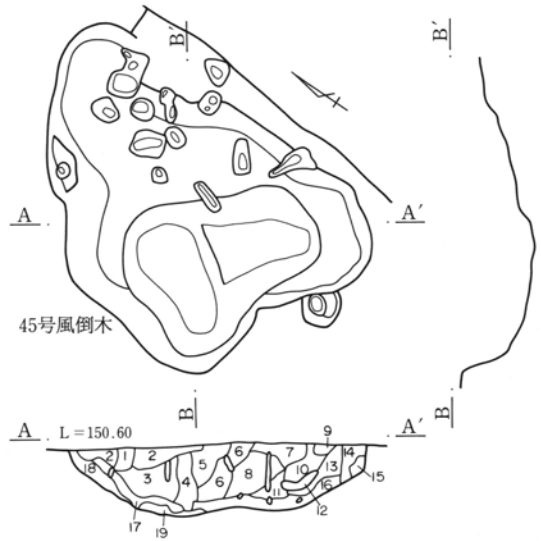
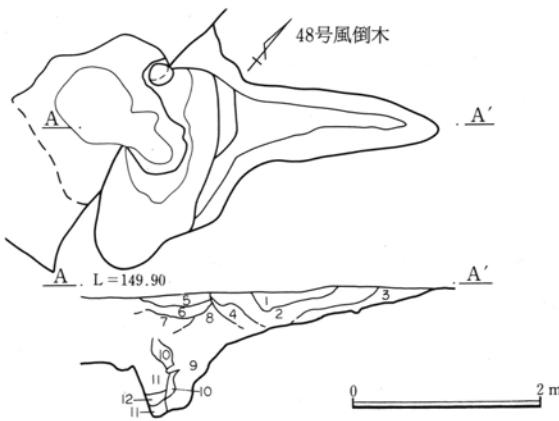
構造 本風倒木は楕円形様のプランを呈する。長軸は北北東を向く。

底面は平底に近い形態を示し、壁面の傾斜は西壁に対し東壁の方が若干きついようである。



46号風倒木覆土

1：にぶい黄褐色土（ローム漸移層土下層土）に黒褐色土（ローム漸移層上層土）の入るブロック層。2：暗褐色土：黒褐色土ににぶい黄褐色土の入るブロック層。4層に近い部分では若干の明黄褐色ローム小ブロック混入。3：黒褐色土に若干のにぶい黄褐色土と少量のAs-YP・明黄褐色ローム小ブロック混入。4：にぶい黄褐色土に明黄褐色ロームと黒褐色土の混入するブロック層。5：明黄褐色ロームにAs-YPとにぶい黄褐色土の入るブロック層。6：5層土に似る。7：明黄褐色ローム。層上位ではにぶい黄褐色土ブロック若干混入。8：黄褐色ローム(As-BPを含む) 9：にぶい黄褐色土と黒褐色土のブロック。明黄褐色・黄褐色ロームの小ブロック混入。10：明黄褐色ロームと黄褐色ロームの混土。少量の黒色土小ブロック混入。11：黄褐色ローム。12：9層に似るが黄褐色土多く、少量のAs-YP混入。13：暗褐色土：明黄褐色ローム・黄褐色ローム・黒褐色土・黒色土の混土。14：明黄褐色ロームにAs-YPと似るが黄褐色土の入るブロック層。15：黒色土に若干の明黄褐色・黄褐色ローム入るブロック層。16：にぶい黄褐色土のブロック層。



ピット覆土

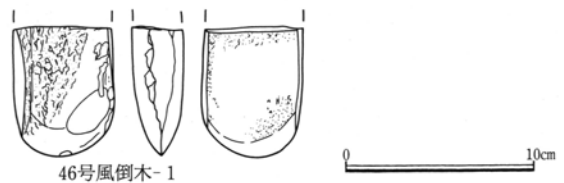
1：にぶい黄褐色土と黒褐色土のブロック層。2層より締めり欠。

45号風倒木覆土

2：にぶい黄褐色土と黒褐色土のブロック層。3：黒褐色土ににぶい黄褐色土入るブロック層。4：にぶい黄褐色土ブロック層。3層に近い部分にかけ黒褐色土ブロック混入。5：にぶい黄褐色土を中心に6層に向かって黄褐色土(As-YP混入のローム漸移層最下層土～ローム。色調に開きあり。)となる。6：黄褐色土。8層に近い部分にAs-YP混入。7：明黄褐色ロームに黄褐色土入るブロック層。As-YP多くない。8：明黄褐色ロームに黄褐色土入るブロック層。9：にぶい黄褐色土に明黄褐色ローム入るブロック層。10：黒褐色土ににぶい黄褐色土と若干のAs-YP及び明黄褐色ローム小ブロック混入。11：黒褐色土とにぶい黄褐色土の混土に明黄褐色・黄褐色ロームの小ブロック少量含む混土。12：黄褐色土：にぶい黄褐色土に黒褐色土・黄褐色土・黄褐色ローム入るブロック層。13：3層に似るがAs-YPを若干混入。14：にぶい黄褐色土に黒褐色土入るブロック層。15：にぶい黄褐色土に若干の黄褐色土入るブロック層。As-YP少ない。16：8層土に黄褐色土入るブロック層。17：にぶい黄褐色土と黒褐色土に黄褐色土入るブロック層。18：にぶい黄褐色土と黄褐色土のブロック層。若干の黒褐色土ブロック混入。19：黄褐色ロームににぶい黄褐色土・黄褐色土と黒褐色土粒入る小ブロック層。

48号風倒木覆土

1：暗褐色土：明褐色土ブロック僅かに混入。2：暗褐色土：僅かに暗褐色土ブロックとローム粒混入。3：暗褐色土：明褐色土ブロックと黒褐色土ブロックを僅かにロームブロック極く僅かに含む。4：暗褐色土主体。黒褐色掛かる。5：褐色土：暗褐色土ブロックと乳白色粒を僅かに含む。6：暗褐色土主体。褐色土ブロック僅かに含む。7：暗褐色土主体。8：黒褐色土主体。9：暗褐色土主体：明茶褐色土粒・ローム粒を僅かに、黒褐色土と淡い色調のロームのブロックを極く僅かに含む。10：暗褐色土：暗灰褐色土ブロックと明茶褐色土粒、赤褐色土粒を僅かに含む。11：明茶褐色土：灰褐色土ブロックと乳白色粒を極く僅かに含む。12：明茶褐色土：11層によく似る。灰褐色土ブロックを大量に含む。



第411図 45・46・48号風倒木及び出土遺物

45号風倒木（縄文時代以降、第411図、図版139）

概要 本風倒木はD区中央部、H-147号住居に近接して所在する。

出土遺物は見られず、倒木の時期の特定も行えなかったが、本風倒木も黒色系の土壌を伴っているので完新生の新しい段階の倒木痕ではないかと想定される。

倒木方向については、覆土及び壁面の状況から西

側方向であろうと想定される。

規模 長径：392cm 短径：268cm 深さ：81cm

構造 本風倒木は南北方向に長い隅丸の三角形様のプランを呈している。

底面は平底に近いものであったが、若干の段差があつて南西隅近くに向かって深くなっていく傾向が認められた。

46号風倒木（縄文時代以降、第411図、図版139・162）

概要 本風倒木はD区中央部に位置する。

H-147号住居の調査に伴って発見されたもので、H-147号住居の北壁西部に重複してこれに切られている。

本風倒木からは磨製石斧（1）が出土している。

倒木の時期については磨製石斧が出土していることと、H-147号住居に切られていることから縄文時代以降、6世紀後半以前であると判断されるが、細

かい時期については特定されなかった。

倒木の方向については、覆土と壁面の傾斜状況から西側であろうと判断される。

規模 長径：350cm 短径：222cm 深さ：112cm

構造 本風倒木は東西に長い、やや不整形な隅丸方形様のプランを呈する。

底面は平底気味で、壁面は段々があり、東壁に比し西壁の方がきつい傾斜を示す。

47号風倒木（古墳時代後期以前、第383図）

概要 本風倒木はD区北西部に所在する。

本風倒木はH-168号住居の調査に伴って、その掘り方面に於いて確認調査された。出土遺物はなく、覆土に黒色土を含むことから完新生の新しい時期で、H-168号住居の時期と推定される6世紀後半以前の倒木痕とされるに過ぎなかった。

倒木方向については形態的特徴から北西方向であろうと想定される。

規模 長径：186cm 短径：143cm 深さ：50cm

構造 本風倒木は空豆様のプランを呈する。

底面は丸底様で、壁面は他の部分に対し南東側の面の傾斜がきつい。

48号風倒木（古墳時代後期以前、第411図、図版139）

概要 48号風倒木はD区北西部、H-142号住居の東壁北部に接して位置する。

本風倒木は当初H-142号住居の東に近接し、北東-南西に切り合う2基の土坑として処理していたが、H-142号住居の掘り方面の調査に当たってH-142号住居側まで拡張することを確認したため風倒木として一括処理することとした。尚、複数の風倒木痕の重複である可能性は残される。

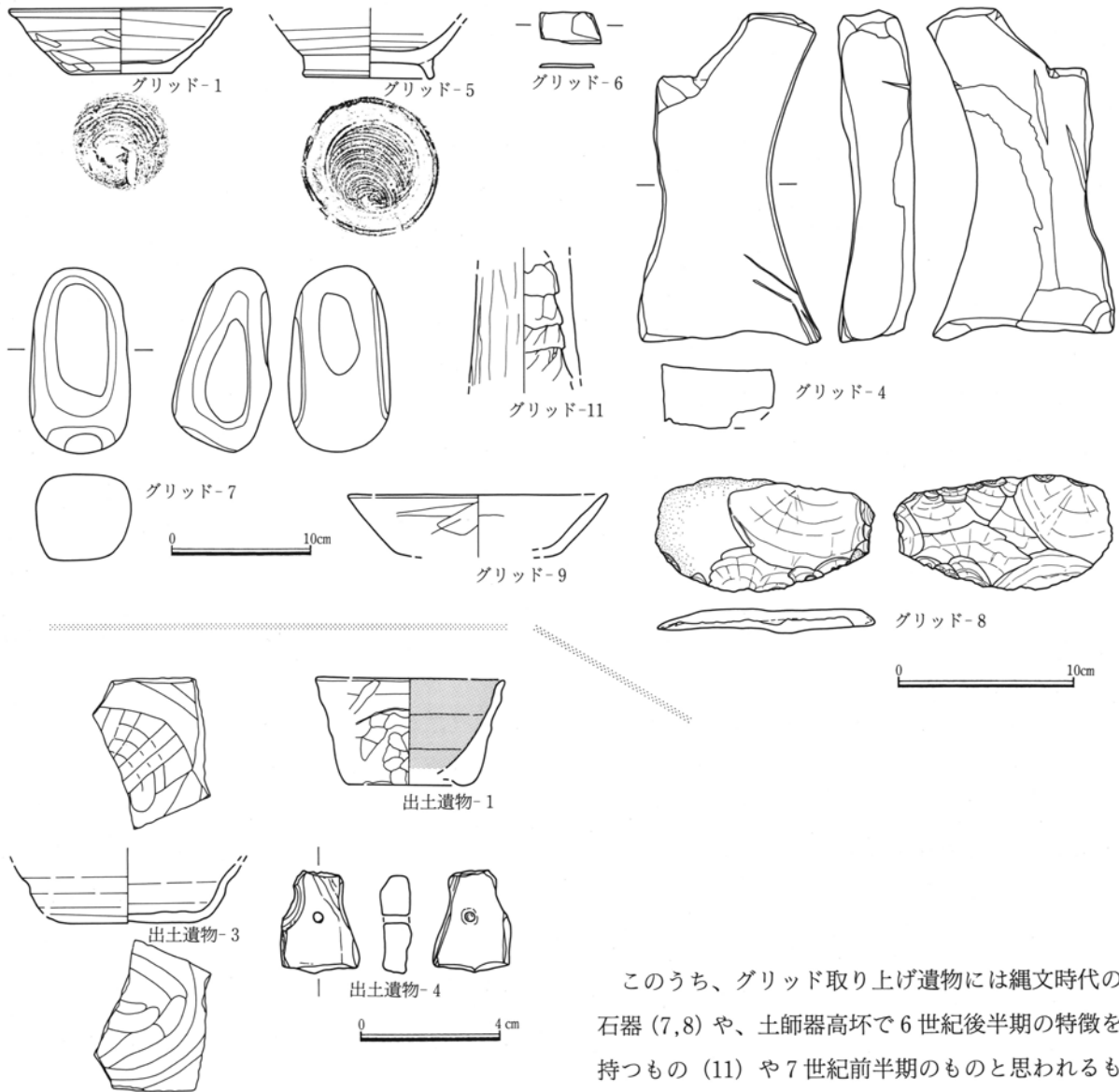
本風倒木の倒木の時期は特定できなかったが、縄文土器片1点の出土が見られたこと、及び覆土に黒

色系の土壌を含むこととH-142号住居に切られることを併せて、倒木の時期は縄文時代以降で西暦600年前後より以前のものであることが想定される。

尚、倒木方向については、遺構の状況等から西或いは西南西であったものと思慮される。

規模 長径：456cm程度 短径：278cm程度 深さ：151cm

構造 本風倒木は不整形なプランを呈する。底面は平底気味で凹凸が見られ、壁面は西側に比し東側がやや急である。



第412図 D区遺構外出土遺物

D区に於ける遺構外出土の遺物(第412図、図版162・165)

概要 以上の他にもD区の各グリッド或いは埋土からはD区に見られた遺構群に相当する古墳時代後期から平安時代にかけてのものを中心とする少なくない遺物の出土を見ている。

このうち、グリッド取り上げ遺物には縄文時代の石器(7,8)や、土師器高坏で6世紀後半期の特徴を持つもの(11)や7世紀前半期のものと思われるもの(10)、8世紀後半期のものかと思われる土師器坏(9)や、9世紀前半期の特徴を示す須恵器高台付碗(5)や10世紀前半期の須恵器坏(1)の他、こも編み石(3)や砥石(4)の出土も見られた。

また、排土等からは6世紀後半期の特徴を示す土師器坏(1)や10世紀前半期のものと思われる須恵器坏(2,3)の他、未製の石製模造品(4)などの出土も見られた。

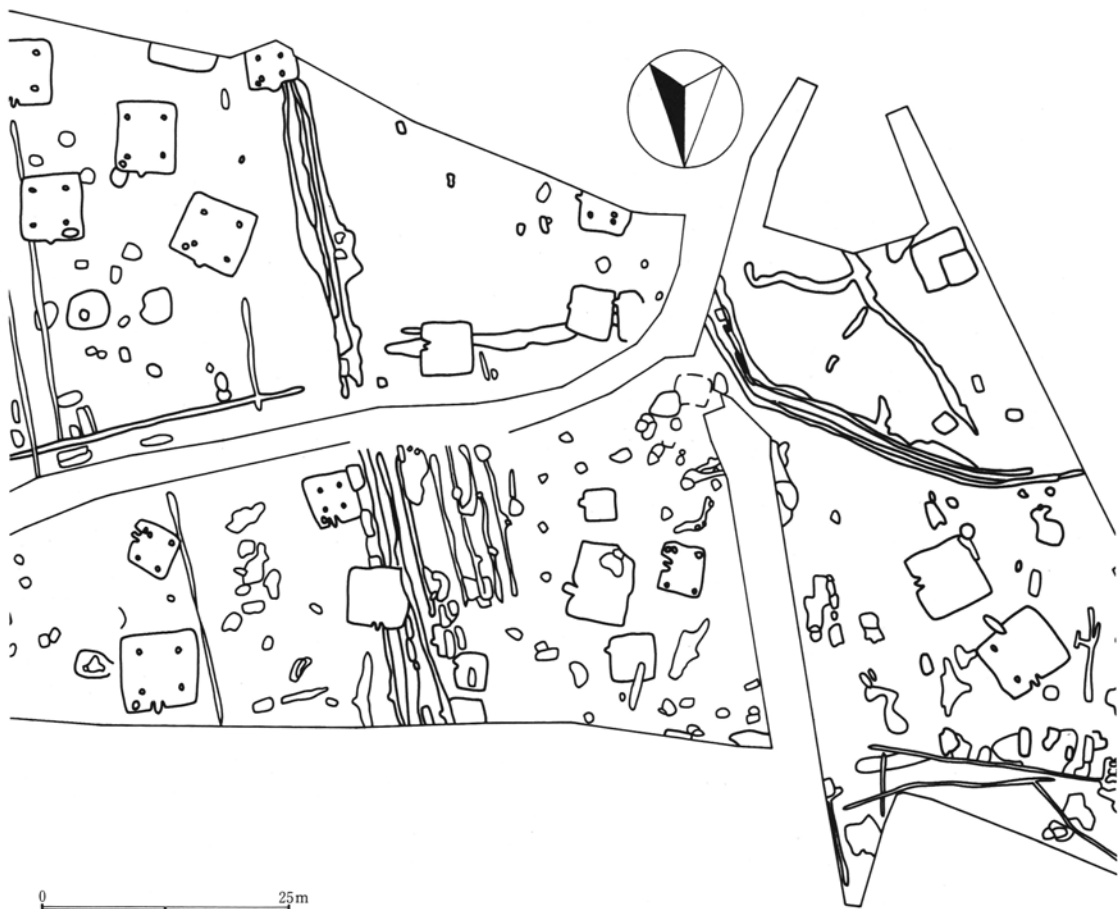
第7節 E区の概要

E区は本遺跡の西寄り、西側に向けての緩斜面が形成される地域である。確認された遺構のうち東部のものはD区に引き続く遺構群、西部のものはF区に続く遺構群であり、全体として時期的な偏りが見られた。また、西部には削平面が形成され、中部北半も削平が著しく全体として遺構の遺存状況はさして良好ではなかった。しかし、古墳時代後期の竪穴住居2軒にはほぼ完全な形でカマドの遺存が見られるなど、個々の遺構から得るものも少なくなかった。

さて、D区に於いて確認された遺構の中で竪穴住居は27軒であった。これらに想定される時期は6世紀中葉期1軒、同後半期9軒、西暦600年前後5軒、7世紀前半期1軒、9世紀後半期1軒、10世紀前半期6軒であり、古墳時代後期1軒、時期不詳1軒があっ

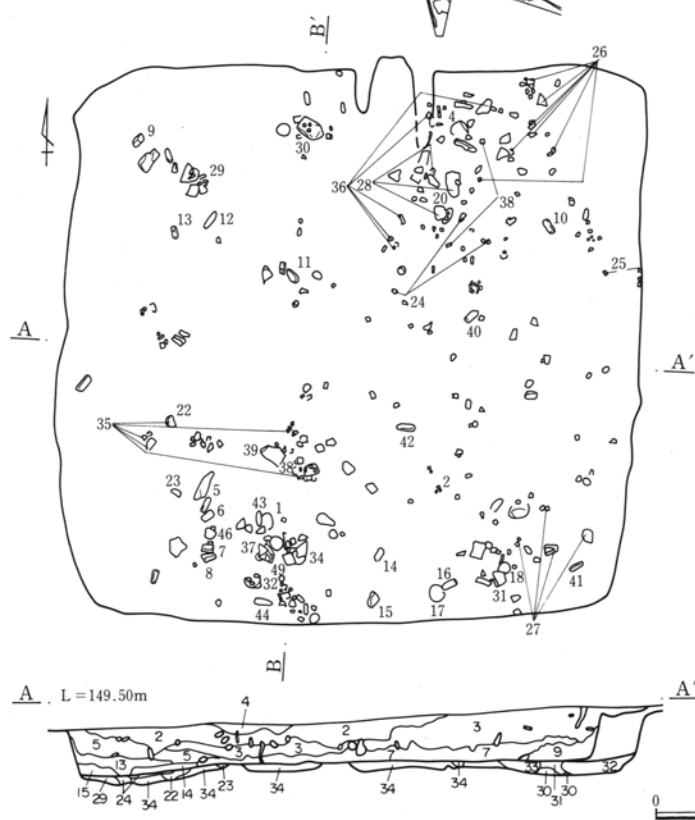
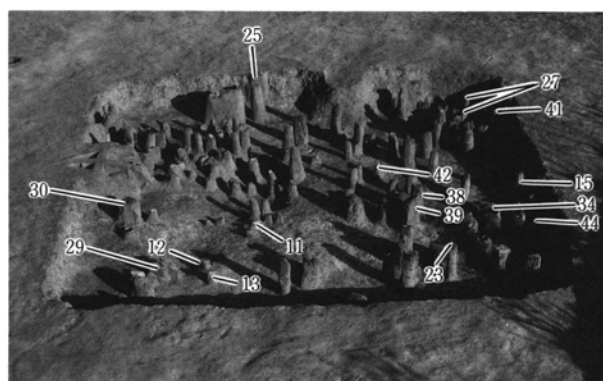
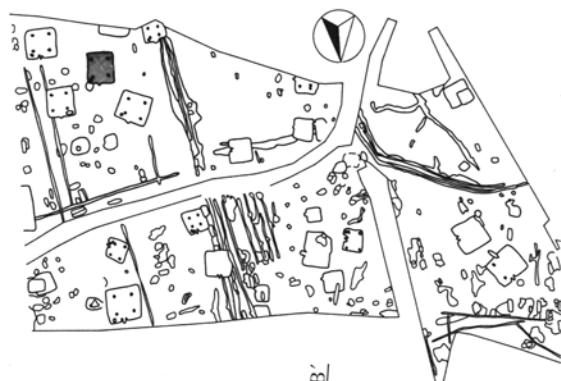
たが、7世紀後半から9世紀前半期にかけてのものは確認できず空白状態を造っている。

竪穴住居以外の遺構では、その多くが土地区画に資すると想定される江戸時代後期以降のものを中心とした溝遺構10条以上、古墳時代後期以降で江戸時代中期以前の範疇に含まれるものを20基、江戸時代後期以降のもの7基、時期不明のもの1基を数える土坑32基も見られたが、土坑として処理したものの中には風倒木の可能性を持つもの3基、溝遺構の一部と思慮されるもの2基も含まれていた。また、畠の礫の廃棄に伴うと思われる集石遺構1基、風倒木痕3基、そして近世の所産と推定される炭窯1基も確認しているが、B～D区に見られた掘立柱建物は一棟も確認されなかった。



第413図 E区全体図

第8節 E区の遺構と遺物



住居覆土

1・2：茶褐色土／12：暗茶褐色土：上層土を中心のローム漸移層土（以下「漸移層土」）主体。3：暗茶褐色土／8：黒褐色土：漸移層上層土主体。4・9：明茶褐色土／10：やや明るい褐色土／11：淡茶褐色土／20：茶褐色土：漸移層土主体。5：明茶褐色土／6・19：茶褐色土／7・16・18：淡茶褐色土：下層土中心の漸移層土主体。13・17：明褐色土：漸移層下層土主体。14：明褐色土：ロームと漸移層土の混土主体。15：黄褐色土：ローム主体。

掘り方覆土

21・25：茶褐色土／26：やや橙色の掛かった茶褐色土：上層中心の漸移層土主体。22：明茶褐色土／24・27：明褐色土：下層中心の漸移層土主体。23：茶褐色土：漸移層土主体。29：暗黄褐色土：ロームと漸移層下層土の混土主体。30・31：明黄褐色土／34：黄褐色土：ローム主体。32：明褐色土：弱い焼土化見る漸移層下層土主体。33：橙色の掛かった明褐色土：焼土化のやや進行した下層土中心の漸移層土主体。

第414図 H-123号住居

H-123号住居（古墳時代後期、第414～417図、図版166・183～184・201）

概要 本住居はE区南東隅部に在る竪穴住居跡で、住居西半を中心に一部床面を掘りすぎってしまった。

出土遺物のうち本住居に伴うと判断されたものには6世紀後半期の特徴を示す一群の土師器（1～4）の他、こも編み石（5～16）が見られた。また、南東隅部の床面上には粘土のまとまりも見られた。

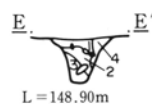
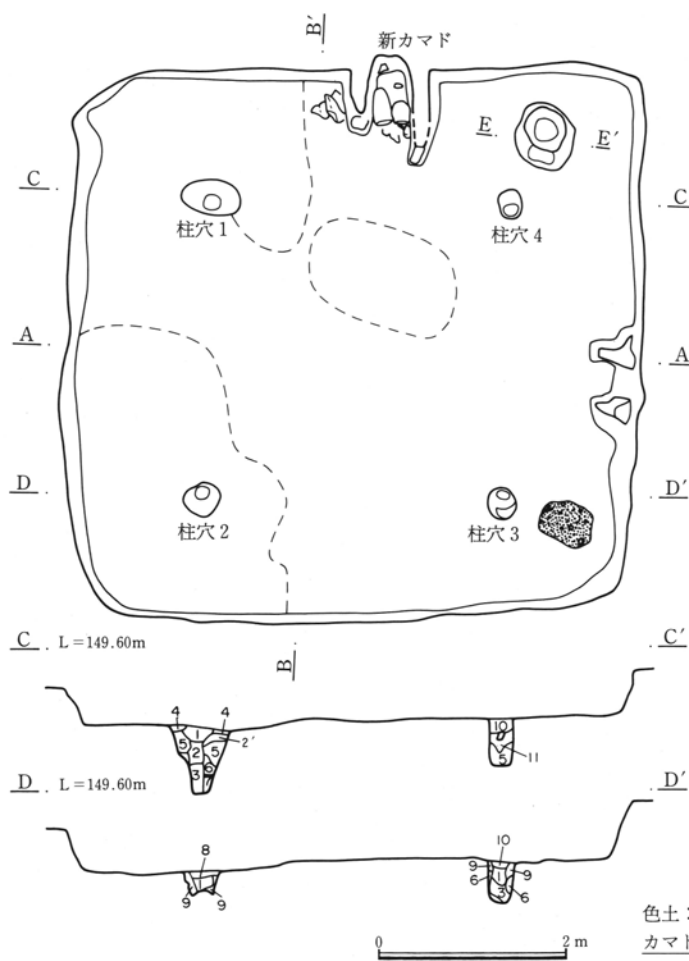
一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕片を中心に、6世紀後半期から7世紀前半期の土師器群

（17～24, 26～34, 36～38）や7世紀後半期の土師器甕（35）・10世紀前半期の須恵器（25）の他、女瓦の布目瓦（39）やこも編み石（40～47）も見られた。

以上の点から本住居は6世紀後半期の所産で、覆土の遺物から住居廃絶後早い段階から平安時代までその痕跡に遺物の投棄されたことが窺われる。

規模 長軸：619cm 短軸：585cm 深さ：39cm

新カマド 幅：109cm 奥行き：104cm 左袖 幅



貯蔵穴覆土

1：茶褐色土／4：暗茶褐色土：ローム漸移層土(以下「漸移層土」)主体。ローム・As-YP多く含む。 2：暗茶褐色土／3：茶褐色土：漸移層土主体。

柱穴覆土

1・2・2'：淡茶褐色土：漸移層下層土主体。 3：暗茶褐色土／4：暗黄褐色土／9：淡茶褐色土：漸移層下層土とロームの混土。(4層は貼り床) 5：暗黄褐色土／7：明褐色土：ローム主体。 6：明茶褐色土：下層土中心の漸移層土主体。 8：暗黄褐色土：ロームと漸移層土の混土。 10：茶褐色土：やや焼土化見る漸移層土主体。 11：暗褐色土：上層中心の漸移層土主体。

新カマド覆土

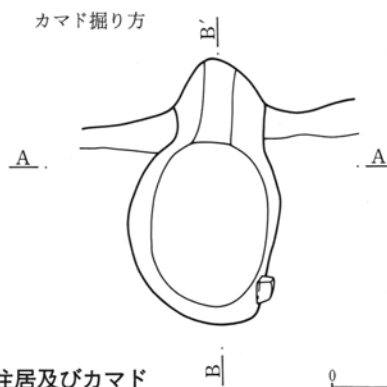
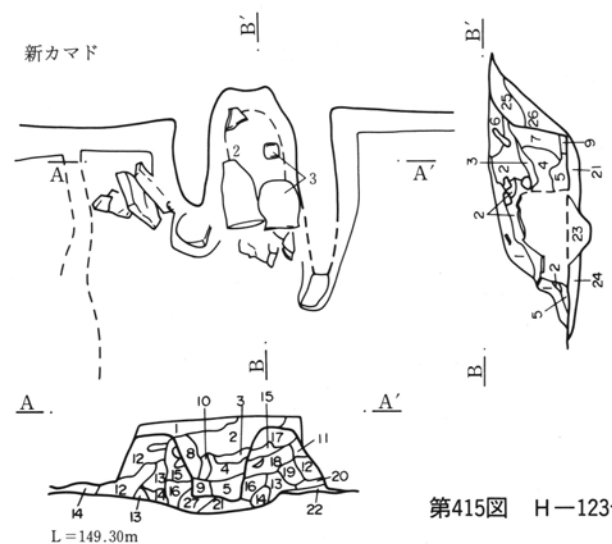
1：淡茶褐色土／5：暗茶褐色土／10：明褐色土：下層中心の漸移層土主体。 2：明茶褐色土／3：淡赤褐色土／4：暗赤褐色土／6：淡橙褐色土／9：淡茶褐色土：焼土化見る漸移層下層土主体。 7：淡赤茶褐色土／8：暗橙褐色土：焼土化進行の漸移層土主体。

袖構築材

11：茶褐色土／17：暗茶褐色土／18：暗赤褐色土：漸移層土主体。(17・18層は焼土化進む。) 12：暗茶褐色土：焼土化見る上層中心の漸移層土主体。 13：灰褐色シルト主体。 14：明茶褐色土／15：暗橙褐色土：漸移層下層土主体。 16：灰茶褐色土：漸移層土と灰色シルトの混土主体。 19：暗黄褐色土：下層中心の漸移層土主体。 20：暗黄褐色土：ロームと焼土化見る漸移層土の混土主体。

カマド掘り方

21：暗黄褐色土／23：暗橙褐色土／24：明茶褐色土／25：暗橙褐色土：焼土化見る漸移層下層土主体。(23・25層は焼土化進行) 22：明橙褐色土：焼土・ローム・暗紫色の焼土化シルト・漸移層土の混土。 26：茶褐色土／27：淡橙褐色土：焼土化見る漸移層土主体。

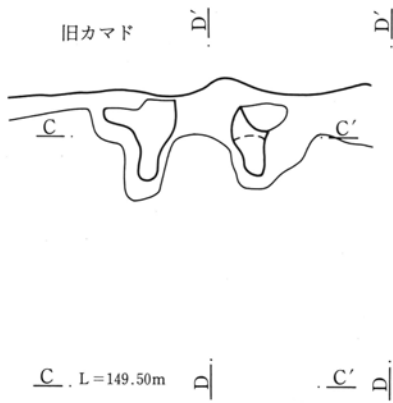


第415図 H-123号住居及びカマド

40cm 長さ：72cm 高さ：40cm 右袖 幅：40cm
 長さ：106cm 高さ：39cm 燃烧部 径：30×91cm
 掘り方 径：80×96cm 深さ：9cm
 旧カマド 幅：121cm 奥行き：60cm 左袖 幅：48cm
 長さ：55cm 高さ：4cm 右袖 幅：47cm

長さ：45cm 高さ：29cm 燃烧部 径：44×32cm
 柱穴1 径：63×40cm 深さ：73cm 柱穴2 径：36×36cm
 深さ：49cm 柱穴3 径：31×30cm 深さ：55cm
 柱穴4 径：30×24cm 深さ：54cm
 貯蔵穴 径：68×63cm 深さ：71cm

第3章 発見された遺構と遺物



旧カマド覆土

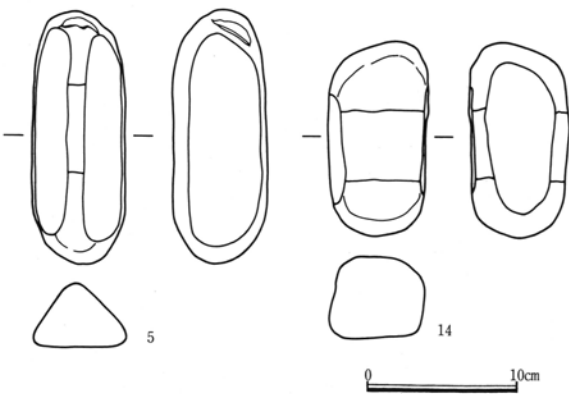
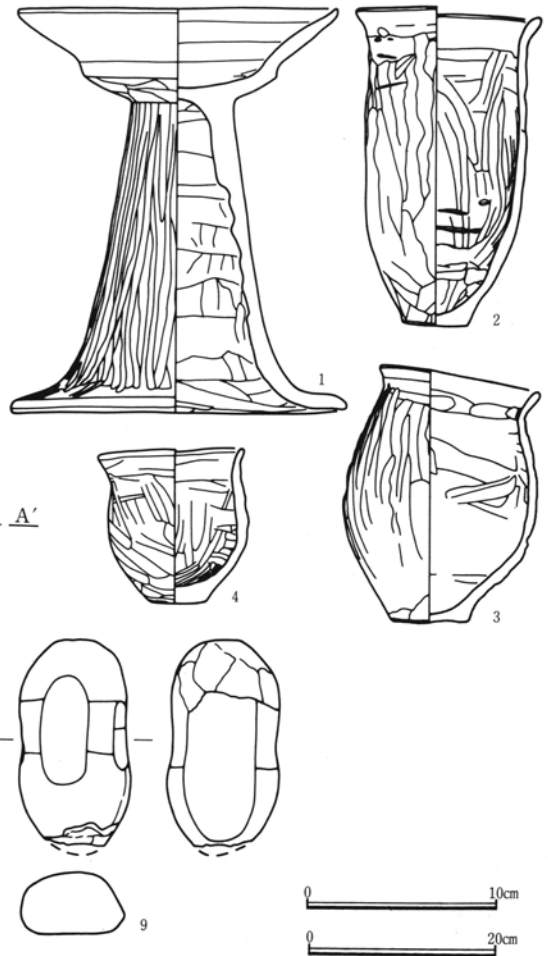
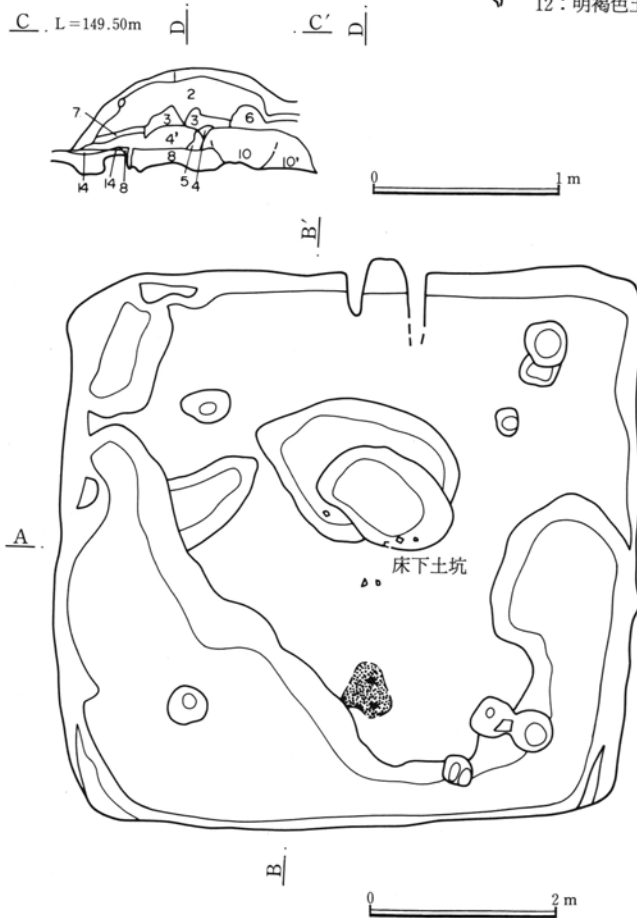
1：明茶褐色土：下層中心のローム漸移層土（以下「漸移層土」）主体。 2：茶褐色土：焼土化見る漸移層土主体。 3：暗褐色土：焼土化見る上層中心の漸移層土主体。 4・4'：明茶褐色土：焼土化見る下層中心の漸移層土主体。 5：黄褐色土：ロームと漸移層下層土の混土主体。 6：茶褐色土／7：暗茶褐色土：弱い焼土化見る漸移層土主体。

カマド掘り方覆土

8：明茶褐色土：ロームと漸移層土の混土主体。 9：明黄褐色土／10・10'：黄褐色土：ロームと漸移層下層土の混土主体。焼土化は9層で見られ、10層は進行、10'層は見られない。 11：明褐色土：弱い焼土化見る漸移層土主体。 14：明茶褐色土：漸移層土主体。 15：黄褐色土：漸移層下層土主体。

住居掘り方覆土

12：明褐色土：下層中心の漸移層土主体。焼土化。 13：明黄褐色ローム主体。



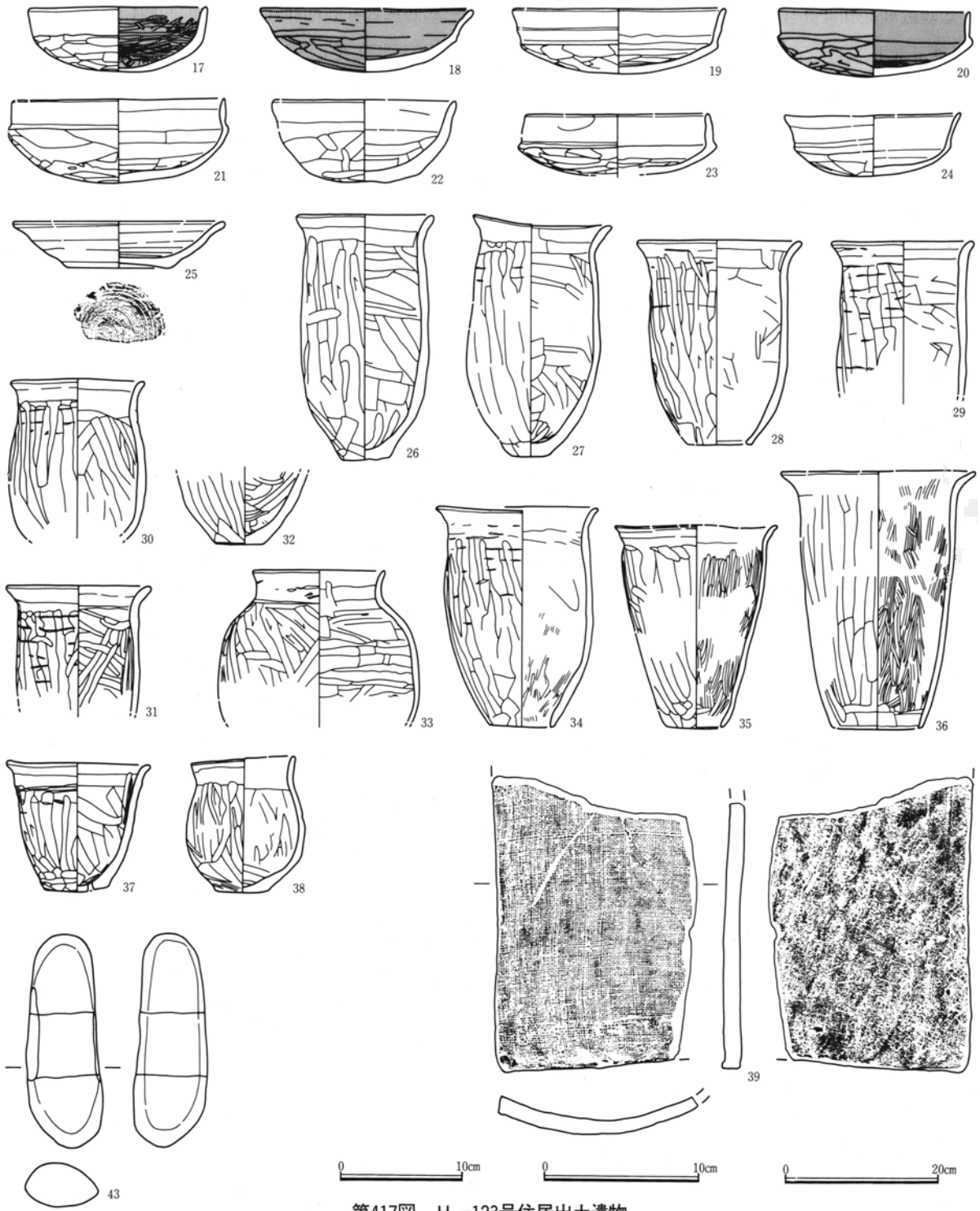
床下土坑 径：144×96cm 深さ：25cm

構造 本住居はやや隅丸の方形プランを呈する。

南半部を中心に深さ8cm以下の幅広の周溝状のほりこみや床下土坑を有する掘り方を持ち、これを焼土化するものも含む各種の土壌で埋め戻して床面を造るが、一部にローム等を用いた貼り床も見られる。

カマドは北壁に造られるもの（新カマド）と、壊されていたが東壁にも床面上に袖等の痕跡を留めるもの（旧カマド）が見られた。何れも掘り方を有し、

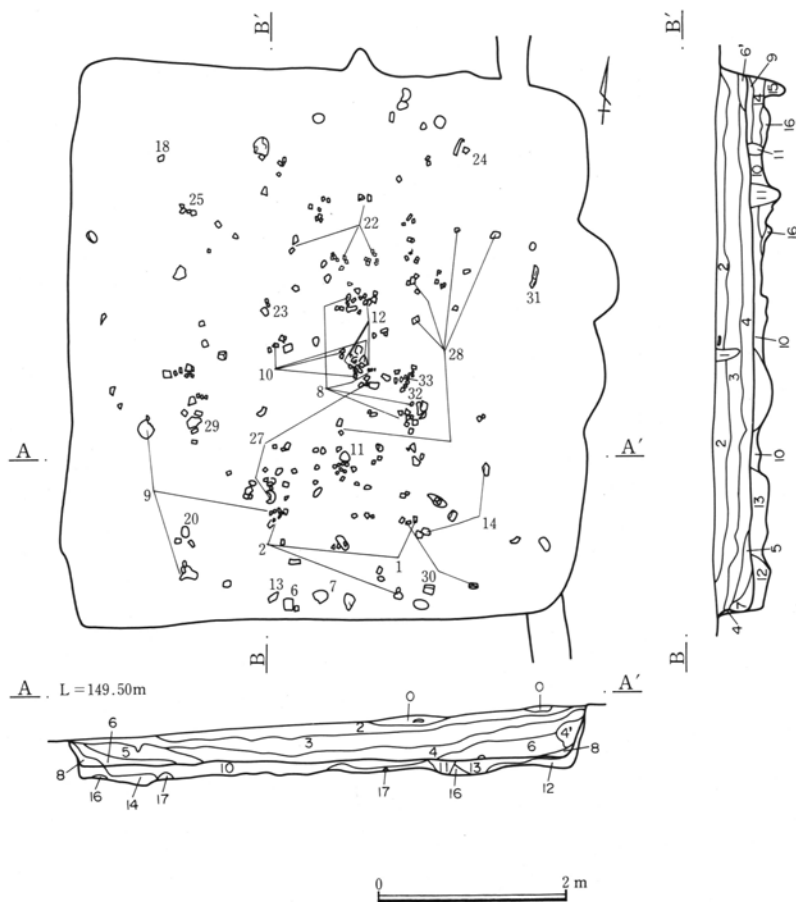
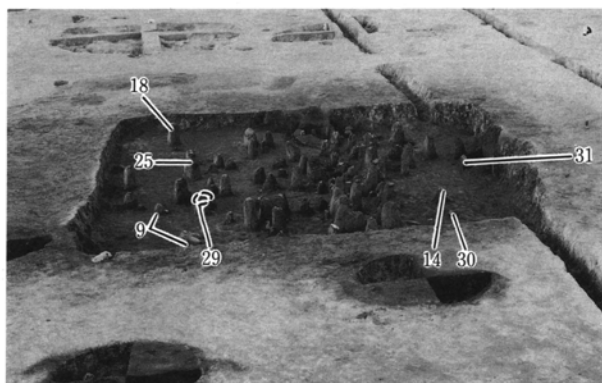
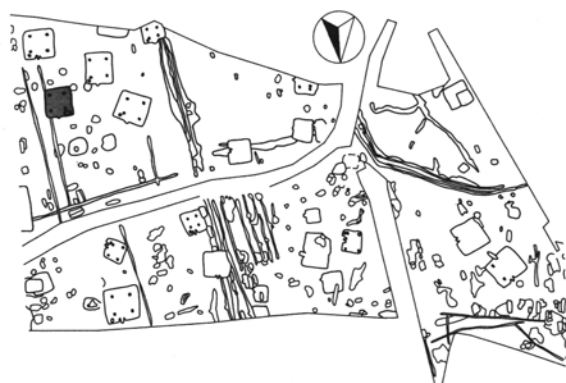
第416図 H-123号住居遺構及び出土遺物



第417図 H-123号住居出土遺物

これを埋め戻して燃焼面を造っている。燃焼部は旧カマドでは壁面の手前に設定され、新カマドは若干壁を掘り込んでいる。新カマドでは2個の甕を並列に配置する燃焼部の両側手前に袖石を伴い、焼土を含むローム漸移層土やシルトで袖を造っている。

床面では柱穴4基と貯蔵穴1基を確認した。柱穴の規模はさして大きくなかったが掘り込みは深く、貯蔵穴は柱穴様の形態で上半部が開いている。



0：褐色土主体。As-A僅かに含む。

住居覆土

1：黒褐色土主体。暗灰褐色土やや多く含む。 2・3・5：暗褐色土主体。 4・4'：暗褐色土主体。暗黄褐色ロームとローム粒やや多く含む。 6・6'：褐色土主体。 7：暗褐色土：ロームと黒褐色土の混土主体。 8：暗黄褐色土：ロームやや多く含む。

貼り床

9：黄褐色土：ロームを主体に堅く締まる。貯蔵穴付近の高い面を構成。 10：暗灰黄褐色土：ロームと暗黄褐色土の混土主体。

掘り方覆土

11：暗褐色土：暗褐色土に暗黄褐色土の入る混土主体。 12：暗灰黄褐色土主体。ロームやや多く混入。 13：灰黄褐色土：灰黄褐色土とロームの混土主体。 14：暗黄褐色土：ロームやや多く混入する。 15：褐色土：暗黄褐色土主体。灰褐色土ロームをやや多く混入。 16：黄褐色土：明るいローム主体。 17：黄褐色土：ローム主体。

第418図 H-124号住居

H-124号住居（古墳時代後期。第418～422図。図版166～167・184～186・201）

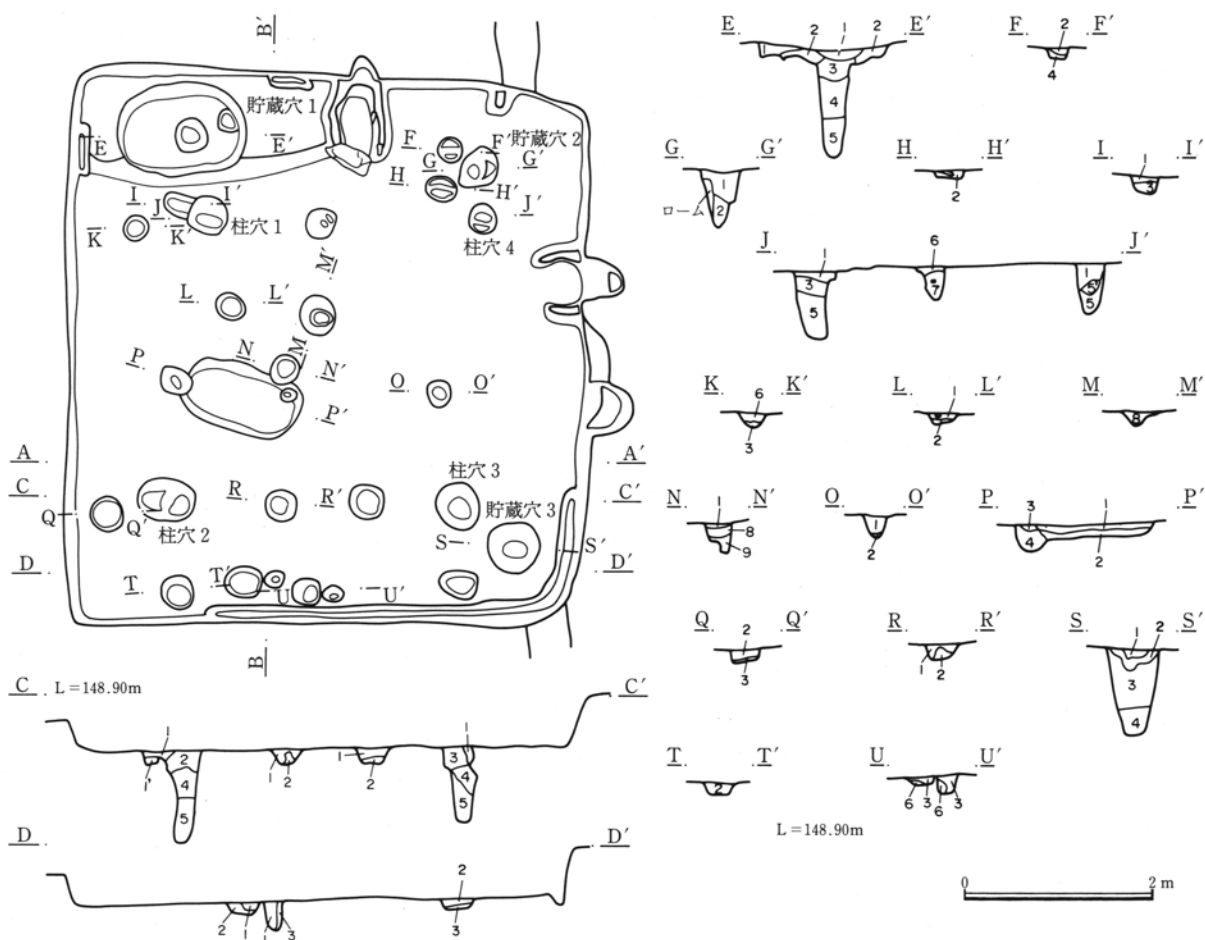
概要 本住居はE区南東隅部所在する、D区に於いては大型のものに属する、カマドを同時に二つ持つ竪穴住居跡である。

本住居東部には耕作溝が入るものの本住居への影響は少なかったが、ピット・土坑が多数掘削されて本住居の床面を壊している。

出土遺物のうち本住居に伴うものには6世紀中葉

から西暦600年を前後する時期にかけてのものの特徴を示す土師器坏（6、1,3～5,7、2）や6世紀後半期頃の土師器の高坏（8～10）・小型甕（11）・甗（12）があり、こも編み石4点も見られた。

一方、覆土からは6世紀後半期の特徴を持つ土師器の坏（22～26）や高坏（27）、当該期頃の土師器の甕（28）や甗（29）須恵器蓋（30）など古墳時代後



貯蔵穴1・柱穴・ピット覆土

[C-C', E-E', I-I', J-J', K-K', M-M', N-N', R-R', S-S', U-U'セクション]

1・2：褐色土主体。 3：暗黄褐色土主体。ロームを斑状に多量に含む。 4：暗黄褐色土主体。ロームをやや多く含む。 5：暗黄褐色土主体。 6：褐色土：ロームをやや多く含む。 7：褐色土主体。 8：褐色土主体。 9：褐色土主体。均質。

[D-D', F-F', H-H', L-L', Q-Q', T-T'セクション]

1：暗黄褐色土主体。 2：黄褐色土：1層より明るい暗黄褐色土主体。 3：黄褐色土：ローム主体。 4：暗黄褐色土：ロームに黒褐色土入る混土。

ピット覆土 [O-O'セクション]

1・2：暗褐色土主体。

[P-P'セクション]

1：暗褐色土主体。ロームやや多く含む。 2：暗褐色土主体。炭化物やや多く含む。 3：C-C'等8層に同じ。 4：C-C'-9層に同じ。

貯蔵穴3 [S-S'セクション]

1・2：褐色土主体。ロームを斑状に多く含む。 3：黄褐色土：くすんだローム主体。 4：暗黄褐色土：3層よりくすんだローム主体。

貯蔵穴2 [G-G'セクション]

1：暗褐色土主体。 2：暗褐色土：ローム多量に含む。

第419図 H-124号住居遺構

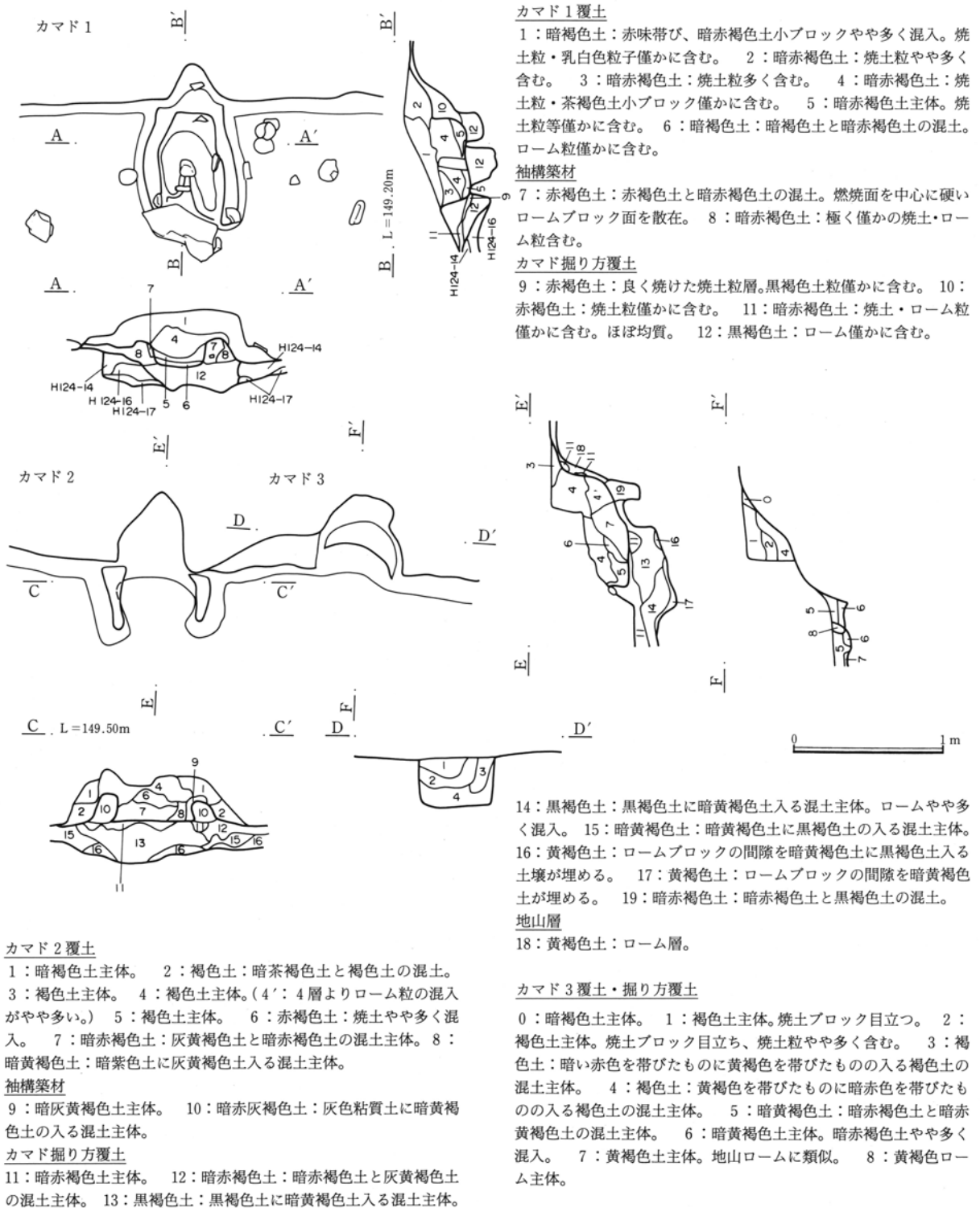
期の土師器を中心とする遺物が出土し、こも編み石(31,32)や長頸の鉄鏃(33)なども見られた。

こうした状況から本住居は概ね6世紀後半の所産と判断され、一方覆土中の遺物から住居廃棄後比較的早い段階から埋没が始まり、少なくとも奈良・平安時代頃までその痕跡を留めていたものと思われる。

規模 長軸：596cm 短軸：550cm 深さ：53cm

カマド1 幅：74cm 奥行：108cm 左袖 幅：18cm 長さ：66cm以上 高さ：21cm 右袖 幅：21cm 長さ：82cm 高さ：22cm 燃烧部 径：33×65cm 深さ：7cm 煙道 幅：38cm 長さ：32cm カマド掘り方 径：96×92cm 深さ：15cm

第3章 発見された遺構と遺物

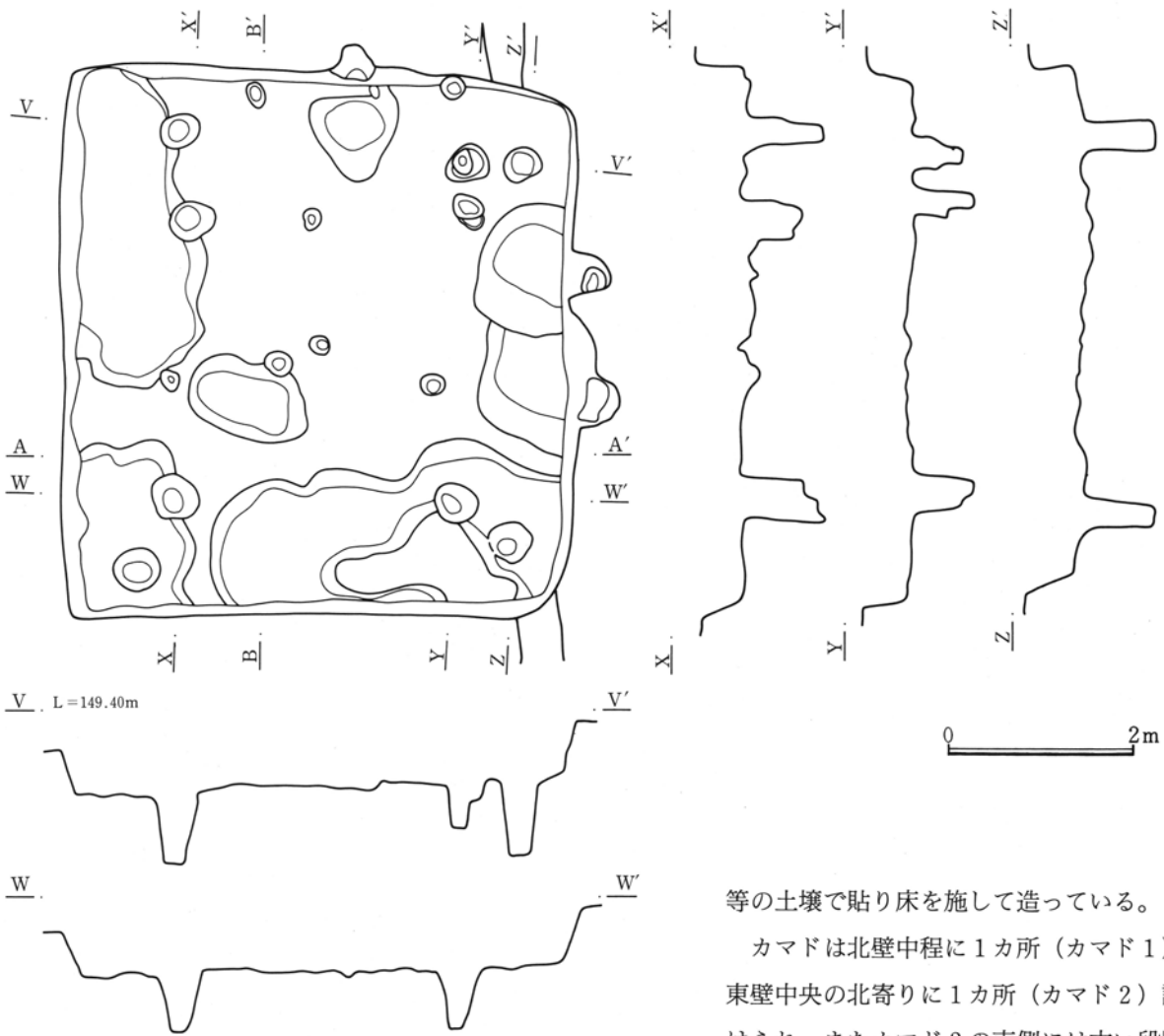


第420図 H-124号住居カマド

カマド2 幅：96cm 奥行き：99cm 左袖 幅：21cm 長さ：51cm 高さ：24cm 右袖 幅：22cm 長さ：41cm 高さ：21cm 燃焼部 径：100×43cm 煙道 幅：44cm 長さ：57cm カマド掘り

方 径：141×94cm 深さ：10cm

カマド3 幅：58cm以上 奥行き：58cm以上 煙道 幅：39cm 長さ：33cm カマド掘り方 幅：142cm以上 奥行き：100cm 深さ：9cm



第421図 H-124号住居掘り方

柱穴1 径：42×42cm 深さ：76cm 柱穴2 径：62×45cm 深さ：93cm 柱穴3 径：51×45cm 深さ：81cm 柱穴4 径：32×30cm 深さ：77cm
 貯蔵穴1 径：50×38cm 深さ：66cm 貯蔵穴2 径：55×54cm 深さ：97cm
 周溝 幅：9～18cm 深さ：7～13cm

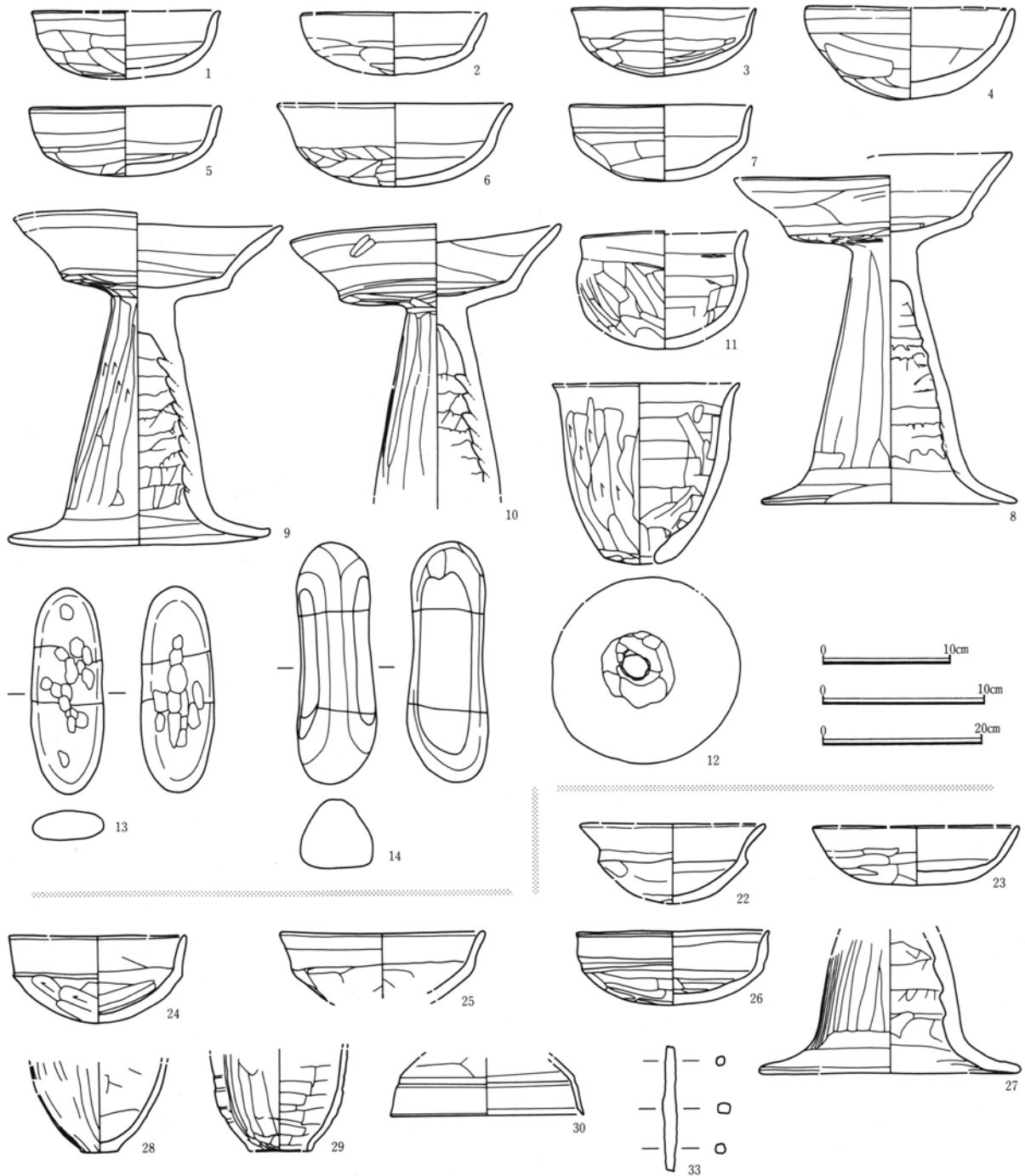
構造 本住居は概ね方形のプランを呈する。

西壁と北壁際に幅82～174cm、深さ6cm以下の周溝状の浅い掘り込みが断続的に巡る掘り方を有し、これを暗黄褐色土やローム等で埋め戻し、更にローム

等の土壌で貼り床を施して造っている。

カマドは北壁中程に1カ所（カマド1）、東壁中央の北寄りに1カ所（カマド2）設けられ、またカマド2の南側には古い段階のカマドの痕跡（カマド3）が確認された。カマド1・2・3は何れも掘り方を有し、焼土を含む土壌で埋め戻して焼面を造っているが、焼土はカマド2がやや壁面に掛かるものの、何れも壁面より内側に設定

されている。上述の構造について、カマド1に於いては焼土部の両側手前に礫を立てて袖石とし、焼土を含む土壌で袖を造っている。また、焼土部中央に礫を立てて支脚とし、礫の上には板状の石を置いて天井石とするようである。煙道は焼面より24cm程上の位置から16cm程壁面を掘削して造っている。一方、カマド2に於いては焼土を含む灰色粘質土等の土壌で袖を造っている。煙道は焼面より段差を持たずに壁面を斜めに掘削して設けている。尚、カマド3は壊されているので上部構造はつまびらかでな

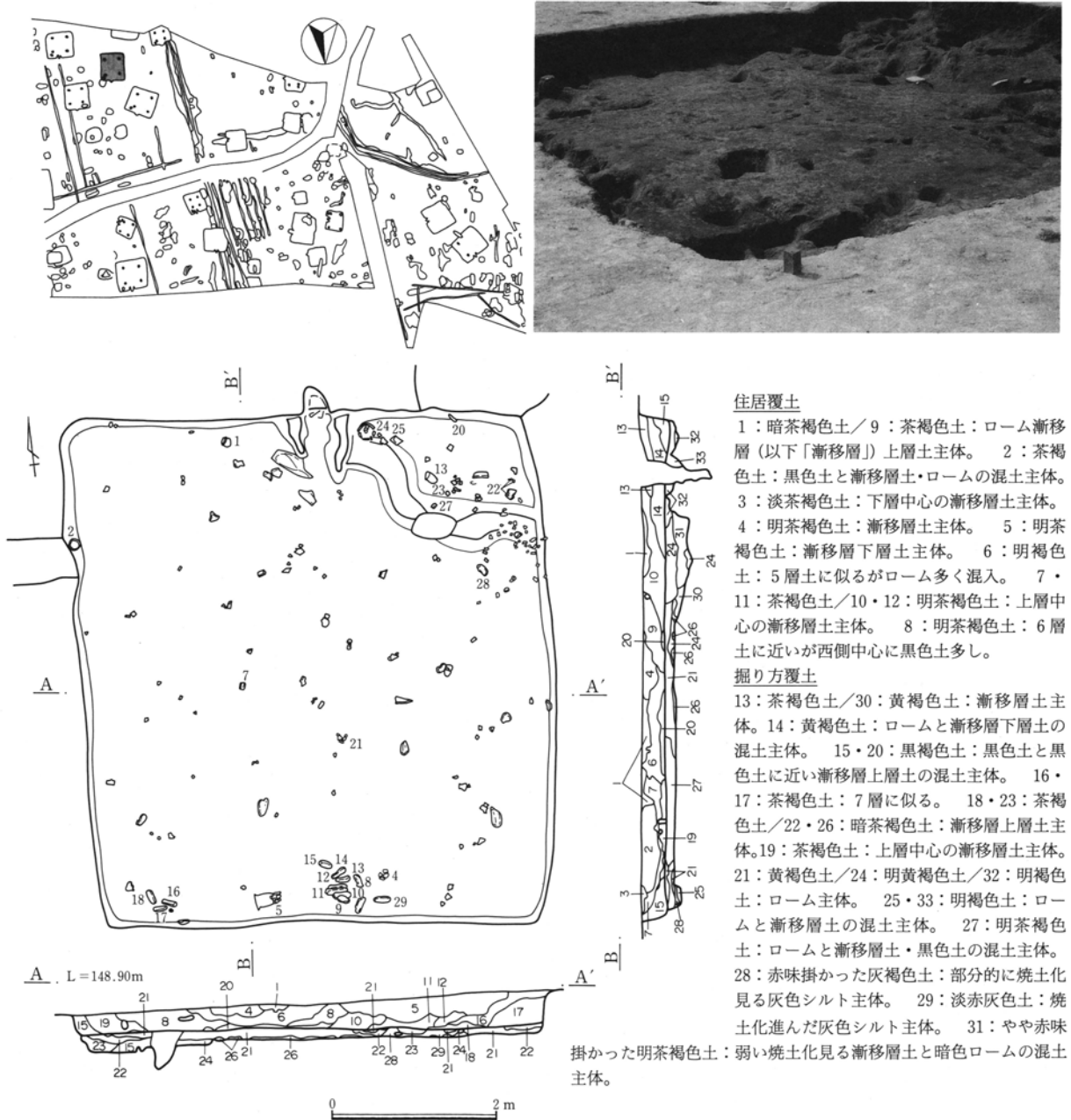


第422図 H-124号住居出土遺物

いが、煙道は燃烧面より20cm程上の位置から17cm程壁面を掘り込む構造を呈していることを確認した。

床面に於いては主柱穴4基と貯蔵穴と判断される3基を確認した。このうち柱穴の平面規模はさして大きくなかったが掘り込みは深いものであった。貯蔵穴はカマド1の左側(貯蔵穴1)と右側(貯蔵穴2)、及び南東コーナー付近(貯蔵穴3)に掘削され

るが、このうち貯蔵穴1・2は柱穴様の形態で、その掘り込みは深い。これに対し貯蔵穴1はカマド1左側の床面が他の部分より8cm程高くなる部分に造られる。2段構造を呈し、深さ20cm程の楕円形プランの土坑様の掘り込みの中に1m程の柱穴様の掘り込みが掘削されている。また、南東コーナーから西壁中部にかけては周溝の掘削が見られた。



第423図 H-125号住居

H-125号住居（古墳時代後期、第423～427図、図版167・186・202）

概要 本住居はE区東南部に位置する、E区に於いては大型のものに属する竪穴住居跡である。

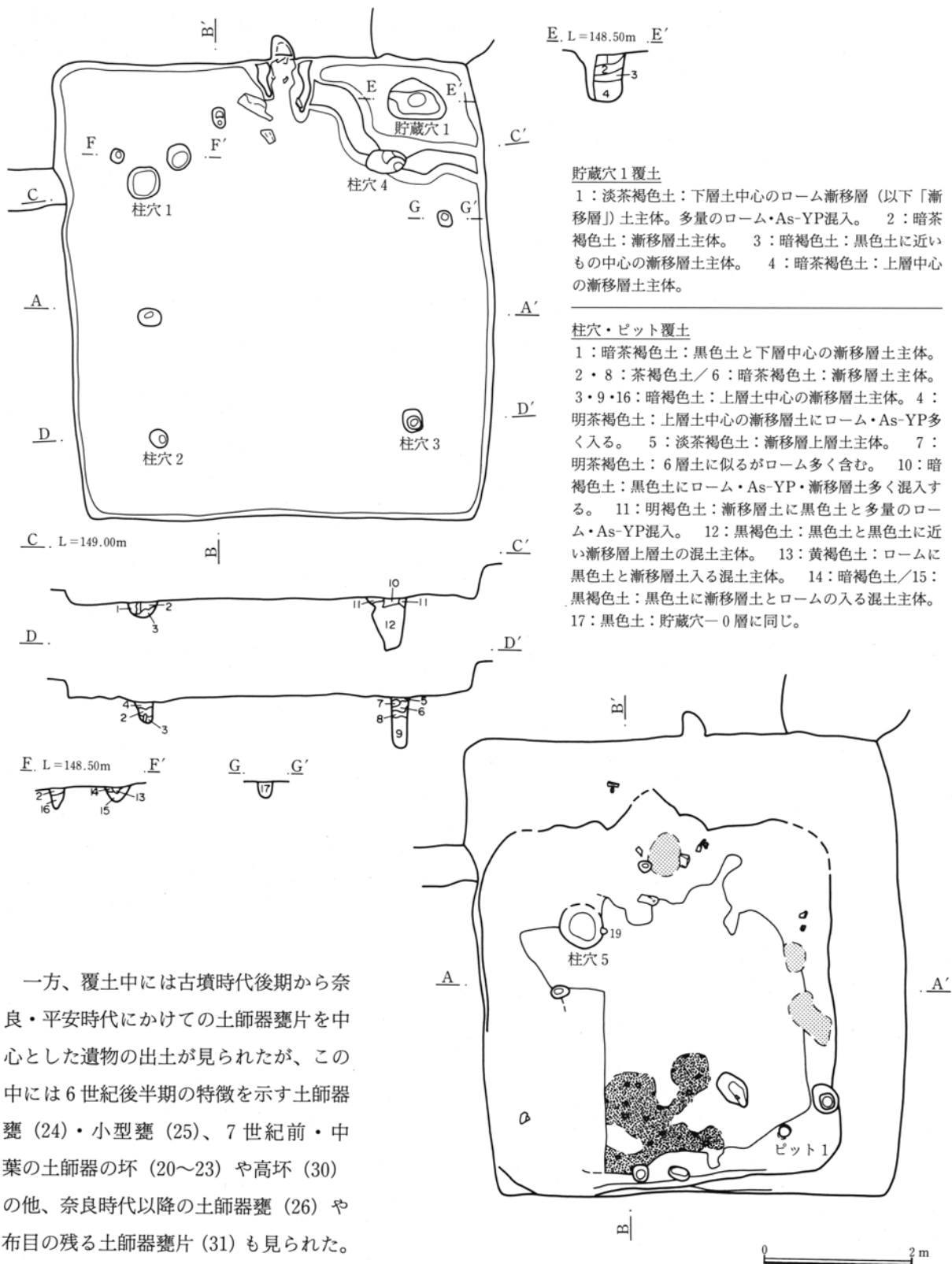
本住居には廃絶後にピット等が掘削されて、床面を掘り抜いている。

また本住居は拡張されており、当初確認された遺構（新住居）の掘り方面に於いて拡張前の住居（旧住居）の床面やカマド（旧カマド）が確認された。新住居は旧住居を東及び南方向に拡張しており、旧

住居の規模はE区に於ける中規模のものに属する。尚、新住居のカマドは「新カマド」と呼称する。

出土遺物で本住居（新住居）に伴うものには7世紀前～中葉期の特徴を示す土師器坏（2～4、1）や7世紀前半期の特徴を持つ土師器甕（5）が見られた他、住居西壁の壁際中央にまとまって出土したもの等のこも編み石（6～18）がある。また、旧住居に伴う遺物には7世紀代の土師器胴張甕（19）がある。

第3章 発見された遺構と遺物

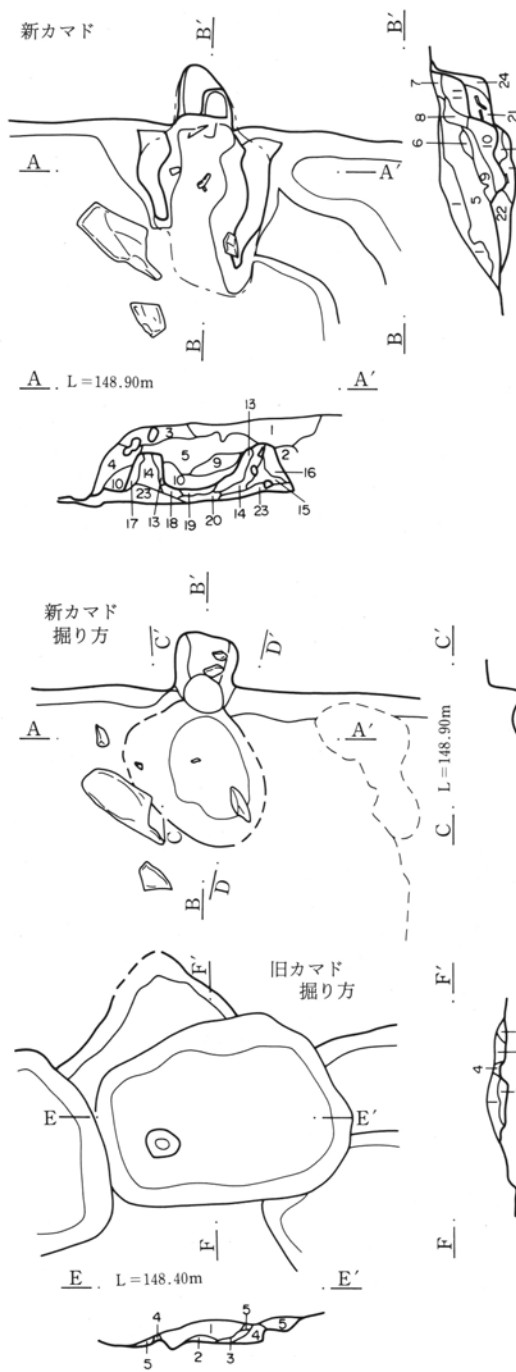


一方、覆土中には古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての土師器甕片を中心とした遺物の出土が見られたが、この中には6世紀後半期の特徴を示す土師器甕(24)・小型甕(25)、7世紀前・中葉の土師器の坏(20~23)や高坏(30)の他、奈良時代以降の土師器甕(26)や布目の残る土師器甕片(31)も見られた。

これらの点から本住居は概ね7世紀前半期に建築され、建て替えが行われたものと判断される。また、覆土中の遺物の状況から本住居は奈良・平安時代頃まで

第424図 H-125号住居遺構

はその痕跡を留め、住居廃絶後早い段階から遺物の投棄等が行われたものと思われる。



新カマド覆土

1：明茶褐色土：ローム漸移層土（以下「漸移層土」）主体。 2：暗褐色土：漸移層上層土主体。 3：やや赤味掛かった茶褐色土：弱い焼土化見る漸移層土と青灰色シルトの混土主体。 4：暗黄褐色土：漸移層土とロームの混土主体。 5：淡赤褐色土：焼土化見る漸移層土主体。 6：明橙色焼土。 7：淡赤褐色土：焼土とローム漸移層土にAs-YP入る混土。 8：灰色掛かった淡赤褐色土：5層土と焼土化見る漸移層上層土の混土に硬質の橙色焼土多く混入。 9：灰褐色土：弱い焼土化見る漸移層上層土に黒色土入る混土主体。 10・11：赤味掛かった暗茶褐色土：焼土化見る漸移層上層土に硬質の橙色焼土多く混入。

袖構築材

13：橙褐色土：14層土の焼土化したと思われる焼土主体。 14：オリーブ色に近い褐色土：オリーブ褐色ローム主体。 15：やや紫色掛かった暗褐色土：暗色のシルト質のローム主体。 16：明黄褐色土：ローム主体。 17：黄褐色土：下層土中心の漸移層土主体。

カマド掘り方覆土

18：橙色掛かった黄褐色土：暗黄色ローム主体。 19：暗橙褐色土：14層土・焼土・ロームの混土。 20：やや橙色掛かる暗黄褐色土：弱い焼土化見る漸移層土主体。 21：淡橙褐色土：焼土化進行した漸移層土に焼土多く混入。

22：黄褐色土：下層土中心の漸移層土主体。 24：暗黄褐色土：暗色ローム主体。

住居掘り方覆土

23：暗黄褐色土：上層土中心の漸移層土主体。

旧カマド覆土

1：橙色掛かった明褐色土：焼土化見られる下層土中心のローム漸移層土（以下「漸移層土」）主体。 2：やや橙色掛かった褐色土：弱い焼土化見る漸移層土主体。 3：黒褐色土：黒色土とやや焼土化見る上層土中心の漸移層土主体。 4：明黄褐色土：ローム主体。 5：橙色掛かった黄褐色土：1層土に部分的に弱く焼土化するロームをやや多く含む混土主体。

り方 径：75×79cm 深さ：10cm

柱穴1 径：42×42cm 深さ：87cm 柱穴2 径

：26×22cm 深さ：68cm 柱穴3 径：31×26cm

深さ：86cm 柱穴4 径：54×32cm 深さ：93cm

貯蔵穴1 径：80×54cm 深さ：100cm

〔旧住居〕 長軸：500cm 短軸：468cm 深さ：推定63cm

旧カマド 燃烧部 径：44×56cm

柱穴5 径：62×39cm 深さ：66cm 柱穴6 径

：32×31cm以上 深さ：35cm 柱穴7 径：57×

30cm 深さ：44cm 柱穴8 径：54×40cm 深さ

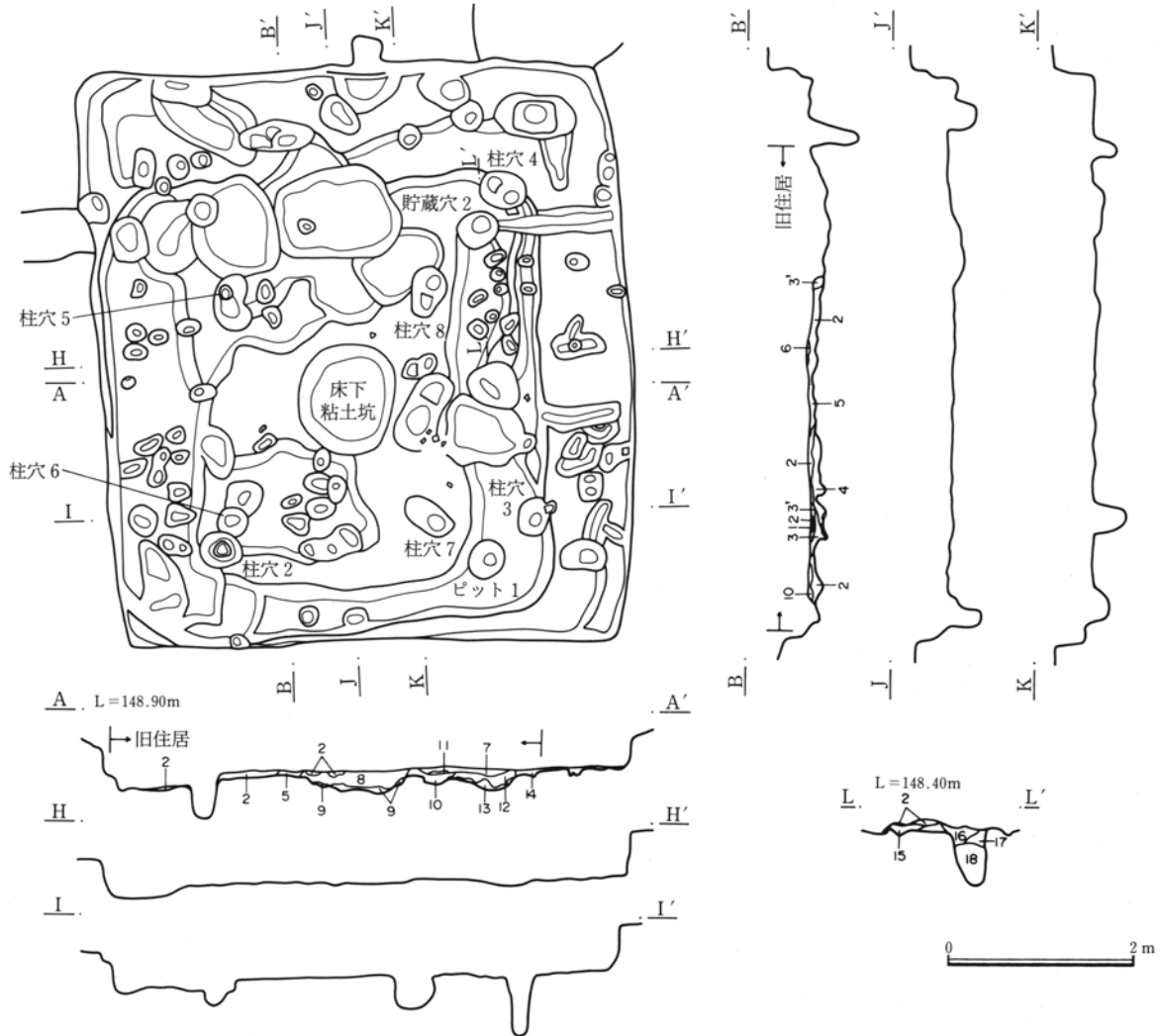
：41cm

貯蔵穴2 径：44×39cm 深さ：58cm ピット1

第425図 H-125号住居カマド

規模〔新住居〕 長軸：620cm 短軸：574cm 深さ：36cm

新カマド 幅：105cm 奥行き：115cm 左袖 幅：42cm 長さ：52cm 高さ：19cm 右袖 幅：34cm 長さ：83cm 高さ：26cm 燃烧部 径：38×85cm 煙道 幅：28cm 長さ：26cm カマド掘



旧住居掘り方覆土

1：淡茶褐色土：焼土化見るロームにローム漸移層土（以下「漸移層土」）の入る混土。締まる。 2：明黄褐色土：ローム主体。締まる。 3・3'：明褐色土：ロームと漸移層土の混土主体。 4・5：黄褐色土：ロームに漸移層土・黒色土混入。 6：やや赤味掛かった明褐色土：オリーブ褐色ロームと2層土の混土。良く締まる。 7・10：暗黄褐色土：漸移層土と黄色系ロームの混土。 8：黄褐色土：ロームに漸移層土多く入る。（床下粘土坑覆土） 9：オリーブ褐色土：シルト質のローム・白色シルトの混土主体。（床下粘土坑覆

土） 11：やや橙色掛かった明褐色土：焼土化見る9層土と7層又は10層土の混土。 12：やや橙色の掛かった褐色土：焼土化見る9層土主体。ローム多く含む。 13：明黄褐色土：黄色ローム主体。

貯蔵穴2・掘り方覆土

14：黄褐色土：黄色ロームとオリーブ色掛かるロームの混土。 15：弱く橙色掛かる暗褐色土：部分的に弱く焼土化する下層土中心の漸移層土主体。 16：黄褐色土／18：暗褐色土：ロームに黒色土入る混土。 17：褐色土：漸移層土主体。

第426図 H-125号住居掘り方

径：44×38cm 深さ：70cm

床下粘土坑 径：116×100cm 深さ：19cm

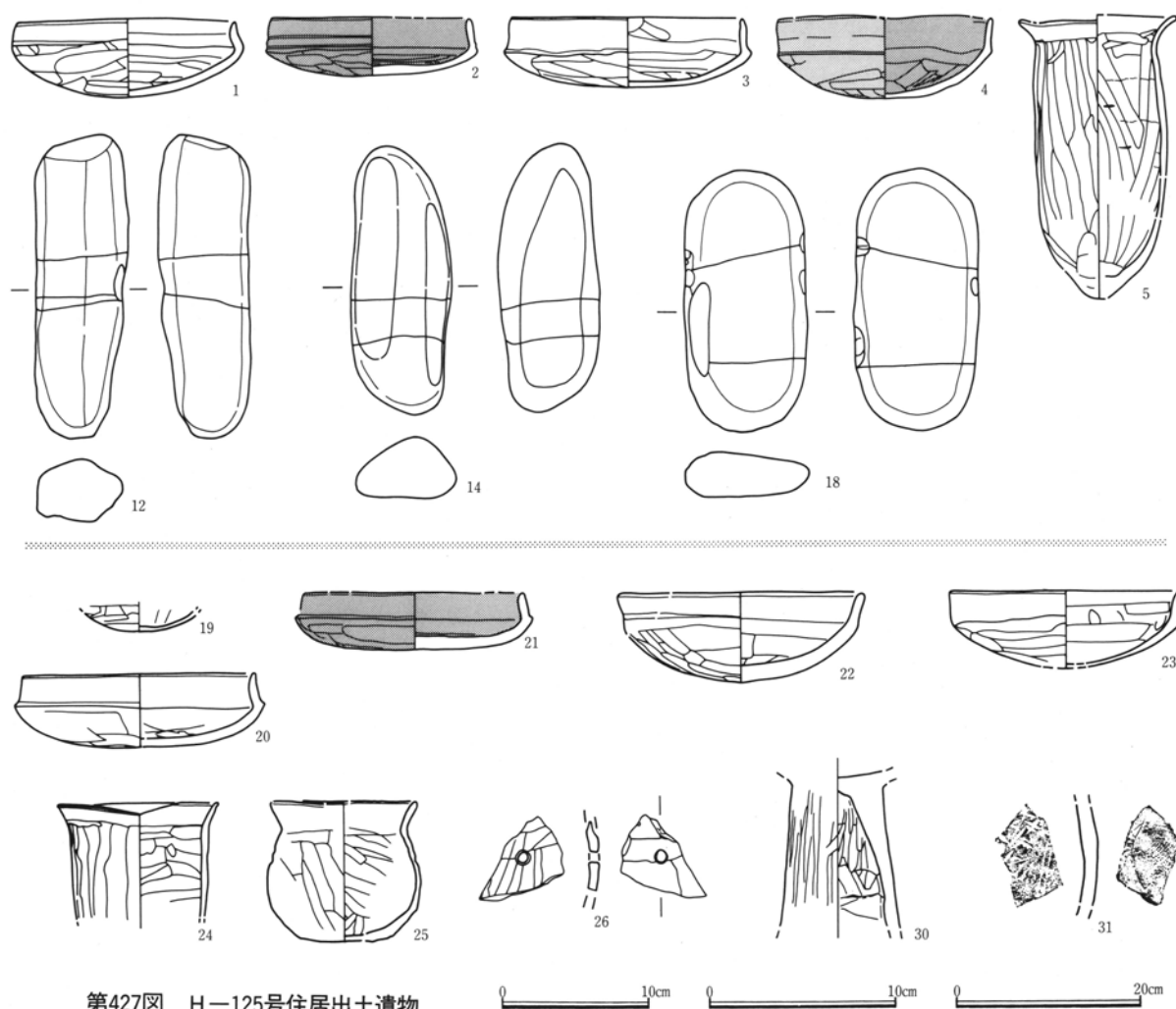
構造〔旧住居〕本住居のうち旧住居段階では隅丸方形のプランを呈すると思慮される。

幅36～96cm、深さ8cm以下を測る周溝状の掘り込みが東・南・西壁際を廻る掘り方を有する。掘り方面の中央には白色のシルト等が底面に付着する床下土坑が掘削される。床面はこうした掘り方をローム

等の土壤で埋め戻して造られ、堅く締まっている。

カマドは焼土の分布等から北壁中央付近に設けられたと判断されるが、その構造は殆ど明らかにすることはできなかった。

旧住居の床面は上述のように新住居の掘り方掘削時に発見され、全容は把握されなかった。また、柱穴等も明瞭に把握できなかったが、掘り方面に於いて支柱穴4基と貯蔵穴1基を確認した。このうち柱



第427図 H-125号住居出土遺物

穴は径は大きくないが比較的しっかりした掘り方を
持ち、貯蔵穴はカマド右側に掘削されて柱穴様の構
造を有する。また、南東コーナー付近には旧住居段
階に伴うと思われる柱穴様のピット1が見られた。

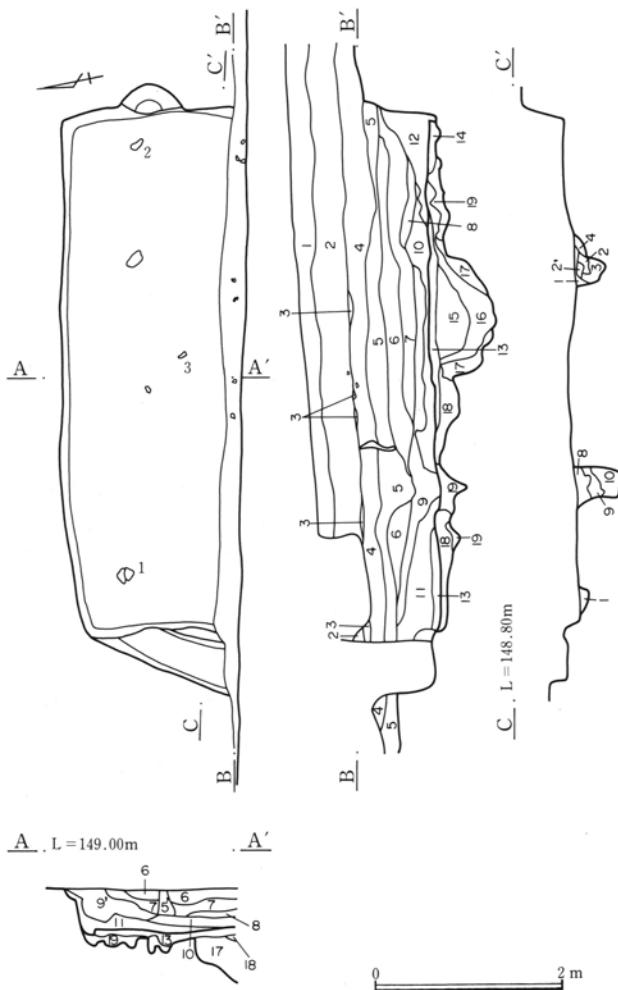
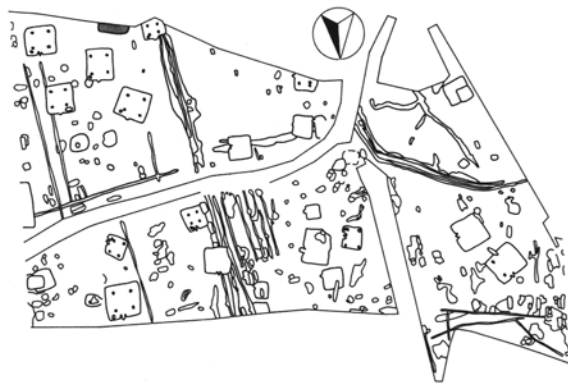
〔新住居〕新住居段階で住居は方形プランを呈する。

新住居段階でも掘り方を有するが、掘り方面は旧
住居の床面が過半を占め、特段の構造等は認められ
なかった。床面はこうした掘り方をローム漸移層土
等で埋め戻して造るが、貼り床は施されていない。

カマドは北カマドで北壁中央に造られる。掘り方
を有し、これを焼土を含む土壌で埋め戻して燃焼面
を造っている。燃焼部は壁面の手前側に設定される
が、奥壁はやや壁面を削り込んでいる。袖は燃焼部
の両側に設けられる。左袖手前側は欠失するものと
思慮されるが、右袖では手前側に礫を立てて袖材と

し、焼土を含むローム等の土壌で袖を造っている。
また、袖石上には砂岩を用いた天井石(27)が乗せ
られていたものと思慮されるが、この天井石には加
工痕跡が見られる。煙道は、燃焼面から15cm程上のレ
ベルから壁面を斜め上方に削り込んで造っている。

床面に於いては主柱穴4基と貯蔵穴1基を特定し
た。このうち主柱穴の径はさして大きなものではな
かったが、その掘り込みはかなり深く、一部断面と
底面の状況から柱材の径は20cm弱であったものと想
定される。また、貯蔵穴は箱状の形態を呈し、カマ
ド右側の北東コーナー付近に掘削されるが、北東
コーナー付近は東西210cm、南北166cm程の範囲を囲
うように、東壁からカマドまで、幅60cm以下、高さ
9cmの周堤状の盛り上がり設けられ、貯蔵穴はこれ
に囲まれる中に掘削されている。



耕作土

1：灰褐色土：As-Aを大量に含む。現耕作土。 2：暗灰褐色土：1層土近似の土壤に暗灰褐色土入る。 3：暗褐色土主体：乳白色砂粒大量に含む。 4：暗褐色土主体。

住居覆土1

5：暗褐色土：4層に似るが若干暗い。 6・7：暗褐色土主体。

土葺き屋根の葺き材の可能性を持つ土壤

8：黒褐色土主体。黒色土やや多く含む。 9：褐色土主体。くすんだ色調のローム粒をやや多く含む。(9'：9層より若干ロームブロックの混入割合高い。)

住居覆土2

10：褐色土：ローム・黒色土・くすんだ色調のローム粒をやや多く含む。 11：褐色土主体。くすんだ色調のローム粒をやや多く含む。 12：褐色土主体。

貼り床

13：暗茶褐色土：ローム主体。黒褐色土・褐色土僅かに混入。

掘り方覆土

14：灰黄褐色土：ロームの粒と灰黄褐色土粒の混土主体。(カマド付近は床下粘土坑を形成か) 15：暗茶褐色土。 16：暗茶褐色土。 17：暗黄褐色土：ローム粒・ブロックを主体。 18：暗黄褐色土。 19：黄褐色土：ローム粒・ブロックを主体。

柱穴・ピット覆土

1：黒褐色土主体。 2：褐色土主体。(2'：ロームをやや多く含む。) 3：褐色土主体。 4・5：暗黄褐色土：褐色土とロームの混土。 6：暗黄褐色土：ロームに褐色土入る混土。 7：暗黄褐色土：ロームと黒褐色土の混土主体。 8：暗黄褐色土：ローム主体。 9：暗黄褐色土：ローム主体に褐色土やや多く混入。

地山

10：黄褐色ローム。

第428図 H-126号住居

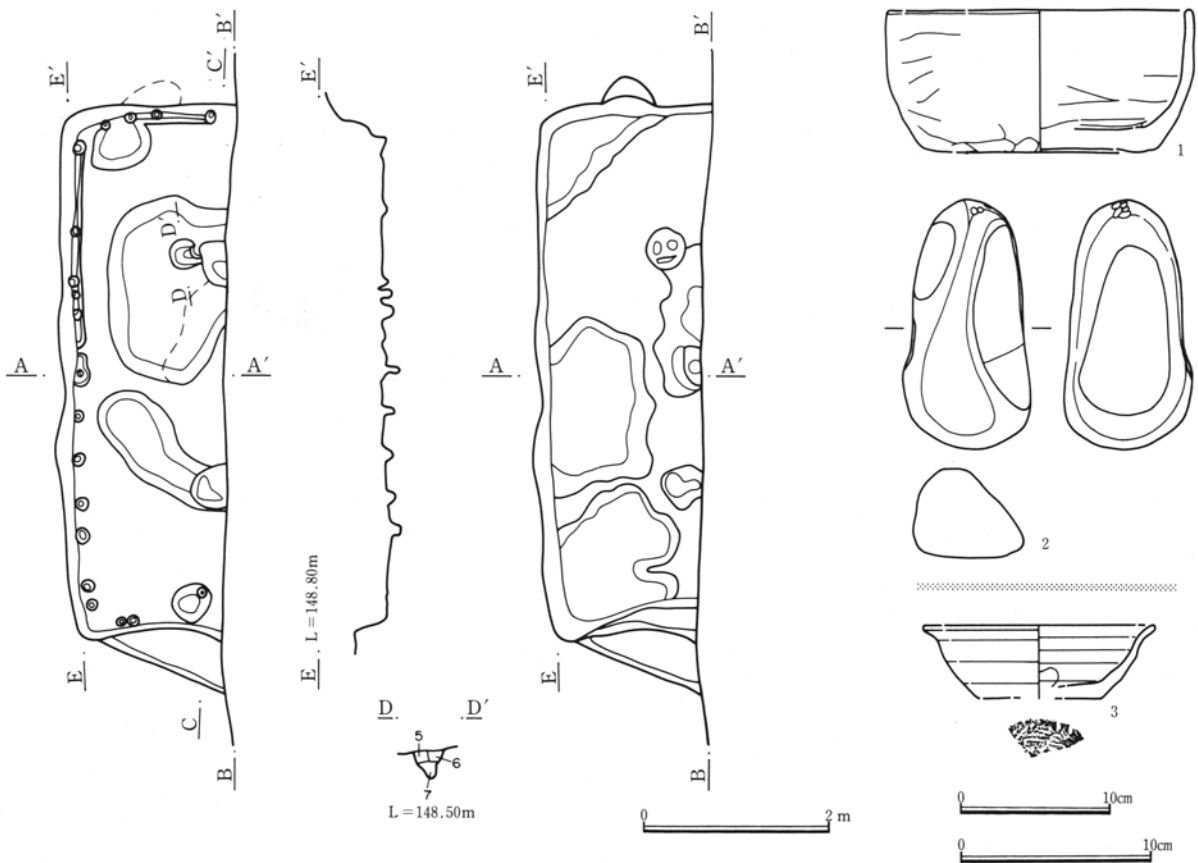
H-126号住居 (古墳時代後期, 第428~429図, 図版167~168・186)

概要 本住居はE区の東南部、調査区の南端に位置する竪穴住居跡である。

本住居はその過半の部分が路線外に出ていて調査することができなかつたため、全体の状況をつかむことができなかったが、E区に於いては大型のもの

に属するものと推定され、後述のように壁際に特徴的な構造を確認するなど一定の所見を得ている。

以上のように本住居はその一部を調査できただけであつたため、出土遺物もさして多くはなかつたのであるが、この中で本住居に伴うと判断されたもの



第429図 H-126号掘り方及び出土遺物

は古墳時代後期の所産と識別された土師器鉢（1）
とも編み石（2）の2点のみであった。

一方、覆土中からは古墳時代後期から平安時代にか
けての土師器片や須恵器片を主体とする遺物の出土を
見ているが、この中には10世紀前半期の所産と判
断される須恵器坏（3）などが見られた。

以上のように出土遺物が少なかったため本住居の
時期を細かく特定することはできなかったのであるが、
概ね本住居は古墳時代後期の所産としては把握でき
るものと判断される。また、覆土中の遺物の状態から
、本住居は埋没開始後少なくとも10世紀段階までは
その痕跡を留め、遺物の投棄などが行われていたもの
と思慮される。

規模 長軸：556cm以上 短軸（確認範囲）：180cm
深さ：48cm

周溝 幅：7～18cm 深さ：5cm

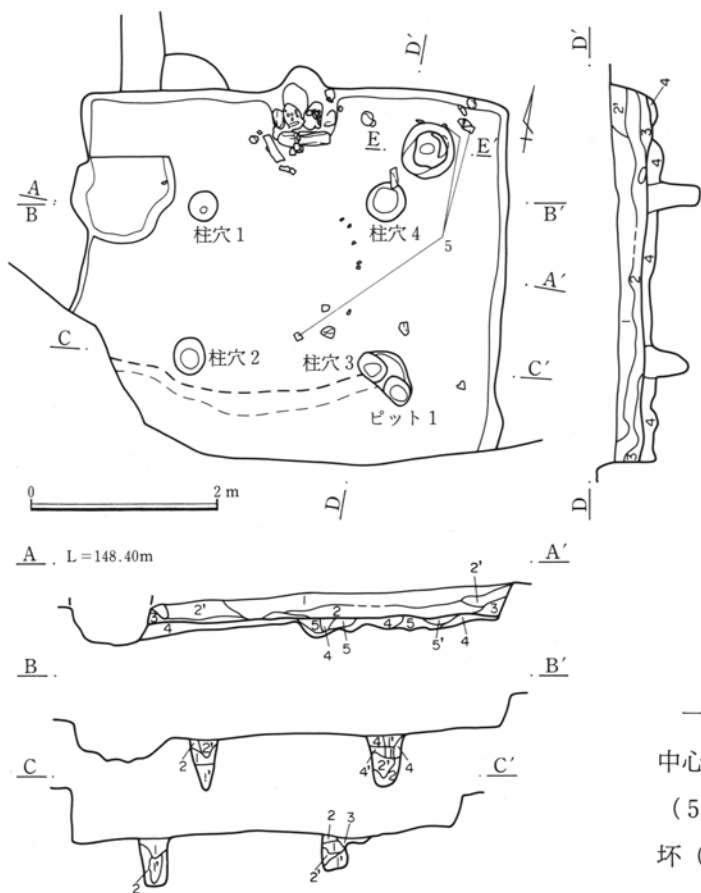
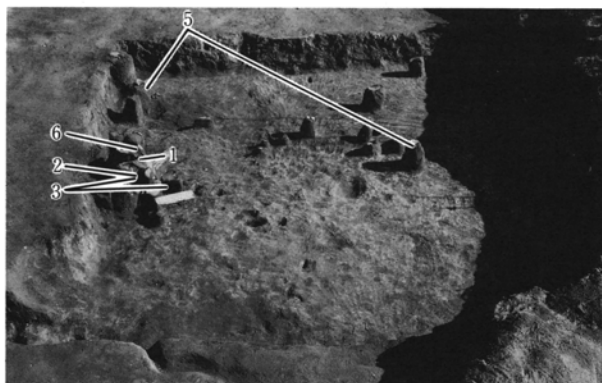
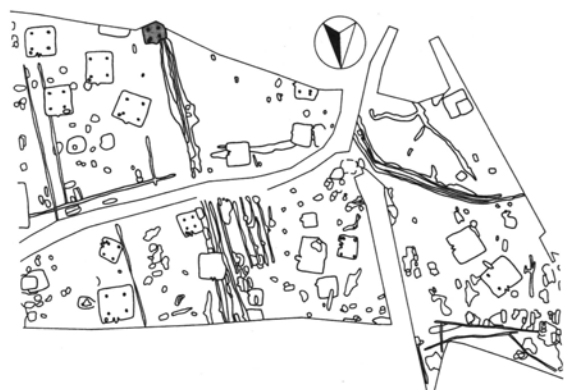
床下土坑 径：162cm（幅：残存54cm） 深さ：57cm

構造 本住居は上述のように多くが路線外に在るた

め全体の状況を知ることはできなかったのであるが
そのプランは方形を呈するものと判断される。

掘り方を有する。掘り方面には特段の構造上の特
性は認められなかったが、調査範囲の南端中央やや
東寄りに床下土坑が掘削される他、深さ15cm以下の
土坑様の落ち込みも見られた。床面はこのような掘
り方をローム等の土壌で埋め戻し、ローム・黒褐色
土等の土壌で貼り床を施している。

少なくとも調査範囲内に於いてはカマドは確認さ
れず、床面に於いても柱穴・貯蔵穴を確認すること
はできなかった。しかし、掘り方の上位、東壁から北
壁東半部にかけての壁際に周溝の掘削が確認され、
また東壁から北壁と北西隅部にかけて小型のピット
が連続的に確認された。これらは何れも壁面の押さ
えに拘わるものと判断されるが、ピットは径8×6cm
～16×14cm（平均11.33×9.78cm）、深さ16cm以下（平
均10.89cm）を測る小さいもので、ピット中心の間隔
は12～65cmと幅があり平均で39.35cmを測る。



貯蔵穴覆土
 1：暗黒褐色土主体。(1'：黒色掛かる。) 2：暗黒褐色土；褐色土とくすんだ褐色土を多量に含む。 3：暗褐色土；黒色土に明褐色土が相当量混入する。

住居覆土
 1：暗黒褐色土；褐色土・白色土粒を多量に含む。 2：暗黒褐色土；くすんだ褐色土を若干含む。(2'：褐色土減少。) 3：暗褐色土；黒色土少量混入。

掘り方覆土
 4：暗褐色土；黒色土と褐色土の混土。 5：暗黒褐色土；黒色主体土中に褐色土少量混入。(5'：焼土微量混入)

柱穴覆土
 1：暗黒褐色土；褐色土少量含む。(1'：褐色土減少。) 2：暗黄褐色土；黒色土との顕著な混入はないが全体に汚れた感を呈す。(2'：黒色土相当量混入。) 4：暗褐色土；黒色土とロームの混土。(4'：灰褐色土若干含む)

貼り床
 3：暗褐色土；くすんだ褐色土を微量に含む。

第430図 H-127号住居

H-127号住居(古墳時代後期。第430~431図。図版168・186~187・201)

概要 本住居はE区の東南部に所在する。

本住居の南部は路線外に出て調査できず、西部では土坑が絡んで本住居を壊している。また、路線際付近では若干底面を掘り過ぎて壊してしまっている。

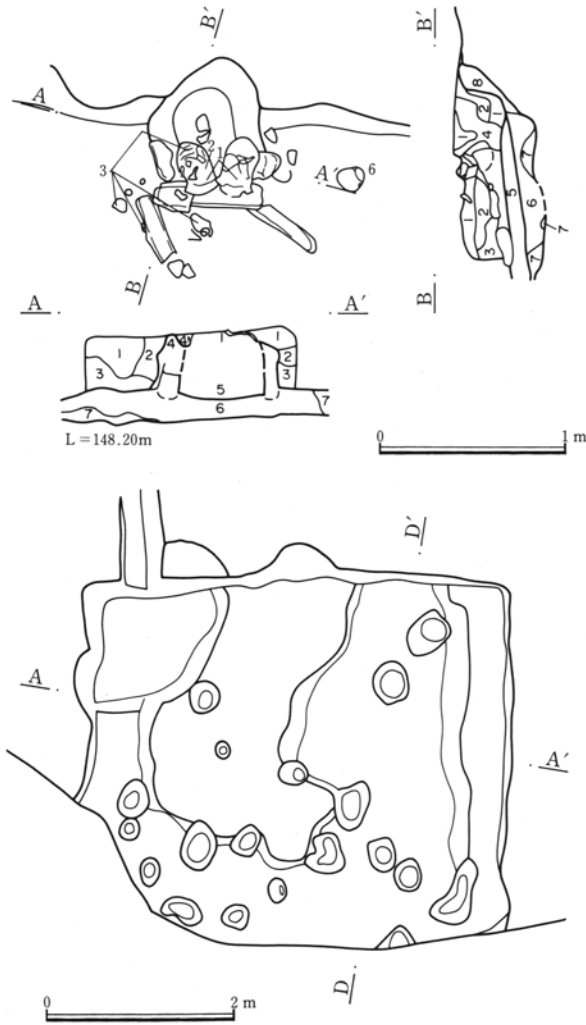
本住居に伴うと判断される出土遺物には6世紀後半から7世紀前半期の特徴を示す土師器甕(1, 2, 3)があり、白玉4点(4-1~4)も見られた。

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕片を中心に、6世紀後半期の特徴を持つ土師器の胴張甕(5)・椀(6)や、同じく7世紀前半期の土師器高坏(7)、或いはこも編み石(8)なども見られた。

これらの遺物から、本住居は西暦600年を前後する時期の所産と判断され、一方覆土中の遺物から奈良時代頃まではその痕跡を留めていたと想定される。

規模 長軸：460cm 短軸：390cm以上 深さ：38cm
 カマド 幅：75cm 奥行き：77cm 左袖 幅：16cm 長さ：47cm以上 高さ：16cm 右袖 幅：30cm 長さ：43cm以上 高さ：29cm 燃烧部 径：27×42cm以上

柱穴1 径：30×29cm 深さ：56cm 柱穴2 径：39×34cm 深さ：59cm 柱穴3 径：32×25cm 深さ：40cm 柱穴4 径：42×40cm 深さ：54cm



貯蔵穴 径：57×56cm 深さ：65cm ピット 1
径：29×24cm 深さ：45cm

構造 上述のように本住居はその南部を調査できなかったが、概ね方形プランを呈するものと思われる。

東壁際に幅46cm以下のテラス状を伴う幅55～196cm、深さ12cm以下を測る周溝状の掘り込みを東・南・西側に掘削する掘り方を有し、これを黒色土等で埋め戻し、一部貼り床を施して床面を造っている。

カマドは北カマドで北壁中央付近に造られる。浅い掘り方を有し、これを黒色土や褐色土等で埋め戻して燃焼面を造る。2個の甕が並列に掛けられる燃焼部は北壁を跨ぐ位置に設定され、その両側手前袖石を立て、その上に礫を渡して袖石と天井石として、焼土・黒色土の混土を用いて袖と天井を造っている。

床面で柱穴4基と貯蔵穴1基を確認した。柱穴は

カマド覆土

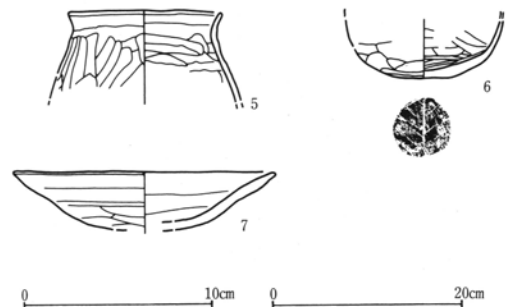
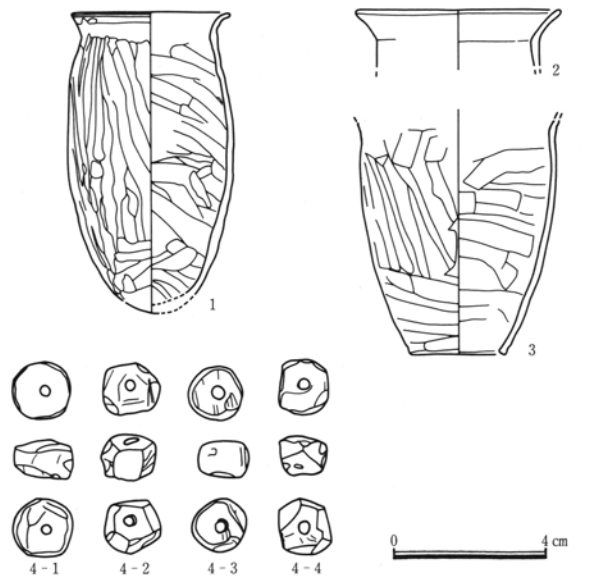
1：暗黒褐色土：白色土・褐色土・焼土粒を微量に含んで堅く締まる。 2：暗黒褐色土：1層に基本的に同じだが焼土ブロックが少量含まれる。 3：暗褐色土：白色土粒・ロームブロックが若干含まれる。 5：暗黒褐色土：焼土粒を主体とし、黒色土が微量混入する。締まりに欠ける。

袖・天井構築材

4：暗赤褐色土：黒色土と焼土ブロックの混土。(4'：焼土ブロックの混入減少。)

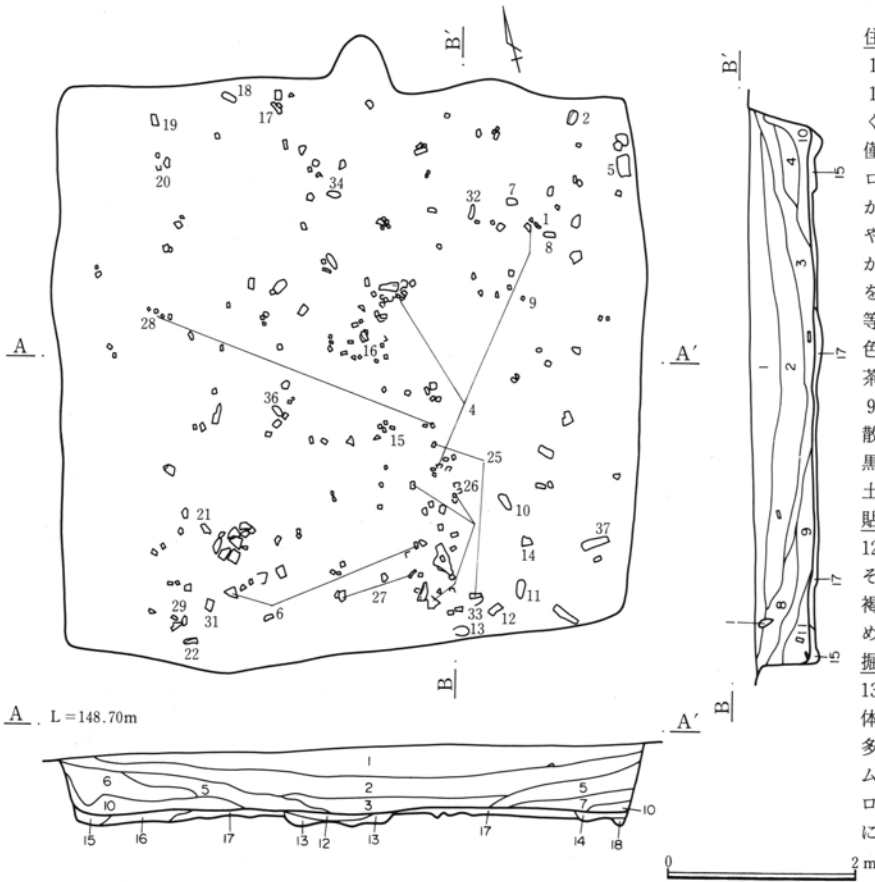
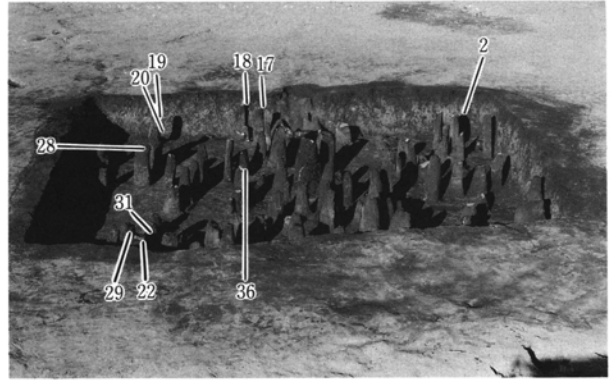
カマド掘り方覆土

6：暗褐色土：褐色土を主体に黒色土・褐色土粒が少量混入する。 7：暗褐色土：黒色土と褐色土の混土。 8：暗黒褐色土：暗黒褐色土中に焼土ブロックと褐色土ブロックが若干量混入する。



第431図 H-127号住居遺構及び出土遺物

大きなものではなかったが、しっかりした掘り込みを持つ。柱材の径は断面観察から15～16cm程度と推定される。また柱穴3の南東に隣接してピット1があるが、これは柱穴3の柱の補助的機能を有するものと考えられる。また、貯蔵穴はカマド右側に掘削され、37×36cmを測るピットを中心に床面に向かって開き、その断面形態はロウト状を呈する。



住居覆土

1：暗褐色土主体。2：暗褐色土主体。1層に比し僅かに細粒。3：褐色土：くすんだロームの集合体主体。ローム等僅かに含む。4：褐色土：くすんだロームの集合体。ロームや黒褐色土を僅かに含む。5：褐色土主体。ローム粒やや多く、黒褐色土やロームブロック僅かに含む。6：暗黄褐色土：ローム粒を大量に含む。暗褐色土・黄褐色ローム等僅かに含む。7：暗褐色土：明黄褐色土・黒褐色土等僅かに混入。8：暗茶褐色土主体。ロームやや多く散在。9：暗茶褐色土主体。ローム粒やや多く散在。10：暗黄褐色土主体。ローム・黒褐色土等僅かに含む。11：黒褐色土：暗黄褐色土とロームを僅かに含む。

貼り床

12：黄褐色土：ロームブロック主体に、その間隙を灰黄褐色土埋める。17：黄褐色土：ローム粒と灰黄褐色土を突き固めたもの主体。

掘り方覆土

13：黄褐色土：くすんだロームの混土主体。14：灰黄褐色土主体。ロームやや多く混在。15：灰黄褐色土主体。ローム粒やや多く混在。16：暗黄褐色土：ロームブロック主体。浅茶褐色土等僅かに含む。18：黄褐色土：ローム粒層。

第432図 H-128号住居

H-128号住居 (古墳時代後期, 第432~435図, 図版168・187~188・202)

概要 本住居はE区東南部に在る竪穴住居跡で、床面には幾つかの小型ピットによる攪乱が見られた。

出土遺物のうち本住居に伴うものには6世紀後半期から7世紀前半期の特徴を示す土師器の坏(1)・高坏(2, 3)・胴張甕(4, 5)や7世紀代の土師器胴張甕(6)の他、こも編み石(7~22)がある。

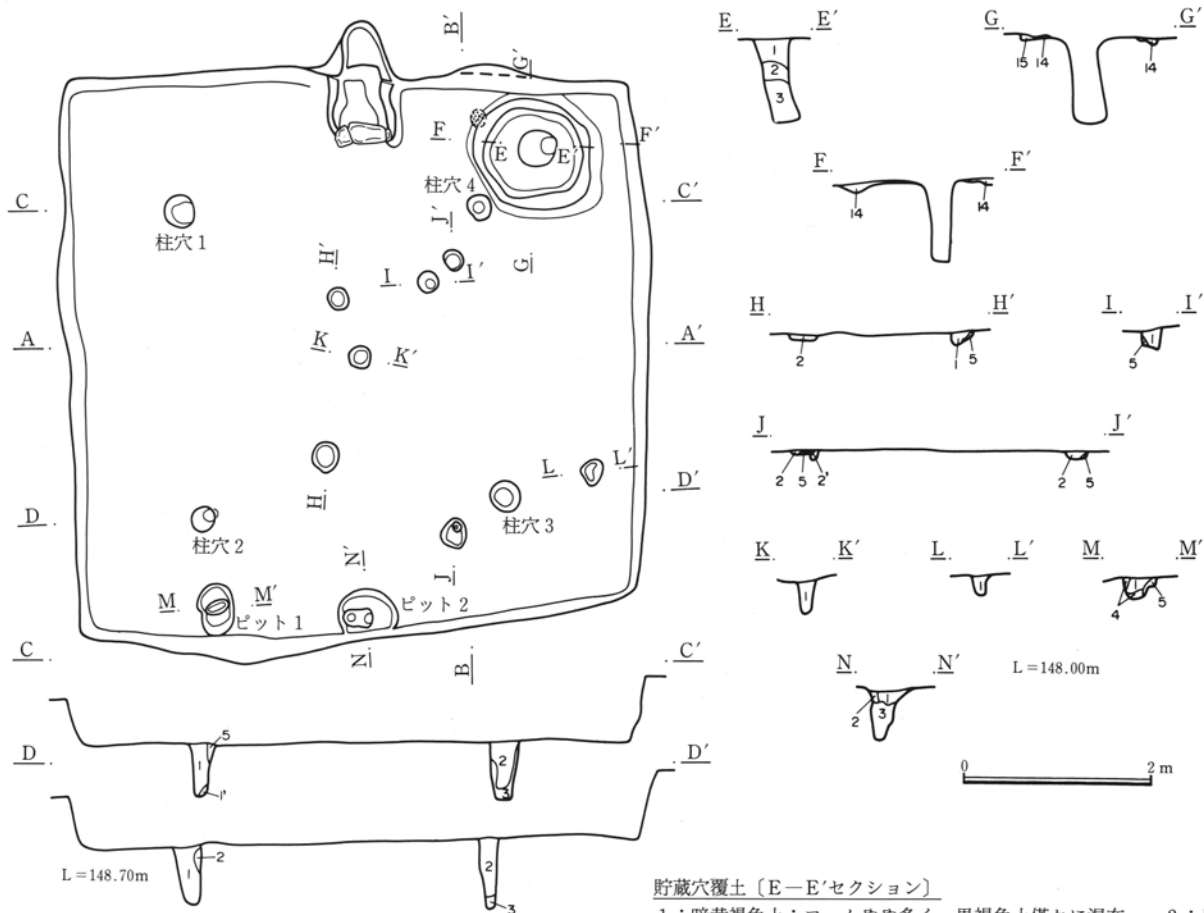
一方、覆土中からは縄文土器片(24)や有溝砥石(38)、6世紀後半の土師器小型甕(30)、7世紀代

の土師器坏(25, 26, 27, 28)・高坏(29)・小型甕(31)の他、こも編み石(32~36)、砥石(39)等の出土も見られた。

従って本住居は概ね西暦600年前後の時期の所産と判断され、覆土中の遺物から少なくとも奈良時代頃まではその痕跡を留めていたことが窺われる。

規模 長軸：632cm 短軸：628cm 深さ：75cm

カマド 幅：104cm 奥行き：135cm 左袖 幅：



貯蔵穴覆土〔E-E'セクション〕

1：暗黄褐色土：ロームやや多く、黒褐色土僅かに混在。 2：黒褐色土主体。 3：褐色土：褐色土と黒褐色土の混土主体。

柱穴・ピット覆土

1：褐色土：黒褐色土・暗黄褐色土・ローム僅かに含む。(1'：1層土にローム大ブロック混入。) 2・2'：暗黄褐色土：暗黄褐色土とロームの混土主体。 3：黄褐色土：くすんだローム粒層。 4：黄褐色土：ロームブロック主体。 5：黄褐色土：ローム粒層。

カマド覆土

1：暗褐色土主体。 2：暗褐色土主体。白色粒やや多く混在。 3：黄茶褐色土主体。 4・5：暗灰黄褐色土主体。 6：赤褐色焼土主体。 7・7'：暗赤褐色土主体。灰状。 8：暗赤褐色土主体。灰状で焼土をやや多く含む。 9・10：暗黄褐色土主体。

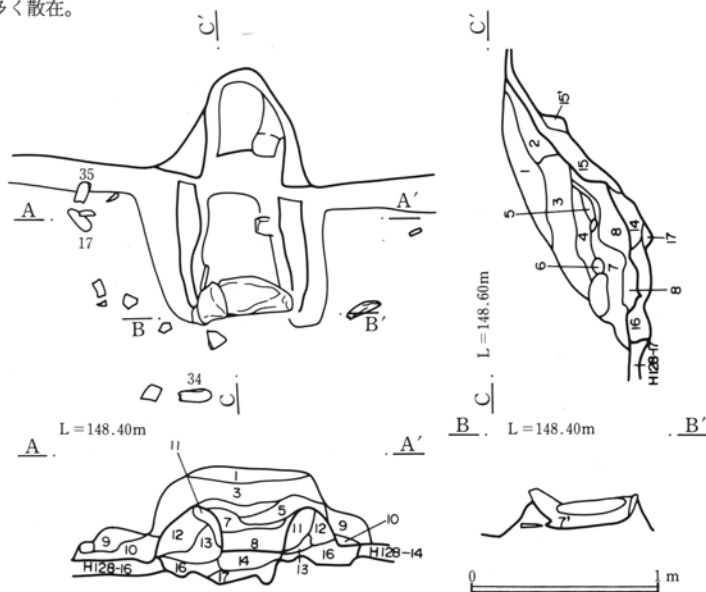
袖構築材

11：赤褐色土：粘土質。内側で焼土化。 12：暗赤灰褐色土主体。粘土質。堅く締まる。 13：浅褐灰色土主体。ローム粒多く散在。

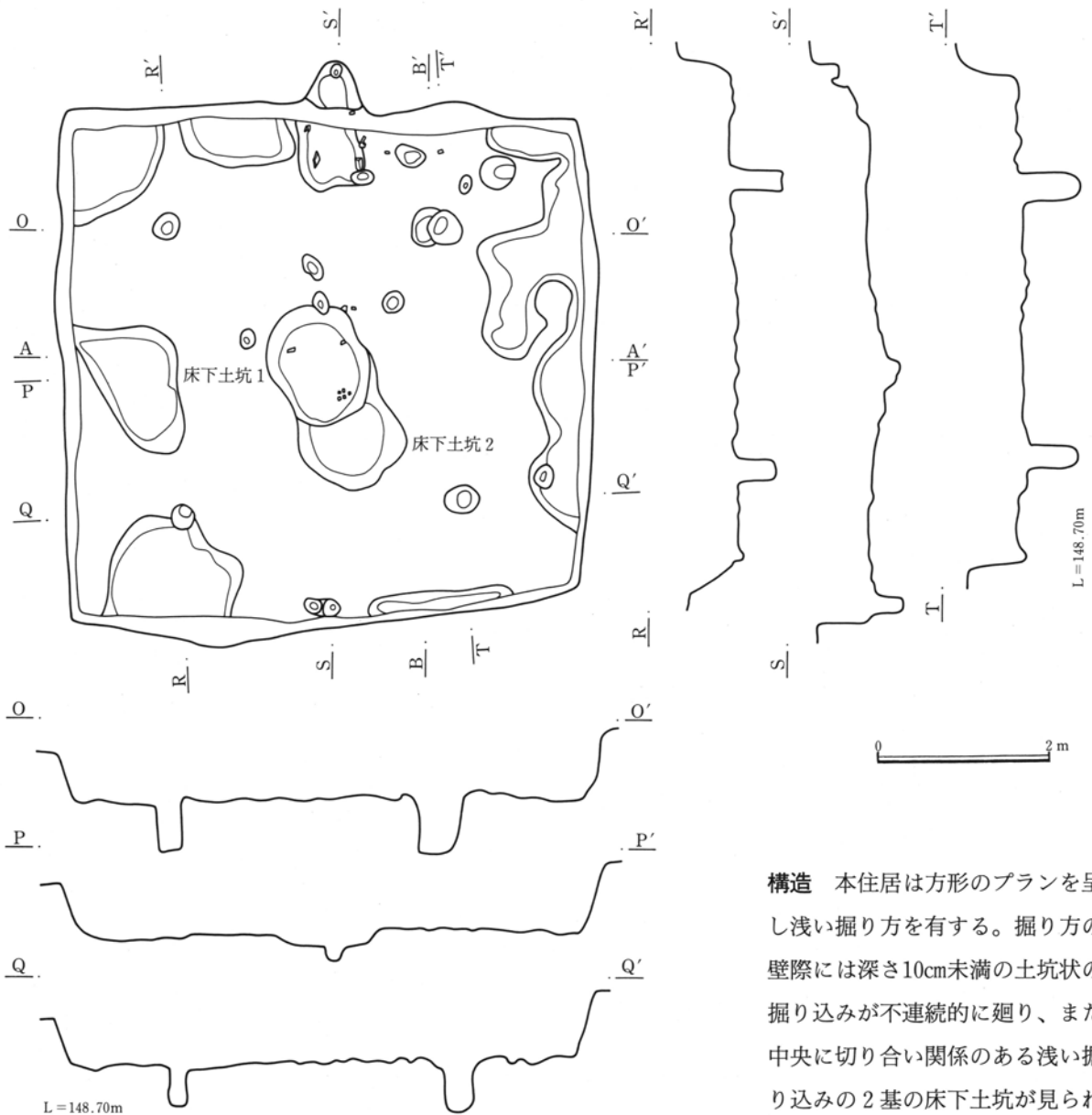
カマド掘り方覆土

14：暗赤褐色土主体。 15・15'：灰黄褐色土主体。ローム粒やや多く散在。 16：褐灰色土：褐灰色土・ローム・焼土粒の混土主体。 17：黄褐色土主体。

37cm 長さ：71cm 高さ：36cm 右袖幅：35cm 長さ：71cm 高さ：22cm 燃烧部 径：39×71cm 煙道 幅：43cm 長さ：43cm カマド掘り方 径：75×84cm 深さ：7cm 柱穴1 径：34×33cm (掘り方面径：30×29cm) 深さ：68cm 柱穴2 径：24×24cm(掘り方面径：28×27cm) 深さ：57cm 柱穴3 径：33×30cm (掘り方面径：38×34cm) 深さ：67



第433図 H-128号住居遺構及びカマド



第434図 H-128号住居掘り方

柱穴 4 径：25×24cm (掘り方面径：40×39cm) 深さ：68cm

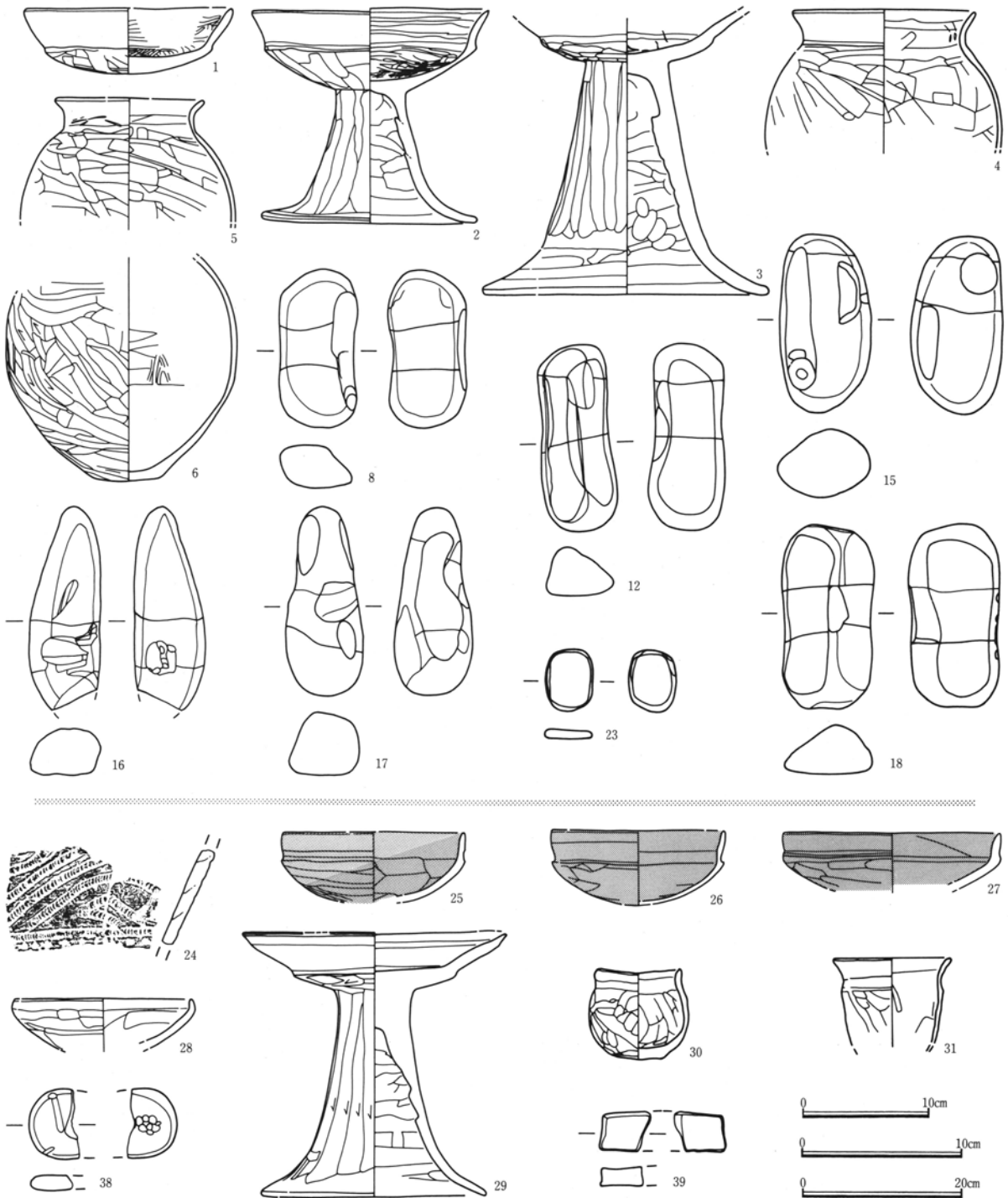
貯蔵穴 上位構造部 径：144×131cm 深さ：7cm
 下位構造部 径：40×39cm 深さ：89cm

ピット1 径：53×38cm 深さ：24cm ピット2
 径：64×43cm 深さ：54cm

床下土坑1 径：138×110cm 深さ：19cm 床下
 土坑2 径：125cm以上×117cm 深さ：8cm

構造 本住居は方形のプランを呈し浅い掘り方を有する。掘り方の壁際には深さ10cm未満の土坑状の掘り込みが不連続的に廻り、また中央に切り合い関係のある浅い掘り込みの2基の床下土坑が見られる。床面はこうした掘り方をルーム等の土壌で埋め戻して造られるが、全体に貼り床状を呈している。

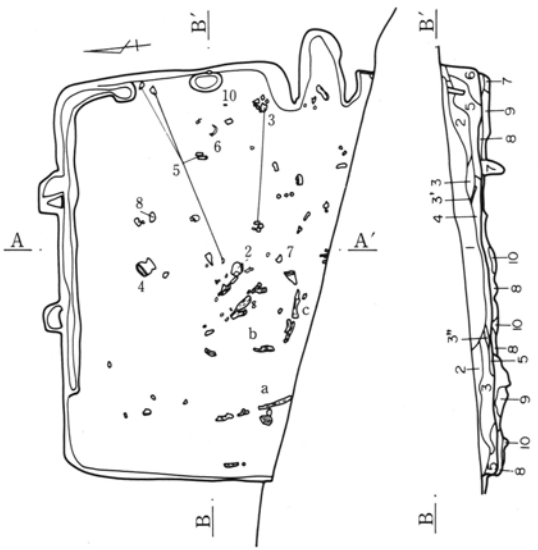
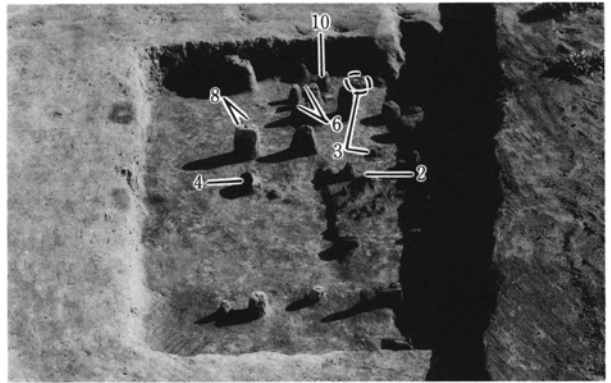
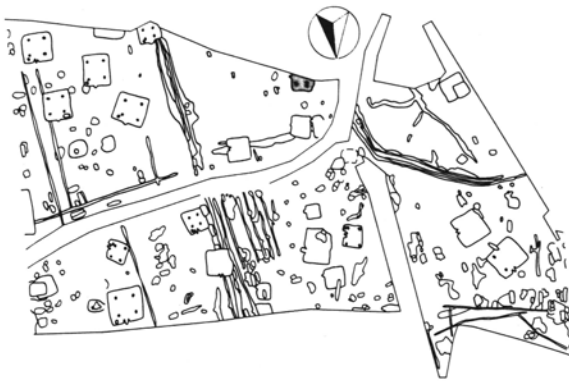
カマドは北カマドで北壁中央付近に設けられる。掘り方を持ち、これを灰黄褐色土等で埋め戻して燃焼面を造っている。燃焼部は壁面の手前側に設定され、両側手前には礫を立てて袖石とし、その外側から奥にかけて粘土質の土壌で袖を造っている。また、袖石の上には板状の礫を用いた天井石を渡している。燃焼部は奥壁側で高くなるが、ここから32cm上がった位置から37cm壁面を北に掘り込んで垂直気味に立ち上がる煙道を掘削している。



第435図 H-128号住居出土遺物

床面には幾つかのピットが認められたが、このうち柱穴は4基を確認した。これらは掘り込みはしっかりしているものの径は小さいもので、掘り方面での掘削径が床面のそれより大きかったこと、及び断面観察の所見から、床面に見られたものは柱痕であり、柱設置後に床面の造られたものと判断される。

また、貯蔵穴はカマド右側の北東コーナー付近に掘削されるが隅丸多角形プランの浅い掘り込みの上位部分と隅丸方形プランの柱穴様の深い掘り込みを持つ下位部分の二つの構造から成っている。尚、南壁ピット1・2は位置的に壁面或いは入り口構造に関係する可能性を有するものと思われる。



〔A-A'・B-B'セクション〕

住居・柱穴覆土

1：褐色土：ローム・黒褐色土やや多し。 2：褐色土主体。ロームやや多し。 3：褐色土主体。(3'：焼土やや多し。 3''：炭化物多量に含む。) 4：褐色土主体。 5：暗黄褐色ローム。 6：褐色土：ローム主体。 7：

灰黄褐色土：ロームに灰黄褐色土入る混土。柱穴覆土。

貼り床

8：灰黄褐色土：ローム混在する灰黄褐色土主体。固く縮まる。

住居掘り方覆土

9：黄褐色土：ロームブロック主体。 10：黄褐色土ローム主体。

〔C-C'セクション〕

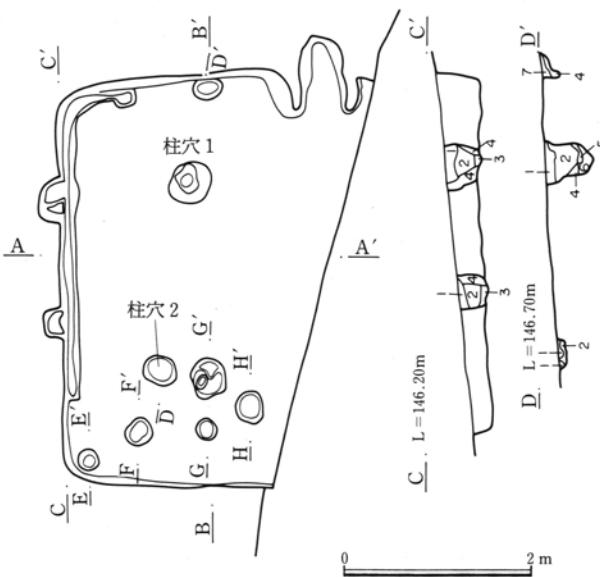
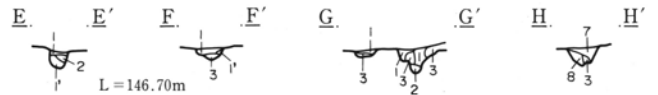
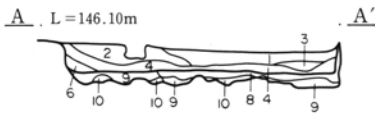
ピット覆土

1・3：暗褐色土主体。 2・4：褐色土主体。ロームやや多く含む。

〔D-D'～H-H'セクション〕

柱穴・ピット覆土

1・1'：暗黄褐色土主体。 2・3：暗黄褐色土：ローム主体。 4・6：黄褐色土ローム。 5：明茶褐色・暗黄褐色砂質土の混土。 7：褐色土主体。ロームやや多し。 8：暗黄褐色土：ローム主体。暗黒褐色土やや多し。



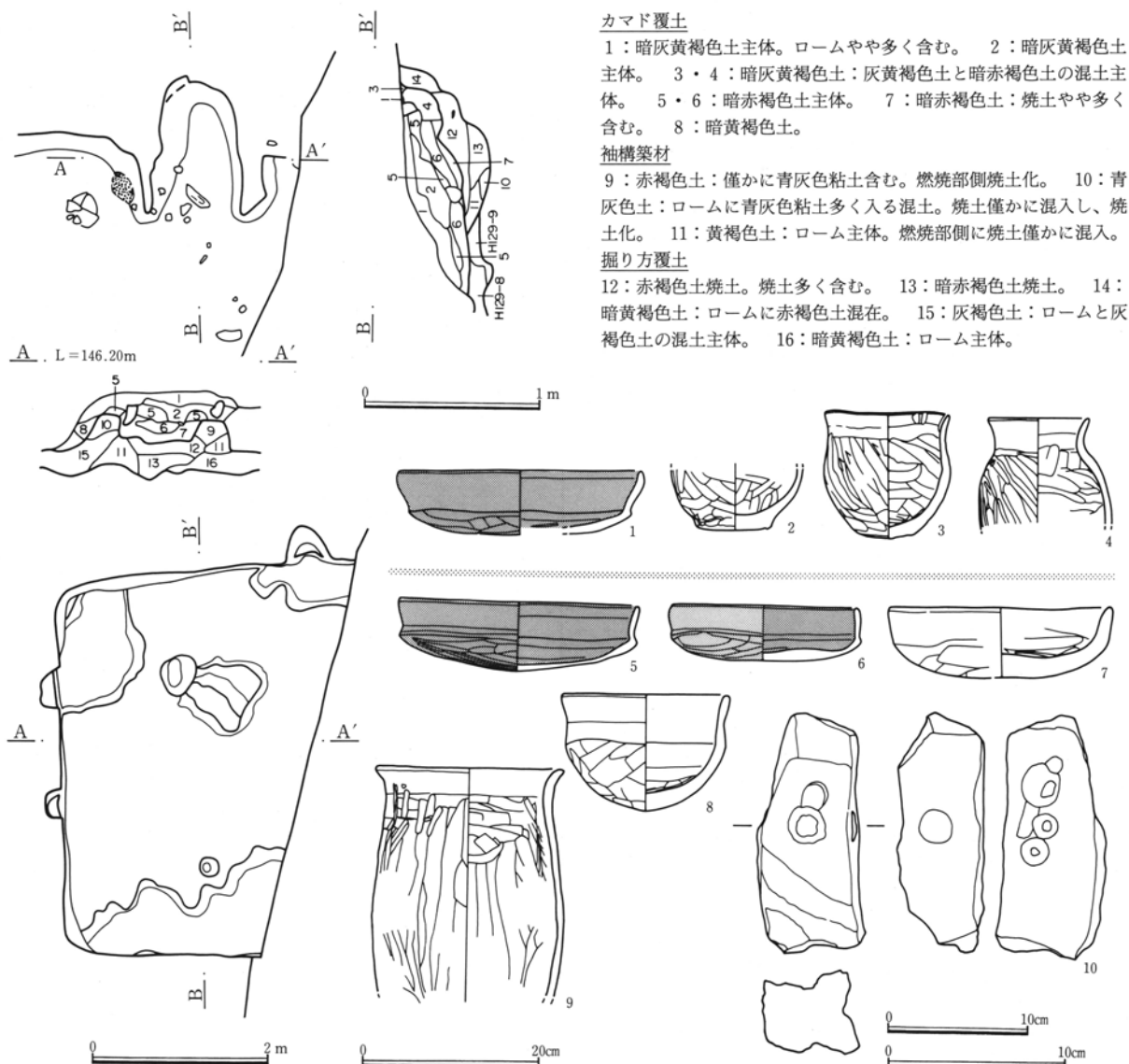
H-129号住居（古墳時代後期。第436～437図、図版168・169・188）

概要 本住居はE区中部南端に在る竪穴住居跡で、その南半は路線外に出ており、また幾つかのピットが絡んで本住居を切っていた。

出土遺物のうち本住居に伴うと判断されたものは何れも土師器であり、甕(2)や6世紀前半期の特徴を示す坏(1)、6世紀後半期の所産と思われる小型甕(3)や壺(4)があり、本住居は6世紀中葉頃の所産と想定される。

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕片を中心に、凹石(10)や6世紀後半期の特徴を持つ土師器坏(7,8)・甕(9)、同じく7世

第436図 H-129号住居



カマド覆土

1：暗灰黄褐色土主体。ロームやや多く含む。 2：暗灰黄褐色土主体。 3・4：暗灰黄褐色土：灰黄褐色土と暗赤褐色土の混土主体。 5・6：暗赤褐色土主体。 7：暗赤褐色土：焼土やや多く含む。 8：暗黄褐色土。

袖構築材

9：赤褐色土：僅かに青灰色粘土含む。燃焼部側焼土化。 10：青灰色土：ロームに青灰色粘土多く入る混土。焼土僅かに混入し、焼土化。 11：黄褐色土：ローム主体。燃焼部側に焼土僅かに混入。

掘り方覆土

12：赤褐色土焼土。焼土多く含む。 13：暗赤褐色土焼土。 14：暗黄褐色土：ロームに赤褐色土混在。 15：灰褐色土：ロームと灰褐色土の混土主体。 16：暗黄褐色土：ローム主体。

第437図 H-129号住居遺構及び出土遺物

紀前半の土師器坏(5, 6)等平安時代に至る時期の遺物の出土を見た。

尚、本住居は焼失家屋であるが、出土位置等から炭化材のうち a は南東の柱の転倒したもの、b は梁・桁材、c は棟木、それ以外は垂木材と推定される。

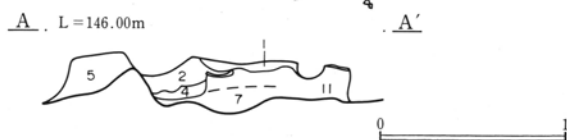
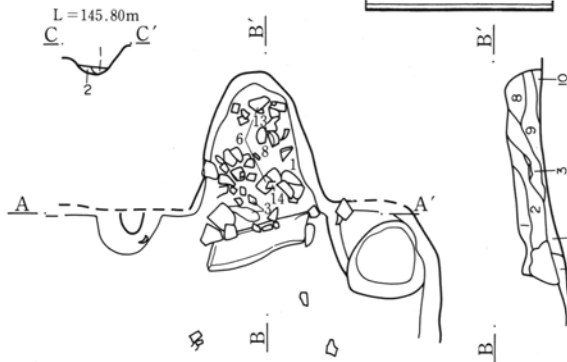
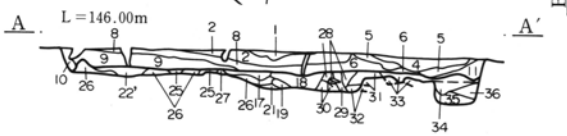
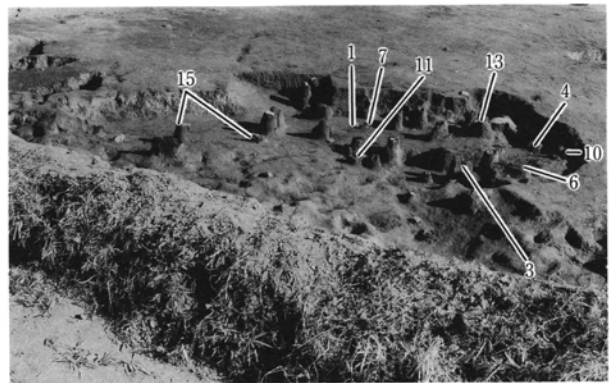
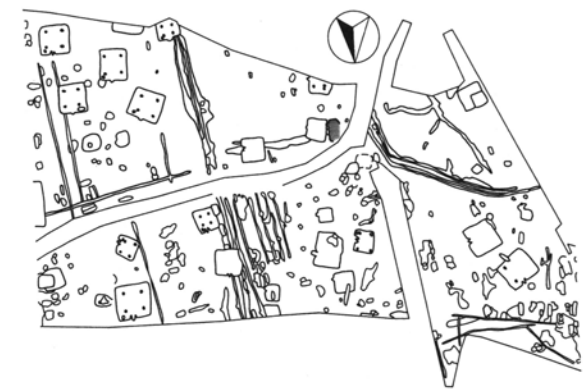
規模 長軸：444cm 短軸：340cm以上 深さ：47cm
カマド 幅：93cm 奥行き：79cm 左袖 幅：35cm 長さ：39cm 高さ：20cm 右袖 幅：25cm 長さ：39cm 高さ：17cm 燃焼部 径：40×37cm
柱穴1 径：46×42cm 深さ：53cm 柱穴2 径：42×36cm 深さ：29cm
周溝 幅：9～15cm 深さ：12cm以下

構造 本住居は隅丸方形を呈すると推定される。

本住居は壁面際に、不規則なプラン・配置の深さ10cm以内の土坑様の掘り込みが数カ所掘削される掘り方を有する。床面はこれをロームで埋め戻し、灰黄褐色土で貼り床を施して造っている。

カマドは東カマドで掘り方を有し、これをロームや焼土で埋め戻して燃焼面を造る。燃焼部は壁面を跨いで設定され、壁面手前側の両側にロームや青灰色粘土等で袖を造り出している。

床面に於いては柱穴2基を確認したが、柱材の規模等は推定できなかった。また南東コーナーから北壁にかけての壁際には周溝が掘削されている。



近・現代落ち込み

1：暗灰褐色土：現耕作土近似。 2：暗褐色土：ローム漸移層(以下「漸移層」)上層土と現耕作土の混土。 3：灰褐色土：漸移層上層土。グライ化認める。

H-130号住居覆土

4：明茶褐色土／9：暗茶褐色土：漸移層土主体。 5：茶褐色土／6：暗茶褐色土：上層土中心の漸移層土主体。 7：黒色土：黒色土にロームと漸移層土入る混土主体。 8・11：暗褐色土：漸移層上層土主体。 10：明褐色土：漸移層下層土にローム入る混土。

H-130号住居とH-131号住居の間層

13：茶褐色土：漸移層上層土主体。やや締まり欠ける。 14：黒褐色土：黒色土と漸移層土の混土。ローム・As-YP混入。

H-130号住居掘り方覆土

15：黒色土主体。 16：淡橙色土：焼土と漸移層下層土の混土。 17・19・22・22'：暗茶褐色土：漸移層土主体。 18・20：明褐色土：漸移層下層土主体。 21・28：淡茶褐色土／24・29：明褐色土／34：茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。 28・29層はやや焼土化進行。 23：暗茶褐色土：22層のベースとロームの混土。 25：黄褐色土：ロームと漸移層上層土の混土。 26：明黄褐色土／27：黄褐色土：ローム主体。 30：明褐色土：18層土近似。弱い焼土化見て焼土含む。 31：黄褐色土：ロームと下層中心の漸移層土主体。 32・35：暗茶褐色土：上層中心の漸移層土主体。 33：淡茶褐色土：ローム・漸移層土・白色シルトの混土主体。 36：淡茶褐色土：35層土ベースに漸移層下層土・ローム多く混入。

H-130号住居貯蔵穴覆土

1：淡茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。 2：黄褐色土：漸移層土とロームの混土。

H-130号住居カマド覆土

1：茶褐色土／2・6：暗茶褐色土／5：褐色土：漸移層土主体。 3：明茶褐色土／4：明褐色土：漸移層下層土主体。3層は弱い焼土化見る。 7：明黄褐色土：ローム主体。 11：淡茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。

H-131号住居覆土

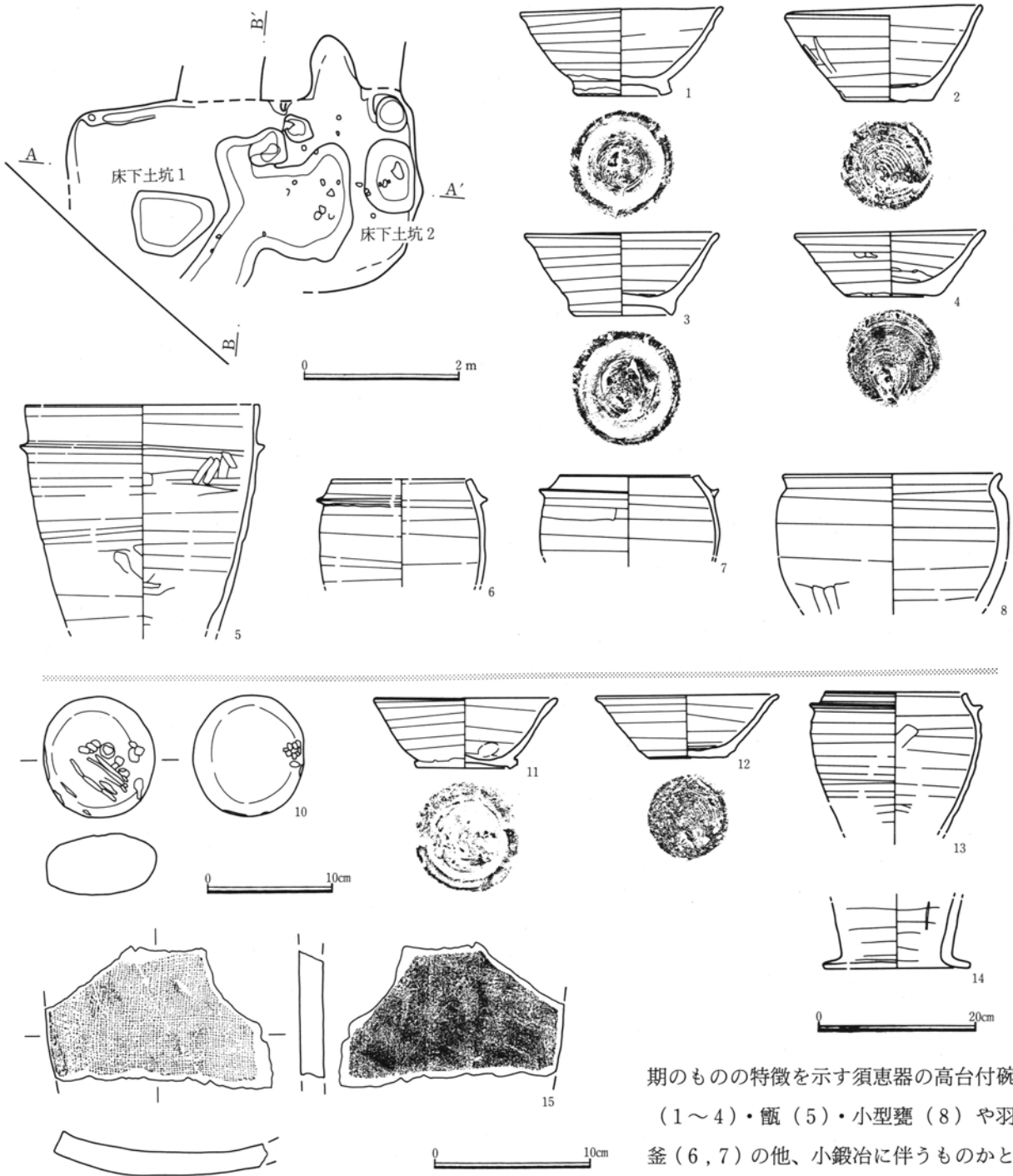
8：明茶褐色土／10：茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。 9：暗茶褐色土：漸移層土に多くの炭化物混入。

第438図 H-130号住居及びカマド

H-130号住居 (平安時代, 第438~439図, 図版169・188~189・202)

概要 本住居はE区中部の南西寄りF区に向かう斜面に位置する小型の竪穴住居跡である。

本住居の北西部は農道に近く、削平が進み遺存状況は北西部を中心に全体的に良くない。また、東側



第439図 H-130号住居掘り方及び出土遺物

にH-131号住居が近接し、本住居のカマド部分がこれを切っている。

本住居の出土遺物はカマド付近を中心に、住居規模と遺存状況に対して多く見られたが、この中で本住居に伴うと判断されたものには何れも10世紀前半

期のものの特徴を示す須恵器の高台付碗(1~4)・甌(5)・小型甕(8)や羽釜(6,7)の他、小鍛冶に伴うものかと思われる台石(9)が見られた。

一方、覆土中からも平安期の遺物を中心に磨石(10)や10世紀前半期の特徴を持つ須恵器高台付碗(11,12)や羽釜(13)、10世紀代の須恵器甌(14)の他、女瓦(15)も見られた。

以上の点から本住居は10世紀前半期の所産と判断され、覆土中の遺物から住居廃絶後早い段階から遺物投棄の行われたことが窺われるのである。

第3章 発見された遺構と遺物

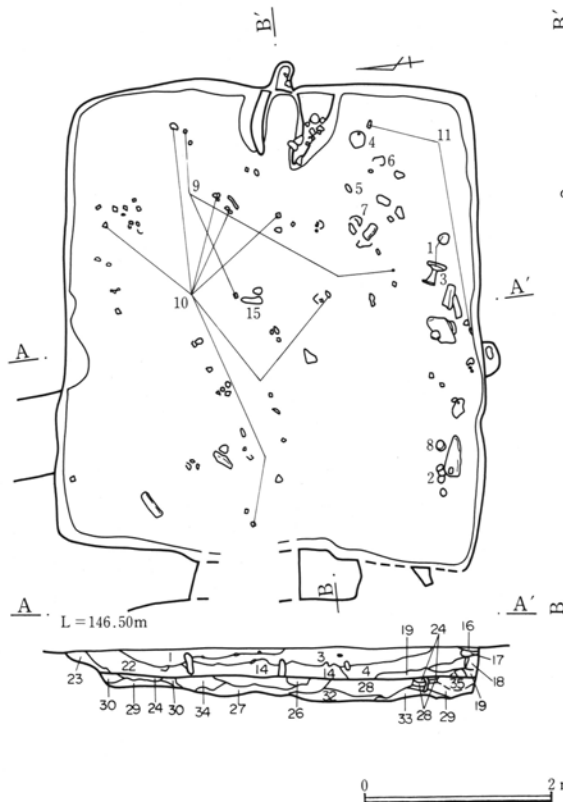
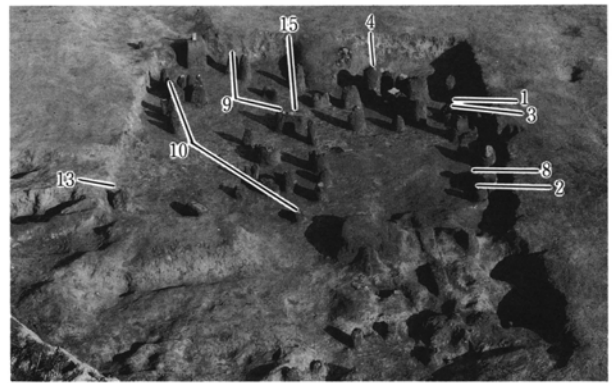
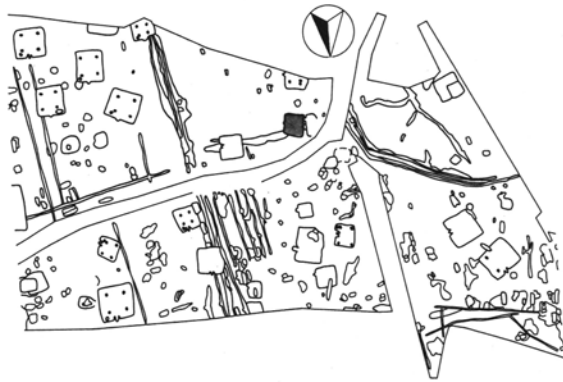
また、本住居は数量は少なかったが若干の炭化材を出土したため、所謂焼失家屋と想定されるが、炭化材の建築材としての部位は特定できなかった。

規模 長軸：448cm 短軸：248cm 深さ：19cm
カマド 幅：残存122cm 奥行：100cm 左袖幅：34cm 長さ：21cm 高さ：16cm 燃焼部径：66×44cm 煙道：幅59cm以下 長さ：32cm
貯蔵穴 径：40×40cm 深さ：7cm
床下土坑1 径：105×82cm 深さ：17cm
床下土坑2 径：98×64cm 深さ：38cm
構造 本住居は横長の隅丸方形のプランを呈する。

2基の土坑や東壁北寄りに幅14cm、深さ5cmを測る周溝様の掘削などの凹凸が残る掘り方を有するが、床面はこれをローム等で埋め戻して造っている。

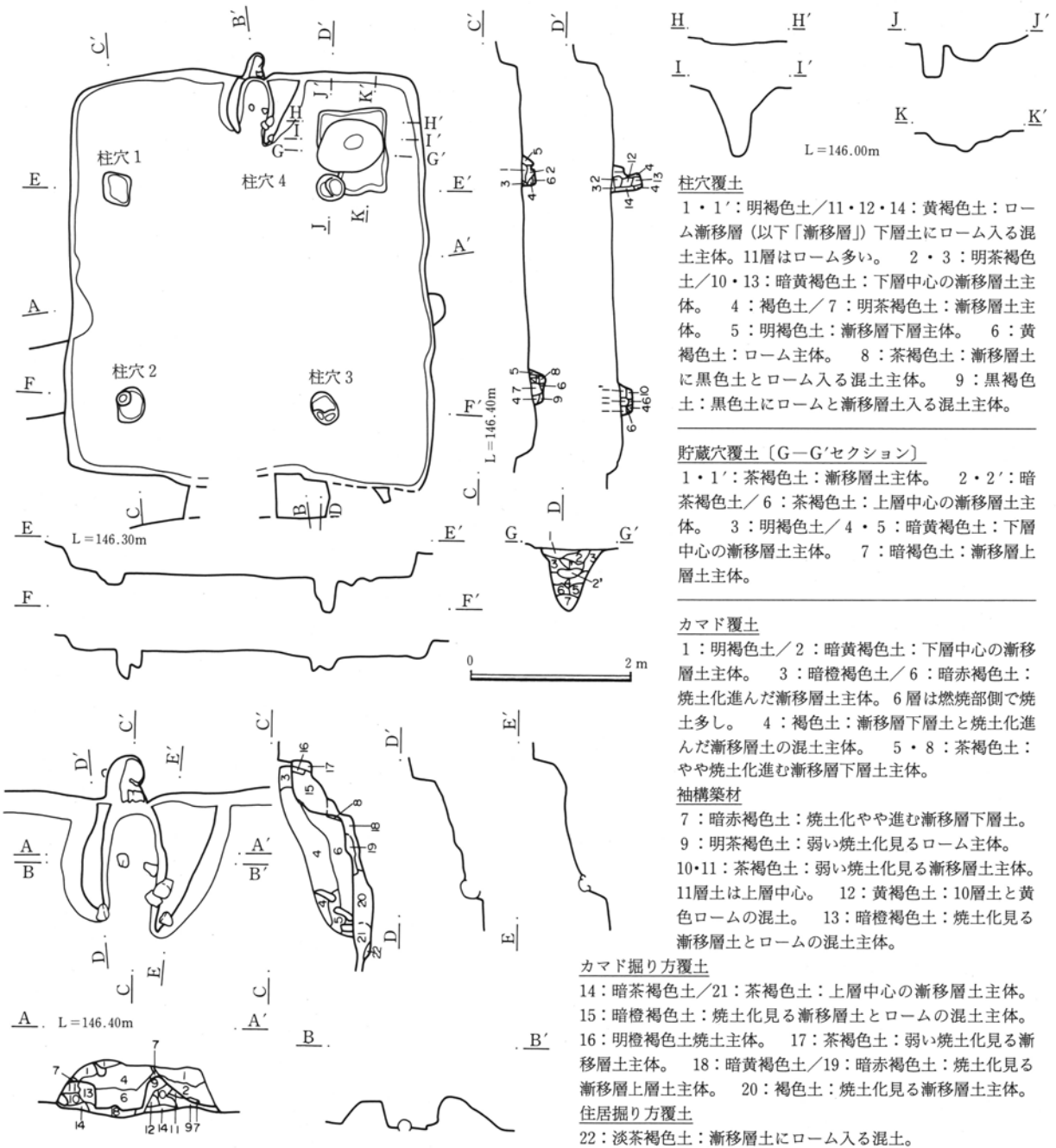
カマドは東カマドで東壁南寄りに設置され左袖の残欠と思われるものが見られたが、かなり破壊されていて床上の構造は殆ど確認されなかった。尚、燃焼部は壁面を跨ぐ位置に設定され、奥側に緩斜面を成す煙道に連続している。

床面に於いては南東コーナーに貯蔵穴1基を確認したが、カマドに近すぎるため実際の機能の有無は不明である。尚、柱穴は認められなかった。

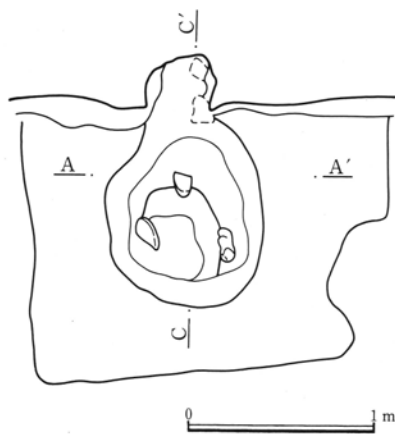


耕作土等
 1：暗茶褐色土／2：茶褐色土：ローム漸移層（以下「漸移層」）土主体。As-A混入。 16：灰褐色土：現耕土。
住居覆土
 3・6・7：暗茶褐色土：上層中心の漸移層土主体。 4：明茶褐色土／11・12・22：明茶褐色土／14：茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。12層土は弱い焼土化見、15層土は焼土化進行。 5：褐色土：漸移層土主体。別遺構か。 8：黄褐色土：ロームブロック主体。 9・13：明褐色土：漸移層下層土主体。13層土は弱い焼土化見る。 10・17：茶褐色土：漸移層土主体。 18：黒褐色土：黒色土と漸移層土の混土主体。 19：暗褐色土：漸移層上層土主体。 20：暗黄褐色土：ロームと漸移層土の混土。 21：明茶褐色土：4層に似るがロームとAs-YPやや多く含む。 23：明茶褐色土：3層に似る。ローム・As-YP多く混入。
貼り床
 24：黄褐色土：ロームに漸移層土入る混土主体。
掘り方覆土
 25：黄褐色土／31：明茶褐色土：漸移層土主体。 26：明褐色土：ロームと漸移層土の混土主体。 27：淡茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。 28：淡茶褐色土：27層土に近いがロームやや多く含む。(28'：部分的に弱い焼土化見る。) 29：淡茶褐色土：ロームと下層土中心の漸移層土主体。 30・32：黄褐色土／33：明黄褐色土：ローム主体。 34：淡茶褐色土：弱い焼土化見る下層中心の漸移層土主体。 35：暗茶褐色土：漸移層上層土にローム入る混土主体。

第440図 H-131号住居



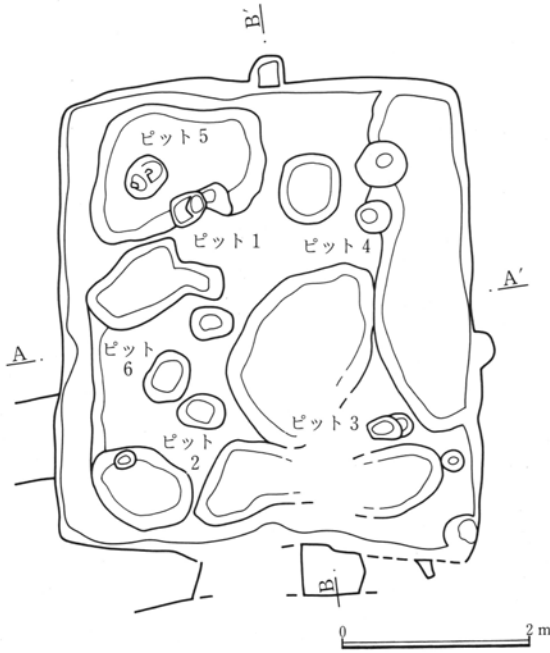
第441図 H-131号住居及びカマド



H-131号住居（古墳時代後期，第440～443図，図版169～170・189～190・202）

概要 本住居はE区中部の南西寄り、F区に向かう斜面部に位置する、E区に於いては中型のものに属する竪穴住居跡である。

本住居は西部はH-130号住居のカマド部分に切られている。また、同居居との新旧関係確認のためにトレンチによる試掘で、西壁中央付近を掘り抜いてしまっている。一方、北東部の上位には14号溝が切り込んでいるが、本住居への影響は余りなかった。



第442図 H-131号住居掘り方

本住居の出土遺物のうち本住居に伴うと判断されたものは何れも6世紀後半期の特徴を示すもので、土師器の坏(1,2)・高坏(3)・甕(4)がある。

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕片を中心に、磨石(5)や凹石(6)と思われるものや、6世紀後半期(8)・7世紀前半期(7)・7世紀後半期(9)の特徴を示す土師器坏、6世紀後半期の特徴を示す土師器甕(11)や小型甕(10)や6世紀代のもと思われる土師器甕(12,13)の他、こも編み石(15,16)や火打ち石(18)も見られた。また前述のように4号溝が絡んでいることなどから15世紀前半期の灰釉卸皿片(14)の混入も見られた。

従って本住居は6世紀後半期の所産と判断される。また、覆土中の遺物から住居廃絶後早い段階から少なくとも7世紀代にかけて遺物の投棄が行われ、平安期頃までその痕跡を留めていたと窺われる。尚、後述のように床面及び掘り方面の柱穴・ピットの状況から、本住居は最低一回以上の建て直しのあったものと想定される。

規模 長軸：505cm 短軸：450cm 深さ：31cm
カマド 幅：102cm 奥行き：207cm 左袖 幅：58cm 長さ：74cm 高さ：26cm 右袖 幅：49cm

長さ：84cm 高さ：23cm 燃烧部 径：30×71cm
 煙道 幅：25cm 長さ：27cm カマド掘り方 径：99×82cm 深さ：12cm

柱穴1 径：35×34cm 深さ：17cm 柱穴2 径：39×32cm 深さ：20cm 柱穴3 径：38×30cm 深さ：25cm 柱穴4 径：32×31cm 深さ：41cm

貯蔵穴 上位構造 径：106×84cm 深さ：7cm

下位構造 径：78×65cm 深さ：80cm

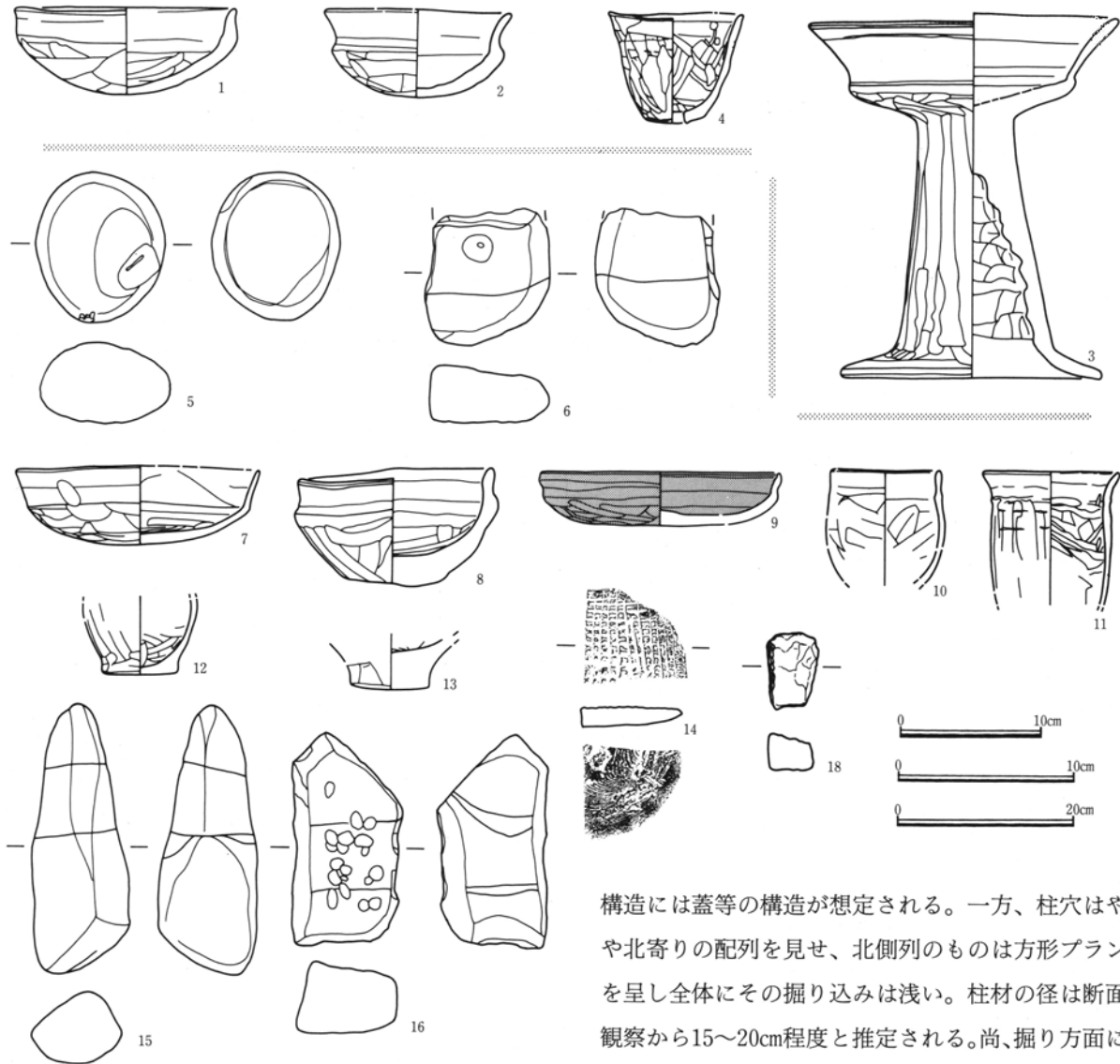
床下土坑 径：206×133cm 深さ：13cm

ピット1 径：38×31cm 深さ：35cm ピット2 径：48×37cm 深さ：36cm ピット3 径：34×26cm 深さ：40cm ピット4 径：38×33cm 深さ：31cm ピット5 径：47×39cm 深さ：56cm ピット6 径：56×43cm 深さ：5cm

構造 本住居のプランは方形を呈し、掘り方を有する。掘り方面は東壁際北半から北・西壁際、南壁際西部にかけて幅10～38cmを測るテラス様の状況が見られ、その内側に不統一な規模・平面形態を呈する深さ7cm以下を測る土坑5基が周溝状に不連続的に掘削されている。また、中央やや西寄りに床下土坑が掘削され、この他にも幾つかの柱穴様の掘り込みが見られた。床面はこうした掘り方をロームやローム漸移層土で埋め戻した後、ロームにローム漸移層土等の入る土壌で貼り床を施して造っている。

カマドは東カマドで東壁中央付近に造られている。東壁手前に縦長の楕円形プランを呈する掘り方を掘削し、掘り方の底面の中央やや東寄りに礫を立てて支脚に、また西側の左右両側に礫を立てて袖石としている。燃烧面はこのような掘り方を焼土を含むローム漸移層土等で埋め戻して造っている。燃烧部は東壁の手前側に設定され、その両側に袖石付近から東壁に向かって焼土を含むロームやローム漸移層土で袖を構築しているが、袖はやや内湾気味なプランを呈する。煙道は燃烧面より28cm程高い位置から奥壁を26cm程掘削し、垂直気味に立ち上げている。

床面に於いては柱穴4基と貯蔵穴1基を確認した。このうち貯蔵穴はカマド右側の南東コーナーに設けられるが、方形プランを呈する浅い掘り込みの



第443図 H-131号住居出土遺物

上位部分と、その中央に掘削される隅丸方形様のプランでピット状形態を呈する下位部分の二つの構造で構成される。下位構造は貯蔵穴本体であり、上位

構造には蓋等の構造が想定される。一方、柱穴はやや北寄りの配列を見せ、北側列のものは方形プランを呈し全体にその掘り込みは浅い。柱材の径は断面観察から15~20cm程度と推定される。尚、掘り方面に見られたピットのうちピット1~4はその配列等から柱穴と判断される。また、南側に対応するものが確認されなかったが、ピット5・6も柱穴となる可能性を有する。従って本住居は建て直しのあったものと想定されるのである。

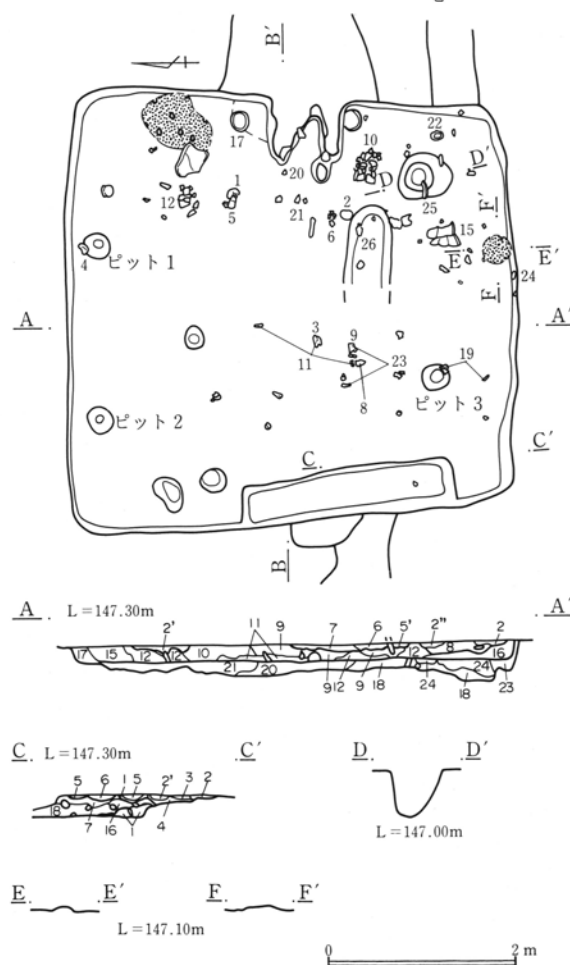
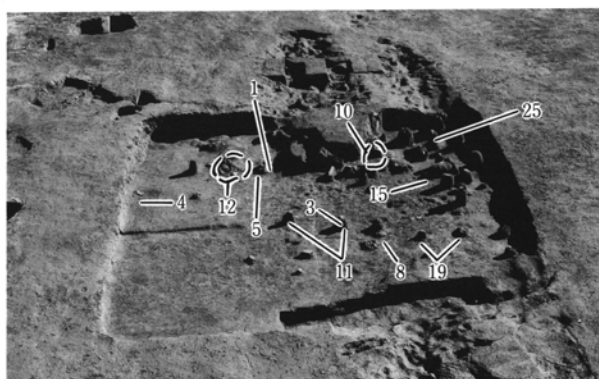
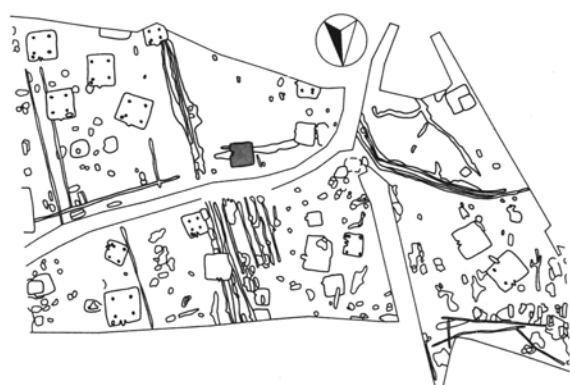
H-132号住居（古墳時代後期、第444~446図、図版170・190~191・202）

概要 本住居はE区中部に位置する、E区に於いては中型のものに属する竪穴住居跡である。

本住居付近はやや削平が進行して遺存状況はさして良好とは言えない状況であったが、更に床面への影響は見られなかったものの住居の南半部へは14号溝が東西に縦断して本住居の上位へ切り込んできており、また、西壁際と住居中央付近には近世後期以

降の細長い土坑が掘削されている他に幾つかのピットの掘削も見られ、これらによって床面の一部が壊されていたため遺存状況を更に悪くしていた。

さて、本住居の出土遺物の分布は南東部に集中し、周囲に向かって拡散していくような傾向を見せていた。こうした中で本住居に伴うものと判断された遺物には、6世紀後半期から7世紀中葉期のものの



第444図 H-132号住居

特徴を示す土師器の坏 (1, 3, 8, 2, 4, 5, 7, 6)・甕 (9~14)・小型甕 (17, 18, 19)、そして6世紀代の土師器甕 (16) があった。この他、カマドの左側1m程離れた位置に径80×56cm、高さ6cm、また南壁中程の壁際に径32×28cm、高さ8cm程に粘土が置かれているのが見られたのであるが、これらについてはカマドの補修に伴って用意されたものか、その余剰

溝・土坑等覆土

1：暗褐色土：ロームとローム漸移層土（以下「漸移層土」）の混土。As-A混入。 2・2'・2''：暗茶褐色土：上層中心の漸移層土と現耕作土に近い茶褐色土の混土。 3：暗褐色土：漸移層土にAs-Aとロームやや多く混入。 4：黒褐色土／7：暗褐色土：3層に似る。 5：茶褐色土：As-A多く含む現耕作土に漸移層上層土入る混土。(5'：As-A少ない。) 6：暗茶褐色土：漸移層上層土。As-A等若干混入。 8：茶褐色土：上層中心の漸移層土。As-A・As-YP混入。

住居覆土

9：黒褐色土：上層中心の漸移層土にロームと黒色土入る混土主体。 10/14：明茶褐色土：暗茶褐色土：漸移層土主体。 11：暗褐色土：漸移層上層土主体。 12：明褐色土：漸移層土にローム入る混土主体。 13：黒褐色土：黒色土に近い漸移層土とロームの混土主体。 15：明茶褐色土／16：明褐色土：下層中心の漸移層土主体。 17：黄褐色土：ロームと漸移層土の混土。

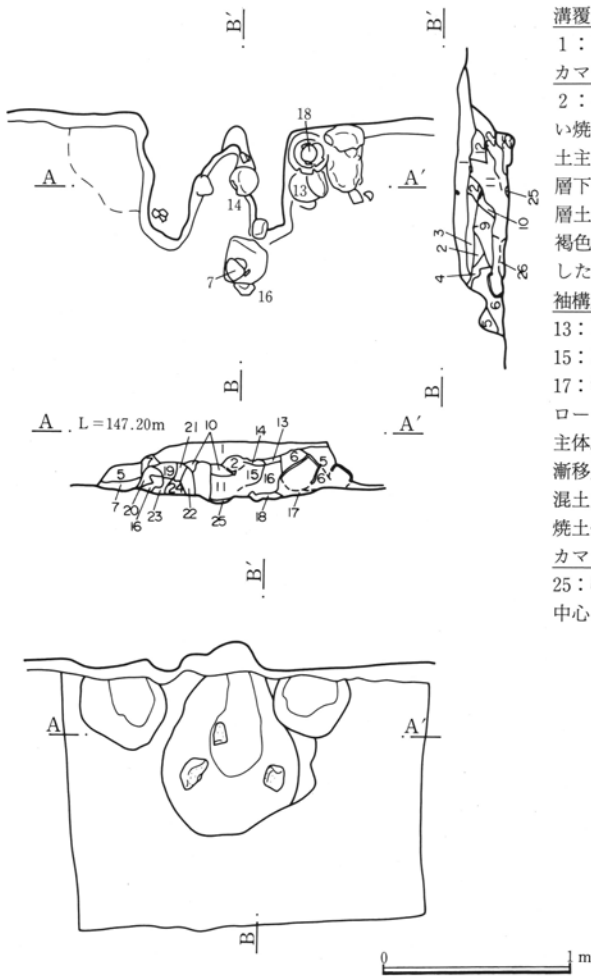
住居掘り方覆土

18：明褐色土：ロームと漸移層下層土の混土。 20：明茶褐色土：黒色土・漸移層土・ロームの混土。 21・28：明黄褐色土／23：黄褐色土：ローム主体。 22：明黄褐色ローム主体。 24：明茶褐色土：漸移層土主体。 25：明褐色土：ロームとやや焼土化見る漸移層土の混土主体。 26：明褐色土：ロームと漸移層下層土の混土。やや焼土化進む。 27：黄褐色土：焼土とローム・漸移層土の混土。

したものが放置されたものであったものと判断している。

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕を中心に、6世紀後半期から7世紀前半期にかけての特徴を持つ土師器の坏(20)や甕(21)・小型甕(22、23)が見られた他、縄文土器片や石田川式の土師器片、平安時代の土器片がみられ、また、こも編み石(24、25)なども見られた。

こうした遺物の状況から本住居は西暦600年を前後する時期の所産と判断され、一方覆土中の遺物から、平安期頃まではその痕跡を留めていたのではないかと思慮されるのである。



溝覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

1: 暗茶褐色土: 弱い焼土化見る漸移層土・焼土・ロームの混土。As-A等混入。

カマド覆土

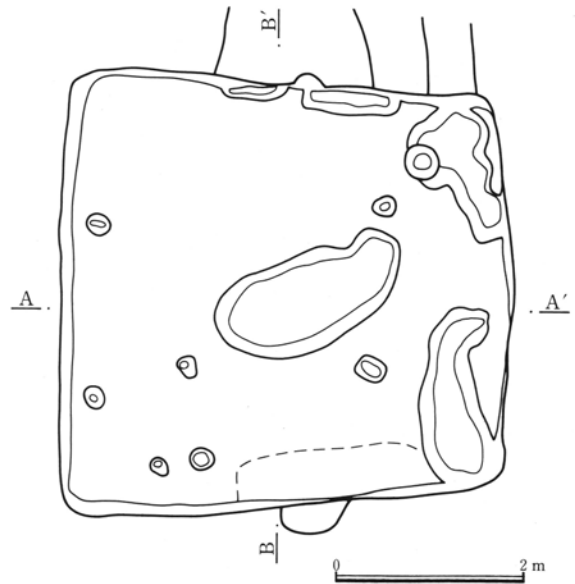
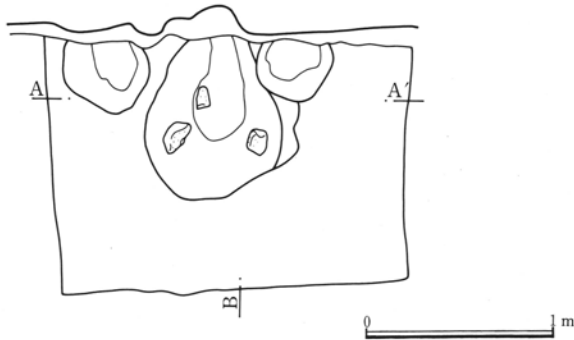
2: 黒褐色土: 黒色土に漸移層土とローム入る混土主体。 3: 明褐色土: 弱い焼土化見る漸移層土と焼土の混土主体。 4・6: 淡茶褐色土: 漸移層下層土主体。 5: 茶褐色土: 下層中心の漸移層土主体。 7: 淡茶褐色土: 漸移層下層土にローム入る混土主体。 9: 茶褐色土: 焼土化見る下層中心の漸移層土主体。 10: 暗赤褐色土: 焼土化のやや進行した漸移層土主体。 11: 赤褐色土: 焼土化進んだ下層中心の漸移層土主体。 12: 橙色土: 焼土と焼土化した漸移層土・黒色土・ロームの混土。

袖構築材

13: 明黄褐色土: ローム主体。 14: 明橙色土: 13層土の焼土化したもの。 15: 明橙色土: 16層土の焼土化したと思われる焼土層。 16: 淡黄褐色ローム。 17: 淡黄褐色土: ロームと漸移層土の混土主体。 18: 暗黄褐色土: 16層土にローム・黒色土の入る混土主体。 19: 橙褐色土: 部分的に焼土化見るローム主体。 20: 淡茶褐色土: 漸移層土主体。 21: 暗茶褐色土: 弱い焼土化見る漸移層土主体。 22: 淡橙褐色土: 焼土化のやや進行したロームと漸移層土の混土主体。 23: 黄褐色土: 焼土化のやや進行したもの。 24: 明茶褐色土: 焼土化見る漸移層土とロームの混土。焼土多く含む。

カマド掘り方

25: 明茶褐色土: 焼土化見る漸移層土主体。 26: 茶褐色土: 焼土化見る上層中心の漸移層土主体。



規模 長軸: 476cm 短軸: 276cm 深さ: 29cm

カマド 幅: 89cm 奥行き: 80cm 左袖 幅: 36

cm 長さ: 72cm 高さ: 17cm 右袖 幅: 27cm

長さ: 89cm 高さ: 15cm 燃烧部 径: 61×28cm

深さ: 4cm

カマド掘り方 径: 73×85cm 深さ: 5cm

貯蔵穴 径: 54×48cm 深さ: 75cm

ピット1 径: 28×26cm 深さ: 28cm ピット2

径: 28×26cm 深さ: 22cm ピット3 径: 27×

26cm 深さ: 17cm

床下土坑 径: 212×100cm 深さ: 5cm

構造 本住居はやや隅丸の方形のプランを呈する。

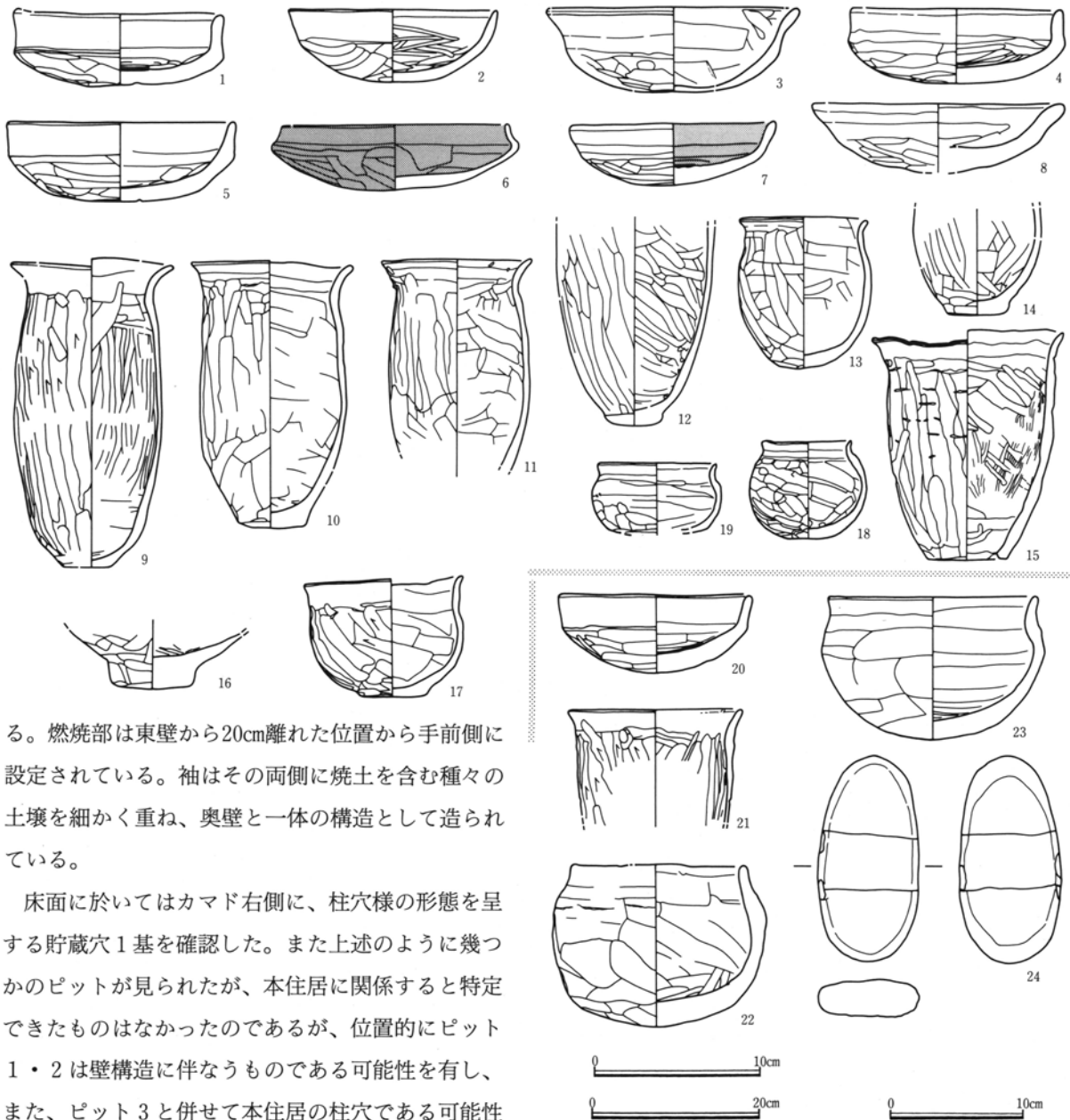
カマド周囲の東壁際には10~25cm、深さ8cm以下を測る周溝状の掘り込みが見られる掘り方を有する。掘り方面中央には楕円形プランの大きな土坑が、また南東及び南西コーナー付近にも土坑様の掘削が

第445図 H-132号住居カマド及び掘り方

見られたが、住居全体に及ぶような構造は認められなかった。尚、床面はこのような掘り方をロームやローム漸移層土等の土壌で埋め戻して造られている。

カマドは東カマドで、東壁中央やや南寄りに造られ、西洋梨形のプランを呈する掘り方を有して、その左側壁際に幅45cm、奥行き37cm、深さ7cm、右側壁際に幅42cm、奥行き33cm、深さ4cmを測るピットが掘削される。カマド掘り方の手前寄り両側と中央左寄りに礫が立てられて袖石とされている。燃烧面は掘り方をローム漸移層土等で埋め戻して造って

第3章 発見された遺構と遺物



る。燃焼部は東壁から20cm離れた位置から手前側に設定されている。袖はその両側に焼土を含む種々の土壌を細かく重ね、奥壁と一体の構造として造られている。

床面に於いてはカマド右側に、柱穴様の形態を呈する貯蔵穴1基を確認した。また上述のように幾つかのピットが見られたが、本住居に関係すると特定できたものはなかったのであるが、位置的にピット1・2は壁構造に伴うものである可能性を有し、また、ピット3と併せて本住居の柱穴である可能性が考慮される。

第446図 H-132号住居出土遺物

H-150号住居（古墳時代後期、第447～449図、図版170～171・191～192・202）

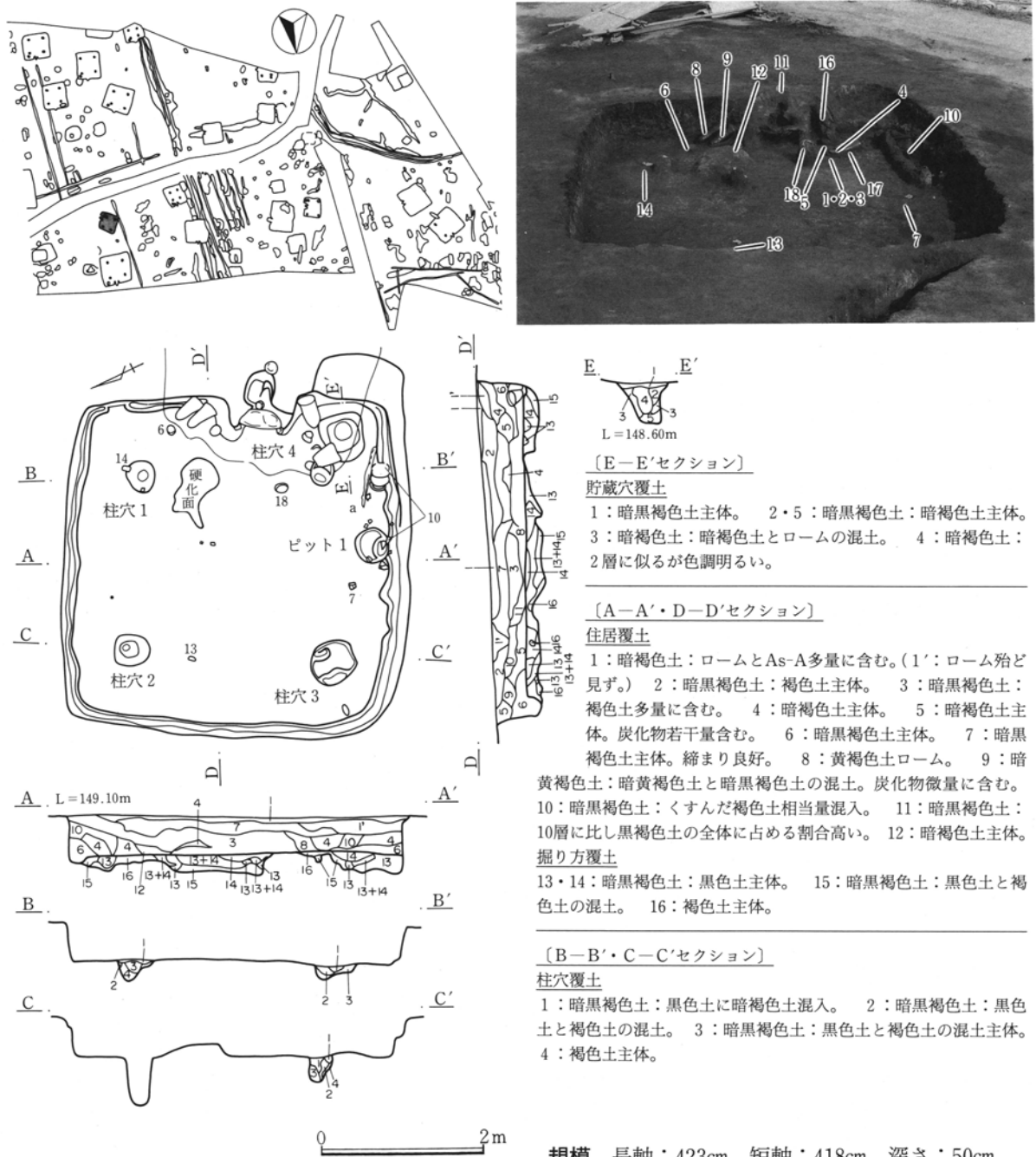
概要 本住居はE区北東部に位置する。

出土遺物のうち本住居に伴うと判断された遺物は概ね6世紀後半から7世紀前半期の時期の特徴を持つもので、土師器坏（5、1～4,6,7）や、カマド左側に立てかけられたらしい土師器甕（8,9）、煙道部先端に出土した土師器甕（11）の他、土師器の胴張甕（10）や小型甕（12）やこも編み石（13）がある。

一方、覆土中出土の遺物には磨石（14）や本住居

に伴うものと同時期の土師器の坏（15）・甕（16）・甕（17）・鉢（18）などが見られた。尚、後3者は覆土の所謂三角堆積上に乗るように出土しているので本住居に伴う可能性を有している。

これらの点から本住居は概ね西暦600年を前後する時期の所産と判断される。また覆土中の遺物から、その痕跡は少なくとも奈良・平安時代頃まで、或いはAs-Aを含む覆土第1層の状況から江戸時代後期に



第447図 H-150号住居

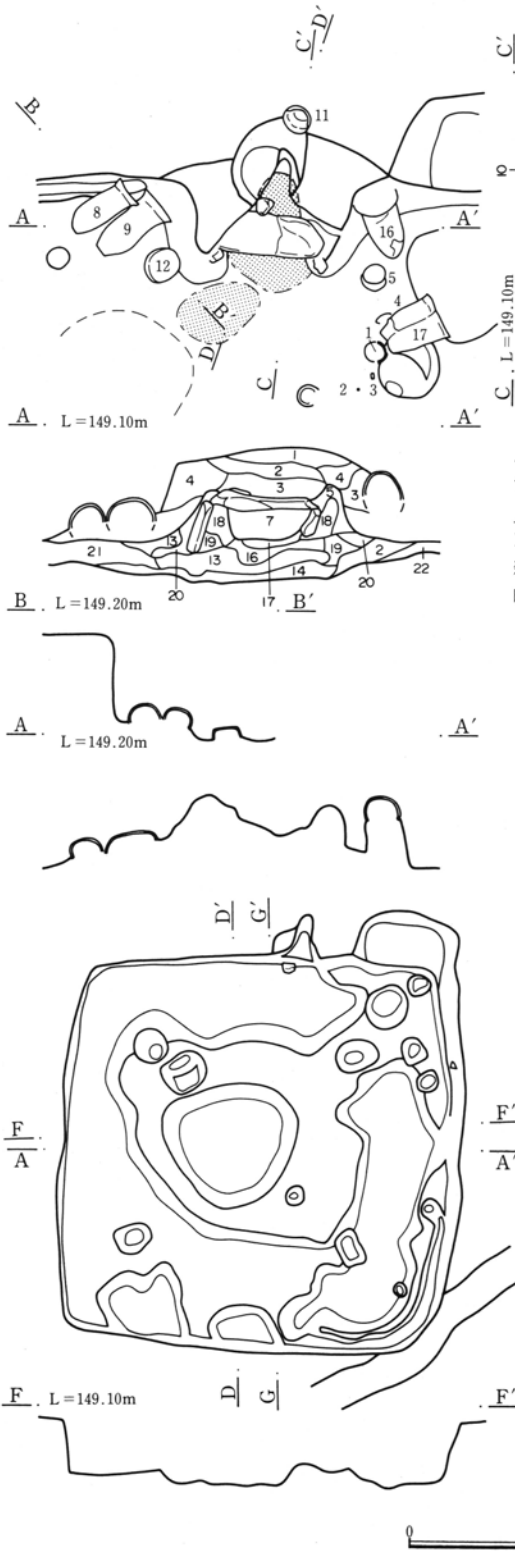
至っても若干残されていた可能性も考慮される。

尚、本住居は所謂焼失家屋と判断される。出土炭化材についてはaは柱穴3の柱の転倒したものと想定されるが、他の材は特定できなかった。尚、炭化材の遺存状況から本住居は土葺屋根を持っていたと判断されるが、カマド左側手前の黄褐色土の硬化面がその一部であると判断される。

E E'
 L=148.60m
 [E-E'セクション]
 貯蔵穴覆土
 1：暗黒褐色土主体。 2・5：暗黒褐色土：暗褐色土主体。
 3：暗褐色土：暗褐色土とロームの混土。 4：暗褐色土：
 2層に似るが色調明るい。

[A-A'・D-D'セクション]
 住居覆土
 1：暗褐色土：ロームとAs-A多量に含む。(1'：ローム殆ど
 見ず。) 2：暗黒褐色土：褐色土主体。 3：暗黒褐色土：
 褐色土多量に含む。 4：暗褐色土主体。 5：暗褐色土主
 体。炭化物若干量含む。 6：暗黒褐色土主体。 7：暗黒
 褐色土主体。縮まり良好。 8：黄褐色土ローム。 9：暗
 黄褐色土：暗黄褐色土と暗黒褐色土の混土。炭化物微量に含む。
 10：暗黒褐色土：くすんだ褐色土相当量混入。 11：暗黒褐色土：
 10層に比し黒褐色土の全体に占める割合高い。 12：暗褐色土主体。
 掘り方覆土
 13・14：暗黒褐色土：黒色土主体。 15：暗黒褐色土：黒色土と褐
 色土の混土。 16：褐色土主体。

[B-B'・C-C'セクション]
 柱穴覆土
 1：暗黒褐色土：黒色土に暗褐色土混入。 2：暗黒褐色土：黒色
 土と褐色土の混土。 3：暗黒褐色土：黒色土と褐色土の混土主体。
 4：褐色土主体。



第448図 H-150号住居カマド及び掘り方

ピット1 径：44×39cm 深さ：30cm
 周溝 幅：6~24cm 深さ：13cm
 床下土坑 径：140×137cm 深さ：22cm

カマド覆土

1：暗黒褐色土主体。 2：暗黒褐色土：1層に比しローム多し。 3：暗黒褐色土：1・2層に比しローム大型化。 4：暗黒褐色土：1~4層中で最も色調くすみローム減少。 6：暗黒褐色土主体。縮まりに欠ける。 7：暗赤褐色土：焼土主体。 8：暗赤褐色土：くすんだ焼土と暗黒褐色土の混土。 9：暗黄褐色土：ローム主体。 10：黒色土：黒色土と微量の焼土・白色土粒の混土。固く縮まる。 17：暗黒褐色土：焼土・炭化物少量含む。

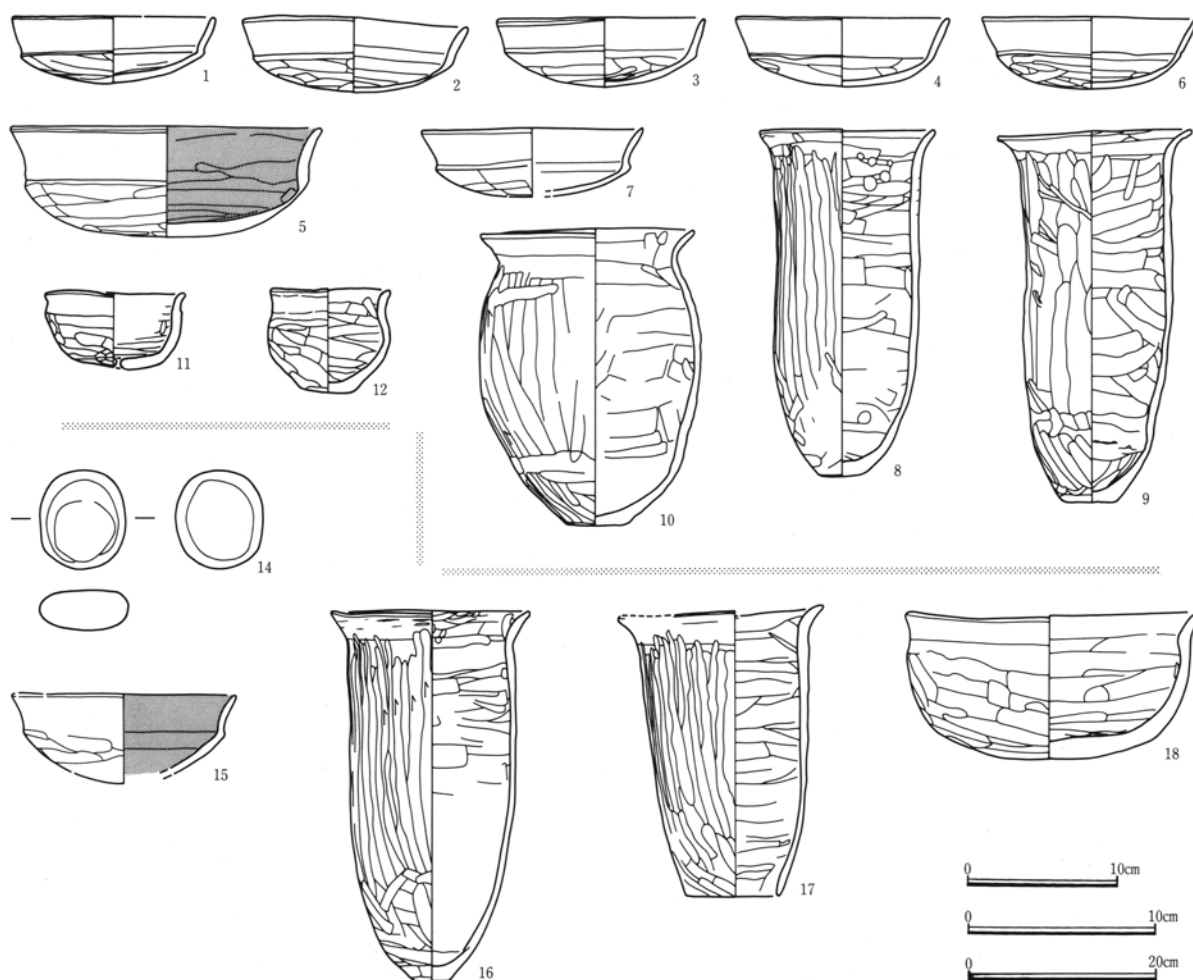
袖・天井構築材

5：淡い褐色土：粘性強し。 13：黒色土：焼土微量に混入。 16：暗赤褐色土：焼土主体。固く縮まる。 18：暗赤褐色土：焼土と褐色土の混土。 19：黒色土主体。 20：褐色粘質土：夾雑物無し。
 カマド掘り方覆土
 11：暗黒褐色土：黄褐色土と黒褐色土の混土。縮まり欠ける。 12：黒色土：夾雑物無し。 14：黒色土主体。 15：褐色土主体。 21：暗褐色土主体。 22：暗褐色土：黒色土と暗褐色土の混土。

構造 本住居はやや膨らみを持った方形のプランを呈している。

本住居は掘り方を有し、掘り方には大きく見ると南東隅部を除き幅80~124cm、深さ19cm以下を測る周溝状の掘り込みが廻っている。掘り方中央の掘り残し部分の中央には床下土坑が掘削されている。床面は、こうした構造の掘り方を黒色土と褐色土で埋め戻して造られている。

カマドは東カマドで遺存状態は比較的良好であり、東壁中央やや南寄りに造られている。カマドは掘り方を有し、これを黒色土・黄褐色土等種々の土壌を用いて埋め戻して焼土面を造っている。焼土面及び左袖前側には焼土面が形成されている。焼土部は東壁手前に設定され、手前両側に礫を立てて袖石とし、これを包み込むように奥壁に向かって褐色の粘質土等を用いて袖を造り上げている。また、袖石の付近に板状の礫を用いた天井石が渡されている。煙道部は奥壁より急傾斜で掘り込まれ、壁面のライン付近に掘削された柱穴状の形態を呈する縦坑につけられている。煙道部の天井はよく焼土化しているので土壌の性質は特定できなかったが、袖からつながって造られ両側では天井石に接している。



第449図 H-150号住居出土遺物

床面に於いては主柱穴4基と貯蔵穴1基、ピット1基、及び周溝を確認している。このうち主柱穴は、径は小さくはなかったが掘り込みは浅いものであった。尚、柱材の径については断面観察から20cm弱程ではなかったかと想定される。貯蔵穴は隅丸方形を呈しており、カマド右側の南東コーナー付近に掘削されている。貯蔵穴の断面観察所見からは筒状の容

器が納められていた可能性が窺われた。一方、周溝は東壁際のカマド右側と北東コーナー近くの一部を除いて一周しているが、掘り込みは比較的きれいなものであった。また、南壁際中央付近の周溝より内側に柱穴様の形状を呈するピット1が掘削されているが、これについては位置的に入り口遺構に伴うものではないかと思慮される。

H-151号住居 (古墳時代後期, 第450~452図, 図版171・192~193・202)

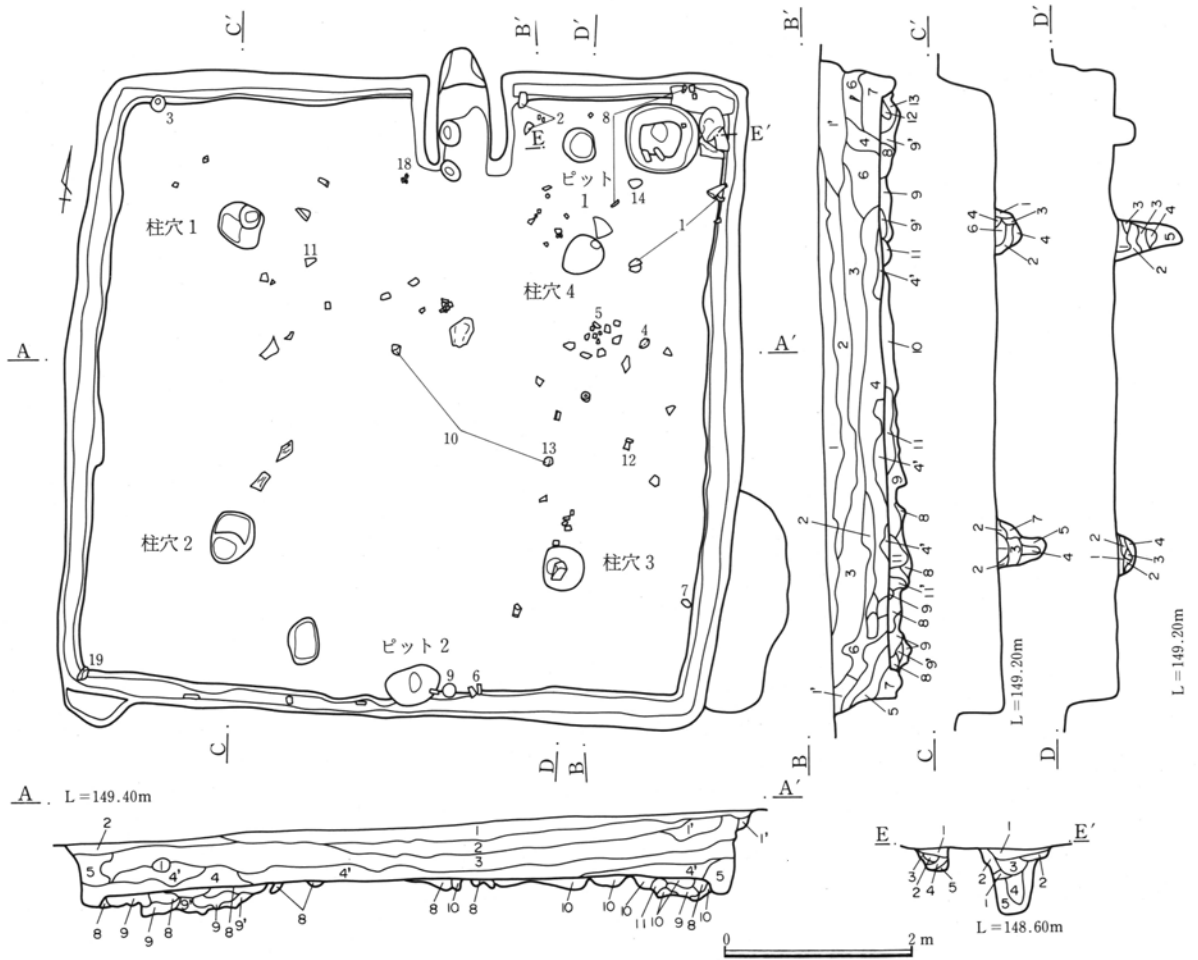
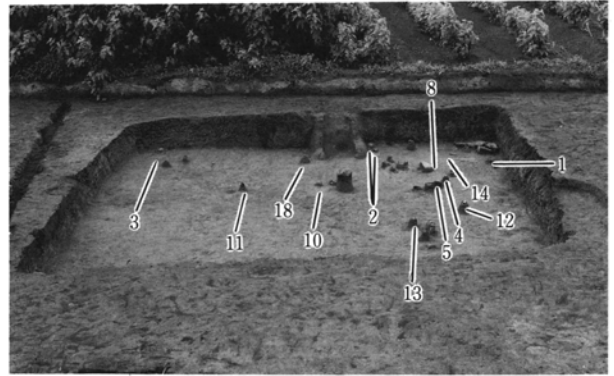
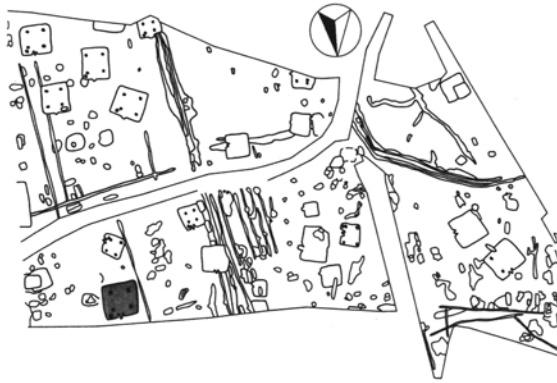
概要 本住居はE区北東部に位置する、E区に於いては大型のものに属する竪穴住居跡である。

住居南東部には土坑が絡んでいるが、本住居への影響は殆どなかった。また幾つかのピットが掘り込まれて一部床面に達している。

出土遺物のうち本住居に伴うと判断されたものに

は6世紀後半期から7世紀前半期の特徴を示す土師器坏(1, 2, 3)とこも編み石(4~7)がある。

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕片を中心として、6世紀後半~7世紀前半期のものの特徴を持つ土師器小型甕(8)や須恵器の蓋(9)・高坏(12)、同じく7世紀後半期の須恵器盤(11)や



住居覆土

1：黒色土主体。(1'：1層に比し褐色土多量に含む。) 2・3：暗褐色土主体。4・4'：褐色土主体。5：暗褐色土：黄褐色土・褐色土比較的多量に含む。6：暗茶褐色土：暗黒褐色土中にロームと白色土が多量に混入。7：暗茶褐色土：暗黒褐色土中に黒色土と褐色土相当量混入する。

住居掘り方覆土

8：暗褐色土主体。9：暗褐色土：暗褐色土とロームと漆黒土の混入。(9'：9層に比し褐色土多く主体を成す。) 10：暗茶褐色土主体。比較的良く締まる。11：明褐色土。12：暗黒褐色土：漆黒土主体。13：暗黒褐色土主体。

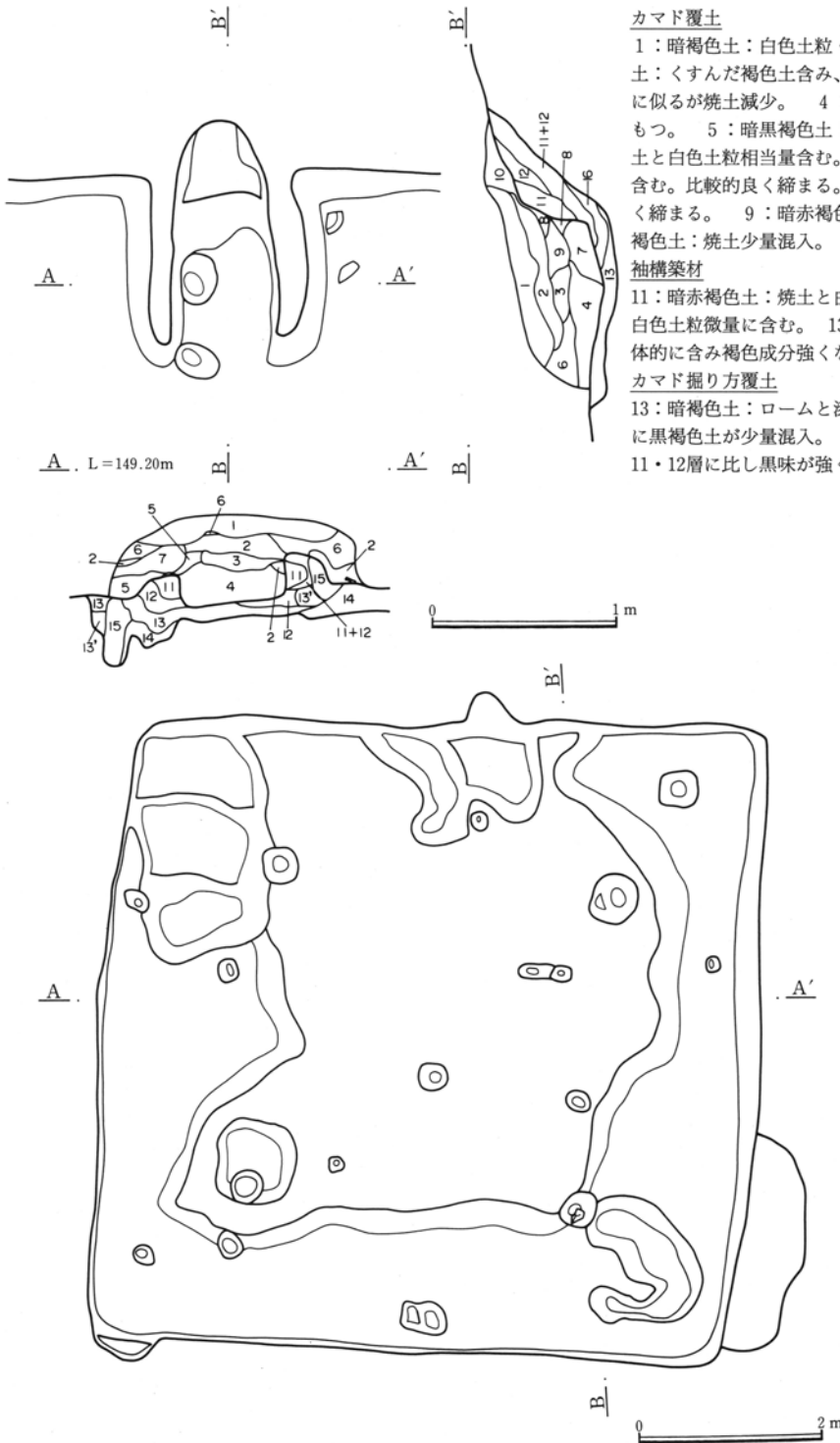
柱穴覆土〔C-C'・D-D'セクション〕

1：暗褐色土：黄褐色土少量混入。2：暗黄褐色土：暗黄褐色土と暗黒褐色土の混入。3・5：暗黒褐色土：暗黄褐色土少量混入。4：暗黒褐色土：暗黄褐色土微量混入。6：黒色土：漆黒土にくすんだ褐色土少量混入。7：褐色土：褐色土と暗褐色土の混入。

貯蔵穴及びピット覆土〔E-E'セクション〕

1：暗黒褐色土：黄褐色土微量に含む。2：黒褐色土：黄褐色土少量含む。3：暗黒褐色土：くすんだ褐色土少量混入。4：暗黒褐色土：くすんだ褐色土多量に混入。5：暗褐色土：黄褐色土多量に混入。

第450図 H-151号住居



カマド覆土

1：暗褐色土：白色土粒・褐色土粒を多量に含む。 2：暗黒褐色土：くすんだ褐色土含み、焼土少量含む。 3：暗黒褐色土：2層に似るが焼土減少。 4：暗黒褐色土：焼土多量に含む。若干粘性もつ。 5：暗黒褐色土：焼土若干量含む。 6：暗褐色土：褐色土と白色土粒相当量含む。 7：暗黒褐色土：焼土と白色土粒少量含む。比較的良く締まる。 8：暗赤褐色土：焼土主体。比較的良く締まる。 9：暗赤褐色土：焼土と暗黒褐色土の混土。 10：暗褐色土：焼土少量混入。

袖構築材

11：暗赤褐色土：焼土と白色土粒微量に含む。 12：暗黒褐色土：白色土粒微量に含む。 13'：暗褐色土：13層土に似るがロームを主体的に含み褐色成分強くなる。 15：黒色土：ローム微量に含む。

カマド掘り方覆土

13：暗褐色土：ロームと漆黒土の混土。 14：暗褐色土：褐色土中に黒褐色土が少量混入。 16：黒色土：11層土と12層土に近似し、11・12層に比し黒味が強くなる。

本住居の痕跡に対して住居廃絶後早い段階から長期に亘って遺物の投棄が行われ、その痕跡は平安時代頃まで留められていたことが窺われる。

規模 長軸：681cm 短軸：523cm 深さ：75cm

カマド 幅：109cm 奥行き：133cm 左袖 幅：30cm 長さ：99cm 高さ：61cm

右袖 幅：30cm 長さ：105cm 高さ：50cm 燃烧部 径：47×75cm 深さ：7cm

煙道 幅：49cm 長さ：40cm カマド掘り方 径：101cm以上×95cm 深さ：7cm

柱穴1 径：48×42cm 深さ：53cm 柱穴2 径：53×45cm 深さ：51cm 柱穴3 径：46×43cm 深さ：39cm

柱穴4 径：48×38cm 深さ：74cm

貯蔵穴 上位構造 径：77×72cm 深さ：24cm

下位構造 径：44×38cm 深さ：72cm

ピット1 径：36×33cm 深さ：22cm ピット2

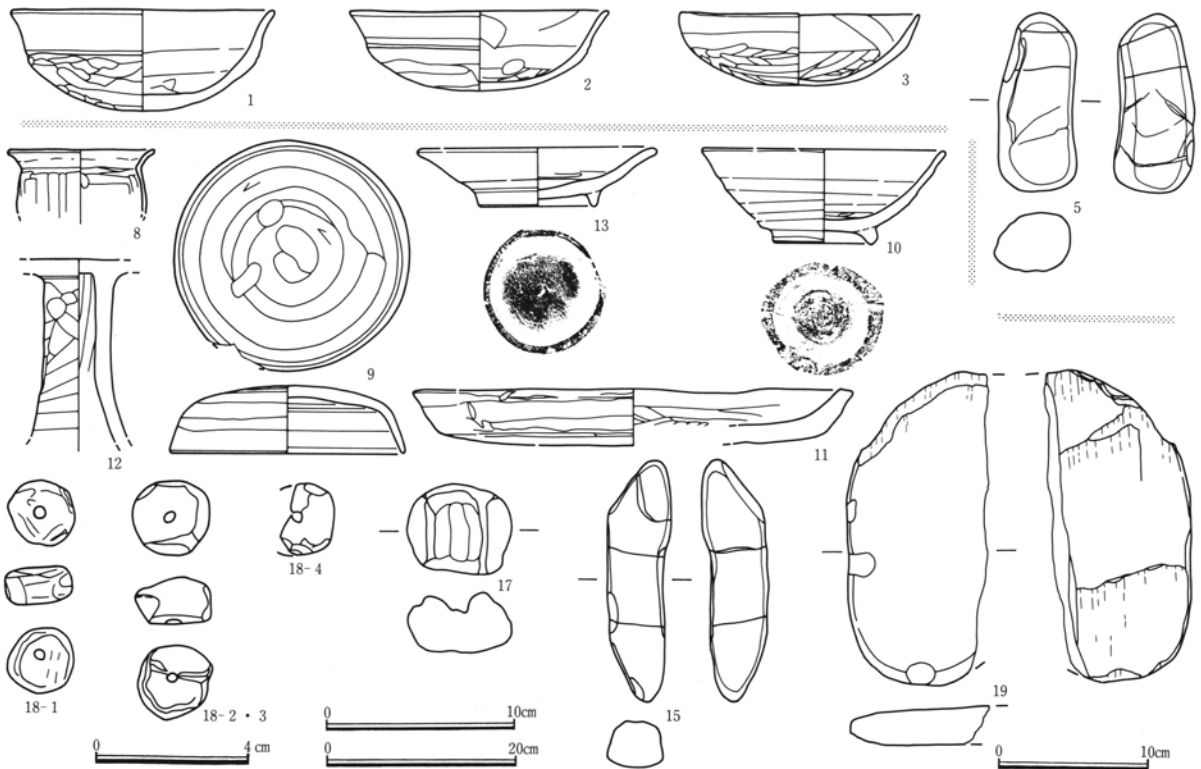
径：56×40cm 深さ：37cm

周溝 幅：10～33cm 深さ：19cm以下

第451図 H-151号住居カマド及び掘り方

10世紀前半期の須恵器高台付碗(10)の他、こも編み石(15)や白玉(18-1~4)が見られた他、17世紀末~18世紀の陶器皿(13)の混入も見られた。

上記の点から本住居は概ね西暦600年を前後する時期の所産と判断される。また覆土の遺物状況から



第452図 H-151号住居出土遺物

構造 本住居はやや菱形に近い方形のプランを呈し、掘り方を有する。掘り方には大きく見ると幅85～223cm、深さ8cm程を測る周溝状の掘り込みが南・西・北壁際にコの字状に廻り、その他幾つかの小さい掘り込みも見られた。床面は掘り方を、暗褐色土やローム等種々の土壌で埋め戻して造っている。

カマドは北カマドで北壁中央部に設けられる。掘り方を有し、これをロームや漆黒土で埋め戻して燃焼面を造り出している。燃焼部は壁面の手前側に設定され、その両側に焼土を含む黒褐色土やロームで袖を造っているが、両袖は平行な位置関係を形成する。煙道部は一部奥壁側を埋めて、燃焼面より26～38cmの高い位置で北壁を緩傾斜で掘り進んでいる。

床面においては支柱穴4基と貯蔵穴1基、周溝及びピット3基を確認した。このうち支柱穴は比較的

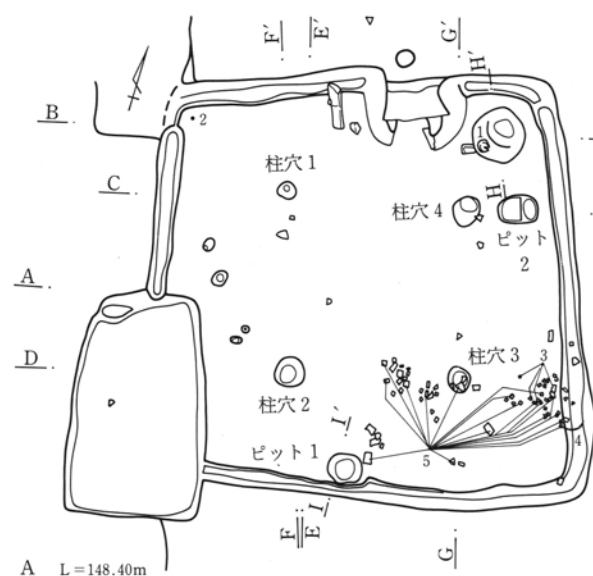
しっかりした掘り込みを持ち、柱材の径は断面観察から20cm程であったものと推定される。また、貯蔵穴はカマド右側の北東コーナーに掘削されるが、隅丸方形に近い楕円形プランを呈する土坑様の掘り込みで蓋等の設置が想定される上位部分と、方形プランで柱穴状の形態を呈して貯蔵穴本体と考えられる下位部分から構成されている。一方、周溝ははっきりした掘り込みを有するもので、四囲の壁際を、カマド部分を除いてほぼ一周している。尚、柱穴・貯蔵穴以外のピットについては本住居に伴うものであるか否かは特定できなかったが、ピット1についてはカマドと貯蔵穴のほぼ中位に位置しているのでカマド若しくは貯蔵穴の機能に関連する遺構、南壁際中央付近に位置するピット2については入り口構造に伴うものである可能性が考えられる。

H-152号住居 (古墳時代後期, 第453～456図, 図版171～172・193・202)

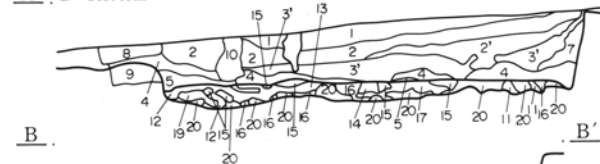
概要 本住居はE区中部に位置する、E区に於いては中型のものに属する竪穴住居跡である。

本住居の西南部には3号集石遺構が重複し、本住

居の床面を掘り抜いている。また、住居北西部には近世以降の土坑が覆土と壁面の上位に切り込んでいた。しかし、遺構の遺存状況は全体として良好であ



A. L=148.40m

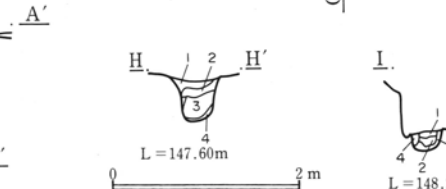
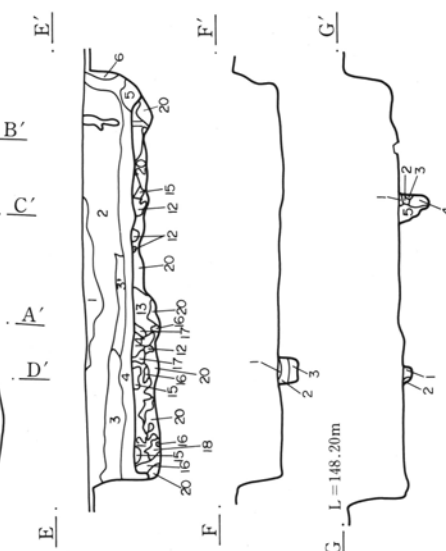


住居覆土

1・8：暗褐色土主体。 2・2'：暗黄褐色土主体。 3：暗黄褐色土主体。ローム多し。(3'：ローム少なくなる) 4：暗黄褐色土主体。 5：黄褐色土：ローム多く含む。 6：黄褐色土：ローム主体。 7：黒褐色土主体。 10：暗黄褐色土主体。樹山痕か。

掘り方覆土

11：暗黄褐色土主体。 12：黒褐色土主体。 13：黄褐色土：ローム多く含む。 14：黄褐色土：ロームかなり多く含む。 15・16・17・18：黄褐色土：ローム主体。 19：黄褐色土主体。



柱穴2覆土

1：暗黄褐色土主体。 2・3：黄褐色土主体。ローム多し。

柱穴3覆土

1：暗褐色土主体。 2：黄褐色土：ローム主体。

柱穴4覆土

1：黄褐色土：ローム多く含む。 2：黒褐色土主体。 3：暗褐色土主体。 4：暗褐色土主体。 5：暗黄褐色土主体。

貯蔵穴覆土

1・2・3：暗褐色土主体。 4：黄褐色土：ローム主体。

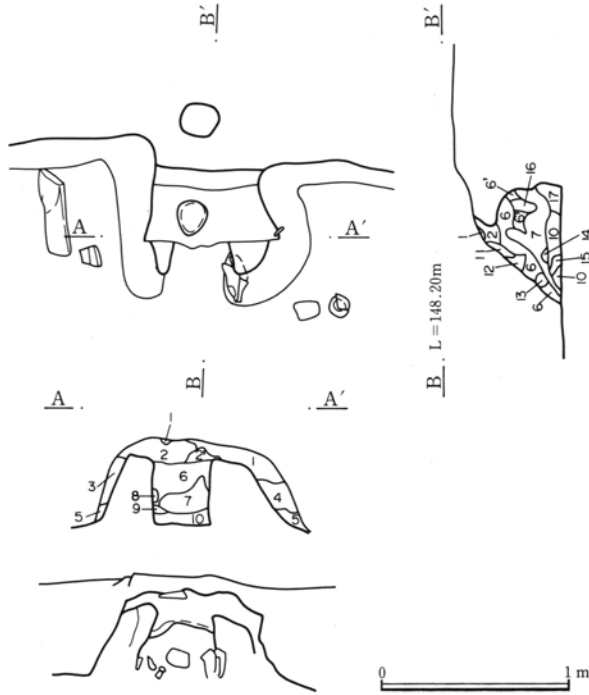
ピット1・周溝覆土

1：暗黄褐色土主体。 2：暗黄褐色土主体。 3：黄褐色土：ローム主体。 4：暗褐色土主体。周溝覆土。

地山層

9・20：黄褐色ローム。

第453図 H-152号住居



第454図 H-152号住居カマド

り、特にカマドは完形に近い状態で確認することができている。

さて、本住居の出土遺物は住居南東部を中心に幾つかが見られたが、このうち本住居に伴うと判断された遺物は僅かに6世紀後半期の特徴を示す土師器坏(1)1点のみであった。

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕片を中心に遺物の出土が見られた。この中には磨石(2)や、6世紀後半期の特徴を持つ土師器の甕(3)・胴張甕(4)・甑(5)も見られた。

以上のように出土遺物が少なかったため本住居の時期特定は明瞭には行い得なかったのであるが、土師器坏(1)から得られた6世紀後半を前後する時期を以て本住居の時期としたい。また覆土中の遺物の状況から、本住居は少なくとも平安時代頃まではその痕跡を留めていたものと思慮される。

規模 長軸：478cm以上 短軸：459cm 深さ：74cm
カマド 幅：108cm 奥行き：105cm 左袖 幅：32cm 長さ：87cm 高さ：55cm 右袖 幅：42cm 長さ：75cm 高さ：56cm 燃烧部 径：38×64cm 高さ：29cm 煙道 径：22×19cm 長さ：56cm

カマド覆土

1・2'：暗黄褐色土主体。 2：黄褐色土：ローム主体。天井崩落土か。 3：黒褐色土主体。 4・5・9・14：暗褐色土主体。 6・6'：黒褐色土主体。ローム含む。 7：暗褐色土主体。焼土及びローム含む。 8：黒褐色土：焼土多く含む。 10：暗赤褐色土：焼土含む。 11：暗黄褐色土主体。ローム含む。 12：黄褐色土：ローム多く含む。 13：暗赤褐色土主体。 15：暗赤色土：焼土主体。 16：黒色土。樹木の痕跡。 17：黒色土主体。

カマド掘り方 径：74×56cm 深さ：8cm

柱穴1 径：19×18cm(掘り方面での径：38×34cm)

深さ：58cm 柱穴2 径：33×30cm(掘り方面での径：35×31cm)

深さ：64cm 柱穴3 径：26×24cm(掘り方面での径：36×33cm)

深さ：47cm 柱穴4 径：32×29cm(掘り方面での径：42×36cm)

深さ：53cm

貯蔵穴 径：56×54cm 深さ：58cm

ピット1 径：34×31cm 深さ：27cm

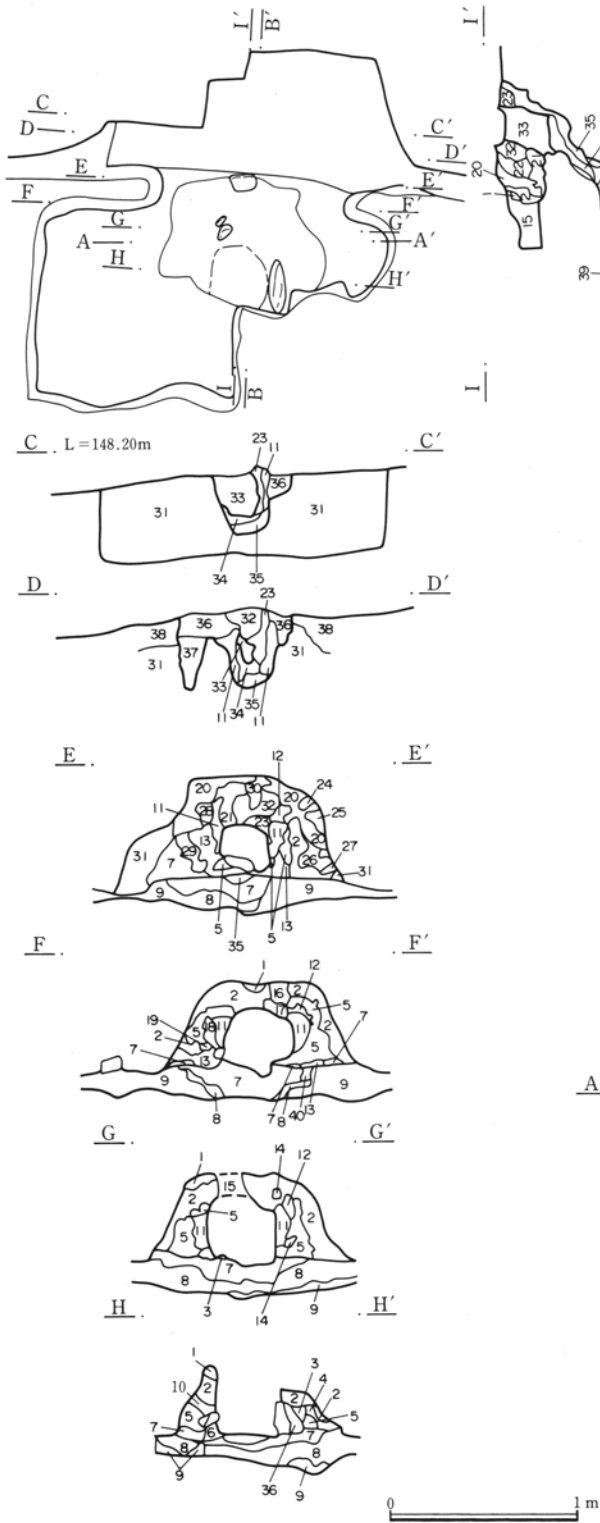
ピット2 径：42×30cm 深さ：16cm

周溝 幅：5～19cm 深さ：1～14cm

床下土坑 径：186×156cm 深さ：9cm

構造 本住居は東及び南側に広がる隅丸の台形のプランを呈し、掘り方を有している。掘り方には一部幅58cm以下を測るテラスを伴う幅40～172cm、深さ14cm以下を測るやや不定型な周溝状の掘り込みが北・西壁及び南壁西半部にかけての壁寄りに廻っている。また、中央の掘り残し部には大きな土坑が1基掘削され、その他にも若干のピット様の掘り込みが見られている。床面はこうした構造を持つ掘り方を黄褐色土等の土壌で埋め戻して造っているが、後述する柱穴の所見から、床は柱を立てた後に造られていることが確認されている。

カマドは北カマドで北壁中央東寄りに造られており、前述のように遺存状況は良好なものであった。カマドは掘り方を有しており、これを焼土を含む黒褐色土等の土壌で埋め戻して燃烧面を造り出している。燃烧部は壁面手前に設定され、その両側に袖が造られる。袖については右袖手前側には礫を立てた袖石が確認されたが、左袖については手前側の下部部分に礫が認められたので当初は袖石を立てようとしていたことが窺われる。また、カマド左側には板



第455図 H-152号住居カマド及び掘り方

状の礫が出土していたが、袖石付近の天井部が欠失していたので住居使用時には袖石付近に天井石が渡され、カマド（住居）の廃棄に伴って意図的にはずされたものと判断される。袖本体は焼土を含む黒褐

カマド覆土・住居覆土

33：黒褐色土主体。焼土含む。 38：暗黄褐色土：表土と31層土の混土。

天井構築材

1・20：黄褐色土/30：暗黄褐色土：ローム主体。 2：黒褐色土主体。 15：暗褐色土主体。ローム含む。 16：暗黄褐色土主体。ローム含みサクサクする。 17：暗黄褐色土主体。ローム・焼土含みサクサクする。 21：赤褐色土：1層の焼けた焼土主体。 22：暗赤褐色土/23：暗褐色土主体。焼土含む。

袖構築材

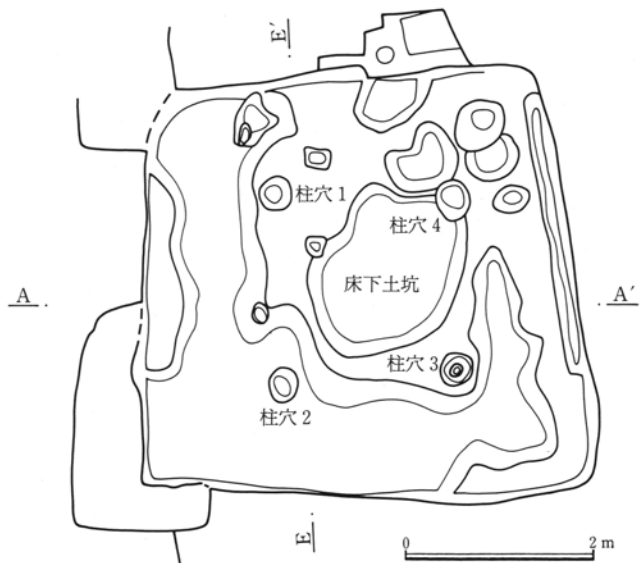
3：淡赤褐色土：焼土主体。 4・29：暗黄褐色土/5：黄褐色土：ローム主体。 6：赤褐色土主体。焼土多く含む。 10：暗褐色土：ローム含む。 11：赤褐色土/28：暗赤褐色土：焼土主体。 12：暗黄褐色土：5層土と11層土の混土主体。 13：暗褐色土主体。焼土含む。 14：暗黄褐色土：ローム含み、焼土多く含む。 18：黒褐色土：ローム・焼土含む。 19：暗黄褐色土：13層土と5層土の混土。 24：赤黄褐色土：20層で焼土多く含む部分。 25・27：黒褐色土主体。 26：暗黄褐色土：20層土に似る。

カマド掘り方覆土

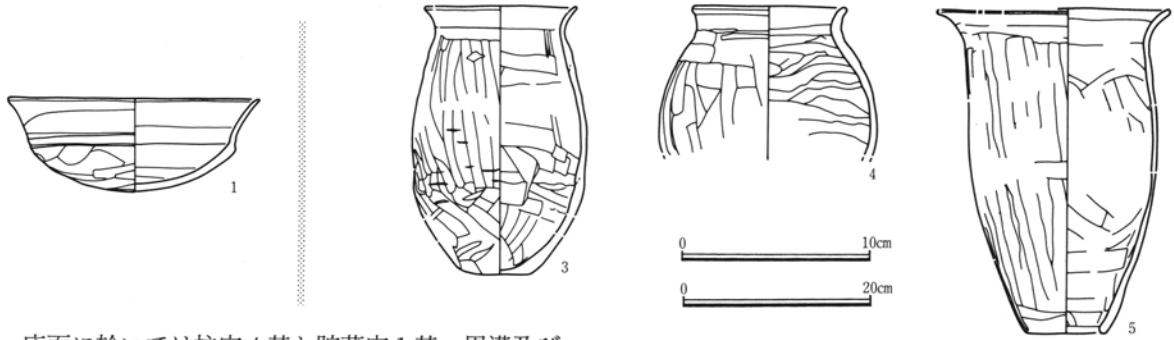
7：黒褐色土主体。 8：黒褐色土：ローム含む。 9：黄褐色土：ローム主体。 32：赤黄色土：焼土・ローム含む。 34：黒褐色土主体。焼土含む。 35：暗黄褐色土：31層土と34層土の混土。 36：暗褐色土主体。 37：黒褐色土主体。植物の痕跡か。 39：赤褐色土：焼土主体。 40：暗黄褐色土：8層土主体。

地山層

31：黄褐色土ローム。



色土やローム等様々な土壌で造り上げられているが、その上にロームや暗褐色土等の土壌を用いて天井が造られている。しかし、袖と天井部は明瞭に区分できない面もあり、凡そドーム状の形状を以て一体の構造として造られていたものと思慮される。煙道の横断面径は円形を呈し、奥壁をやや削り込んで急傾斜に造られているが、手前側は天井部によって形造られている。



第456図 H-152号住居出土遺物

床面に於いては柱穴4基と貯蔵穴1基、周溝及び幾つかのピットが確認されている。このうち柱穴は、径が小さく掘り込みも浅いように見えたが、掘り方面に於いてはしっかりした柱穴として確認されている。このため床面に於いて確認されたそれは柱痕であったものと判断される。このことは、即ち柱は掘り方面に於いて柱穴を掘削し立てられたもので、その後掘り方が埋め戻されて床は造られたのであることを示している。また、柱材の径は、床面の形状、掘り方面での底面の形状及び断面観察の所見から、20cm内外であったものと推定される。一方、貯蔵穴はカ

マド右側に近接する北東コーナー付近に掘削されており、その形状は柱穴様を呈している。周溝はカマド部分を除いて四囲の壁際を一周するものと思われるが、やや形態的には崩れたものとなっている。この他幾つかのピットが見られたが、本住居に伴うものか否か、或いは新旧関係は特定できなかったが、ピット1については入り口遺構または壁構造に関係するものの可能性が考えられる。

H-153号住居（平安時代、第457～458図、図版172～173・193）

概要 本住居はE区中部の北端寄りに位置する、E区に於いては中型のものに属すると思われる竪穴住居跡である。

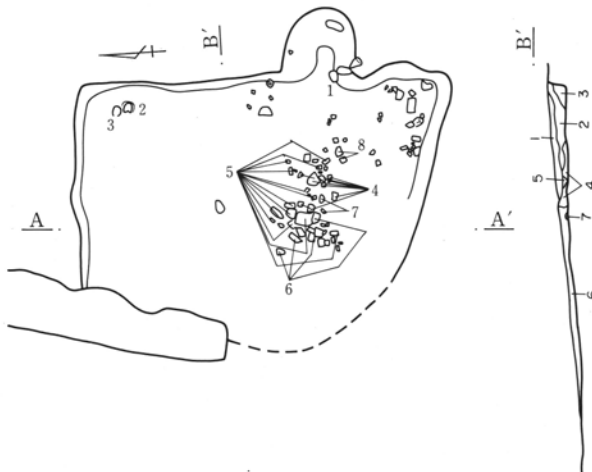
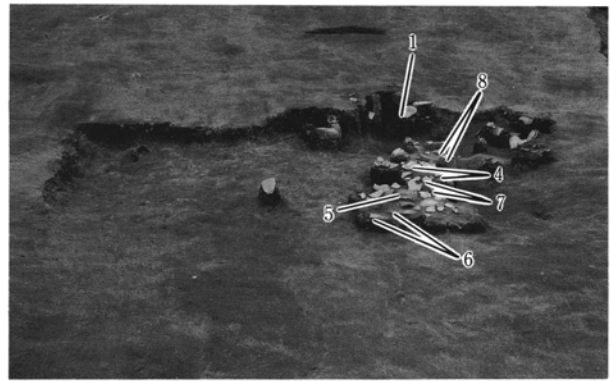
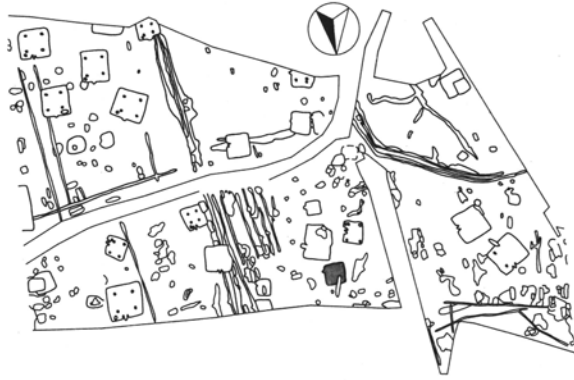
本住居付近は削平が進行しており、本住居もかろうじて確認されたものの住居西部の床面は滅失してしまっているなど、その遺存状況はかなり悪いものであった。更に住居西北部には耕作に関連するものと思われる溝状の土坑が本住居を切っている。

本住居の出土遺物は住居南東寄りの一画と南東コーナー部の一画に集中的に出土している。このうち前者は土坑1～3の土坑群の位置に重なっている。この土坑群は本住居の遺存状況のために誤って掘り方面まで掘削してしまった可能性が考えられる一方、付近の埋土と想定される住居覆土一6層の堆積状況から住居廃絶後の遅くない段階で浅い摺鉢状に掘削された土坑である可能性も想定される。しかし、これらは本住居に伴うと判断された遺物に時期的に合致するので、本住居に伴うものと判断している。

出土遺物で本住居に伴うと判断された遺物は、何れも10世紀前半期の特徴を示す須恵器高台付碗（1～3）である。また掘り方部分に当たると考えられる位置からはやはり10世紀前半期の特徴を示す羽釜（4～7）と須恵器小型甕（8）の出土が見られた。一方、覆土中からは羽釜片を中心に10世紀前半期の須恵器の小型甕（9）と高台付碗（10）の出土が見られた。

以上の所見から本住居は10世紀前半期の所産と判断される。

規模 長軸：409cm 短軸：400cm 深さ：20cm以下
 カマド 幅：93cm以上 奥行：88cm 燃烧部
 径：62×72cm 深さ：21cm カマド掘り方 径：
 46×36cm 深さ：36cm
 土坑1 径：80×68cm 深さ：15cm 土坑2 径：
 108×50cm以上 深さ：10cm 土坑3 径：88×
 108cm以上 深さ：10cm
 貯蔵穴 径：48×33cm 深さ：10cm

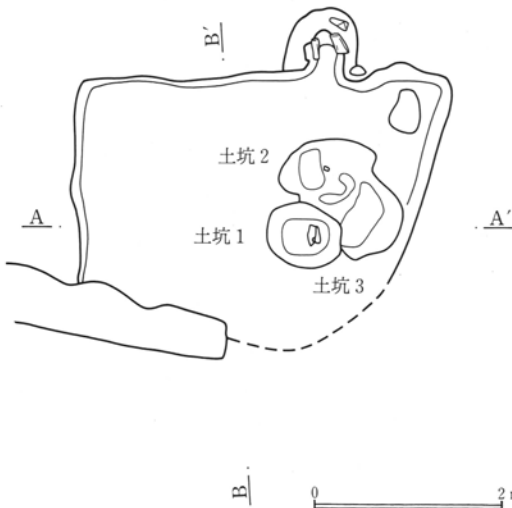
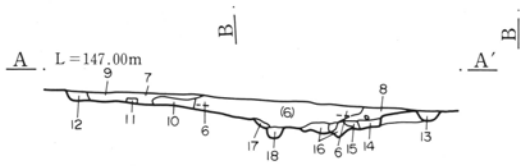


住居覆土

1：暗褐色土主体。ローム薄く含む。 2：暗褐色土主体。 3：暗黄褐色土主体。ローム多く含む。 4：黄褐色土：ローム主体。やや硬質。

住居掘り方覆土

5：暗褐色土主体。ローム僅かに含む。植物の痕跡か。 6：暗黄褐色土主体。ローム含む。 7・12：黄褐色土：ローム主体。 8：暗褐色土：ローム僅かに含む。 9：暗黄褐色土主体・ローム含む。 10：暗褐色土主体。 11：黄褐色土：ローム主体。やや硬質。 13：褐色土主体。ローム含む。 14：黒褐色土：ローム含む。 15：黄褐色土：ローム主体。やや硬質。 16：黄褐色土：ロームまばらに含む。 17：黄褐色土：ローム多く含む、焼土僅かに含む。 18：暗黄褐色土：ローム少量含む。



第457図 H-153号住居

構造 本住居は方形のプランを呈している。

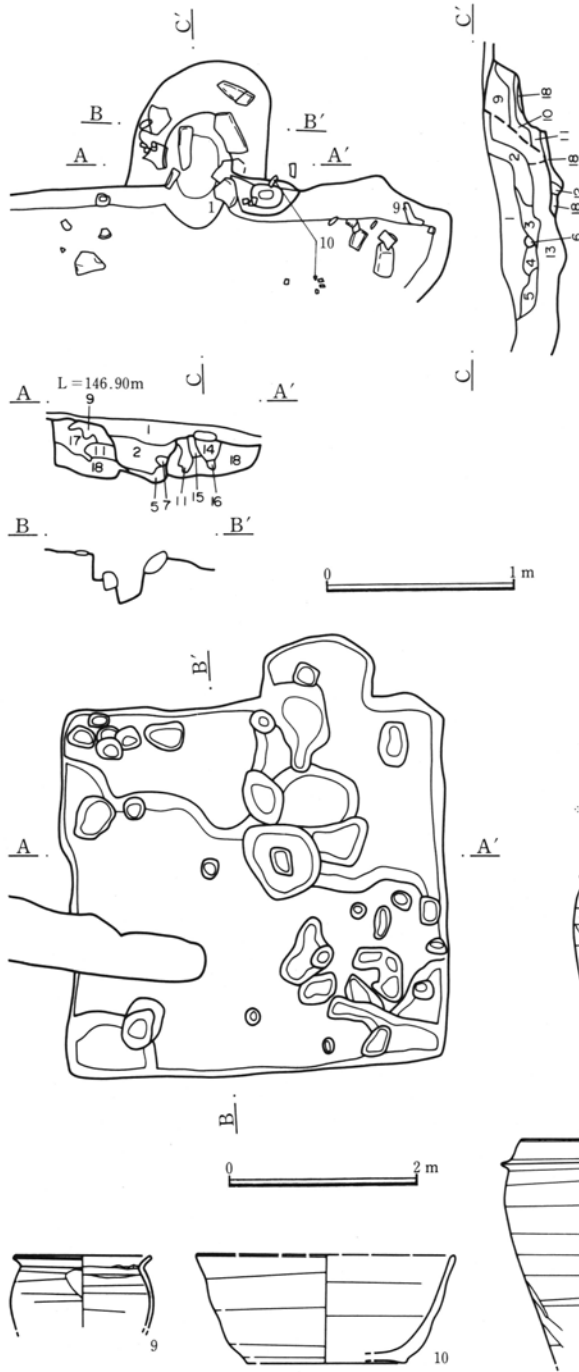
掘り方を有する。掘り方面には北西コーナー部に径87×62cm、深さ13cmを測る土坑状の掘削が見られ

るなど多くの凹凸が見られたが、住居全体に及ぶような構造等は認められなかった。この掘り方を暗黄褐色土等で埋め戻して床面は造り出されている。

カマドは東カマドで東壁南寄りに造られているが遺存状況は悪く、断面観察に於いても燃烧面の特定は不明確であった。カマドは楕円形プランを呈する掘り方を有し、これをローム等の土壤で埋め戻して燃烧面を造る。燃烧部は東壁を跨ぐ位置のやや東寄りに設定されている。その手前側に右側に当たる東壁部分に、隅丸方形を呈する径17×12cm、深さ8cmを測るピットが掘削されており、袖石の抜き取り痕の可能性を考慮している。尚、袖・煙道等の構造も滅失していて確認することはできなかった。

床面に於いては上述の土坑3基が見られた他、柱穴は確認されなかった。尚、貯蔵穴については床面に於いては南東コーナー付近に想定されたものの不明瞭であったが、掘り方面に於いて楕円形プランの遺構として確認している。

第3章 発見された遺構と遺物



カマド覆土・カマド掘り方覆土

- 1：暗褐色土主体。やや硬質。
- 2：暗赤褐色土：焼土多く含む。
- 3・6：黒褐色土主体。やや硬質。
- 4：暗褐色土主体。
- 5：黄褐色土：ローム主体。地山か。
- 7：赤褐色焼土ブロック。
- 9：赤褐色土主体。やや硬質。焼土含む。
- 10：暗褐色土：ローム含む。
- 11：暗赤褐色土：ローム含む。
- 12：赤褐色土：焼土多く含む。
- 13：暗黄褐色土主体。
- 14：赤褐色土：ローム・焼土含む。
- 15：暗黄褐色土主体。ローム含む。
- 16・17：暗褐色土主体。

地山層

- 18：黄褐色ローム。

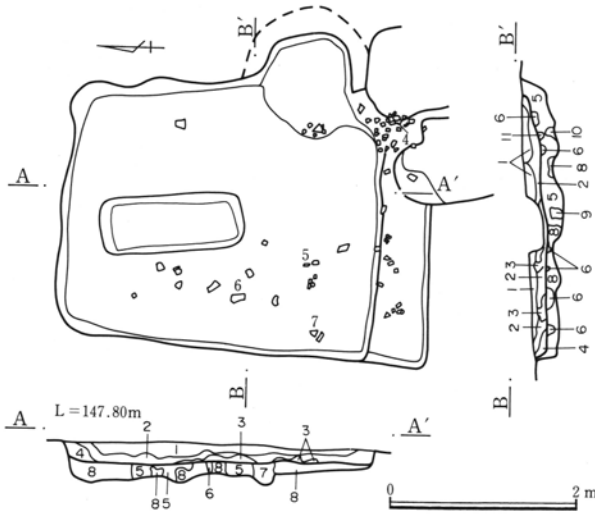
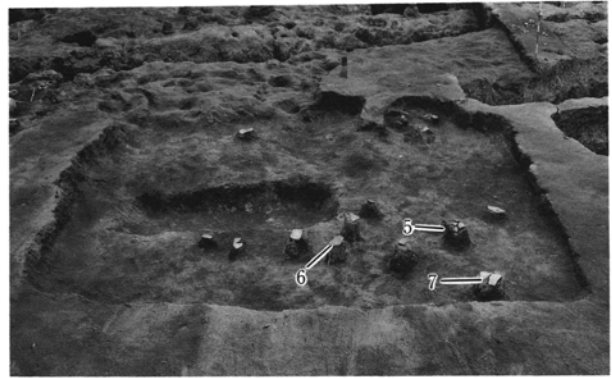
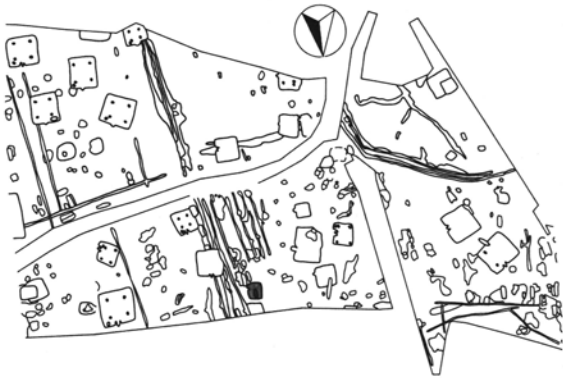
第458図 H-153号住居遺構及び出土遺物

H-154号住居（平安時代、第459～460図、図版173・193～194）

概要 本住居はE区中部の北端寄りに位置する、小型の竪穴住居跡である。

本住居周辺は削平が進行し、また耕作遺構が多かったが、本住居も削平による破壊が進んでおり、加えて住居の東南部及び中北部には耕作による長方形の土坑が掘削されて床面が痛められていた。

本住居の床面は南部に10cm余りを測る段差がある。これについては調査経過から推して建物の縮小、若しくは平行移動による建て替え等のあったものと推定されるが、古い段階と判断される南部のものと新しい段階と判断される中・北部の遺構との間出土遺物による時期差は特に認められなかった。



住居覆土

1：暗褐色土：ロームを僅かに含む。 2：暗黄褐色土主体とし、ローム含む。 3：黄褐色土：ローム主体。ロームブロック含む。部分的に弱い粘性有り。 4：黄褐色ローム。

住居掘り方覆土

5：褐色土を主体とする。 6：暗褐色土主体。植物の痕跡。 7：黒褐色土主体。ややサクサクする。 8：黄褐色土：ローム主体。地山の可能性もあるが下位層に比し軟質。 9：暗黄褐色土主体。ロームブロック含む。やや硬質。 10：黄褐色土：ローム主体。 11：暗黄褐色土：ローム多量に含む。

カマド覆土

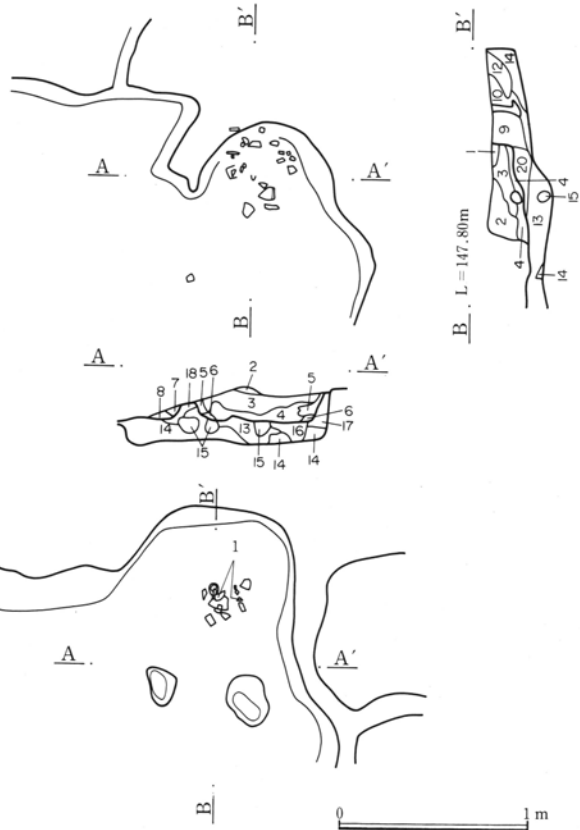
1・4：暗赤褐色土主体。焼土含む。 2・3：暗褐色土焼土。 5・7：暗褐色土主体。 6：暗黄褐色土主体。 8：黄褐色土：ローム主体。

袖構築材

17：暗褐色土主体。 18：暗黄褐色土主体。ローム多く含む。

カマド掘り方覆土

9：黒褐色土：焼土含む。 10：暗黄褐色土主体。 12：黒褐色土主体。焼土含む。 13：暗褐色土主体。焼土含む。 14：黄褐色土：ローム主体。 15・16：暗黄褐色土主体。ローム含む。 20：暗赤褐色土：焼土含む。

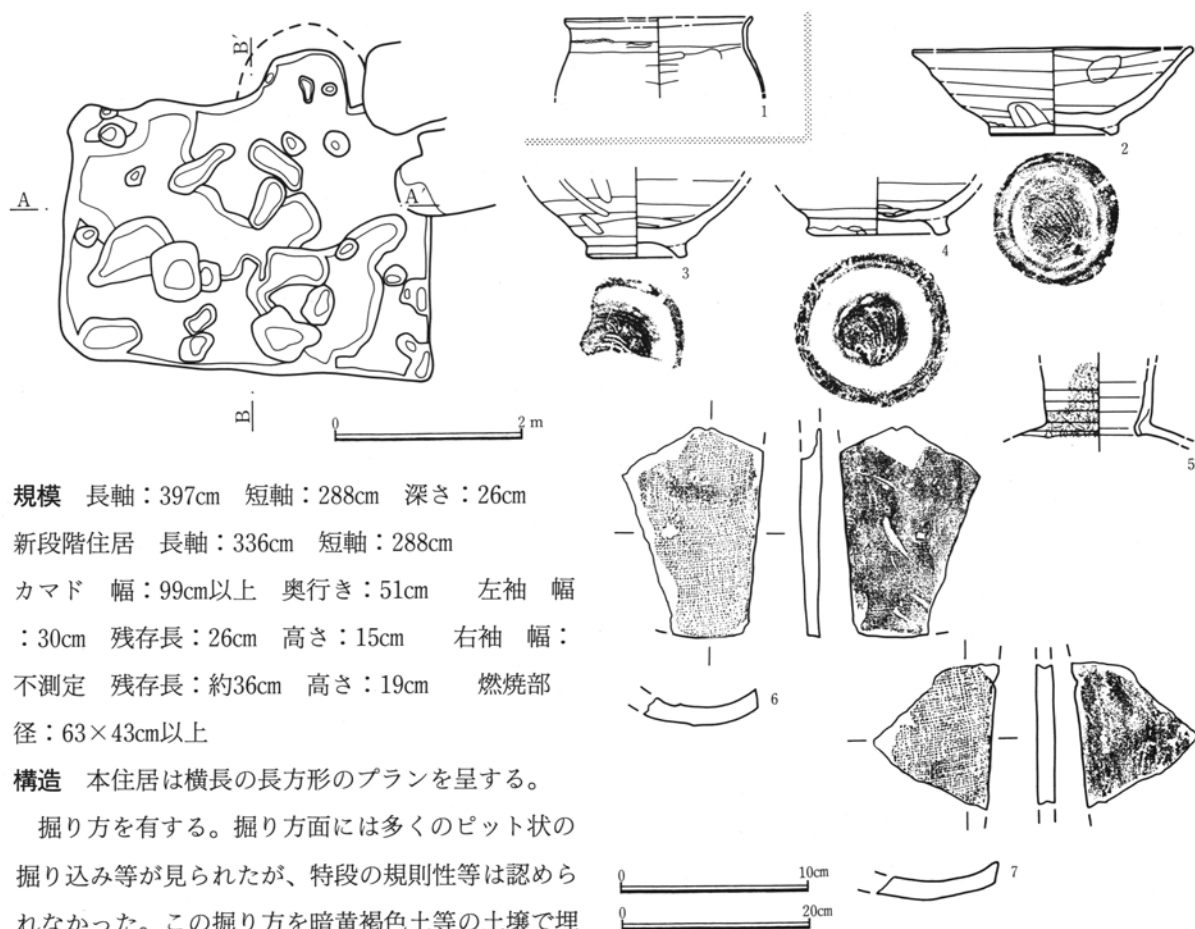


本住居の出土遺物は多くなかったが、その中で本住居に伴うと判断されたのは10世紀前半期の所産と考えられる土師器甕（1）1点のみであった。

一方、覆土中からは10世紀前半期の特徴を示す須恵器高台付碗（2～4）や7世紀後半期のものと思われる須恵器片（5）の他、布目瓦片（女瓦、6,7）などの出土が見られた。

本住居の出土遺物は少なかったが、その時期については10世紀前半期を充てたいと思う。

第459図 H-154号住居及びカマド



規模 長軸：397cm 短軸：288cm 深さ：26cm
 新段階住居 長軸：336cm 短軸：288cm
 カマド 幅：99cm以上 奥行：51cm 左袖 幅：30cm 残存長：26cm 高さ：15cm 右袖 幅：不測定 残存長：約36cm 高さ：19cm 燃烧部径：63×43cm以上

構造 本住居は横長の長方形のプランを呈する。

掘り方を有する。掘り方面には多くのピット状の掘り込み等が見られたが、特段の規則性等は認められなかった。この掘り方を暗黄褐色土等の土壌で埋め戻して床面を造っている。

カマドは東カマドで、東壁の新段階の住居の南東コーナー付近に設置される。カマド手前側が深くなる掘り方を有し、これを焼土を含む黒褐色土等の土壌で埋め戻して燃烧面を造っている。燃烧部は東壁面手前に設定され、その両側に暗褐色土やロームを含む暗褐色土で袖を造り出している。また、カマド掘り方面に於いては燃烧部手前側の左寄りに径21×15cm、深さ5cm、右寄りに径25×22cm、深さ11cmを測るピットが見られたが、これは袖石の抜き取り痕と

第460図 H-154号住居掘り方及び出土遺物

考えられるので、これを考慮すると袖の長さは左側で110cm程、右側で90cm程になり、そのプランは内湾気味になることが想定される。従ってカマドは廃棄に伴って破壊されたものと想定されるが、天井や煙道部に関するデータも得ることはできなかった。

尚、柱穴・貯蔵穴といった構造については、床面に於いても掘り方面に於いても確認することはできなかった。

H-155号住居 (古墳時代後期, 第461~463図, 図版173・194・202)

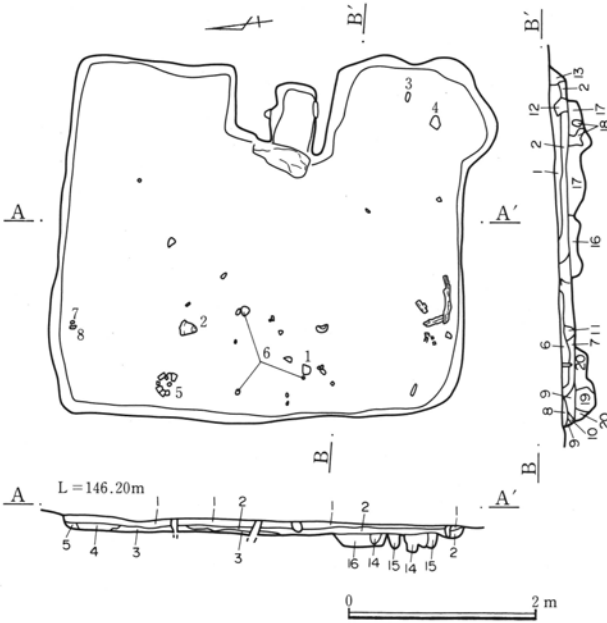
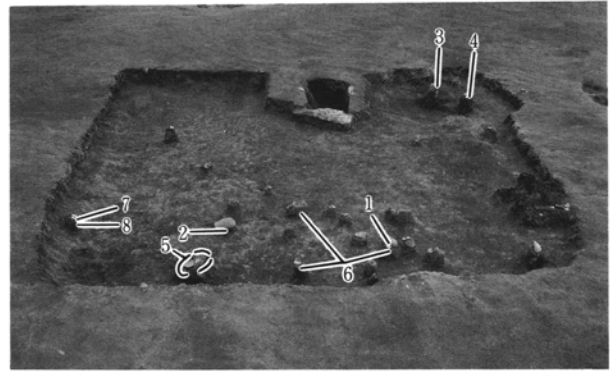
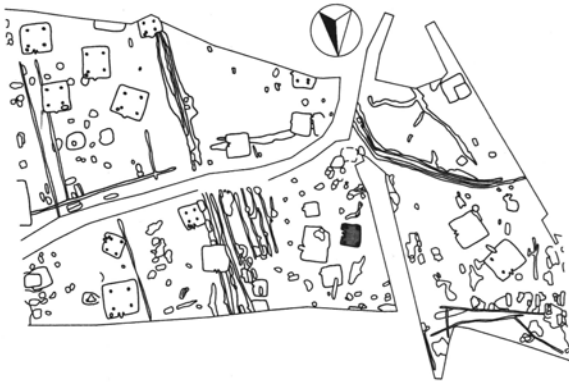
概要 本住居はE区中部北西寄りに位置する小型の竪穴住居跡である。

本住居付近は削平が進行していたが、本住居のカマドや床面は比較的良好な状態で確認された。

本住居に伴うと判断された出土遺物は6世紀後半期の特徴を示す土師器の坏(1)と甗(2)であった。

一方、覆土中の遺物にはやはり6世紀後半期の所産と思われる土師器の坏(3)・高坏(4)・鉢(5)・小型甗(6)が見られた他、2点の石製模造品の勾玉(7, 8)及びこも編み石(9)が見られた。

出土遺物は多くなく、本住居の時期を特定するには充分ではないが、本住居に対しては6世紀後半期



攪乱層

8：黒褐色土主体。As-A含む。

住居覆土

1：暗褐色土主体。ローム少量含む。 2・9：暗褐色土主体。 3：黄褐色土：ローム多く含む。 4・7：暗黄褐色土主体。ローム含む。 5：黄褐色土：ローム主体。 6：暗黄褐色土主体。 10：暗黄褐色土主体。ローム含む。植物の痕跡か。 11：暗褐色土主体。ローム少量含む。植物の痕跡か。 12：暗黄褐色土主体。ローム少量含む。カマドの崩落土か。 13：暗黄褐色土主体。カマドの崩落土か。

住居掘り方覆土

14・18・19：暗褐色土主体。ローム少量含む。 15：暗黄褐色土：ローム含む。 16：黄褐色土：ロームかなり多く含む。 17：暗黄褐色土：ロームまばらに多く含む。 20：暗黄褐色土：ローム多く含む。

[右図、A-A'・C-C'セクション]

カマド覆土

1：暗褐色土：ローム・焼土等多く含む。 2：暗褐色土：ローム・焼土等含む。 3：黒褐色土主体。 4：褐色土：ロームまばらに多く、焼土多く含む。

地山層

5：黄褐色土：ローム主体。

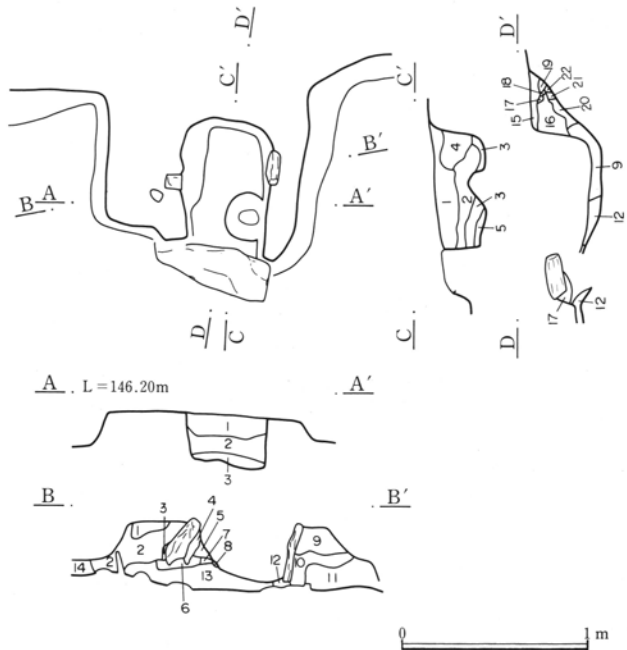
[右図、B-B'・D-D'セクション]

袖構築材

1：褐色土主体。 2：褐色土主体。 3：褐色土主体。焼土含む。 4：暗褐色土主体。 5：赤黄色土主体。焼土含む。 6：暗黄褐色土主体。ローム含む。 7：暗褐色土：焼土多く含む。 8：淡赤色土：焼土主体。 9：暗褐色土主体。 10：黒褐色土主体。

カマド掘り方覆土

11：暗黄褐色土主体。ローム多く含む。 12：黒褐色土主体。 13：黒褐色土主体。ローム・焼土含む。 14：黄褐色土：ローム主体。 15：暗褐色土主体。 16：暗赤褐色土少量。焼土多く含む。 17：暗黄褐色土主体。ローム含む。 18：黄褐色土：ローム・焼土含む。 19：暗赤褐色土主体。 20：暗黄褐色土主体。 21：黄褐色土主体。 22：黒褐色土主体。



—155号住居及びカマド

第3章 発見された遺構と遺物

〔F-F'セクション-1〕

柱穴1覆土

1：暗褐色土主体。ローム少量含む。 2：暗黄褐色土：ローム多く含む。 3：黒褐色土：ローム含む。 4：黄褐色土：ローム主体。遺構外の可能性あり。

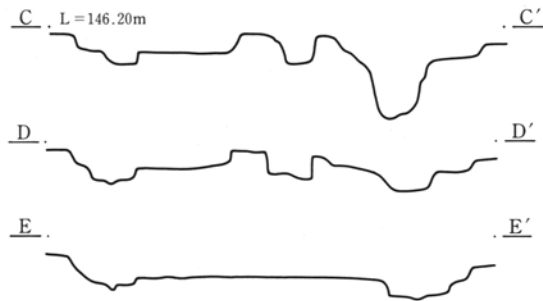
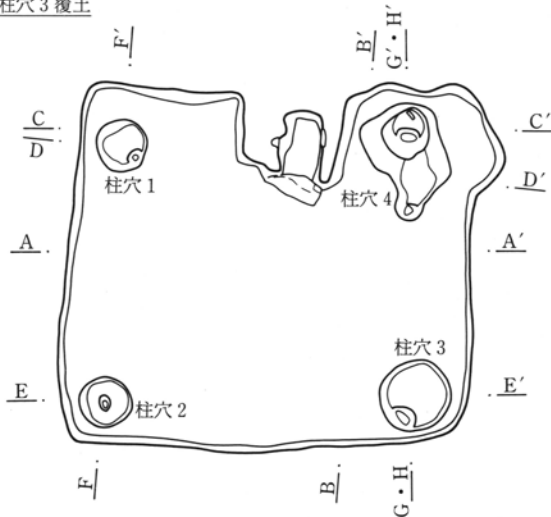
〔F-F'セクション-2〕

柱穴2覆土

1：暗黄褐色土：ローム多く含む。 2：暗褐色土主体。ローム含む。 3：暗黄褐色土：ローム多く含む。

〔G-G'：セクション-1〕

柱穴3覆土



掘り方覆土

15：暗黄褐色土：ローム含む。 16：黄褐色土：ロームかなり多く含む。

床下土坑覆土

21：暗黄褐色土：ローム含む。 22：暗黄褐色土：ローム多く含む。 23：黄褐色土：ロームかなり多く含む。 24：暗褐色土：ロームブロック含む。 25：暗褐色土：ローム少量含む。 26：暗褐色土：ローム多く含む。

1：黄褐色土主体。ローム少量含む。 2：黒褐色土：ローム多く含む。 3：暗黄褐色土：ローム少量含む。 4：褐色土主体。ローム含む。

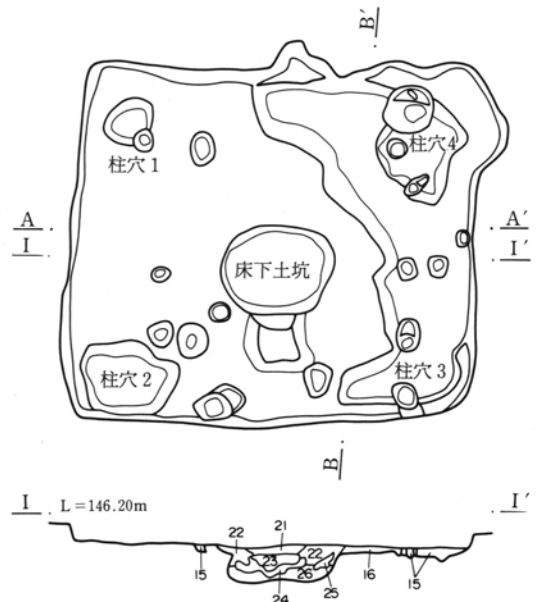
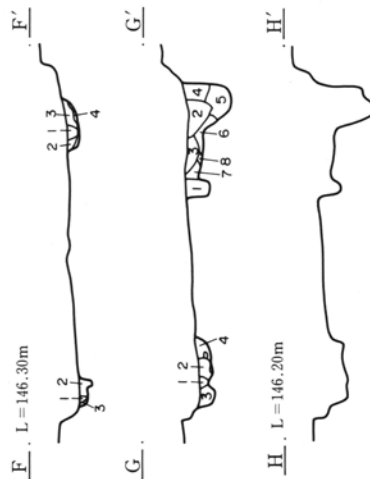
〔G-G'：セクション-1〕

他遺構（ピット）の可能性を持つ覆土

1：黒褐色土：混入物無し。

貯蔵穴・柱穴4覆土

2：暗褐色土主体。ローム少量含む。 3：褐色土主体。ローム少量含む。 4：暗黄褐色土：ローム少量含む。 5：黒褐色土：ロームを少量含む。 6：暗黄褐色土：ローム含む。 7：暗褐色土：色調は黒色強く、ロームを多く含む。 8：黄褐色土：ロームを主体とする。

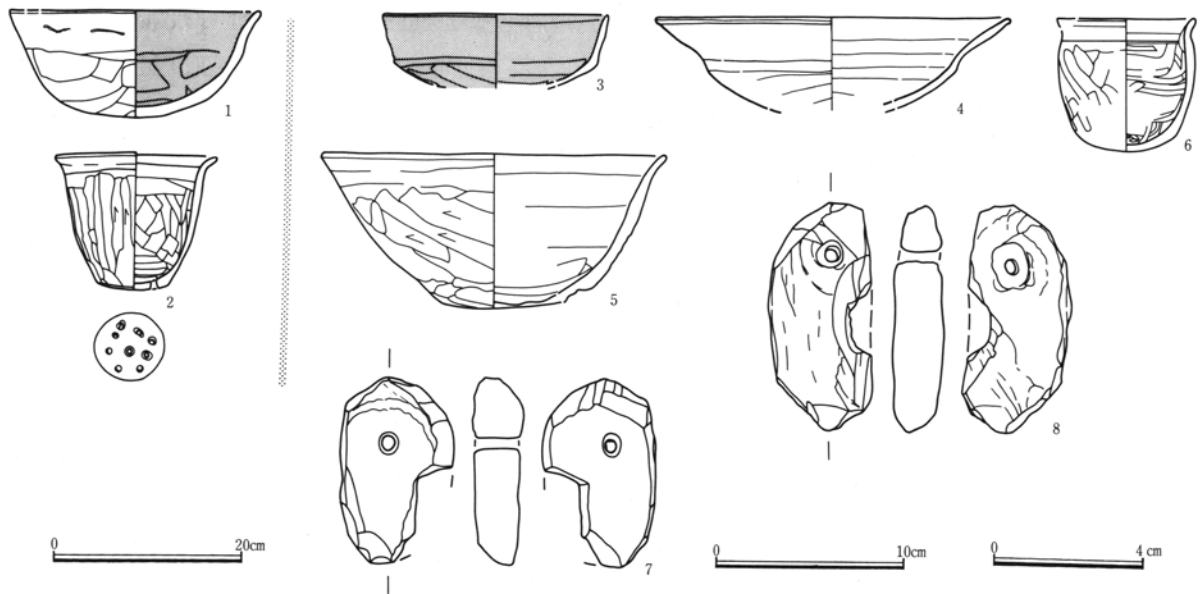


の所産と判断される。また覆土中の遺物の状況から、本住居には少なくとも平安時代頃までその痕跡を留めていた可能性が考慮される。

本住居は焼失家屋と判断されるが、南壁際に出土した炭化材は垂木材と棧ではないかと思われる。



第462図 H-155号住居遺構



第463図 H-155号住居出土遺物

規模 長軸：425cm（張り出し部分を含む長さ：452cm） 短軸：382cm 深さ：381cm

カマド 幅：130cm 奥行：93cm 左袖 幅：60cm 長さ：76cm 高さ：28cm 右袖 幅：37cm 長さ：約95cm 高さ：26cm 燃烧部 径：37×72cm 深さ：8cm

柱穴1 径：56×55cm（掘り方面に於ける径：51×49cm） 深さ：17cm **柱穴2** 径：54×51cm（掘り方面に於ける径：102×82cm） 深さ：12cm

柱穴3 径：77×73cm（掘り方面に於ける径：132×63cm以上） 深さ：18cm **柱穴4** 径：63×44cm以上（掘り方面に於ける径：102×92cm）

深さ：20cm

貯蔵穴 径：87×69cm以上 深さ：70cm

床下土坑 径：121×98cm 深さ：35cm

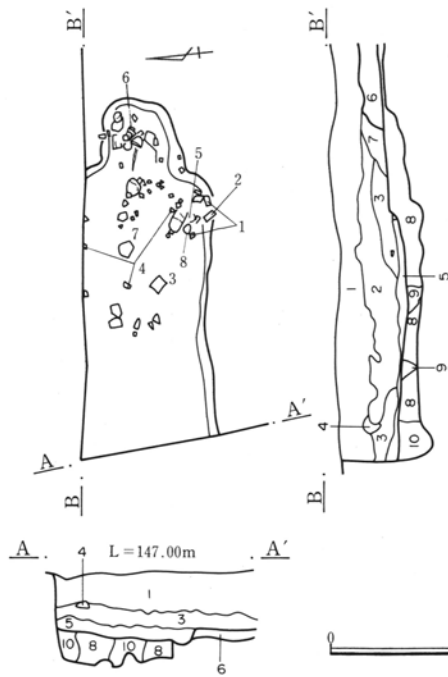
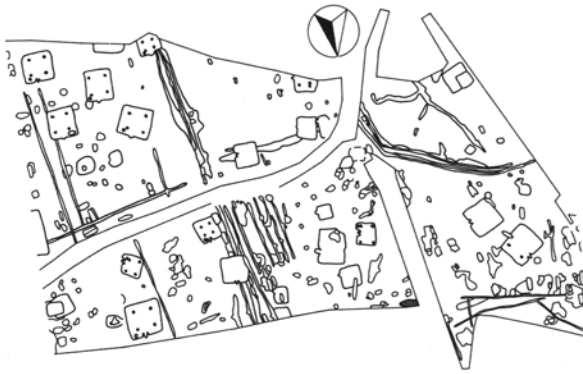
構造 本住居は横長の、やや隅丸の長方形のプランを本体部分とし、南東コーナーが幅121cmで、南東方向に向かって50cm程突出する張り出し部を有する。

掘り方を有し、掘り方面には南西部で幅12cm、北東部で幅21cmのテラスを伴う幅32～130cm、深さ9cm以下の周溝状の掘り込みが東壁南半部から南壁・南西コーナーにかけての壁際に掘削されている。また、住居中西部にはロームを含む暗黄褐色土等を充填し

た床下土坑が掘削されている。床面はこうした掘り方を、暗黄褐色土等の土壌で埋め戻して造られる。

カマドは東カマドで、東壁中央やや南寄りに造られている。掘り方を有し、これを焼土を含む黒褐色土等で埋め戻して燃烧面を造る。燃烧部は東壁手前側に設定され、その両側に平行に配置する袖を焼土を含む暗褐色土等の土壌で造っている。袖先端の燃烧面側には礫を立てた袖石が見られ、その上に板状の礫を用いた天井石が渡された状態のままで出土した。煙道は確認されなかったが、奥壁が住居の東壁ラインより23cm余り内側にあるので、H-132号住居のカマドと同様の形態を有するものと思慮される。

床面に於いては柱穴4基と貯蔵穴1基を確認した。このうち柱穴は何れも径は大きい掘り込みの浅いものであった。柱材の径は特定できなかったが、断面観察から20cm程と推定される。また、柱穴は掘り方面に於いては更に径の大きなものとして確認されたので、数回の掘り直しのあったことが窺われる。一方、貯蔵穴は柱穴様の形態を呈し、カマド右側に掘削されるが、これを包むように南東コーナーの張り出し部が掘削されている。尚、柱穴4と貯蔵穴は近接するが、断面観察等からも明確に分離することはできず、一括して掘削されたものと思慮される。



現耕作土等

1：暗褐色土：As-A混入。 4：暗褐色土：As-A多量に含む。

住居覆土

2・3：黒色土：殆ど夾雑物含まない。 5：褐色土：黒色土少量混入。 7：暗褐色土：褐色土と黒色土の混土。

住居掘り方覆土

8：黄褐色土：ローム主体。 9：褐色土：8層土と5層土の混土。 10：褐色土：ローム多く含む。

地山層

6：褐色土：ローム漸移層土。

[A-A'・B-B'セクション]

カマド覆土

1：暗褐色土／2：暗赤褐色土／5：黒褐色土：焼土少量含む。
3：赤褐色土：焼土主体。 4：暗褐色土：焼土・ローム焼土含む。
6：黒褐色土：ロームまばらに含む。 8：暗褐色土：焼土僅か。

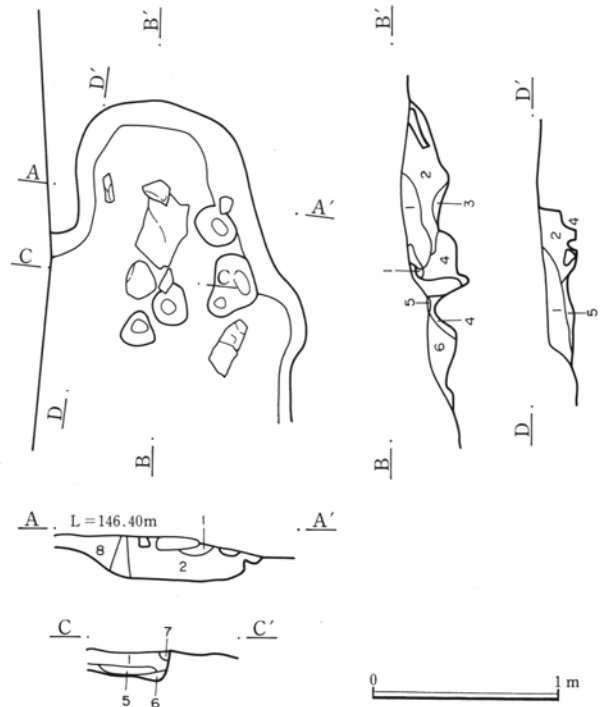
[C-C'・D-D'セクション]

カマド（左袖付近）覆土

1：暗褐色土主体。 2：暗褐色土：焼土僅かに含む。赤色掛かる。
5：暗黄褐色土：ロームまばらに含む。 6：暗黄褐色土：焼土・ローム少量含む。 7：暗褐色土：焼土含む。赤色掛かる。

地山層

4：黄色ローム。



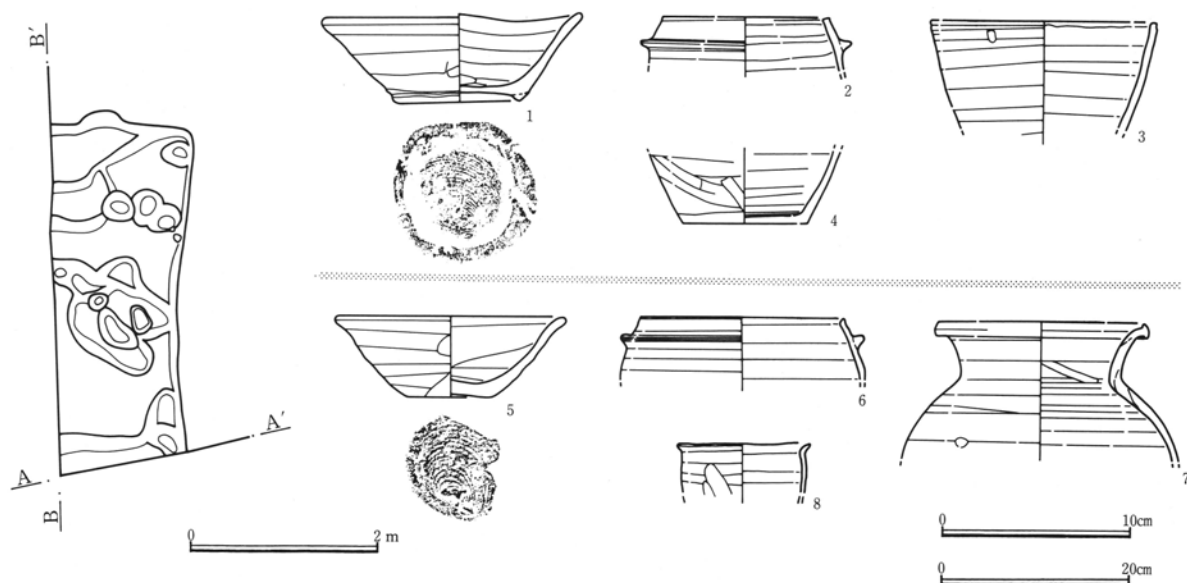
第464図 H-156号住居及びカマド

H-156号住居（平安時代、第464～465図、図版173～174・194）

概要 本住居はE区北西部の北端に位置する竪穴住居跡である。

そのほとんどの部分は路線外にてあり、西の部

分は農道に切られていて、調査することができたのは南端部の東側の一画だけであった。更に削平も進行して遺存状況は決して良好な状態ではなかった。



第465図 H-156号住居掘り方及び出土遺物

出土遺物はさして多くなかったがその多くは南東コーナー付近に集中して出土している。この中で本住居に伴うと判断された遺物には、何れも10世紀前半期の所産と考えられる須恵器の高台付碗（1）や甕（3）、及び羽釜（2, 4）が見られた。

一方、覆土中からは平安時代の須恵器杯・碗類や羽釜等を中心とした遺物の出土を見たが、やはり10世紀前半期のもと思われる須恵器の碗（5）・甕（7）・小型甕（8）や羽釜（6）が見られた。

これらの遺物から、本住居は10世紀前半期の所産と考えられ、住居廃絶後早い段階に遺物の投棄の行われたことが窺われる。

尚、カマドは完全に壊されており、廃絶に伴う破却のあつことが窺われる。

規模 残存長：315cm 残存幅：140cm 深さ：9cm

カマド 残存幅：133cm 残存奥行き：112cm

燃焼部 径：84×77cm以上

構造 上述のように本住居の多くの部分は路線外等に在って調査できたのは一部であるため、その全体的状況はつまびらかでないが、本住居は方形のプランを呈するものと思慮される。

掘り方を有し、掘り方面には凹凸が見られたが全体に及ぶような構造は見られなかった。床面は掘り方をロームや褐色土等で埋め戻し造られている。

カマドは東カマドで南東コーナー付近に造られる。掘り方を有するようで、これを暗褐色土等で埋め戻して燃焼面を造るようである。上述のように完全に破壊されていたため上位の遺構の状況は明らかにできなかったが、燃焼面は東壁を跨ぐような位置に設定されるようである。付近に出土した礫から、本住居のカマドは袖石を持ち、板状の礫を天井石として使用していたことが窺われる。

尚、床面に於いても掘り方面に於いても、柱穴・貯蔵穴・周溝等の施設・遺構は確認されなかった。

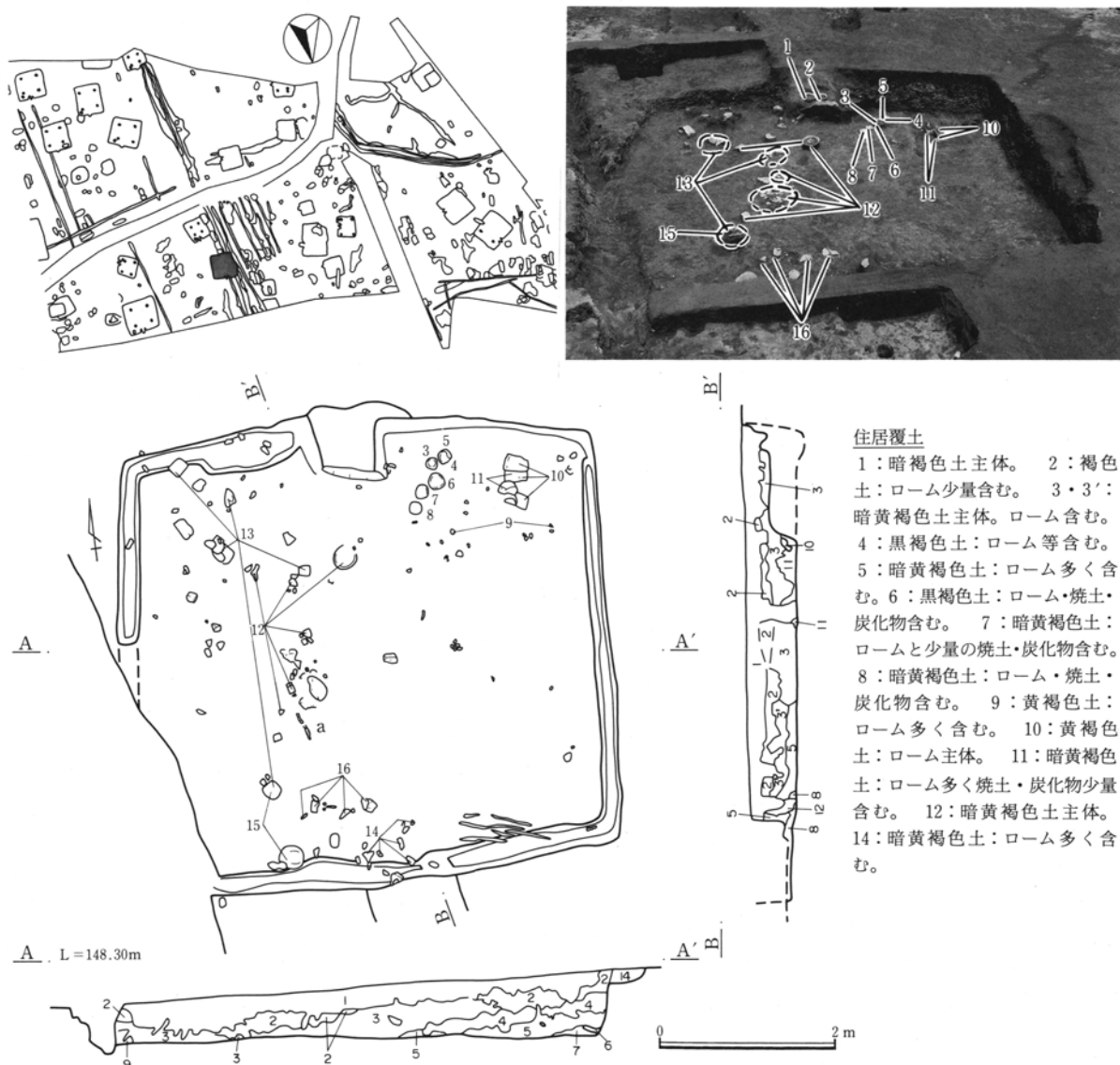
H-157号住居（古墳時代後期、第466～470図、図版174・195～196・203）

概要 本住居はE区中部の北寄りに位置する、E区に於いては中規模のものに属する竪穴住居である。

本住居は南西部で18号溝に大きく切られているが、これを除く部分の遺存状況は良好で、特にカマドは土師器甕（1, 2）がかけられた状態で出土し、

天井部の構造も残されるなど、やや潰れているもののほぼ完形に近い状態で確認することができた。

出土遺物のうち本住居に伴うと判断された遺物には、上述の土師器甕2点を含め6世紀後半期の特徴を示すものを中心とする土師器の坏（3, 4, 5



第466図 H-157号住居

～9) や甗 (10)・胴張甗 (12,14) や7世紀前半期の土師器甗 (13,16) や、古墳時代後期の異形の土師器小型甗 (11) や土師器胴張甗 (15) がある。

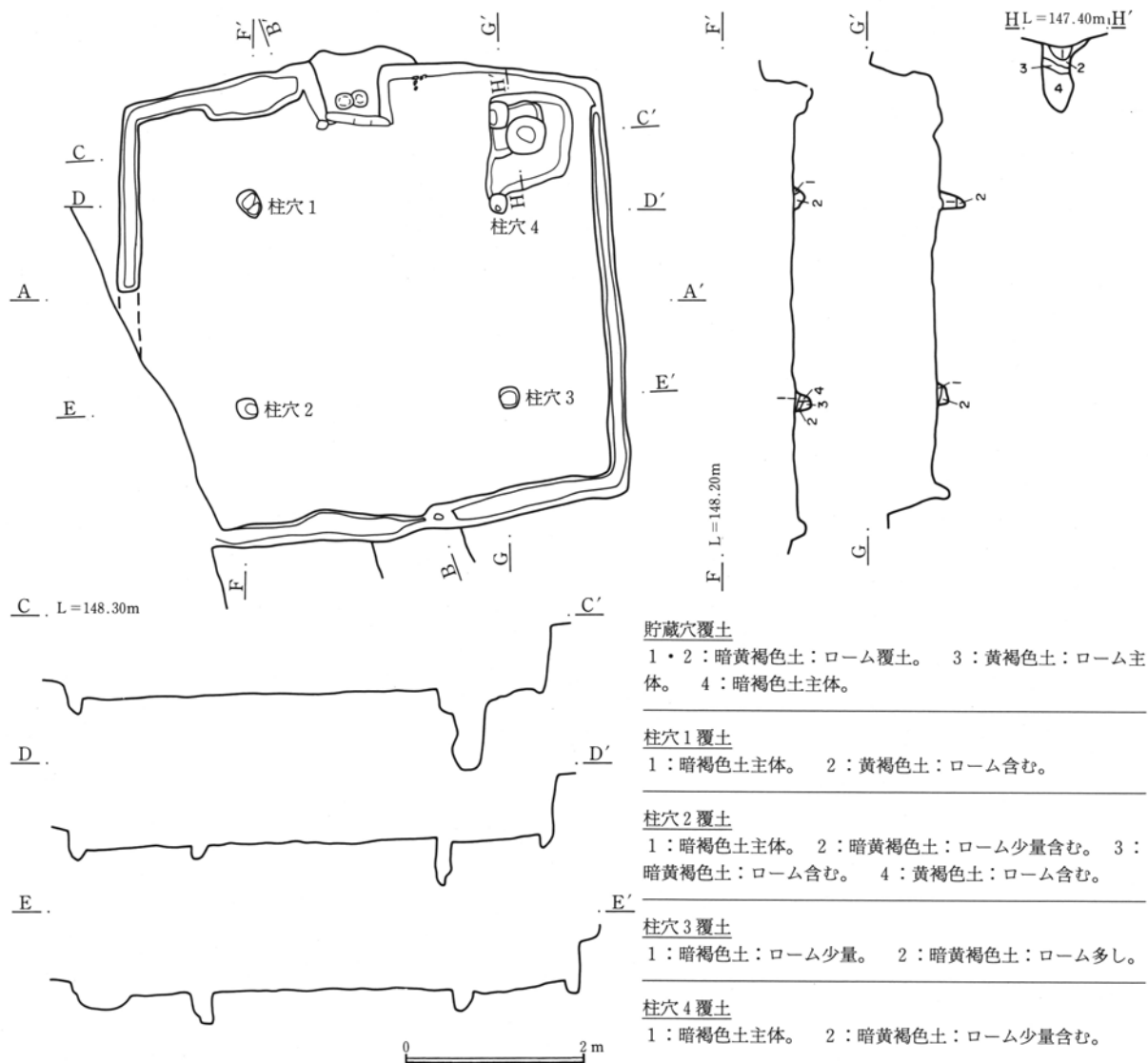
一方、覆土中からは古墳時代後期以降の土師器甗片を中心に、6世紀後半期の土師器坏 (17) やこも編み石 (18～20) や磨石 (21) などが見られた。

以上の点から本住居は6世紀後半期の所産と考えられ、また覆土中の遺物から少なくとも平安時代頃までその痕跡を留めていたことが窺われるのである。

本住居は焼失家屋である。出土炭化材のうちカマド周辺と南壁際東部に見られた炭化材は垂木材と考

えられるが、一般的な焼失家屋と異なり南壁に対し西方に横倒しになるような状態で出土している。これは通常の状態ではなく、意図的に西側に引き倒されたものと思われる。また、住居中央やや西寄りのaとした炭化材は位置的に北西の柱穴1の柱材の転倒したものか、棟材ではないかと思慮される。

規模 長軸: 561cm 短軸: 538cm 深さ: 70cm
カマド 幅: 102cm 奥行き: 115cm 高さ: 59cm
左袖 幅: 40cm 長さ: 78cm 右袖 幅: 12cm
 長さ: 70cm 焚き口部 幅: 50cm 高さ: 27cm
燃焼部 径: 56×40cm 高さ: 28cm 掛け口 径



第467図 H-157号住居遺構

：47×23cm 天井部 厚み：19cm 煙道 径：
 12×11cm 長さ：86cm カマド掘り方 径：72×
 60cm 深さ：12cm以上

柱穴1 径：30×22cm (掘り方面に於ける径：40×
 37cm) 深さ：36cm 柱穴2 径：25×24cm 深
 さ：36cm 柱穴3 径：24×23cm (掘り方面に於
 ける径：36×36cm) 深さ：42cm 柱穴4 径：
 21×18cm 深さ：48cm

貯蔵穴 上位構造 径：108×94cm 深さ：10cm

下位構造 径：44×42cm 深さ：86cm

周溝 幅：10～42cm 深さ：18cm

床下土坑1 径：144×132cm 深さ：21cm

床下土坑2 径：78×74cm 深さ：15cm

ピット1 径：41×36cm 深さ：35cm ピット2

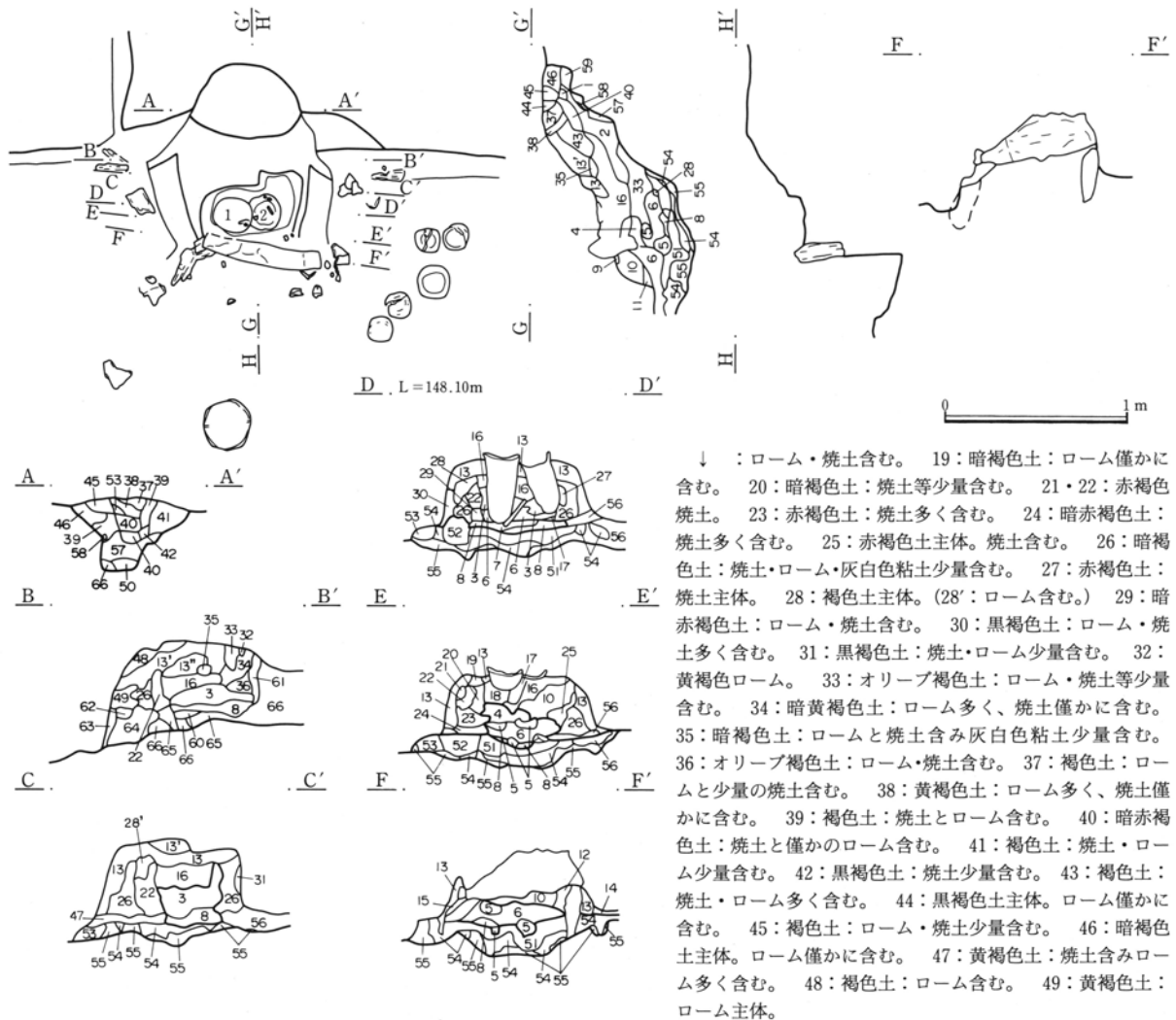
径：33×32cm 深さ：27cm ピット3 径：41×

40cm 深さ：34cm ピット4 径：31×29cm 深

さ：53cm ピット5 径：41×34cm 深さ：53cm

構造 本住居は方形のプランを呈し、掘り方を持つ。
 掘り方面中央にはローム・焼土・灰色粘土等を含む
 黄褐色土等の土壌で充填する床下土坑が掘削され、
 多くのピットの掘削が認められたが、住居全面に及
 ぶような掘削や構造は認められなかった。床面はこ
 うした掘り方をロームや黒褐色土で埋め戻して造
 り、一部に暗褐色土等による貼り床を施している。

第3章 発見された遺構と遺物



カマド覆土

1: 黒褐色土主体。 2: 黒褐色土: 焼土少量含む。 3: 暗赤褐色土主体。焼土多く含み灰白色粘土僅かに含む。 4: 暗赤褐色土: 焼土・ローム少量、灰白色粘土まばらに含む。 5: 赤褐色焼土。 6: 暗褐色土: 焼土含む。 7: 暗黄褐色土: 6層土と8層土の混土。 8: 暗赤褐色土: 焼土多くローム少量含む。

袖及び天井構築材

9: 暗褐色土: ローム少量含む。 10: 暗黄褐色土: ロームと少量の焼土含む。 11: 暗褐色土: 焼土少量含む。 12: 暗褐色土: 10層に似る。 13: 褐色土: ローム・焼土等を少量含む。(13'・13'': ロームかなり多く含む) 14: 黄色土: ローム主体。 15: 黄褐色土主体。ローム含む。 16: オリーブ褐色土: ロームと僅かの焼土含む。 17: 暗褐色土主体。ローム僅かに含む。 18: 暗赤褐色土 ↑

カマド掘り方覆土

50: 黄褐色土: ローム主体。焼土僅かに含む。 51: 暗黄褐色土: ローム・焼土を含む。 52: 暗褐色土: 焼土等含む。 53: 暗褐色土: ローム等少量含む。 54: 黄褐色土: ロームを多く、焼土を少量含む。 55: 黄褐色土: ローム主体。 56: 暗黄褐色土: 焼土・ローム含む。 57: 黄褐色土: ローム主体。焼土少量含む。 58: 黄褐色ローム。左上面焼土化。 60: 暗赤褐色土: 65層と同じだが焼土多く含む。 61: 暗黄褐色土: 34・36・66層土の混土。 62: 褐色土: ローム・焼土・炭化物少量含む。 63: 黒褐色土: ローム・焼土・炭化物多く含む。 64: 黒褐色土: ローム多く焼土少量含む。 65: 黄褐色土: ローム主体。焼土・黒色土含む。

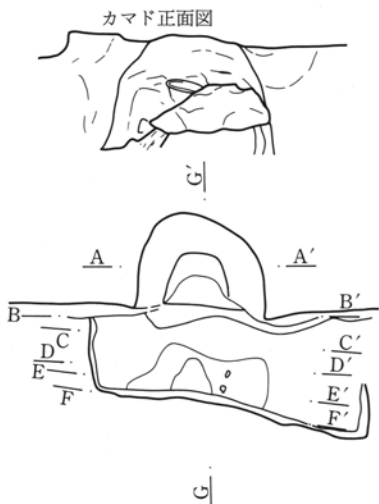
地山層

59: 暗黄褐色ローム。 66: 黄褐色土ローム。

第468図 H-157号住居カマド

カマドは北カマドで北壁中央付近に造られる。掘り方を有し、これを焼土を含むローム等の土壌で埋め戻して燃焼面や煙道の底面を形成する。燃焼部は北壁より手前側に在り、その両側手前に礫を立てた袖石を配し、板状の礫を渡して天井石として焚き口部の骨組みとしている。そしてその背面から奥壁に

かけて焼土を含む褐色土やローム等の土壌で袖・天井を一体で造っている。煙道は燃焼面奥壁より急傾斜で立ち上げるが、上位底面側では北壁を削っているものの、全体としては掘り方埋土や天井・袖の構築材に一体構造として造られている。また、天井部上面には孔を開け、土師器甕を並列に2基差し込む



貼り床

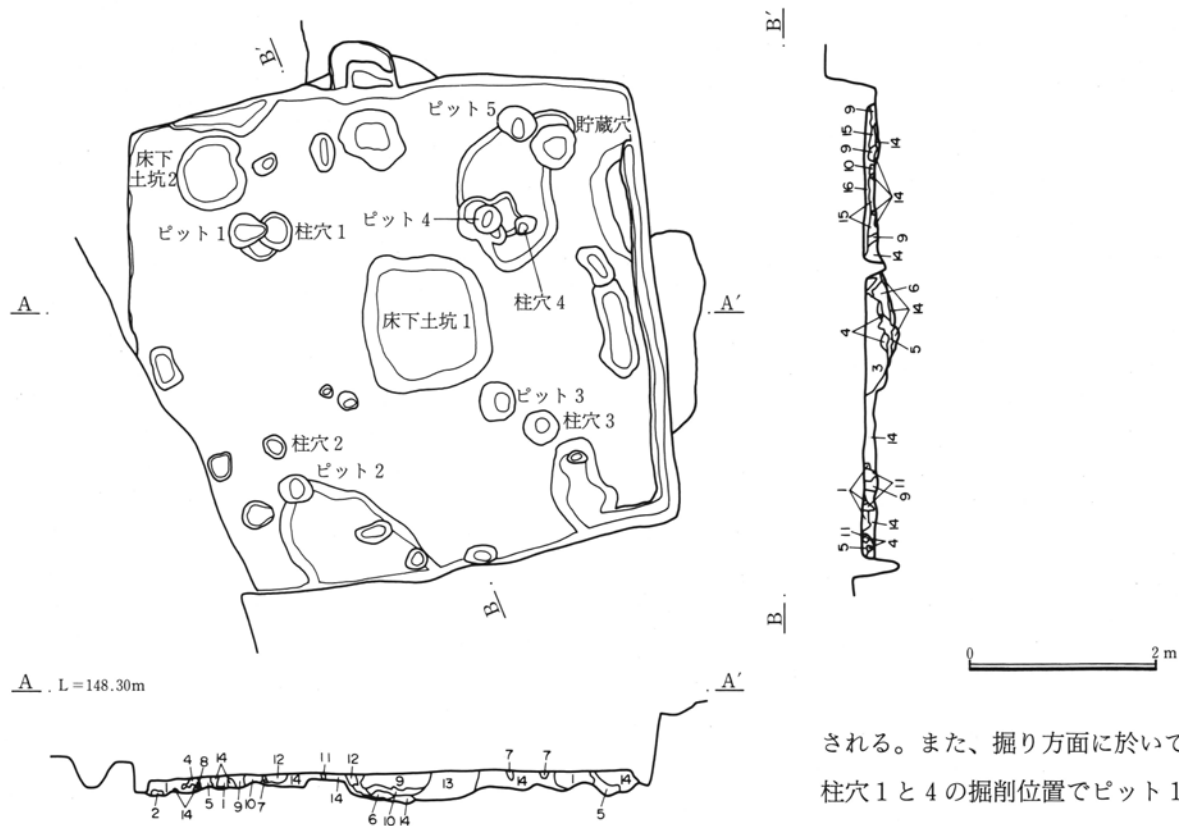
16：暗褐色土：ローム・焼土・炭化物を含む。

床下土坑覆土

3：オリーブ褐色土：ローム等含む。 4：黄褐色土主体。 5：黒褐色土主体。ローム・焼土・灰色粘土含む。 6：黄褐色土焼土。ローム多く含む。 7：黄褐色土：ロームを含む。

住居掘り方覆土

1：オリーブ褐色土：ローム等含む。 2：黒褐色土主体。ローム僅かに含む。植物の痕跡の可能性あり。 8：暗褐色土主体。 9：暗黄褐色土主体。ローム多く含む。 10：黄褐色土主体。ロームをかなり多く含む。 11：黒褐色土主体。植物の痕跡。 12：黄褐色土：ローム主体。 13：オリーブ褐色土主体。ローム少量含む。 14：黄褐色土：ローム主体。地山か。 15：黄褐色土：ローム主体。 16：暗褐色土：ローム・焼土・炭化物含む。



第469図 H-157号住居カマド及び掘り方

が、天井構築材を以て固定しているようである。

床面では柱穴4基と貯蔵穴1基を確認した。このうち柱穴の径は小さく、特に柱穴1と3では掘り方面での径が床面のそれより大きいことから、掘り方面のものが柱穴で、床面のそれは柱痕であり、柱を立てた後床を貼ったものと判断される。柱の径は、床面の柱穴の径などから20cm内外あったものと推定

される。また、掘り方面に於いては柱穴1と4の掘削位置でピット1或いはピット4を含む複数のピットの重複が見られ、柱穴2と3の掘削位置付近にもピット2・3などのピット

の掘削が認められたため、柱の建て替えが想定される。一方、貯蔵穴はカマド右側の北東コーナー付近に掘削されている。貯蔵穴は北西部で掘り過ぎているが、方形の大きな土坑状の浅い掘削の上位構造の部分と、その中央やや北西寄りに柱穴様の形態で掘削される深い掘り方の下位構造の部分とに分けられる。貯蔵穴本体は下位構造部で、上位構造へは蓋



第470図 H-157号住居出土遺物

等の設置が想定される。また、掘り方面では貯蔵穴下位構造部分の北西に近接してピット5が掘削されており、北西コーナー付近には床下土坑2が掘削されるが、これらには位置的に貯蔵穴として使用された可能性が考えられる。尚、カマド以東の北壁際を除く壁際には周溝が廻っていた。

H-158号住居（平安時代、第471～472図、図版174・196）

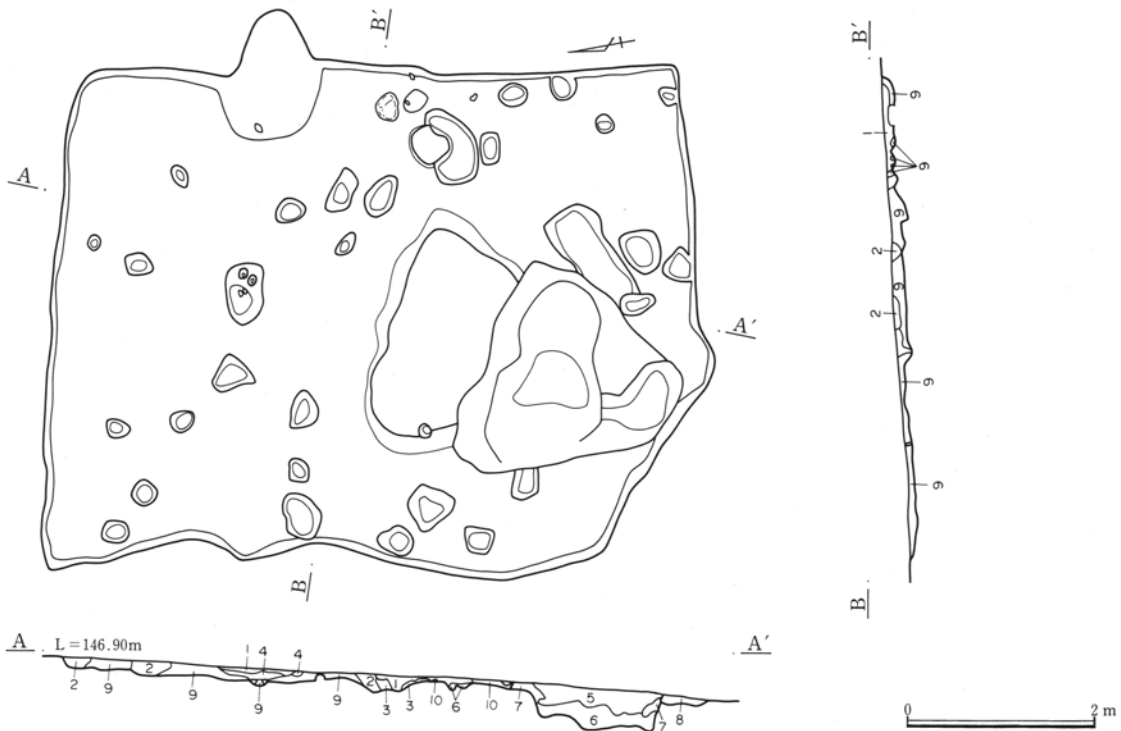
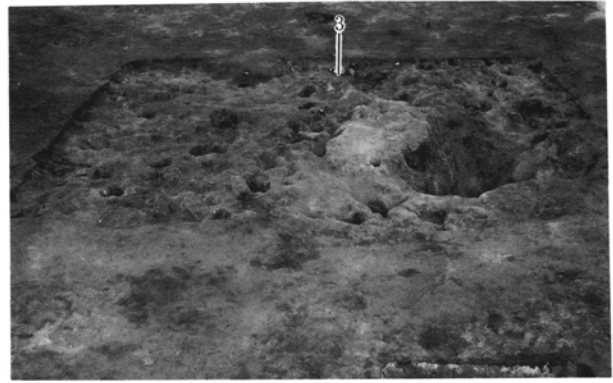
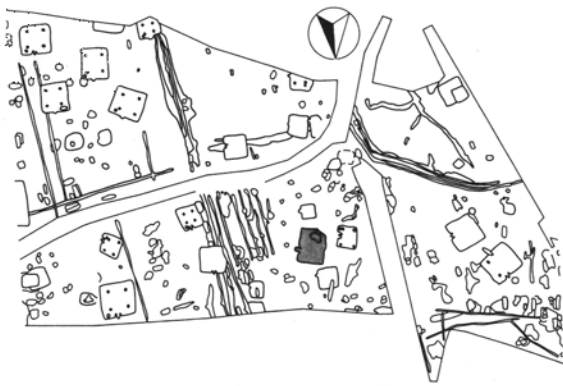
概要 本住居はE区中部北西寄りに位置するE区に於いては中～大型のものに属する竪穴住居跡である。

本住居付近は削平が進行し、本住居も殆どは掘り方面を確認できたに過ぎなかった。また、住居南部に於いては風倒木痕が在ってこれに切られている。

出土遺物は少なかったが、カマド周辺を中心に若

干のものが出土している。これらは何れも本住居との関係特定できなかつたが、平安時代の須恵器坏・碗を中心に9世紀後半期の特徴を示す須恵器高台付き碗(1)や布目瓦の女瓦(2,3)などが見られた。

従って本住居の時期は明確には特定できなかつたが、凡そ9世紀後半頃の所産といふことができよう。



住居（掘り方）覆土

1：暗褐色土主体。ローム少量含む。 2：暗黄褐色土少量。ローム含む。 3：黄褐色土主体。ロームを多く含む。 4：褐色土主体。粘質土を主体にローム僅かに含む。やや硬質。貼り床の一部か。 8：暗黄褐色土主体。白色・黄色粒を多く含む。ローム含む。 9：黄褐色土：ローム主体。

風倒木覆土

5：褐色土締めあり。 6：暗褐色土主体。下位で色調暗く、ローム少量含む。 7：暗黄褐色土。白色・黄色粒多く、ローム僅かに含む。

地山層

10：良く締まったローム層。

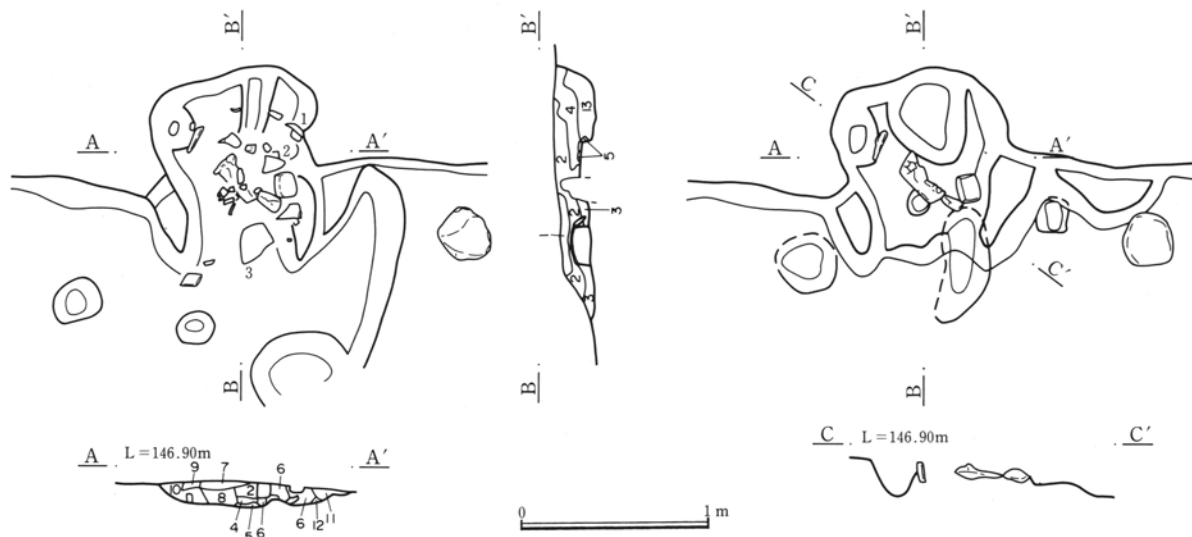
第471図 H-158号住居

規模 長軸：689cm 短軸：530cm 深さ：8cm
カマド 幅：125cm 奥行き：110cm 左袖 幅：29cm 長さ：43cm 高さ：7cm 右袖 幅：37cm 長さ：60cm 高さ：6cm 燃烧部 径：69×94cm
構造 本住居のプランについては、南西コーナー付近を含む西壁のラインが乱れるものの、基本的には横長の長方形プランを呈するものと思慮される。

本住居は掘り方を有し、掘り方面には深さ25cm以下のピットが多く見られたが、住居全体に亘るような特段の構造等を確認することはできなかった。

カマドは東カマドで東壁北寄りに設置されている。掘り方を有し、これをローム等で埋め戻して燃烧面を造っている。燃烧部は東壁を跨ぐ位置に設定されており、壁面より手前側の燃烧部両側に内湾気

第3章 発見された遺構と遺物



攪乱

1：暗褐色土：炭化物等含む。近年の攪乱。

カマド覆土

2：暗赤褐色土：焼土含む。 4：赤褐色土：焼土多く含む。 6：暗褐色土：焼土等少量含む。 7：暗褐色土：焼土等僅かに含む。やや硬質。 9：暗褐色土主体。 11：暗褐色土：As-YP含む。 12：黄褐色土：ローム主体。

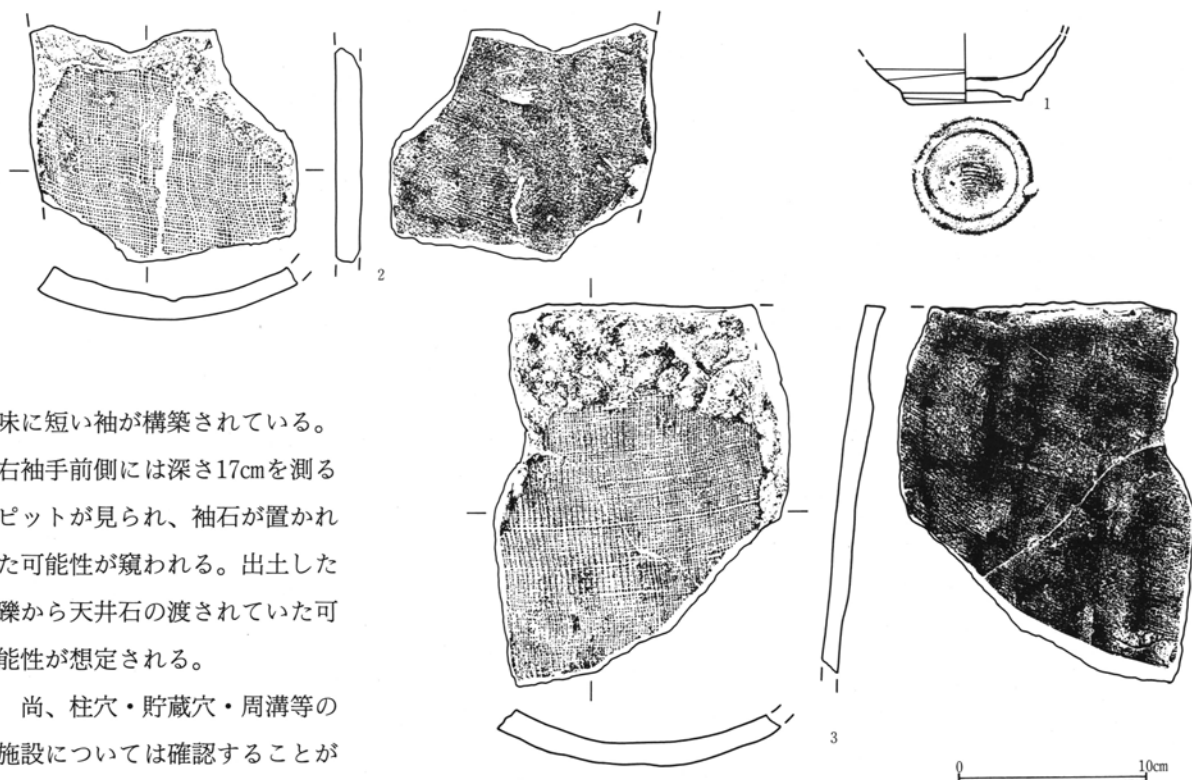
袖構築材

8：黄褐色土：ローム多く含む、焼土等少量含む。袖構築材か。

10：暗黄褐色土：As-YP含む、ローム多く含む。袖構築材。

カマド（掘り方）覆土

3：暗赤褐色土：焼土・ローム・As-YP少量含む。 5：褐色土：As-YP含む、ローム多く含む。 13：暗黄褐色土：ローム・焼土含む。



味に短い袖が構築されている。右袖手前側には深さ17cmを測るピットが見られ、袖石が置かれた可能性が窺われる。出土した礫から天井石の渡されていた可能性が想定される。

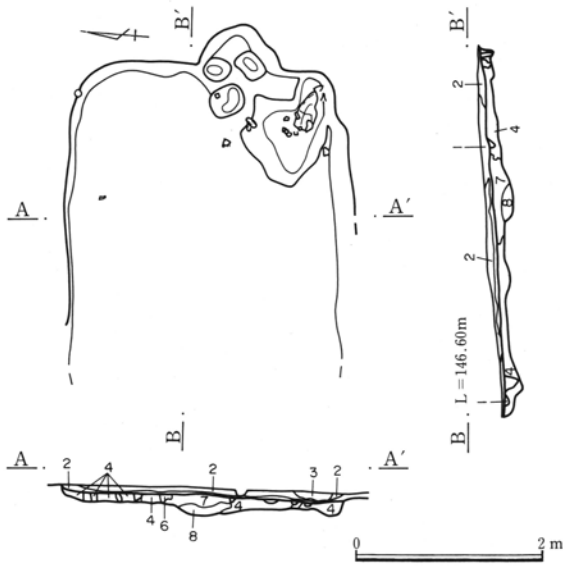
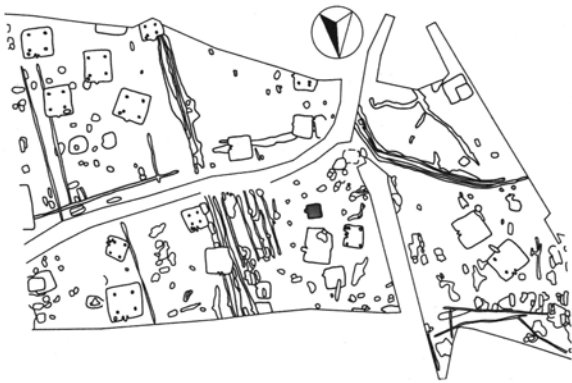
尚、柱穴・貯蔵穴・周溝等の施設については確認することができなかった。

第472図 H-158号住居カマド及び出土遺物

H-159号住居（平安時代、第473～474図、図版174～175・196・202）

概要 本住居はE区中部西寄りに位置する小型の竪穴住居跡である。

本住居付近は削平が進行しており、本住居も遺存状況は悪く、西半部では床面も確認できずにかろう



住居覆土

1：暗褐色土主体。ローム僅かに含む。 2：暗黄褐色土主体。As-YP・ローム含む。 3：暗褐色土主体。ローム少量含む。

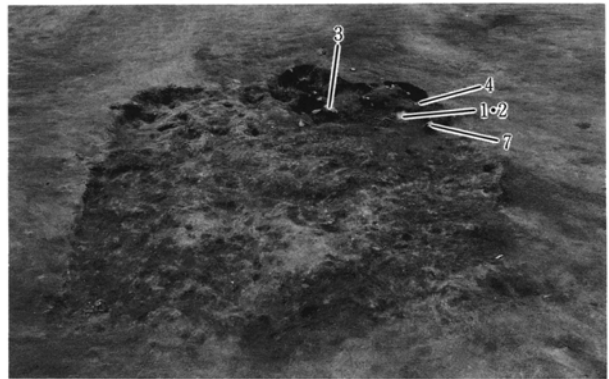
掘り方覆土

4：黄褐色土：ローム主体。 6：暗黄褐色土主体。ローム多く含む。 7：暗黄褐色土主体。ローム少量含む。 8：黒褐色土：ローム少量含む。

じて掘り方で遺構プランを把握できたに過ぎない。またカマドは、後述するように貯蔵穴より天井石と考えられる礫が投棄された状態で出土などから、住居廃絶段階では破却されていたものと推定される。

出土遺物は若干見られたが、この中で本住居に伴うと判断されたものは、10世紀前半期の特徴を示す須恵器坏（1, 2）2点のみであった。

一方、覆土からは平安時代の遺物を中心に磨石（3）や須恵器甕片（7）、9世紀後半期の須恵器坏（4, 5）や土師器甕（6）などの出土が見られた。

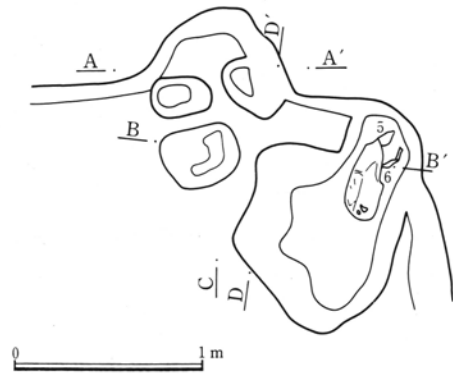
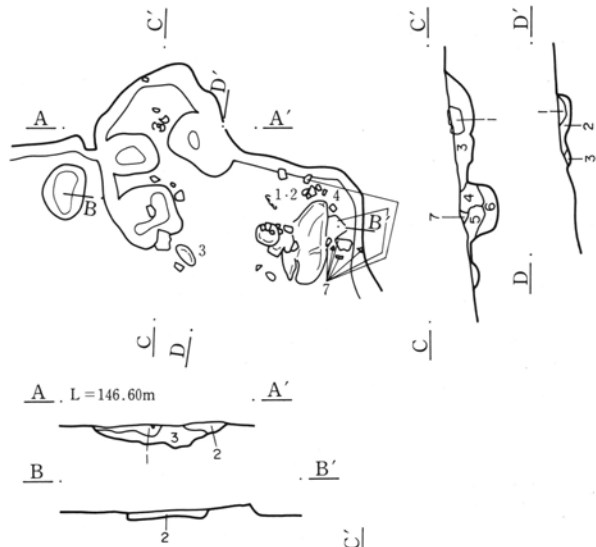


カマド（掘り方）覆土〔A-A'・C-C'セクション〕

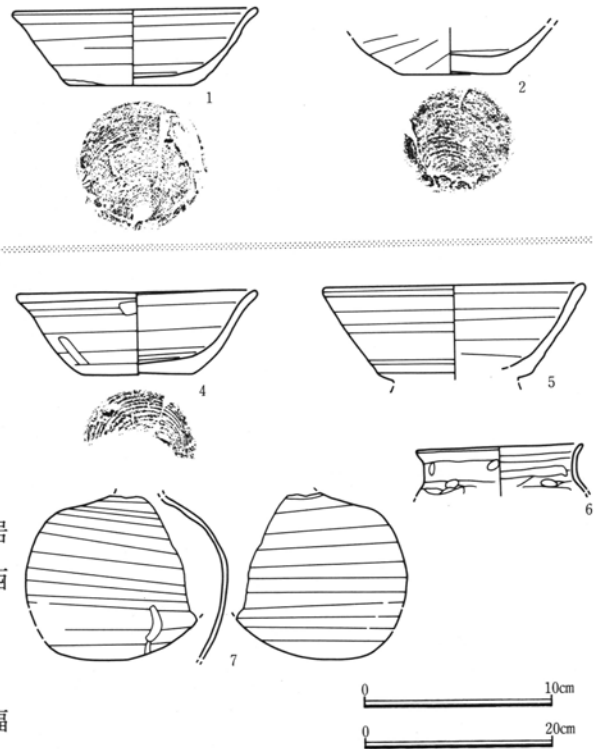
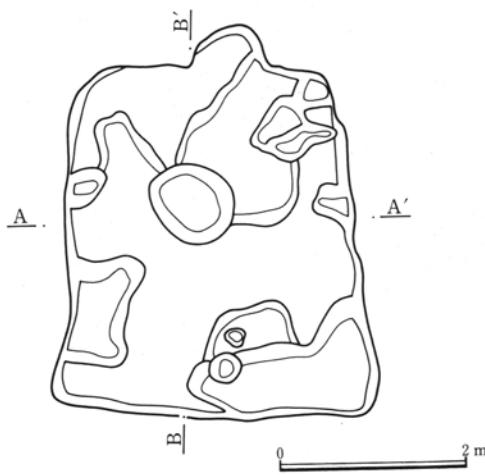
1：黒褐色土主体。焼土含む。 2：暗黄褐色土：焼土少量、ロームまばらに含む。 3：暗赤褐色土：焼土含む。 4：暗黄褐色土：焼土含み、ローム多く含む。 5：黒褐色土：焼土多く含む。 6：暗黄褐色土：ローム多く、焼土僅かに含む。 7：黒褐色土：焼土僅かに含む。

カマド掘り方覆土・袖構築材〔B-B'・D-D'セクション〕

1：暗黄褐色土：ローム含み、焼土炭化物少量含む。 2：暗褐色土：焼土含む。 3：暗褐色土主体。焼土少量含む。



第473図 H-159号住居及びカマド



第474図 H-159号住居掘り方及び出土遺物

以上のような出土遺物の状況であったが、本住居の時期については、覆土中の遺物の所見も併せて西暦1000年を前後する時期の所産として捉えたい。

規模 長軸：395cm 短軸：347cm 深さ：13cm
カマド 幅：85cm 奥行き：55cm以上 左袖 幅：18cm 長さ：15cm 高さ：24cm 燃烧部 径：60×45cm以上 カマド掘り方 径：63×61cm 深さ 7cm

貯蔵穴 径：113×86cm 深さ：13cm

床下粘土坑 径：92×79cm 深さ：11cm

構造 本住居は縦長でやや隅丸の台形プランを呈し、北東コーナー付近と北壁西部及び西壁南半分等の壁際に、不整形な深さ10cm未満の土坑状の掘り込みが掘削される掘り方を有する。住居中央付近には楕円形プランの床下粘土坑が掘削されるが、その底面には標準Ⅺ層土と見られる灰色粘土が厚さ1cm以内で薄く堆積している。床面はこうした掘り方をローム等の土壌で埋め戻して造っている。

カマドは東カマドで、東壁中央やや南寄りに造られる。遺存状況が悪いためカマドの状況はつまびらかでないが掘り方を有し、これを暗黄褐色土等で埋

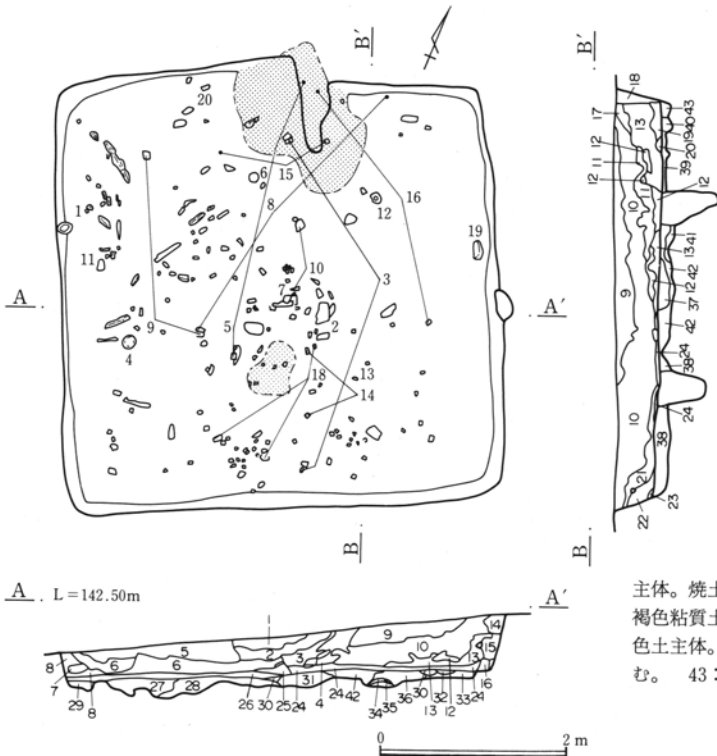
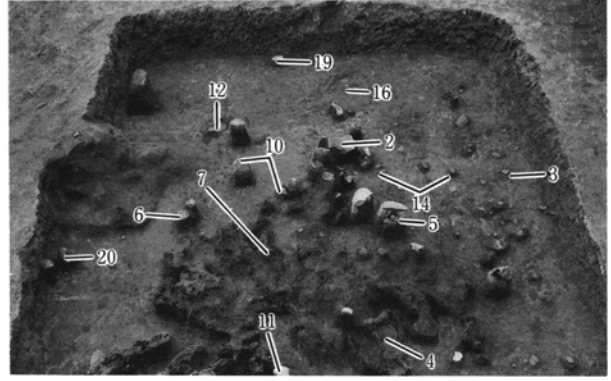
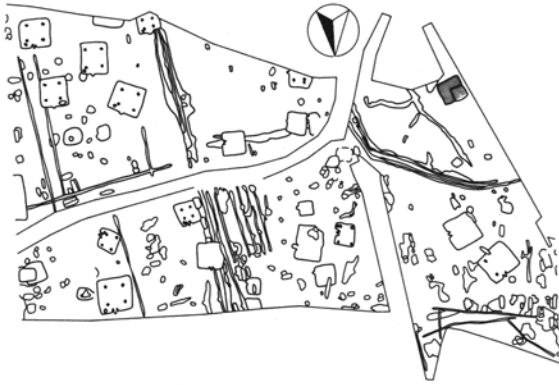
め戻して燃烧面を造る。燃烧部は壁面を跨ぐ位置に設定され、形状等は確認されなかったがその両側の壁面手前側には床下粘土坑の存在から灰色粘土を含む土壌で造られていたと想定される袖が設けられるようである。また、貯蔵穴より天井石と判断される亀裂の入る板状の礫が出土している。

床面に於いては貯蔵穴1基が確認されたがそのプランは不整形であり、南東コーナーに接する幅23cmを測り長さ28cm以上と推定される部分と、北西側の径45×41cmを測る部分に分けられる。前者については、天井石と思われる板状の礫が置かれている。しかし、後者については位置的にカマドと重複するので、カマドの破却に伴って掘削されたと推定される。尚、柱穴は認められなかった。

H-160・167号住居（古墳時代後期／平安時代。第475～478図。図版175・197～198）

概要 H-160・167号住居はE区南西端部に位置する竪穴住居であるが、H-160号住居の北東部にH-167号住居が重複して前者を切り、前者の左袖を除くカマド部分を壊している。しかし、H-167号住居

の東・北壁がH-160号住居のそれにほぼ重なっていたため、調査途中段階までは1軒の住居として処理しており、また2軒への分離も充分には行えなかったため、一括して報告することとした。



第475図 H-160・167号住居

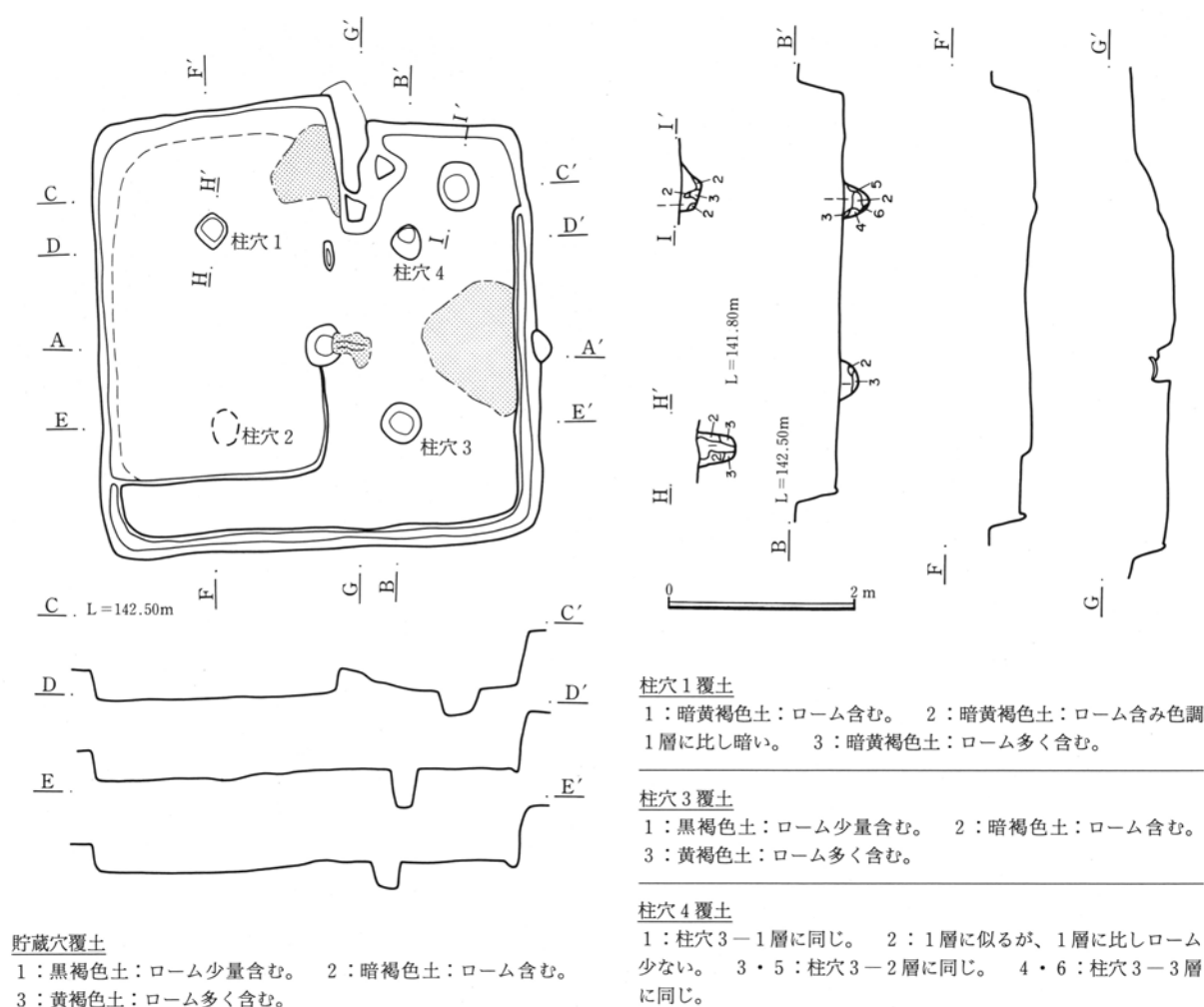
出土遺物の中でH-160号住居に直接伴うと判断されたものには6世紀中・後葉期の所産と思われる土師器の坏(12)や小型甕(13)があり、覆土中からは西暦600年を前後する時期の土師器坏(3)や、9世紀後半期の所産と考えられる須恵器の坏(4, 6, 8)や高台付碗(5, 7)の他、須恵器皿(9)や鏡瓦(10)、磨石(11)などの出土が見られた。

一方、H-167号住居に直接伴うと判断された遺物には9世紀後半期の所産と思われる須恵器坏(1)や女瓦があり、覆土中の遺物には磨石(19)や6世紀

- H-167号住居覆土
 1・7：暗褐色土主体。 2：暗黄褐色土：ローム・焼土含む。 3：黒褐色土主体。 4：暗赤褐色土：焼土・ロームを多く含む。 5：暗褐色土主体。 6：黒褐色土主体。炭化物含む。 8：褐色土主体。ローム多く含む。 25：黒色土：焼土・炭化物多く含む。
- H-167号住居貼り床
 26：暗褐色土：焼土・炭化物・ローム少量含む。
- H-160号住居覆土
 9・12：黒褐色土主体。 10・13・14・18・20・21・23：暗褐色土主体。 11：暗褐色土主体。ローム多く含む。 15：暗褐色土：焼土・ローム多く含む。 16：暗黄褐色土主体。ローム多く含む。 17・19：黒褐色土主体。 22：暗黄褐色土主体。
- H-160号住居貼り床
 24：暗褐色土主体。焼土僅かに含む。
- H-160 (H-167) 号住居掘り方覆土
 27：暗褐色土主体。 28・31：暗黄褐色土：ローム多く含む。 29・40：暗黄褐色土：ローム含む。 30・39：黒褐色土主体。 32：赤黄色土：ローム主体。焼土含む。 33・34・41：黄褐色土：ローム主体。 35：灰褐色粘質土。 36：暗黄褐色土：ローム多く含む。 37・42：黒褐色土主体。ローム多く含む。 38：暗黄褐色土主体。ローム多く含む。 43：暗黄褐色土主体。

前半期の所産と思われる土師器坏(14)や、6世紀後半期から7世紀前半期にかけての土師器坏(15, 16)・甕(17)・小型甕(18)、そして奈良・平安時代の所産と判断される鎌(20)などが見られた。

時期特定についてはそれぞれに直接伴うと判断される遺物が少ないため明確にできなかったが、覆土中の遺物の所見と併せてH-160号住居は概ね6世紀後半期、H-167号住居は9世紀後半期の所産としたい。尚、H-160号住居は奈良・平安時代頃まではその痕跡を留めていたものと思われる。



第476図 H-160・167号住居遺構

またH-167号住居は所謂焼失家屋で、多数の炭化材の出土を見ている。炭化材は何れも垂木材と判断されるが、中央のものは棟に伴う可能性を有する。また炭化材の方向から棟部分は落下後北に傾いて燃えたものと思われ、土葺屋根が屋根全体に施されていたことが推定される。

規模〔H-160号住居〕 長軸: 472cm 短軸: 450cm 深さ: 59cm

カマド 残存幅: 75cm 奥行き: 154cm 右袖 幅: 55cm以上 長さ: 116cm 高さ: 39cm

柱穴1 径: 53×51cm 深さ: 推定68cm 柱穴2 径: 36×31cm 深さ: 推定70cm 柱穴3 径: 41×40cm(掘り方面に於ける径: 62×57cm) 深さ: 50cm 柱穴4 径: 38×29cm 深さ: 61cm

貯蔵穴 径: 53×45cm 深さ: 65cm

周溝 幅: 11~15cm 深さ: 6cm

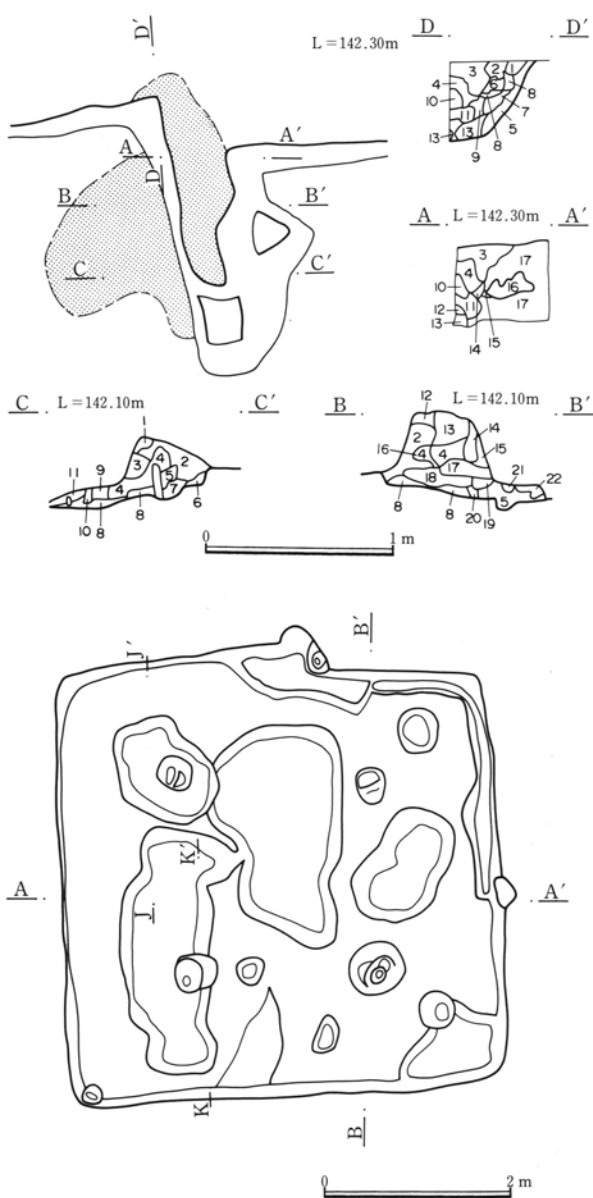
床下粘土坑 径: 129×87cm 深さ: 7cm

〔H-167号住居〕 長軸: 388cm 短軸: 267cm 深さ: 37cm

構造 〔H-160号住居〕 H-160号住居は概ね方形のプランを呈する。

掘り方を有し、掘り方面の西半分部に大きな土坑様の掘り込み3基が見られ、西壁から北壁の半ばにかけての壁際に幅53~70cmを測るテラス状況の区画を作っている。また住居東部の中程には灰色系粘土を底面に付着した床下粘土坑が掘削され、その他幾つかのピットも見られた。床面はこうした掘り方を暗黄褐色土等で埋め戻し、一部に暗褐色土で貼り床を施している。

カマドは北カマドで、左袖が確認されただけで



第477図 H-160号住居カマド及び掘り方

あったが、北壁中央に造られる。掘り方を有し、これをローム等の土壌で埋め戻して燃烧面を造る。燃烧部は壁面手前に設定されたものと思われるが、袖は焼土を含む暗褐色土等の土壌で造られている。尚、東壁の中程に煙道に伴うものと思われる掘り込みが見られ、床下粘土坑の存在と併せてある段階で東カマドの造られていたことが想定される。

床面では、支柱穴4基と貯蔵穴1基と周溝を確認した。柱穴は比較的しっかりした掘り込みであるが、柱穴2・3では掘り方面の状況から建て直しの可能性が窺われる。断面観察等から柱材の径は20cm程

〔A-A'・D-D'セクション〕

カマド(掘り方)覆土

1・6：暗黄褐色土主体。 2：暗黄褐色土/14：黄褐色土：ローム主体。 3・4・7：暗黄褐色土主体。ローム多く含む。 8・9：暗褐色土主体。 10：暗褐色土主体。 11：暗褐色土主体。 12：暗赤褐色土/15：赤褐色土：焼土多く含む。 13：黒褐色土含む。 16：黒褐色土主体。樹痕か。

地山層

5・17：黄褐色ローム。

〔B-B'・C-C'セクション〕

袖構築材

1：暗黄褐色土主体。 2：暗褐色土主体。 3：暗赤褐色土：焼土含む。 4：赤褐色土主体/15：赤褐色土/17：暗褐色土：焼土多く含む。17層は樹木痕か。 5・12・16：黄褐色土：ローム主体。 13：暗黄褐色土主体。 14：暗褐色土：焼土含む。樹木痕か。

カマド掘り方覆土

5・6・7・8：黄褐色土：ローム主体。 9：黄褐色土：焼土含む、ローム多く含む。 10：暗褐色土主体。 11：暗黄褐色土主体。 18：黒褐色土主体。 19：暗黄褐色土/21・22：暗黄褐色土：ローム含む。 20：暗赤褐色土：焼土多く含む。樹木の影響か。

〔J-J'セクション〕

H-160(H-167)号住居掘り方覆土

1・8：暗褐色土：ローム含む。 2：暗黄褐色土：ローム多く含む。 3・5：暗黄褐色土：ローム含む。 4・6：黄褐色土：ローム主体。 7・9・10：暗黄褐色土主体。 8：黒褐色土主体。樹木痕か。

地山層

11：黄褐色土：ローム主体。

〔K-K'セクション〕

H-160(H-167)号住居掘り方覆土

1・4・9：暗褐色土主体。 2・7：暗黄褐色土主体。 3・8・12：暗黄褐色土：ローム含む。 5・6：黄褐色土：ローム主体。 10：暗黄褐色土：ローム含む。 11：暗褐色土：ローム含む。

あったものと思慮される。貯蔵穴は柱穴状の形態を呈し、カマド右側の北東コーナー付近に掘削される。周溝は掘り方面に見られた状況と併せて、カマド部分を除く全面に掘削されていたことが確認された。

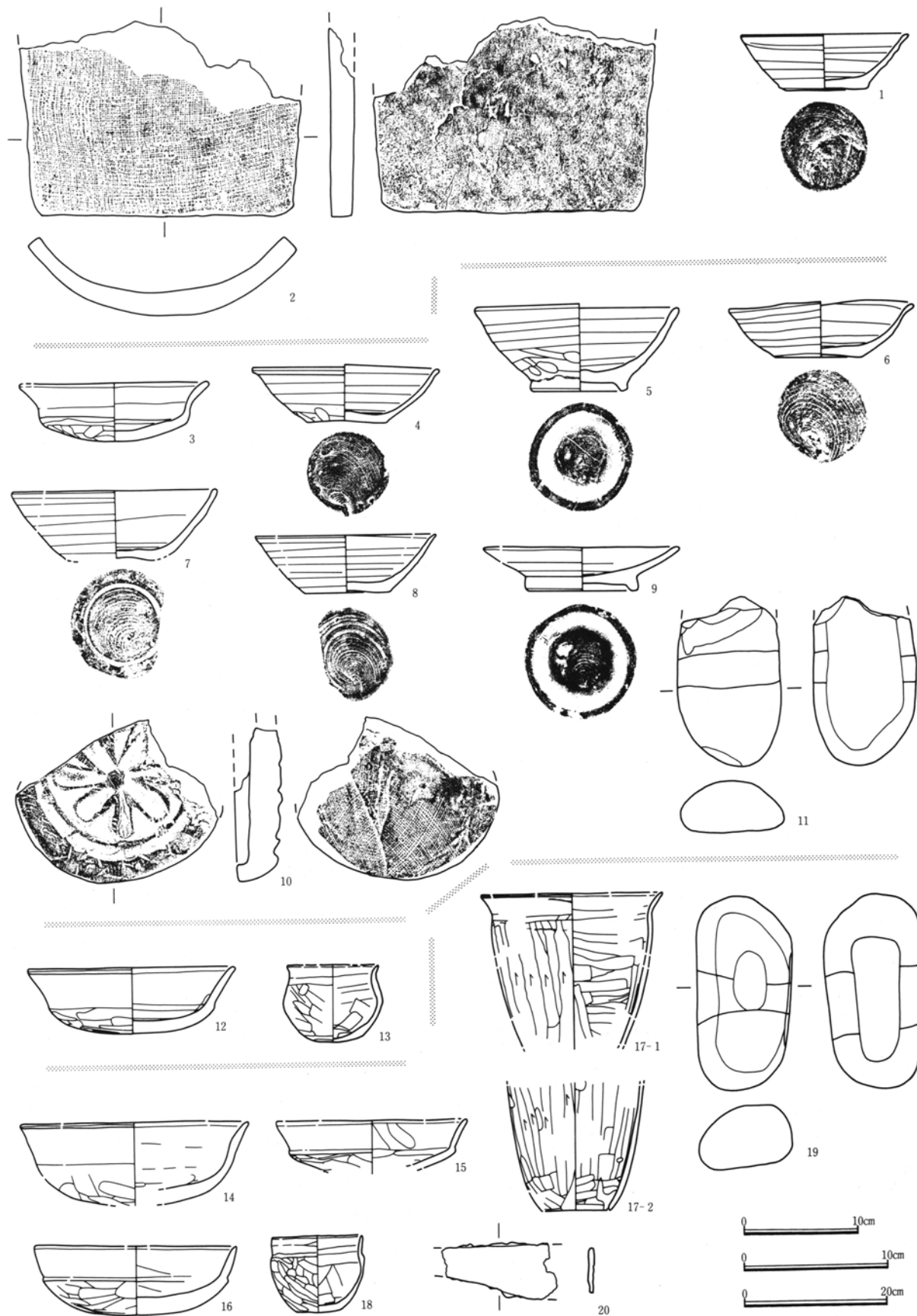
〔H-167号住居〕 H-167号住居は横長の長方形のプランを呈している。

掘り方はH-160号住居のそれと重なっており、明確に確認することができなかった。

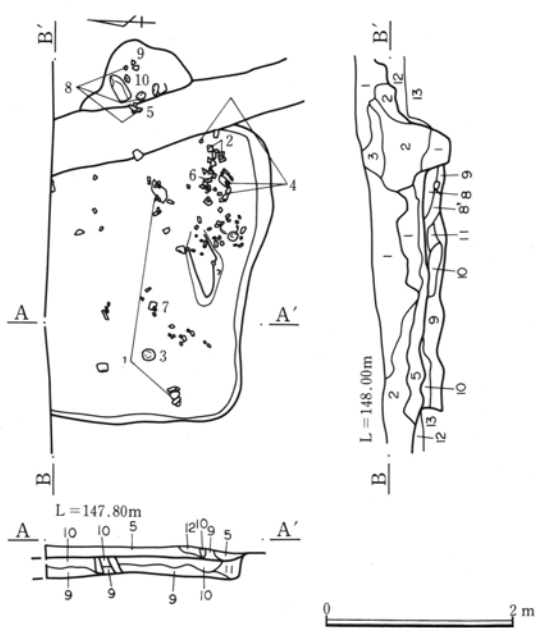
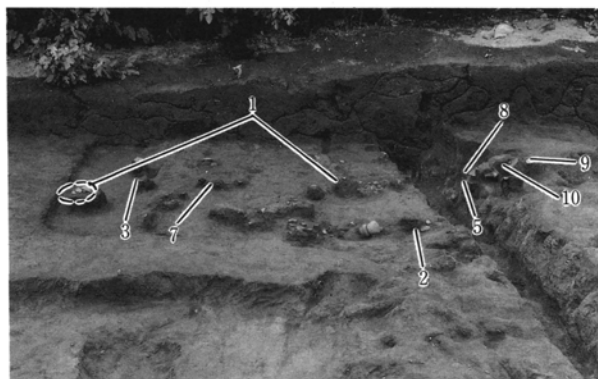
カマドは東カマドで、東壁の南寄りに設けられるが、その形態等を明らかにすることはできなかった。

柱穴・貯蔵穴は確認されなかったが、壁面ラインの中程に周溝の残欠かとも思われる幅10cm、深さ4cm、31cm程の長さの溝状の掘り込みが見られた。

第3章 発見された遺構と遺物



第478図 H-160・167号住居出土遺物



カマド（掘り方）覆土

1：黒色土主体。 2：暗赤褐色土：暗黒褐色土主体。 3：暗赤褐色焼土。 4：暗黒赤褐色土：黒色土と暗赤褐色土の混土。 5：暗黒褐色土主体。 6：暗褐色土主体。 7：暗黒褐色土：暗黒褐色土中にくすんだ褐色土少量混入。縮まり弱い。 8-1：暗褐色土主体 8-2：暗褐色土主体：色調8-1層に比し暗い。 9：暗黒褐色土：ローム多量に混入。10：暗黒褐色土：夾雑物殆ど含まず。 11：赤褐色土：焼土多量に含む。 12：暗黒褐色土主体。

耕作土

1：暗黒褐色土：As-A・ロームブロック多量に含む現代の耕作土。 2：暗黒褐色土：As-A等若干量含む。 3：暗茶褐色土：As-Aとローム多量に含む。

住居覆土

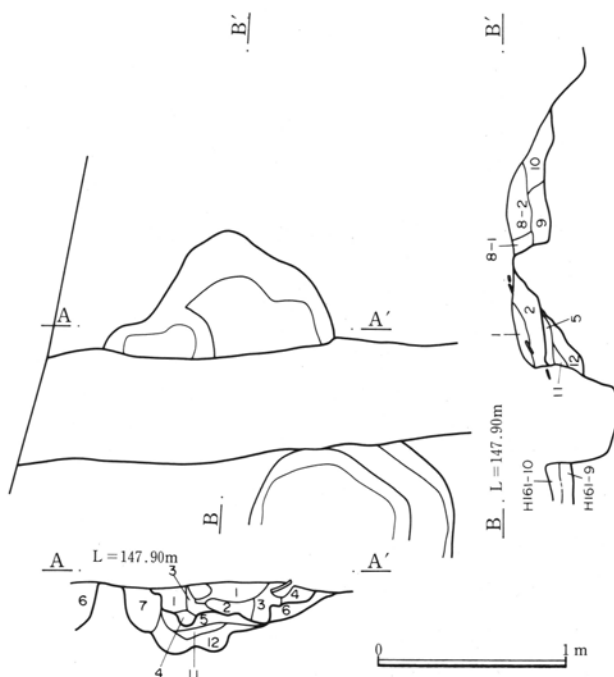
4：暗褐色土主体。 5：暗黒褐色土主体。良く締まる。 6：暗黒褐色土主体。 7：暗黄褐色土：夾雑物含まず。

住居掘り方覆土

8・8'：暗黒褐色土主体。 9：暗褐色土主体。 10：暗黒褐色土：暗黒褐色土と褐色土の混土。 11：暗褐色土：7層に近似するが黒色掛かる。

地山層

12：暗黄褐色土：ローム漸移層土。 13：暗黄褐色ローム：As-VP多量に含む。

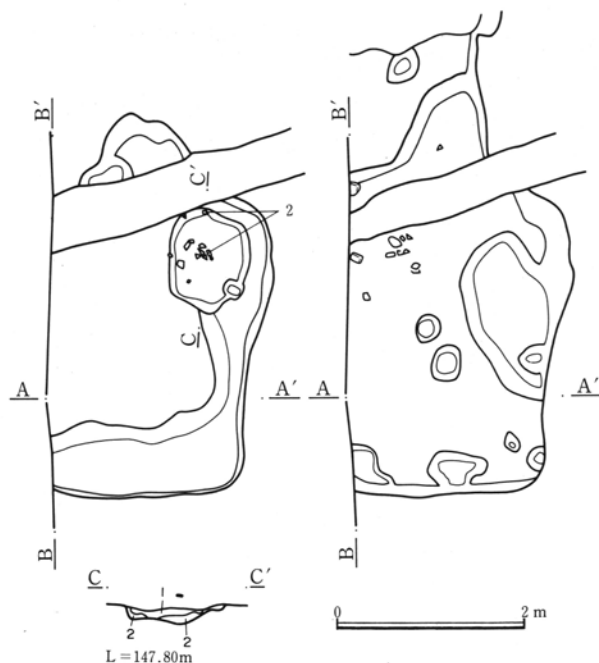


第479図 H-161号住居及びカマド

H-161号住居（平安時代、第479～480図、図版175・198）

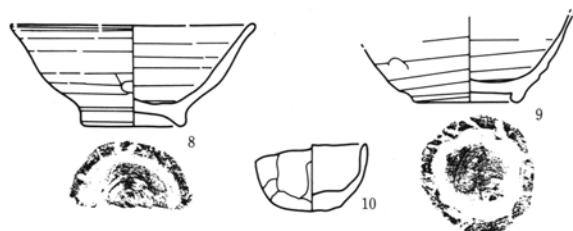
概要 本住居はE区中部北端の竪穴住居跡である。本住居の北部は路線外に出ていて調査できなかった。また、残存部の東部には耕作溝が南北に走って遺構を壊すなど、遺存状況は良好ではなかった。

出土遺物のうち本住居に伴うと判断されたものには、9世紀後半期の特徴を示す須恵器坏（3）や、10世紀前半期の特徴を示す須恵器の高台付碗（1、2）や小型甕（4）、羽釜（5～7）が見られた。



貯蔵穴覆土

- 1：暗黒褐色土：焼土・炭化物を多量に含み、締まりに欠ける。
 2：暗褐色土：褐色土と暗黒褐色土の混土。締まりに欠ける。



第480図 H-161号住居遺構及び出土遺物

一方、覆土中からは平安期の遺物を中心に10世紀前半期の須恵器高台付碗(8, 9)や6世紀の所産かと思われる手捏ね土器(10)などが見られた。

本住居は10世紀前半期の所産と判断される。

規模 長軸：326cm以上 短軸：残存240cm 深さ：21cm

カマド 残存幅：122cm 残存奥行き：78cm 燃焼部 径：残存64×46cm 深さ：3cm

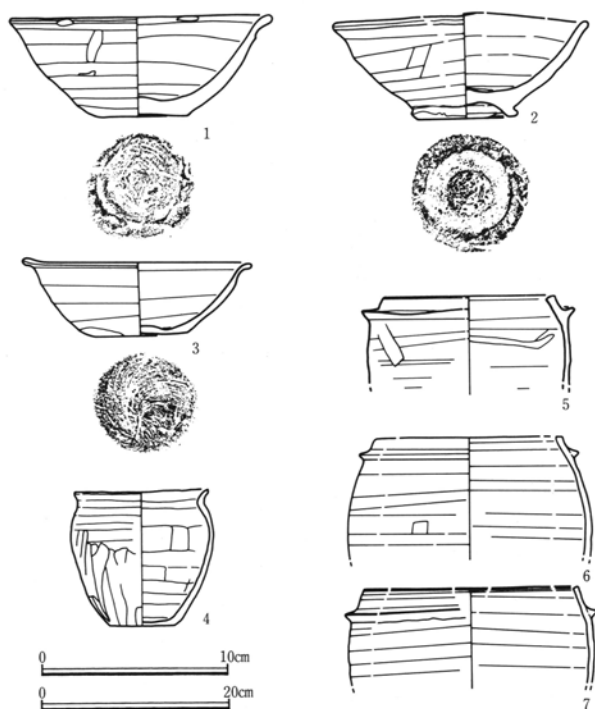
貯蔵穴か 径：104×89cm 深さ：10cm

床下土坑 径：183×101cm 深さ：5cm

H-164号住居(時期不詳, 第481図, 図版175・198)

概要 本住居はE区中西部北端に位置する、小型のものと判断される竪穴住居跡である。

本住居の大半は路線外に在って調査することができず、また、残存部の遺存状況も不良であった。



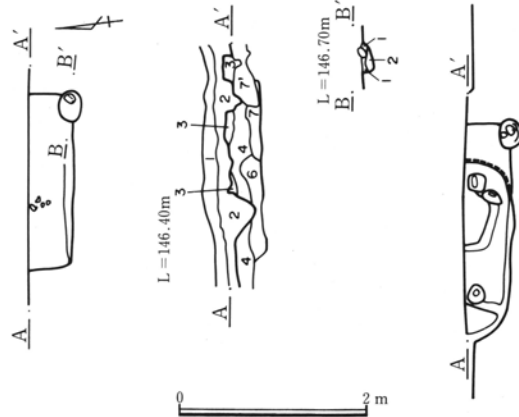
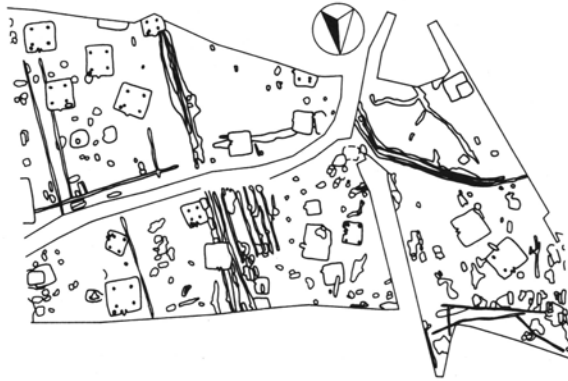
構造 本住居の北側は路線外に出ていて全体状況は確認できないが、本住居は隅丸方形若しくは長方形のプランを呈するものと思われる。

中央南の壁際の土坑など幾つかのピットが見られる掘り方を有する。床面はこの掘り方を暗褐色土等で埋め戻して造っているが、床面は壁に向かって弱い傾斜で落ち込むような傾向が見受けられる。

カマドは東カマドで、東壁の南東コーナー付近に造られるが元々破壊されており、耕作溝の掘削も受けていてその構造は明らかにできなかったが、燃焼部は東壁面を跨ぐ位置に設定されている。

床面では南東コーナー付近に焼土と炭を顕著に含む暗褐色土範囲が見られ、貯蔵穴として掘削したが彫り込みは浅く、掘り方も明確ではないため貯蔵穴か否かは特定できなかった。また、柱穴は床面に於いても掘り方面に於いても確認できなかった。

本住居からの出土遺物は少なく、10世紀前半期の特徴を示す羽釜片(1)など僅か5点の土器片の出土を見たに過ぎなかった。加えてこれらは何れも本住居に伴わないと判断されるもので、従って本住居の



[A-A'セクション]

耕作土

- 1：暗黒褐色土：As-A多量に含む。現代の耕作土。 2：暗黒褐色土：As-A多量に含む。近世の耕作土。1層に比し褐色掛かる。
3：灰白色：As-A層。

住居覆土

- 4：暗褐色土：灰褐色粒子と焼土を微量含み、良く締まる。 6：暗黒褐色土：暗黒褐色土と暗黄褐色土の混土。褐色粒子微量に含む。
7：暗茶褐色土：白色・褐色粒子多量に含む。比較的良く締まる。
(7'：締まりに欠ける)

[B-B'セクション]

ピット覆土

- 1：暗黒褐色土：焼土若干量含む。締まりに欠ける。 2：暗褐色土：暗黒褐色土と褐色土の混土。

第481図 H-164号住居

時期を特定することはできなかった。

規模 残存長さ：190cm 残存幅：48cm 深さ：5cm
ピット 径：31×26cm 深さ：20cm

構造 上述のように本住居で調査できたのはその一部に過ぎないので、全体状況は把握できなかった。従ってそのプランも明瞭ではないが、方形・若しくは横長の長方形を呈するものと推定される。

本住居は掘り方を有し、残存部の状況から掘り方面には東壁際に幅39cmのテラスを伴う幅20～70cm、深さ8cm以下を測る周溝状の掘り込みが壁際に廻る傾向が窺われる。床面はこうした掘り方を暗黒褐色土等で埋め戻して造られる。

南東コーナー部分には小型のピットが掘削されて

H-165号住居 (平安時代、第482図、図版176・198)

概要 本住居は、E区中部北寄りに位置する小型の竪穴住居跡である。

本住居は東側のカマドの燃焼部に伴う焼土面の存在と、比較的緻密な面の存在から竪穴住居と認定された。緻密な面の広がりの確認から、既に床面は西側では滅していたようで、遺物の状況からその範囲を大まかに把握していたに過ぎなかった。

本住居は削平が進んで北西部では掘り方面も失われており、また耕作に伴うと思われる土坑や溝が掘削されるなど遺存状況はかなり不良であった。

本住居の出土遺物はかなり少なかったが、本住居に伴うと判断された遺物には9世紀後半期の所産と

いる。本住居との関連或いは新旧関係は不明であるが、焼土を含む土壌で埋められていることからカマドとの関連等が考慮される。

考えられる須恵器高台付碗(1)がある。

一方、覆土中からの出土遺物は平安時代所産のものを中心に、土師器6片、須恵器2片、羽釜1点が出土したに過ぎなかった。

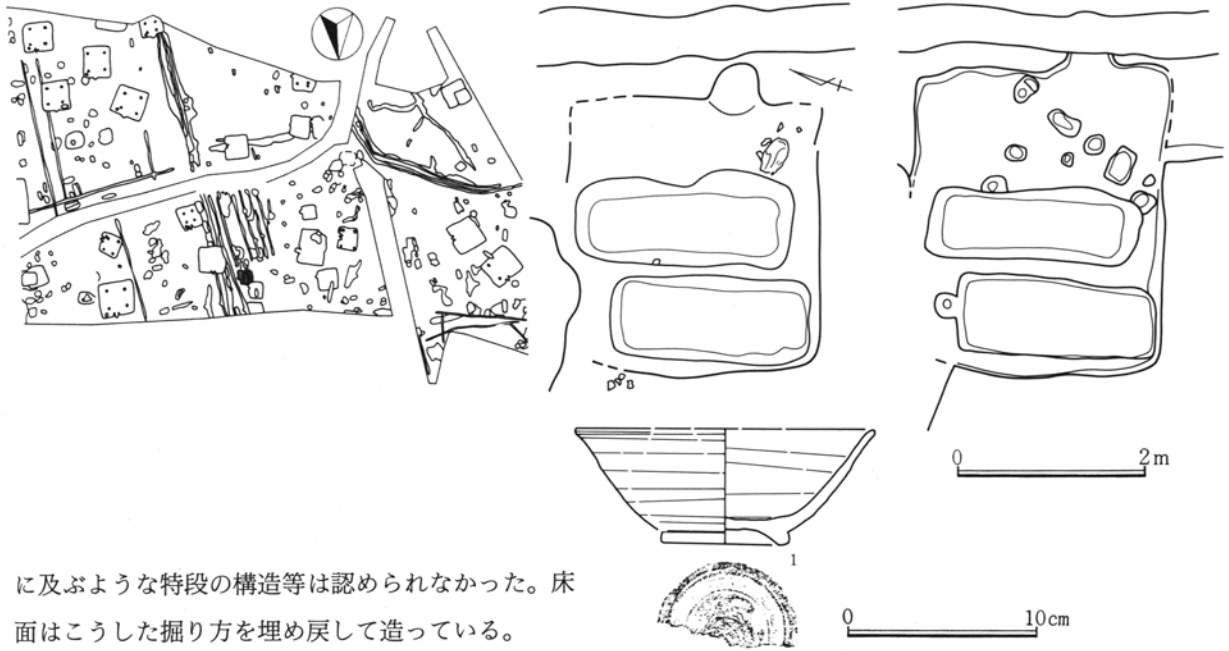
このように出土遺物が少なかったため住居の時期特定は難しいが、凡そ9世紀後半を前後する時期を以て本住居の時期としたい。

規模 長軸：329cm 短軸：267cm 深さ：0cm

カマド 燃焼部 径：54×56cm

構造 本住居はやや隅丸縦長の、長方形のプランを呈する。

ピット等を伴う掘り方を有するが、掘り方面全体



に及ぶような特段の構造等は認められなかった。床面はこうした掘り方を埋め戻して造っている。

カマドは東壁やや南寄りに在る。先端は耕作溝に壊され、元々の残存状況も悪いために構造は殆ど不明だが、燃烧部は壁面を跨ぐ位置に設定されている。

第482図 H-165号住居及び出土遺物

尚、柱穴・貯蔵穴等は確認できなかった。

H-169号住居 (古墳時代後期, 第483~484図, 図版176・198~199・203)

概要 本住居はE区北西部に位置する、E区に於いては大型のものに属する竪穴住居跡である。

本住居の南西部には160・161号土坑と重複関係にあり、本住居はこの2基の土坑に切られている。

出土遺物はカマド前を中心に見られたが、このうち本住居に伴うと判断される遺物には6世紀後半期から7世紀前半期のものを中心とするもので、土師器の甑(1)・小型甕(2, 3)・甕(4, 5)がある。

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕片を中心に、6世紀中葉期から7世紀前半期のものを中心とする土師器の坏(7, 8, 6)・高坏(9, 10)・甕(11)・小型甕(12)・甑(13, 14)の他、こも編み石(15)が見られた。

以上の点から本住居は6世紀後半期の所産として把握され、覆土中の遺物の状況から少なくとも平安時代頃まではその痕跡を留めていたと思慮される。

規模 長軸：619cm 短軸：605cm 深さ：46cm

カマド 幅：127cm 奥行き：94cm 左袖 幅：39cm 長さ：83cm 高さ：31cm 右袖 幅：45cm

長さ：94cm 高さ：23cm 燃烧部 径：35×85cm

柱穴1 (掘り方面での径：53×51cm) 深さ：69

cm 柱穴2 (掘り方面での径：38×38cm) 深

さ：71cm 柱穴3 (掘り方面での径：62×50cm)

深さ：41cm 柱穴4 径：32×30cm (掘り方面で

の径：36×35cm) 深さ：70cm

貯蔵穴 上位構造 径：142×128cm 深さ：7cm

下位構造 径：64×58cm 深さ：64cm

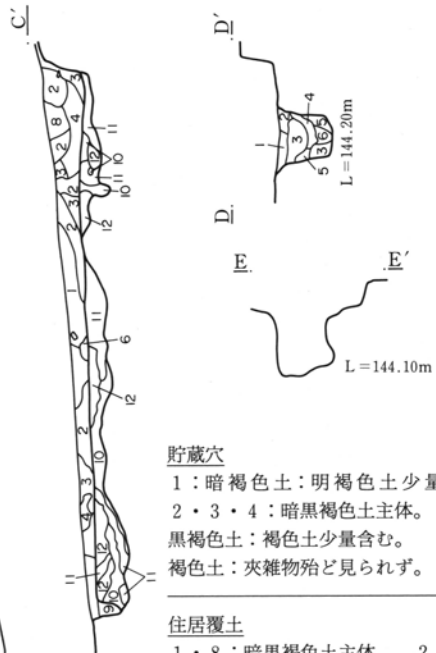
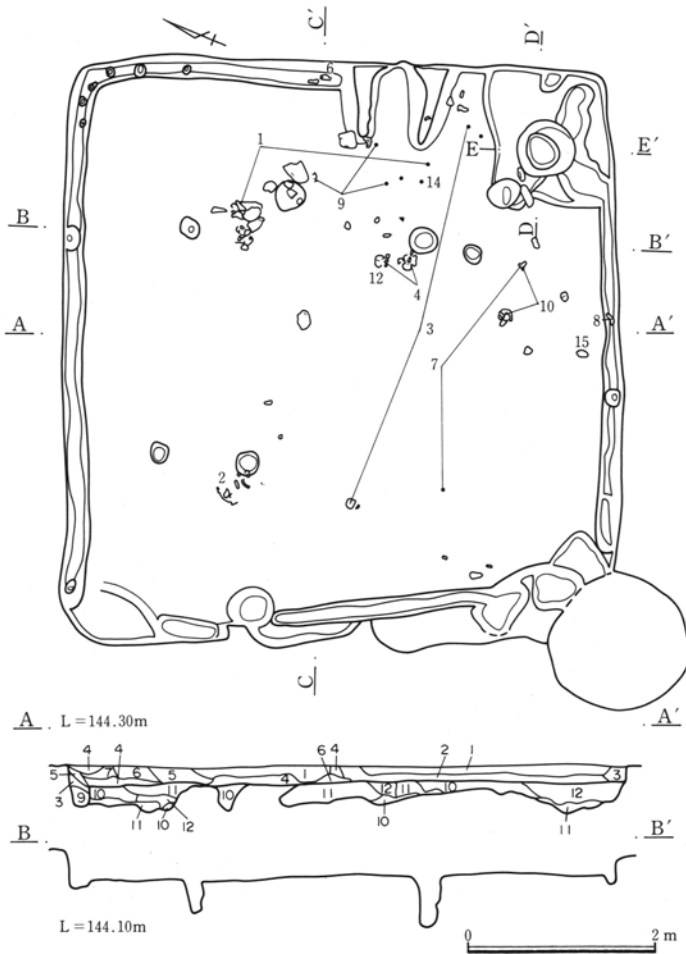
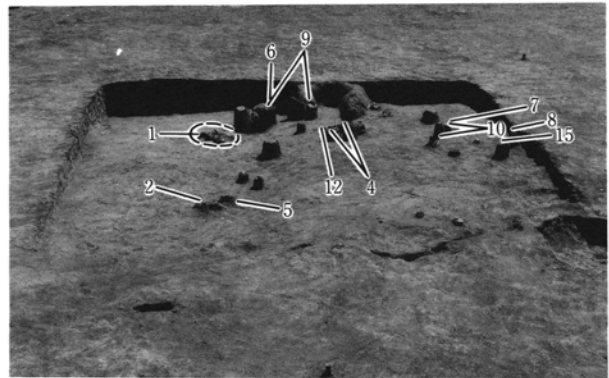
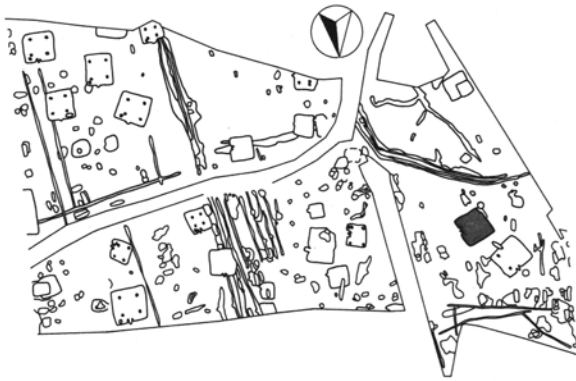
周溝 幅：9~21cm 深さ：17cm

床下土坑 径：150×147cm 深さ：12cm

構造 本住居はやや隅丸の方形プランを呈する。

壁際に幅95~188cm、深さ18cm以下を測る周溝状の掘り込みが一周する掘り方を有し、掘り方中央には床下土坑が掘削される。床面はこうした構造の掘り方を暗黒褐色土等の土壌で埋め戻して造っている。

カマドは東カマドで、東壁中央やや南寄りに設けられる。カマドは掘り方を有し、これを暗黒褐色土等で埋め戻して燃烧面を造っている。燃烧部は壁面手前に設定され、その両側に焼土を含む暗褐色土等



貯蔵穴

1：暗褐色土：明褐色土少量含む。
2・3・4：暗黒褐色土主体。5：暗黒褐色土：褐色土少量含む。6：暗黒褐色土：夾雑物殆ど見られず。

住居覆土

1・8：暗黒褐色土主体。2：暗褐色土：褐色土と黒色土の混土。3：暗黒褐色土：褐色土等少量含む。4：暗褐色土：黒色土少量混入。5：褐色土主体。6：暗茶褐色土主体。7：暗茶褐色土：As-YP等少量混入。9：暗黒褐色土：黒褐色土と褐色土の混土。

住居掘り方覆土

10：暗黒褐色土：ローム少量混入。11：暗黒褐色土：ロームと黒褐色土多量に混入する。12：黒色土：黒色土・暗黒褐色土と褐色土の混土。

第483図 H-169号住居

の土壤中、袖を燃焼面と一体の構造として造る。

床面に於いては柱穴・貯蔵穴各1基と周溝を確認した。このうち貯蔵穴はカマド右側の南東コーナーに設けられ、南東コーナーを四角に掘り窪めた上位構造部分と、その中央に掘削された下位の構造部分から成る。このうち下位の構造が貯蔵穴本体で上位

の構造には蓋等の存在が想定される。柱穴は床面では南東の柱穴4のみが確認できたが、掘り方面ではこれ以外の柱穴1～3の3基も併せて確認している。柱穴1～3は床面に於いては確認できなかったため、柱を立てた後に床面を造るといった作業のあったことが想定される。一方周溝は、カマドと貯

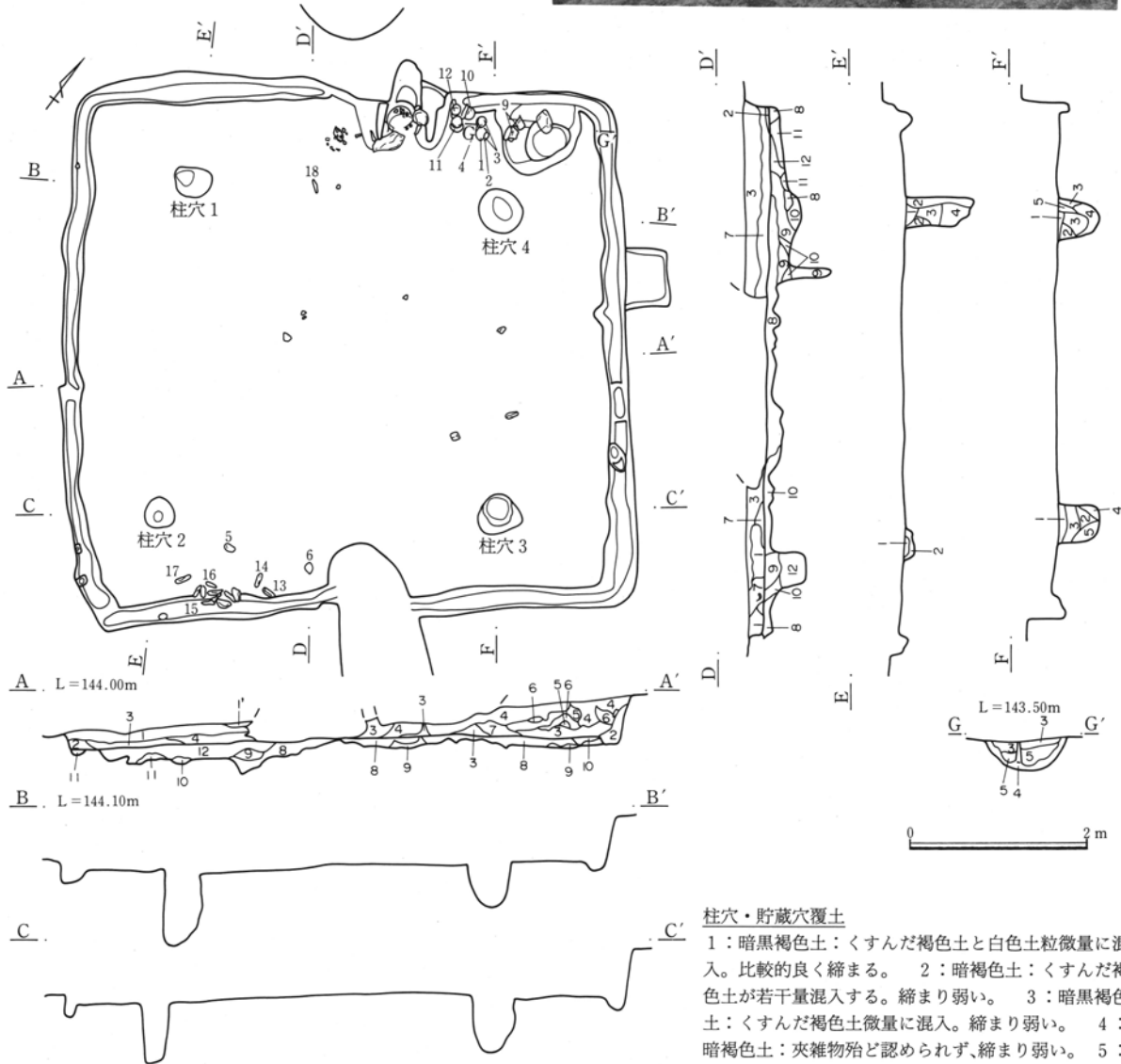
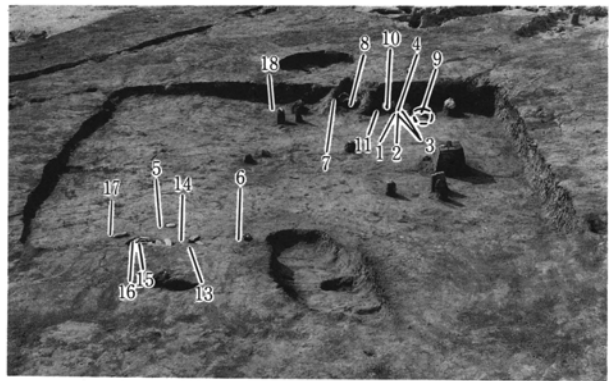
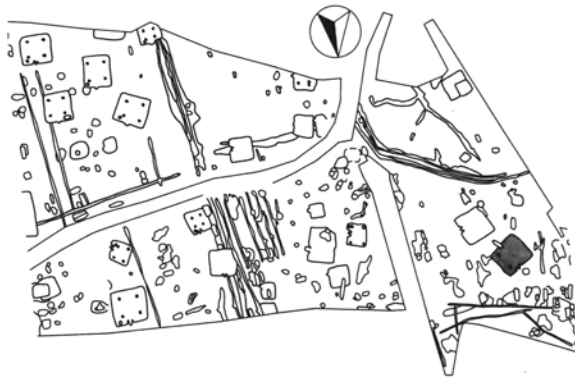
第3章 発見された遺構と遺物



第484図 H-169号住居遺構及び出土遺物

蔵穴部分を除く四囲の壁際に掘削されているが、北東コーナー付近の底面には規則的に掘削される小

ピットの掘削が見られた。これについては壁構造に伴うと考えられる。



住居覆土

1：暗褐色土：ローム微量に、白色土粒多量に含む。(1'：白色土粒大粒になる。) 2：暗褐色土：ローム微量に含む。 3：暗褐色土：褐色土と暗黒褐色土の混土。 4：暗褐色土：白色微粒子多量に含む。 5：暗黄褐色土：褐色土に黒褐色土少量混入。 6：暗黒褐色土：黒褐色土と暗褐色土の混土。 7：暗黄褐色土：殆ど

柱穴・貯蔵穴覆土

1：暗黒褐色土：くすんだ褐色土と白色土粒微量に混入。比較的良く締まる。 2：暗褐色土：くすんだ褐色土が若干量混入する。締まり弱い。 3：暗黒褐色土：くすんだ褐色土微量に混入。締まり弱い。 4：暗褐色土：夾雑物殆ど認められず、締まり弱い。 5：暗黒褐色土：褐色土微量に混入。

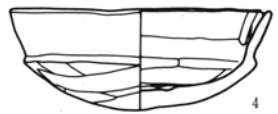
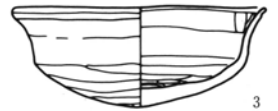
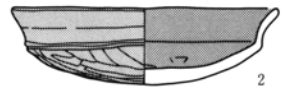
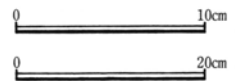
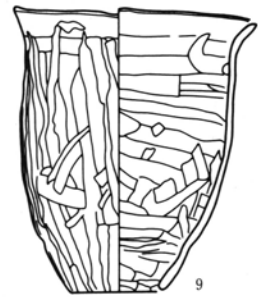
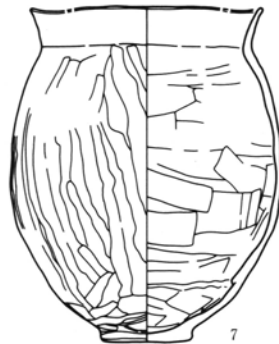
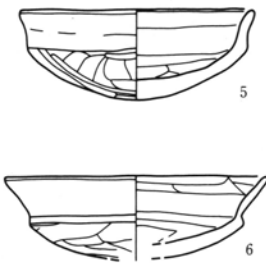
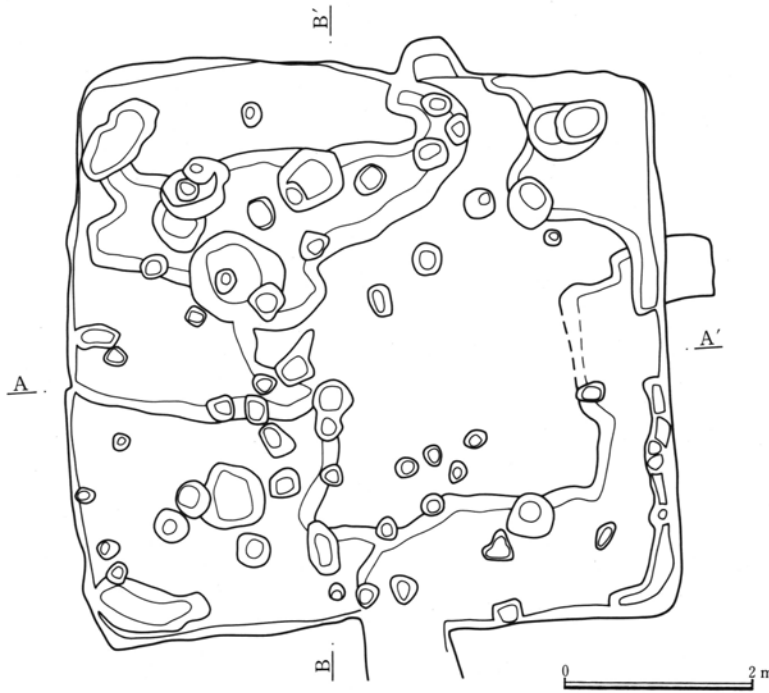
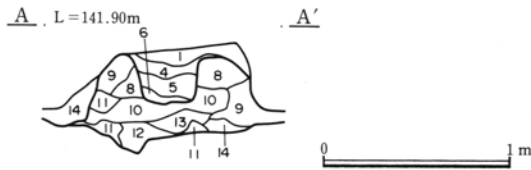
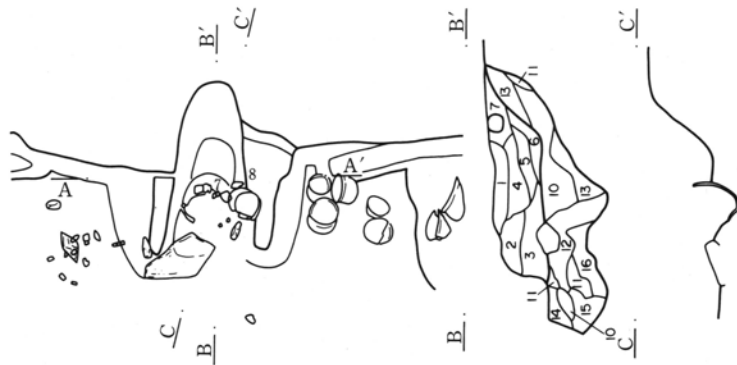
夾雑物認められず、粘性を持つ。

住居掘り方覆土

8：暗褐色土：褐色土・黒色土微量に混入。 9：黒褐色土：くすんだ褐色土少量混入。 10：暗褐色土：暗褐色土と褐色土の混土。 11：褐色土：堅く締まる褐色土と暗褐色土の混土。 12：暗黒褐色土：黒色土と暗黒褐色土の混土。

第485図 H-170号住居

第3章 発見された遺構と遺物



耕作土

1：暗黒褐色土：As-Aと焼土を微量に含む。

カマド覆土

2：暗褐色土：多量の白色微粒子・褐色微粒子と極く微量の焼土を含む。 3：暗褐色土：白色微粒子と褐色微粒子を少量含む。 4：暗黒褐色土：白色微粒子を少量、炭化物微量に含む。 5：暗褐色土：焼土ブロックを微量に含む。 6：暗赤褐色土：褐色土と焼土の混土。 7：暗赤褐色土：褐色土中に焼土が相当量混入する。

袖構築材

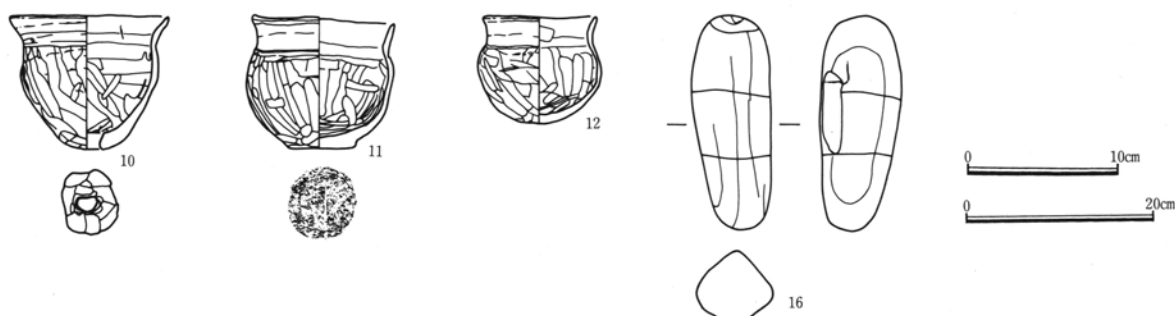
8：暗褐色土：焼土と白色土粒を微量に含む。 9：暗黄褐色土：暗褐色土と黄褐色土の混土中に焼土微量に混入する。10：暗褐色土：暗褐色土と焼土

の混土。 11：暗褐色土：褐色土と黒褐色土の混土。

カマド掘り方覆土

12：黒色土：黄褐色土と焼土少量混入。 13：暗赤褐色土：焼土と暗黄褐色土の混土。 14：暗黒褐色土：褐色土微量に混入する。 15：暗黒褐色土：As-BPを微量に混入する。 16：暗褐色土：暗黒褐色土にAs-BPを多量に含む。

第486図 H-170号住居遺構及び出土遺物



第487図 H-170号住居出土遺物

H-170号住居（古墳時代後期、第485～487図、図版176・199～200・203）

概要 本住居はE区北西部、近世に於けるものと思われる緩傾斜を呈する削平面の中に位置する、E区に於いては大型のものに属する竪穴住居跡である。

本住居付近には耕作に伴うものを中心とする土坑の掘削が多く見られたが、特に本住居は南部で132号土坑と重複関係にあり、これに切られている。また3条以上の耕作溝が入って覆土を大きく切っているが、幸い床面への影響は見られなかった。

本住居の出土遺物は全体として見た場合量的には少ないものであったが、このうち本住居に伴うと判断された遺物は、カマド内、カマド右側、住居南西部の壁面近くの3カ所に集中して見られ、土器について見ると何れも6世紀後半期のものを中心に6世紀中葉から7世紀前半期の特徴を示すものであった。本住居に伴うと判断された遺物のうち、カマド内からは燃烧部中心に当たる位置から土師器胴張甕(7)がカマドに懸けられた状態で出土し、その右側には土師器甕(8)の出土が見られた。カマド右側の床面上からは土師器の坏(1～4)・甗(9,10)・小型甕(11,12)が集中的に分布して出土している。また、南壁西部の壁際には12個のこも編み石が認められたが、本稿ではこのうち4個(13～16)を取り上げている。更にこのこも編み石群の北側に近接して土師器坏(5,6)の出土が見られ、カマド左前部にはこも編み石(17)の出土も見られた。

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕片を中心にこも編み石(18)等の出土が見られた。

以上のような状況から、本住居は6世紀後半期の所産と判断される。

規模 長軸：642cm 短軸：620cm 深さ：51cm
カマド 幅：106cm 奥行き：102cm 左袖 幅：40cm 長さ：54cm 高さ：27cm 右袖 幅：38cm 長さ：71cm 高さ：25cm 燃烧部 径：35×71cm 煙道 幅：33cm 長さ：30cm
柱穴1 径：40×34cm 深さ：84cm **柱穴2** 径：35×34cm 深さ：65cm **柱穴3** 径：50×43cm 深さ：61cm **柱穴4** 径：50×48cm 深さ：53cm
貯蔵穴 上位構造 径：96×80cm 深さ：25cm **下位構造** 径：48×44cm 深さ：30cm
周溝 幅：12～31cm 深さ：17cm
床下土坑 径：100×96cm 深さ：16cm

構造 本住居は概ね方形のプランを呈する。

北壁中・西部の壁際に幅64～97cmを測るテラス状の掘残しを伴う、幅50～264cm、深さ16cm以内を測る周溝状の掘り込みが一周する浅い掘り方を有している。掘り方面にはこの他多くの土坑或いはピット状の掘削が見られたが、これらに全体としての規則性等は認められなかった。床面はこうした構造を持つ掘り方を暗褐色土等の土壌で埋め戻している。

カマドは北カマドで、北壁中央やや東寄りに造られている。カマドは掘り方を有し、これを焼土や黒色土等で埋め戻して燃烧面を造り出している。燃烧部は壁面手前側を主体に、やや北壁を跨ぐ位置に設定されている。袖は燃烧部の両側に平行な配置を見せ、左右両袖の手前側に礫を立てた袖石を置いて焼土を含む暗褐色土等で燃烧面と一体となる構造で造られている。また、袖石の上には天井石が渡されている。煙道は、燃烧面奥側端部より連続して設けら

第3章 発見された遺構と遺物

れる傾斜を以て造られている。

床面に於いては主柱穴4基と貯蔵穴1基、及び周溝を確認している。このうち柱穴は径は大きくはないがしっかりした掘り込みを有し、柱材の径は断面観察等から25～26cm程あったものと思われる。

貯蔵穴はカマド右側のカマドと東壁の中程に掘削

され、壁面に接する隅丸方形プランの浅い土坑状の掘り込みの上位構造部分と、その南寄りに掘削される柱穴様の形態を呈する下位構造の部分から成っている。このうち下位の構造は貯蔵穴本体で、上位構造に対しては蓋等の存在が想定される。周溝はカマド部分を除く四囲の壁面際に掘削されていた。

10号溝（江戸時代以降、第488図、図版176・200・203）

概要 本溝はE区中南部、吉井町多比良341・342番地と343番地の境、341番地への馬入れ部分に在り、後述の18号溝に連なると判断されるものである。

本溝は掘り直しによる溝の集合体で、個々の溝は明確に抽出できなかつたが、土層断面と遺構形態から溝1～4とした4期の溝遺構を把握した。

本溝の覆土中からは内耳鍋片（1）や須恵器甕片（2）、布目瓦の女瓦（3）の他、磨石（5, 7, 8）やこも編み石（6）などの出土が見られた。

尚、本溝は現代残る地割りに規制される近世以降の所産で、やがて埋没して現代の馬入れとなるが、早い段階の溝4の埋土がAs-Aを含まないので、当初掘削時期は18世紀中葉以前であると想定される。

また、本溝は初めに地形に沿ったらしい溝4、次にAs-A降下後に明確な土地区分を意図した直線的な

溝3、更に地なりに溝2が掘削され、再び直線的な溝1が掘削されて形成されてきたものと想定される。

規模 長さ：27.9m以上 上幅：475cm

溝1 長さ：27.8m以上 上幅：34～60cm 基底幅：24cm 深さ：24cm 溝2 長さ：25.4m以上 上幅：62～108cm以上 基底幅：26～38cm 深さ：21cm 溝3 長さ：27.4m以上 上幅：36～91cm 基底幅：23～52cm 深さ：11cm 溝4 長さ：16.6m以上 上幅：306～474cm 基底幅：284～415cm 深さ：19cm

構造 溝のプランは溝1・3は直線的であり、溝2には弱い蛇行が見られ、溝4は大きなカーブを描く。

溝形態は溝1と溝3は細長いサク状、溝2は薬研堀状、溝4は幅広の溝形態を呈している。

14・15号溝（江戸時代後期か、第488図、図版177・203）

概要 14・15号溝はE区中南部にほぼ平行に位置する、東西走行の浅い掘り込みの溝遺構である。

14・15号溝は地形の傾斜方向に掘削されるが流水の痕跡はない。また10号溝のように地割りに沿うものではないが、10号溝に垂直気味に位置することから、ある時期の土地区分に伴うものと思慮される。

出土遺物はこも編み石（1）と土師器・須恵器片13点のみで時期特定には至らなかったが、覆土にAs-Aを含み現代の地割りに伴わないので江戸時代後期以降で近代まで下らない時期の所産と思われる。

尚、14・15号溝はH-131・132号住居の覆土を切るが、住居と同時に調査を行ったため住居に掛かる部分の記録化はできなかった。また、14号溝の西端部

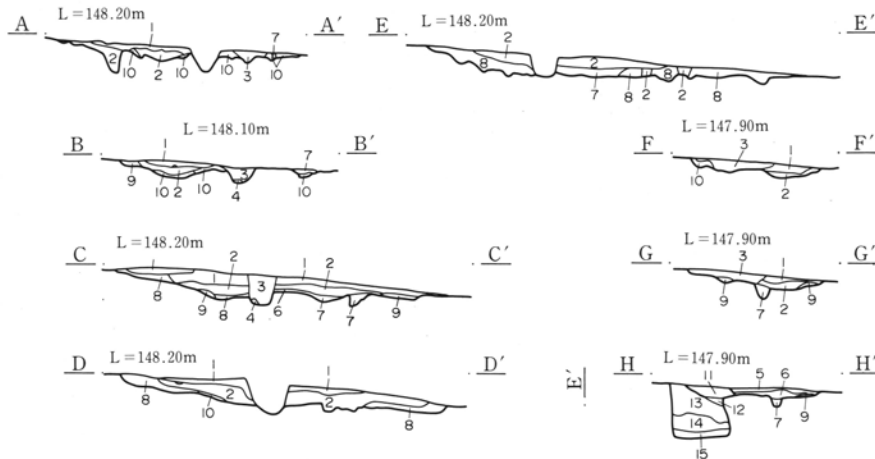
は滅失しており、15号溝もH-132号住居の範囲を越えて西に延びるか否かは確認できなかった。

規模 [14号溝] 長さ：8.4m以上 上幅：66～170cm 基底幅：38～125cm 深さ：13cm

[15号溝] 長さ：4.4m以上 上幅：48～73cm 基底幅：21～50cm 深さ：13cm

構造 [14号溝] 14号溝は直線的であるが、やや南に大きな弧状に曲がる傾向にある。遺構形態は不整形であるが底面は比較的平坦である。

[15号溝] 15号溝はH-132号住居の東側ではサク状の形態を呈しているが、H-132号住居の断面観察からは14号溝と同様の形態を呈していたものと想定される。



10号溝覆土

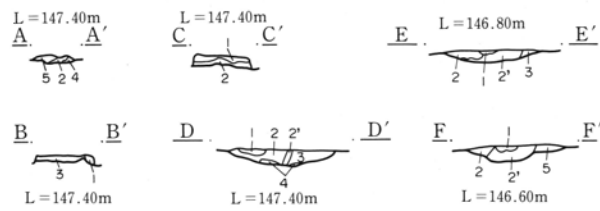
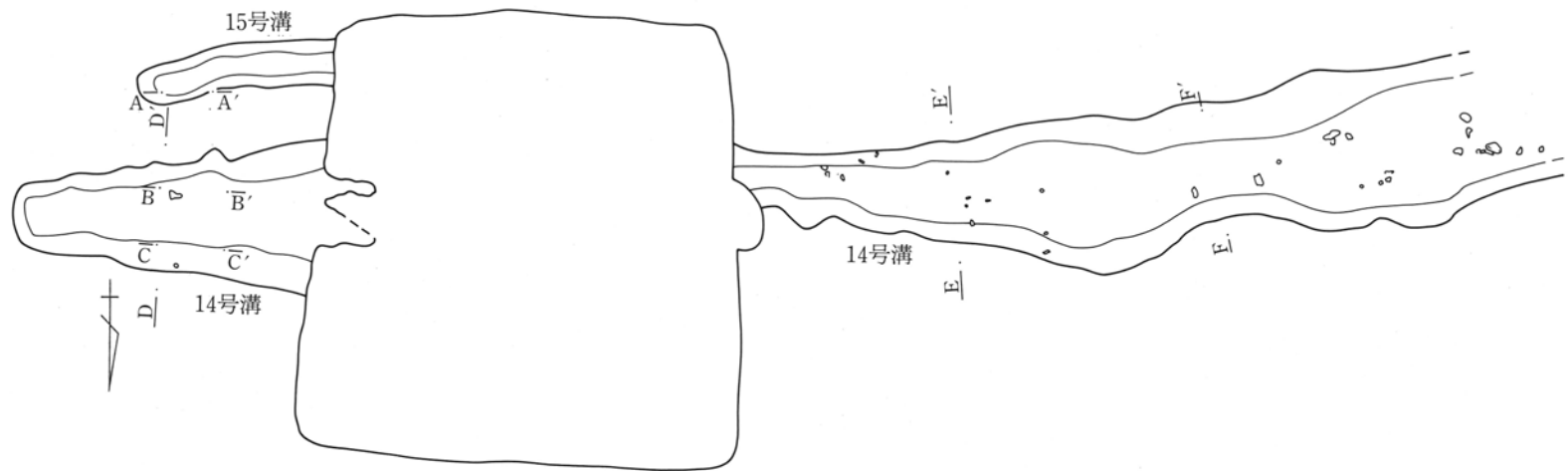
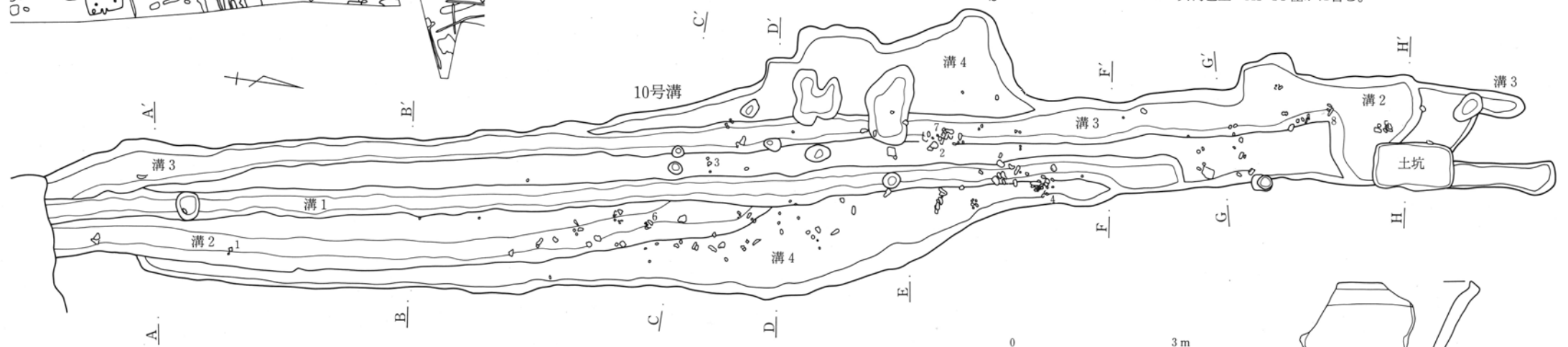
1: 灰黄褐色土: ほぼ砂質。As-A やや多く含む。 2: 灰黄褐色土主体。ローム僅かに含む。 3: 灰黄褐色土: やや砂質。As-A・ローム僅かに含む。 4: 灰褐色土: As-A主体。 5: 灰褐色土: As-A主体。ローム僅かに含む。 6: 灰黄褐色土: As-A・ローム僅かに含む。 7: 灰黄褐色土: 6層に比し灰色掛かり色調暗い。ローム僅かに含む。 8: 灰褐色土: 暗褐色土・ローム僅かに含む。 9: 黄褐色土: くすんだローム。 11: 灰黄褐色土: やや砂質。ロームやや多く含む。

土坑覆土

12: 浅褐黄褐色砂質土。 13: 浅褐黄褐色砂質土: 大量のロームと僅かのAs-A含む。 14: 浅褐黄褐色砂質土: As-A僅かに含む。 15: 浅褐黄褐色砂質土: ローム・As-A僅かに含む。

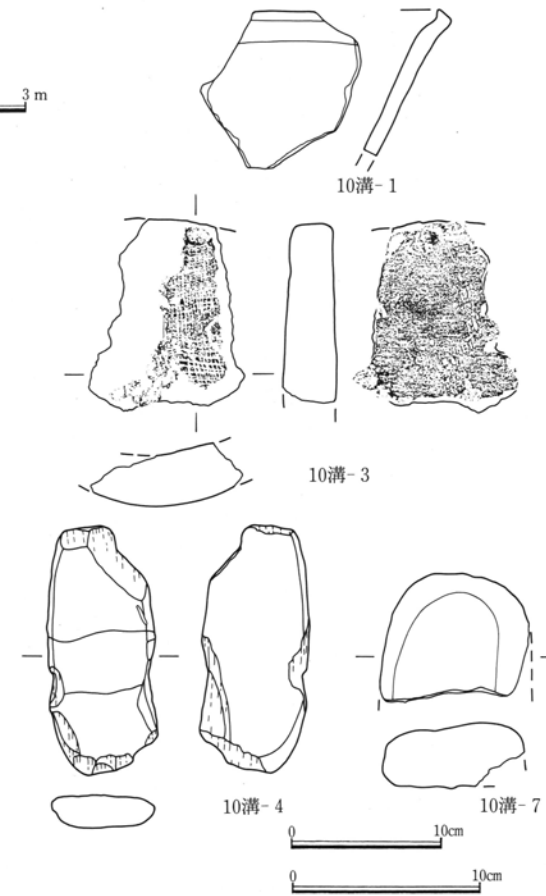
地山層

10: 黄褐色土: As-YP僅かに含む。

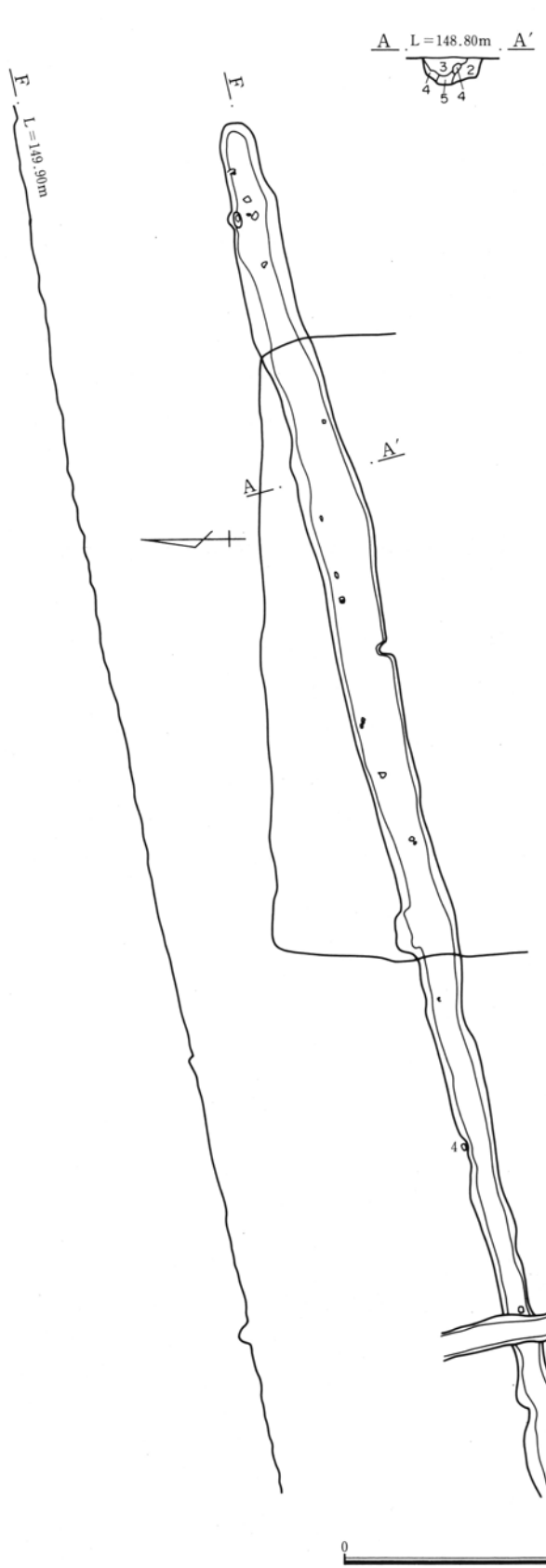


14・15号溝覆土

1: 茶褐色土: ローム漸移層(以下「漸移層」)上層土・黒色土の混入にAs-A・ローム混入。やや砂質で現耕作土に近い。 2: 暗褐色土: 黒色土に近いもの中心の漸移層土にローム・黒色土・As-A混入。(2': 色調やや暗い。) 3: 暗茶褐色土: 上層に近い漸移層土。ローム・黒色土・As-A混入。 4: 黄褐色土: ロームに黒色土と上層中心の漸移層土混入。 5: 茶褐色土: 1層土に漸移層土・ローム・As-Aやや多く混入。



第488図 10・14・15号溝及び10号溝出土遺物



16号溝 (江戸時代, 第489~490図, 図版177・200・203)

概要 本溝はE区東部、北に農道と接する吉井町多比良421番地の中に位置する。

この農道は342番地の畠地の中程で走行を東北東から西方に変ずるが、本溝は後者に平行であり、農道の走行が変じても走行を変えずに東に延びている。

本溝の出土遺物には、6世紀後半期のものらしい須恵器坏(1)の他、須恵器甕片(2)、鉄斧(3)、こも編み石(4~8)、磨石(9)など比較的多くを



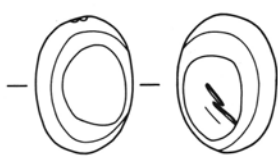
16溝-1



16溝-3



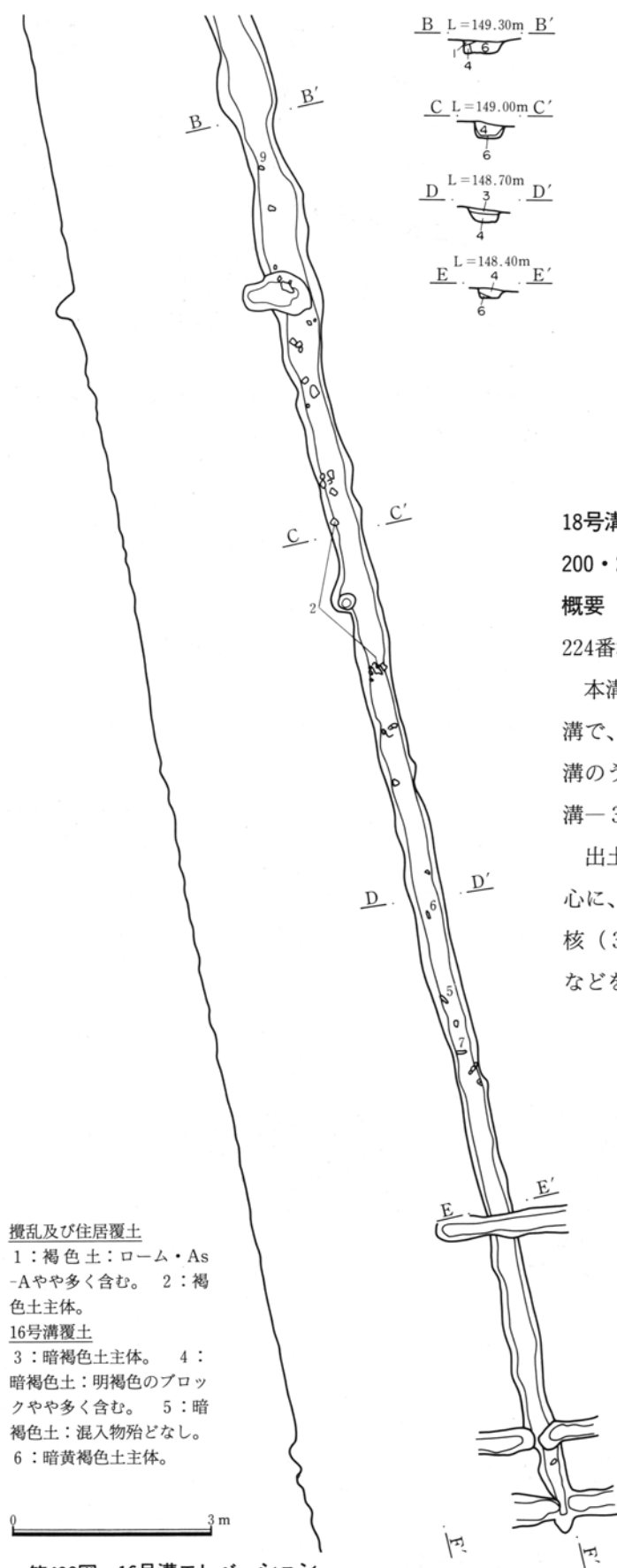
16溝-2



16溝-9



第489図 16号溝及び出土遺物



第490図 16号溝エレベーション

見たが、何れも本溝との関係は不明である。

従って、溝の時期特定は難しいが、現代に続く土地区画に対応する事から近世以降の所産で、溝の覆土にAs-Aを混入しないことから近世中期以前の所産であろうと判断される。

規模 長さ: 43.7m以上 上幅: 36~93cm

基底幅: 24~76cm 深さ: 38cm

構造 本溝の走行は直線的である。

溝幅や深さは部分によつ増減が見られるが、全体として見た場合、その形状は比較的一定している。

18号溝(江戸時代後期以降, 第491~492図, 図版177・200・203)

概要 本溝はE区中北部、吉井町多比良218番地と224番地の地境の地形の変換点に位置している。

本溝は前述の10号溝の延長部に当たる南北走行の溝で、幾つかの溝の集合体である。本溝を構成する溝のうち溝1は10号溝一溝1、溝2は10号溝一溝2、溝3は10号溝一溝3に対応する。

出土遺物は古墳時代後期から平安時代のものを中心に、近世以降の瓦(1)、スクレイパー(2)、石核(3)、石皿(4)、須恵器片(5)、黄金具(6)などを見ている。

尚、本溝の時期は10号溝と同様であるが、10号溝とは異なり後述の20号溝との関係から概ね近代以降のものを中心とするのではないかと思慮される。

規模 長さ: 25m以上

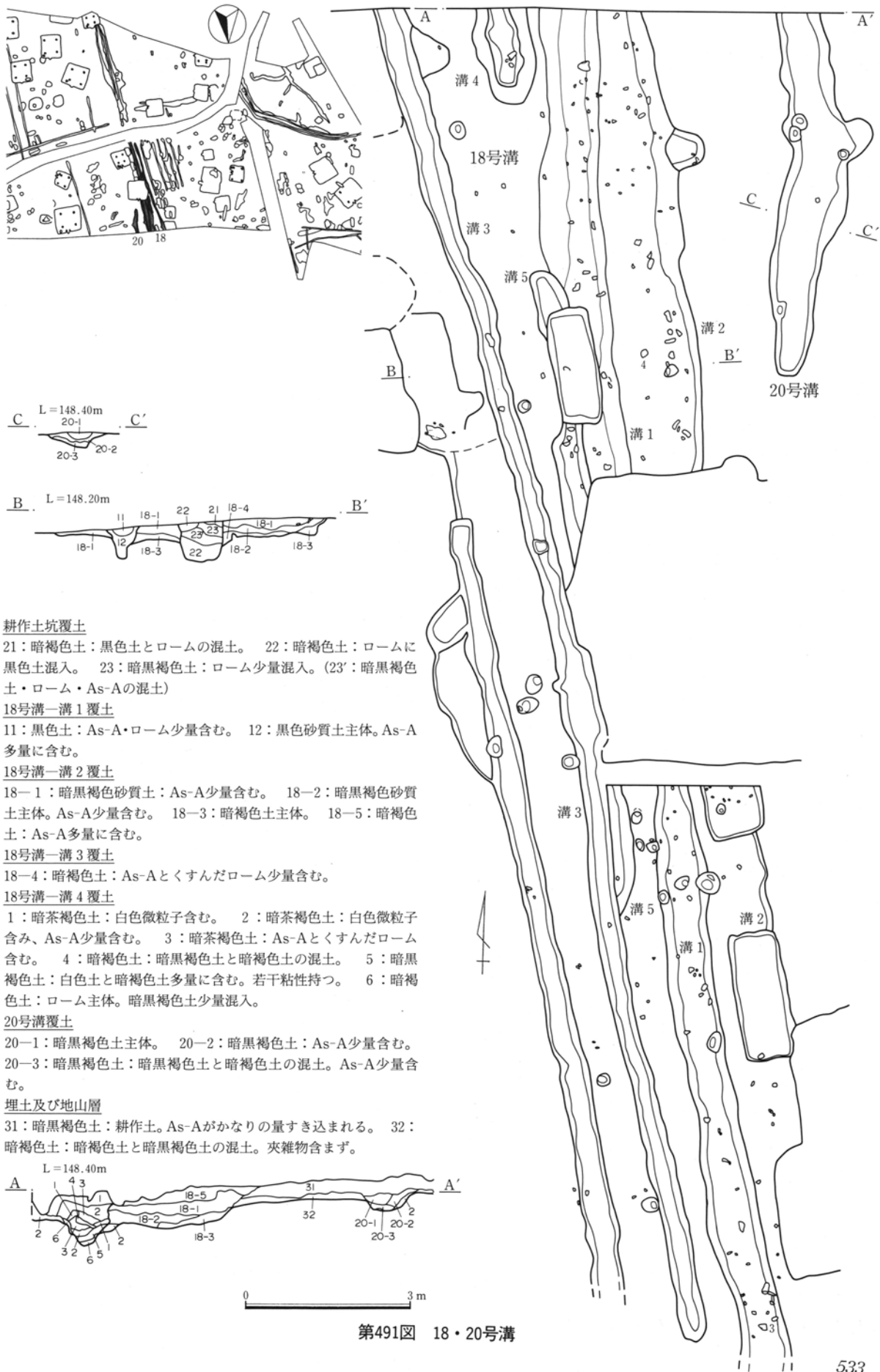
溝1 長さ: 24.5m以上 上幅: 56~114cm 基底幅: 28~56cm 深さ: 17cm

溝2 長さ: 18.6m以上 上幅: 148cm以上 基底幅: 140cm以上 深さ: 36cm

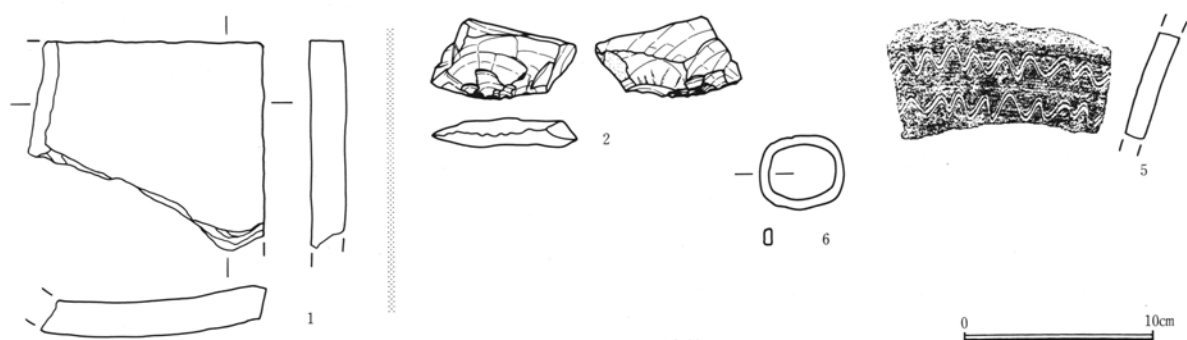
溝3 長さ: 24.7m以上 上幅: 50~61cm 基底幅: 18~34cm 深さ: 51cm

溝4 長さ: 1.8m以上 上幅: 109cm 基底幅: 59cm 深さ: 37cm

溝5 長さ: 11.7m 上幅: 35~58cm



第491図 18・20号溝



第492図 18号溝出土遺物

基底幅：18～26cm 深さ：9cm

構造 本溝は、全体としては北に向かってやや拡散する傾向を見せている。本溝を構成する溝のラインは溝1・2は概ね直線的で、溝3はやや西に傾く緩やかな円弧状を、溝5は蛇行するようなラインを描

いている。

溝の掘り込みは、溝1はサク若しくは葉研堀状を呈し、溝2は道路状、溝3・5はサク状、溝4は箱堀状を呈している。

20号溝（江戸時代後期以降、第491図、図版177）

概要 本溝はE区中北部、18号溝の東に近接して位置する南北走行の溝遺構である。

本溝はAs-Aを含まない暗褐色土を掘り込んで造られるが、一方、本溝埋没後の形成層である黒褐色土は18号溝にとっての地山層である。本溝は覆土にAs-Aを含んでいるが、上位層である黒褐色土はAs-Aを多量にすき込んでいる、As-A降下後あまり年月

を経過しない時点での耕作土であると考えられるので本溝は概ね江戸時代後期の所産と想定される。

尚、出土遺物は見られなかった。

規模 長さ：6.5m以上 上幅：66～121cm 基底幅：38～80cm 深さ：29cm

構造 本溝のラインはくの字に屈曲する。

溝の掘り込みは概ね箱堀状を呈している。

21号溝（江戸時代後期以降、第493～494図、図版177・200・203）

概要 本溝はE区西部、吉井町多比良216番地215・217番地の、60数cm程段差を伴う地境に位置する。

本溝は一見道路遺構に似るが、10・18号溝と同様の機能を持つものと思慮される溝遺構の集合体である。また溝遺構の分離を試みたが、南北に平行に掘削される幅狭の溝1と2、溝2の北側に接する溝3と溝1の南側に接する溝4の4条について確認した。この4条の溝は溝1→溝4→溝2→溝3の順に新しくなるものと判断される。また、溝1と2の間には耕作による小型のピット列も認められた。

本溝からは布目の女瓦（1）や鎌（2）、こも編み石（3～5）や砥石と思われるもの（6）など、平安時代の遺物を中心に幾つかの出土遺物が見られた

が、何れも本遺構に直接伴うものではなかった。

本溝はAs-Aを含む土層を掘り込んで造られるので、江戸時代後期以降の所産と判断されるが、掘り直しのあることから長期に亘る使用が窺われる。

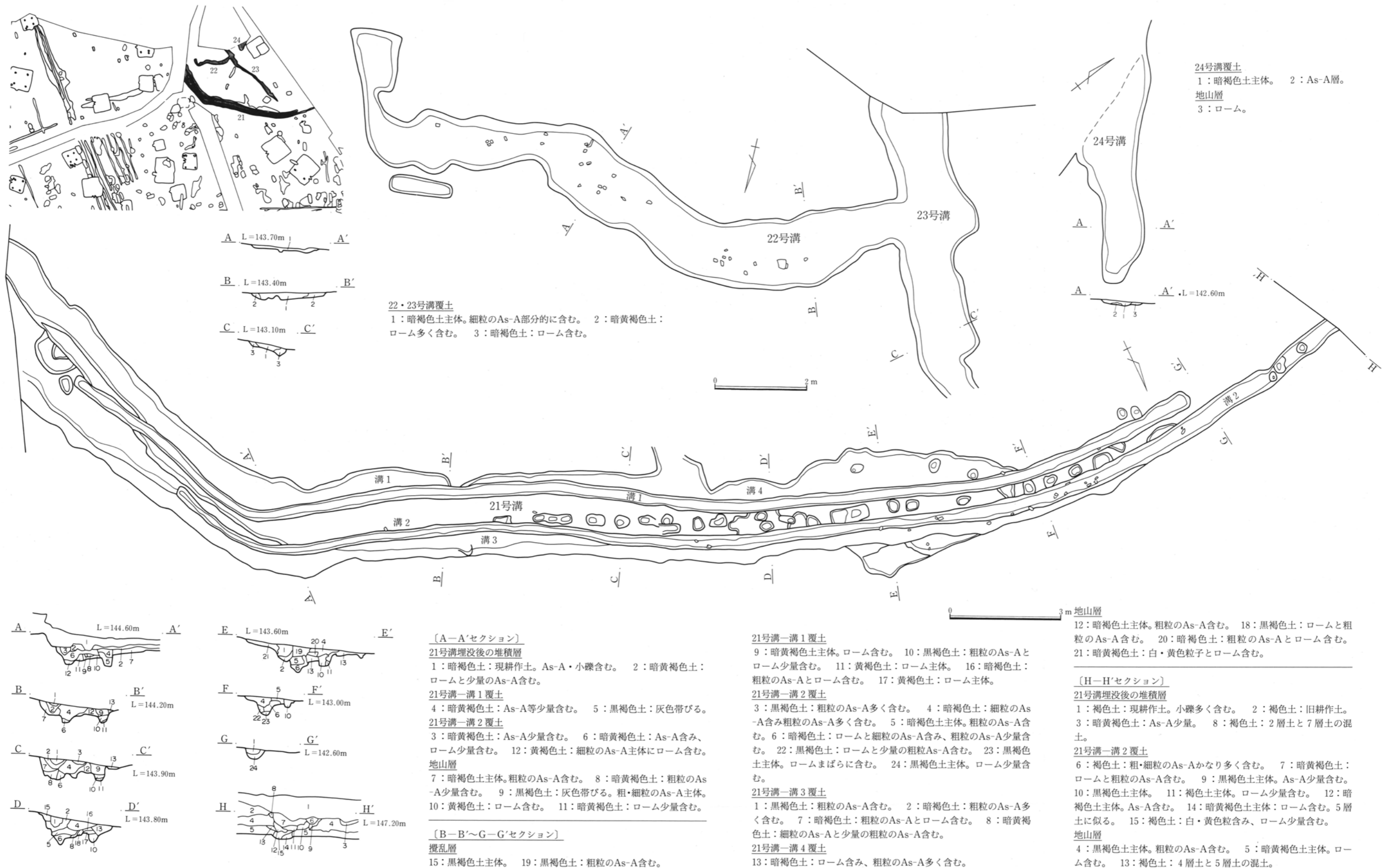
規模 長さ：40m以上 上幅：282cm以上

溝1 長さ：31.6m以上 上幅：26～50cm 基底幅：13～29cm 深さ：29cm

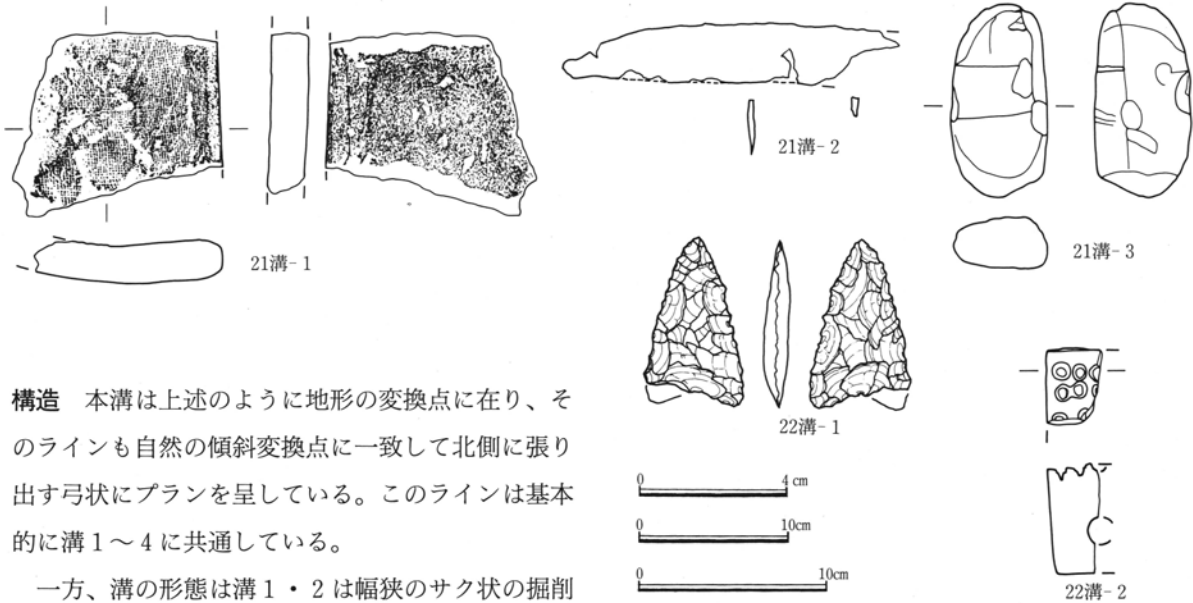
溝2 長さ：32.8m以上 上幅：19～54cm 基底幅：5～36cm 深さ：17cm

溝3 長さ：33.3m以上 上幅：70～98cm 基底幅：48～82cm 深さ：8cm

溝4 長さ：29.7m以上 上幅：182cm 基底幅：118cm 深さ：60cm



第493図 21・22・23・24号溝



第494図 21・22号溝出土遺物

構造 本溝は上述のように地形の変換点に在り、そのラインも自然の傾斜変換点に一致して北側に張り出す弓状にプランを呈している。このラインは基本的に溝1～4に共通している。

一方、溝の形態は溝1・2は幅狭のサク状の掘削形態を示し、溝3・4については箱掘状を呈する。

尚、順番は異なるが、本溝の形成は10・18号土坑と同様サク状の溝と箱掘状の溝が交互に掘削されて

なされている。

22・23号溝（江戸時代後期以降、第493～494図、図版178・200）

概要 22・23号溝はE区西部、吉井町多比良216番地の21号溝の内側に位置する溝遺構である。

22・23号溝は東西走行の前者が南北走行の後者にT字形にぶつかる。新旧関係は特定されなかったが遺構形態から同時存在していたと想定される。

22・23号溝からは、直接関連するものではないが古墳時代後期から中世にかけての遺物の出土が見られ、このうち22号溝からは石鏃（1）や表面に田の字状に未貫通孔が並ぶ石製の印が出土している。

22・23号溝は覆土にAs-Aを部分的に含むため江戸時代後期以降の所産と判断される。

規模〔22号溝〕 長さ：17.5m以上 上幅：24～130cm 基底幅：12～117cm 深さ：11cm

〔23号溝〕 長さ：8.3m以上 上幅：36～147cm 基底幅：38～133cm 深さ：20cm

構造 上述のように22・23号溝はT字形に接する。

22号溝は蛇行する。23号溝はやや直線的であるが、22号溝と接する位置で折れを持つ。このように22号溝の存在が23号溝の形態を規制することから、2条の溝は一体構造で造られていたものと思われる。

22・23号溝は箱掘状の形態を呈するが、前者の東、後者の北側が幅狭になるなど規格は一定しない。

24号溝（江戸時代後期以降、第493図）

概要 本溝はE区西部、23号溝の近接する浅い溝遺構である。

本溝からは羽釜片等の出土が見られたが、何れも本溝に直接関連するものではなかった。

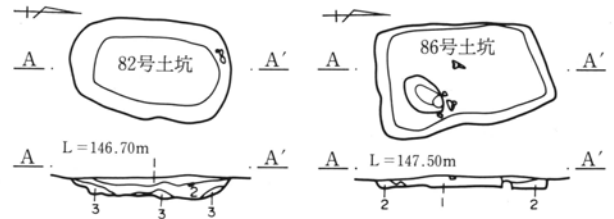
本溝の底面にはAs-A層が見られるが、この部分は川砂的であり、また24号溝の上面には降下面も見られることから、本溝は道遺構であった可能性が考慮

される。

規模 長さ：4.9m以上 上幅：74～104cm 基底幅：62～90cm 深さ：9cm

構造 本溝は北東—南西方向に走行を有する。

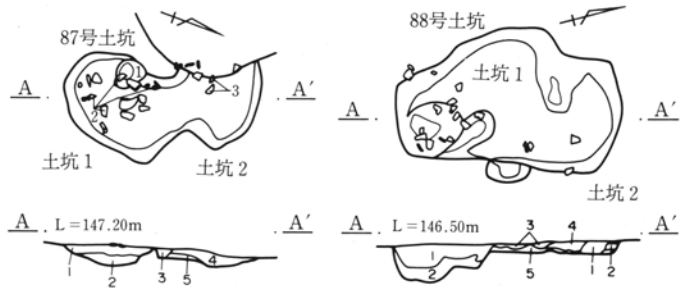
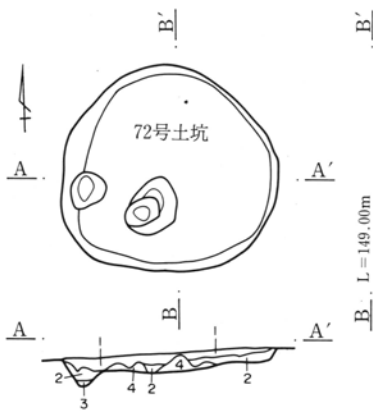
確認できた範囲が少かったため遺構の全体像はつまびらかでないが、掘り込みは浅く、プランにもやや不整形な印象を受ける。



82号土坑覆土
 1：暗褐色土主体。炭化物等極く僅か含む。 2：暗褐色土：炭化物僅か含む。 3：暗褐色土：ローム僅か、炭化物極く僅かに含む。

86号土坑覆土
 1：暗灰黄褐色土主体。 2：暗黄褐色土：ローム主体。

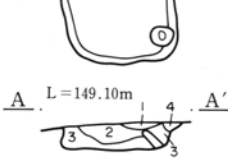
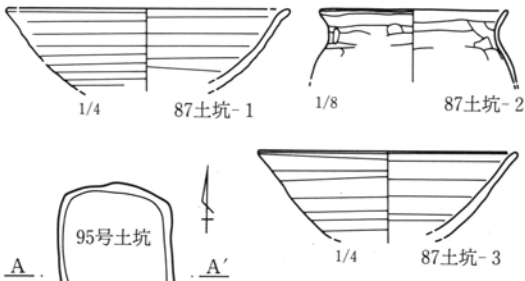
72号土坑覆土
 1：暗褐色土主体。 2：暗灰褐色土主体。 3：褐色土主体。 4：暗黄褐色土：ローム主体。



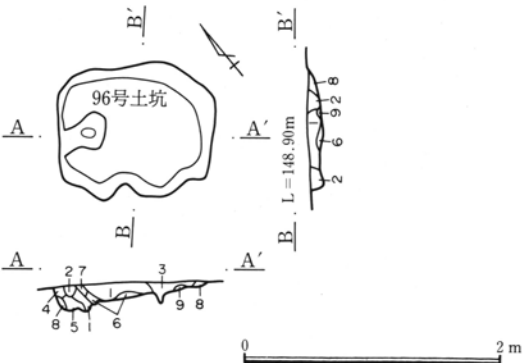
87号土坑覆土
 1：褐色土主体。 2：暗黄褐色土：暗黄褐色土と赤褐色微粒子の混土主体。 4：褐色土：暗黄褐色土と褐色土の混土。 5：暗黄褐色土主体。
攪乱層 3：暗褐色土：ローム僅かに含む。

88号土坑覆土
 1・3：暗赤褐色土主体。焼土やや多し。 2：褐色土主体。 4：赤褐色土主体。焼土やや多く含む。 5：黄褐色土：As-YP含むローム。

95号土坑覆土
 1：茶褐色土／2：暗茶褐色土：ローム漸移層（以下「漸移層」）土主体。 3：暗褐色土：上層中心の漸移層土主体。 4：明褐色土：ロームに近い漸移層下層土。



96号土坑覆土
 1：暗茶褐色土：漸移層上層土に炭化物等やや多く混入。 2・3：茶褐色土：漸移層土に炭化物等混入。 4：明茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。 5：茶褐色土／7：明褐色土：1層土にローム多く混入。 6：黄褐色土主体。 8：明褐色土：漸移層下層土主体。 9：明黄褐色ローム。



72号土坑（江戸時代中期以前、第495図）

概要 本土坑はE区東部に所在する。

出土遺物はなく、覆土にAs-Aを含まないので江戸時代中期以前の所産として把握されるに過ぎない。

尚、本土坑の掘削意図等は特定されなかった。

規模 長径：172cm 短径：164cm 深さ：14cm

構造 本土坑は三角に近い円形状のプランを呈す。

掘削形態は桶状で、底面は平底を呈している。

第495図 72・82・86～88・95・96号土坑及び出土遺物

82号土坑（平安時代以降、第495図、図版178）

概要 本土坑はE区中南部に位置する。

本土坑からは羽釜片などが出土した。また、覆土にAs-Aを含まないので、本土坑は10世紀以降、江戸時代中期以前の所産と判断される。

本土坑の掘削目的等は不明だが、炭化物を含む等

の覆土の状況から、何らかの燃焼に関連した遺構で一気に埋められたものと考えられる。

規模 長径：128cm 短径：77cm 深さ：10cm

構造 本土坑は隅丸の長方形のプランを呈する。

掘り込みは箱状で、底面は平底を呈している。

86号土坑（古墳時代後期以降、第495図）

概要 本土坑はE区中部南端付近に所在する。

僅かに土師器甕片3点が出土し、一方覆土にAs-Aを含まないことから古墳時代後期以降で江戸時代中期以前の所産として把握できるに過ぎない。

遺存状況は悪く、掘削意図等は特定されなかった。

規模 長径：140cm 短径：89cm 深さ：9cm

構造 本土坑は台形のプランを呈する。

掘り方は箱状で、底面は平底である。

87号土坑（平安時代か、第495図、図版200・201）

概要 本土坑はE区中部の南端近くに在る、南側の土坑1と北側の土坑2の2基の土坑重複したもので、前者が後者を切っている。

9世紀後半期の須恵器坏（1）や土師器甕（2）を土坑1、須恵器坏（3）を土坑2から出土するので本土坑は概ね9世紀後半前後の所産と推定される。

土坑1・2の掘削意図は明らかにできなかった。

規模 全長：155cm 土坑1 長径：96cm 短径：71cm 深さ：6cm 土坑2 長径：73cm以上 短径：71cm以上 深さ：16cm

構造 プランは土坑1・2共に楕円形を呈する。

何れの土坑も丸底気味の遺構形態を示している。

88号土坑（平安時代か、第495図）

概要 本土坑はE区中部南端付近に在り、主体をなす土坑2と南側に掘り込まれる土坑1からなる。

出土遺物は土坑1に集中し、本土坑との直接の関連は特定できなかったが、これらから本土坑は概ね9～10世紀頃の所産ではないかと推定される。

尚、本土坑の掘削意図等は確認できなかった。

規模 土坑1 径：51×41cm 深さ：31cm 土坑2 長径：181cm 短径：110cm 深さ：10cm

構造 プランは土坑1・2共に隅丸方形を呈する。

土坑形態は土坑1は柱穴状、土坑2は箱形である。

95号土坑（江戸時代中期以前、第495図）

概要 本土坑はE区東部に位置する。

出土遺物はなく覆土にAs-Aを含まないため江戸時代中期以前の所産として把握されるに過ぎない。

尚、本土坑の用途等是不明である。

規模 長径：128cm 短径：93cm 深さ：16cm

構造 本土坑は隅丸方形プランで形態は箱状。

96号土坑（江戸時代中期以前、第495図）

概要 本土坑はE区東部、95号土坑に近接して小ピットの多い一画に位置している。

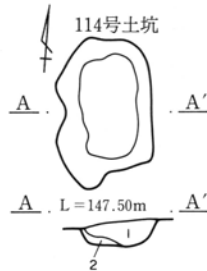
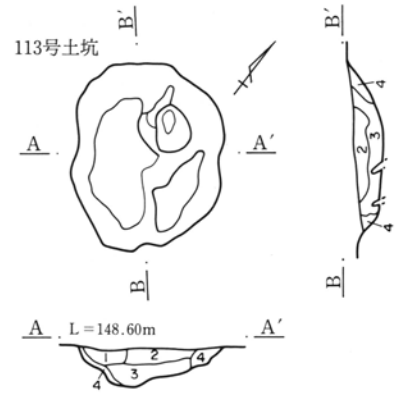
出土遺物はなく、覆土にAs-Aを見ない一方炭化物を多く含むので、本土坑は江戸時代中期以前の所産

と把握され、燃焼行為に関連する遺構と想定される。

規模 長径：128cm 短径：106cm 深さ：12cm

構造 隅丸方形プランで、概ね箱状の形態を呈するが、底面は北に向かって傾斜している。

第3章 発見された遺構と遺物



112号土坑覆土

1：黒色土主体。 2：黒褐色土：ローム少量含む。 3：黒褐色土主体。 4：褐色土主体。 5：黄褐色土：ローム多く含む。

113号土坑覆土

1：茶褐色土：ローム漸移層土主体。 2：暗茶褐色土：上層中心のローム漸移層土主体。 3：黒褐色土：2層土と黒色土の混土主体。 4：明茶褐色土：下層中心のローム漸移層土。

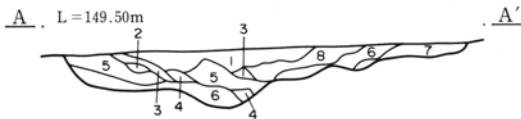
114号土坑覆土

1：黒褐色土：As-A含みローム入る。上層中心のローム漸移層土。 2：黄褐色ローム：ローム漸移層土入る。



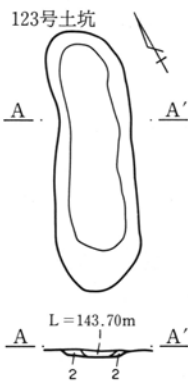
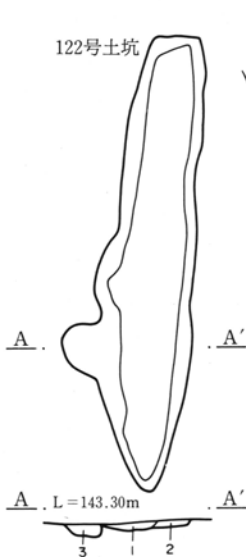
121号土坑覆土

1：暗黒褐色土：白色微粒子多量に含む。 2：褐色土：褐色土と暗黒褐色土の混土。 3・4・6：暗褐色土主体。 5：暗褐色土：褐色土多量に含む。 7：褐色土主体。 8：暗黒褐色土主体。



122号土坑覆土

1：暗褐色土主体。 2：暗黄褐色土主体。ローム多く含む。 3：黒褐色土主体。(攪乱か)

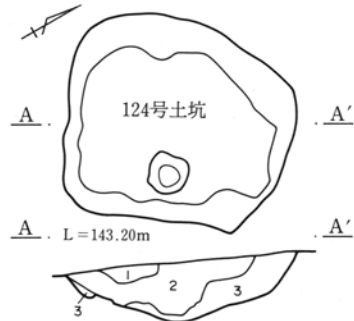


123号土坑覆土

1：暗黄褐色土主体。ローム含む。 2：黄褐色土：ローム主体。

124号土坑覆土

1：暗褐色土主体。ローム少量含む。 2：黒褐色土主体。ローム多く含む。 3：暗黄褐色土主体。ローム含む。



112号土坑 (古墳時代後期以降, 第496図, 図版178)

概要 本土坑はE区東南部に位置する。

覆土中からは土師器甕片1点が出土し、一方As-Aを見ないため、古墳時代後期以降、江戸時代中期以

第496図 112~114・121~124号土坑

期以前という広い範囲の所産として捉えられる。

尚、本土坑は形態及び土層から、柱材の径が15cm程と推定される柱を設置した柱穴と判断される。

113号土坑（江戸時代中期以前、第496図、図版178）

概要 本土坑はE区東部に位置する。

出土遺物は無く覆土にAs-Aを含まないため江戸時代中期以前の所産として把握されるに過ぎない。

尚、本土坑の用途等は特定できなかった。

114号土坑（江戸時代中期以前、第496図、図版178）

概要 本土坑はE区中部に位置する小土坑である。

出土遺物は無いが、覆土にAs-Aを含むため江戸時代後期以降の所産と判断される。

尚、本土坑の掘削意図等は特定できなかった。

121号土坑（古墳時代後期以降、第496図、図版179）

概要 本土坑はE区北東部に所在する。

僅か2点であるが出土した土師器から古墳時代後期以降、覆土にAs-Aを含まないことから江戸時代中期以前の所産と判断される。

本土坑は遺構形態等から風倒木と思われるが、こ

規模 径：36×34cm 深さ：33cm

構造 本土坑は円形プランを呈し、掘削形態は柱穴状である。

規模 長径：148cm 短径：125cm 深さ：49cm

構造 本土坑はやや不整形な楕円形プランを呈す。

遺存状態が悪く壁面の状況は不明だが、底面は丸底気味である。

規模 長径：121cm 短径：78cm 深さ：26cm

構造 本土坑は隅丸方形様のプランを呈する。

壁面はやや開き気味で、底面は平底であるがやや丸みを有する。

の場合の倒木方向は南方向であると想定される。

規模 長径：373cm 短径：261cm 深さ：62cm

構造 本土坑は隅丸の三角形様のプランを呈する。

底面は丸底気味で、壁面は北壁の傾斜が他の壁面の傾斜に比してきつくなっている。

122・123号土坑（江戸時代中期以前、第496図、図版179）

概要 122・123号土坑はE区西南部、21号溝と23号溝をつなぐような位置に所在する。

また、出土遺物は見られず、その時期については覆土にAs-Aを含まないことから江戸時代中期以前という漠然とした時期が与えられるだけである。

122・123号土坑は北東—南西方向の同一ライン上に近接して位置している。遺構形態と位置からこの2基の土坑は溝遺構の一部であろうと想定される。

122・123号土坑は22・23号溝に先行して吉井町多比良216番地に掘削されたものと思慮される。

規模 [122号土坑] 長径：363cm 短径：77cm

深さ：3cm [123号土坑] 長径：208cm 短径：64cm 深さ：5cm

構造 122・123号土坑は溝状のプランを呈する。

遺存状況が悪く壁面の形状はつまびらかでないが、底面は土地の傾斜に平行で平底状を呈する。

124号土坑（江戸時代中期以前、第496図、図版179）

概要 本土坑はE区西部に位置する。

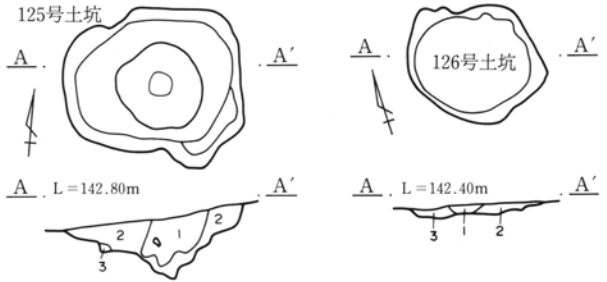
出土遺物はなく、時期については覆土にAs-Aを含まないことから江戸時代中期以前の所産と想定されただけである。

尚、本土坑の用途等は特定されなかった。

規模 長径：185cm 短径：163cm 深さ：51cm

構造 本土坑は隅丸方形プランを呈する。

底面は丸底であり、壁面は開き気味に立ち上がる。



125号土坑覆土

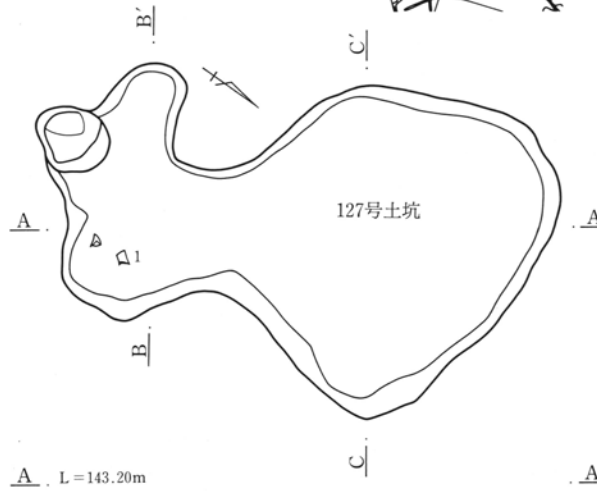
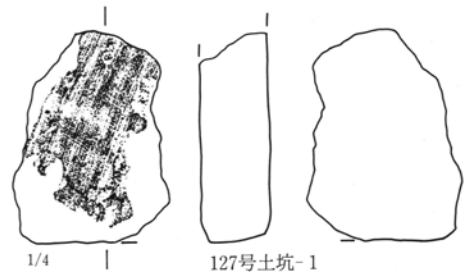
- 1：暗褐色土：ローム少量、白・黄色粒僅かを含む。
- 2：暗黄褐色土：ロームと少量の白・黄色粒・As-YP含む。
- 3：黄褐色土：ローム主体。白・黄色粒僅かに含む。

126号土坑覆土

- 1：暗褐色土：ローム粒と白・黄色粒少量含む。
- 2：暗黄褐色土：ロームと白黄色粒まばらに含む。
- 3：暗黄褐色土：ロームブロック含み、白・黄色粒僅かに含む。

127号土坑覆土

- 1：暗黄褐色土：As-Aまばらに少量含み、白・黄色粒含む。
- 2：黄褐色土：ローム含み、白・黄色粒多く含む。
- 3：黄褐色土：ローム多く含み、白・黄色粒少量含む。
- 4：黒褐色土：ロームブロック含む。



128号土坑覆土

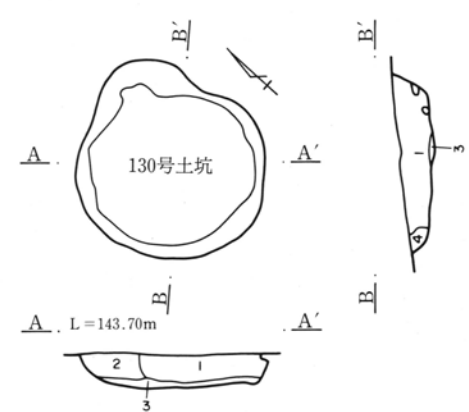
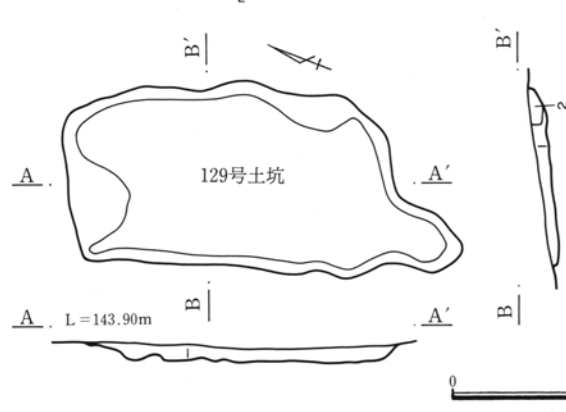
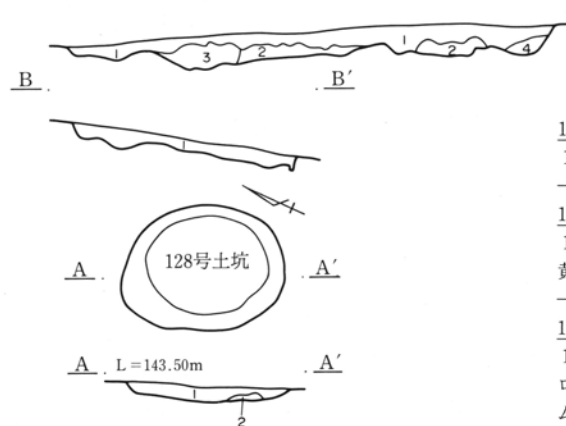
- 1：暗褐色土：ローム含む。
- 2：黒褐色土：ロームまばらに少量含む。

129号土坑覆土

- 1：暗褐色土：ローム粒・ブロックと白・黄色粒含む。
- 2：黒褐色土：白・黄色粒僅かに含む。

130号土坑覆土

- 1：暗褐色土：ローム僅かに、白・黄色粒と小礫少量含む。
- 2：暗褐色土：ローム少量含む。
- 3：黒褐色土：ロームブロック含む。
- 4：褐色土：ローム少量含み、2層土に似る。



第497図 125～130号土坑及び127号土坑出土遺物

125号土坑 (江戸時代後期以降, 第497図, 図版179)

概要 本土坑はE区西部に所在する。

出土遺物は無かったが、覆土にAs-Aを含むことから江戸時代後期以降の所産と判断される。

本土坑の用途は特定されていないが、形態等から

風倒木痕の可能性も考慮される。

規模 長径：141cm 短径：127cm 深さ：53cm

構造 やや崩れた隅丸方形プランを呈する。

底面は摺鉢状で、壁面は開き気味に立ち上がる。

126号土坑(江戸時代中期以前か, 第497図, 図版179)

概要 本土坑はE区西部に所在している。

出土遺物は無く、遺存状況も悪く、その時期についても覆土にAs-Aを含まないことから僅かに江戸時代中期以前と想定されるだけである。

尚、本土坑の掘削目的等は特定されなかった。

規模 長径：112cm 短径：95cm 深さ：10cm

構造 本土坑は楕円形のプランを呈する。

底面は平底に近く、壁面は開き気味である。

127号土坑 (江戸時代後期以降, 第497図, 図版179)

概要 本土坑はE区西部に所在する。

本土坑からは縄文土器・土師器・須恵器片など7片の土器片の出土を見たが、他に布目瓦である女瓦(1)の出土も見られた。

本土坑の遺存状況は悪かったが、本土坑は覆土にAs-Aを含むことから、江戸時代後期以降の所産と判

断される。

また、掘削目的等は確認されなかった。

規模 長径：417cm 短径：261cm 深さ：13cm

構造 本土坑は不整形な瓢箪形のプランを呈する。

底面は平底気味であるが凹凸が見られ、壁面は逆ハの字状に開く。

128号土坑(江戸時代中期以前か, 第497図, 図版179)

概要 本土坑はE区西部に所在する。

出土遺物はなく、時期も覆土にAs-Aを含まないことから江戸時代中期以前と想定されるだけである。

尚、本土坑付近は削平が進んで遺存状況は悪く、

その用途等も特定できなかった。

規模 長径：131cm 短径：99cm 深さ：11cm

構造 本土坑は楕円形のプランを呈する。

底面はやや丸みを帯び、壁面は開き気味である。

129号土坑 (古墳時代後期以降, 第497図, 図版179)

概要 本土坑はE区西部に所在する。

本土坑からは土師器・須恵器片各1点が出土し、遺構の遺存状況が悪いため断定はできないが覆土にAs-Aを含まないことから、古墳時代後期以降、江戸時代中期以前の所産である可能性が考えられる。

本土坑の用途は、その形態から「室」等、耕作に伴うものである可能性が考えられる。

規模 長径：322cm 短径：146cm 深さ：16cm

構造 本土坑は隅丸長方形プランを基調とする。

その掘削形態は箱状で、南西部に突出部を持つ。

130号土坑 (古墳時代後期以降, 第497図, 図版179)

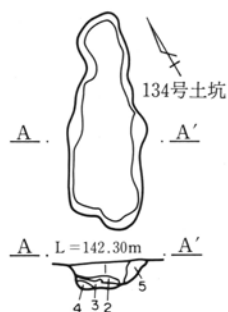
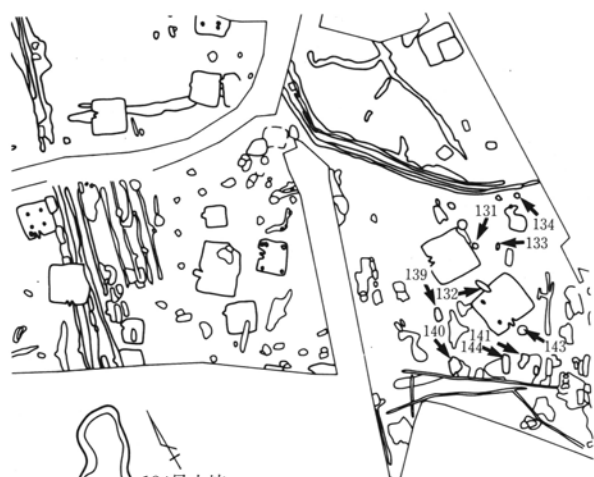
概要 本土坑はE区西部に所在している。

本土坑からは土師器片2点が出土し、一方、覆土中にAs-Aを含まないことから本土坑は古墳時代後期以降、江戸時代中期以前の所産と想定される。

尚、本土坑の用途等は特定されなかった。

規模 長径：151cm 短径：150cm 深さ：32cm

構造 本土坑は北東に突出部を持つ円形プランを呈し、掘削形態は桶状を呈している。

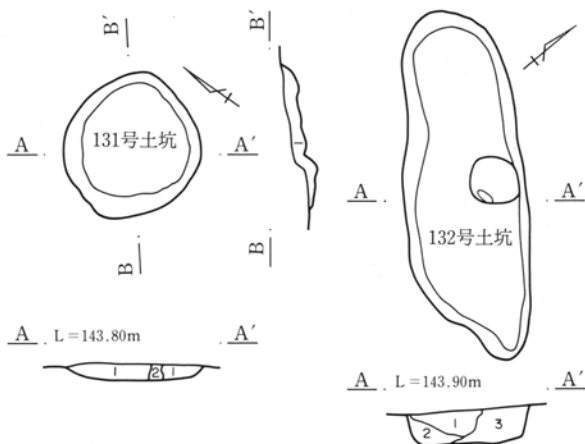
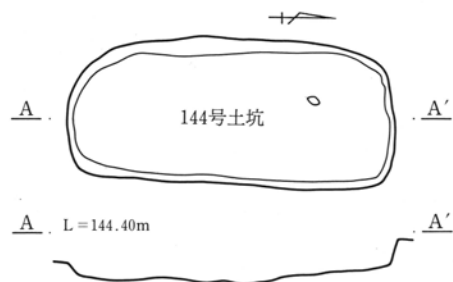
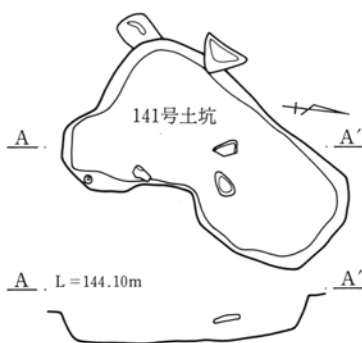
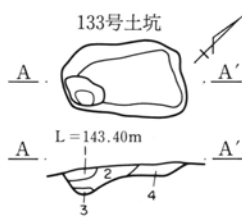
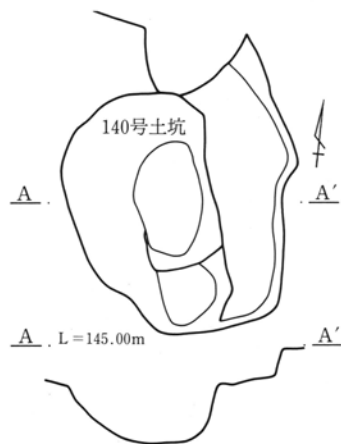


133号土坑覆土

1：暗褐色土。 2：黒褐色土：ローム等少量含む。 3：黄褐色土：ローム主体。 4：黄褐色土主体。ロームかなり多く含む。

134号土坑覆土

1：暗褐色土。 2：暗黄褐色土：As-A等少量含む。 3：暗褐色土：ローム等少量含む。 4：暗黄褐色土：ローム主体。 5：暗黄褐色土主体。

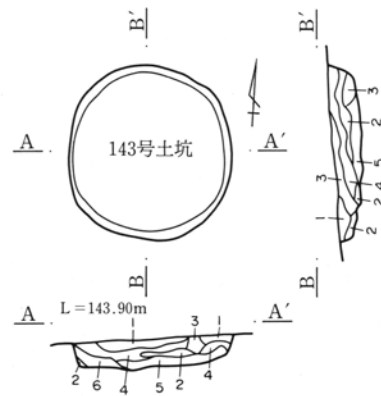


131号土坑覆土

1：暗褐色土：ローム等少量含む。 2：暗褐色土主体。

132号土坑覆土

1：明褐色土：ローム等含む。 2：暗黄褐色土：ローム等少量含む。 3：暗褐色土：ローム僅か、白・黄色粒多く含む。



143号土坑覆土

1：黒褐色土：ロームと暗黒褐色土の混土。 2：暗黒褐色土：ローム少量混入。 3：暗黒褐色土：ロームに暗黒褐色土混入。 4：くすんだ暗褐色土：黒色土微量混入。 5：暗褐色土：暗褐色土と黒色土の混土。 6：暗褐色土：褐色土と暗褐色土の混土。

131号土坑 (江戸時代中期以前, 第498図, 図版180)

概要 本土坑はE区西北部に所在する。

出土遺物は無く、その時期も遺存状況が悪いため断定はできないが、覆土にAs-Aを伴わないことで江



第498図 131～134・139～141・143・144号土坑



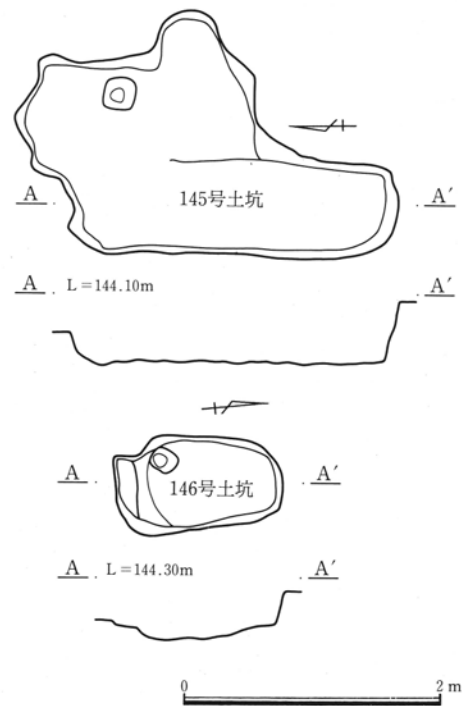
江戸時代中期以前の所産と想定されるだけである。

尚、土坑の用途等を特定することはできなかった。

規模 長径：108cm 短径：107cm 深さ：21cm

構造 円形に近い隅丸方形プランを呈する。

壁面は不明瞭だが、底面はやや丸底状を呈する。



第499図 145・146号土坑

132号土坑 (古墳時代後期以降, 第498図, 図版180)

概要 本土坑はE区西北部に等高線に沿って在る。

中期の縄文土器2点を出土しているが、H-170号住居を切り、且つ覆土にAs-Aを含まないので古墳時代後期から江戸時代中期までの所産と判断される。

133号土坑 (江戸時代中期以前, 第498図, 図版180)

概要 本土坑はE区西部に在る小型の土坑である。

出土遺物は無く、覆土にAs-Aを含まないため僅かに江戸時代中期前の所産と認識されるだけである。

尚、本土坑の掘削意図等は確認されなかった。

134号土坑 (江戸時代中期以前, 第498図, 図版180)

概要 本土坑はE区西端部に位置する。

出土遺物は無かったが、覆土にAs-Aを含むので近世後期以降の所産として把握される。

本土坑の用途は不明だが、遺構形態からは「室」

139号土坑 (平安時代以降, 第498図, 図版180)

概要 本土坑はE区西北部に在り、等高線に沿って位置している。

本土坑では覆土の記録化に失敗しているが、縄文

用途は形態的に芋穴等の可能性を有する。

規模 長径：280cm 短径：99cm 深さ：29cm

構造 本土坑はインディカ米形のプランを呈する。

箱形の掘削形態だが底面はやや丸味を帯びる。

規模 長径：99cm 短径：60cm 深さ：11cm

構造 本土坑は隅丸の長方形プランを呈する。

概ね箱形の形態をとるが、南隅部は径30×23cm、深さ28cmのピット状に掘り窪められている。

等の耕作に伴うものであろうと推定される。

規模 長径：171cm 短径：62cm 深さ：18cm

構造 本土坑は長方形に近い不定形プランを呈し、掘削形態は概ね箱状を呈している。

土器片1点と、平安時代の須恵器坏片1点を出土しているので少なくとも平安時代以降の所産として把握することができる。

第3章 発見された遺構と遺物

本土坑の掘削用途は不明だが、「室」等の農耕に伴うものである可能性が考慮される。

規模 長径：172cm 短径：62cm 深さ：19cm

140号土坑（時期不明、第498図、図版180）

概要 本土坑はE区西北部に位置する。

出土遺物も無く、覆土の記録化にも失敗したので時期は特定できなかった。

用途も特定できなかったが、形態的に風倒木の可能性を有し、この場合の倒木方向は西側と思われる。

141・144・145・146・140号土坑（江戸時代後期頃、第498～499図、図版181）

概要 141・144・145・146号土坑及び140号土坑東半部はE区西北部に位置する、東西に連なる土坑群である。この土坑群はF区の148～152・159号土坑に連なっており、一括の土坑群を形成している。

141号土坑からは若干の遺物が出土したが、時期についてはF区の148号土坑等の項（653頁）に述べるように、概ねAs-Aが降下前後の所産と思われる。

詳細はやはり148号土坑等の項に述べるが、この土坑群は1面の畠に掘削された耕作に伴うものと思われる。

規模〔140号土坑東半部〕 長径：220cm以上 短径：71cm以上 深さ：17cm

143号土坑（時期不明、第498図、図版181）

概要 本土坑はE区西北部に位置する。

出土遺物も無く、その時期については覆土にAs-Aを含まないことから江戸時代中期以前の可能性が述べられるだけである。

3号集石遺構（近代以降か、第500図、図版181・203）

概要 本遺構はE区中部に位置する。

こも編み石(1)等若干の遺物を伴い覆土にAs-Aも含まないが、本遺構18号溝より新しいものであり、従って近世以降の所産と推定される。

また、遺構の調査は切り合い関係にあるH-152号住居と18号溝の調査を先行したため、遺構の全体状

構造 本土坑は長方形に近い、縦長で隅丸の台形状のプランを呈している。

掘削形態は概ね箱堀状である。

尚、東半部については後述する。

規模 長径：195cm 短径：117cm 深さ：54cm

構造 やや不整形な楕円形状プランを呈す。

底面は丸底気味で、底面に続く壁面は他の壁面に対し東壁の傾斜がきつい。

〔141号土坑〕 長径：218cm 短径：101～135cm 深さ：32cm

〔144号土坑〕 長径：262cm 短径：116cm 深さ：19cm

〔145号土坑〕 東半部 長径：260cm 短径：78cm 深さ：55cm 西半部 長径：95cm 短径：98～134cm以上 深さ：14cm

〔146号土坑〕 長径：134cm 短径：77cm 深さ：22cm

構造 本項に述べている141号土坑等の土坑群を形成する各土坑は、若干の突出部を持つものもあるが、隅丸長方形を基本とするプランを呈している。

尚、本土坑の用途等は特定されなかった。

規模 径：137×129cm 深さ：32cm

構造 本土坑は円形のプランを呈する。

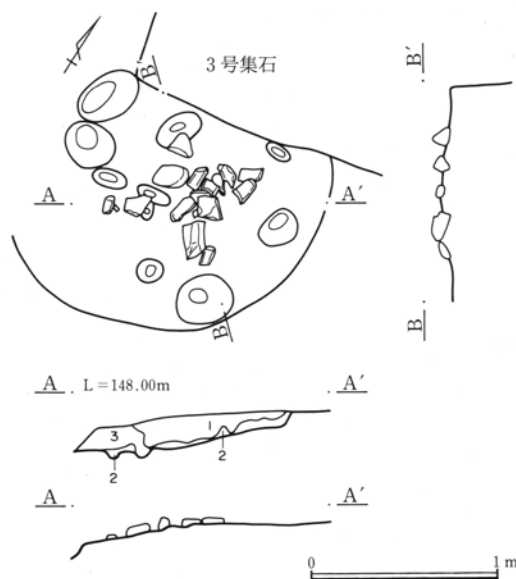
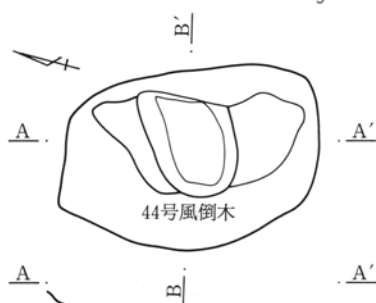
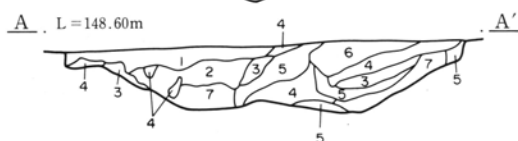
掘削形態は桶状で、底面は概ね平底である。

況は把握されなかった。

尚、本遺構については畠地の礫を投棄するために掘削された遺構であろうと解釈されている。

規模 径：344×248cm以上 深さ：12cm

構造 本遺構は凡そ円形を呈するものと思われるが、底面は凹凸が見られ掘削形態はやや不明瞭。



3号集石遺構覆土

1: 黒色粘質土: 淡黒褐色土ブロックを少量含む。 2: 暗茶褐色土: 堅く締まる暗茶褐色土と黒色土の混土。 3: 暗黒褐色土: 淡褐色土ブロック微量に含み、1層に比しやや粘性弱い。

42号風倒木覆土

1: 暗黒褐色土: As-YPを微量に混ぜる黒色土と暗黒褐色土の混土。 2: 黒色土: 淡褐色粒子 (As-YPか) を比較的多量に含む。良く締まる。 3: 褐色土: As-YP少量混入。 4: 褐色粘質土: 夾雑物殆ど含まず、粒子細かい。 5: 褐色土: 大粒のAs-YP微量に含む。粒子比較的緻密。 6: 黄褐色土: くすんだAs-YP微量に含む。 7: 黒色粘質土: As-YP微量に含む。粒子細かい。

第500図 3号集石・42号・44号・その他の風倒木

42号風倒木 (古墳時代後期以降か、第500図、図版181)

概要 本風倒木はE区東部に所在する。

土師器甕片1点を出土し、覆土にAs-Aを含まないため、江戸時代中期以前、恐らくは古墳時代後期までの間の倒木痕であることが知られる。

なお、倒木の方向については南西側であろうと判

断される。

規模 長径: 444cm 短径: 397cm 深さ: 61cm

構造 本風倒木は隅丸方形様のプランを呈する。

底面は丸底で、壁面は北東側が他の面に対しきつい傾斜を見せている。

44号風倒木（時期不詳、第500図、図版181）

概要 本風倒木はE区西部に位置する。

出土遺物もなく、覆土の記録化もできなかったの
で、倒木の時期は特定できなかった。

尚、倒木の方向については、遺構形態から西北西

であろうと想定される。

規模 長径：296cm 短径：192cm 深さ：60cm

構造 本風倒木は楕円形様のプランを呈する。

底面は丸底気味で、壁面の傾斜は東側がきつい。

H-158号住居内所在風倒木（平安時代以降、第471・500図、図版174）

概要 本風倒木はE区中北部のH-158号住居確認
面（掘り方面）に於いて発見されたものである。

本風倒木が、同住居の掘り方覆土を切るのが確認
されているため本風倒木はH-158号住居より新しく、一方As-Aを含まないことから、平安時代以降で
江戸時代中期自然の倒木痕であろうと判断される。

尚、倒木の方向については、その形態から南側で
はないかと思われる。

規模 長径：231cm 短径：216cm 深さ：115cm

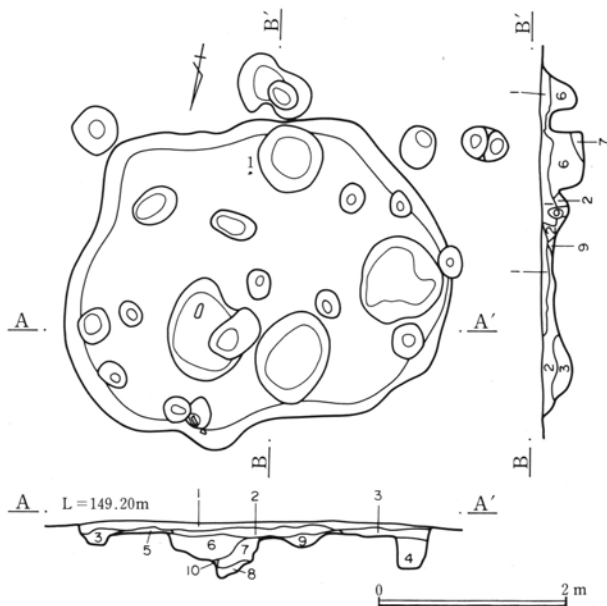
構造 本風倒木は隅丸の三角形プランを呈する。

底面は丸底気味で、壁面の傾斜は他の2面に対し
北北東側できつい。



1号竖穴状遺構

1：灰茶褐色土：乳白色粒僅かに含む。 2：灰茶褐色土：灰褐色
土・乳白色粒僅かに含む。 3：灰茶褐色土：明茶褐色土僅かに含
む。 4：灰茶褐色土：明茶褐色土・ローム・炭化物僅かに含む。



5：明茶褐色土：灰褐色土僅か混入。 6：明茶褐色土：明黄褐色
土僅か混入。 7：明茶褐色土：暗黄褐色土・黒褐色土僅かに含む。
8：暗黄褐色土：ロームと暗黄褐色土の混土。 9：明茶褐色土：
ローム僅かに含む。 10：黄褐色ローム。As-YP僅かに含む。

第501図 1号竖穴状遺構

1号竖穴状遺構（古墳時代後期以降か、第501図、図版182・201）

概要 本遺構はE区東部に所在する。

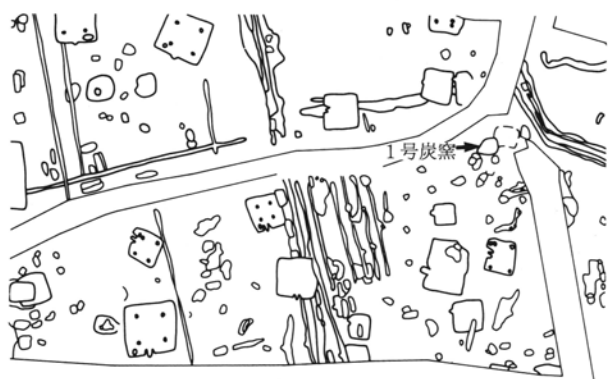
覆土からは土師器小型甕（1）等若干の遺物が出
土したが、時期特定には至らなかった。尚、覆土に
As-Aを含まないことから、古墳時代後期以降、江戸
時代中期以前の間の所産ではある。

尚、本遺構底面は住居掘り方面に似るが住居とは
認められず、掘削意図等は特定できなかった。

規模 長径：418cm 短径：341cm 深さ：9cm

構造 本遺構はやや不整形なプランを呈する。

底面はかなり凹凸があり、壁面は垂直気味である。

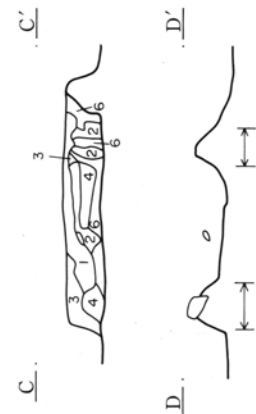
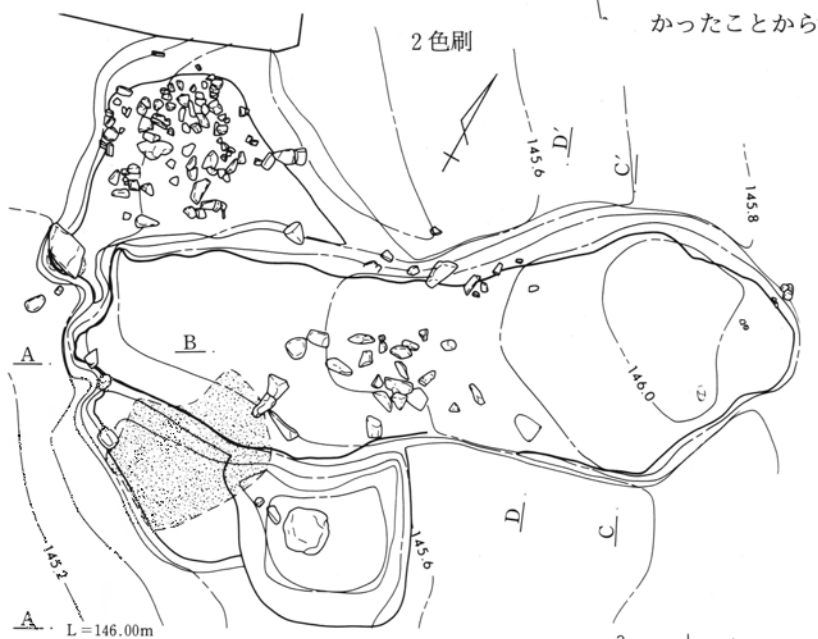


1号炭窯（江戸時代以降か、第502～503図、図版182）

概要 本炭窯はE区南西、農道が三叉路の交差点を成す部分の北東側の、周辺では一段高くなっている緩斜面部の位置に所在している。

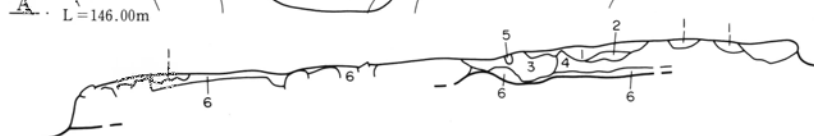
焼土の分布から確認・調査された遺構であるが、出土遺物は見られなかった。

本遺構の時期については、覆土にAs-Aが見られなかったことから江戸時代中期以前の所産と想定され



A' 1号炭窯覆土

- 1：暗黒褐色土：黒色土と暗黒褐色土の混土。焼土ブロック少量混入。
- 2：黒色土：焼土ブロック微量に混入。
- 3：暗赤褐色土：焼土粒・ブロック主体。炭化物微量に混入。
- 4：暗黒褐色土：暗黒褐色土・焼土・炭化物の混土。
- 5：淡褐色土ブロック。
- 6：暗黒褐色土：炭化物・焼土・微量混入。



第502図 1号炭窯（1）